

三ツ木遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
建設省

『三ッ木遺跡』正誤表 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
P 3	(註)	鉄工株式会式	鉄工株式会社
P 11	11行目	方形周溝墓	方形周溝墓
P 15	26行目	炭火物粒	炭化物粒
P 19	8行目	7号住→8号住	8号住→7号住
"	31行目	炭火物粒	炭化物粒
P 28	1行目	小形鉢	小形鉢
P174	3行目	11基のピット	10基のピット
P193	6行目	(10世紀前半)	(10世紀代)
P227	4行目	第38図-5 床面	貯蔵穴
	?	?	
P227	8行目	第38図-9 床面	貯蔵穴
"	10行目	第38図-11 "	"
"	11行目	第38図-12 "	"
"	16行目	第38図-17 "	"
"	18行目	第38図-19 "	"
P272	3行目	第272図-1	第274図-1
P350	1行目	5は口縁部破片で	6は口縁部破片で
"	1行目	…められる。6	…められる。5
P358	16行目	, S r k α	, S r K α
PL.3		23号住貯蔵穴	23号住ピット内

資料
 群馬県埋蔵文化財
 調査事業団 保管
 NO. 60-1660
 昭和61年 1月17日

01-330
 8-1
 (4)

み っ ぎ 三 ツ 木 遺 跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

序

群馬県と埼玉県を結ぶ国道17号線のバイパスとして計画された上武国道もすでにその一部は工事も完了し、地域の幹線道路としての役割を果たしつつあります。

これら工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査も、昭和48年以来継続して実施しております。ここに報告します三ッ木遺跡もその一つです。調査の結果、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡およそ200軒をはじめ、掘立柱をもつ建物跡等が発見されました。遺跡は、さらに河川敷周辺へひろがる様相をみせており、この地域における古墳時代から平安時代にかけての集落の変遷史を知る上で貴重な資料といえましょう。

酷寒・酷暑の日もいとわず、連日すすめられた調査の結果得られた、これらの貴重な資料を収め、後世の人々にも残す記録として、ここに本報告書が刊行できましたのも、建設省高崎工事事務所の関係者の方々をはじめとする、多くの方々の御指導と御協力の賜物であります。ここに厚く感謝の意を表します。

願わくば、本報告書が一人でも多くの方々に広くご覧いただき、有効に活用されますことを念じ序といたします。

昭和60年2月25日

群馬県教育委員会

教育長 横山 巖

例 言

- 1 本書は一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う事前調査として、昭和51年度に実施した、群馬県佐波郡境町所在の三ッ木遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の所在地は以下の通りである。
群馬県佐波郡境町大字三ッ木字自光坊
字堂前
- 3 調査の実施は建設省の委託を受けて群馬県教育委員会文化財保護課が行ない、整理作業は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行なった。
- 4 調査及び整理作業の実施期間は以下の通りである。
調査期間 昭和51年4月5日～昭和51年12月25日
整理期間 昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
- 5 遺跡命名は佐波郡境町大字三ッ木地内において小字界を越えた長大な範囲を対象とし、遺跡範囲も広範囲に亘ると判断されたため大字名を採用して「三ッ木」遺跡とした。
- 6 調査及び整理の実施にあたっては下記の職員が関係した。

発掘調査

事務担当

磯貝福七、白石保三郎、森田秀策、阿久津宗二、飯塚喜代子、女屋等志

（群馬県教育委員会文化財保護課）

調査担当

井上唯雄、須田 茂（群馬県教育委員会文化財保護課）

調査員

内田憲治

整理作業

事務担当

小林起久治、白石保三郎、梅沢重昭、松本浩一、大沢秋良、定方隆史、秋池 武、国定 均
笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏

野島のぶ江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子（事務補助）

整理担当

飯田陽一、大木紳一郎

浅井良子*、平野照美、細井敏子、山田キミ子、押江さゆり、関口貴子、今井智江美、島崎敏子、石田幸子、坂庭美代子、狩野道子、小湊美和子、関口加津枝、田村千種（整理作業補助。*は整理担当補佐）

- 7 遺構の写真撮影は井上唯雄、須田 茂、遺物写真撮影は佐藤元彦が担当した。
- 8 本書の編集は主に大木紳一郎が行ない、執筆にあたっては下記の者が行なった。

第 I、II、III、VI、VII章	井上唯雄
第IV、V章—1・2・4・5・6・7・8・10 (弥生土器)	大木紳一郎
第V章—3	須田 茂
第V章—9	石塚久則
第V章—10 (縄文土器)	藤巻幸男
第V章—10 (石器)	岩崎泰一
住居跡出土土器観察表	浅井良子 (大木が一部加筆、修正を行なった。)

なお用語の統一等の点で大木が一部加筆、修正を行なっており、文責は大木にある。

- 9 須恵器の胎土分析は群馬県工業試験場 花岡絃一氏に依頼した。
- 10 遺物の保存処理は関 邦一、宮沢健二が行なった。
- 11 本書の作成にあたり下記の方々の御指導、御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略)
岩上照朗、藤田典夫 (以上財団法人栃木県文化振興事業団)、坂爪久純 (境町教育委員会)、大江正行
下城 正、津金沢吉茂、関 晴彦、女屋和志雄、神谷佳明、谷藤保彦、関根慎二
なお本事業団職員である石塚久則、藤巻幸男、岩崎泰一の各氏には多忙の折、執筆の労をとって頂いた
事はまことに有難く、ここに感謝の意を表する次第である。
- 12 出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

1 遺構番号について

本遺跡は同時に実施した早川河川改修工事に伴う発掘調査（以下早川調査と略す。）で検出された遺跡と同一であると判断されたため遺構番号は両者を統合して一連の番号を付けた。早川調査の遺構については本文中に（早川河川改修地域調査分）と明記してある。

遺構番号は調査時登録のものを遵守する事を原則としたが、その後の検討により、又混乱を避けるために番号の変更をしたものがある。これについては次頁に表として掲げた。なお変更の結果、欠番となったものについては本文中に（欠番）と明記してある。

2 遺構名の略称について

本文中及び図、写真図版における遺構名の略称は以下の通りである。

住—竪穴住居跡 掘立—掘立柱建築遺構 井戸—井戸跡 壙—土壙 P—ピット

なお攪乱部分については横位の万線スクリーントーン、焼土は網スクリーントーンによって図示した。

3 遺構及び遺物図の縮尺率について

遺構—竪穴住居跡、土壙、井戸跡1/60 掘立柱建築遺構1/80 方形周溝墓1/120 溝、柵列不定、遺物—小形土器（杯、椀、皿等）、縄文土器、弥生土器、石器1/3 大形土器（甕等）、埴輪1/4 鈔帶具、紡錘車、鉄製品1/2 石製模造品1/1 土錘1/3

なお遺物写真図版の縮尺率は一定していないが、極力図と一致するように努めた。

4 遺構、遺物の計測部位については下記のように定めた。

遺構 規模———主軸方向の最大値×主軸直交方向の最大値。

主軸方向———竪穴住居跡はカマド設置辺の直行軸、掘立柱建築遺構は桁方向。

深さ———遺構検出面と床及び底面との比高差の最大値～最小値。

柱間距離———柱穴底面の中心間距離。

カマド規模———長さは煙道端からそで部端の距離、幅はそで部外郭線間距離最大値。

カマド軸方向———燃焼部幅の中心と煙道幅の中心を結ぶ線。

遺物 口径———口唇部外面における最大径。

器高———口唇部上面から底面までの最大値。

底径———底部外縁における最大値。

5 遺物図の中で釉のかかっているものについては点描又は網スクリーントーンで、又石器、砥石の使用痕の範囲は———で示してある。

6 遺構図の方位記号は磁北を指す。

7 周辺の遺跡（第2図）は国土地理院発行「高崎」（昭和58年1月）「深谷」（昭和52年12月）を使用した。

9 遺物重量の計測には『電磁式はかり』（製造 研精工業株式会社）を使用した。

10 遺物観察表中の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修（勸）日本色彩研究所色票監修『標準土色帖』（昭和51年9月）を参考にした。

11 遺物観察表、挿図、写真図版のNoは一致する。

遺構番号照合表

報告書登載番号	調査時登録番号	遺構番号変更の理由
(欠番)	2号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	5号住居跡	〃
(欠番)	9号住居跡	〃
11号土壙	12号住居跡	住居跡の属性が認められない。
(欠番)	16号住居跡	18号住居跡と同一。
(欠番)	40号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	44号住居跡	〃
43号土壙	60号住居跡	住居跡の属性が認められない。
(欠番)	75号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	91号住居跡	59号住居跡と同一。
(欠番)	121号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	134号住居跡	〃
(欠番)	157号住居跡	〃
74号土壙	161号住居跡	住居跡の属性が認められない。
172号住居跡	173号住居跡	172号住居跡と同一。
(欠番)	180号住居跡	179号住居跡と同一。
71号土壙	192号住居跡	住居跡の属性が認められない。
(欠番)	197号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	202号住居跡	攪乱壙と判断。
(欠番)	203号住居跡	〃
(欠番)	218号住居跡	217号住居跡と同一。
(欠番)	227号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	245号住居跡	249号住居跡と同一。
(欠番)	246号住居跡	調査段階で該当遺構なし。
(欠番)	2号掘立柱遺構	柱筋が通らないため。
11A号掘立柱遺構	11号掘立柱遺構	
11B号掘立柱遺構	12号掘立柱遺構	11A号掘立柱遺構の拡張あるいは束柱と考えられる。
3号井戸	6号井戸	一連の通し番号に変えたため。
4号井戸		新登録
5号井戸		新登録
6号井戸	7号井戸	一連の通し番号に変えたため。
7号井戸	8号井戸	〃

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第 I 章	発掘調査に至る経過と調査の概要 …………… 1
第 II 章	遺跡の立地と地理的環境 …………… 3
第 III 章	周辺の歴史的環境 …………… 5
第 IV 章	遺跡の概要 …………… 11
第 V 章	検出された遺構と遺物 …………… 12
	1 竪穴住居跡 …………… 12
	2 住居跡出土遺物 …………… 220
	3 掘立柱建築遺構 …………… 287
	4 土 壙 …………… 295
	5 井戸跡 …………… 320
	6 溝 …………… 324
	7 柵 列 …………… 334
	8 方形周溝墓 …………… 336
	9 遺構出土の埴輪 …………… 341
	10 遺構外の出土遺物 …………… 349
第 VI 章	調査の成果と問題点 …………… 355
第 VII 章	結 …………… 360
写真図版	

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺地形図	4	第60図	38号住居跡	54
第2図	周辺の遺跡	8	第61図	38号住居跡出土遺物	54
第3図	基本土層	11	第62図	39号住居跡及び出土遺物	55
第4図	1号住居跡	12	第63図	41号住居跡	56
第5図	1号住居跡出土遺物	13	第64図	42A・42B号住居跡	56
第6図	3号住居跡	14	第65図	43号住居跡	57
第7図	4号住居跡	14	第66図	45・46号住居跡	57
第8図	6号住居跡	15	第67図	45号住居跡出土遺物	58
第9図	6号住居跡出土遺物	15	第68図	47号住居跡及び出土遺物	58
第10図	7号住居跡	16	第69図	48号住居跡	59
第11図	7号住居跡出土遺物	16	第70図	49号住居跡及び遺物分布図	60
第12図	8号住居跡	17	第71図	49号住居跡出土遺物(1)	61
第13図	8号住居跡出土遺物及び分布図	18	第72図	49号住居跡出土遺物(2)	62
第14図	10号住居跡	19	第73図	50号住居跡及び出土遺物	63
第15図	11号住居跡及び出土遺物	20	第74図	51号住居跡	64
第16図	13号住居跡	21	第75図	51号住居跡出土遺物	65
第17図	13号住居跡遺物分布図	21	第76図	52号住居跡	66
第18図	13号住居跡出土遺物(1)	22	第77図	52号住居跡出土遺物	66
第19図	13号住居跡出土遺物(2)	23	第78図	53号住居跡	67
第20図	14・15号住居跡	24	第79図	53号住居跡出土遺物	67
第21図	17・18号住居跡	25	第80図	54号住居跡及び遺物分布図	68
第22図	17号住居跡出土遺物	25	第81図	54号住居跡出土遺物	69
第23図	19号住居跡及び出土遺物	26	第82図	55・56・59号住居跡	70
第24図	20号住居跡	27	第83図	55号住居跡出土遺物	71
第25図	20号住居跡出土遺物	27	第84図	56号住居跡出土遺物	72
第26図	21号住居跡及び出土遺物	28	第85図	57号住居跡	73
第27図	22号住居跡	29	第86図	57号住居跡出土遺物	73
第28図	23号住居跡	29	第87図	58号住居跡	74
第29図	23号住居跡出土遺物	30	第88図	58号住居跡出土遺物(1)	74
第30図	24号住居跡	31	第89図	58号住居跡出土遺物(2)	75
第31図	24号住居跡出土遺物	32	第90図	59号住居跡出土遺物(1)	75
第32図	25号住居跡及び出土遺物	33	第91図	59号住居跡出土遺物(2)	76
第33図	26号住居跡	34	第92図	59号住居跡出土遺物(3)	77
第34図	26号住居跡出土遺物	35	第93図	61号住居跡及び出土遺物	78
第35図	27号住居跡	35	第94図	62号住居跡	78
第36図	28号住居跡	36	第95図	63号住居跡及び出土遺物	79
第37図	28号住居跡遺物分布図	37	第96図	64号住居跡	80
第38図	28号住居跡出土遺物(1)	38	第97図	65号住居跡	80
第39図	28号住居跡出土遺物(2)	39	第98図	65号住居跡出土遺物	81
第40図	28号住居跡出土遺物(3)	40	第99図	66号住居跡及び出土遺物	81
第41図	29号住居跡	41	第100図	67号住居跡及び出土遺物	82
第42図	29号住居跡出土遺物	42	第101図	68号住居跡及び出土遺物	83
第43図	30号住居跡	42	第102図	68号住居跡出土遺物(1)	84
第44図	30号住居跡出土遺物	43	第103図	68号住居跡出土遺物(2)	85
第45図	31号住居跡	43	第104図	69号住居跡	85
第46図	32A号住居跡	43	第105図	70・71・72号住居跡	86
第47図	31号住居跡出土遺物	44	第106図	73号住居跡及び出土遺物	87
第48図	32A号住居跡出土遺物	45	第107図	74号住居跡	88
第49図	32B号住居跡	46	第108図	76号住居跡	88
第50図	32C号住居跡	46	第109図	76号住居跡出土遺物	88
第51図	33号住居跡	47	第110図	77号住居跡	89
第52図	34号住居跡及び出土遺物	48	第111図	77号住居跡出土遺物	89
第53図	35号住居跡	49	第112図	78号住居跡	90
第54図	35号住居跡出土遺物	50	第113図	78号住居跡出土遺物	91
第55図	36号住居跡	50	第114図	79・80号住居跡	92
第56図	36号住居跡出土遺物	51	第115図	79号住居跡出土遺物	92
第57図	37号住居跡	52	第116図	80号住居跡出土遺物	93
第58図	37号住居跡出土遺物(1)	52	第117図	81・82号住居跡	94
第59図	37号住居跡出土遺物(2)	53	第118図	82号住居跡出土遺物	94

第119区	83号住居跡	95	第182区	164号住居跡	135
第120区	83号住居跡出土遺物	95	第183区	164号住居跡出土遺物	136
第121区	84号住居跡	96	第184区	165号住居跡	136
第122区	84号住居跡出土遺物(1)	97	第185区	165号住居跡出土遺物	137
第123区	84号住居跡出土遺物(2)	98	第186区	166号住居跡	138
第124区	85号住居跡	98	第187区	166号住居跡出土遺物	138
第125区	85号住居跡出土遺物	99	第188区	167号住居跡	139
第126区	86号住居跡	99	第189区	167号住居跡出土遺物	140
第127区	86号住居跡出土遺物	100	第190区	168号住居跡及び出土遺物	141
第128区	87号住居跡及び出土遺物	101	第191区	169号住居跡及び出土遺物	142
第129区	88号住居跡	102	第192区	170号住居跡	143
第130区	88号住居跡出土遺物	102	第193区	171号住居跡	143
第131区	89号住居跡	103	第194区	171号住居跡出土遺物	144
第132区	89号住居跡出土遺物	103	第195区	172号住居跡	145
第133区	90号住居跡	104	第196区	174号住居跡	146
第134区	90号住居跡出土遺物	105	第197区	174号住居跡出土遺物	146
第135区	92号住居跡	105	第198区	175・176号住居跡	147
第136区	93号住居跡	106	第199区	175号住居跡出土遺物	148
第137区	94号住居跡	107	第200区	176号住居跡出土遺物	149
第138区	94号住居跡出土遺物	107	第201区	177・178号住居跡	150
第139区	103号住居跡	108	第202区	178号住居跡出土遺物	150
第140区	103号住居跡出土遺物	108	第203区	179・189号住居跡	151
第141区	104号住居跡	109	第204区	179号住居跡出土遺物	151
第142区	105号住居跡	109	第205区	181号住居跡及び出土遺物	152
第143区	105号住居跡出土遺物	110	第206区	182・183号住居跡及び182号住居跡出土遺物	153
第144区	108号住居跡	110	第207区	183号住居跡出土遺物	154
第145区	120号住居跡	111	第208区	184号住居跡	155
第146区	120号住居跡出土遺物	111	第209区	184号住居跡出土遺物	155
第147区	129号住居跡	112	第210区	185号住居跡	156
第148区	129号住居跡出土遺物	112	第211区	185号住居跡遺物分布図	156
第149区	130号住居跡	113	第212区	185号住居跡出土遺物(1)	157
第150区	130号住居跡出土遺物	113	第213区	185号住居跡出土遺物(2)	158
第151区	131・132号住居跡	114	第214区	185号住居跡出土遺物(3)	159
第152区	131号住居跡出土遺物	114	第215区	186号住居跡及び出土遺物	160
第153区	132号住居跡出土遺物	115	第216区	187号住居跡及び出土遺物	161
第154区	140号住居跡	116	第217区	188号住居跡	161
第155区	140号住居跡出土遺物	117	第218区	188号住居跡出土遺物	162
第156区	141号住居跡及び出土遺物	117	第219区	189号住居跡出土遺物	162
第157区	142号住居跡	118	第220区	190号住居跡	163
第158区	142号住居跡出土遺物	119	第221区	190号住居跡出土遺物	163
第159区	143・146号住居跡	119	第222区	191号住居跡	163
第160区	144号住居跡	121	第223区	193A号住居跡	164
第161区	144号住居跡出土遺物(1)	121	第224区	193A号住居跡出土遺物	165
第162区	144号住居跡出土遺物(2)	122	第225区	193B号住居跡	165
第163区	145号住居跡	122	第226区	194号住居跡及び出土遺物	166
第164区	145号住居跡出土遺物	123	第227区	195・196・205・206号住居跡	167
第165区	149号住居跡及び出土遺物	124	第228区	195・196号住居跡出土遺物	168
第166区	150号住居跡	125	第229区	198・199号住居跡及び198号住居跡出土遺物	169
第167区	150号住居跡出土遺物	125	第230区	199号住居跡出土遺物	170
第168区	151号住居跡	126	第231区	200号住居跡	171
第169区	152号住居跡	126	第232区	200号住居跡出土遺物(1)	171
第170区	153号住居跡	127	第233区	200号住居跡出土遺物(2)	172
第171区	154号住居跡	127	第234区	201号住居跡及び出土遺物	173
第172区	154号住居跡出土遺物	128	第235区	204号住居跡	173
第173区	155号住居跡及び出土遺物	128	第236区	204号住居跡出土遺物	174
第174区	156号住居跡	129	第237区	205号住居跡出土遺物	175
第175区	156号住居跡出土遺物	130	第238区	207号住居跡	175
第176区	158号住居跡	131	第239区	208号住居跡	176
第177区	159号住居跡	131	第240区	209号住居跡	176
第178区	160号住居跡及び出土遺物	132	第241区	209号住居跡出土遺物	176
第179区	162号住居跡及び出土遺物	133	第242区	210・211号住居跡	177
第180区	163号住居跡	134	第243区	210号住居跡出土遺物(1)	177
第181区	163号住居跡出土遺物	134	第244区	210号住居跡出土遺物(2)	178

第245図	211号住居跡出土遺物	179	第308図	住居跡出土土製円板	281
第246図	212号住居跡	180	第309図	住居跡出土砥石(1)	282
第247図	212号住居跡出土遺物(1)	181	第310図	住居跡出土砥石(2)	284
第248図	212号住居跡出土遺物(2)	182	第311図	住居跡出土鉄製品	285
第249図	213号住居跡及び出土遺物	183	第312図	住居跡出土土錘	286
第250図	214号住居跡及び出土遺物	184	第313図	1号掘立柱建築遺構	287
第251図	215号住居跡	185	第314図	3号掘立柱建築遺構	288
第252図	215号住居跡出土遺物(1)	185	第315図	6号掘立柱建築遺構	288
第253図	215号住居跡出土遺物(2)	186	第316図	7号掘立柱建築遺構	289
第254図	216号住居跡及び遺物分布図	187	第317図	8号掘立柱建築遺構	290
第255図	216号住居跡出土遺物	188	第318図	10号掘立柱建築遺構	291
第256図	217号住居跡	189	第319図	11A号・11B号掘立柱建築遺構	292
第257図	217号住居跡遺物分布図	190	第320図	13号掘立柱建築遺構	293
第258図	217号住居跡出土遺物(1)	190	第321図	14号掘立柱建築遺構	294
第259図	217号住居跡出土遺物(2)	191	第322図	縄文時代の土壌	295
第260図	219号住居跡	191	第323図	土壌出土遺物(縄文土器)	296
第261図	219号住居跡出土遺物	192	第324図	弥生時代の土壌	297
第262図	220号住居跡	192	第325図	土壌出土遺物(弥生土器)	297
第263図	220号住居跡出土遺物	193	第326図	古墳時代の土壌	299
第264図	221号住居跡	194	第327図	土壌出土遺物(古墳時代)	300
第265図	222号住居跡	194	第328図	平安時代の土壌(1)	301
第266図	223号住居跡	195	第329図	平安時代の土壌(2)	302
第267図	223号住居跡出土遺物	195	第330図	土壌出土遺物(平安時代)(1)	303
第268図	224号住居跡及び出土遺物	196	第331図	土壌出土遺物(平安時代)(2)	304
第269図	225号住居跡及び出土遺物	197	第332図	中世の土壌	305
第270図	226号住居跡及び出土遺物	198	第333図	土壌出土遺物(中世)	306
第271図	228・229・230・231号住居跡	199	第334図	土壌出土遺物(銭貨)	307
第272図	230号住居跡出土遺物	200	第335図	土壌出土遺物(銭貨)	309
第273図	231号住居跡出土遺物	201	第336図	土壌(1)	310
第274図	232号住居跡及び出土遺物	201	第337図	土壌(2)	311
第275図	233号住居跡	202	第338図	土壌(3)	312
第276図	233号住居跡出土遺物	203	第339図	土壌(4)	313
第277図	234号住居跡	204	第340図	土壌(5)	314
第278図	235号住居跡	204	第341図	井戸跡	321
第279図	235号住居跡出土遺物	205	第342図	井戸跡出土遺物	322
第280図	236号住居跡及び出土遺物	205	第343図	4号溝	325・326
第281図	237号住居跡	206	第344図	9号・10号・11号・12号溝	327・328
第282図	237号住居跡出土遺物(1)	206	第345図	1号・2号・3号・6号溝	329
第283図	237号住居跡出土遺物(2)	207	第346図	5号溝	331
第284図	238号住居跡	208	第347図	7号溝	332
第285図	239号住居跡及び出土遺物	208	第348図	3号溝出土遺物	333
第286図	240号住居跡	209	第349図	12号溝出土遺物	334
第287図	240号住居跡出土遺物	209	第350図	柵列	335
第288図	241・242号住居跡	210	第351図	1号方形周溝墓遺物分布図	336
第289図	241号住居跡出土遺物	210	第352図	1号方形周溝墓	337
第290図	242号住居跡出土遺物	211	第353図	1号方形周溝墓断面図	338
第291図	243号住居跡	212	第354図	1号方形周溝墓出土遺物(1)	338
第292図	243号住居跡出土遺物	212	第355図	1号方形周溝墓出土遺物(2)	339
第293図	244号住居跡	213	第356図	円筒埴輪(1)	342
第294図	247号住居跡及び出土遺物	214	第357図	円筒埴輪(2)	343
第295図	248号住居跡及び出土遺物	215	第358図	円筒埴輪(3)	344
第296図	249号住居跡	215	第359図	円筒埴輪(4)	345
第297図	249号住居跡出土遺物	216	第360図	形象埴輪	346
第298図	250・251・252号住居跡	216	第361図	遺構外出土の縄文土器	349
第299図	250号住居跡出土遺物	217	第362図	遺構外出土の弥生土器	350
第300図	252号住居跡出土遺物	217	第363図	遺構外出土の石器(1)	353
第301図	253号住居跡及び出土遺物	218	第364図	遺構外出土の石器(2)	354
第302図	254号住居跡及び出土遺物	219	第365図	胎土分析資料	357
第303図	255号住居跡	219	第366図	群馬県内の主要な窯跡資料	359
第304図	255号住居跡出土遺物	220	第367図	窯跡位置図	359
第305図	住居跡出土鈿帯具	279	第368図	遺跡位置図	巻末
第306図	住居跡出土玉類・滑石製模造品	279	第369図	遺構配置図	巻末
第307図	住居跡出土紡錘車	280			

写真図版目次

- PL.1 I～IV全景
- PL.2 1・3・4・6・7・8・10・11・13・14・17・18・19・20・21・22号住居跡
- PL.3 23・24・25・26・28・29・30・31・32A B・33・35・37・38・39・41号住居跡
- PL.4 42A B・43・45・47・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・61・62・74号住居跡、43号
土壙
- PL.5 64・65・67・68・70・71・72・73・76・77・78・79・80・81・82・83・84・85号住居跡
- PL.6 86・87・88・89・90・93・103・104・105・108・120・129・130号住居跡
- PL.7 131・132・140・141・142・143・144・146・149・150・151・152・153・154・155・156・158号住居
跡
- PL.8 159・160・162・164・165・166・167・168・169・170・171・172・174・175・176・177号住居跡
- PL.9 181・182・183・184・185・188・190・193A・193B・194・195・196・198・199・200・201・204・205
206・209号住居跡
- PL.10 211・212・213・214・215・216・217・219・220・221・222・223・224・225・226・228・229～231号
住居跡
- PL.11 232・233・234・235・236・237・238・239・240・241・242・243・247・248・249・250・251・252号
住居跡
- PL.12 253・255号住居跡、1・3・6・7・8・10・11A・11B・13・14号掘立柱建築遺構
- PL.13 方形周溝墓、2・3・4・5号溝、柵列
- PL.14 2・6・7号井戸、2・4・10・14・20・21・22・23・24・25・26・30・31号土壙
- PL.15 1・6・8・13・31・36・38・49・51・55・59・68・77号住居跡カマド
- PL.16 79・80・84・90・104・143・164・175・185・190・193・200・220・233・239号住居跡カマド
- PL.17 1・6・8号住居跡出土遺物
- PL.18 11・13・17号住居跡出土遺物
- PL.19 19・21・23・24・25号住居跡出土遺物
- PL.20 26・28号住居跡出土遺物
- PL.21 28・29・32号住居跡
- PL.22 31・35・36・37・38・39・45号住居跡出土遺物
- PL.23 47・49号住居跡出土遺物
- PL.24 51・52・53・54・55号住居跡出土遺物
- PL.25 55・56・58・59号住居跡出土遺物
- PL.26 59・65・73・76号住居跡出土遺物
- PL.27 68・78・79・83号住居跡出土遺物
- PL.28 84・86・87・88号住居跡出土遺物
- PL.29 89・90・105・120・129・130・131・132号住居跡出土遺物
- PL.30 142・144・145・155・156・162・163・164・165・166号住居跡出土遺物

- PL.31 169・171・174・175・176・178・181・182・183号住居跡出土遺物
- PL.32 185号住居跡出土遺物
- PL.33 187・188・196・198・199・200・210号住居跡出土遺物
- PL.34 204・209・211・212・214・215号住居跡出土遺物
- PL.35 216・217・219・202号住居跡出土遺物
- PL.36 223・225・226・230・232・233号住居跡出土遺物
- PL.37 235・237・239・241・242・243・247号住居跡出土遺物
- PL.38 253・255号住居跡出土遺物
- PL.39 住居跡出土銜帶具、石製模造品、紡錘車、土製円板、鉄製品
- PL.40 住居跡出土砥石
- PL.41 住居跡出土土錘
- PL.42 方形周溝墓出土遺物
- PL.43 土壙・溝出土遺物
- PL.44 土壙出土錢貨・紡錘車拡大写真
- PL.45 縄文・弥生土器
- PL.46 円筒埴輪
- PL.47 円筒埴輪
- PL.48 円筒埴輪
- PL.49 埴輪部分拡大 形象埴輪
- PL.50 石 器
- PL.51 刻書土器
- PL.52 墨書土器

第1章 発掘調査に至る経過と調査の概要

上武道路は、佐波郡境町の東北部、三ッ木、西今井地区では、蛇行しながらほぼ東南方向に流れる早川に沿って計画された。そして、上武道路の建設に先立ってまず早川部分の河川改修工事を優先させることになった。早川河川改修部分と接する上武道部分も同時に調査することが進捗上も有利であるとの判断から、昭和50年7月に西今井地区から開始された。そして、そこから下流に向けて調査を進め、昭和52年度の河川改修工事に支障を来たさないような調査工程が組まれた。

調査区域は、長さ370m、幅約85mで、その内約45mが河川改修部分である。当初、西今井地区から逐次南下する方式で調査を進めたものの、西今井地区では、遺跡が沖積土中にあり、その検出や精査に時間を要することが判明したため、急拠51年度からは、下流側の三ッ木部分から上流側に向けても開始し、進捗を図ることになった。従って、三ッ木遺跡の調査は早川河川改修との関連で急拠調査団が組織されて対応することになったものである。

三ッ木遺跡は、佐波郡境町大字三ッ木地区にあり、小字名は字堂前・自光坊である。共に「寺」に関連する地名であることから、それらの遺構検出も予測されたが、その兆候は認められなかった。

調査は昭和51年4月から開始されたが、その内上武道にかかる部分に関するものを摘出すると下のようである。

項 目	内 容
所 在	佐波郡境町大字三ッ木字自光坊・堂前399他
調 査 期 間	昭和51年4月5日～昭和51年12月25日
調査面積(上武道分)	10,600m ²
調 査 担 当 者	井上唯雄・須田 茂 (県文化財保護課)
調 査 協 力	内田憲治 境町教育委員会

調査は南部の下流から始められ、下流から100mごとにⅠ～Ⅳ区に4区分し、Ⅱ区以降で早川改修分と併行して調査が行われた。

この内、調査の段階をいくつかに分けると、次のようである。

段階区分	調 査 期 間	調 査 内 容
試 掘	昭 51.4.5～5.7	トレンチ設定による遺構分布の確認。
Ⅰ 区	昭 51.5.8～7.7	古墳時代の集落が中心。
Ⅱ 区	昭 51.6.16～8.20	古墳時代・奈良・平安時代集落・方形周溝墓。
Ⅲ 区	昭 51.8.10～12.13	奈良・平安時代集落中心、掘立柱建物群。
Ⅳ 区	昭 51.9.2～12.25	奈良・平安時代集落、掘立柱建物群。

調査の方法

1. 調査の区割りは、建設省の打設になる中心杭を基準にしている。20m 毎の中心杭をFラインとする4 mメッシュの開放トラバースを組んだ。その方向は、磁北から36°56西にふれたもので、I 区の台地南端部の杭を起点としている。
2. 調査の区域を100m毎に区切って、南からI区～IV区とした。従って、各区は25に細分されることになる。そして、幅のひろがりアルファベットで、長さを算用数字で呼称することにした。グリッドの呼称は南方基準点をもってF-5のように呼称することとした。
3. 遺構番号は発見順に付すが、遺構の重複が認められる場合は、現地の所見で新しい時期のものに若い番号を与えている。
4. 各遺構の実測は原則として1：20を基準とするが、他に状況に応じて1：10、1：40のものも含まれている。1：40は地層断面の一部等である。

三ツ木遺跡発掘調査進行表

調査区	調 査 工 程									
	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	
I 区										
II 区										
III 区										
IV 区										

第II章 遺跡の立地と地理的環境

三ッ木遺跡が所在する台地は、大きくみると関東平野に組み込まれる低地部との境に位置している。この台地は赤城山の南から東にかけて中小河川で分断された形をみせている。特に大間々町付近を扇頂とする大間々扇状地の扇端部には伊勢崎、澗名、木崎、太田などの台地を並列させている。

三ッ木遺跡はこの中の木崎台地の西側の小台地上にある。大間々扇状地は早川を境として、以西は桐原面以東を藪塚面と呼称している。三ッ木は藪塚面に属しており桐原面より形成時期は新しいとされる。その基盤は扇状地礫層で、その上に上部関東ローム層がのる。西に隣接する澗名台地は桐原面の南端部にあたり、中部ローム層以上をのせている。又東側の木崎台地は砂丘を基盤とし中部ローム層をのせる邑楽台地の西端に相当する。この周辺の台地には40m前後の等高線が東西に走っており、全体に北から南にかけて緩い傾斜面^(註1)を呈している。

これら扇端部の低台地上は古くから伏流水が湧出していたこともあって、多くの遺跡が存在している。遺跡の周辺の湧水は大間々扇状地端部と沖積低地の境目から湧き出すもので、それを起源として小さな谷地を形成していることも多い。

周辺の川筋をみると、南を流れる広瀬川とそれが注ぐ利根川の本流が東西方向に流れ、それに向っていくつかの河川が注いでいる。旧利根川が最も東流したとされる広瀬川は、伊勢崎台地の西を限り、そこから東南流して境町米岡地内で利根川に合流する。澗名台地は西に粕川、東に早川が流れる幅1.5kmほどの南にのびる台地であるがその中は湧水起源の小沖積地で更に二つに分断される。

遺跡のある地域はすぐ東側を流れる早川や西から南へかけての粕川の氾濫により開析されたとみられ、その開析低地は水田として利用され、台地上は主に畑地として利用されてきている。しかし、この部分における水田と畑地の比高差は1mほどで、むしろ微高地と呼称する方がふさわしいかもしれない。

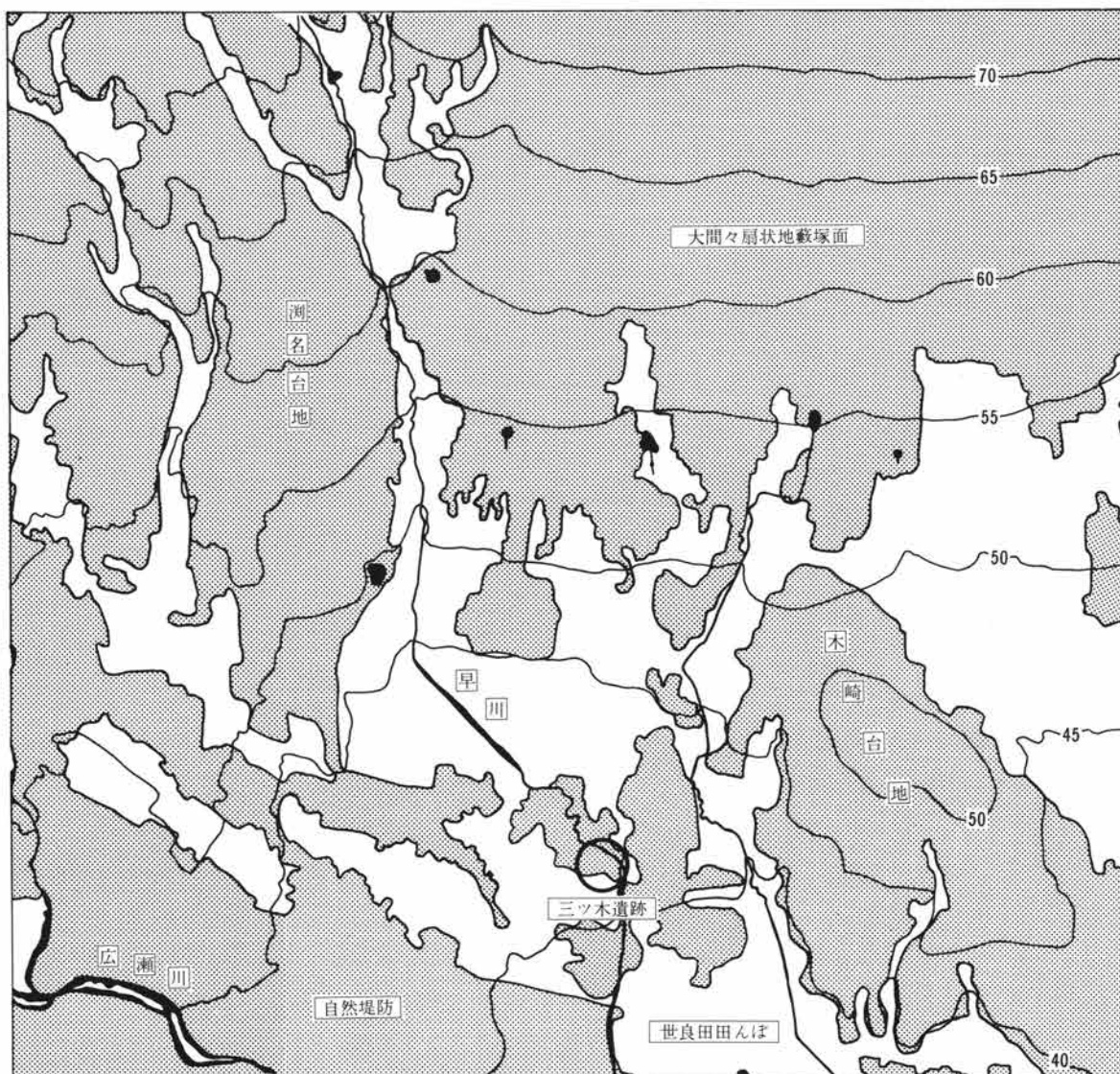
三ッ木遺跡における地質は主として前述の如く洪積台地で関東ローム層が中心であるが、部分的にはこのローム層が途切れて沖積土が堆積し、河流に分断されたことを物語っている。更に遺構の在り方をみると、河流により半分削られたものもある事から、過去において河川の氾濫がしばしばあり、地形を変化させていたことが推察された。

調査期間中もしばしば経験したが、幅5～6mの早川が一時的にまとまった雨量があるとすぐに橋上冠水するような状況があり、しかも複雑な蛇行の状況からすると相当なあばれ川であったことが容易に推察された。更に、境町市街地から尾島町の北部にかけて標高40m内外の低地が続いており、広瀬川(旧利根川)、粕川が直に澗名台地の南を流れた可能性も推測される。その観点からすれば、沖積地はかなり地形的に変化を受けており、複雑な様相を呈していたことが考えられる。

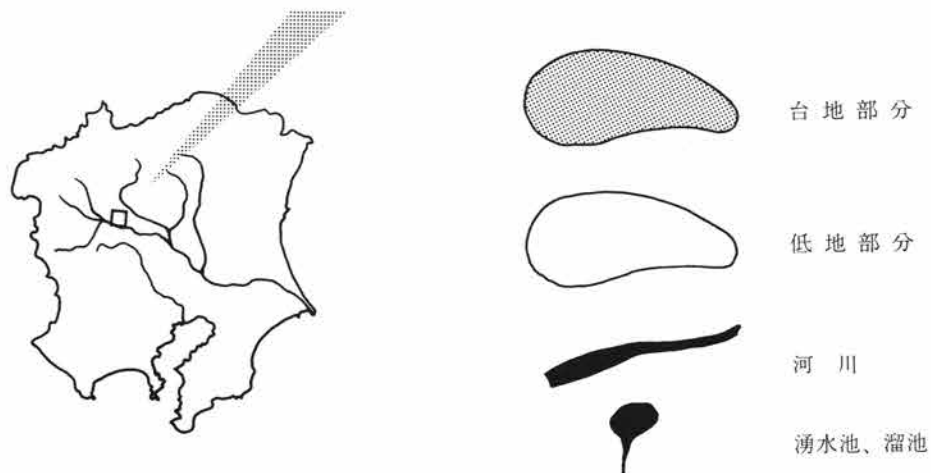
上武道路はこの澗名台地の先端をよこぎることになったために地形的にも洪積台地、沖積地の境界線を通り遺構の様相も変化に富んでおり調査が困難を極めた面もある。三ッ木遺跡は全長400m弱にも及び、すぐ北に続く西今井遺跡と合わせると1kmほどにも達する広大なものであった。その範囲は、路線よりかなり広がる様相がみられ、早川右岸台地いっばいに展開するものとみられた。

(註)

- 1 周辺地形の分類については峰岸純夫・能登健「赤城山南麓の開発と遺構<女堀>」(『URBAN KUBOTA』19 久保田鉄工株式会社 1981) 所載の地形区分図(能登編図、地形—沢口宏)を参照させて頂いた。



(1:50,000)



第I図 遺跡周辺地形図

第III章 周辺の歴史的環境

三ッ木遺跡の周辺の地形は大別して粕川、早川、石田川の川筋を境にして4つに分けられる。更に、それぞれの区域が扇状地としての台地と流域を中心とした低湿地に分けることができ、それぞれの歴史的環境に特色をみせている。

(1) 広瀬川（古利根川流路）以西

伊勢崎市街の西を西北から南東方向によぎる広瀬川は、古くは利根川の流路として一時的に機能していたといわれている。従って、広瀬川以西の地域には遺跡が極端に少ない傾向がある。これは利根川の上流では前橋市田口町付近からみられる傾向で、利根川が最も東に寄ったラインが広瀬川だとする説を裏づけている伊勢崎市西部でもこの傾向は明らかでほとんど原始・古代に属する遺跡は認められない。

ただ全体的に川の流路を追跡してみると、伊勢崎市連取町地内で広瀬川は伊勢崎市街に突き当たるが、一時的には現在の市街地を南東方向に横切り、下植木地内で現在の粕川に合流し、いっきに東武伊勢崎線に沿って大間々扇状地の扇端部を洗い流したのではないかと思われる。これは下流の境町の北側、尾島町世良田の「世良田田んぼ」を流した可能性が遺跡の面で裏付けられることからの推察である。

(2) 広瀬川～粕川流域（伊勢崎台地）

伊勢崎市街地から粕川・広瀬川の合流点までの部分である。市街地北部の安堀町付近は標高70mほどあり台地先端部では45mほどになるから、全体としてはかなり南面する傾斜を呈しているといえる。この部分の遺跡の多くは広瀬川沿いに集中する傾向にある。安堀町のお富士山古墳から茂呂町の古墳群へつづく遺跡は主として古墳時代以降であり、他の時代のものはお富士山古墳周辺の広瀬川自然堤防上にある弥生期の集落跡等が注目される程度である。

古墳はお富士山古墳を除けばほとんどが後期古墳であり、小円墳が多い。その他には、保泉部落^{ほせん}の西側で採土中に検出された保泉遺跡がある。時期的には石田川式土器を伴うものであるが、おそらく流域の低湿地を開拓した人々の集落であろう。遺跡はそうした低湿地を控えた台地や微高地上にあるとみられるが、この地域の調査はほとんど実施されていないのが実情で今後の解明が待たれる。

(3) 粕川～早川流域（瀨名台地）

旧佐位郡佐位郷、瀨名郷に属する部分とみられる地域で、大間々扇状地^{おおまま}の扇端にあたる。伊勢崎市街地の東部八寸あたりから早川までの台地幅は2kmほどであるが、その中央に天ヶ池^{あま}起源の中川という小流が、ほぼ中央を二分する形で南流する。

この瀨名台地は古くから安定した生活の場であったことが推測され、かなり多岐にわたる遺跡が、数多く発見されている。豊城町^{とよしろ}には前期旧石器が出土した可能性をもつ権現山遺跡や、6世紀以降の古墳群がある。これは八寸あたりまでのびてかなり広大な古墳の集中がみられたが、ほとんど平夷されてしまっている。その古墳の中で注目されるのが、伊与久の雷電神社古墳である。横穴式石室の形状や構造、使用された角閃石安山岩からみて前方後円墳としては最終末期に該当するこの古墳は、その後すぐ北側につくられる十三宝塚遺跡との関係が注目される。尚、この周辺には6世紀後半から7世紀にかけての集落の存在も確認されている。

更に古墳では上武士^{かみたけし}・下武士^{したたけし}の古墳集中地区が注目される。上毛古墳綜覧によれば、前方後円墳5基、円墳102基が存在したとされるこの古墳群は今では数基のわずかな土の高まりを確認できる程度になってしまっ

た。昭和41年以来数次に亘る調査でようやく10数基の存在が明らかにされたが、その全貌は知る由もない。この内主墳とみられる天神山古墳（剛志村30号墳）は前方部を北北西に向けた前方後円墳で、往時は全長が127m、高さ5.5mあったという。ただ、かなり平夷が進んでいたため主体部は不明で、埴輪類から6世紀末頃のものともみられている。この上武士の地域の東には下武士の古墳群が連続しているが、その配置はやや粗である。

律令時代になると、伊与久に所在する十三宝塚遺跡が注目される。伊勢崎佐波工業団地内に発見されたこの遺跡は東面する低台地上に東西150m、南北300mほどの範囲に企画的に配された溝、柵列で囲まれた中枢部、それに付随する3群の掘立柱群の検出、そこから出土する奈良三彩陶、郷名瓦、多量の墨書土器等から佐位郡衙ないしそれに関連する遺跡とみられている。特に台形に柵列で囲まれた部分には南に門、その正面（区画中央）に基壇建物（瓦葺）、その西南に地覆石をめぐる方形基壇があり、西から北は浅い溝で画している。更に、東にある3群の掘立柱群は建替も含めると60棟近くにも及ぶもので、意図的な配置がみられるものである。

そのすぐ東の狭長な低湿地を隔てた東側の台地は瀨名部落がのる洪積台地である。上瀨名古墳群（前方後円墳4基、円墳44基）の内5基の調査がなされているが、他の大部分については明らかでない。この群の主墳とみられる雙見山古墳は、関重嶷「伊勢崎風土記」（1798年）にその記載がみられる。全長80m、高さ6～8mの周堀をもつ前方後円墳である。内部主体は後の確認で榛名山二ッ岳の角閃石安山岩を使用している。横穴式石室の規模は不明だが、妥女小学校の西にある日露戦争戦没者顕彰碑の踏石となっているのが、天井石であるとされるが、その大きさからするとかなり大きかったとみられる。出土品は刀剣、装身具、鏃、仏具土器等であるというが明確ではない。他には埴輪の出土することがはっきりしている。

この他には、国学院大学で調査した古墳があるが、その第1号墳には袖無型石室から、重圈文鏡を含む直刀5振、メノウ玉類、耳環4、馬具、刀子等を出土した。これは7世紀ごろのものともみられ、この一群も古い時期の古墳は含まないようである。

瀨名は律令時代は瀨名郷であったことは疑いをいれず、現在上と下に分かれている台地部全てを含んでいたものと推定される。十三宝塚遺跡の郷名瓦に「瀨」の正字、逆字のものがあり、瀨名郷からもたらされたものであることは間違いない。その主要地域は瀨名部落の南部の低地を臨む台地先端部にあったとみられる。上武道や境町のほ場整備地区で調査した部分では延喜式内社「大国神社」を中心に奈良～平安時代に及ぶ大集落が調査され、また大量の墨書土器を出土する大きい溝等も検出されている。佐位郡の「佐位郷戸主松前部黒麻呂、郡司大領外松前部君賀美麻呂」（正倉院古裂銘）（749年）や、上毛野佐位朝臣姓を賜わった「松前君老刀自」、「掌膳采女佐位朝臣老刀自」を上野国国造とするなどの記事からすると、この地域を支配していたのは松前君一族（上毛野氏一族）であったことがうかがわれる。

律令朝における佐位郡八郷（佐位、名橋、岸新、反治、雀部、美呂、瀨名、駅家）の中では、佐位郷、瀨名郷が共に有力な郷で、瀨名台地を二分して東西に対峙していたものと推定される。

瀨名台地の先端部の矢島、及び西今井、三ッ木の立地する台地は洪積台地が周辺を削られて中洲状に残った部分であろうと思われる。この地形の形成の原因として古利根川の水が粕川に流れ込み、一気に東武伊勢崎線に沿って南東方面に押し出し、境町北部の世良田の低地に流れたためとみられる。特に西今井・三ッ木遺跡にみられるローム層の分断やそれを埋めた黒色土中への集落の拡大等をみると古墳時代から平安時代にかけては、かなり不安定な土地の状況を見せていたものと考えられる。なお、低地部には遺跡はほとんどみられない。

(4) 早川以東（木崎台地）

小角田部落、中江田部落、下江田部落の先端を境に低地と台地に分けられる。台地部は渚名台地と同様に古くから開けていたことは遺跡が立証している。中江田の台地は西の水田地帯とは3～5mの比高差をもっているが、そこからは先土器時代の遺跡からはじまって営々と続く人々の歴史の跡を知ることができる。

特に台地部の大間々扇状地扇端部の湧水を起源とする低湿地の周辺を中心として各時期の遺構が検出されている。標高60mラインがそのほぼ境界で、人々の生活の舞台も大きく二分される傾向にある。原始・古代における様相は渚名台地と大きく異なることはないが、この地域が脚光をあびるのは中世からである。

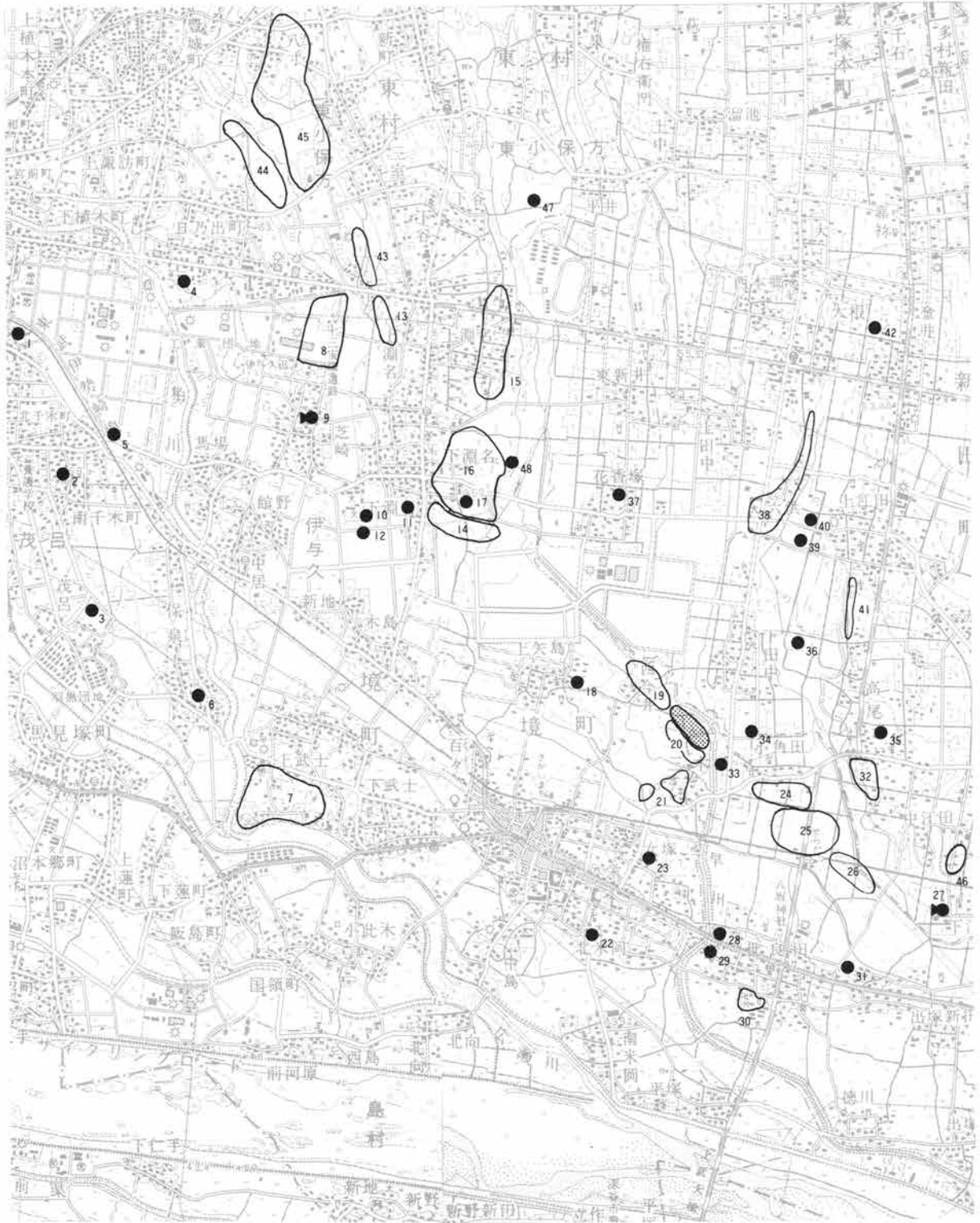
それは言うまでもなく、尾島町の世良田周辺を中心とした地域である。新田義重等を中心としてひらける新田荘と長楽寺を中心とする文化は、この地域を特色付けるものであった。長楽寺は新田義季の開基で開山は栄西の高弟栄朝である。台密、臨済二宗を兼ねたこの名刹は末寺900をかかえたという。また、新田氏関係の文書も数多く「長楽寺文書」5巻、130通は鎌倉から室町時代の数少ない基本資料である。

この他、長楽寺周辺は多くの遺跡が分布し、法照禅師月船琛海塔所ならびに普光庵跡は五世の死後、その弟子牧翁一が塔を興したもので、偶然発見されたこの遺跡は禅宗僧侶の埋葬型式、普同葬を立証した貴重な遺跡である。

これらの各地区はそれぞれ地形に左右されながら多くの人々の歴史の跡をとどめているが、その実態はまだ不明な部分が多い。

周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	概要	文献等
1	八幡宮境内古墳	伊勢崎市今泉町字本郷1102	径40m、高さ22.5mの円墳。八幡宮の社殿がのる。	
2	南千木古墳群	伊勢崎市茂呂町字阿弥陀	数基の円墳。現在は1基が主体部がわかるのみで他は平夷。	
3	羽黒台古墳群	伊勢崎市茂呂町字羽黒台	広瀬川左岸の古墳群。保泉と茂呂の境の道端。大部分平夷。	
4	蛇塚古墳	伊勢崎市日乃出町	横穴式石室。金環、玉類、埴輪馬、人物埴輪等出土。埴蓮第2小学校に移築。周辺に土師器包蔵地あり。	埴輪は中央公民館蔵
5	南千木包蔵地	伊勢崎市南千木町下赤沼	粕川右岸の低台地上にある千木一伊与久道路脇。土師器が出土。	伊勢崎第1中学校保管
6	保泉遺跡	佐波郡境町保泉	粕川右岸の台地上にある古墳時代前期の集落跡。境町教委調査。	「境町古代遺跡」境町役場 昭和53年
7	武士古墳群	佐波郡境町上武士、下武士	前方後円墳5、円墳45基ほどあったといわれる。数次に亘る調査を実施。	「上武士の古墳」境町教委 昭和43年 「下武士遺跡」境町教委 昭和53年 「武士遺跡」境町教委 昭和56年
8	十三宝塚遺跡	佐波郡境町伊与久	佐波郡衙関係遺構。昭和51～56年の6次に及ぶ調査を実施。三彩陶、郷名瓦等出土。	「十三宝塚遺跡発掘調査概報」I～III 県教委 昭和50～52年 IV 境町教委 昭和56年
9	雷電神社古墳	佐波郡境町雷電裏	前方後円墳。横穴式石室が社殿下に開口。大刀、耳環が出土。7世紀代と思われる。	



第2図 周辺の遺跡 (1:50,000)

- 1 八幡宮境内古墳 2 南千木古墳群 3 羽黒台古墳群 4 蛇塚古墳 6 保泉遺跡 7 武士古墳群 8 十三宝塚遺跡 9 雷神社古墳 10 土橋遺跡第4地点 11 土橋遺跡第3地点 12 島海戸遺跡 13 上瀨名遺跡 16 下瀨名遺跡 15 上瀨名古墳群 17 大國神社 18 上矢島遺跡 19 西今井遺跡 20 三ッ木遺跡 21 西林遺跡 22 北米岡遺跡 23 女塚遺跡 24 小角田前遺跡 25 尾島工業団地遺跡 26 歌舞伎遺跡 27 矢抜神社古墳 28 世良田上新田遺跡 29 新田館跡 30 長楽寺 31 二休地藏古墳 32 中江田遺跡 33 三ッ木越戸遺跡 34 中道遺跡 36 谷津遺跡 39 西田遺跡 40 江田館跡 42 矢大臣遺跡 43 三室A遺跡 45 伊勢崎東工業団地遺跡 47 鶴巻古墳 48 寺家前遺跡

No	遺跡名	所在地	概要	文献等
10	土橋・三ッ古屋遺跡	佐波郡境町下瀧名土橋	平安時代の溝検出。墨書土器出土。古墳。	「土橋、三ッ古屋、出口、島海戸遺跡発掘調査概報」境町教委 昭和52
11	出口遺跡	佐波郡境町下瀧名出口	住居跡57軒、祭祀遺構、井戸等検出。	同上
12	島海戸遺跡	佐波郡境町下瀧名島海戸	古墳時代集落を中心とした遺跡。榛名山二ッ岳火山灰層(FA)下の住居跡が目される。	
13	上瀧名遺跡	佐波郡境町上瀧名字横町	平安水田跡、古墳時代後期集落跡。昭和54年度埋文事業団調査。	
14	下瀧名遺跡	佐波郡境町下瀧名字桜木新屋敷	古墳、平安時代集落跡、大溝の3地点。墨書土器多数出土。	「下瀧名遺跡発掘調査概報」境町教委 昭和53年
15	上瀧名古墳群及び包蔵地	佐波郡境町上瀧名字銀杏	銀杏地区に群集墳あり。古墳～平安時代の集落跡。	「上毛古墳総覧」群馬県教委 昭和12年 「群馬県佐波郡采女村上瀧名古墳発掘報告」国学院大学考古学会 「上代文化」18 昭和23年
16	下瀧名遺跡	佐波郡境町下瀧名明神他	古墳。古墳～平安時代の集落跡。館跡。14に北接。	「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報V」群馬県教委 昭和51年
17	大國神社	佐波郡境町下瀧名	延喜式内社。松前一族の祭祀場か。	「延喜式」
18	上矢島遺跡	佐波郡境町矢島字上矢島	ほ場整備関係の調査で一部集落跡を検出。	「上矢島遺跡発掘調査概報」境町教委 昭和54年
19	西今井遺跡	佐波郡境町西今井	上武道、早川河川改修に伴う発掘調査で奈良時代以降の集落跡を検出。南接地はほ場整備関係の境町教委による調査。	「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報IV」群馬県教委 昭和53年 「西今井・三ッ木遺跡調査概報」境町教委 昭和55年
20	三ッ木遺跡	佐波郡境町三ッ木自光坊	本報文所収。なお南接地域は同遺跡名で境町教委が調査。	同上
21	西林遺跡	佐波郡境町三ッ木西林	古墳～平安時代の集落跡検出。境バイパス関連調査。	「西林遺跡第1次発掘調査概要」境町教委 昭和54年
22	北米岡遺跡	佐波郡境町北米岡257他	縄文～古墳時代包蔵地。金子規矩雄氏蔵岩版出土。	「境町古代遺跡」境町役場 昭和53年
23	女塚遺跡	佐波郡境町女塚道西	群馬大学史学研究室で一部発掘。古墳時代末期の住居跡を検出。	同上
24	小角田前遺跡	新田郡尾島町世良田・小角田前	上武道に伴う発掘調査。古墳～平安時代の集落跡。古墳2基検出。	「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報V」群馬県教委 昭和53年
25	尾島工業団地遺跡	新田郡尾島町世良田・小角田前	小角田前遺跡に続く集落跡、古墳群。企業局調査。	

第三章 周辺の歴史的環境

26	歌舞伎遺跡	新田郡尾島町世良田字歌舞伎	上武道に伴う発掘調査。古墳～平安時代の住居跡約200軒を検出。	「歌舞伎遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和57年
27	矢抜神社古墳	新田郡新田町下江田	前方後円墳。角閃石安山岩使用石室。埴輪、大刀、玉類が出土。	出土品は東京国立博物館蔵
28	世良田上新田遺跡	新田郡尾島町世良田、上新田	土師器片出土。	遺物は世良田中保管
29	新田館跡	新田郡尾島町世良田、中	早川左岸台地上に存する総持寺境内を中心とする面積35000m ² の方形館跡。	山崎一「群馬県古城壘址の研究」上 昭和46年
30	長楽寺周辺遺跡	新田郡尾島町世良田東照宮西	中世墳墓群、文珠山古墳（前方後円墳）等多彩。	「長楽寺遺跡」尾島町教委 昭和53年、56年
31	二休地蔵古墳	新田郡尾島町世良田、下町	東武伊勢崎線世良田駅から旧徴高地上に続く古墳群のうちの一基。	
32	中江田遺跡	新田郡新田町中江田、原	通称「世良田田んぼ」の東側台地上にあり、先土器～平安時代の包蔵地。	
33	三ッ木越戸遺跡	佐波郡境町三ッ木越戸	平安時代の集落跡。境バイパス工事に伴う調査。	「三ッ木越戸」群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和56年
34	中道遺跡	新田郡新田町下田中宇中道	古墳～平安時代の集落跡。	
35	県遺跡台帳	新田郡新田町高尾字大道付	縄文・平安時代の土器片散布。	
36	谷津遺跡	新田郡新田町上江田字谷津	古墳～平安時代の集落跡。櫛出土。	
37	県遺跡台帳	新田郡新田町花香塚	古墳～平安時代の土器片散布。	
38	県遺跡台帳	新田郡新田町上田中宇六供	古墳。その他縄文・古墳時代以降の土器片散布。	
39	西田遺跡	新田郡新田町上江田字西田	古墳・平安時代の集落跡。昭和50年調査。	
40	江田館跡	新田郡新田町上江田字西郭	江田行義の館跡といわれる。室町時代の土壘、堀が残存。県指定史跡。	山崎一「群馬県古城壘址の研究」上 昭和46年
41	県遺跡台帳	新田郡新田町上江田字西田谷津	古墳時代の土器片散布。	
42	矢大臣遺跡	新田郡新田町大字大根	縄文時代集落跡。矢大臣湧水池がある。	
43	三室A遺跡	佐波郡東村小保方字三室	古墳時代後期の集落跡。木製品出土。昭和56年埋文事業団調査。	
44	伊勢崎東流通団地遺跡	伊勢崎市日乃出町 佐波郡東村東小保方	古墳～平安時代の集落跡。周溝墓、鍛冶遺構等を検出。	「伊勢崎・東流通団地遺跡」群馬県企業局 昭和57年
46	県遺跡台帳	新田郡新田町中江田字本郷	奈良～平安時代の集落跡。瓦塔片出土。	
47	鶴巻古墳	佐波郡東村東小保方字鶴巻	角閃石安山岩使用の横穴式石室	
48	寺家前遺跡	佐波郡境町下瀧名寺家前	昭和58年度境町教委調査。朱書土器出土。	「昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」境町教委 昭和59年

第IV章 遺跡の概要

三ツ木遺跡は前章で述べたように早川の蛇行部分にあたる右岸台地に立地する。調査は上武国道の路線部分について台地の南東線から台地中央の窪み部分までを対象としている。なおこの窪み部分より北面側は西今井遺跡（第2図参照）として登録され、調査が実施されている。本遺跡の立地する台地の標高は現在40m前後を測るが、後世において削平の憂き目にあったようで、表土が薄く、従って遺構残存状態の不良なものが比較的多かった。又調査中央のIII区付近では地山が黒色粘質土であるため、覆土との区別が非常に困難で、遺構の検出作業に労を多くした。以上のような比較的劣悪な条件下ではあったが、調査の結果調査区のほぼ全面に亘って遺構が密集し、予想を越える多数の遺構を検出した。

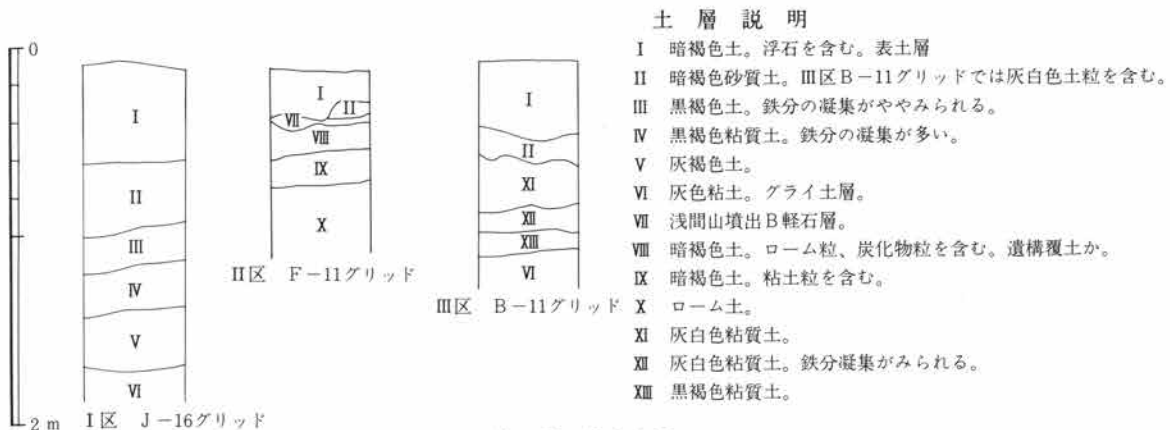
検出された遺構は竪穴住居跡、掘立柱建築遺構、土壇、方形周溝墓、溝、井戸、柵列で、時期は縄文時代～中世に亘る。竪穴住居跡の大部分は古墳時代後期～平安時代に属し、方形周溝墓は古墳時代初頭期のもので、その他の掘立柱建築遺構、土壇、溝、井戸等は時期の不明なものが多い。各遺構の検出数は竪穴住居跡199軒、掘立柱建築遺構9棟(10棟の可能性あり)、土壇72基、井戸6基、方形周溝基1基、柵列1列、溝11条である。なお早川河川改修分を含めると、全域で竪穴住居跡235軒、掘立柱建築遺構12棟、土壇81基、井戸7基、方形周溝墓1基、柵列^{15列}溝12条となる。

遺構の分布状況は調査区中央部の窪み部分を境にして北西部と南東部に二分される様相を呈する。時期毎あるいは遺構毎の分布の特徴については第VI章で述べる。

検出遺構の種類と総数は以上のものであったが、調査区の東側は早川の浸食崖、又北西端と南東端は黒色泥炭質土を地山としており、遺構の検出がほとんどできなかった。遺跡全体の範囲を想定した場合、その分布の様相から早川崖の方向に広がっていた事は明らかである。又北西に隣接する西今井遺跡、南西に隣接する遺跡(「西今井・三ツ木遺跡調査概報」境町教育委員会1980)を含めて考えれば本遺跡の立地する台地のほぼ全面が遺跡の様相を呈する事になる。

基本土層

本遺跡における地層は以下の図のとおりである。



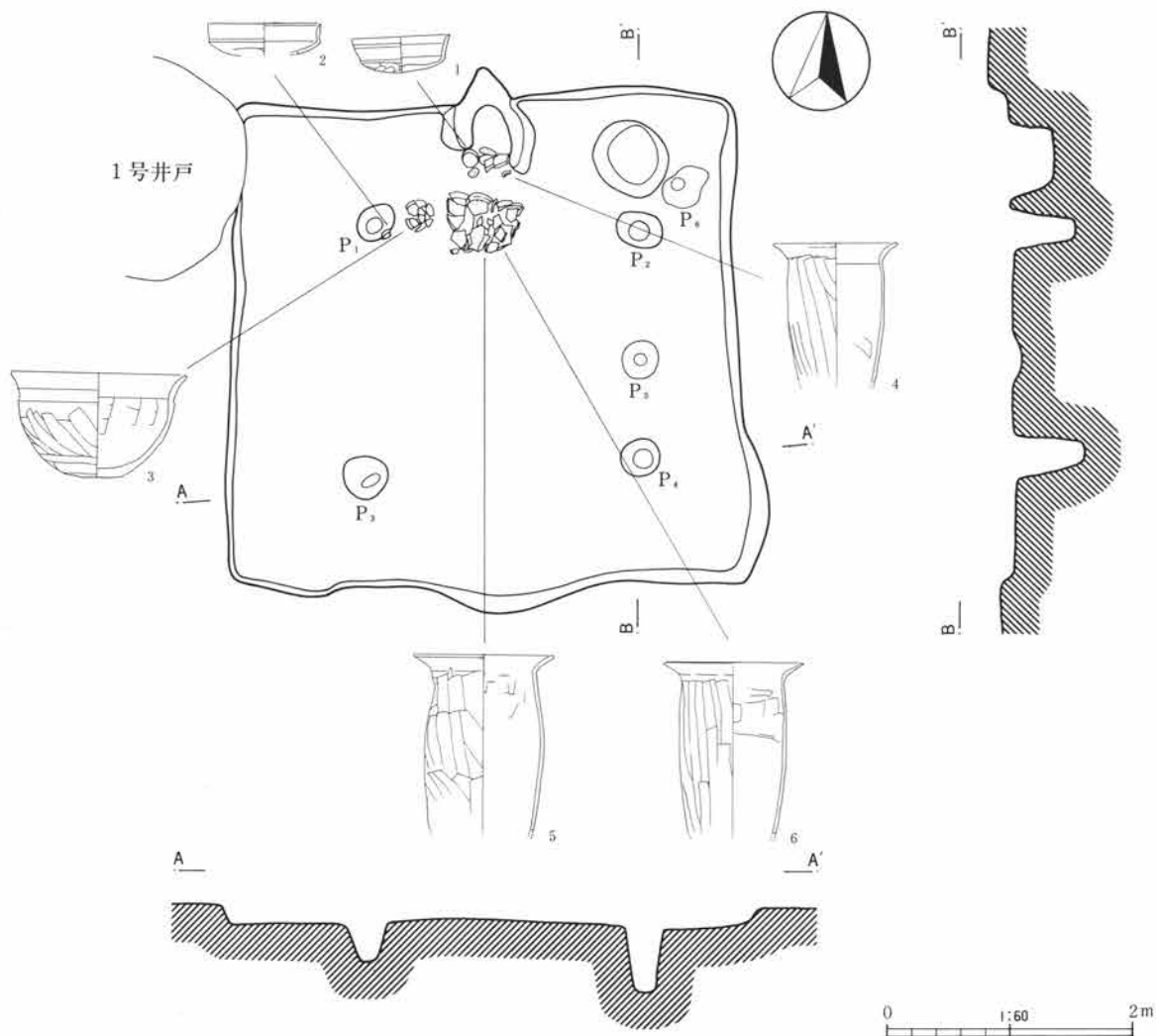
第3図 基本土層

第V章 検出された遺構と遺物

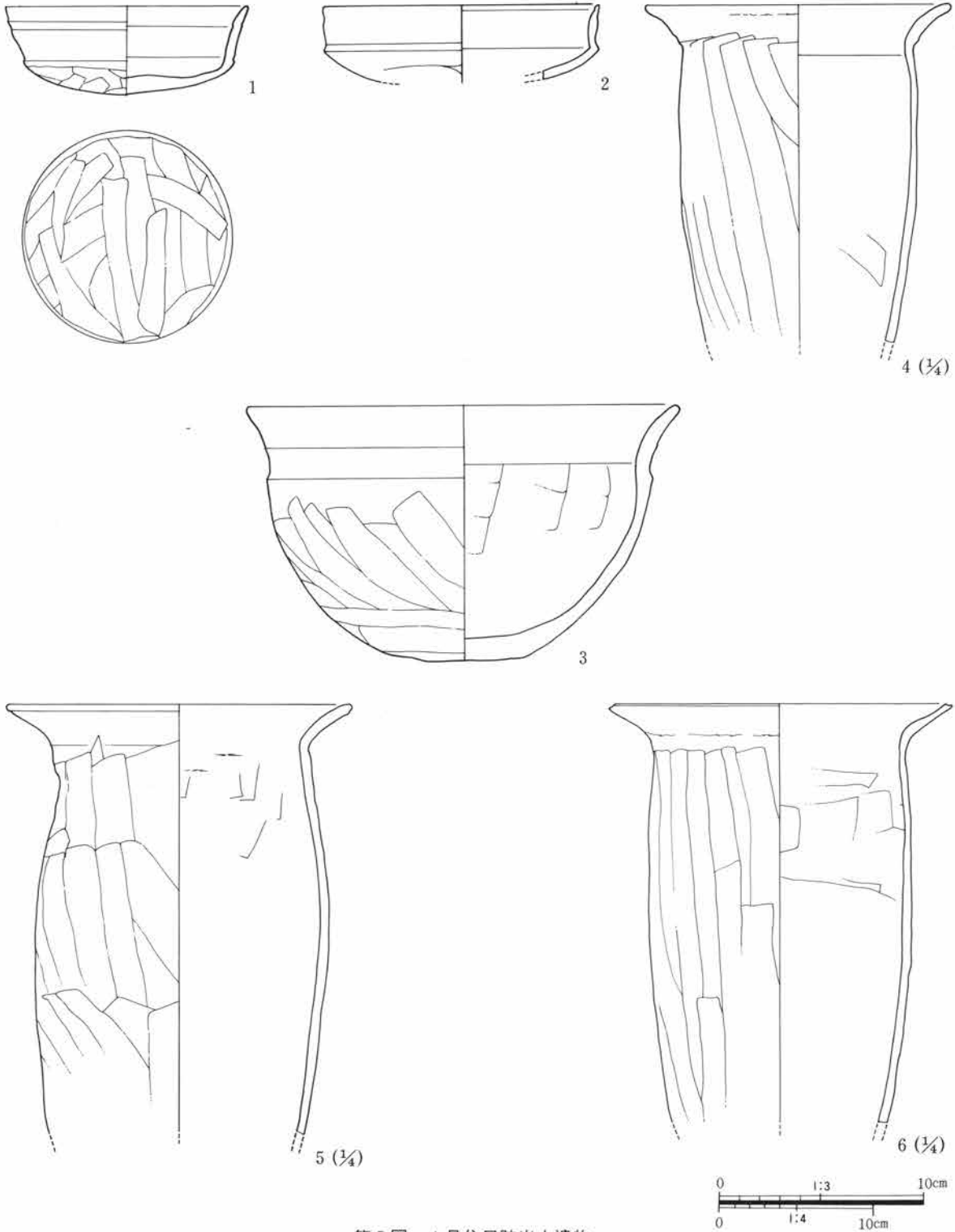
1 竪穴住居跡

1号住居跡（第4図、PL.2）

I区A-12、B-11・12、C-12グリッドに位置する。平面は南辺の歪む正方形。規模は4.17×4.40m、面積16.46㎡を測る。主軸方向はN-10°-Wを指す。壁は外傾し、確認壁高は20～5cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部がやや高い。カマドは北壁中央に構築され、残存状態は良好。そで部は壁内へ60cm張り出し、燃烧部も壁内にある。煙道部は天井の一部を残し、急角度で立ち上がって壁外25cm程で開口している。規模は長さ85cm、幅76cm、煙道開口部径は10cmを測る。軸方向はN-13°-W。貯蔵穴は北東コーナー部で検出された。平面は楕円形で、規模64×55cm、深さ37cmを測る。ピットは6基で、規模はP₁径34cm深さ



第4図 1号住居跡

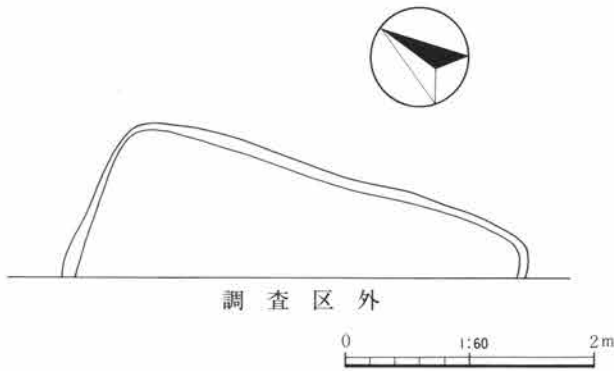


第5図 1号住居跡出土遺物

39cm、 P_2 径38×27cm深さ53cm、 P_3 径36cm深さ32cm、 P_4 径34cm深さ55cm、 P_5 径31cm深さ8cm、 P_6 径39×27cm深さ26cmを測る。柱間距離は P_1 — P_2 2.15m、 P_3 — P_4 2.20m、 P_1 — P_3 2.04m、 P_2 — P_4 1.83mを測る。

遺物は杯、鉢、瓦が出土しており、カマド内及び焚口部分に集中する。

重複遺構は1号井戸跡で、わずかに接する程度であるため新旧関係は不明である。



第6図 3号住居跡

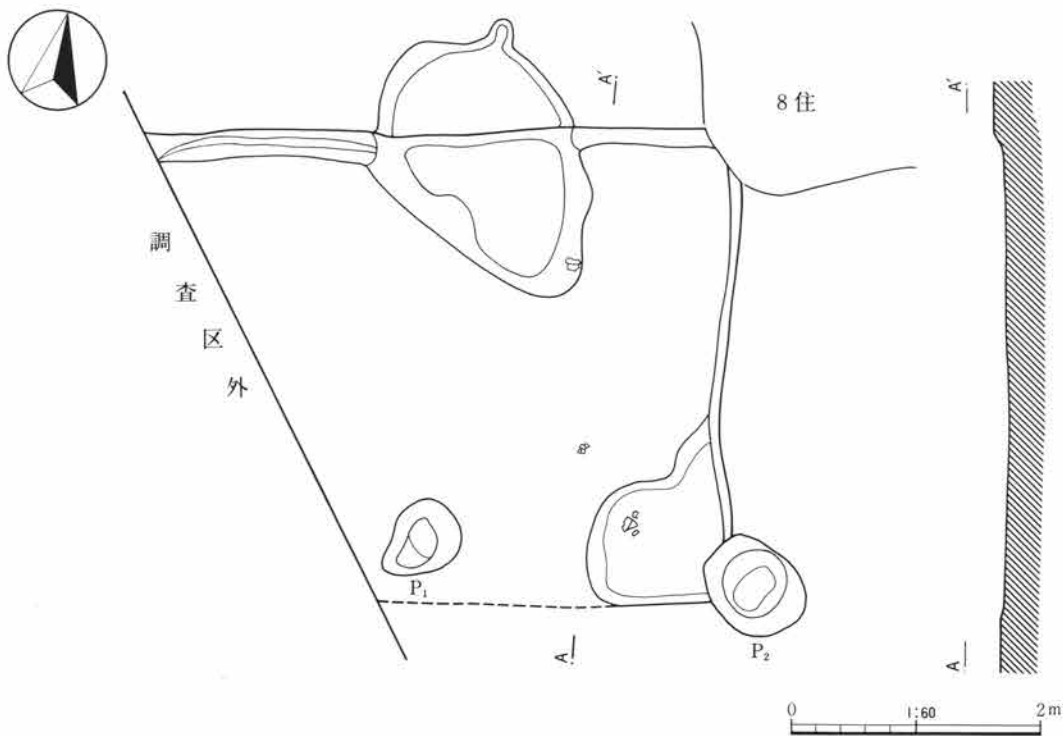
2号住居跡 (欠番)

3号住居跡 (第6図、PL.2)

I区A-12グリッドの調査区の境界にかかって検出された。平面は長方形かと思われる。規模は不明。主軸方向は東壁でN-18°-Wを指す。カマド、貯蔵穴等は不明。壁は外傾し、確認壁高30cmを測る。床面は地山ローム土を利用し、平坦。覆土はレンズ状の堆積で、ロームブロックを少量含む黄褐色土及び黒褐色土を主とする。出土遺物はない。

4号住居跡 (第7図、PL.2)

I区A-13・14グリッドに位置する。平面は長方形を呈する。規模は3.77×(4.80以上)mを測る。調査区境界にかかり南西部は不明。主軸方向はN-11°-Wを指す。壁はほとんど残存せず、土層断面での壁高は16cmを測る。床面は凹凸が激しく、周辺部は軟質である。カマドは明確ではない。北壁中央に浅い皿状の掘り込みがあり、その性格は不明である。規模は2.3×1.5mを測る。ピットは南壁際のほぼ中央と南東コーナー部壁外に検出された。P₁は不整楕円形で、規模は57×55cm、深さ24cmを測る。P₂は規模84.0×67.0cm、深さ47cmを測る。又南東コーナー部には1.10×1.00m程の浅い掘り込みが検出されたが、貯蔵穴あるいは掘り形の可能性が考えられ、その性格については特定できない。周溝は東壁の北半部のみ検出され、規模は幅20cm、



第7図 4号住居跡

深さ15～1cmを測る。覆土はロームブロックを多く含む黄褐色土、黒褐色土が堆積する。

遺物は床面上より甕と思われる土器片数点が、又円筒埴輪片、灰釉陶器片、スラグ等が覆土より出土している。

重複遺構は8号住居跡で、新旧関係は不明である。

5号住居跡 (欠番)

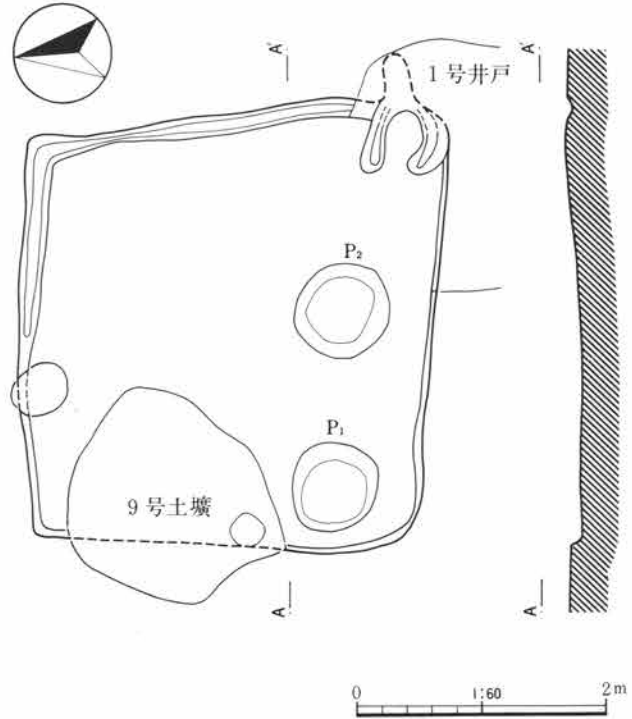
6号住居跡 (第8図、PL.2)

I区A-12・13、B-12・13グリッドに位置する。平面は南辺の長い歪んだ方形を呈し、規模は3.60×3.38mで、面積は11.21㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高13～3cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部は硬質で、周辺部は凹凸が多く軟質である。カマドは東壁南部に構築される。両そで部、燃焼部が残存し、煙道部は不明である。規模は幅70cmを測る。そで部は壁内に50cm程張り出す。本住居跡に伴うと思われるピットは2基で、南壁にそってほぼ中央と西寄りの位置で検出された。規模はP₁径70cm深さ53cm、P₂径80cm深さ24.5cmを測る。これらは位置関係や規模から柱穴とは考えにくく、特にP₁はむしろ貯蔵穴の可能性が考えられよう。周溝は東壁及び北壁の東半部分にそって検出された。幅22～9cm、深さ6～2cmを測る。覆土はブロック状の堆積状態を示し、炭火物粒及びロームブロックを含む暗褐色砂質土が主に堆積する。

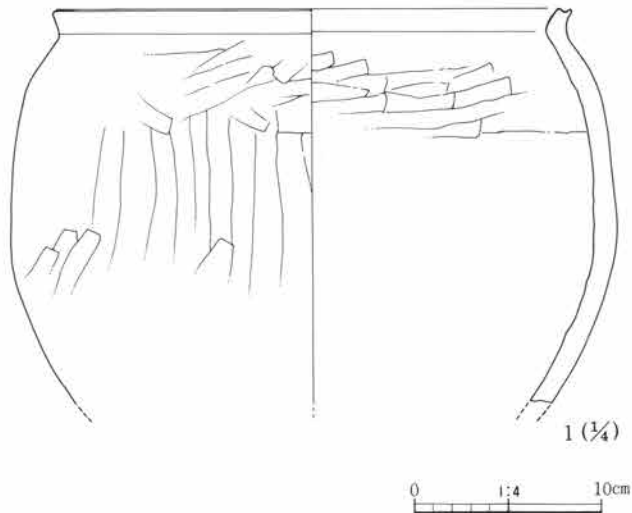
遺物は大形の甕片がカマド内より、又須恵器甕片、杯片が覆土より出土している。古墳時代後期と平安時代の土器が混在している。

重複遺構は1号井戸、9号土壇で、新旧関係はカマドの存在より1号井戸→6号住で、9号土壇については不明である。なお北壁と西壁にピットが2基検出されたが覆土の相違から本住居跡には伴わないものと思われる。

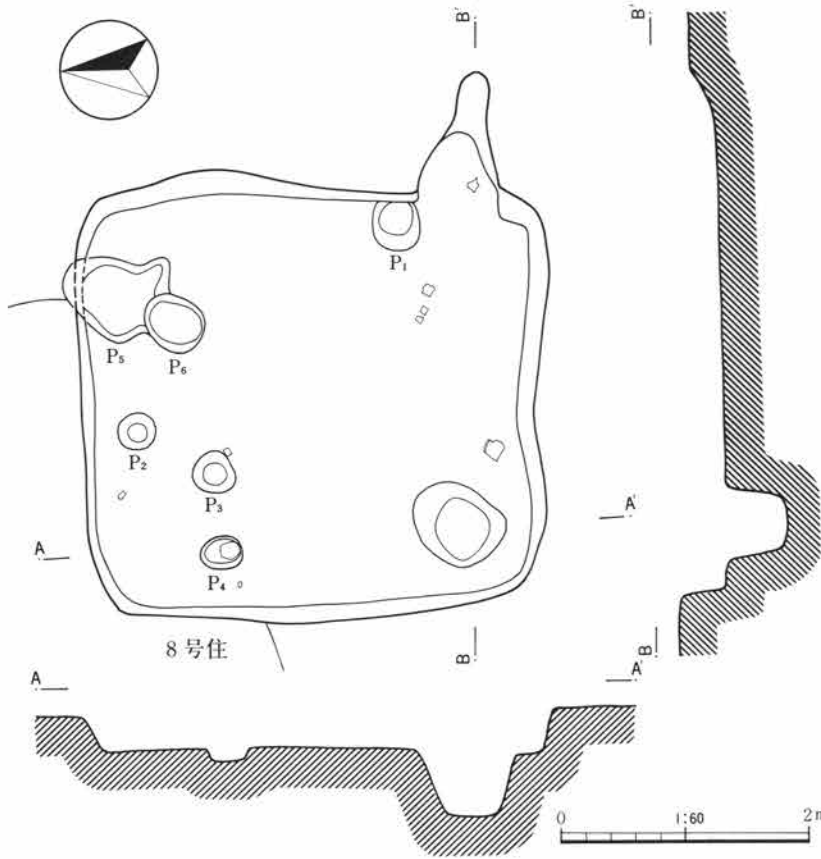
時期はカマド出土遺物から平安時代と推定される。



第8図 6号住居跡



第9図 6号住居跡出土遺物



第10図 7号住居跡

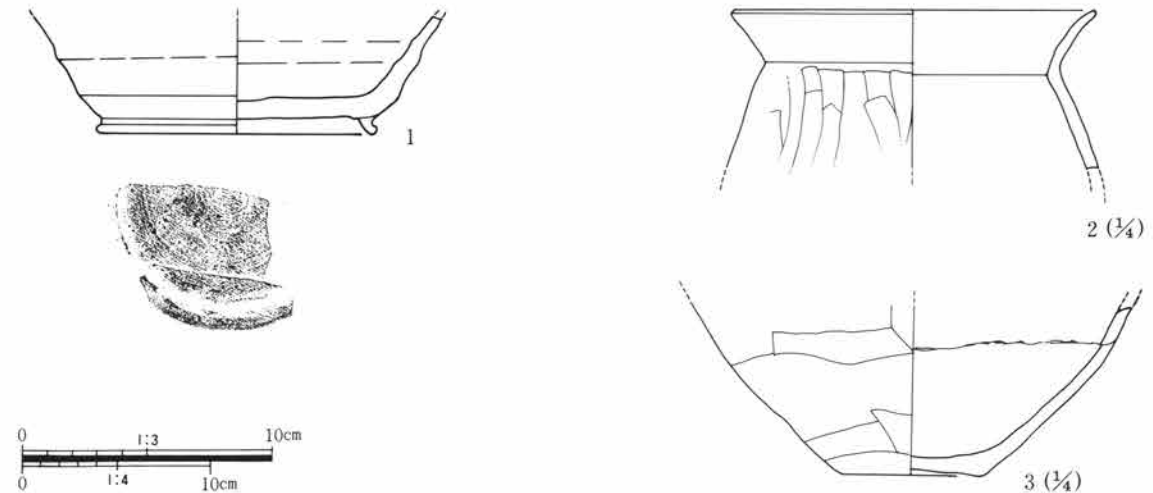
7号住居跡(第10図、PL. 2)

I区B-13、C-13グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は3.55×3.80m、面積12.67㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はやや外傾気味に立ち上がり、確認壁高は36~9cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部分がやや高い。カマドは東壁の南端に構築され、そでの基部、燃烧部、煙道部が残存する。長さ1.1m幅0.6mを測る。うち煙道部長は50cm程である。軸方向はN-68°-Eを指す。残存状態からそでは壁内に若干張り出し、燃烧部は壁外に張り出すものと思われる。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。平面は

不整楕円形で、規模は74×60cm深さ54cmを測る。ピットは6基で、規模はP₁径38cm深さ8cm、P₂径30cm深さ23.5cm、P₃径35cm深さ21.5cm、P₄径25.4cm深さ12cm、P₅は径120cm深さ13.5cm、P₆は径50.4cm深さ18cmを測る。覆土はレンズ状堆積でロームブロックを含む暗褐色砂質土を主とする。

遺物はカマド内から甕片、床面上より甕片、覆土より須恵器杯、土錘、埴輪が出土している。時期は平安時代初頭のものとして推定される。

重複遺構は8号住居跡で、土層観察より新旧関係は8号住→7号住である。

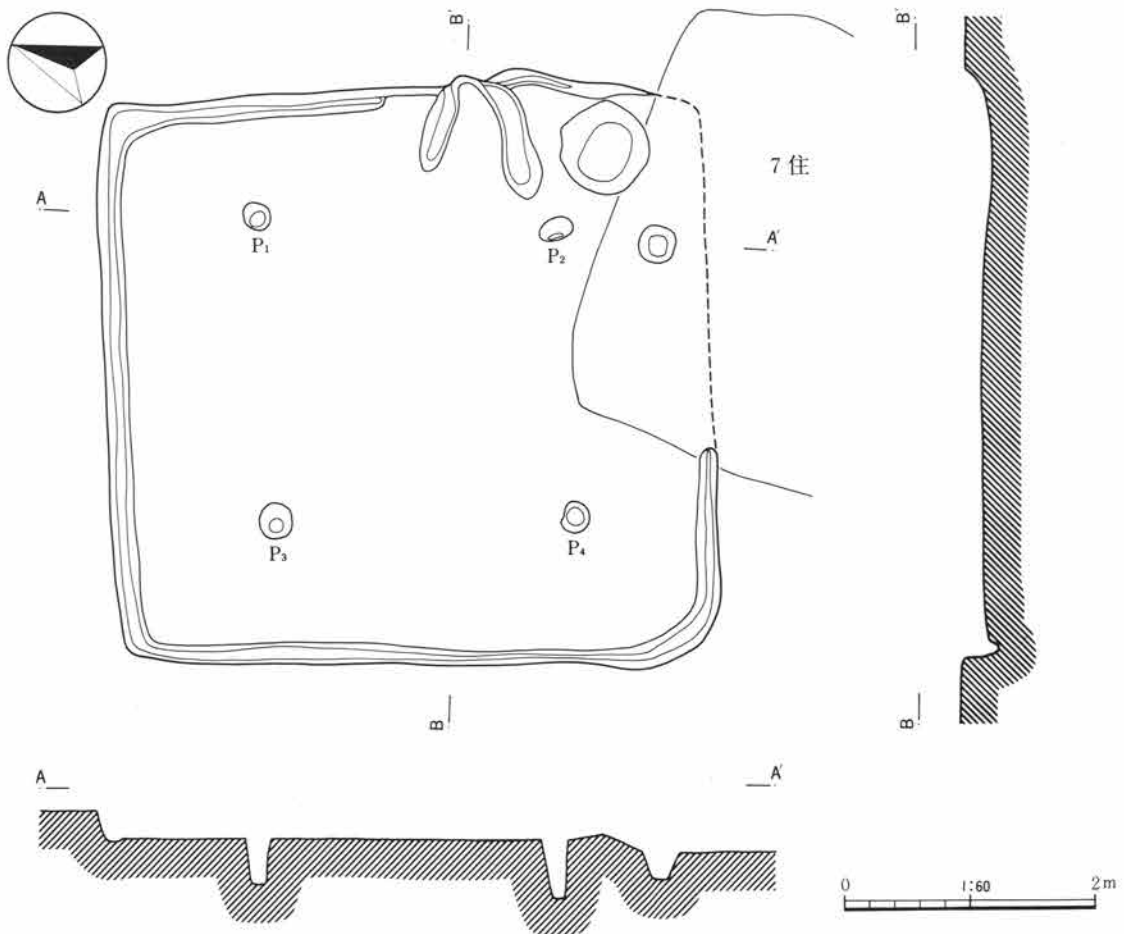


第11図 7号住居跡出土遺物

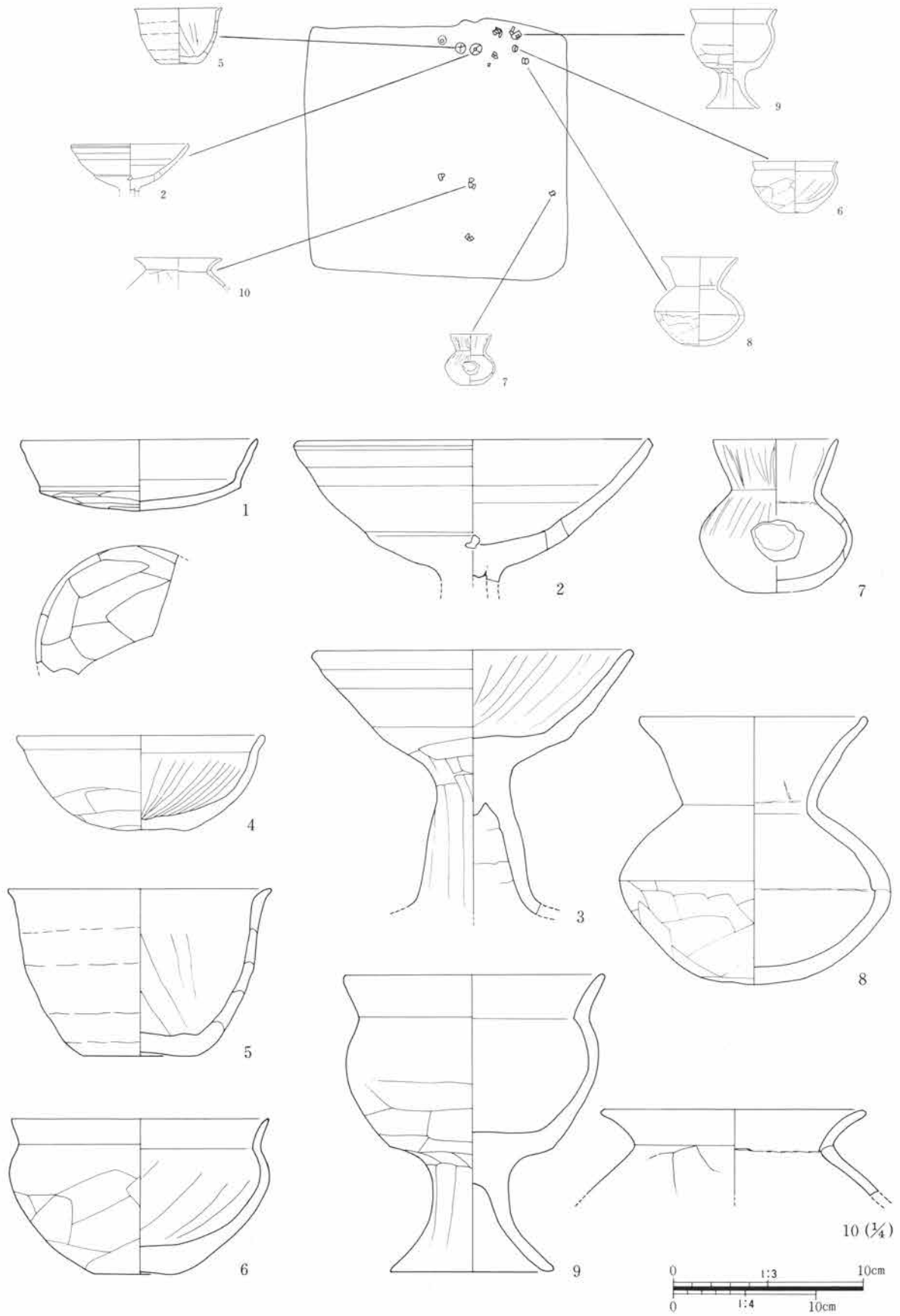
8号住居跡（第12図、PL.2）

I区B-14、C-14グリッドに位置する。平面は正方形で、規模は4.50×4.85m、面積21.98㎡を測る。主軸方向はN-70°-Eを指す。壁は残存状態良好で、ほぼ直立して立ち上がり、確認壁高は34~16cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部がやや高くなっているが、全体に平坦である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りの位置に構築される。そで部、燃焼部が残存し、煙道部については不明である。長さ1m、幅1mを測る。そで部は大きく壁内に張り出している。又燃焼部中央で左右1対2個体の高杯が倒立の状態で検出された。これはおそらく支脚あるいは補強材として用いられたものかと思われる。貯蔵穴は南東コーナー部のカマド右脇から検出された。平面は歪んだ楕円形を呈し、規模は75×66cm深さ30cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径20cm深さ36cm、P₂径26×18cm深さ47cm、P₃径28cm深さ38cm、P₄径25cm深さ47cmを測る。位置関係から以上4基は支柱穴と考えられる。なお柱間距離はP₁-P₂2.4m、P₃-P₄2.4m、P₁-P₃2.4m、P₂-P₄2.2mを測る。周溝はほぼ全周すると思われ、規模は幅20~10cm、深さ10~4cmを測る。覆土はレンズ状堆積を示し、ローム粒、軽石を含む暗褐色砂質土を主とする。

遺物は杯、高杯、小形壺、甕、埴、鉢、台付鉢等が出土している。出土遺物のうちほとんどは古墳時代後期に属するものである。



第12図 8号住居跡



第13図 8号住居跡出土遺物及び分布図

遺物出土状況はカマド及びその周辺部分に集中しており、又その残存状態が比較的良好である事から、本住居跡廃絶前の状態か、あるいはその時点で捨てられたものと考えられよう。時期的には高杯が和泉式の形態を残し又埴が存在する事等から本遺跡で検出された鬼高期の中でも最古段階に位置付けるのが妥当であろう。

重複遺構は7号住居跡、17号住居跡で、新旧関係は土層断面観察より7号住→8号住である事が判明したが、17号住との関係は不明である。

時期は出土遺物や住居形態より古墳時代後期と思われる。

9号住居跡（欠番）

10号住居跡（第14図、PL. 2）

I区C-12・13グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、北半部が削平されているため全形及び規模は不明である。南西コーナー部にピットが1基検出された。規模は70×60cm深さ38cmを測る。床面はローム土を利用しているが後世の攪乱が激しく、一面に荒れている。

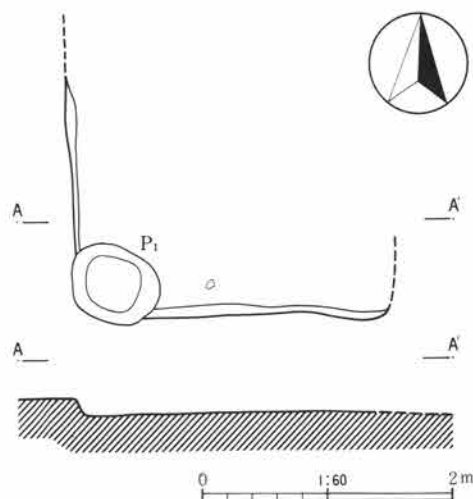
遺物は土錘が2点出土している。時期は不明である。

11号住居跡（第15図、PL. 2）

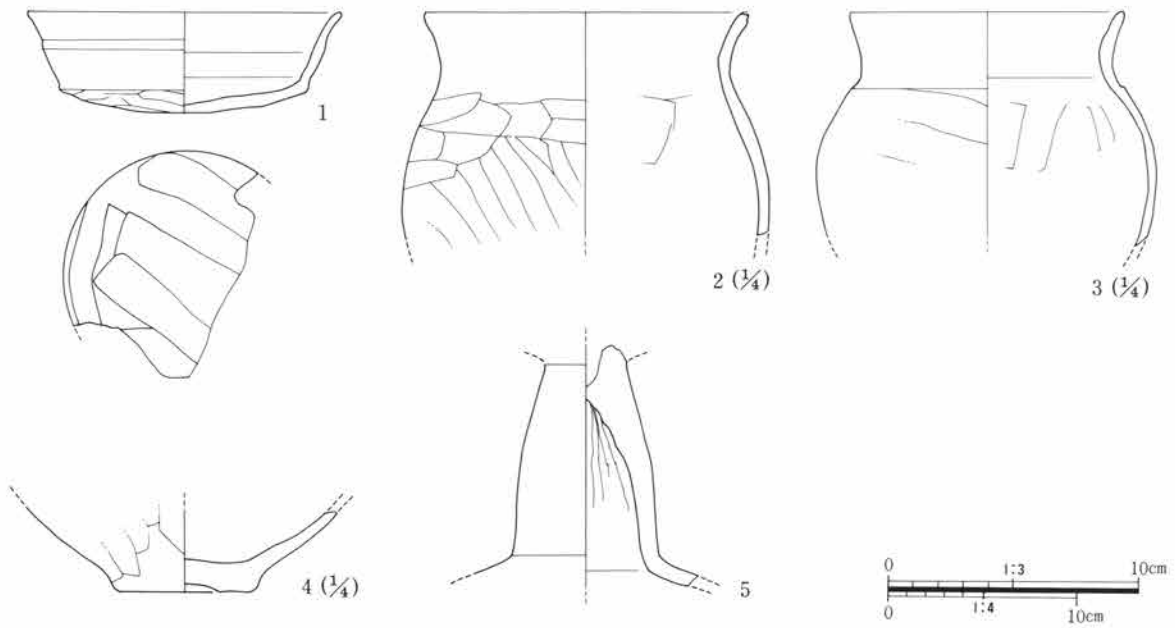
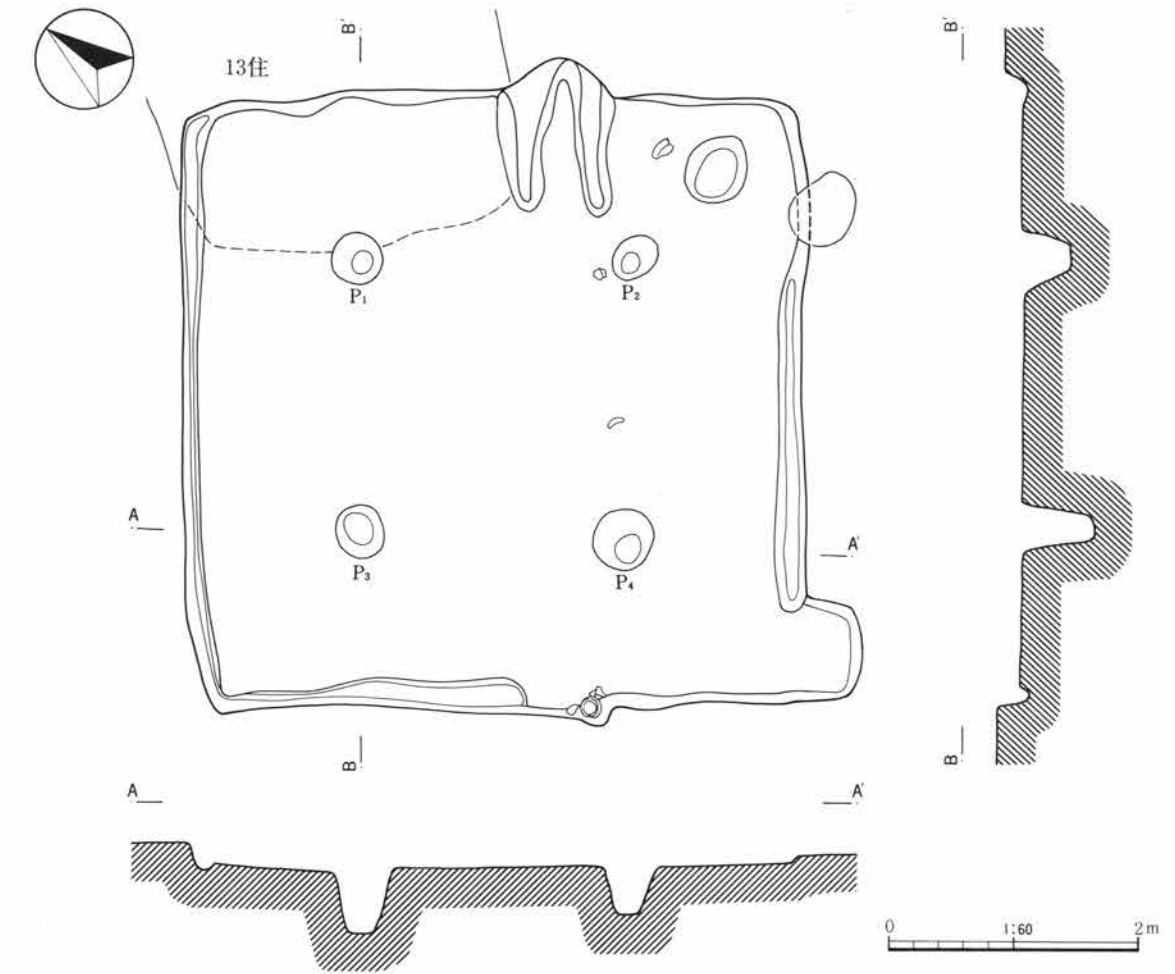
I区D-11・12、E-11・12グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈し、規模は4.88×4.95m、面積は24.16㎡を測る。主軸方向はN-58°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は28～6cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、全体に平坦であるが、中央部はやや高く硬質である。カマドは東壁中央のやや南寄りに構築されており、そで部、燃烧部、煙道部の一部が残存する。規模は長さ1.23m幅0.9mを測る。そで部長さは85cmを測り、壁内に張り出す。燃烧部の平面規模は比較的狭小で、幅30cm前後である。煙道部は急角度で立ち上がるが、壁外にさほど張り出していない状態から煙道開口部（出口）は住居壁に比較的近いものと思われる。カマド軸方向はN-53°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部のカマド右脇から検出された。平面は楕円形を呈し、規模は55×47cm深さ28cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径40cm深さ38cm、P₂径37cm深さ36cm、P₃径42cm深さ59cm、P₄径49cm深さ38cmを測る。以上4基は位置関係や規模から主柱穴と考えられる。柱間距離はP₁-P₂2.13m、P₂-P₄2.25m、P₃-P₄2.14m、P₁-P₃2.10mを測る。又他に南壁東寄り住居内に1基ずつピットが検出されたが、これらは後世攪乱によるものである。周溝は北壁と西壁北半及び南壁中央部に沿って検出され、規模は幅25～11cm深さ8～2cmを測る。又南壁西隅に76×45cmの規模をもつ張り出し部分が検出された。これは床面と同一レベルである事、この部分で周溝が切られる事から本住居跡に伴う施設と考えられる。覆土はブロック状の堆積状態を示し、上層に軽石、炭火物粒、焼土粒を含む黒褐色砂質土、下層にロームブロックを多量に含む黒褐色土が堆積する。

遺物は小形甕が西壁際、その他甕、杯、高杯、須恵器長頸壺の破片及び土錘が床面と覆土下層より出土している。

重複遺構は13号住居跡で、新旧関係は11号住→13号住である。



第14図 10号住居跡

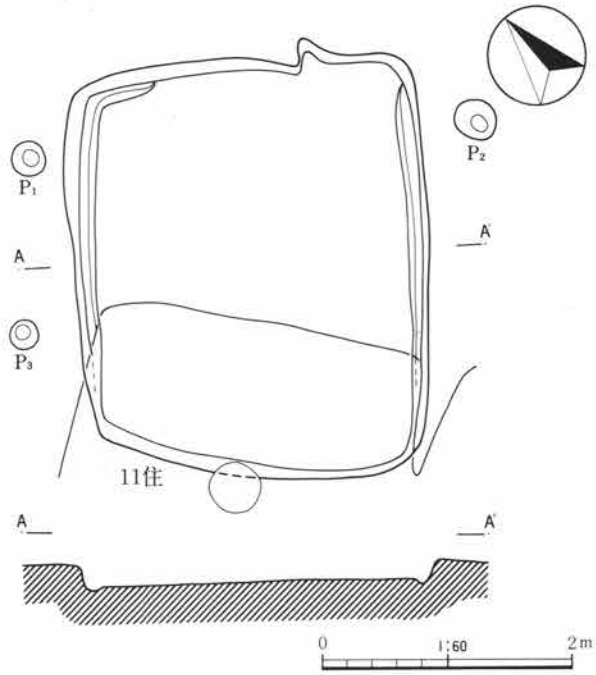


第15図 11号住居跡及び出土遺物

12号住居跡 (欠番)

13号住居跡 (第16図、PL. 2)

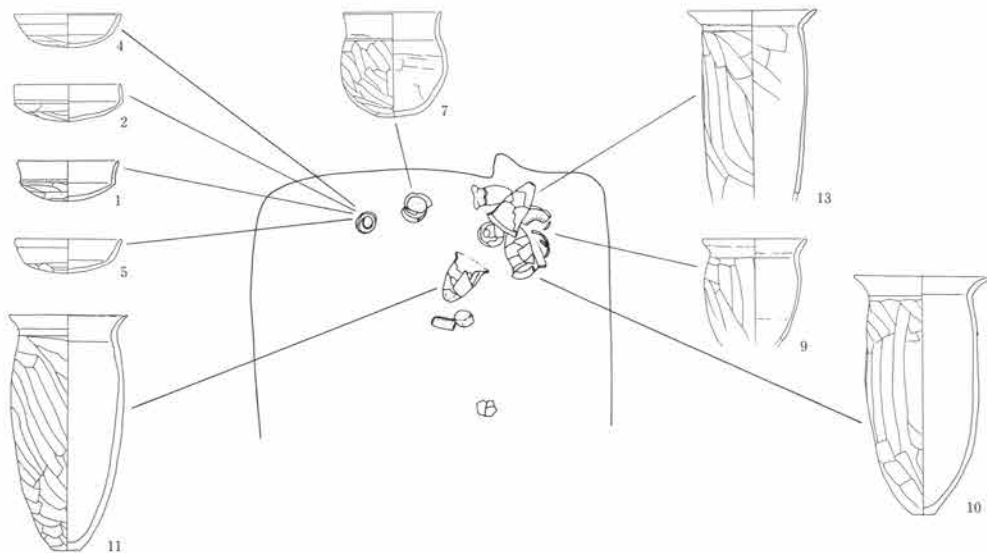
I区E-12グリッドに位置する。平面はやや縦長長方形で、規模は3.30×2.90m、面積8.84㎡を測る。主軸方向N-40°-Eを指す。壁は直立し確認壁高27~14cmを測る。床面はローム土で平坦である。カマドは北壁東寄に構築される。長さ90cm前後を測る。その部が壁内に張り出し、煙道部は壁を若干削って立ち上がる。両その部に甕を倒立させている。又カマド燃焼部に3個体の甕が潰れた状態で出土しており、これらはカマドに懸けてあったものか天井部構造材として用いられたものと思われる。ピットは住居外で3基検出されており、規模はP₁径22cm深さ17cm、P₂径35cm深さ28cm、P₃径23cm深さ39cmを測る。これらが柱穴かどうかは不明であるが、その位置関係より本住居跡に伴う可能性が強い。周溝は東西両壁に沿って検出され、規模は27~12cm深さ6~3cmを測る。



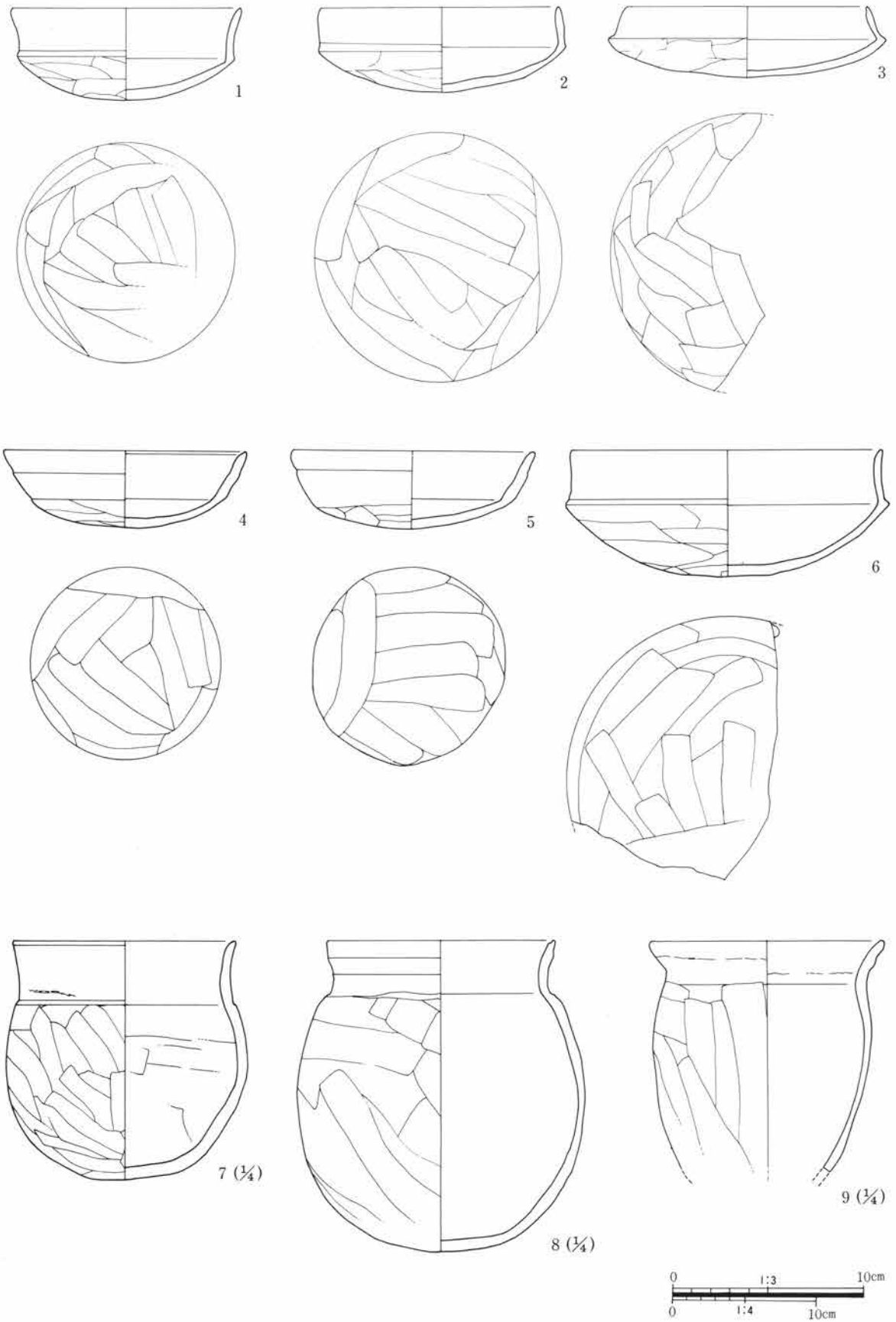
第16図 13号住居跡

遺物は甕、杯がほとんどで、他に円礫2点がカマド前面の床より出土している。完形品が比較的多く、いずれもカマド及びその周辺より置き去られたと思われる状態で出土している。特に杯は北壁際西寄り部分で6個体が重ねられた所謂「入れ子」の状態を検出された。なおこの6個体のうち2個体は調査後所在不明となっている。床面直上出土の土器はすべて鬼高期のものである。

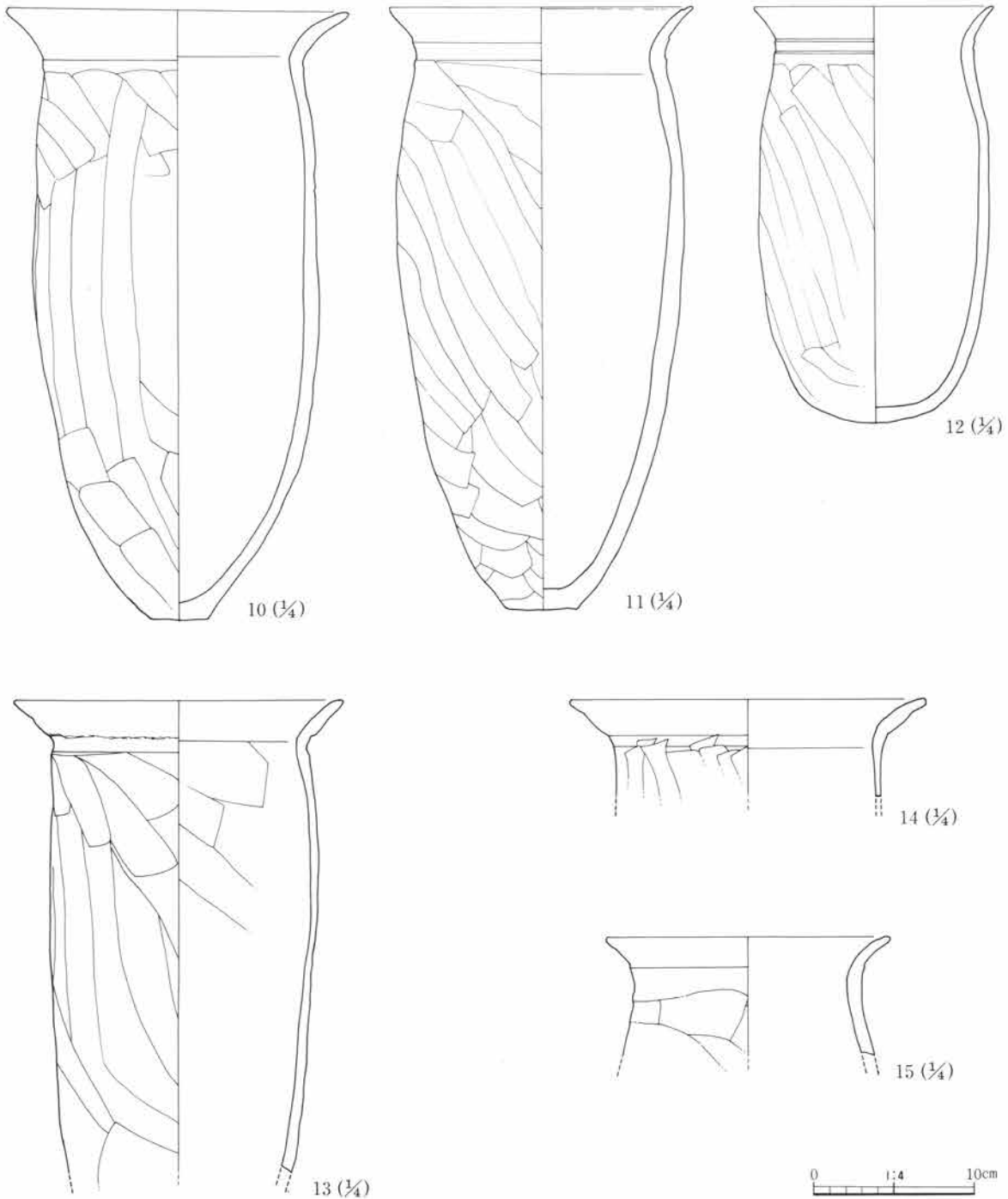
重複遺構は11号住居跡、14号住居跡、15号住居跡で、判明した新旧関係は11号住→13号住である。



第17図 13号住居跡遺物分布図



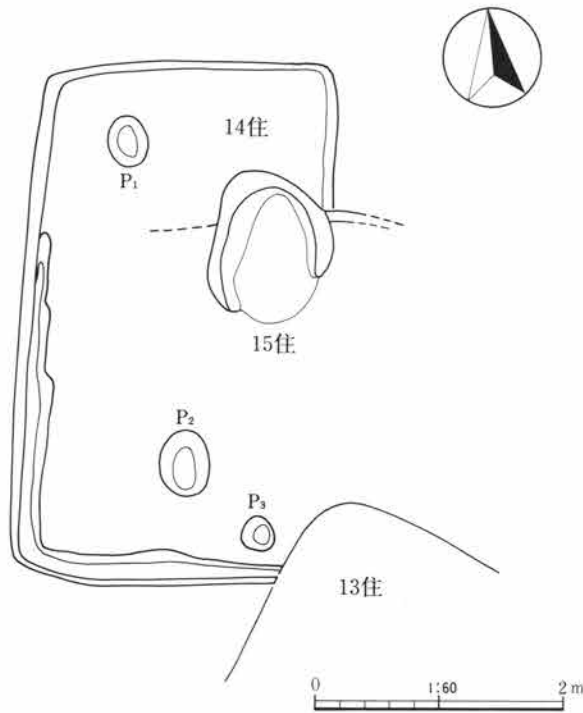
第18図 13号住居跡出土遺物(1)



第19図 13号住居跡出土遺物(2)

14号住居跡 (第20図、PL. 2)

I区E-12・13、F-13グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、東半については残存せず不明。規模は4.15×(2.20以上)mを測る。西壁の方向はN-6°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は14~2cmを測る。床面は地山のローム土で、中央部がやや高い。カマドは検出できなかった。ピットは3基検出されその規模はP₁径40.3cm深さ11.5cm、P₂径40.5cm深さ23cm、P₃径29.0cm深さ16.0cmを測る。P₁とP₂は位置から柱穴の可能性も考えられるが、4本の主柱を想定した場合、これに対応する他の2本の柱穴が検出さ



第20図 14・15号住居跡

れておらず、断定できない。周溝は西壁、南壁に沿って検出された。

遺物は甕、高杯、須恵器杯等の小破片が覆土中より出土している。平安時代の土器片も出土しているが量的には古墳時代後期のものが主体を占める。

重複遺構は13号住居跡、15号住居跡で、新旧関係はカマドの存在から14号住→15号住で、13号住は不明である。

15号住居跡（第20図）

I区E-13グリッドに位置する。平面形及び規模は不明で、カマドのみ残存する。カマドはおそらく北壁に構築され、そで部が壁内に大きく張り出す。規模は長さ1.10m、幅1.00mを測る。

本住居跡に伴う出土遺物は不明である。

重複遺構は14号住居跡、13号住居跡で、新旧関係は14号住→15号住である。

16号住居跡（欠番）

17号住居跡（第21図、PL.2）

I区C-14、D-14グリッドに位置する。平面は長方形と思われるが、東半を他遺構及び攪乱によって切られており、全形及び規模については不明である。残存する西壁も状態は不良である。確認壁高の最大値は17.0cmである。床面は凹凸が激しく、当時の面はほとんど残存していない可能性もある。カマド、ピット等の住居施設は検出されなかった。

遺物は杯が2個体分覆土から出土しているが、18号住居跡に伴う可能性もある。

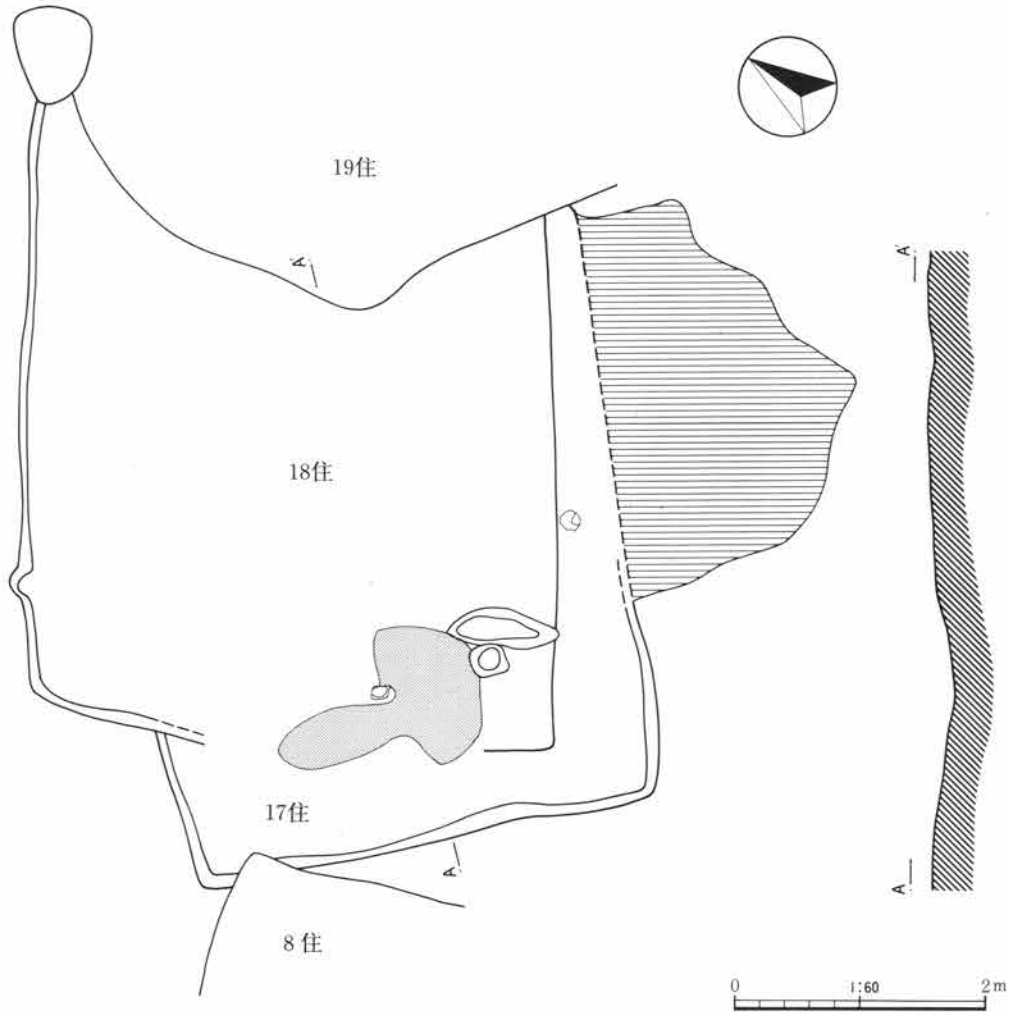
重複遺構は8号住居跡、18号住居跡で、判明した新旧関係はカマドの存在より17号住→18号住である。

18号住居跡（第21図、PL.2）

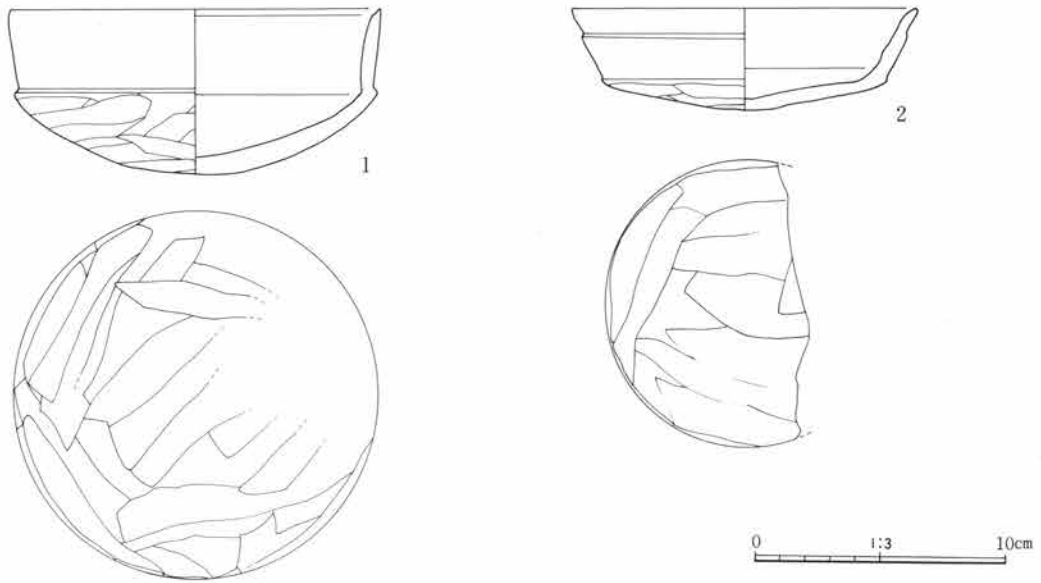
I区C-14・15、D-14・15グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は4.30×(4.75以上)m、面積(21.12以上)m²を測る。東端部は不明。主軸方向はS-55°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は17.5~5cmを測る。床面は凹凸が激しい。カマドは南東壁の西端に構築される。左そで部のみ残存し、燃焼部から南西壁際にかけて焼土が検出されている。又燃焼部に浅い落ち込みが認められるが、これは灰掻きの窪みと思われる。他の住居内施設は検出されなかった。

遺物は時期不明の土師器小片が数点出土したのみである。

重複遺構は17号住居跡、19号住居跡で、新旧関係は17号住→18号住で、19号住との関係は土層や床面の有無では確認できず不明である。



第21図 17・18号住居跡

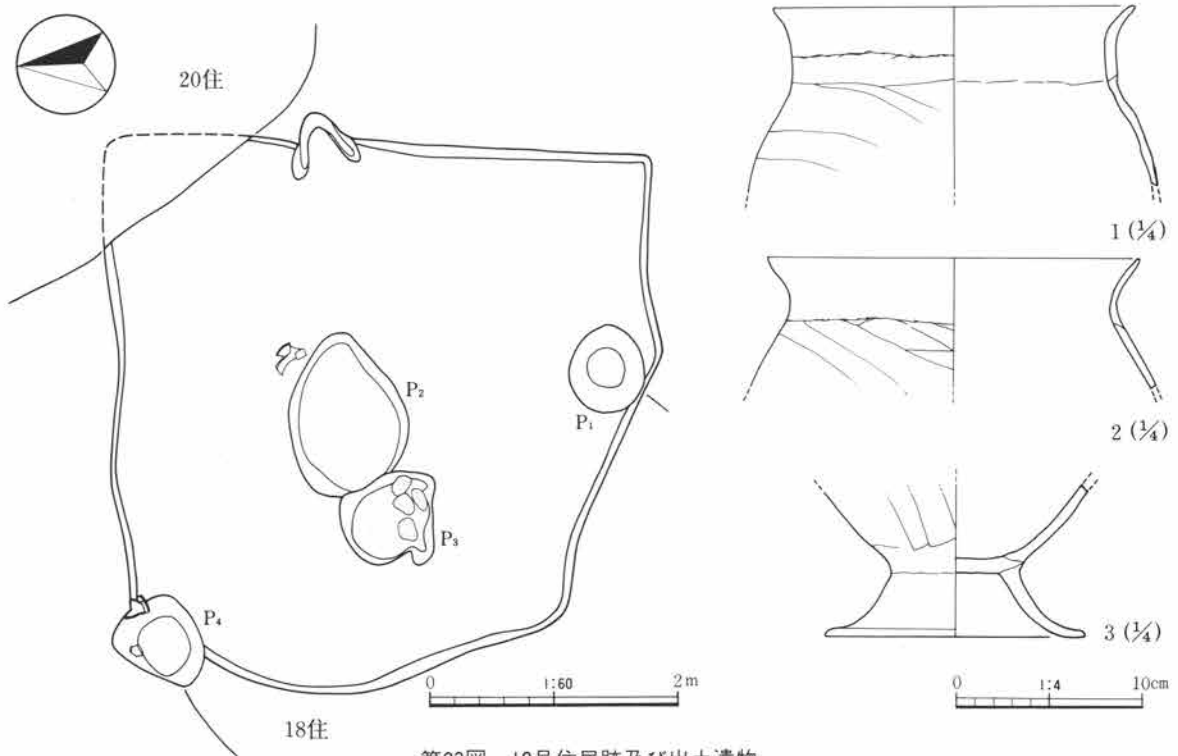


第22図 17号住居跡出土遺物

19号住居跡（第23図、PL. 2）

I区D-14・15、E-14・15グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南西部分は18号住居跡との重複により不明瞭となっている。規模は推定で(4.30) × (4.37) mと思われる。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は南東部が最も残存状態良好で、この部分の確認壁高は24cmを測る。床面は中央がやや高く凹凸が激しい。カマドは東壁中央の北寄りに構築される。そで部は壁内に張り出し、煙道部は比較的ゆるやかな角度で立ち上がる。規模は長さ53cm、幅55cmを測る。カマド軸方向はN-78°-Eを指す。ピットは4基検出された。規模はP₁径70×60cm深さ42cm、P₂径120×100cm深さ11cm、P₃径83×78cm深さ18cm、P₄径75×60.5cm深さ24cmを測る。P₃には円礫が4ヶ出土している。規模や位置から柱穴とは考えられない。

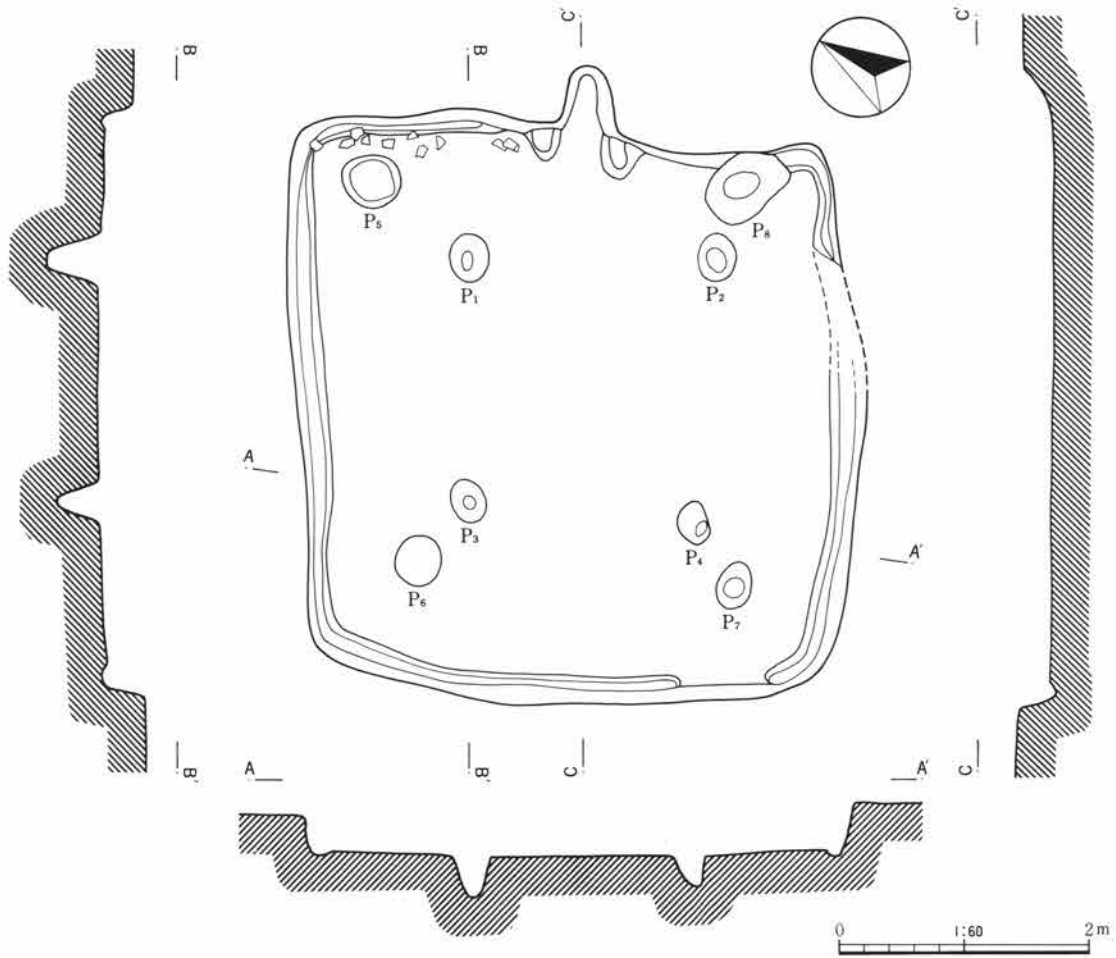
遺物は甕、台付甕、高杯、杯の破片が出土しており、平安時代の土器を主体とするが、古墳時代後期～奈良時代の土器片も多量に混在する。



第23図 19号住居跡及び出土遺物

20号住居跡（第24図、PL. 2）

I区E-14・15、F-14・15グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は4.65×4.55mで、面積は19.77m²を測る。主軸方向はN-55°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は47~21cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、ほぼ平坦面を呈する。カマドは東壁中央に構築され、そで部、燃焼部、煙道部が残存する。長さ90cm幅90cmを測る。軸方向はN-68°-Eを指す。そで部は20cm前後壁内に張り出し、燃焼部は壁外にまで若干張り出す。煙道部は比較的急角度で立ち上がる。ピットは8基検出された。規模はP₁径47.3cm深さ43cm、P₂径37.3cm深さ22cm、P₃径43.3cm深さ33cm、P₄径30.3cm深さ23cm、P₅径67×46cm深さ49cm、P₆径40cm深さ14cm、P₇径35.3cm深さ13cm、P₈径37.3cm深さ37cmを測る。位置的にP₁~P₄は支柱穴と思われるが、各柱間距離は以下の通りである。P₁-P₂2.00m、P₃-P₄1.80m、P₂-P₄2.15m、P₁-P₃1.95mを測る。P₅とP₈は位置、形態、規模から貯蔵穴となる可能性も考えられる。又P₆、P₇の配置は柱穴とも考えられるが、深さが浅くP₁

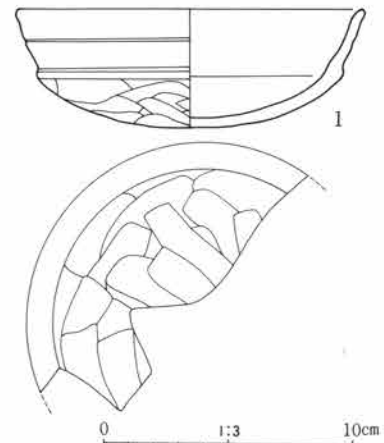


第24図 20号住居跡

~P₄とは性格が異なるものと思われる。周溝は西壁南端部を除いて全周する。幅30~15cm深さ4~1cmを測る。周溝の切れる部分は幅70cmで入口施設が存在した可能性もある。

遺物は杯、甕、壺等が出土し、カマド周辺の床面上に集中する。又南半~西半の覆土中から平安時代の土器片が多く出土しているが、重複する19号住居跡に伴うものが流れ込んだ可能性が高い。なお床面上より出土のものは鬼高期を主体としている。

重複遺構は19号住居跡、23号住居跡、12号土壌で、新旧関係の判明したのは23号住→20号住である。



第25図 20号住居跡出土遺物

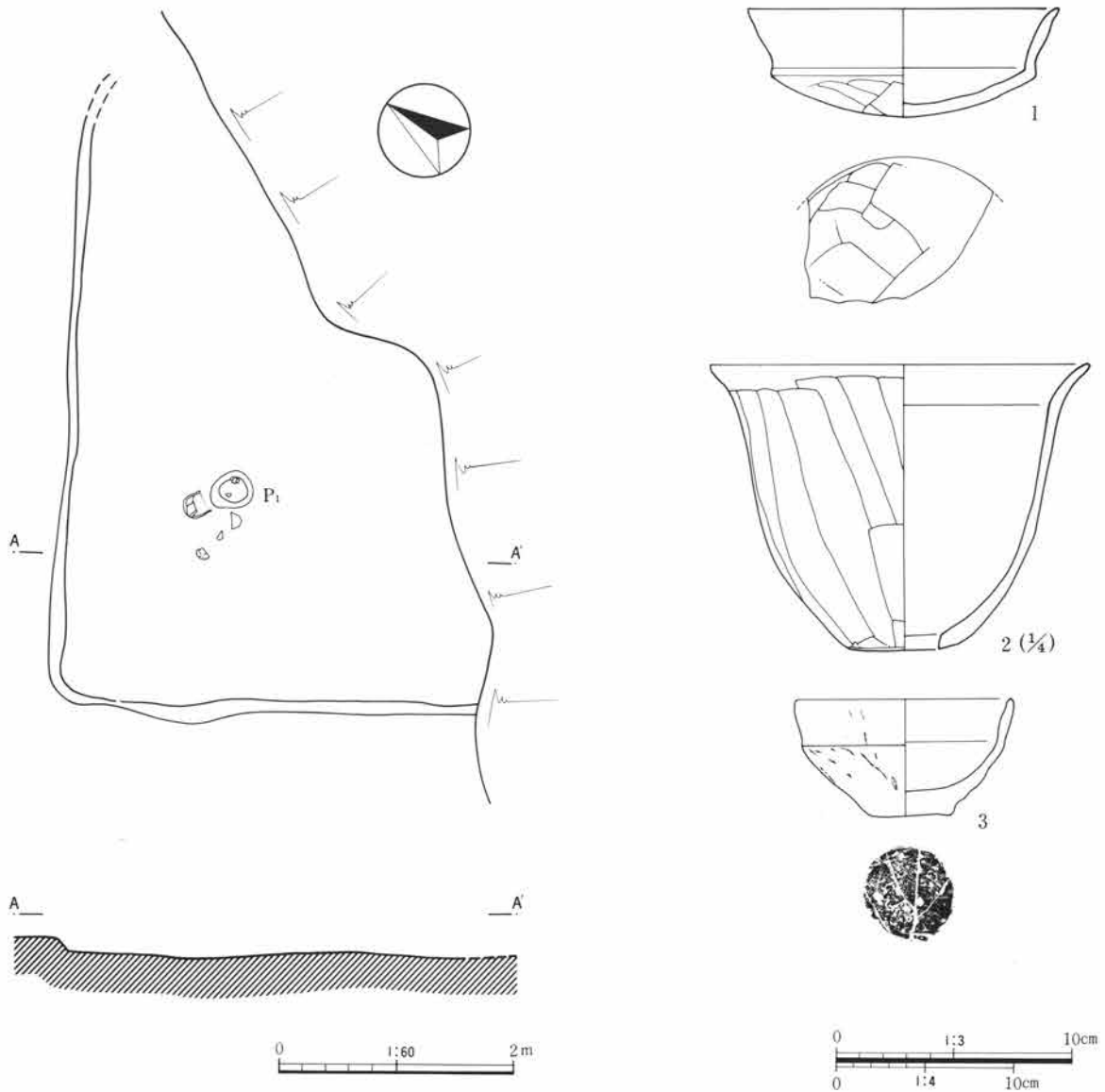
21号住居跡 (第26図、PL. 2)

I区C-8・9、D-8・9グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南東半を崖で切られており全形は不明である。規模は北西壁の長さ4.90mを測る。又北西壁の方向はN-35°-Eを指す。西側コーナー部より2m程離れてピットが1基検出された。規模は径35cm深さ18cmを測る。位置的には支柱穴のうちの1本と考えられよう。

第V章 検出された遺構と遺物

遺物は杯、小形杯、甗が出土しており、他に覆土中より甗片が若干出土している。時期は鬼高期のものを主体としている。

重複遺構はない。



第26図 21号住居跡及び出土遺物

22号住居跡（第27図、PL. 2）

I区F-12グリッドに位置する。形態は長方形と思われるが、南半部は攪乱が激しく、残存状態は不良。規模は推定値で(2.35) × (3.75) mを測る。主軸方向はN - (50°) - Eを指す。壁はわずかに残存するのみで、確認壁高は5 cm前後を測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が激しいが全体の床状況については不明である。カマドは明確ではないが、東壁の南寄りに張り出し部分が認められる事から、これがカマド掘り形になる可能性がある。

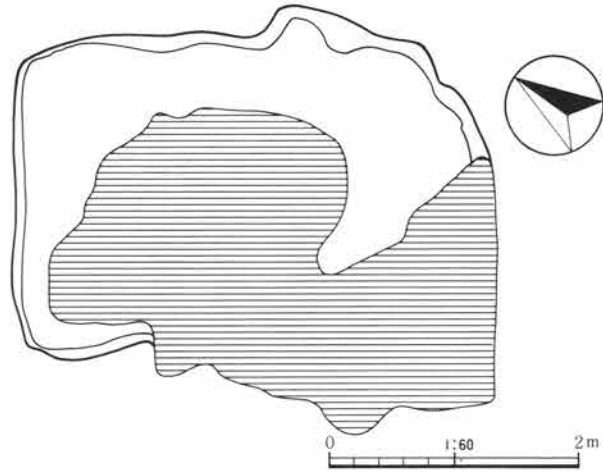
遺物は比較的少なく、鬼高期の杯と平安時代の高台付椀の破片が出土している。

重複遺構はなく、南半大部分を後世の攪乱で削られている。

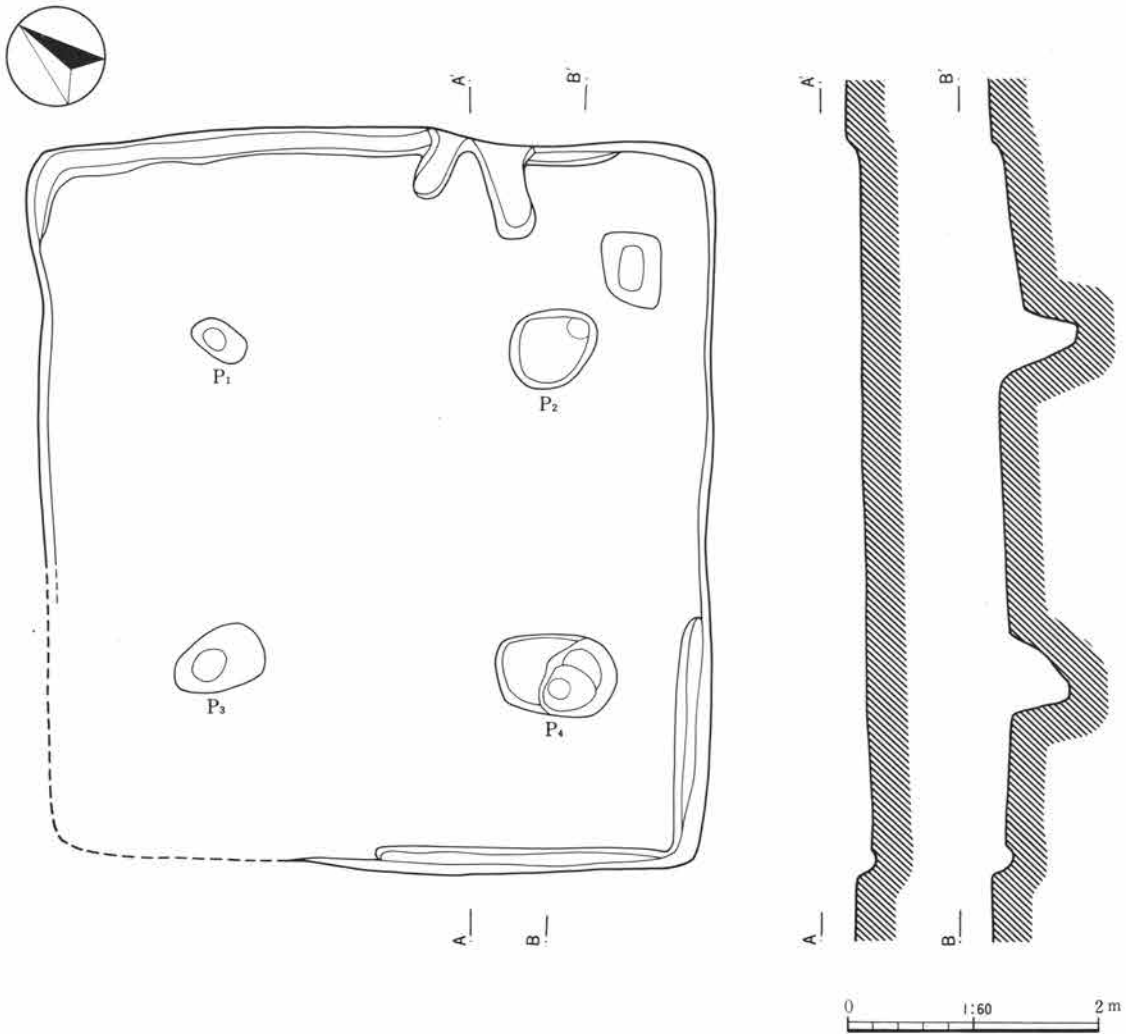
23号住居跡 (第28図、PL. 3)

I区F-13・14、G-13・14グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は5.85×5.35m、面積は31.16㎡を測る。主軸方向N-48°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高15~2cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、カマド前面部がやや高くなっている。カマドは東壁の南寄りに構築されており、燃焼部のみ残存する。長さ80cm幅90cmを測る。上半をほとんど削平されているため、全体の形状はつかみ得ない。貯蔵穴は東側コーナー部で検出された。歪んだ長方形を呈し、規模

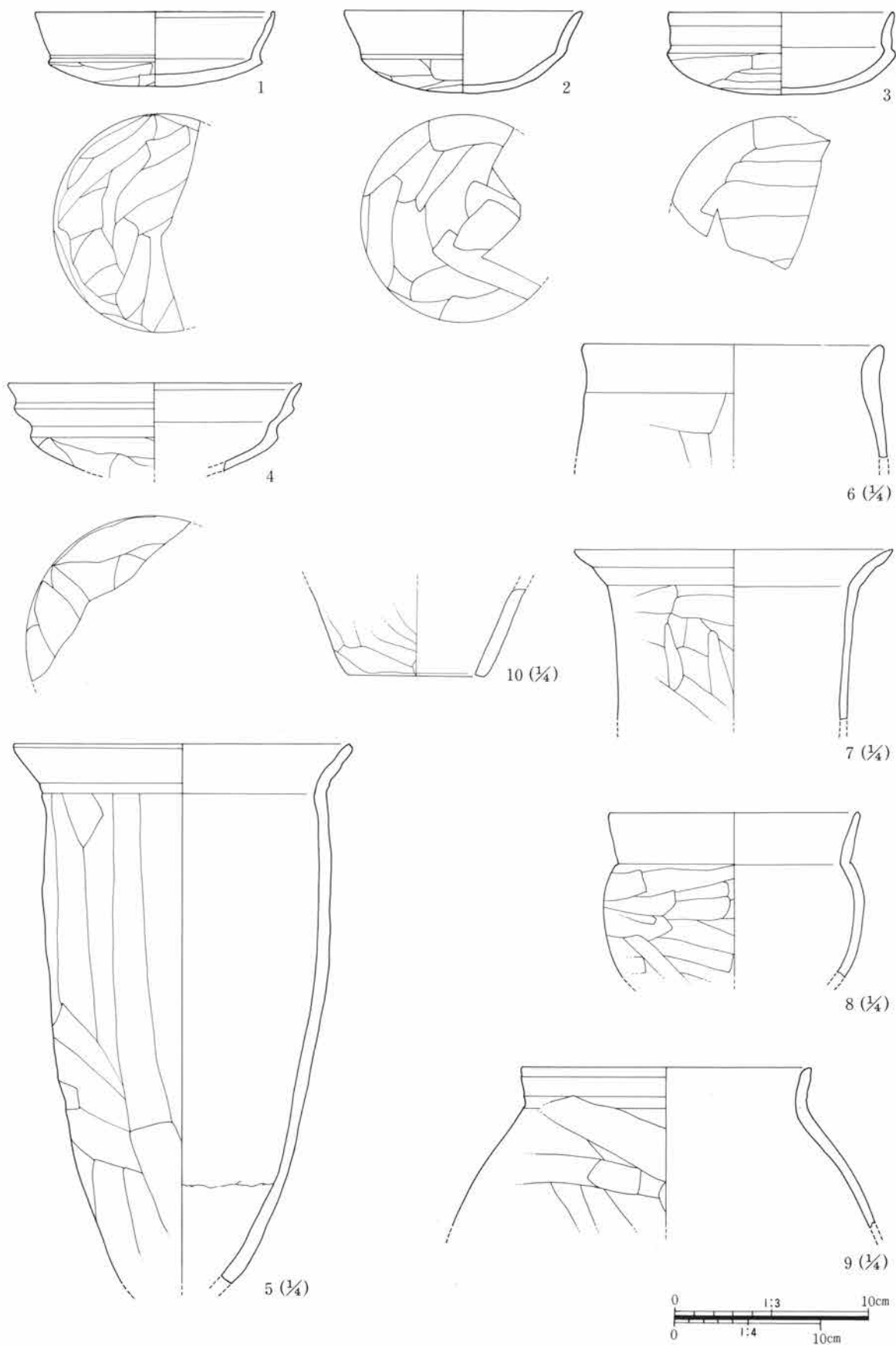
は57×46cm深さ47cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径46×26cm深さ39cm、P₂径67cm深さ62cm、P₃径75×45cm深さ57cm、P₄径95cm深さ48cmで、これらはいずれも支柱穴と思われる。又P₂の掘り形から甕が



第27図 22号住居跡



第28図 23号住居跡



第29図 23号住居跡出土遺物

横転して出土している。柱間距離は P_1-P_2 2.90m、 P_3-P_4 2.80m、 P_1-P_3 2.60m、 P_2-P_4 2.85mを測る。周溝は東壁と南側コーナー部に沿って廻っており、規模は幅28~17cm深さ5~1cmを測る。

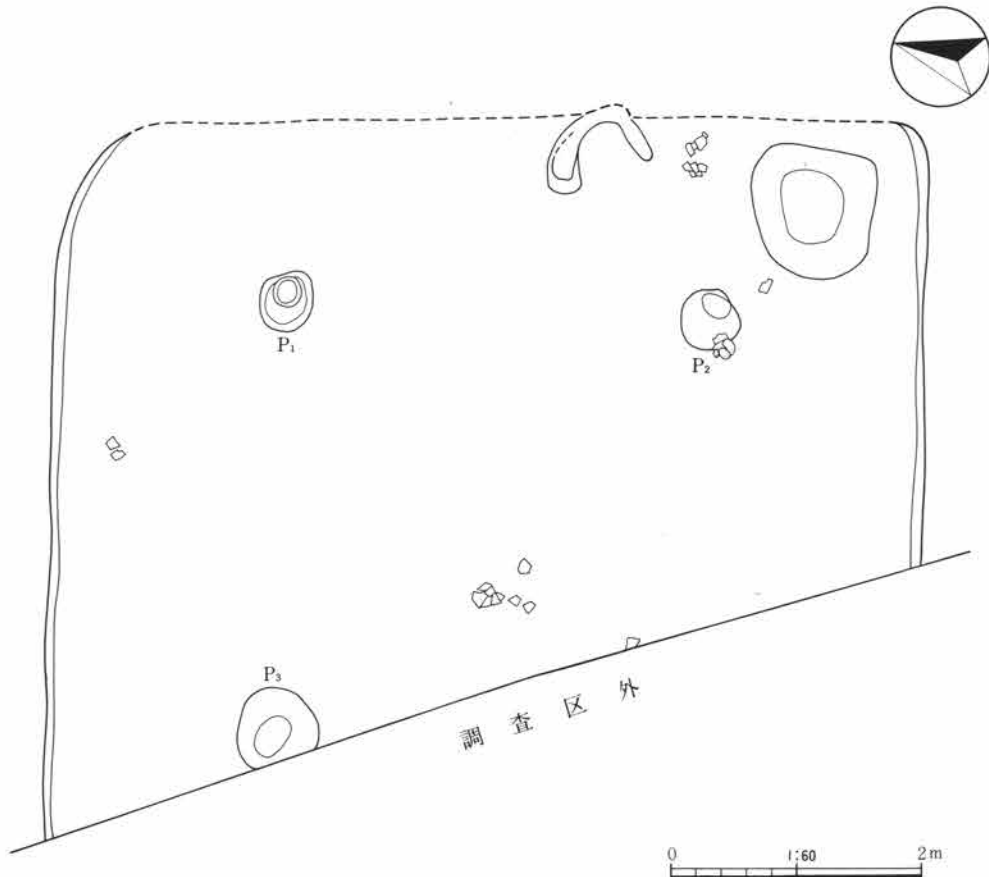
遺物は甕、甑、杯が出土しており、前述の柱穴出土の甕を除いて他は覆土下層から出土している。時期は平安時代のもも混入するが、鬼高期のものを主体としている。

24号住居跡（第30図、PL.3）

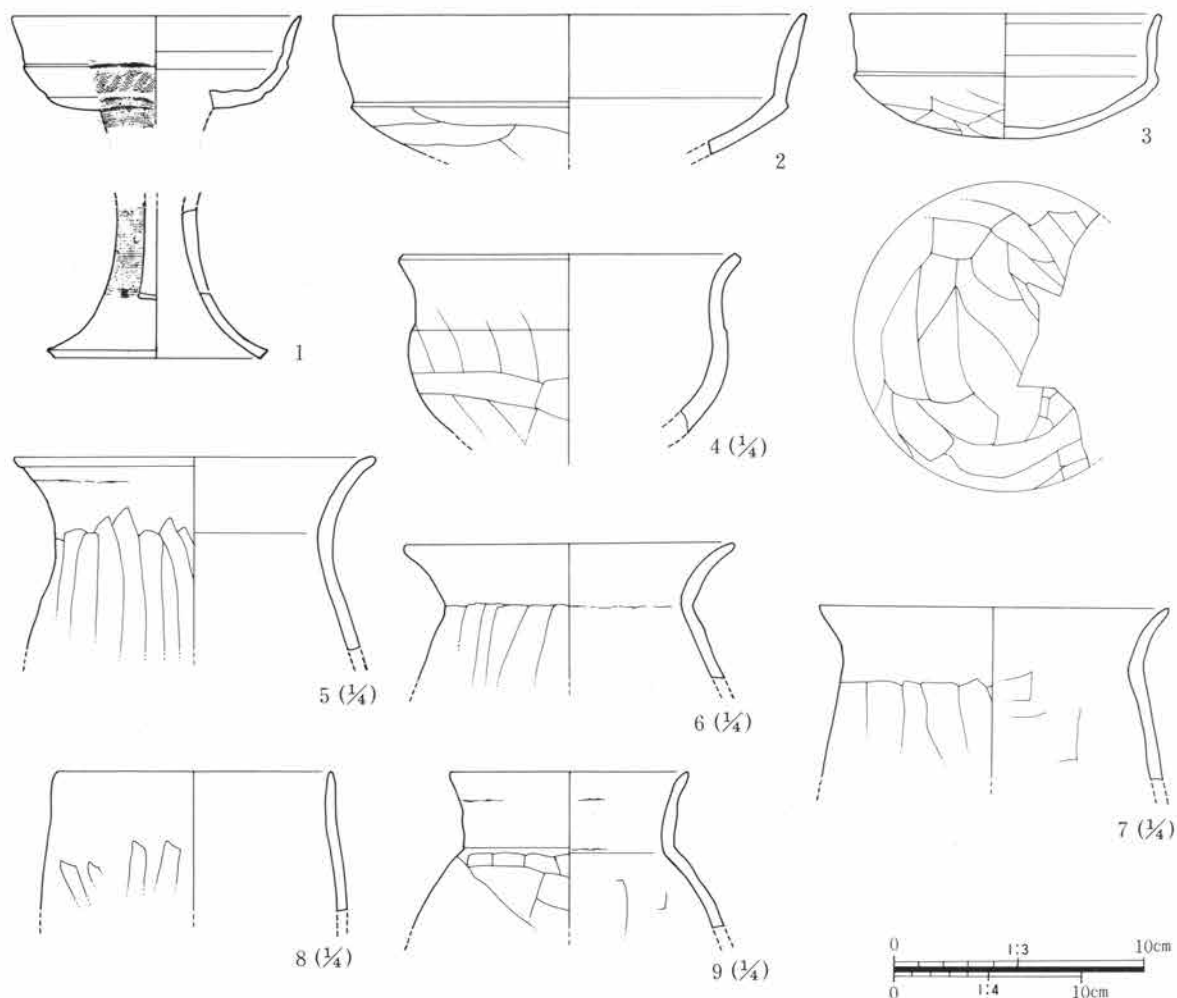
I区A-16・17、B-16・17グリッドに位置する。東壁は不明瞭で、西壁は調査区外のため不明。正方形を呈すると思われ、規模は(5.90以上)×6.96mを測る。主軸方向はN-(70°)-Eを指す。南北の両壁が若干残存しており、確認壁高は35~8cmを測る。床面はローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、そでの一部と燃焼部が残存する。そでは灰色粘土を用いて構築され、わずかに左そで部が壁内に張り出す。燃焼部底面は浅い窪みを呈するが、これは灰掻きによるものであろう。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。不整楕円形を呈し、規模は1.04×1.00m深さ62cmを測る。ピットは3基検出され、規模は P_1 径33cm深さ45cm、 P_2 径45cm深さ57cm、 P_3 径65cm深さ19.5cmを測る。位置関係から支柱穴と思われる。柱間距離は P_1-P_2 1.73m、 P_1-P_3 1.75mを測る。覆土は黒色土がブロック状に堆積する。

遺物は床面のカマド右脇、中央付近から出土し、又覆土より多量の土器片が出土する。器種は甕、杯、鉢、壺、須恵器無蓋高杯、砥石が出土している。時期は鬼高期のものが大部分を占める。

重複遺構は検出された部分においては認められない。



第30図 24号住居跡



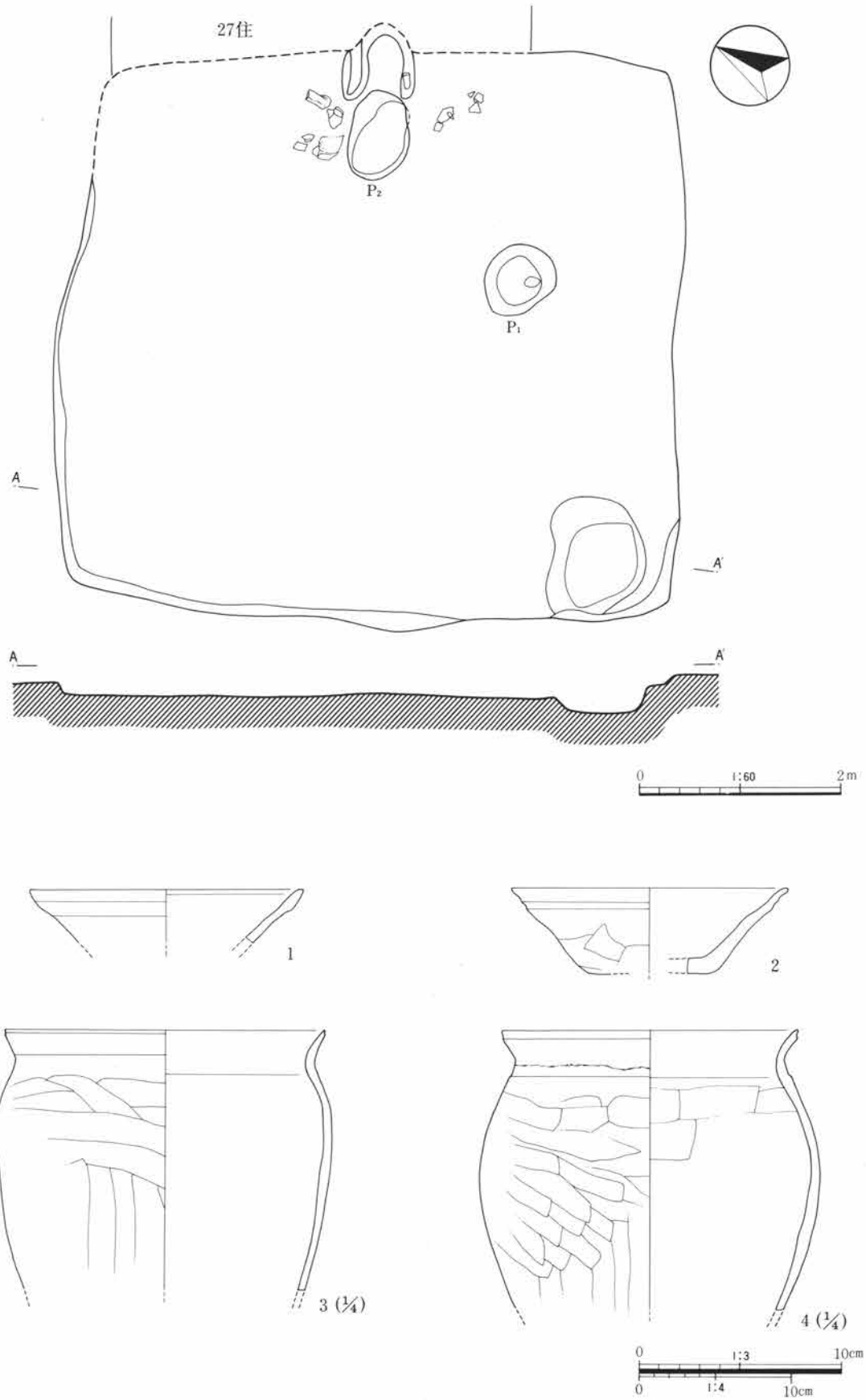
第31図 24号住居跡出土遺物

25号住居跡 (第32図、PL. 3)

I区15・16、C-15・16グリッドに位置する。東壁は不明瞭。横長長方形を呈し、規模は5.55×6.15mを測る。面積は推定値で(33.44)㎡を測る。主軸方向はN-60°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は、17~6cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、ほぼ平坦である。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、そで部が残存する。幅は73cmを測る。貯蔵穴は南西コーナー部から検出された。規模は1.15×0.90m深さ25cmを測る。ピットはカマド前方部と南半中央部に検出された。規模はP₁径70cm深さ29cm、P₂径90×60cm深さ40cmを測る。なおP₁から円礫が1ヶ出土している。P₂はカマドとの関係でその性格が理解されると思うが、具体的な性格を推定させるような痕跡、遺物などは検出されなかった。覆土は粘土、ローム土粒を多量に含む黒褐色土がブロック状の堆積を示す。

遺物はカマド周辺に集中しており、甕、杯が出土する。覆土からの出土遺物は鬼高期の土器片が約8割を占めるがカマド内及び床面上からは平安時代のものを主体としている。

重複遺構は27号住居跡で、覆土の切り合い関係やカマドの残存状況から新旧関係は27号住→25号住と考えられる。なお本住居跡の時期についてはカマドの構造や貯蔵穴の位置から鬼高期のものに近似するが遺物の出土状況を重視し、平安時代として考えておきたい。



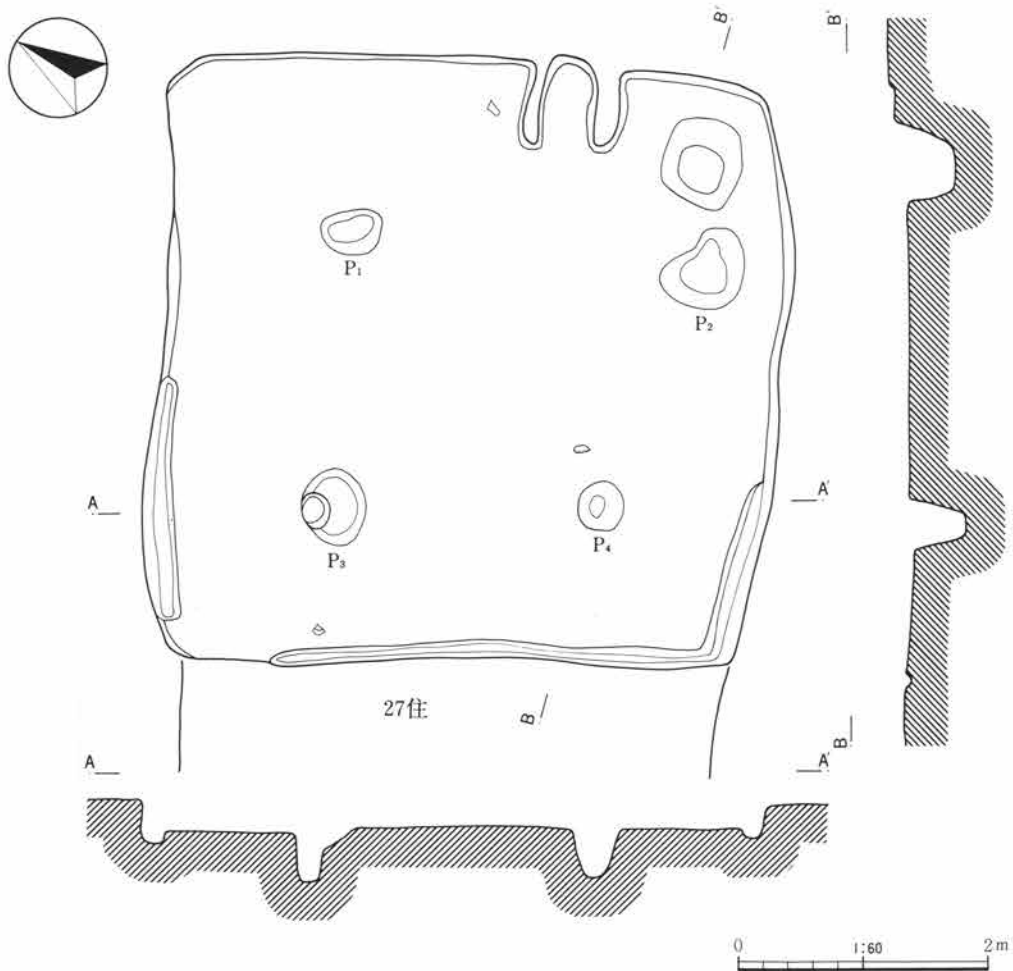
第32図 25号住居跡及び出土遺物

26号住居跡（第33図、PL.3）

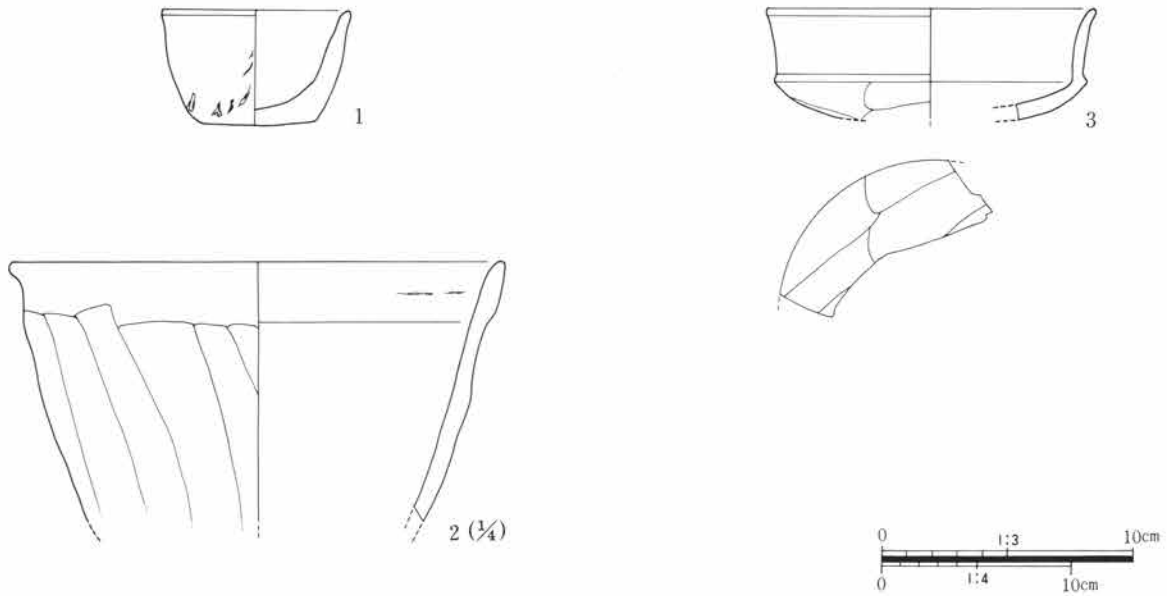
I区D-16、E-16グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈し、規模は4.80×5.00m、面積は23.17㎡を測る。主軸方向はN-60°-Eを指す。壁はわずかに外傾し、確認壁高は27~9cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、カマド前方部がやや高く他はほぼ平坦である。カマドは東壁の中央より南寄りに構築されその部、燃焼部が残存し、煙道部は不明である。規模は長さ70cm幅85cmを測り、軸方向はN-64°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部で検出され、隅丸方形を呈する。規模は70×65cm深さ47cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径47.4cm深さ19cm、P₂径70.6cm深さ35cm、P₃径62.5cm深さ43cm、P₄径47cm深さ21cmを測る。なおP₃は階段状に掘り込まれている。これが掘り形か柱抜き穴かは不明である。以上の4基はP₂がやや歪んでおり、配置がずれるが、主柱穴と考えて良いだろう。柱間距離はP₁-P₂2.90m、P₃-P₄2.30m、P₁-P₃2.25m、P₂-P₄2.10mを測る。周溝は南西壁に沿って廻っており、規模は幅26~12cm、深さ10~6cmを測る。覆土は灰、ローム粒子を含む黒褐色土が主体で、レンズ状の堆積状況を示している。

遺物は杯、小形鉢、鉢、甕が覆土より出土している。床面からも小破片が出土しており、鬼高期のものを主体とする。

重複遺構は27号住居跡で、土層観察より新旧関係は27号住→26号住である。



第33図 26号住居跡



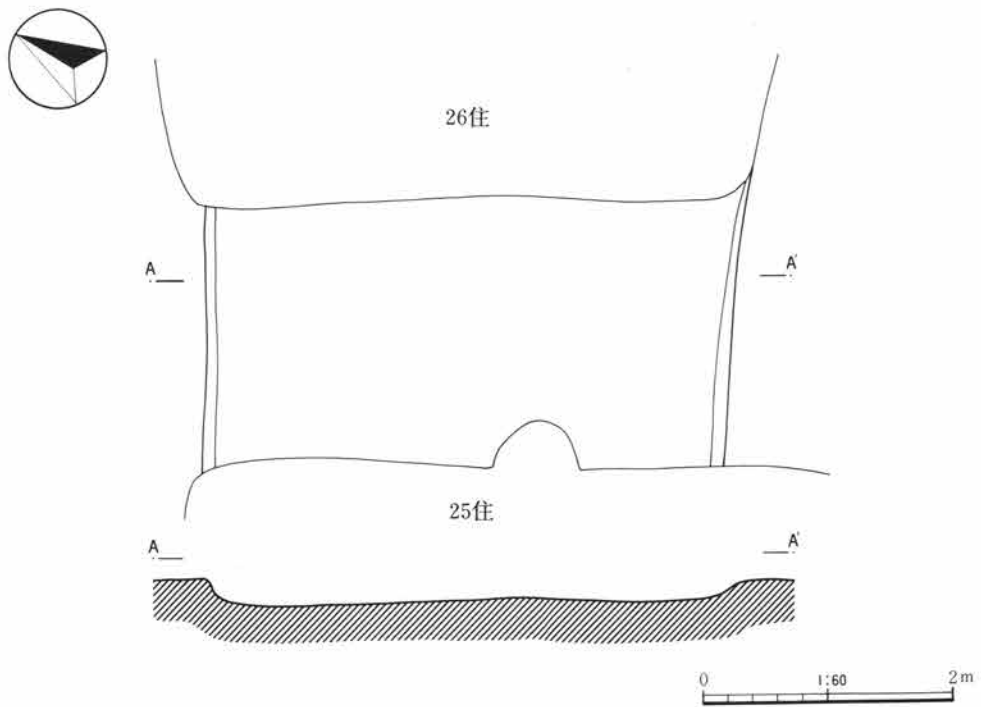
第34図 26号住居跡出土遺物

27号住居跡（第35図）

I区C-16、D-16グリッドに位置する。東壁及び西壁部分をそれぞれ重複住居跡に切られるため、平面形、規模は不明。壁は垂直で確認壁高は19~5cmを測る。床面はほぼ平坦である。カマド、ピット等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕が若干出土しており、鬼高期のものを主体としている。

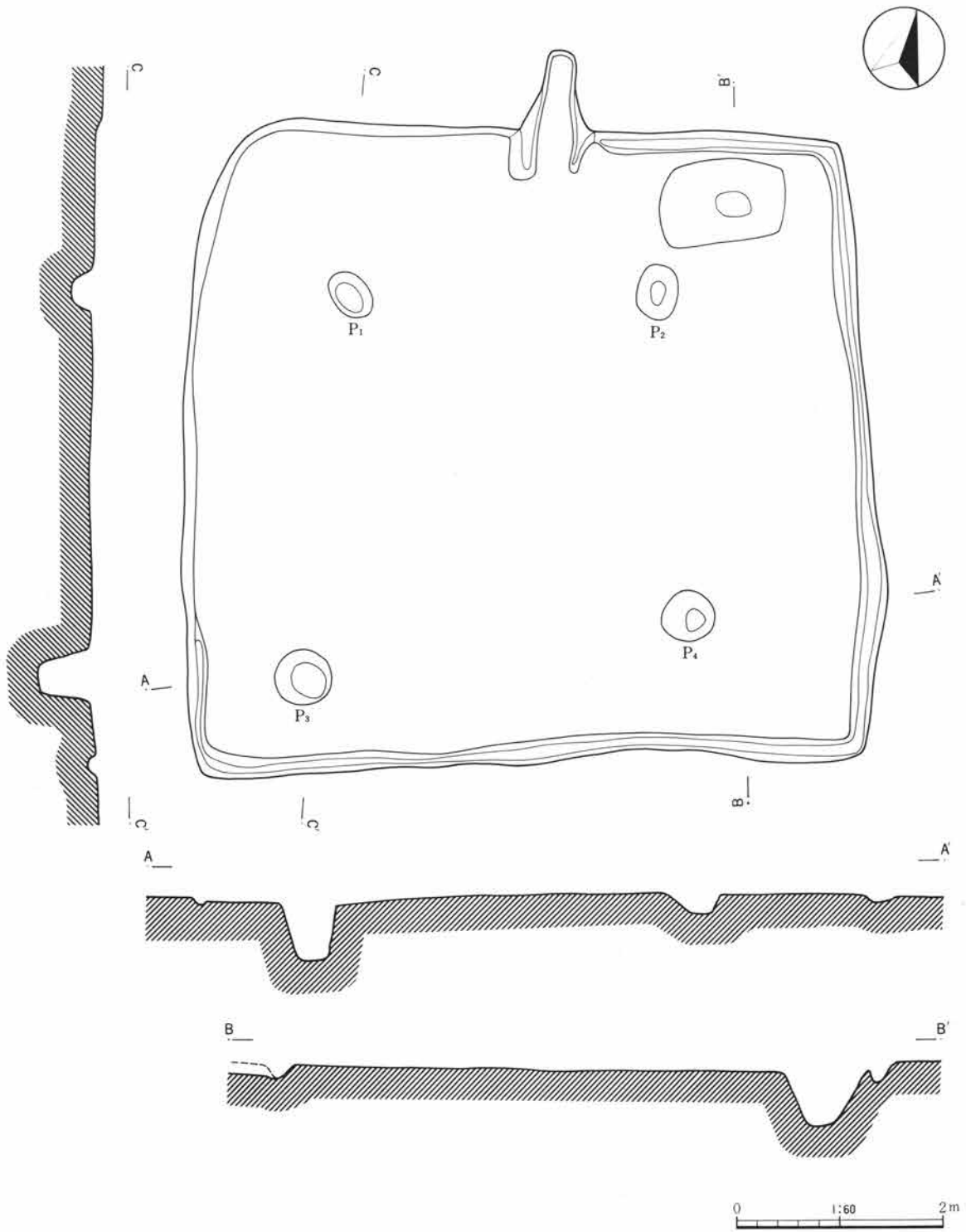
重複遺構は25号住居跡、26号住居跡で、新旧関係は27号住→25号住・26号住である。



第35図 27号住居跡

28号住居跡（第36図、PL.3）

I区F-16・17、G-16・17グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は6.26×6.80m、面積は40㎡を測る。主軸方向はN-20°-Wを指す。壁は垂直で確認壁高は14～3cmを測る。床面は比較的凹凸が多い。

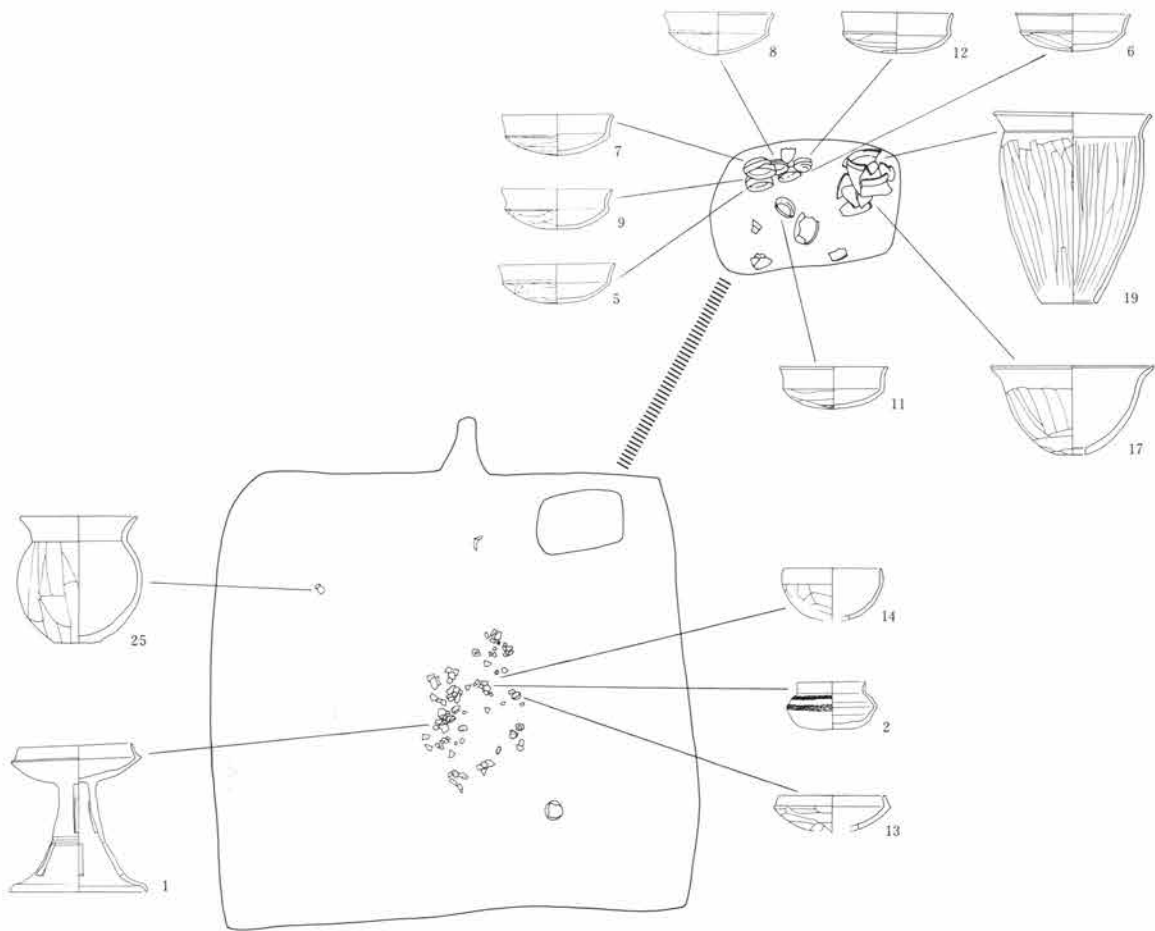


第36図 28号住居跡

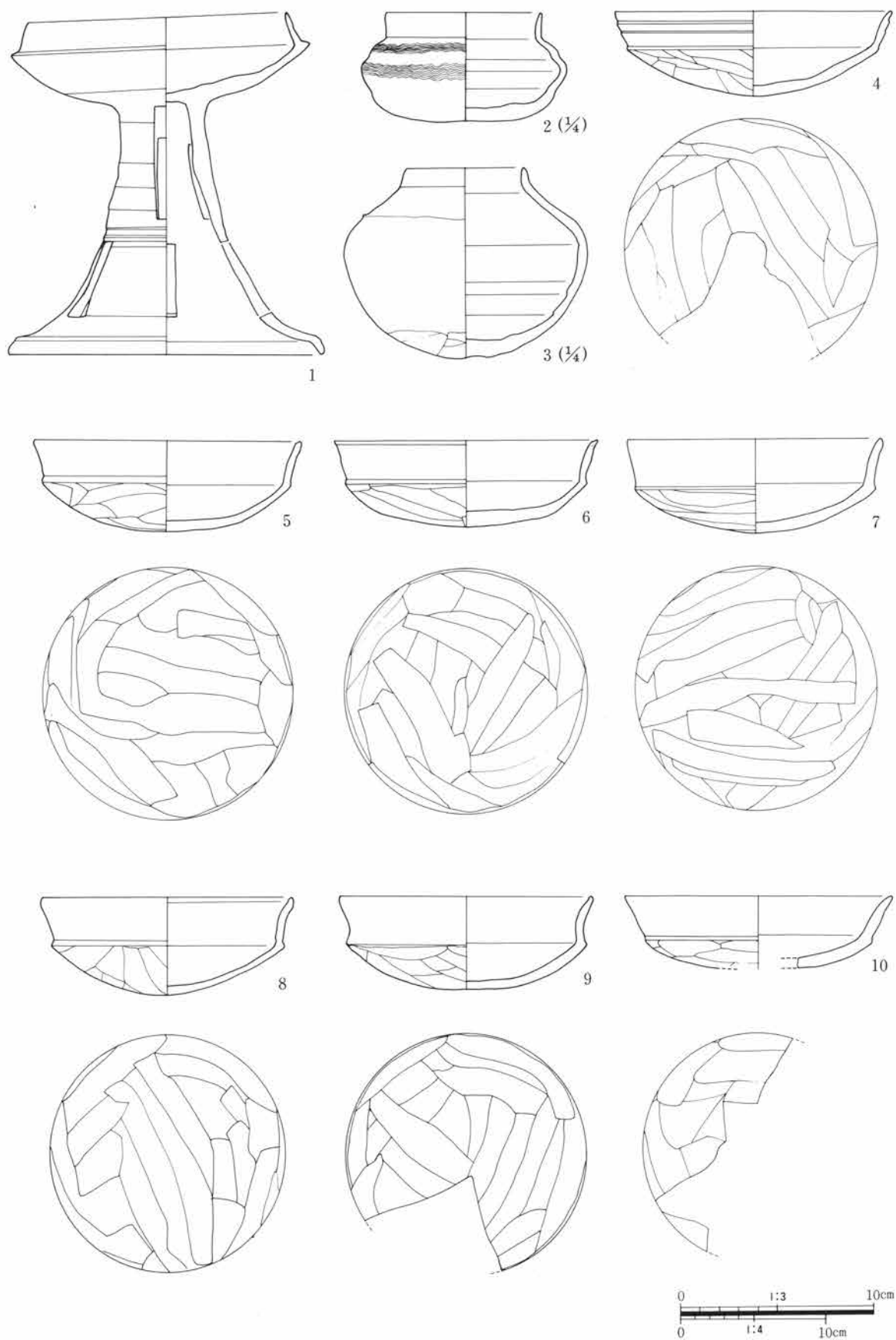
カマドは北壁中央に構築され、そで部、燃焼部、煙道部が残存する。規模は長さ1.22m幅0.87mを測り、軸方向はN-9°-Wを指す。煙道部の立ち上がりは極めて緩やかで、燃焼部との境は不明瞭である。貯蔵穴は北東コーナー部、カマド右脇で検出された。平面は歪んだ長方形を呈し、規模は125×80cm深さ55cmを測る。又貯蔵穴と北壁及び東壁との間は周辺の床面に比べやや盛り上がっている。ピットは4基が検出された。規模はP₁径50.3cm深さ17cm、P₂径52×39cm深さ不明、P₃径55.0cm深さ50.0cm、P₄径50.0cm深さ20.5cmを測る。これらは規模とその位置関係から支柱穴と考えられる。柱間距離はP₁-P₂3.00m、P₃-P₄3.80m、P₁-P₃が3.70m、P₂-P₄3.20mを測る。周溝はカマド右脇から東壁、南壁及び西壁の一部に沿って検出された。規模は幅27~17cm深さ9~3cmを測る。

遺物は甕、壺、杯、甑、鉢、椀、須恵器短頸壺、同高杯が出土しており、大部分が鬼高期のものである。出土位置は第37図に示すとおり貯蔵穴と住居中央部に集中している。貯蔵穴内出土土器は杯8個体分、甑2個体分、甕1個体分が認められ、そのうち杯6個体、甑2個体は完形あるいは若干の部分を除くのみで、外側から流れ込むような状態で検出された。又床面の中央部分に集中して出土したものはほとんどが破片の状態です。従って貯蔵穴出土土器は周辺に置かれていたものであり、又一方床面中央の土器は破碎後廃棄されたものとして理解できるのではないだろうか。

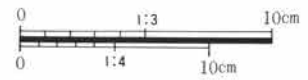
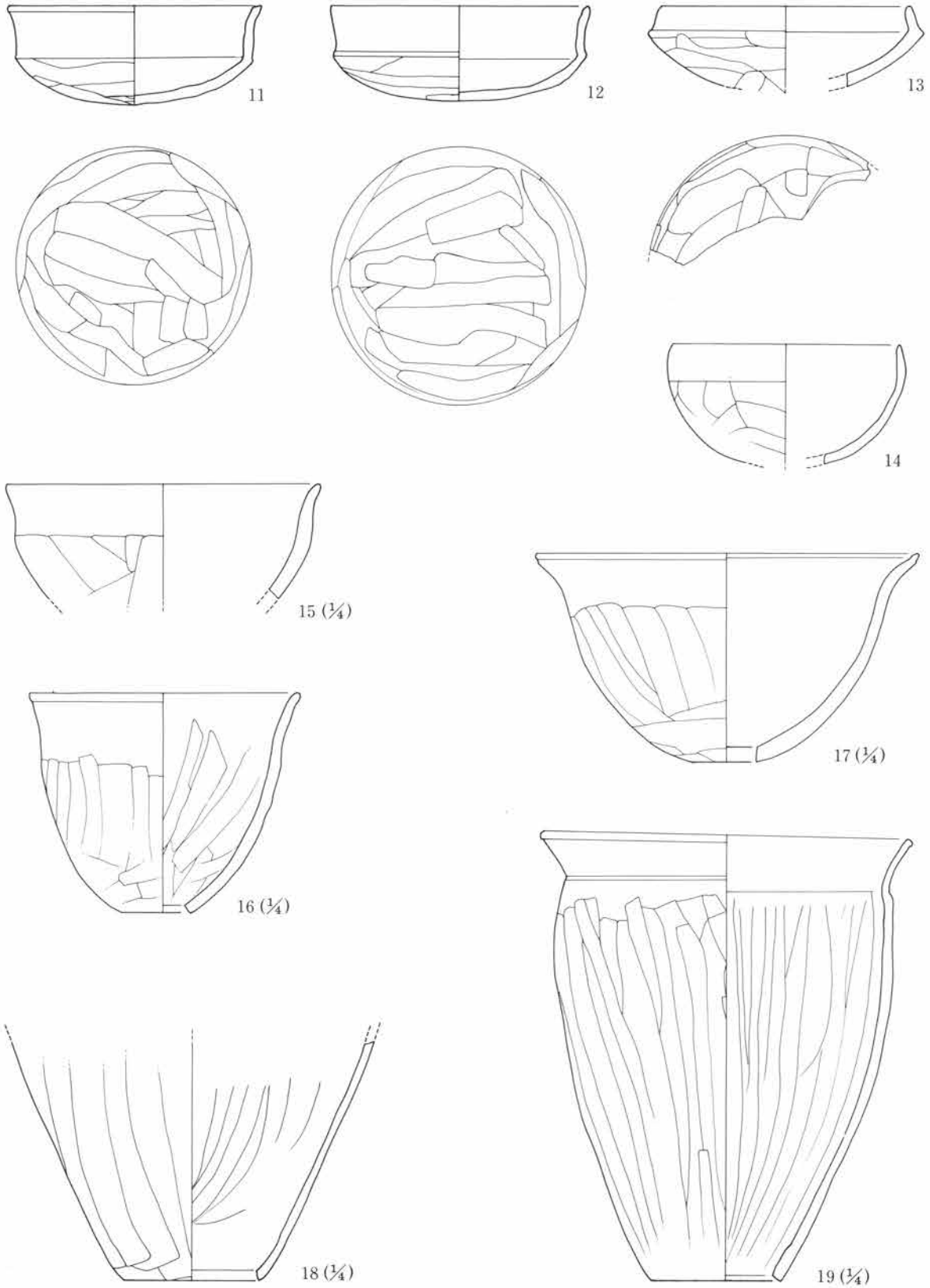
重複遺構はなく単独で検出されている。



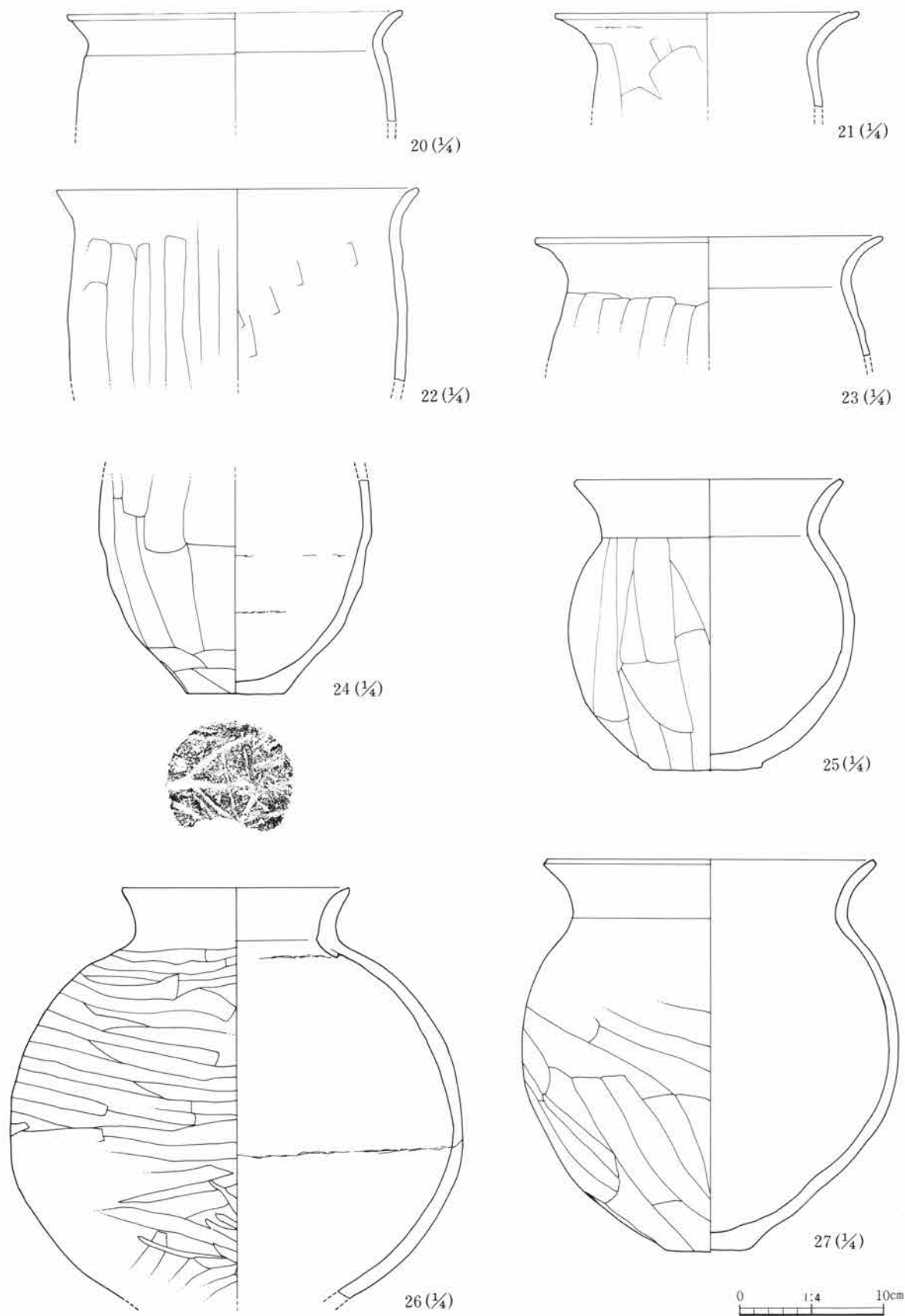
第37図 28号住居跡遺物分布図



第38図 28号住居跡出土遺物(1)



第39図 28号住居跡出土遺物(2)

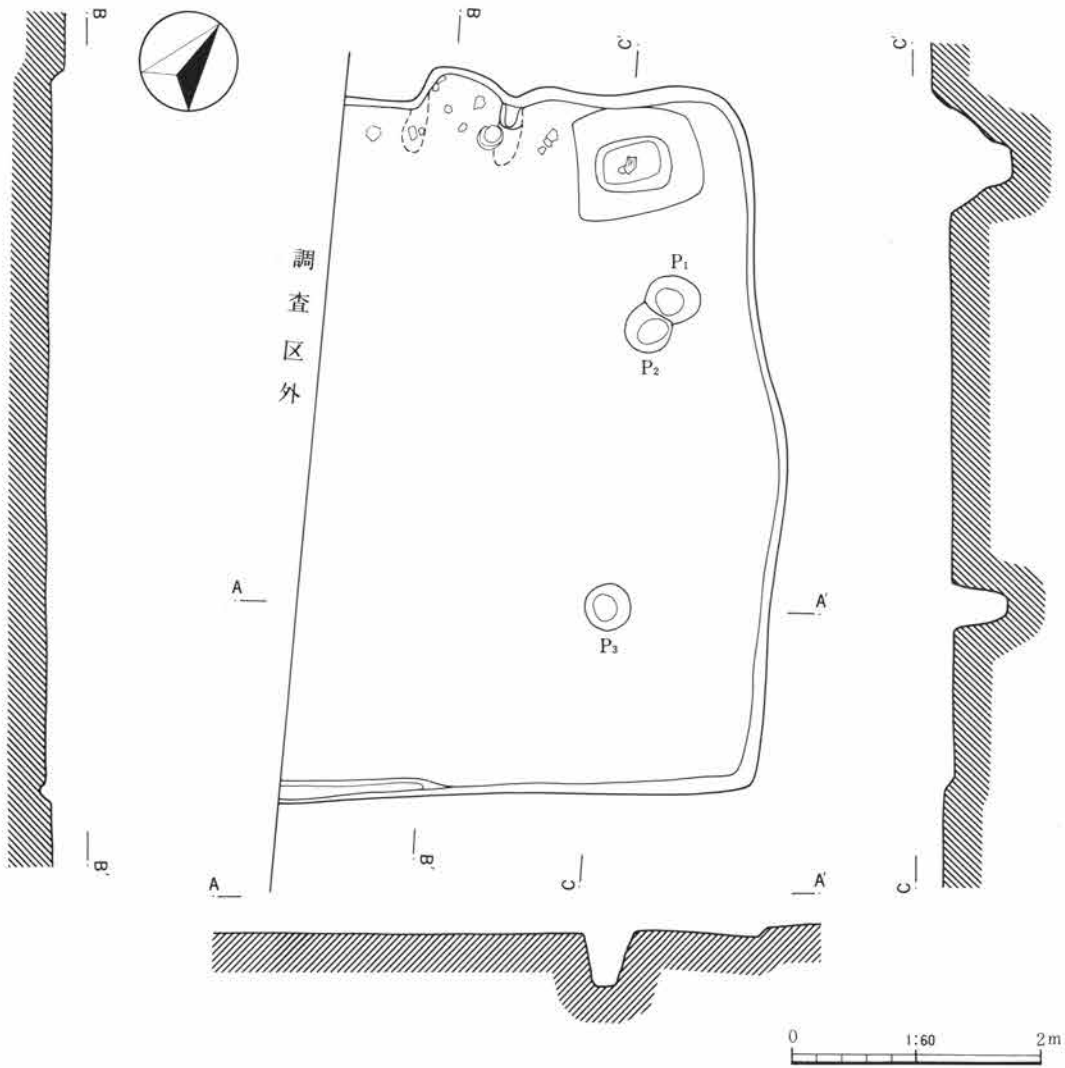


第40図 28号住居跡出土遺物(3)

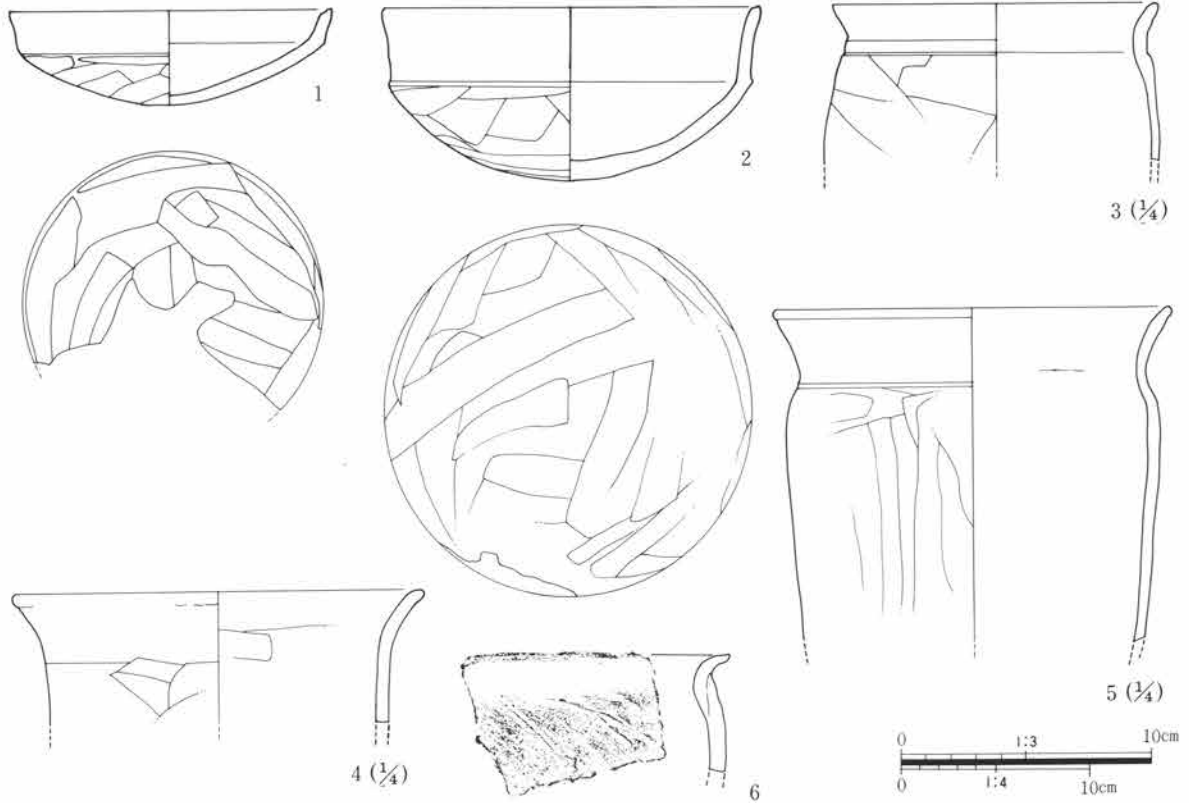
29号住居跡（第41図、PL.3）

I区A-18・19、B-18・19グリッドに位置する。平面形は南西半が調査区外のため全形は不明であるが、おそらく正方形に近い形状を呈すると思われる。主軸方向の長さは5.56mを測る。主軸方向はN-40°-Wを指す。壁は残存状態不良で、やや外傾する。確認壁高は21~3cmを測る。床面は中央部がやや盛り上がる。カマドは北西壁の中央付近に構築され、右そで部と燃焼部が残存する。長さ75cm、幅95cmを測る。比較的幅広い形状を呈する。貯蔵穴は北部コーナーで検出され、平面は歪んだ長方形を呈する。規模は101×86cm深さ51cmを測る。断面は階段状を呈する。ピットは3基検出された。P₁径35.5cm深さ30cm、P₂径37.4cm深さ28.0cm、P₃径35.0cm深さ44.2cmを測る。なお規模と位置関係からこれらは支柱穴の可能性が高い。P₁とP₂は隣接している事から柱を建替えた可能性も考えられる。周溝は南東壁の南半部に沿って検出された。幅は18~13cm、深さは8~4cmを測る。

遺物は甕、杯、須恵器杯、同蓋の破片が出土している。カマド内及び貯蔵穴の周辺部に集中する。なお第42図-3の甕上半部片はカマド右そで部に正立して置かれており、粘土の付着が甚しい事からそで補強材として使用されたと思われる。遺物は奈良時代を主体としているが、貯蔵穴より鬼高期の杯が出土している。



第41図 29号住居跡

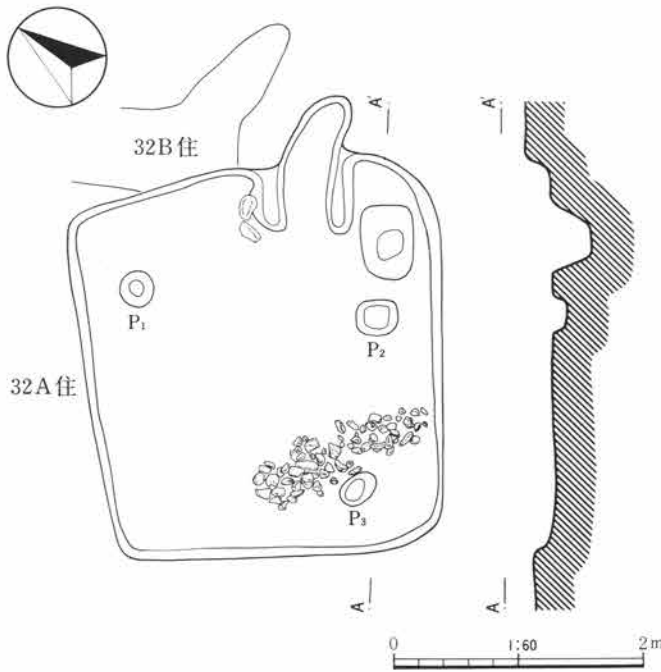


第42図 29号住居跡出土遺物

30号住居跡 (第43図、PL. 3)

I区B-17、C-17グリッドに位置する。やや歪んだ隅丸正方形を呈する。規模は3.15×2.95mで面積は8.64

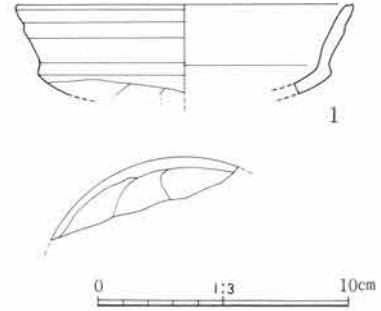
m²を測る。主軸方向はN-55°-Eを指す。壁は外傾し、確認壁高は21~6cmを測る。床面はほぼ平坦である。カマドは北東壁の南寄りに構築されており、そで部、燃焼部、煙道部が残存する。そで部は壁内側に60cm程張り出す。長さ1.10m幅0.83mを測る。煙道の軸方向と燃焼部の軸方向が異なっており、前者はN-84°-Eで、後者はN-56°-Eを指す。貯蔵穴は東側コーナー部のカマド右脇から検出された。隅丸長方形を呈し、規模57×43cm深さ32cmを測る。ピットは3基検出され、規模はP₁径28cm深さ13.5cm、P₂径34×28cm深さ11cm、P₃径32×21cm深さ14cmを測る。いずれも小規模であるが、位置関係から支柱穴と思われる。柱間距離はP₁-P₂1.93m、P₂-P₃1.40mを測る。



第43図 30号住居跡

遺物は32A、32B号住居跡と重複した部分の覆土中より多く出土しており、その帰属が不明瞭である。本住居跡に伴う確実な出土遺物は杯片で、鬼高期のものである。又ピットP₃の東側に礫が多量に出土しているが、その性格については不明である。

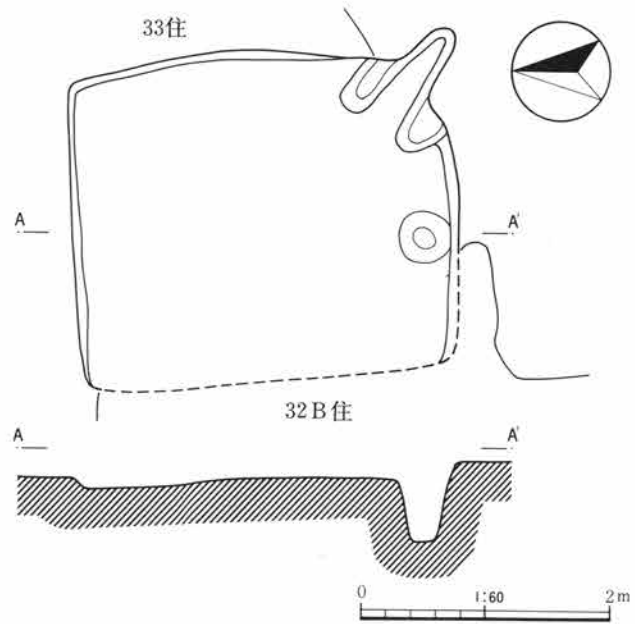
重複遺構は32A号・32B号住居跡で、カマドの切り合い関係より新旧関係は32A号住→30号住→32B号住の順である。



第44図 30号住居跡出土遺物

31号住居跡 (第45図、PL.3)

I区C-17・18、D-17・18グリッドに位置する。平面は長方形と思われるが、32B号住居跡と重複するため不明瞭である。規模は北壁-南壁間3.05mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は15cmを測る。床面は地山のローム土と33号住居覆土で、ほぼ平坦である。33号住との床面レベル差は6~9cmで本住居跡が低位である。カマドは南東コーナー部に構築されており、ほぼ全形が残存する。そで部は壁内に40cm程張り出す。又煙道部は住居プランの対角線方向で壁外に40cm程張り出す。規模は長さ1m幅0.85mを測り、軸方向はS-54°-Eを指す。又燃焼部中央より円礫が1点出土しているが、おそらく支脚として用いられたものと思われる。ピットは1基南壁際中央から検出された。

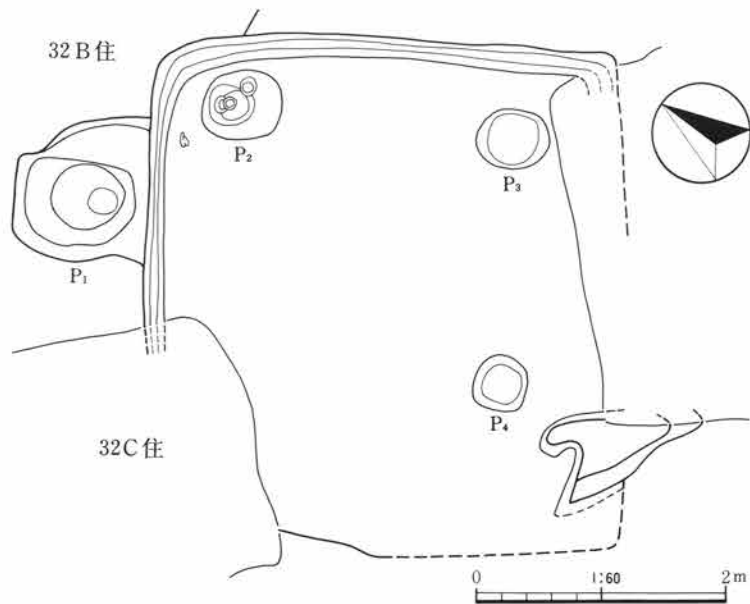


第45図 31号住居跡

径40cm深さ48cmを測る。他に住居跡に伴う施設は認められない。覆土はロームブロックを含む黒色粘質土が堆積する。

遺物は鬼高期の杯、甕がカマド周辺及び床面より出土している。

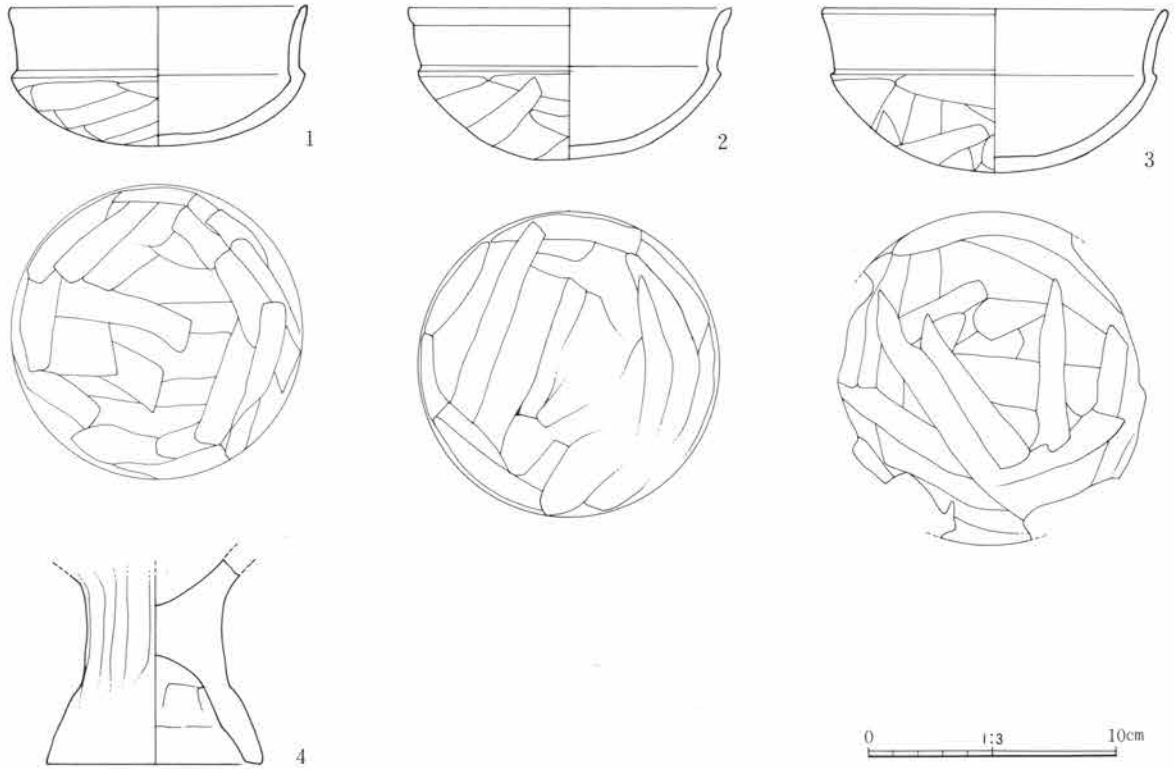
重複遺構は32B号住居跡、33号住居跡で、新旧関係は33号住→31号住→32B号住である。



第46図 32A号住居跡

32A号住居跡 (第46図、PL.3)

I区B-18、C-18グリッドに位置する。正方形に近い平面形を呈する



第47図 31号住居跡出土遺物

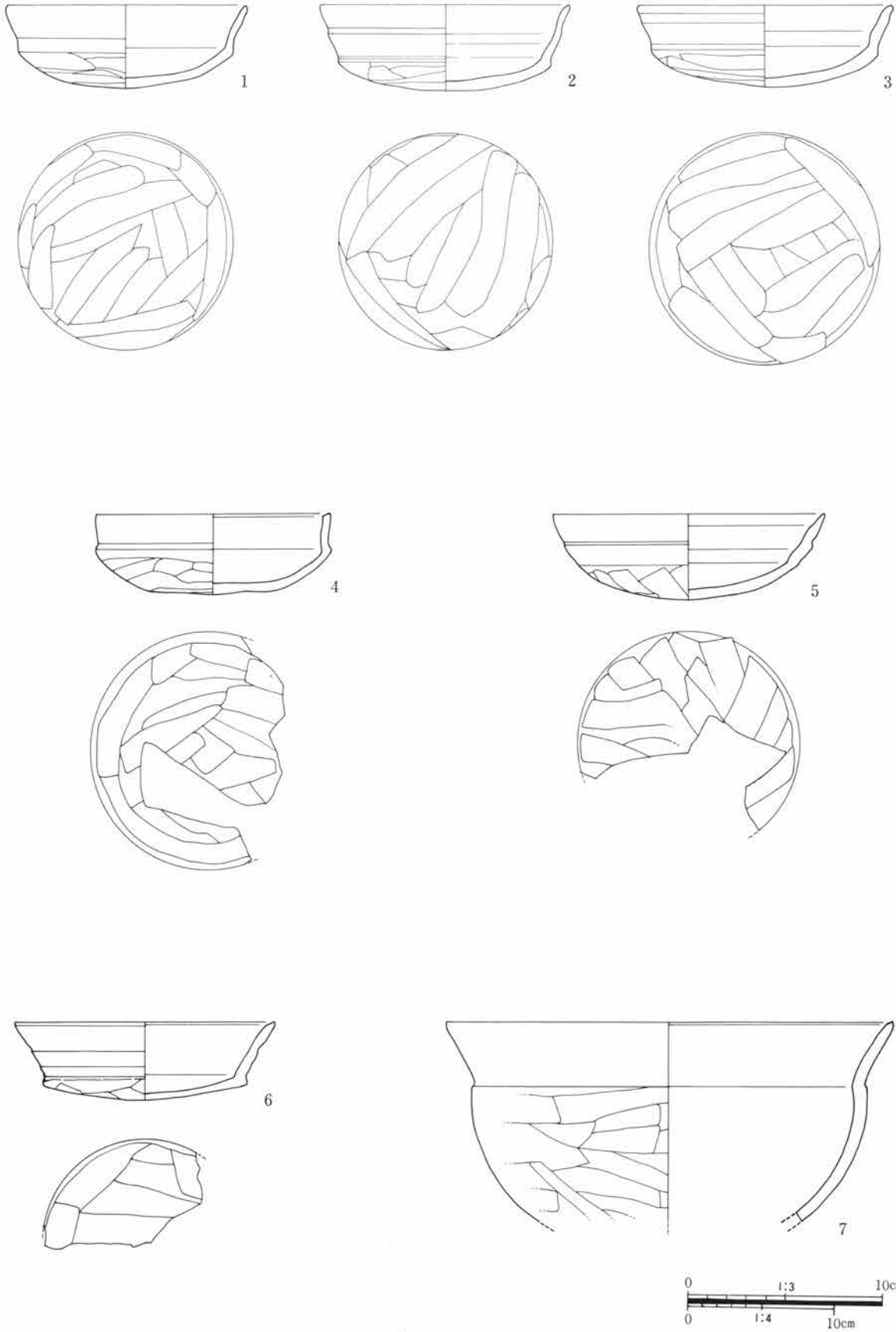
と思われるが、南壁と西側コーナー部は他住居跡と重複するために形状は不明である。規模は推定値(3.5×3.7)mを測る。主軸方向はS-35°-Eを指す。壁は残存部分で壁高15cmを測る。床面は平坦である。カマドは南東壁の南西隅に構築される。後世の削平と30号住居跡に切られるため全形は不明。そで部が壁内に張り出すものと思われる。ピットは4基検出された。P₁は北西壁から外方へ1.1m程張り出して掘り込まれる。P₂は北側コーナー部、P₃とP₄は一般的な4主柱穴の位置にある。規模はP₁径58cm深さ106.5cm、P₂径62×55cm深さ46cm、P₃径56cm深さ30cm、P₄径42cm深さ10cmを測る。P₂は形状が方形を呈する事、内部から完形の土器が出土している事等から貯蔵穴の可能性はある。P₁は本住居跡に伴う張り出しピットとして扱ったが、重複する単独ピットの可能性もあり、その性格については不明である。P₃、P₄は柱穴と思われ、柱間距離は1.95mを測る。周溝は北一東壁際で検出され、規模は幅20~12cm深さ8~1cmを測る。

遺物は杯、鉢が確実に本住居跡に伴って出土している。なお貯蔵穴と思われるピットP₂より杯完形品3個体と破片1点が出土している。時期は鬼高期と思われる。

重複遺構は30号住居跡、32B号住居跡、32C号住居跡で、土層観察より新旧関係は32A号住→30号住・32B号住・32C号住である。

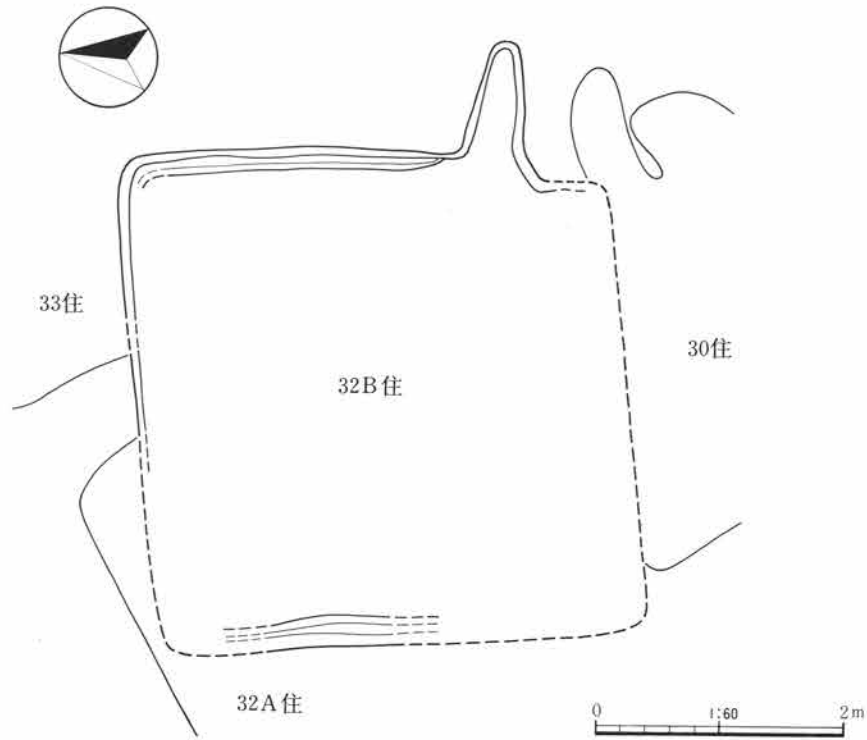
32B号住居跡(第49図、PL.3)

I区C-17・18に位置する。平面形は不明。主軸方向はN-82°-Eを指す。壁は検出部で13cmを測る。床面は平坦。床面レベルは重複する33号住、32A号住の床面より6~7cm高位にある。カマドは東壁の南寄りに構築される。そで部は認められない。燃烧部と煙道部の境は不明瞭。規模は長さ85cm幅45cmを測り、軸方向はS-89°-Eを指す。周溝は東西壁に沿った位置にわずかに検出された。

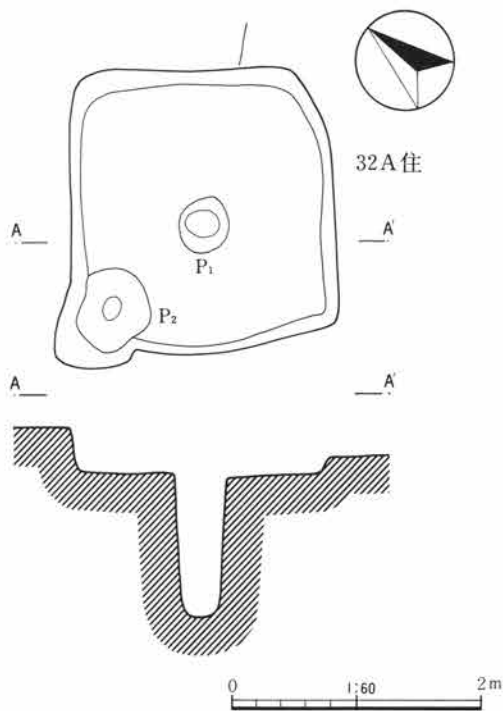


第48図 32A号住居跡出土遺物

遺物は平安時代の土器片が覆土中より出土しているが、本住居跡に伴うものである確証は得られなかった。重複遺構との新旧関係は土層観察より32A号住・30号住・33号住→32B号住である。



第49図 32B号住居跡



第50図 32C号住居跡

32C号住居跡 (第50図)

I区B-18・19グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は2.24×2.10m、面積は4.60㎡を測る。主軸方向はN-49°-Eを指す。壁は外傾しており、確認壁高は42~14cmを測る。床面はローム土を利用し、比較的平坦である。カマド及び周溝は検出されなかった。ピットは2基検出されP₁は住居中央に、P₂は西コーナー部に掘り込まれている。規模はP₁径43cm深さ112cm、P₂径66×57cm深さ30cmを測る。P₁を柱穴と考えた場合、中心柱によって棟木を支え切妻の形状を呈するか、柱を中心に底面正方形の角錐状の寄棟形を呈する上屋構造が想定されよう。

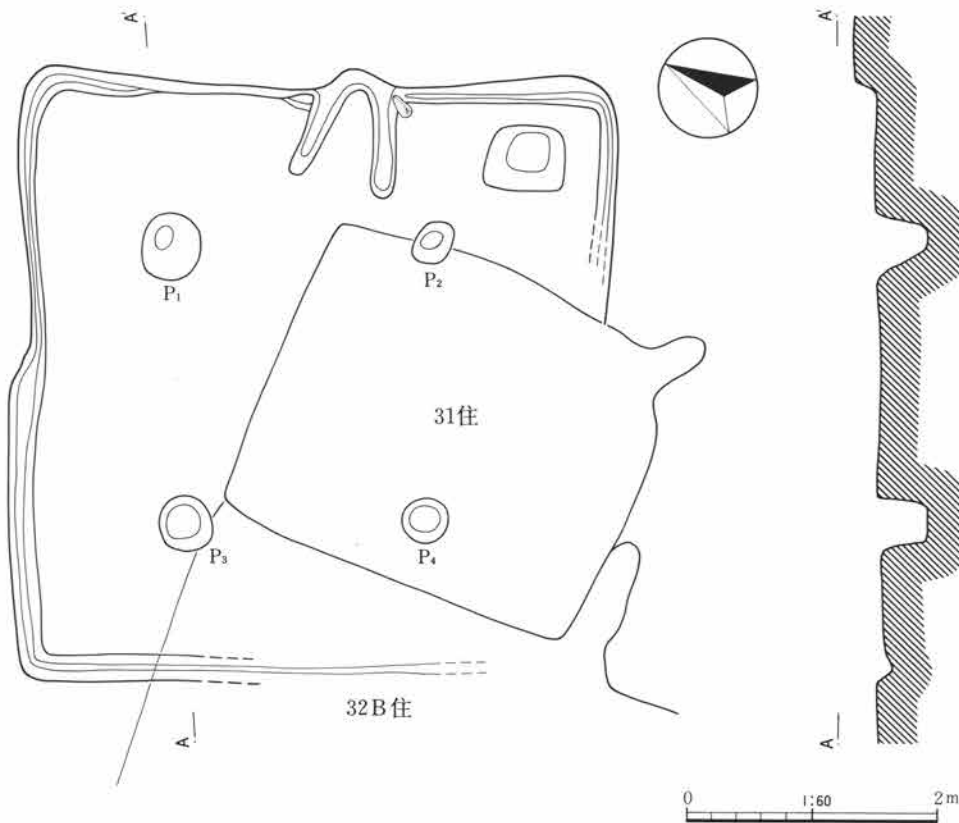
遺物は時期不明の土師器小片が出土したのみである。重複遺構との新旧関係は土層観察より32A号住→32C号住と思われる。

本遺構は住居跡として扱ったが、小形でカマドがない事から作業小屋的な性格も考えられる。

33号住居跡 (第51図、PL.3)

I区C-17・18、D-17・18グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は4.80×4.78m、面積19.60㎡を測る。主軸方向はN-62°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は22cm前後を測る。床面は地山のロームでほぼ平坦面を呈する。カマドは東壁の中央からやや南寄りに構築される。煙道部は残存しない。そで部は壁内に90cm程張り出す。長さ90cm、幅85cmを測る。軸方向はN-78°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部に検出された。歪んだ長方形を呈し、規模は62×50cm深さ56cmを測る。ピットは4基検出され、位置的に主柱穴と思われる。規模はP₁径53cm深さ39cm、P₂径38cm深さ56.5cm、P₃径45cm深さ38cm、P₄径37cm深さ45cmを測る。又各柱間距離はP₁-P₂2.13m、P₂-P₄2.20m、P₃-P₄1.93m、P₁-P₃2.25mを測る。周溝はカマド左脇を除いて全周する。規模は幅30~7cm深さ9~2cmを測る。覆土はロームブロック、炭化物、灰を含む褐色土が堆積する。

遺物は鬼高期のものが出土しているが、図化できるものはない。



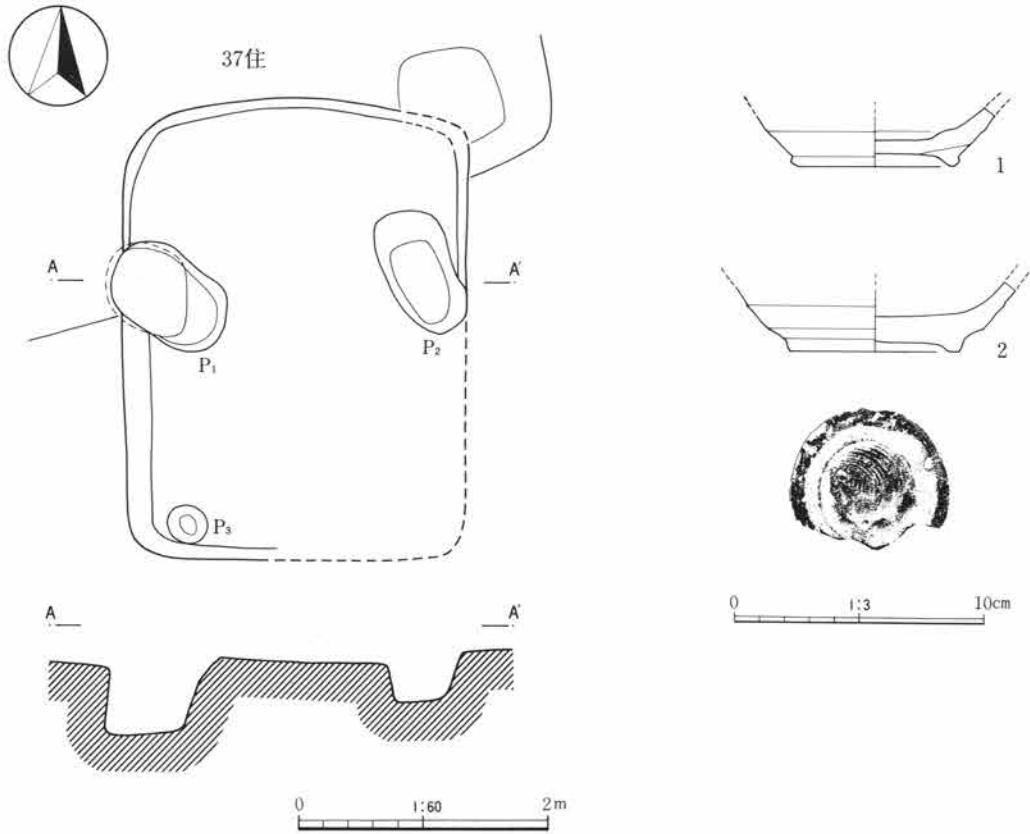
第51図 33号住居跡

34号住居跡 (第52図)

I区D-18・19、E-19グリッドに位置する。長方形を呈する。規模は推定値で(3.55)×(2.75)mを測る。面積は9.5㎡前後を測る。壁は確認壁高12.5~2cmを測る。床面はほぼ平坦である。ピットは3基検出された。規模はP₁径100×65cm深さ40cm、P₂径105×55cm深さ33cm、P₃径33cm深さ15cmを測る。

遺物は須恵器高台付碗、土師器甕が出土している。鬼高期のものも含むが、主体は平安時代である。

重複遺構との新旧関係は、出土遺物より37号住→34号住と思われる。



第52図 34号住居跡及び出土遺物

35号住居跡（第53図、PL. 3）

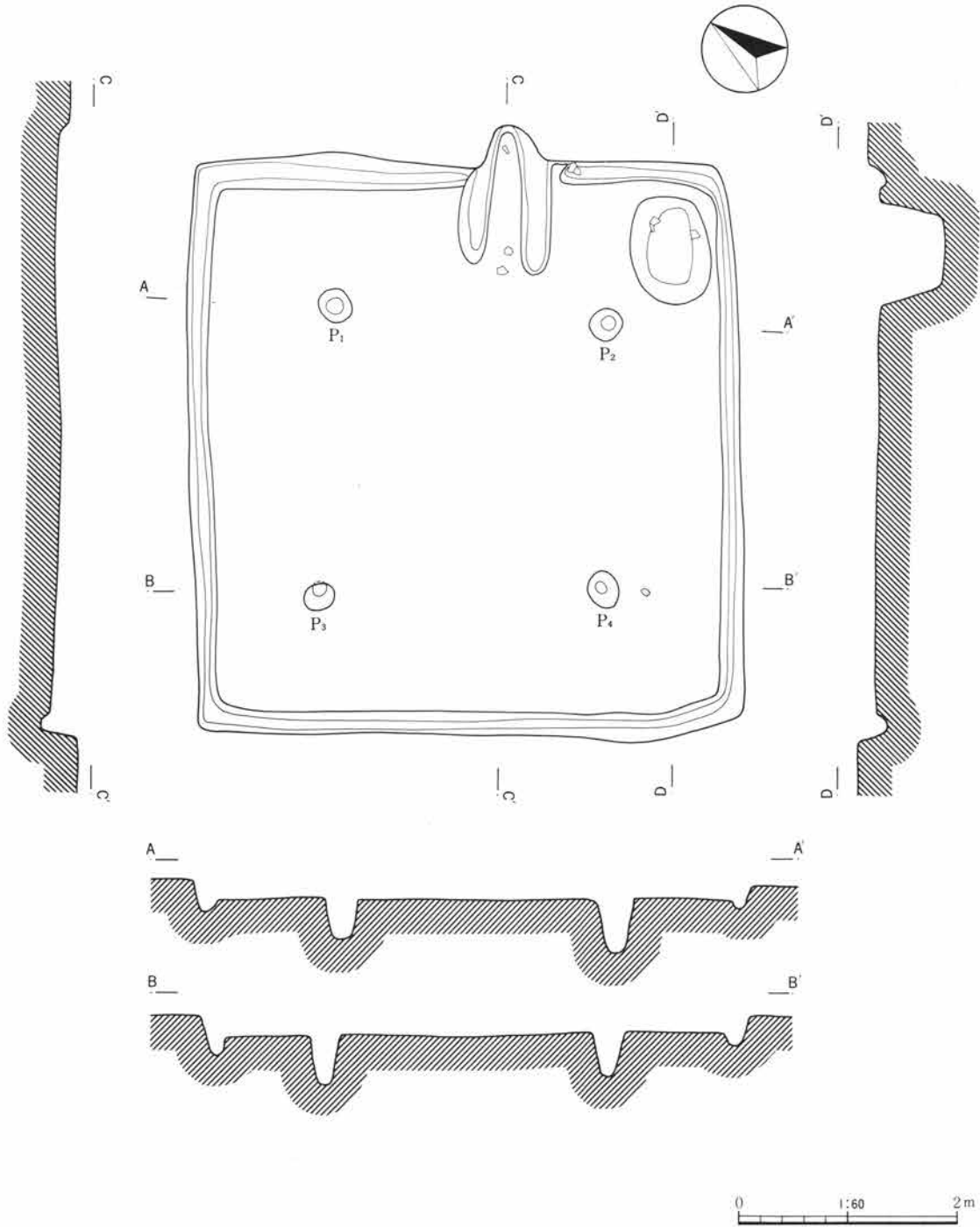
I区E-17・18、F-17・18グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は5.29×5.02mで、面積は26.10㎡を測る。主軸方向はN-51°-Eを指す。壁は比較的残存状態良好で、やや外傾し確認壁高は27～5cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、中央部分がやや高くなっている。カマドは北東壁の中央よりやや南東寄りに構築されている。残存状態は良好で、煙道上半部のみを欠く。規模は長さ1.35m幅0.85mで軸方向はN-54°-Eを指す。そで部は壁内側に1m程張り出す。又燃烧部は比較的狭小で、幅30cmを測る。煙道は急角度で立ち上がる。貯蔵穴は東側コーナー部に検出された。形状は楕円形で、規模は96×72cm、深さ63.5cmを測る。ピットは4基が検出され、その配置関係から支柱穴になると考えられる。規模はP₁径31cm深さ41cm、P₂径30cm深さ47cm、P₃径23cm深さ45cm、P₄径30cm深さ40cmを測る。又それぞれの柱間距離はP₁-P₂2.52m、P₃-P₄2.60m、P₁-P₃2.55m、P₂-P₄2.38mを測る。周溝は全壁に沿って廻っており、幅30～5cm、深さ13～2cmを測る。覆土にはロームブロックを多量に含む褐色土がブロック状に堆積している。

遺物は甕が多量に出土しており、その他に杯、高杯が含まれる。出土位置はカマド周辺と貯蔵穴周辺に集中するが、完形品はなくほとんどが小破片である。時期はすべて鬼高期のものに限定される。

重複遺構は認められず、単独で検出されている。

36号住居跡（第55図）

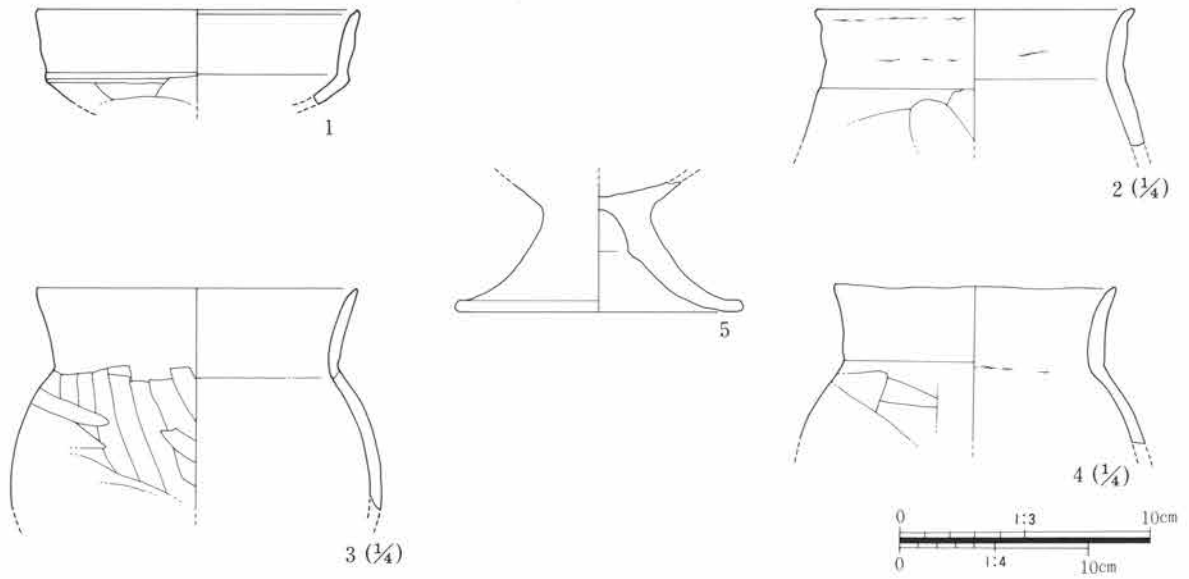
I区F-19・20グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.26×(3.60)m、面積は11.40㎡



第53図 35号住居跡

を測る。壁は残存状態不良で、確認壁高は9～1cmを測る。床面は凹凸が多く軟質である。カマドは東壁の南端に構築されている。そで部は確認できない。燃烧部は壁を長さ60cm幅50cm前後掘り込んで築かれている。軸方向はS-67-Eを指す。ピットは2基検出された。P₁はカマド前方部、P₂はカマドに対面する西壁際に掘り込まれる。規模はP₁径58×46cm深さ53cm、P₂径78×65cm深さ55cmを測る。P₂は形状、規模、位置等から貯蔵穴の可能性が高いが、P₁の性格については不明である。

遺物はカマド周辺から中央部分にかけて土器片が多量に出土する。甕、杯、鉢、須恵器高台付碗等があり、

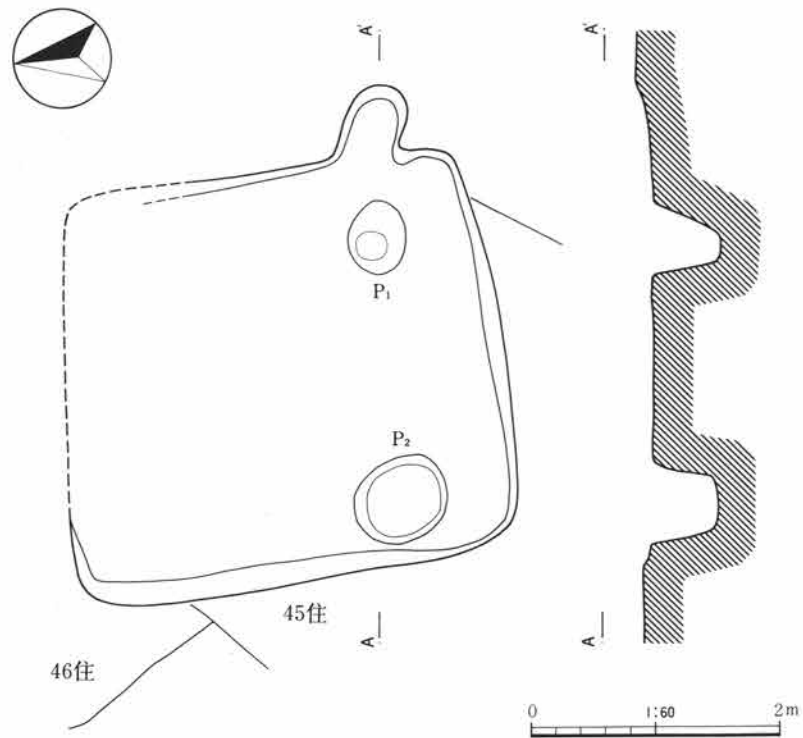


第54図 35号住居跡出土遺物

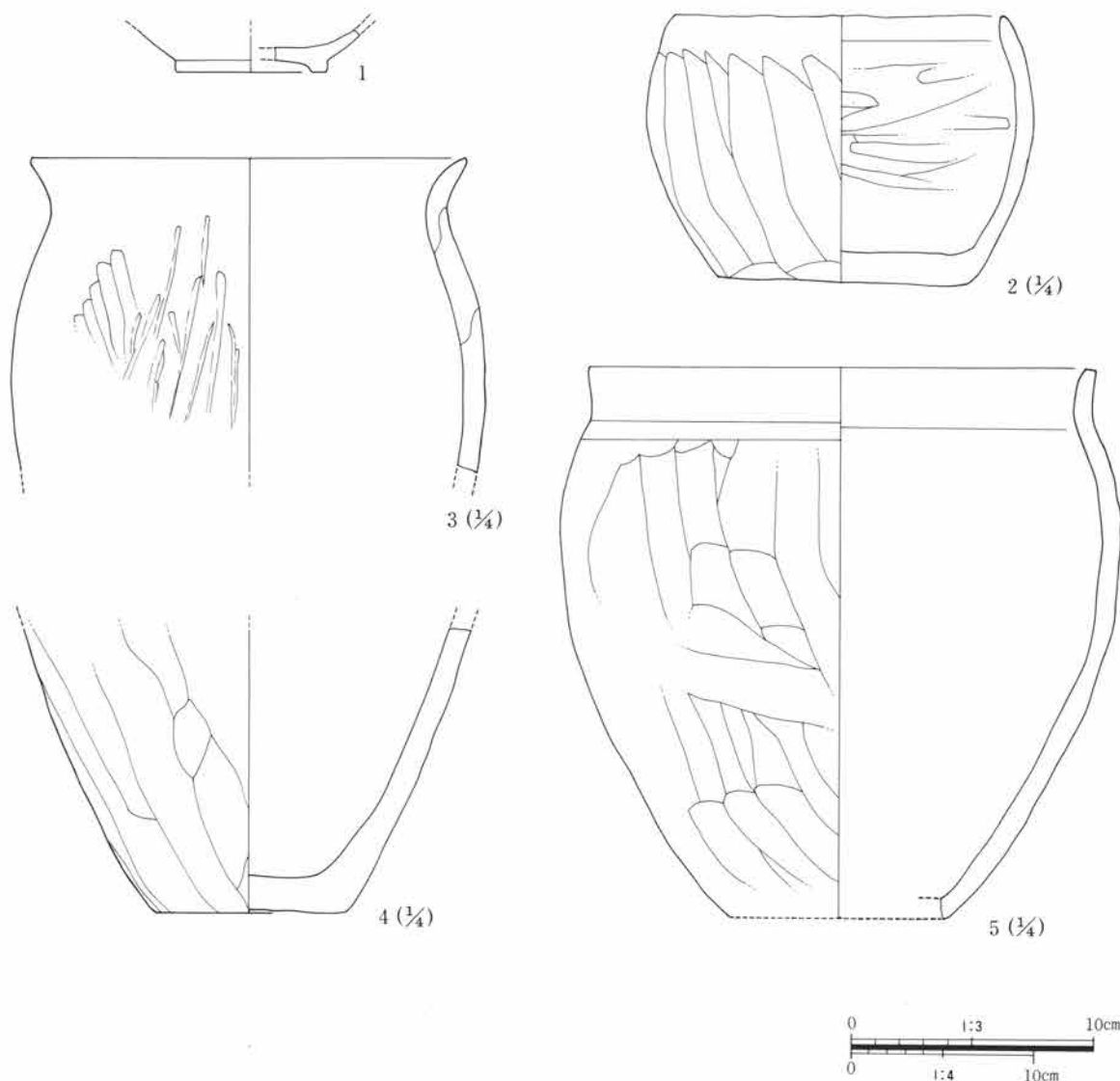
時期は平安時代のものが主体を占める。なおカマドのそで部から燃焼部にかけて円筒埴輪片が10数片出土しているが、これはおそらくカマドの補強材として転用されたものと考えられる。

重複遺構は45号住居跡と46号住居跡で、判明した新旧関係は45号住→36号住であった。

なお本住居跡は46号住居跡とともに北東端部を崖によって切られており、この部分の形状については破線で推定ラインを図示した。



第55図 36号住居跡



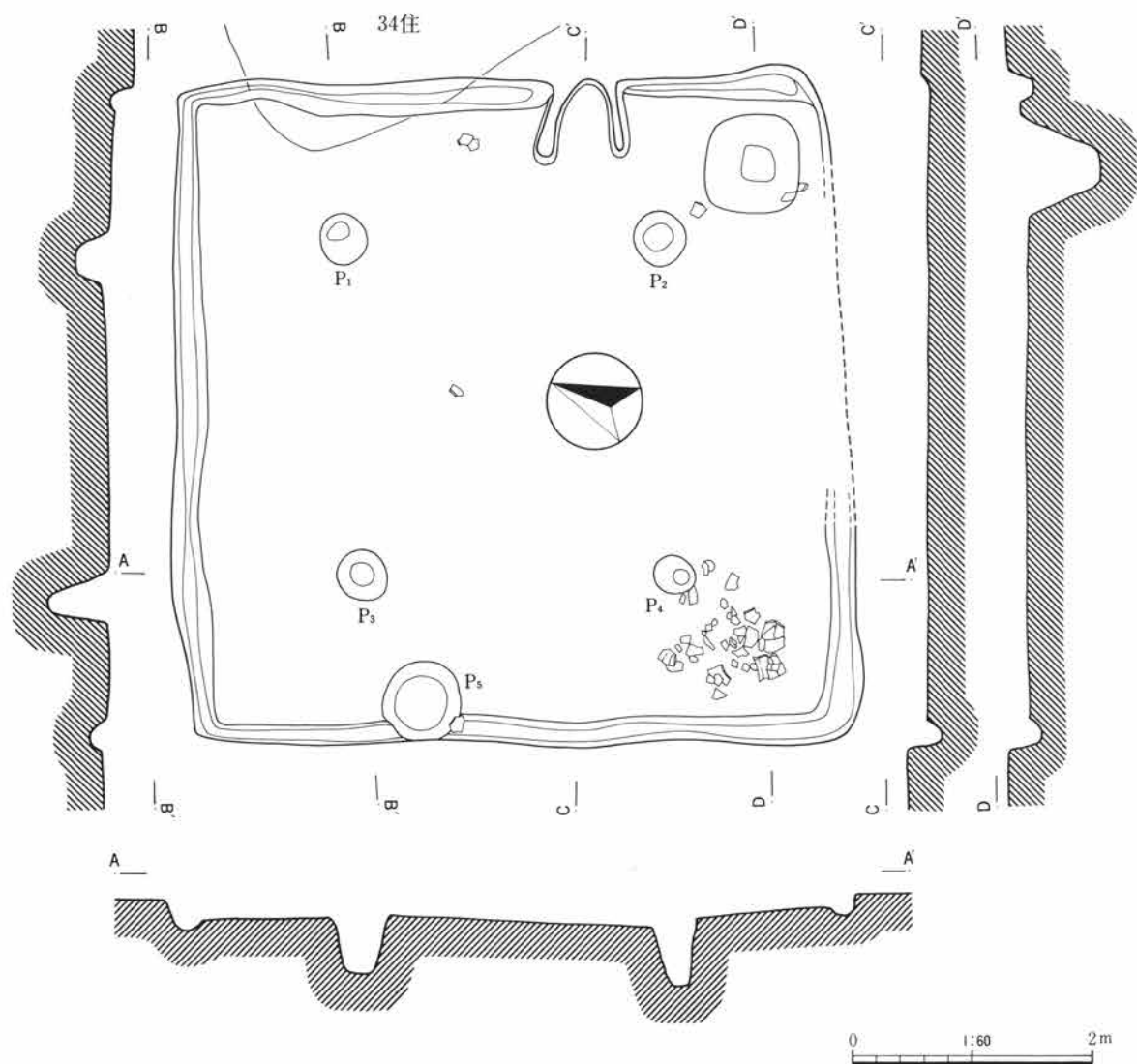
第56図 36号住居跡出土遺物

37号住居跡（第57図、PL. 3）

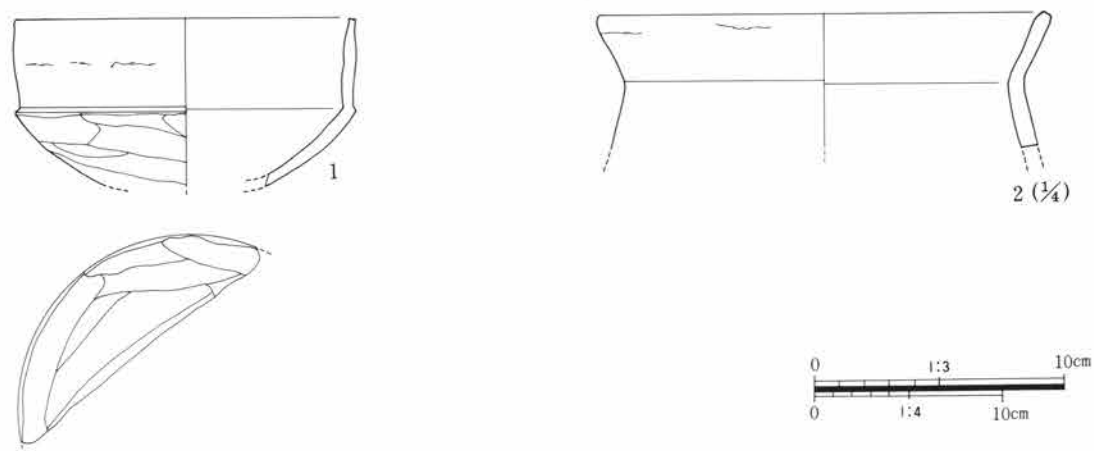
I区D-19・20、E-19・20グリッドに位置する。平面は正方形で、規模は5.50×5.60m、面積は29.80㎡を測る。主軸方向はN-68°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高18~2cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、平坦で硬質である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、そで部と燃焼部が残存する。そで部は壁内側へ60cm程張り出す。燃焼部は奥行60cm幅44cmを測る。軸方向はN-75°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部で検出され、規模は80×77cm深さ64.5cmを測る。ピットは5基が検出された。P₁~P₄は配置関係から支柱穴と思われる。規模はP₁径42cm深さ54cm、P₂径45cm深さ53cm、P₃径40cm深さ50cm、P₄径35cm深さ57cm、P₅径63cm深さ75cmを測る。又柱間距離はP₁-P₂2.63m、P₂-P₄2.72m、P₁-P₃2.80m、P₃-P₄2.63mを測る。周溝は全周するものと思われ、幅30~15cm、深さ13~3cmを測る。覆土はロームブロックを含む黒色土がブロック状に堆積する。

遺物はピットP₄周辺に集中して出土する。鬼高期の甕が多く、その他に杯、甑、高杯がみられる。

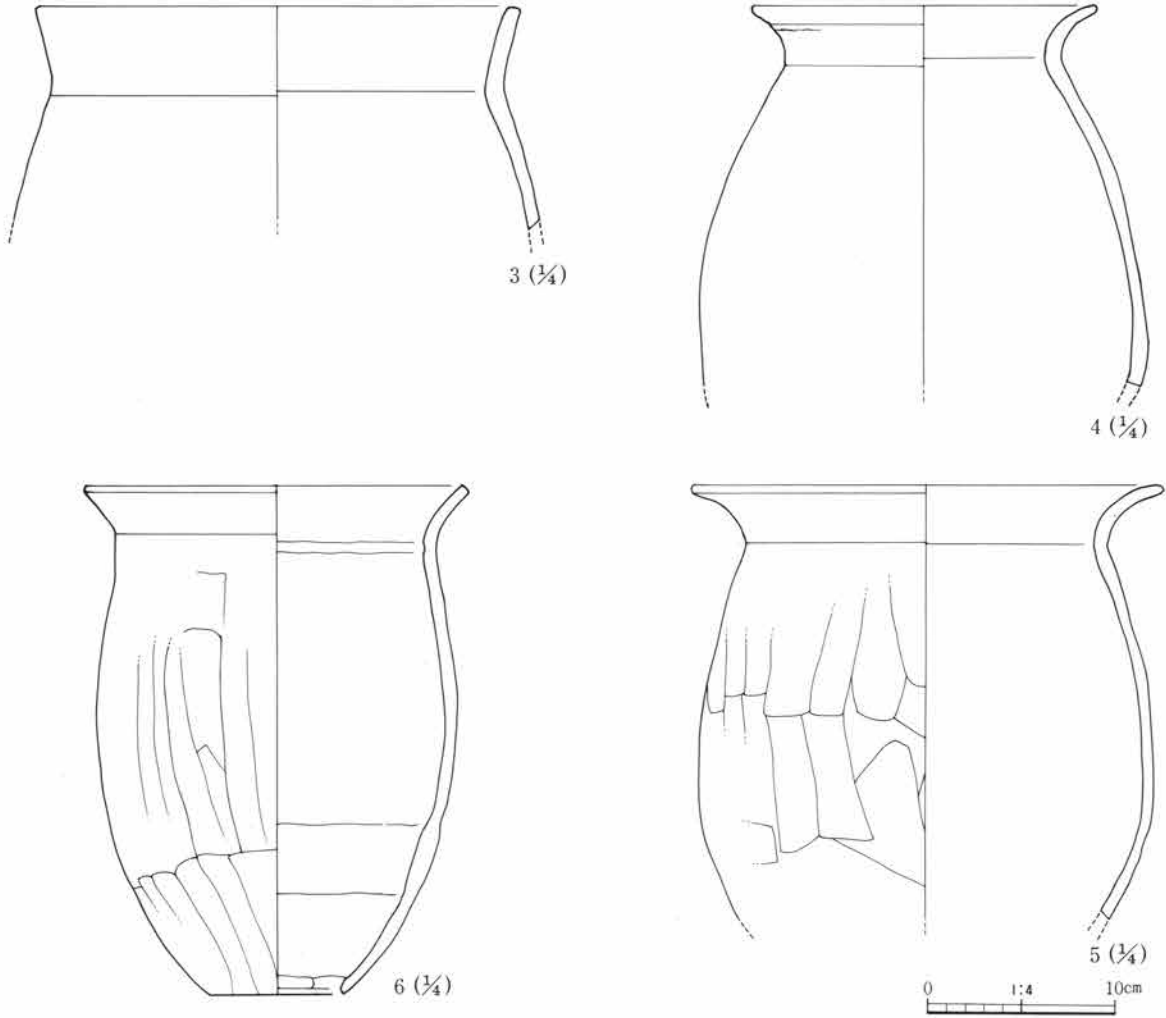
重複遺構との新旧関係は37号住→34号住である。



第57図 37号住居跡



第58図 37号住居跡出土遺物(1)



第59図 37号住居跡出土遺物(2)

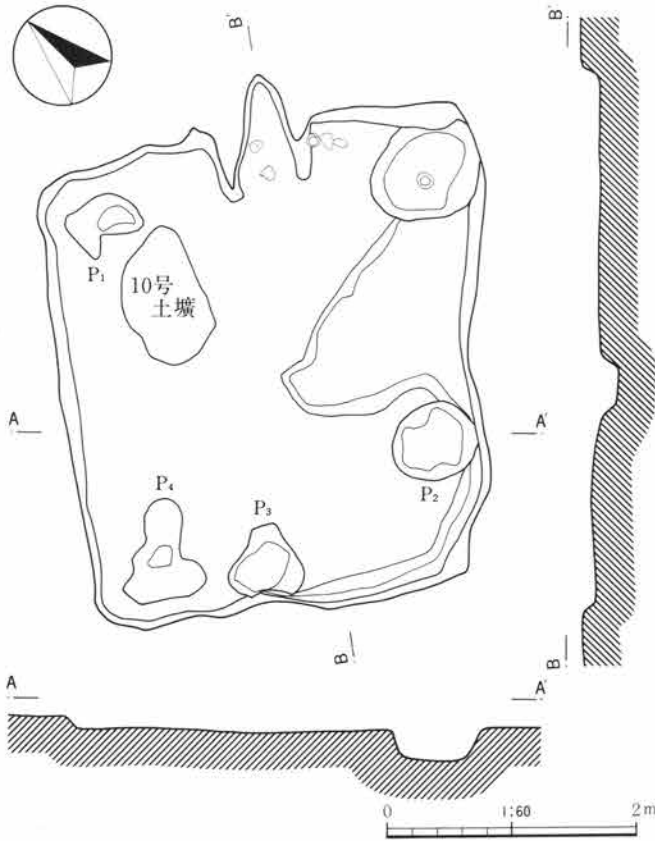
38号住居跡 (第60図、PL. 3)

I区C-20・21グリッドに位置する。平面は歪んだ正方形を呈する。規模は3.88×3.55m、面積は12.50㎡を測る。主軸方向はN-34°Eを指す。壁は残存状態不良で凹凸が激しい。確認壁高は15~2cmを測る。床面は軟質で凹凸が激しい。カマドは北東壁のほぼ中央に構築されている。残存状態は比較的良好で全形が知り得る。長さ93cm幅80cmを測り、軸方向はN-39°Eを指す。そで部は灰色粘土を使用し壁内に50~45cm張り出している。焚口部は浅い窪みを呈し、それに続く燃焼部中央には15cm大の円礫を直立させて支脚としている。燃焼部と煙道部の境は不明瞭で、煙道は緩やかに傾斜し、末端部で急角度で立ち上がる。貯蔵穴は東側コーナー部で検出された。平面は不整楕円形を呈し、規模は径93×79cm深さ35cmを測る。ピットは4基が検出されている。P₂以外はいずれも不定形を呈する。規模はP₁径60×31cm深さ18cm、P₂径69×60cm深さ21.5cm、P₃径55×47cm深さ23cm、P₄径80×60cm深さ23.5cmを測る。P₁とP₄は住居コーナー部分に位置し、底面形と規模が近似する事から柱穴になる可能性が考えられる。P₂、P₃については壁際にあり、規模も比較的大きく貯蔵穴的な性格を想定できるが、すでに定型化した貯蔵穴を具備している事から、むしろ別の性格をもつピットと考えた方が妥当である。周溝は南東壁から南西壁中央部ピットP₃の間に沿って廻っている。幅は20~5cmで深さ3cm以下の小規模なものである。又貯蔵穴とピットP₂間に不定形の掘り込みが認められるが、これは

おそらく掘り形の痕跡と思われる。

遺物は貯蔵穴内より鬼高期の杯完形品1点が出土し、他にカマド周辺を中心にして同時期の杯、鉢、甕の破片が少数出土している。

重複遺構は10号土壌で、新旧関係は38号住→10号壙である。



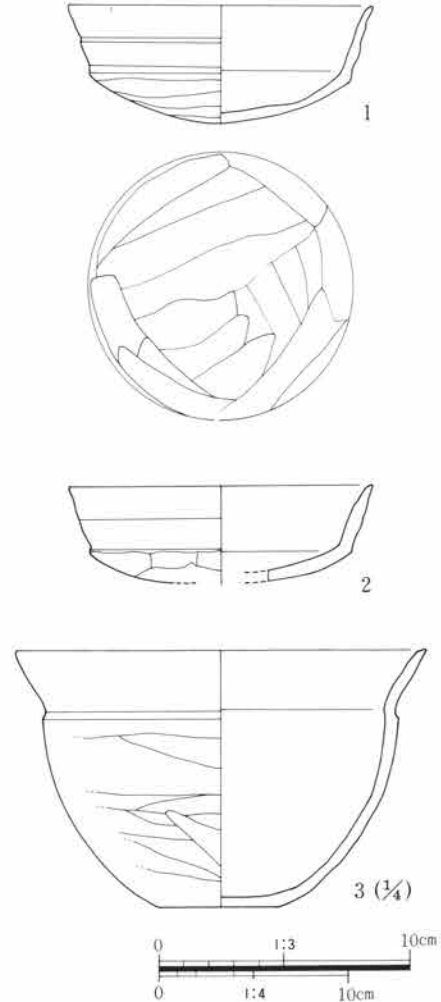
第60図 38号住居跡

39号住居跡 (第62図、PL.3)

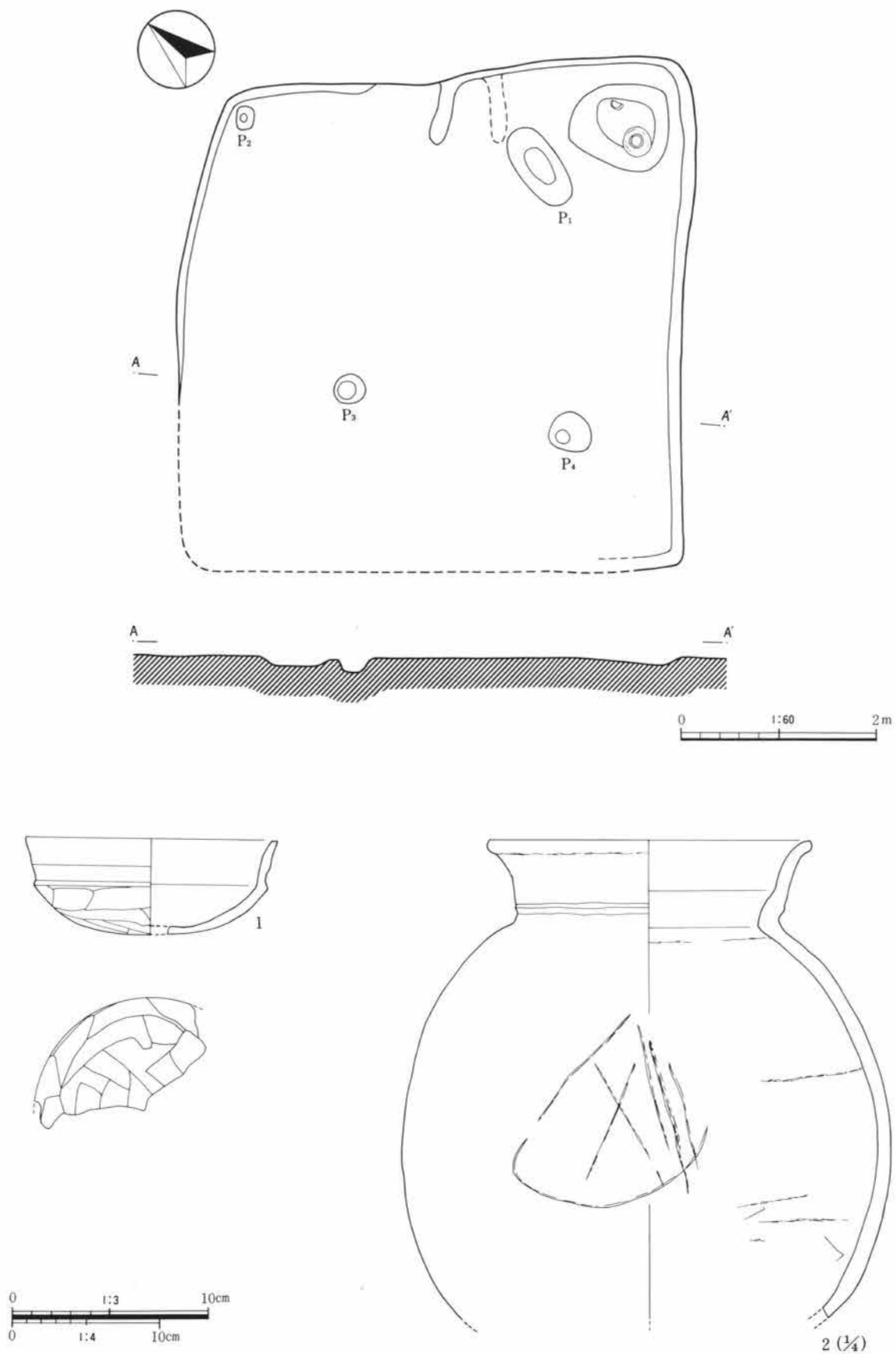
I区B-21・22、C-21・22グリッドに位置する。平面は歪んだ正方形を呈し、規模は5.17×5.18m、面積は推定で(25.0)㎡を測る。主軸方向はN-47°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高7~1cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており比較的平坦。カマドは北東壁の中央部に構築され、左そで部のみ残存する。そで部は壁内に65cm程張り出す。貯蔵穴は東側コーナー部で検出された。平面は不整楕円形を呈しており、規模は100×85cm、深さ53.5cmを測る。ピットは4基が検出された。規模はP₁径90×44cm深さ16cm、P₂径24×17cm深さ25cm、P₃径29cm深さ12.5cm、P₄径40×45cm深さ16cmを測る。P₁とP₄は位置関係から柱穴の可能性が考えられるがP₂とP₃は性格不明である。

遺物はきわめて少なく、本住居跡に伴うものとしては貯蔵穴内より鬼高期の杯、壺が出土している。覆土からは小形壺、杯の破片が数点出土しているが、時期はすべて鬼高期のものである。なお貯蔵穴内出土の壺の胴部には篋描による記号様の刻線がみられる。

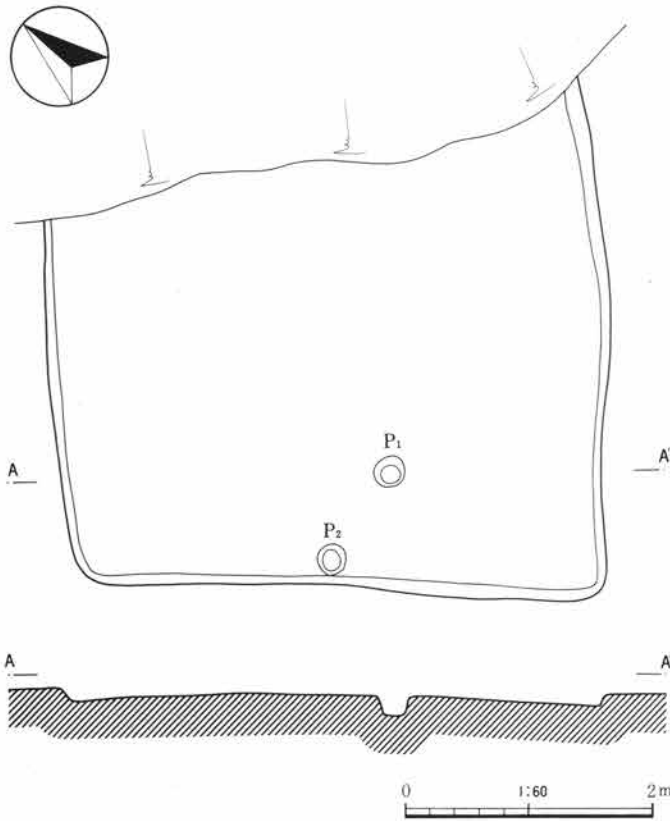
本住居跡との重複遺構はなく単独で検出された。



第61図 38号住居跡出土遺物



第62図 39号住居跡及び出土遺物



第63図 41号住居跡

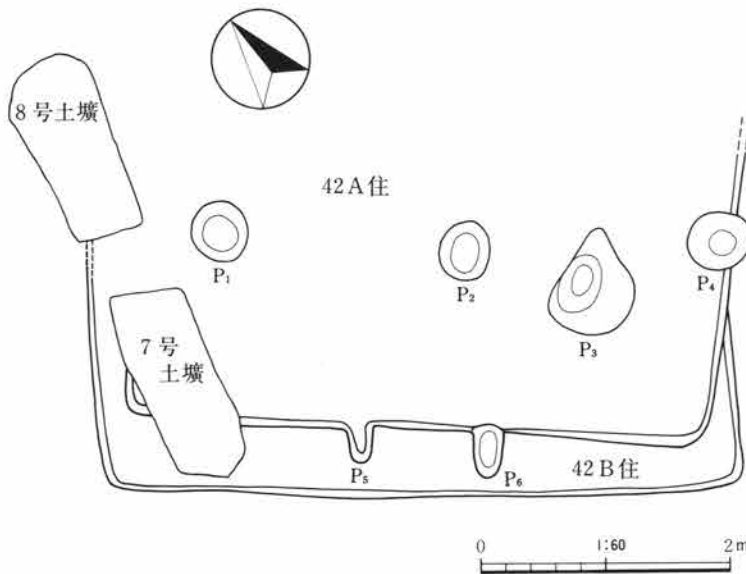
40号住居跡 (欠番)

41号住居跡 (第63図、PL.3)

I区E-21・22グリッドに位置する。東半部を崖で切られる。平面は長方形を呈すると思われる。北西壁—南東壁間の距離は4.52mを測る。南東壁の方向はN-48°-Eを指す。壁は外傾しており、確認壁高は12~4cmを測る。床面は地山のローム土を利用し平坦である。カマドは検出されなかったが、おそらく北東壁に構築されたと推定される。ピットは2基検出され、P₂は南西壁際中央にある。規模はP₁径24cm深さ18cm、P₂径24cm深さ16cmを測る。

遺物は器厚の厚い甕の胴部片が10数片出土しているが、時期については不明である。

重複遺構は認められない。



第64図 42A・42B号住居跡

42A号住居跡 (第64図、PL.4)

I区G-17・18、H-17・18グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが北東半を崖で切られ全形は不明。南西壁の方向はN-50°-Wを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高10.5~5cmを測る。床面は凹凸が多い。ピットは4基検出された。P₁径47cm深さ37cm、P₂径47.4cm深さ15cm、P₃径83.7cm深さ26cm、P₄径47.5cm深さ46cmを測る。

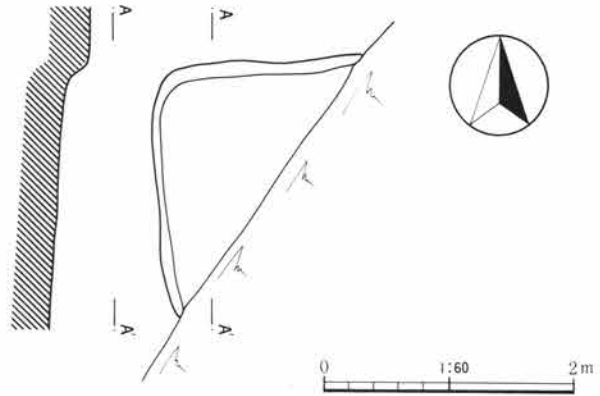
42B号住居跡 (第64図、PL.4)

I区G-17・18、H-17・18グリッドで42A号住居跡と重複して検出された。南西壁の長さは5.15m、方向はN-53°-Wを指す。壁は13~5cmの高さを測る。ピットが南西壁際の中央に2基並列して検出された。P₅は径32.2×20cm深さ5cm、P₆径42×22cm深さ17cmを測る。ピット間距離1mを測る。入口施設に関わるものであろうか。遺物は鬼高期の甕、杯、甌、高杯等40数片が出土している。

43号住居跡 (第65図、PL. 4)

I区B-8グリッドに位置する。方形のコーナーのみ検出され、大半は崖によって切られる。壁は外傾し、確認壁高は22~4cmを測る。床面は凹凸が多い。カマド、周溝、ピット等の施設は全く検出されなかった。

遺物は高杯、甕、鉢、須恵器甕等の小破片20数点が出土した。時期は鬼高期を主体とする。

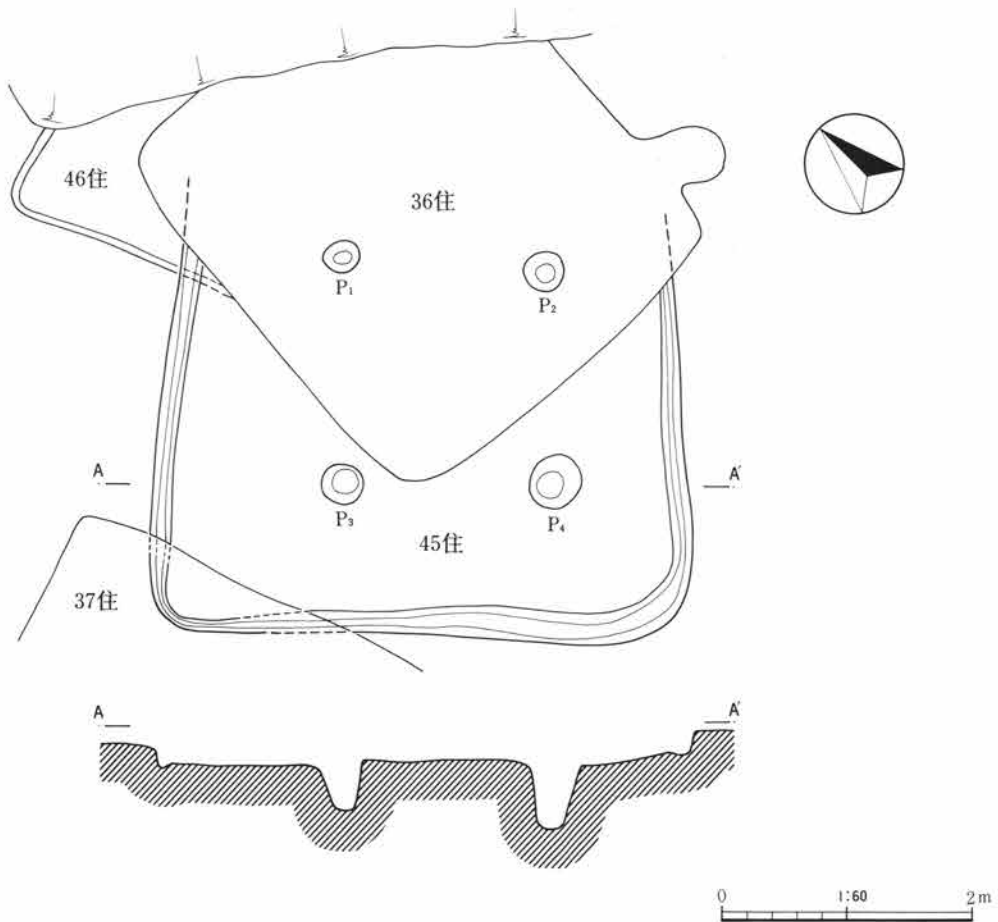


44号住居跡 (欠番)

第65図 43号住居跡

45号住居跡 (第66図、PL. 4)

I区F-19・20、G-19・20グリッドに位置する。正方形を呈すると思われる。南西壁の長さは4.34mを測る。主軸方向はN-(40°)-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は18~6.5cmを測る。床面は比較的凹凸が多く、中央部分がやや窪む。カマドは検出されなかったが、おそらく北東壁に構築されたと思われる。ピットは4基検出された。位置関係からこれらは主柱穴と思われる。規模はP₁径25cm深さ20cm、P₂径32cm深さ20



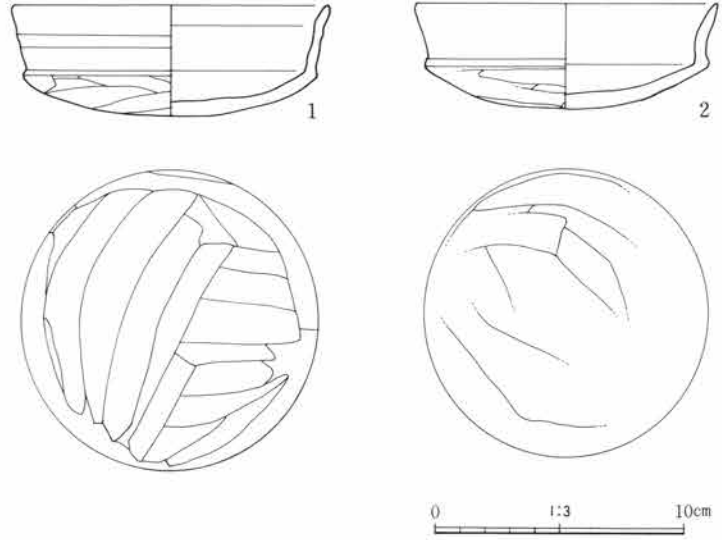
第66図 45・46号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

cm、P₃径32cm深さ33cm、P₄径43cm深さ40cmを測る。各柱間距離はP₁—P₂1.63m、P₂—P₄1.66m、P₃—P₄1.65m、P₁—P₃1.75mを測る。周溝は検出された部分においては全周し、その規模は幅35~10cm深さ4~2cmを測る。覆土はローム粒を多く含む黒褐色土が堆積している。

遺物は杯、甕等が覆土より出土している。ほとんどが鬼高期に属するものである。

重複遺構との新旧関係は土層観察より37号住→45号住→36号住である。



第67図 45号住居跡出土遺物

46号住居跡 (第66図)

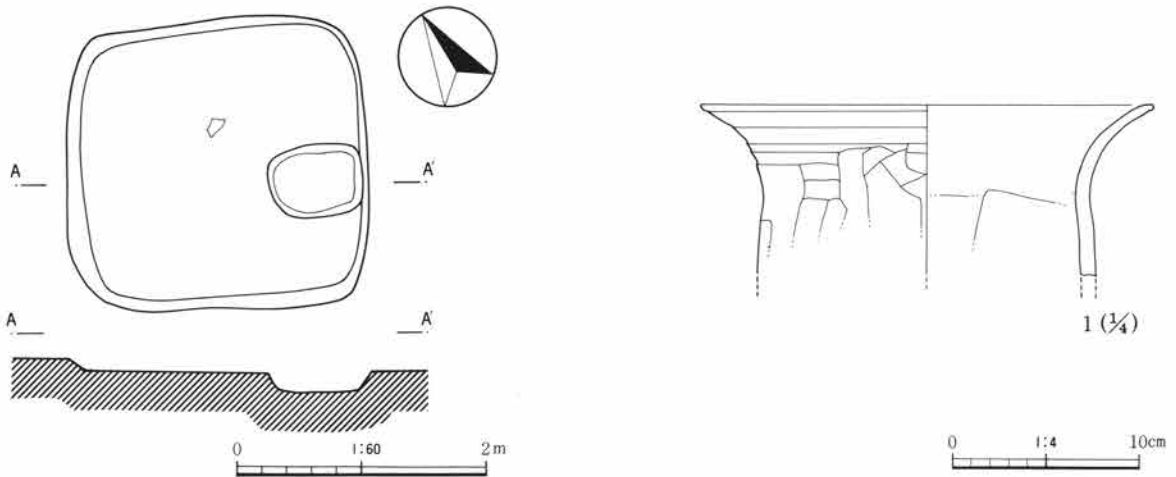
I区F-20グリッドで36号住居跡、45号住居跡と重複して検出された。平面は方形を呈すると推測されるが、西側コーナー部分のみ認められ、全形及び規模等については不明である。壁はやや外傾し、確認壁高は14~9cmを測る。

出土遺物はなし、重複遺構との新旧関係は不明である。

47号住居跡 (第68図、PL.4)

I区C-23、D-23グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は2.31×2.42mで面積は5.10㎡を測る。主軸方向はN-32°-Eを指す。壁は外傾し、確認壁高は17~3cmを測る。床面は比較的平坦。ピットは東壁際中央に1基検出された。平面は隅丸長方形で、規模76×58cm深さ18.5cmを測る。形態、規模から貯蔵穴になる可能性がある。

遺物は甕、杯の破片が床面及び覆土から出土しており、すべて鬼高期のものである。

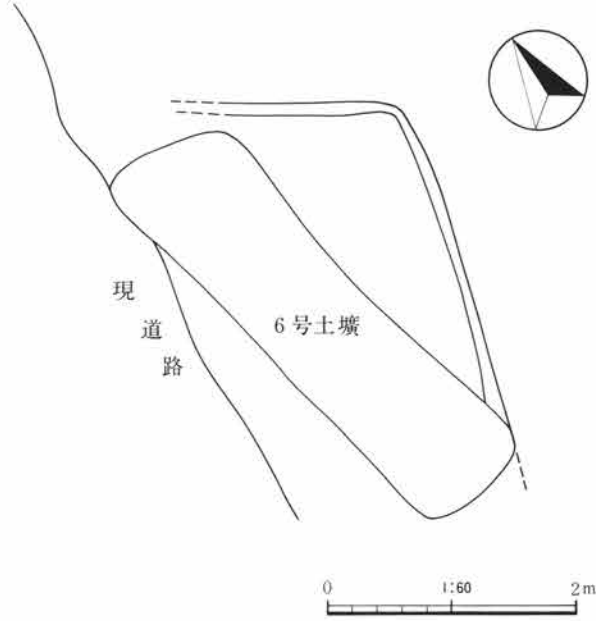


第68図 47号住居跡及び出土遺物

48号住居跡 (第69図)

I区C-24、D-24グリッドに位置する。西半部を崖及び6号土壌により失われているため、全形及び規模は不明。壁は残存状態不良で、確認壁高6.5~3.0cmを測る。

遺物は床面より杯、甕の小破片が出土している。時期は不明である。



第69図 48号住居跡

49号住居跡 (第70図、PL. 4)

I区C-23・24、D-23・24グリッドに位置する。平面は歪んだ正方形を呈する。西側コーナー部は崖に切られ不明である。規模は4.68×4.88m、面積(21.6)㎡を測る。主軸方向はN-54°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は22~16.5cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が激しい。カマドは

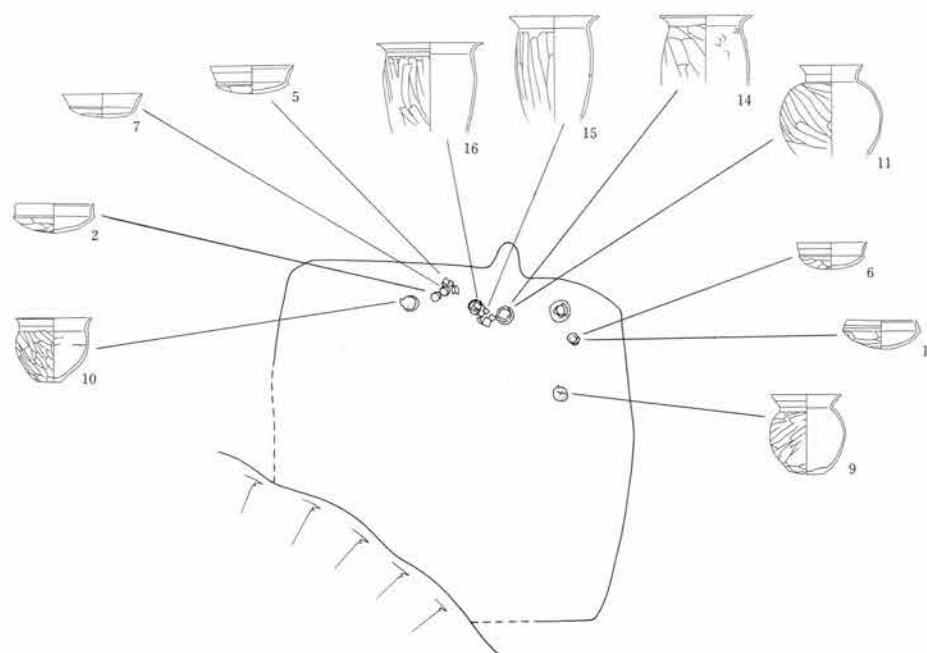
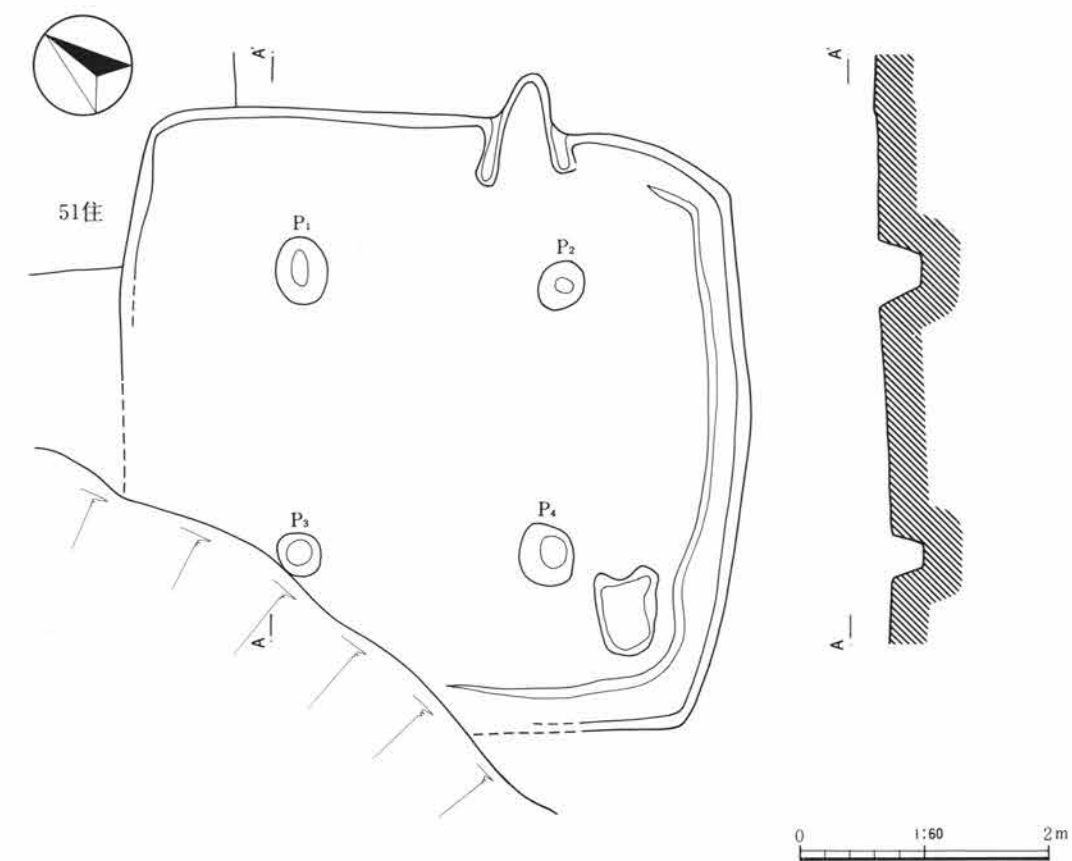
北東壁の中央よりやや南東寄りに構築されている。残存状態は比較的良好で、そで部、燃烧部、煙道部が残る。規模は長さ90cm、幅80cmを測る。軸方向はN-57°-Eを指す。そで部は壁内に50cm前後張り出す。燃烧部は比較的幅広く、45cm程を測る。煙道部は燃烧部より弱い段を形成して緩い角度で立ち上がる。なお焚口のやや右側に壺上半部と甕の上半破片が重なる状態で出土しているが、支脚用としての二次的利用が推定される。貯蔵穴は南側コーナー部で検出された。規模は51×49cm深さ11cmで、比較的浅いものである。ピットは4基検出された。これらは位置、規模等より支柱穴と考えられる。規模はP₁径53×42cm深さ34cm、P₂径37cm深さ58cm、P₃径35cm深さ25cm、P₄径44cm深さ41cmを測る。なお各柱間距離はP₁-P₂2.12m、P₂-P₄2.11m、P₁-P₃2.02m、P₃-P₄2.00mを測る。又南東壁に沿って幅27~14cm、高さ8~5cmのテラス状施設が検出されているが、これが本住居跡の構造なのか、あるいは住居拡張に伴う旧壁面なのかは判断できなかった。

遺物は床面及び覆土より杯、甕、小形甕、高杯、高台付椀、紡錘車が出土している。高台付椀及び杯の数片については平安時代のもを含むが、ほとんどが鬼高期に属するものである。出土位置はカマド焚口部分及びその周辺に集中している。杯のうちには完形で出土したものもあるが、ほとんどは破片の状態であるため住居廃絶以後廃棄されたものと考えたい。

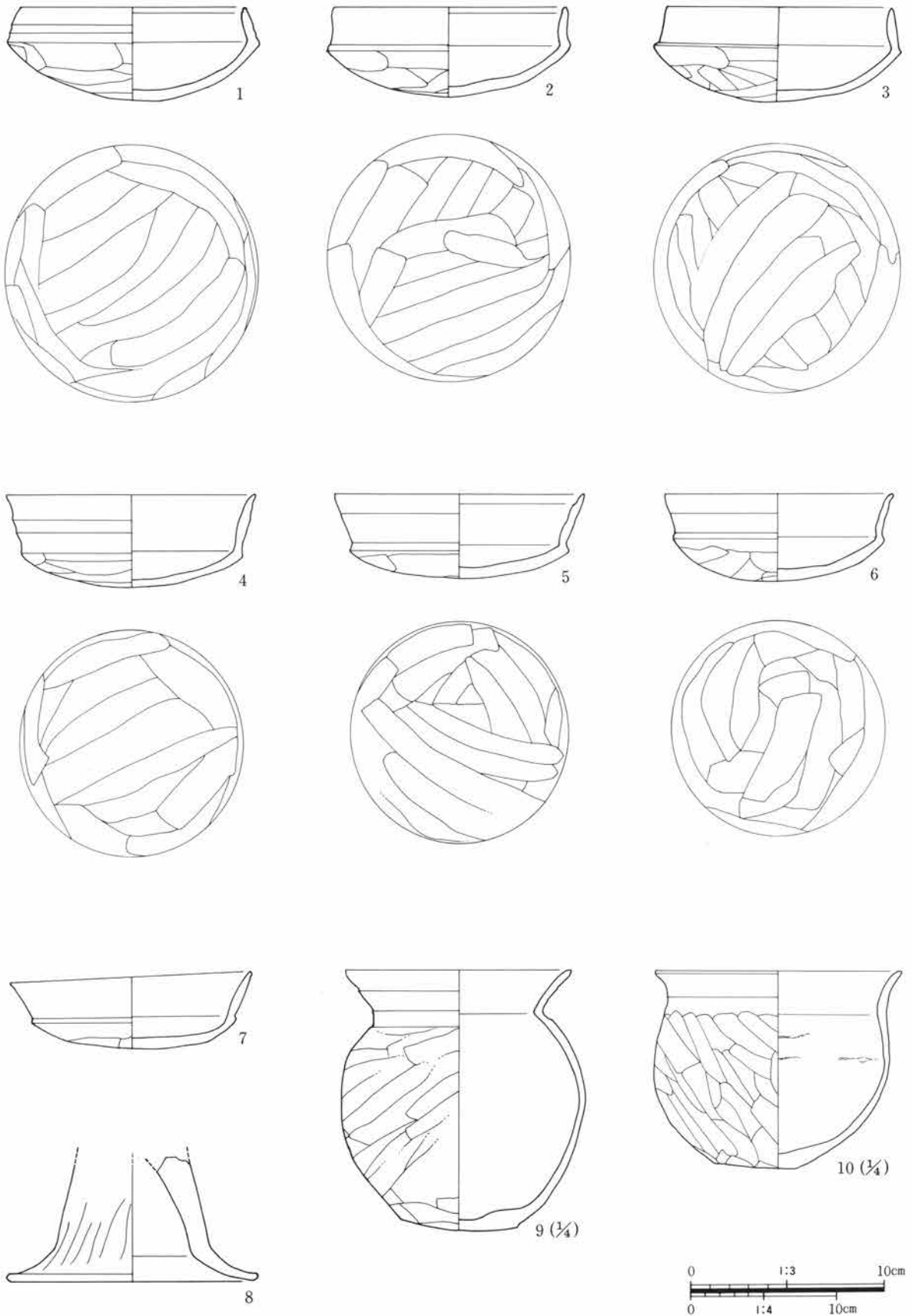
重複遺構は51号住居跡で、新旧関係は不明であった。

50号住居跡 (第73図、PL. 4)

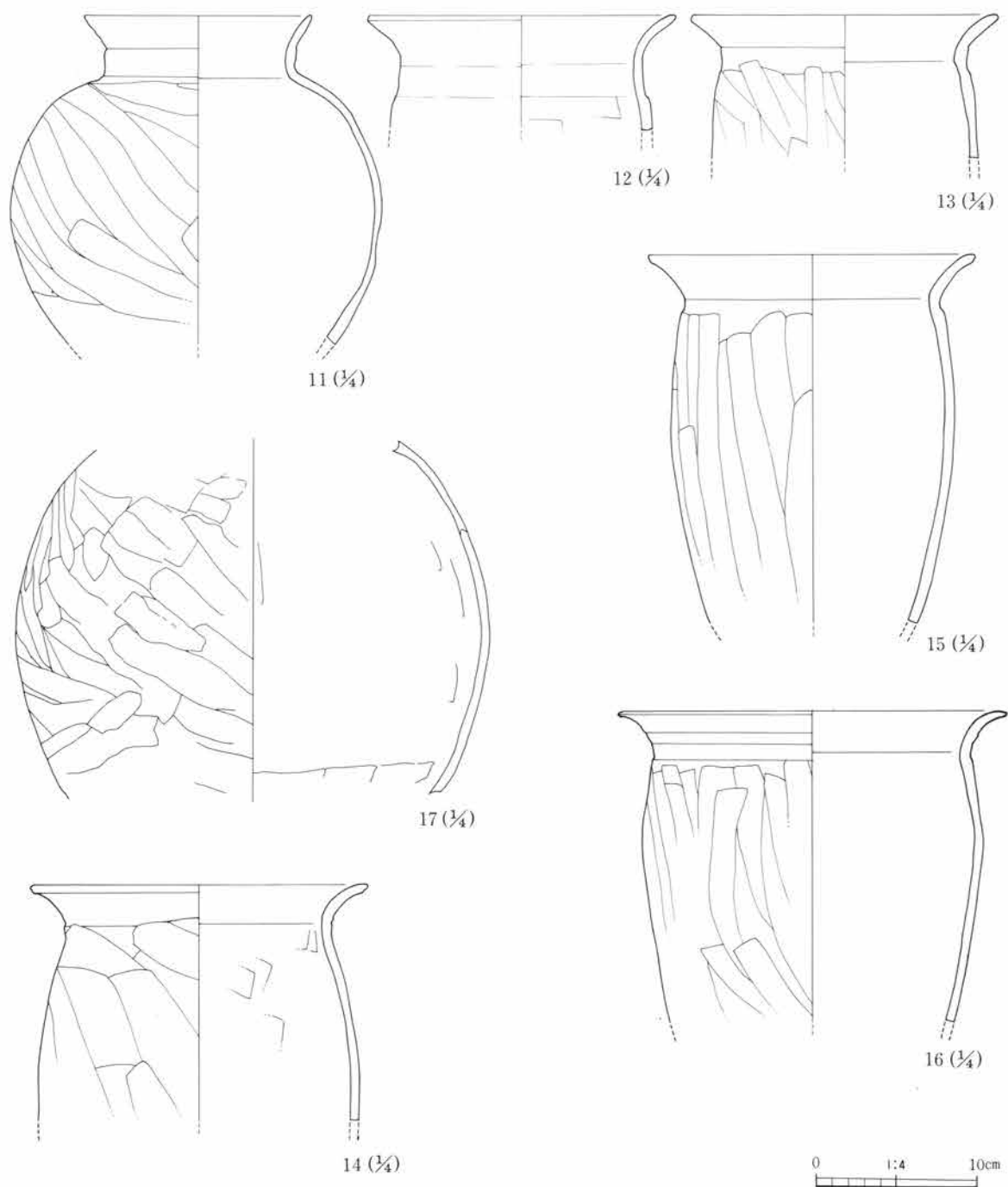
I区D-25、E-25グリッドに位置する。平面は歪んだ縦長長方形を呈する。西壁部分は現道路に切られて不明である。規模は(4.23以上)×3.92mを測る。主軸方向はN-87°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は46~3cmを測る。床面は地山のローム土を利用し比較的平坦である。カマドは東壁の南隅に構築され、そで部は不明瞭で、燃烧部と煙道部が残存する。長さ1.24m、幅0.50mを測り、軸方向はS-84°-Eを指す。煙道は緩い曲線を描いて立ち上がり、その末端付近で甕形土器片が出土している。これは煙道部の補強的な意味をもつものかもしれない。貯蔵穴は北東コーナー部で検出された。規模は71×62cm、深さ30cmを測る。ピット



第70図 49号住居跡及び遺物分布図



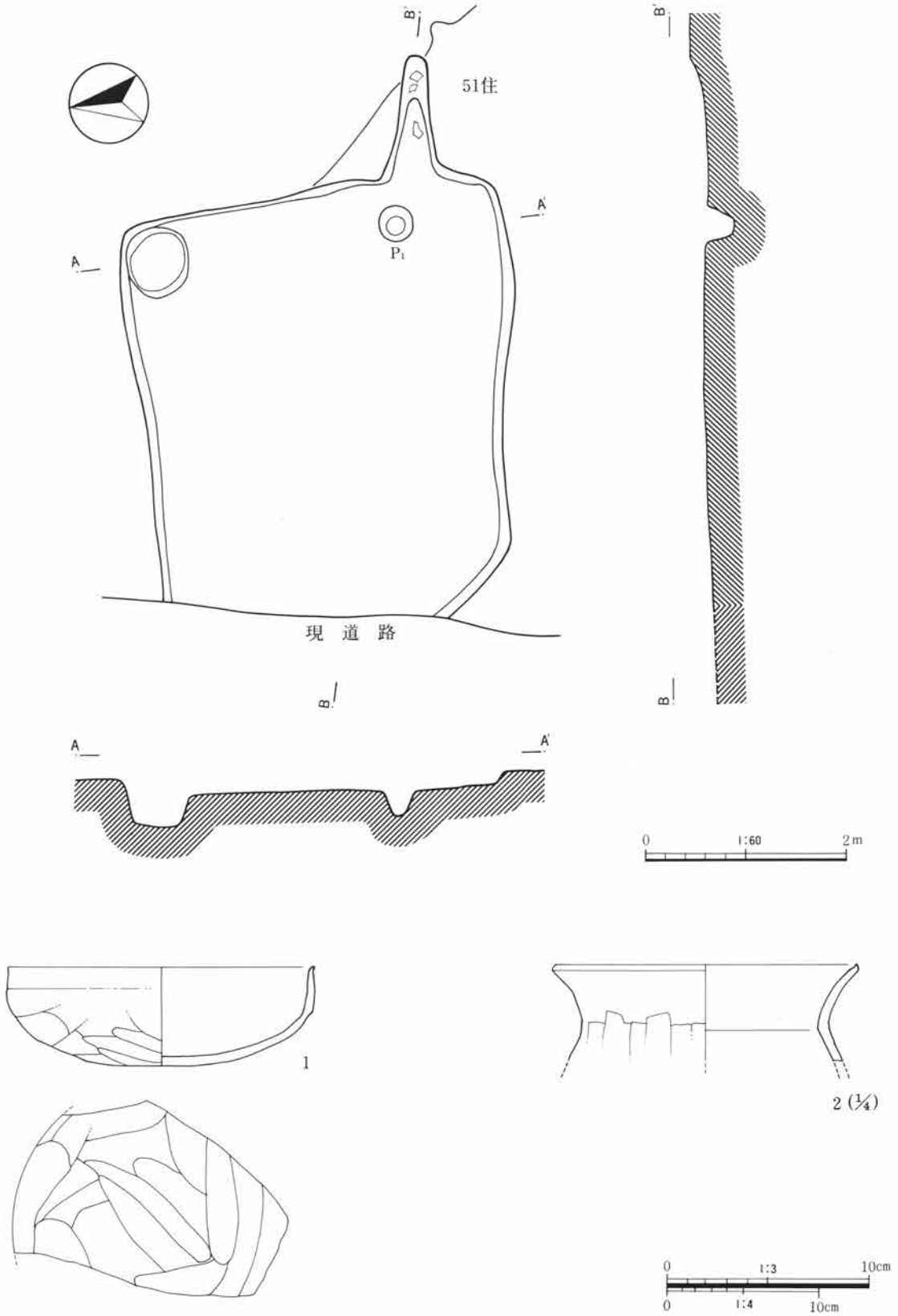
第71図 49号住居跡出土遺物(1)



第72図 49号住居跡出土遺物(2)

はカマド焚口手前に1基検出された。規模は径35cm深さ26.5cmを測る。位置から柱穴とは考え難く、その性格については不明である。覆土は黒色土を基調にしてロームブロックを多量に含んでおり、堆積状況がレンズ状ではなくむしろブロック状であるため、人工的埋土の可能性が考えられる。

遺物は杯、甕、埴輪の破片がカマド周辺を中心に多数出土している。時期は奈良時代のものが主体である。重複遺構との新旧関係はカマド残存状況より51号住→50号住と考えられる。

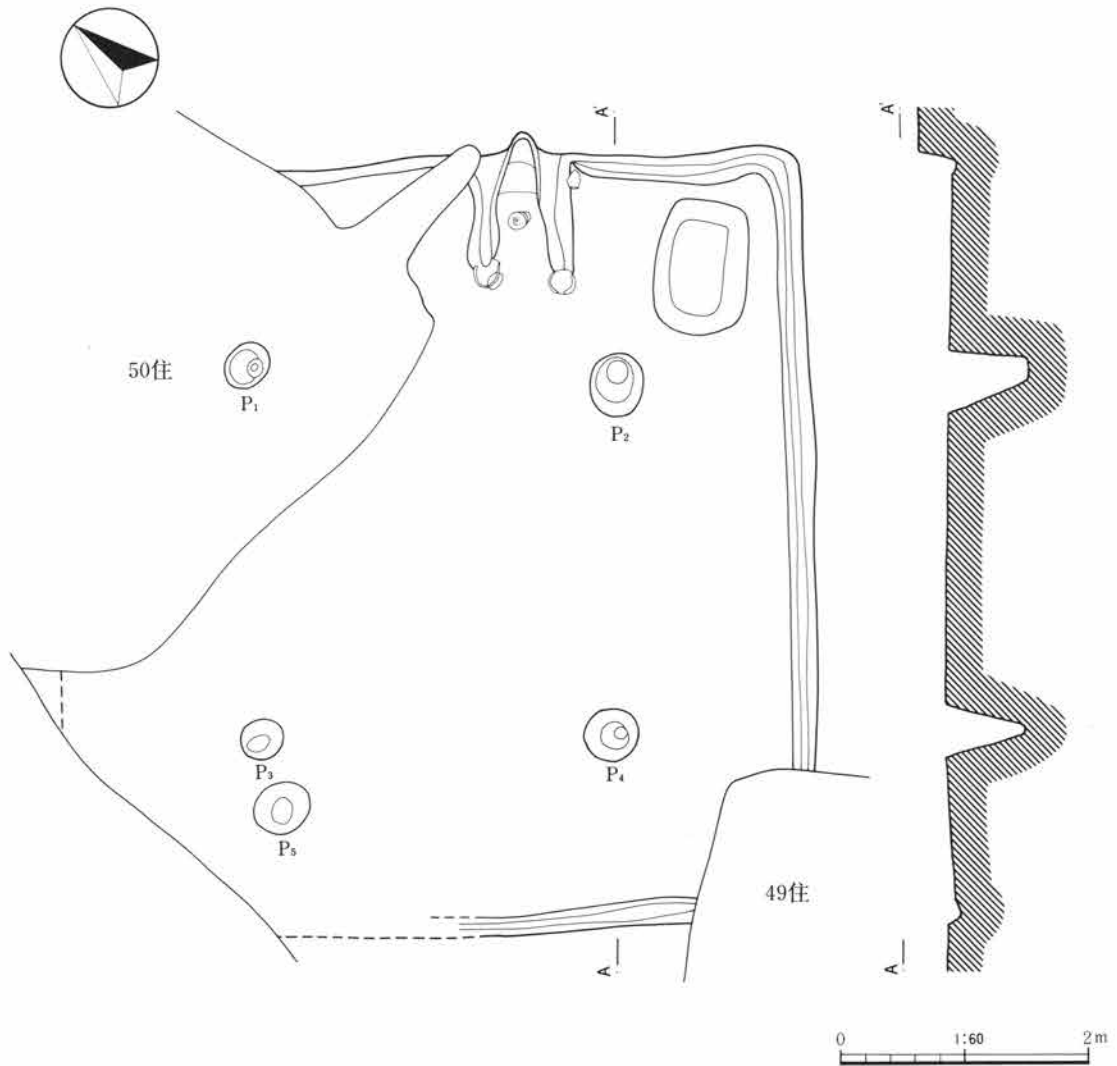


第73図 50号住居跡及び出土遺物

51号住居跡（第74図、PL.4）

I区D-24・25、E-24・25グリッドに位置する。平面は正方形を呈すると思われるが、西半部については50号住居跡、現道路に切られて不明である。規模は6.90×(4.20以上)mである。主軸方向はN-44°-Eを指す。壁は比較的良好な残存状態を示しており、確認壁高は25~13cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が多い。カマドは北東壁中央よりやや南東寄りに構築されている。規模は長さ1.28m幅は0.85mを測る。軸方向はN-57°-Eを指す。そで部は壁内側に1.10m程張り出す形態で、煙道部は燃烧部から段を形成して急角度で立ち上がる。なおそで部先端には甕を伏せて焚口部の補強としており、又燃烧部中央には高杯を倒立設置し支脚用としている。貯蔵穴は東側コーナー部で検出された。これは隅丸長方形を呈し、規模108×70cm、深さ85cmを測る比較的大形のものである。ピットは5基検出され、規模はP₁径40×32cm深さ63cm、P₂径51×43cm深さ65cm、P₃径35cm深さ55cm、P₄径44cm深さ64cm、P₅径45cm深さ34cmである。このうちP₁~P₄は主柱穴と思われる。柱間距離はP₁-P₂2.92m、P₃-P₄2.91m、P₁-P₃2.97m、P₂-P₄2.88mを測る。又周溝は南東半の壁に沿って検出されている。規模は幅26~15cm深さ11~1cmを測る。

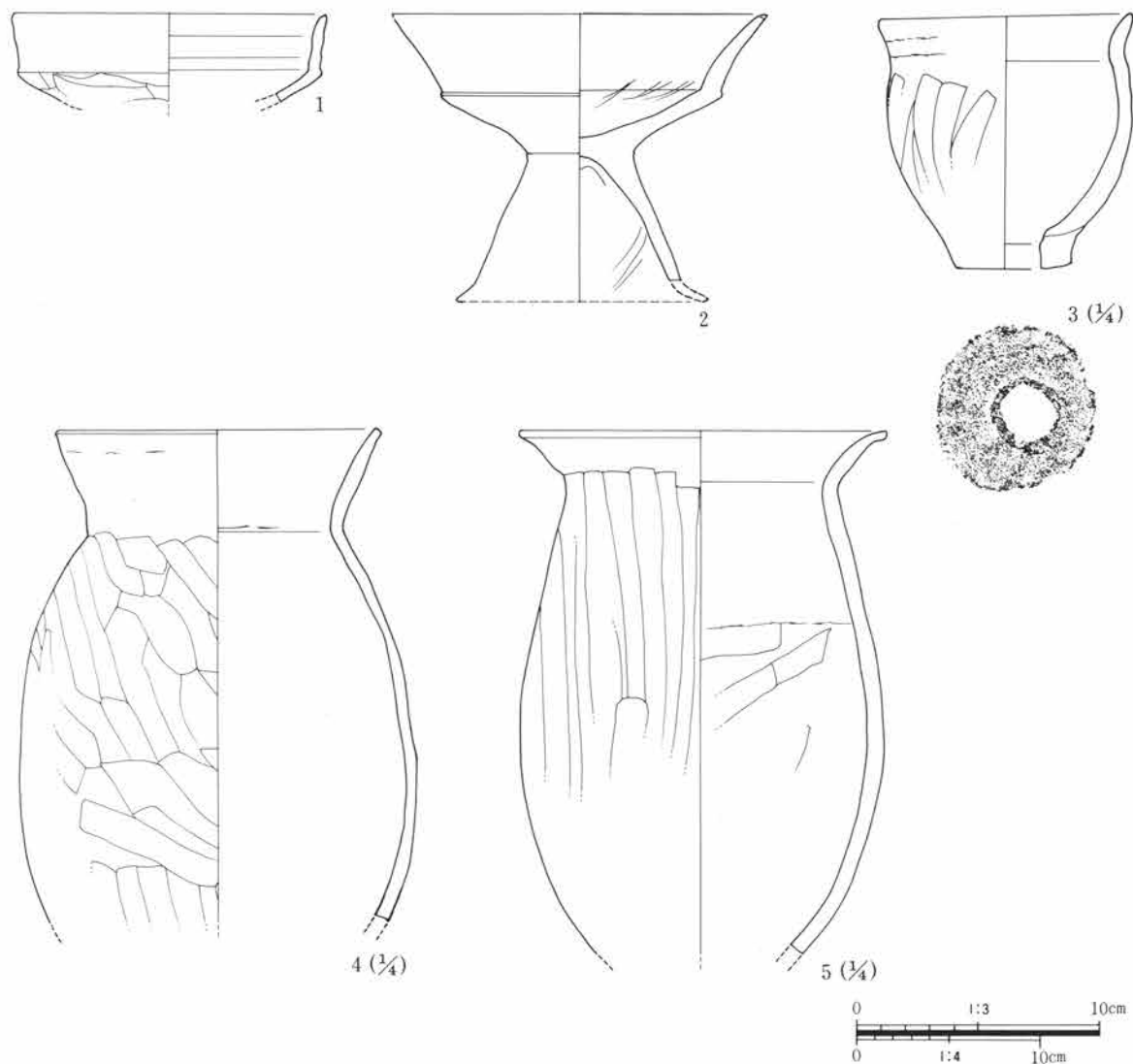
遺物は主にカマドを中心にして出土しており、杯、甕、甗、高杯、白玉等がみられる。時期は鬼高期のも



第74図 51号住居跡

のを主体としている。

重複遺構との新旧関係は51号住→50号住である。

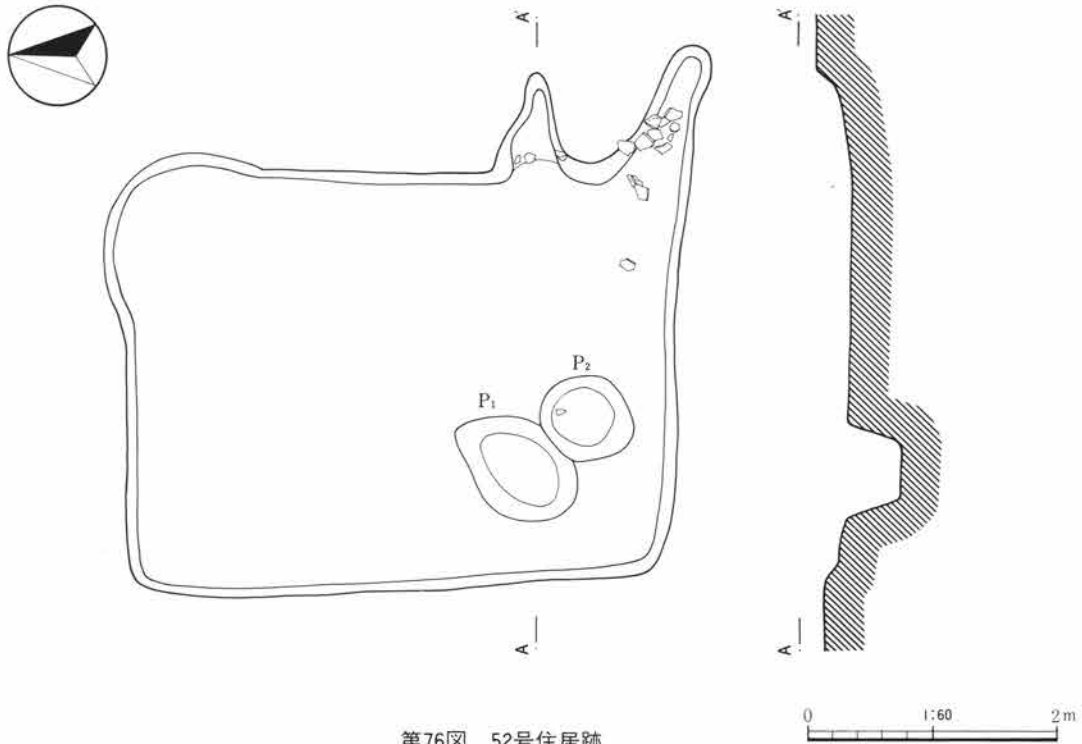


第75図 51号住居跡出土遺物

52号住居跡 (第76図、PL. 4)

II区B-4・5、C-5グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈する。規模は3.50×4.38m、面積は14.20㎡を測る。主軸方向はN-89°-Eを指す。壁は残存状態良好でほぼ垂直に掘り込まれており、確認壁高は29~10cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、平坦で硬質である。カマドは東壁の南端に2基検出された。1号カマドは長さ88cm幅50cm、軸方向S-89°-Eで、2号カマドは長さ128cm幅75cm、軸方向S-74°-Eを測る。両カマドともそで部はみられず、燃焼部と煙道部のみを残す。ピットは2基検出され、P₁径110×71cm深さ45cm、P₂径76×67cm深さ49cmを測る。いずれも貯蔵穴と推定されるが、南北に並列しており、カマドがこれに対応するように並列する事から、これを本住居跡が南方へ拡張したものと想定し、それに伴い1号カマドーピットP₁、2号カマドーピットP₂のセットで移設したと考えられるようである。

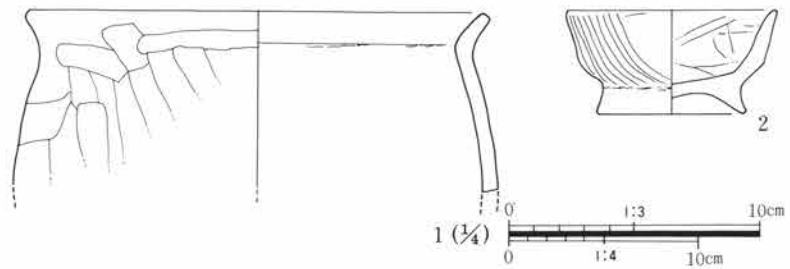
遺物は甕、高台付杯、支脚及び円筒埴輪片が2号カマド内より出土している。平安時代のものである。そ



第76図 52号住居跡

の他に縄文土器加曾利E式の土器片が覆土から多く出土しているが、これは周辺からの流れ込みと考えられる。

重複遺構はなく単独で検出されている。

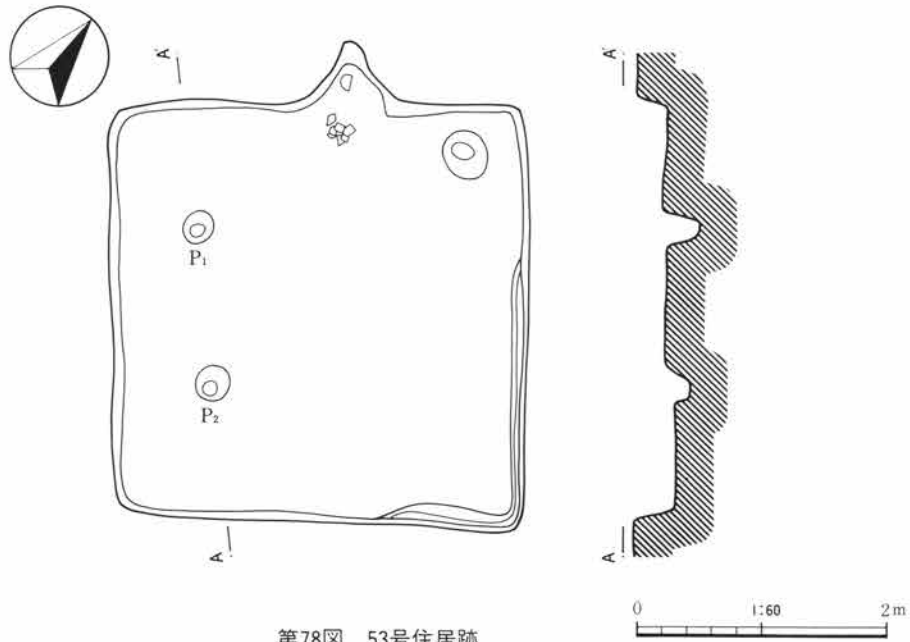


第77図 52号住居跡出土遺物

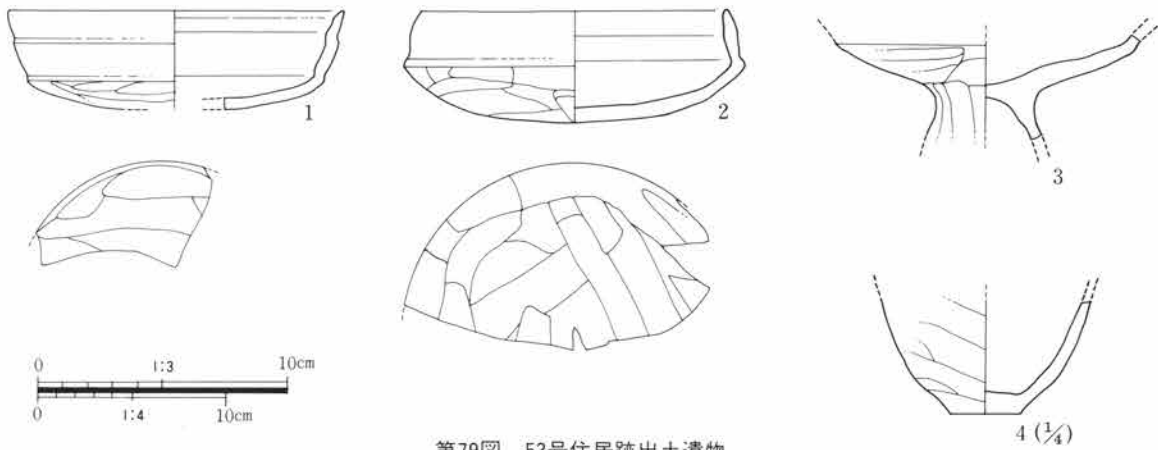
53号住居跡 (第78図、PL. 4)

II区B-15・16グリッドに位置する。ほぼ正方形を呈し、規模は3.33×3.37m、面積11.30㎡を測る。主軸方向はN-37°-Wを指す。壁は残存状態良好で、確認壁高は37~25cmを測る。又床面は地山のローム土を利用し、ほぼ平坦な面を呈する。カマドは北西壁のほぼ中央に構築される。規模は長さ60cm幅72cmを測る。軸方向はN-44°-Wを指す。そで部はみられず、やや幅広の燃焼部をもつ形態を呈する。煙道部は緩い角度で立ち上がる。貯蔵穴は北側コーナー部のカマド右脇で検出された。平面は円形を呈し、規模は38×37cm、深さ38cmを測る。ピットは2基が検出されている。いずれも南西壁より60cm程離れて、壁の走向と並列して掘り込まれている。規模はP₁径25cm、深さ30.5cm、P₂径28cm、深さ20.5cmを測る。以上の2基は位置関係と規模から支柱穴の可能性を考えたいが、4本柱を基本として想定した場合に対応する他の2基については確認できなかった。周溝は東側コーナー周辺に沿って検出された。幅17~8cm、深さ12~2cmを測る。

遺物は杯、高杯、甕、埴輪等がカマド周辺より出土している。いずれも破片で鬼高期のものと思われる。重複遺構はない。



第78図 53号住居跡



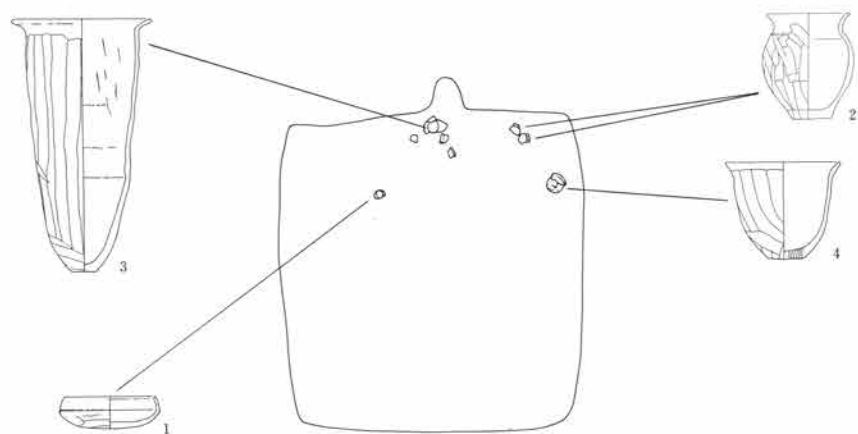
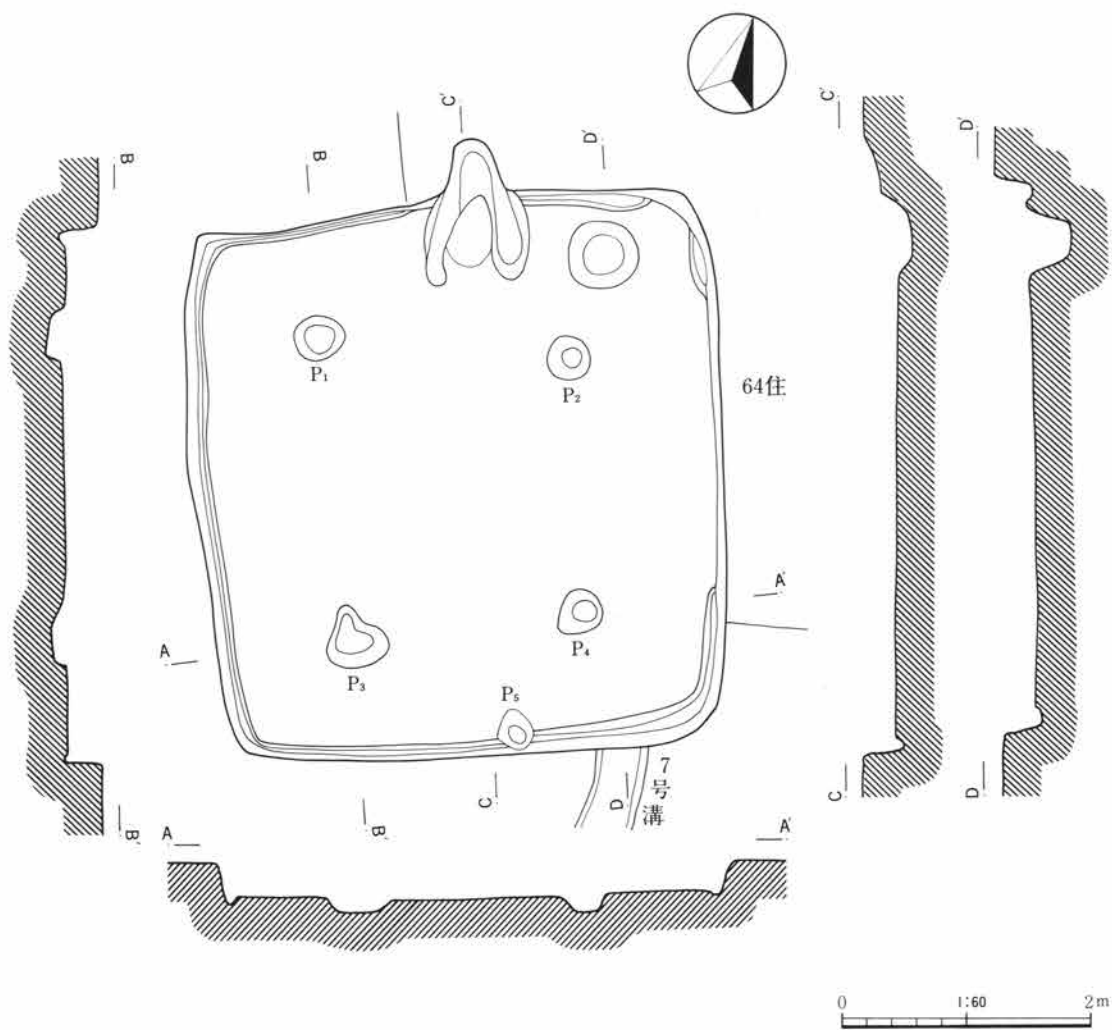
第79図 53号住居跡出土遺物

54号住居跡（第80図、PL. 4）

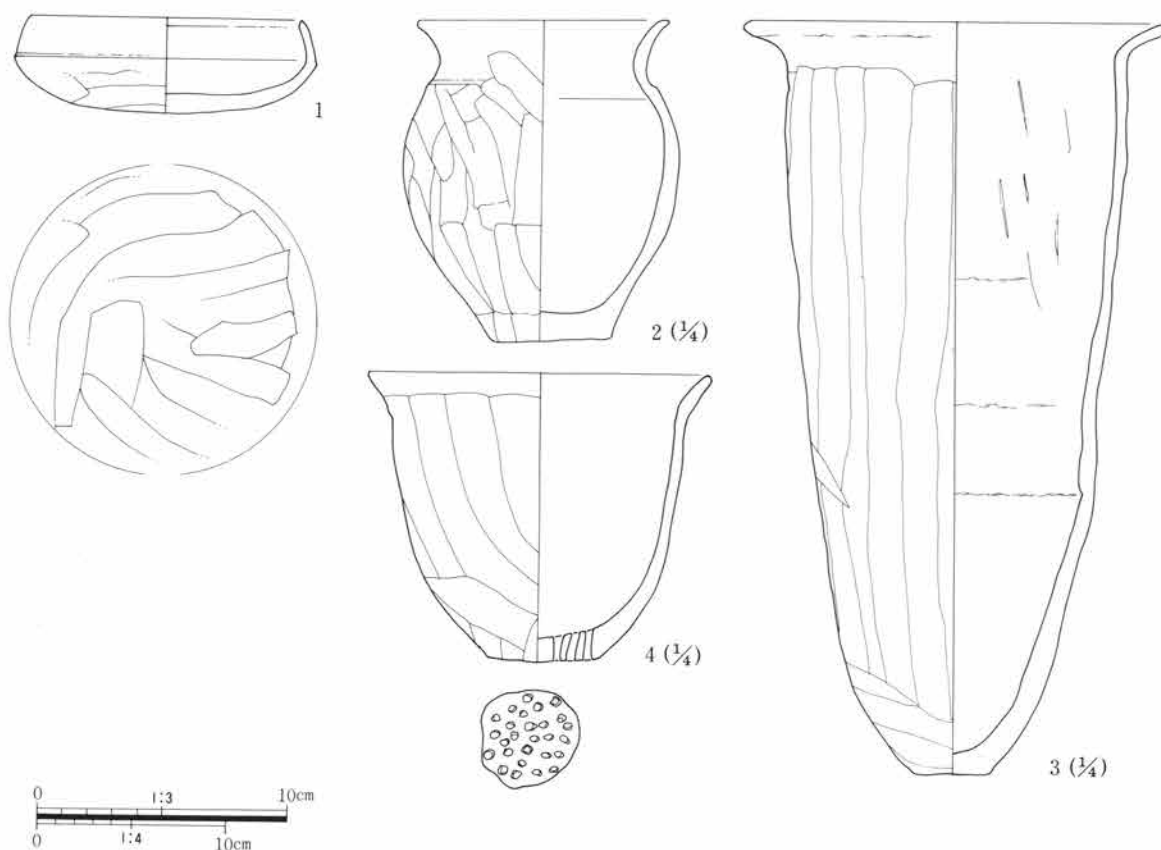
II区G-20・21グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈し、規模は4.42×4.29m、面積18.20m²を測る。主軸方向はN-24°-Wを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は31~16cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、硬質で全体に平坦である。カマドは北壁中央に構築され、残存状態は良好であった。規模は長さ1.15m幅0.83mを測る。軸方向はN-22°-Wを指す。そで部は壁内へ63cm程張り出す。焼面は浅い皿状を呈して窪む。煙道部は段を形成して焼面と区別され、比較的緩い傾斜角度で立ち上がる。貯蔵穴はカマド右脇で検出された。円形を呈し、規模は径53cm深さ34cmを測る。ピットは5基検出された。P₁~P₄は位置的に支柱穴と考えられる。規模はP₁径41cm深さ11cm、P₂径35cm深さ13cm、P₃径50×47cm深さ12cm、P₄径39cm深さ12cm、P₅径33cm深さ20cmを測る。柱間距離はP₁-P₂2.03m、P₃-P₄1.90m、P₁-P₃2.42m、P₂-P₄2.00mを測る。周溝は東壁沿いの一部を除いて全周し、幅25~6cm深さ6~2cmを測る。

遺物は甕、杯、甑、小形甕が出土している。全て鬼高期と思われる。

重複遺構との新旧関係は64号住→54号住である。



第80図 54号住居跡及び遺物分布図



第81図 54号住居跡出土遺物

55号住居跡（第82図、PL. 4）

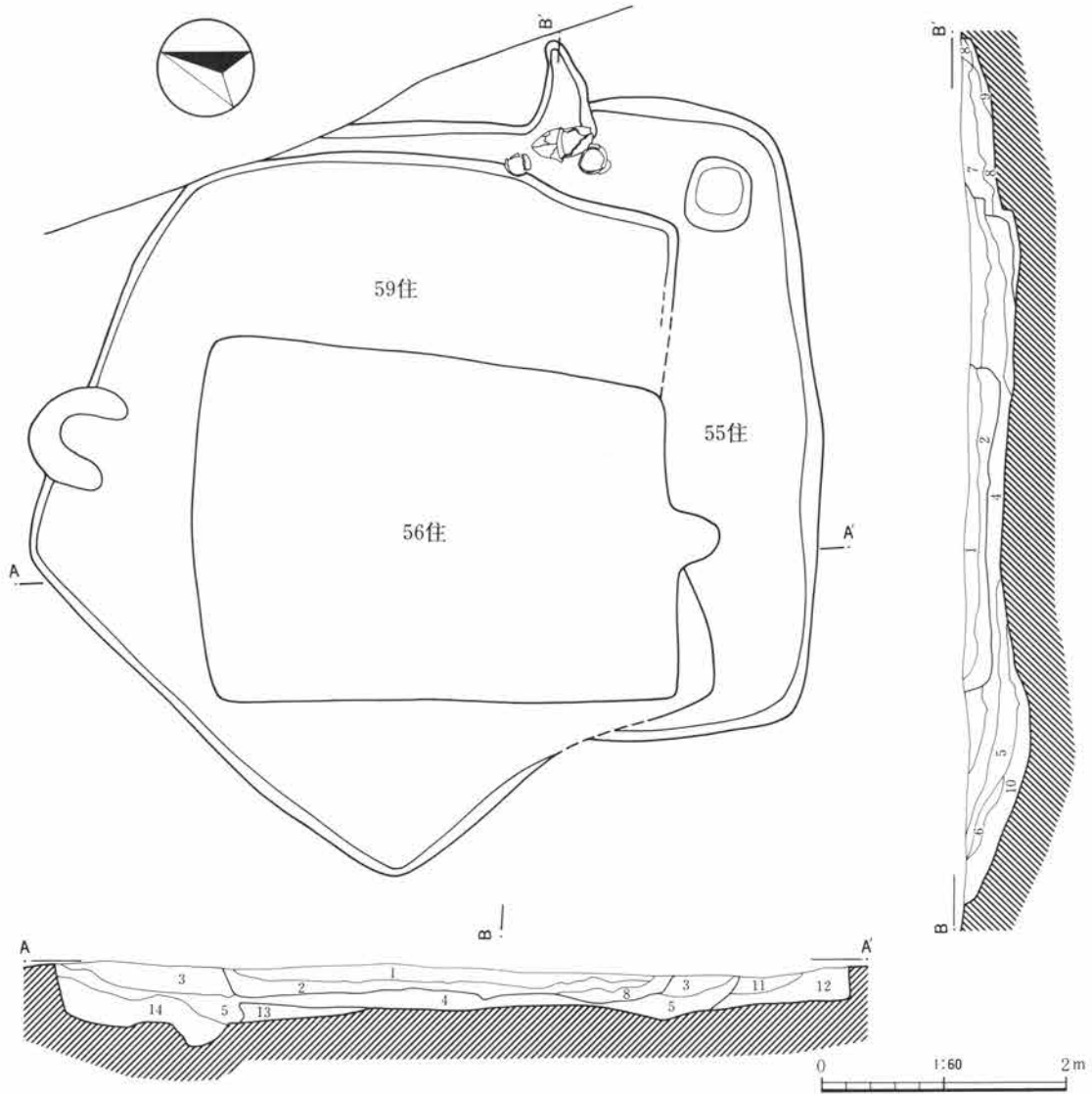
II区H-22・23グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが、他遺構との重複により全形は不明。東—西壁間は5.16mを測る。主軸方向はN-73°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は27.5~16.5cmを測る。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、残存状態は比較的良好である。長さ1.10m前後、幅0.86mを測る。軸方向はN-75°-Eを指す。そこで両端部に甕を伏せ、又焚口~燃烧部で2個の甕が合口の「合掌造」様の状態で出土した。これらはおそらく焚口部分の構造補強材に用いられたと考えられる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。隅丸正方形を呈し、規模は58×53cm深さ42.5cmを測る。

遺物は本住居跡に伴出するものとしてカマド及び貯蔵穴出土のものが全てと考えられ、鬼高期の甕が主体を占める。重複遺構は56号住居跡、59号住居跡で、新旧関係は土層観察より55号住→59号住→56号住である。

56号住居跡（第82図、PL. 4）

II区H-22・23グリッドに位置する。縦長長方形を呈する。規模は3.95×2.95m、面積は10.90㎡を測る。主軸方向はS-21°-Eを指す。壁は土層断面より26cmを測る。床面は59号住居跡覆土で、中央部がやや高く軟質である。カマドは南壁中央付近に構築されたと思われ、37×56cmの規模で焼土分布が見られる。貯蔵穴、ピット、周溝等は検出されなかった。

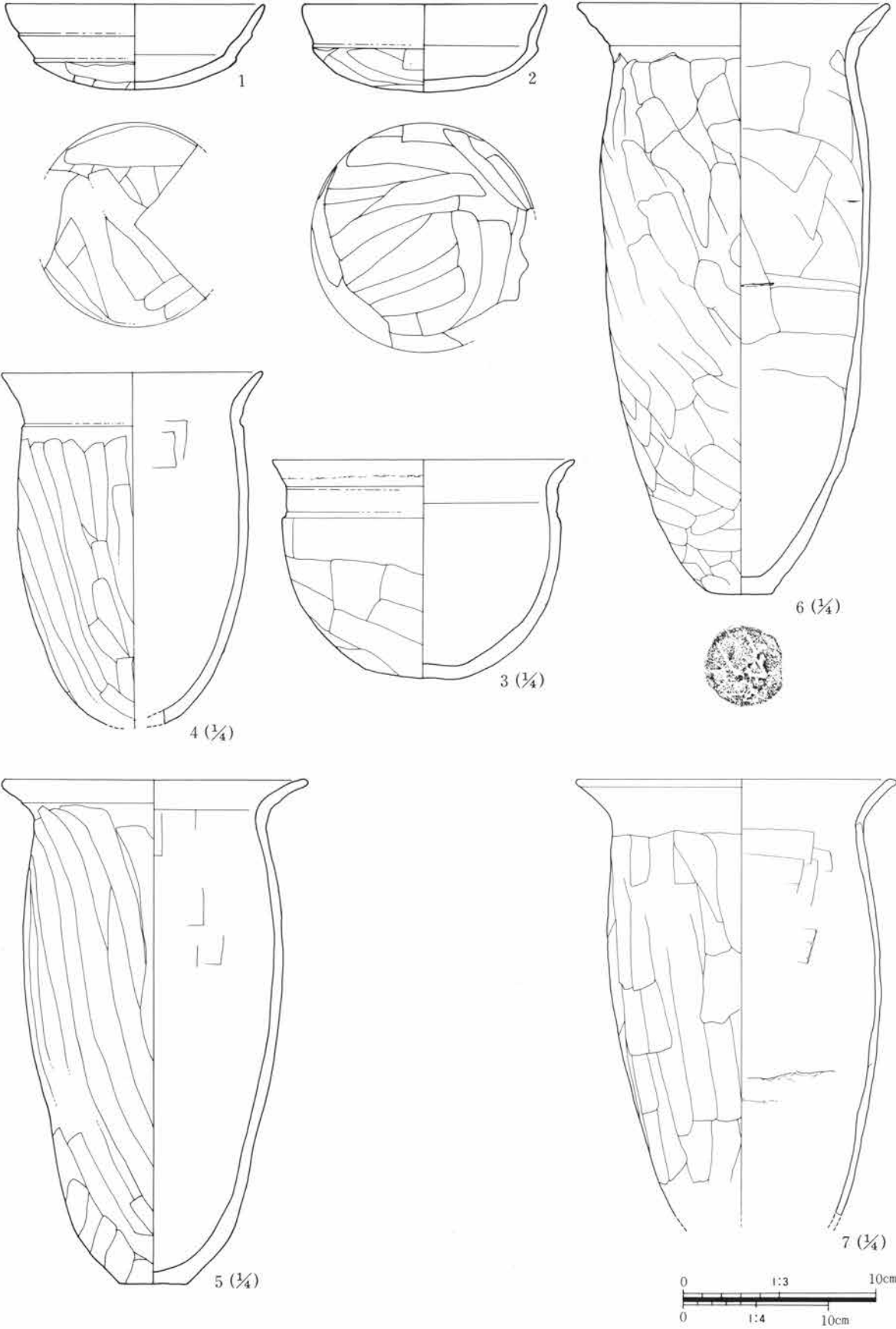
遺物は住居内全体に分布して覆土から破片が出土している。杯、甕、須恵器杯、同壺等が主で、奈良時代のものが主体を占める。



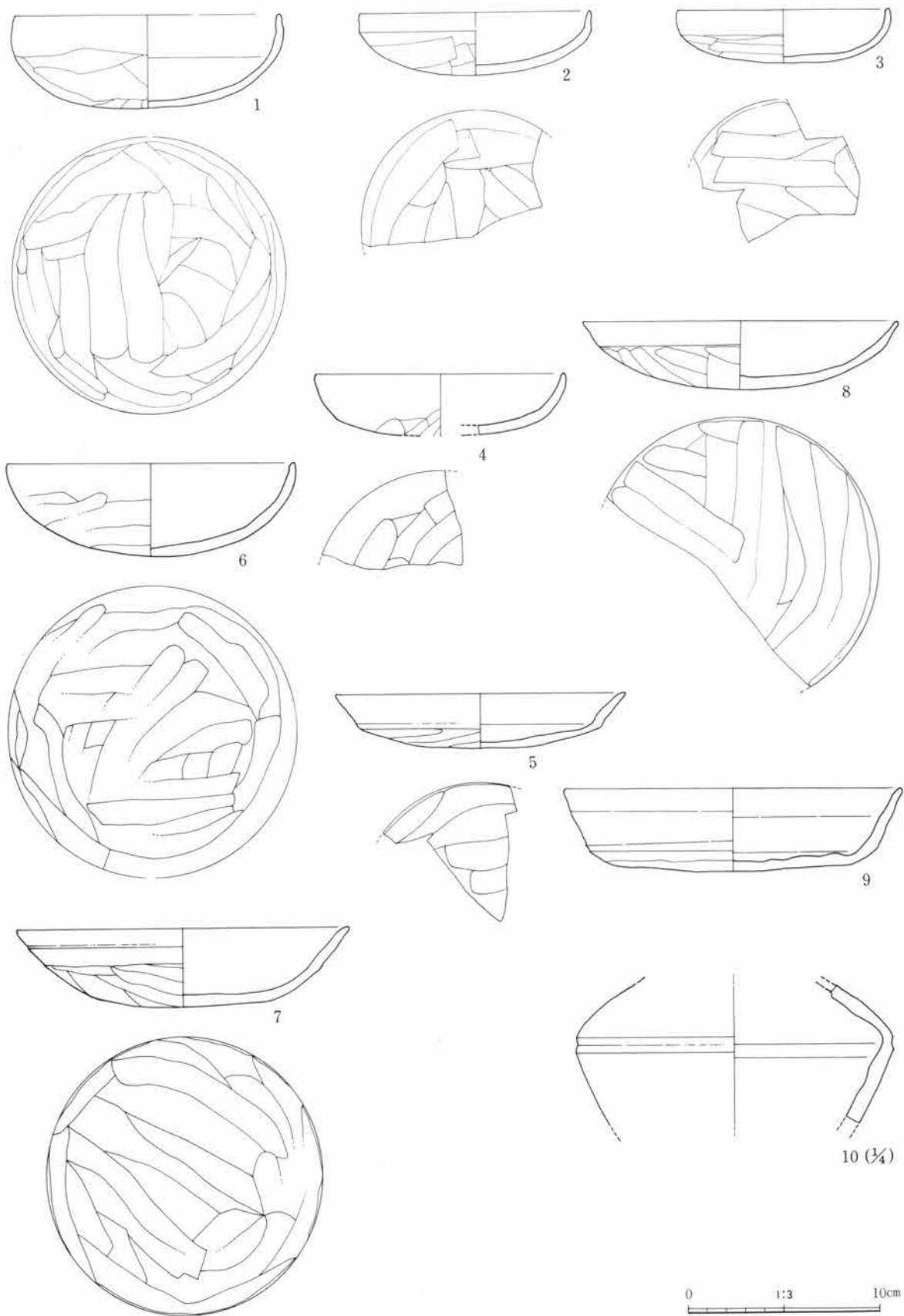
- | | |
|----------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土層 | 粘性少なく軟質。鉄分凝集が見られる。 |
| 2 黒色土層 | 粘性少なく硬質。鉄分凝集が若干見られる。 |
| 3 暗褐色土層 | 粘性少なく硬質。鉄分凝集が若干見られる。 |
| 4 黒色土層 | 粘性あり、鉄分凝集が若干見られる。 |
| 5 黒色土層 | 粘性あり、ローム粒を多量に含む。 |
| 6 暗褐色土層 | 黒色土粒とローム粒の混合土。 |
| 7 黒褐色土層 | 焼土ブロックを多量に含む。 |
| 8 褐色土層 | 焼土粒と灰を多量に含む。 |
| 9 褐色土層 | 焼土粒と炭化物粒を多量に含む。 |
| 10 黒色土層 | 粘性あり、ロームブロックを多量に含む。 |
| 11 黒色土層 | ローム粒と軽石を多量に含む。 |
| 12 黄褐色土層 | ロームブロックを主体とする。 |
| 13 暗褐色土層 | 黒色土粒とローム土粒の混合土。ロームブロックと炭化物を若干含む。 |
| 14 黄褐色土層 | ロームを主とし、黒色土をブロック状に含む。 |

- 1・2・8——56号住居跡覆土
 3～6・13——59号住居跡覆土
 7～9・11・12——55号住居跡覆土
 10・14——木根による攪乱

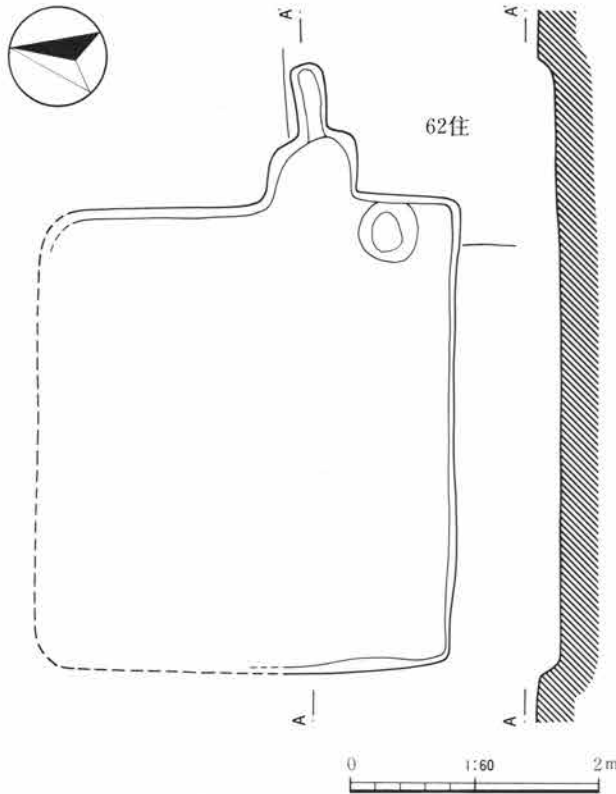
第82図 55・56・59号住居跡



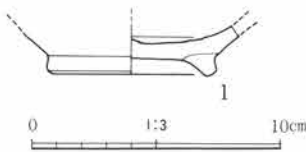
第83図 55号住居跡出土遺物



第84図 56号住居跡出土遺物



第85図 57号住居跡



第86図 57号住居跡出土遺物

57号住居跡 (第85図、PL. 4)

II区E-24・25、F-24・25グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる、規模は3.80×3.25m、面積は12.30㎡を測る。主軸方向はN-78°-Eを指す。壁は残存状態不良で北西部は後世の削平のため不明瞭である。確認壁高は27~10cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築されており、残存状態は比較的良好である。長さ1.13m、幅0.74mを測り、軸方向はN-72°-Eを指す。そで部は見られず、燃烧部は奥行50cm程壁の外に張り出す。煙道は燃烧部レベルとほとんど差をもたずに延び、末端部で急角度をなして立ち上がる。貯蔵穴は南東端のカマド右脇で検出された。円形を呈し、径47cm深さ15cmを測る。ピット、周溝等は検出されなかった。

遺物は高台付椀、杯、甕が若干出土したのみである。時期は平安時代と考えられる。

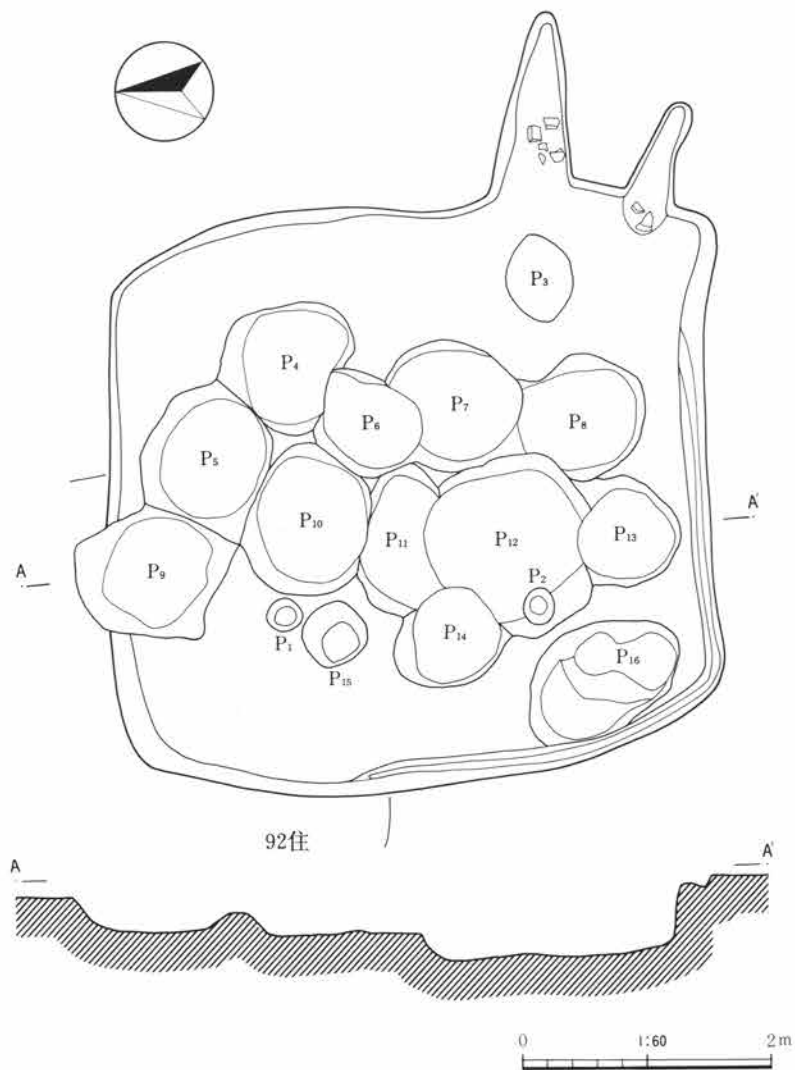
重複遺構は62号住居跡で、新旧関係はカマドの残存状態より62号住→57号住と思われる。

58号住居跡 (第87図、PL. 4)

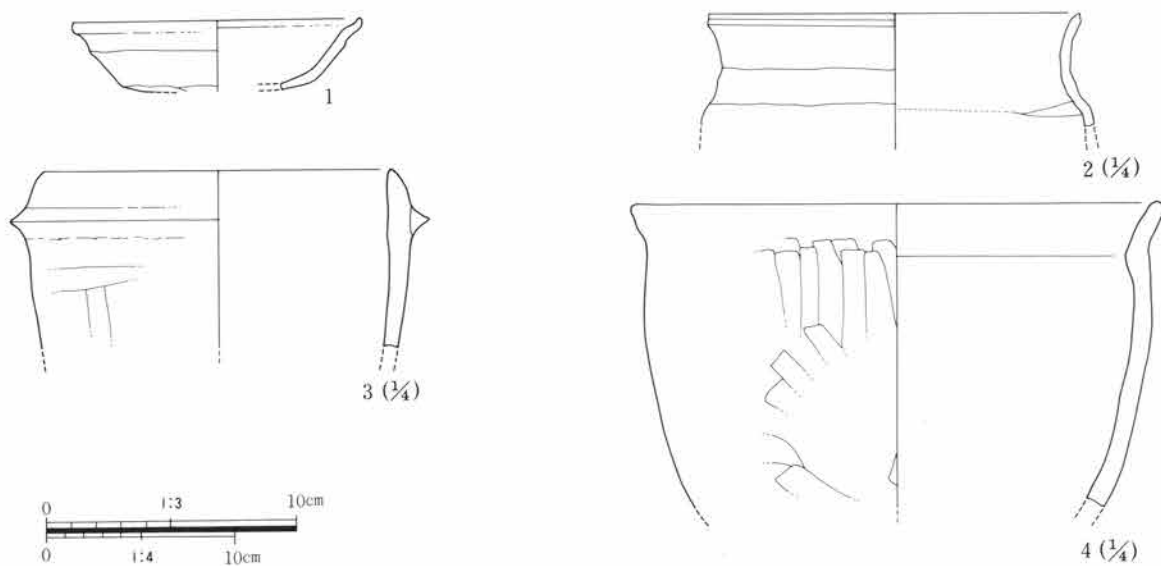
II区D-21・22、E-21・22グリッドに位置する。平面は歪んだ正方形を呈し、東西壁はやや外方に膨らむ。規模は4.65×4.88mで、面積は22.30㎡を測る。主軸方向はN-88°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は18~1cmを測る。床面はロームブロックの混入する褐色土で、比較的平坦である。カマドは東壁南端に2基が並列して検出された。いずれもそではもたず、煙道が壁外に長く延びる形態である。規模は1号カマド長さ140cm幅66cm、2号カマド長さ88cm幅45cmを測る。軸方向は1号はS-83°-E、2号はS-68°-Eを指す。ピットは16基検出された。規模はP₁径27cm深さ31cm、P₂径23cm深さ20cm、P₃径70×53cm深さ19cm、P₄103×100cm深さ40.5cm、P₅径113×98cm深さ24.5cm、P₆径95×73cm深さ30.5cm、P₇110×100cm深さ32cm、P₈径100cm深さ57cm、P₉径123×108cm深さ25cm、P₁₀径120×104cm深さ18cm、P₁₁径128cm深さ23.5cm、P₁₂径140×137cm深さ49cm、P₁₃径88cm深さ53cm、P₁₄径95cm深さ38cm、P₁₅径50cm深さ43cm、P₁₆径135×90cm深さ53cmを測る。P₁とP₂は支柱穴、P₁₆は貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は幅18~15cm深さ2~4cmを測る。

遺物は甕、杯、羽釜片が覆土より出土する。又カマドより円筒埴輪片が出土している。時期は平安時代中葉頃と思われる。

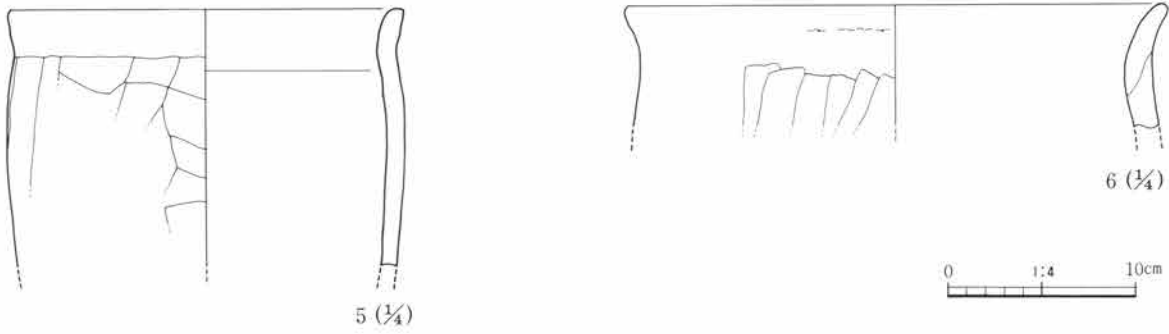
重複遺構は92号住居跡で新旧関係は不明であった。



第87図 58号住居跡



第88図 58号住居跡出土遺物(1)



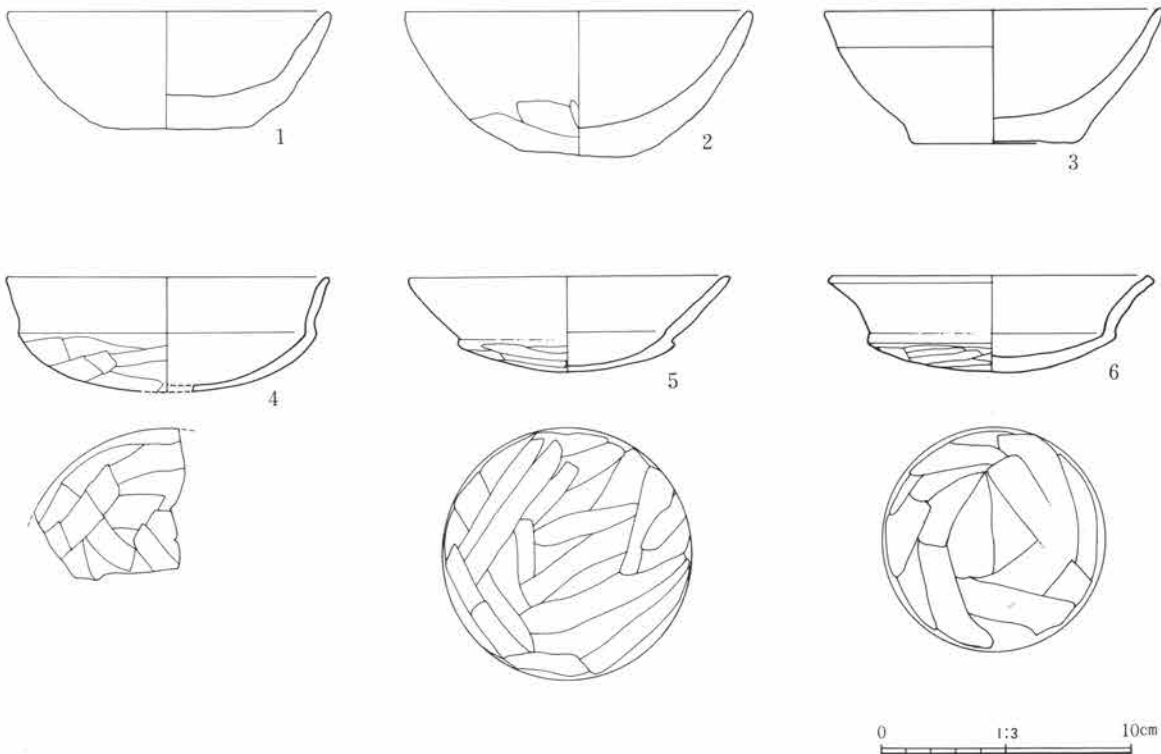
第89図 58号住居跡出土遺物(2)

59号住居跡 (第82図、PL. 4)

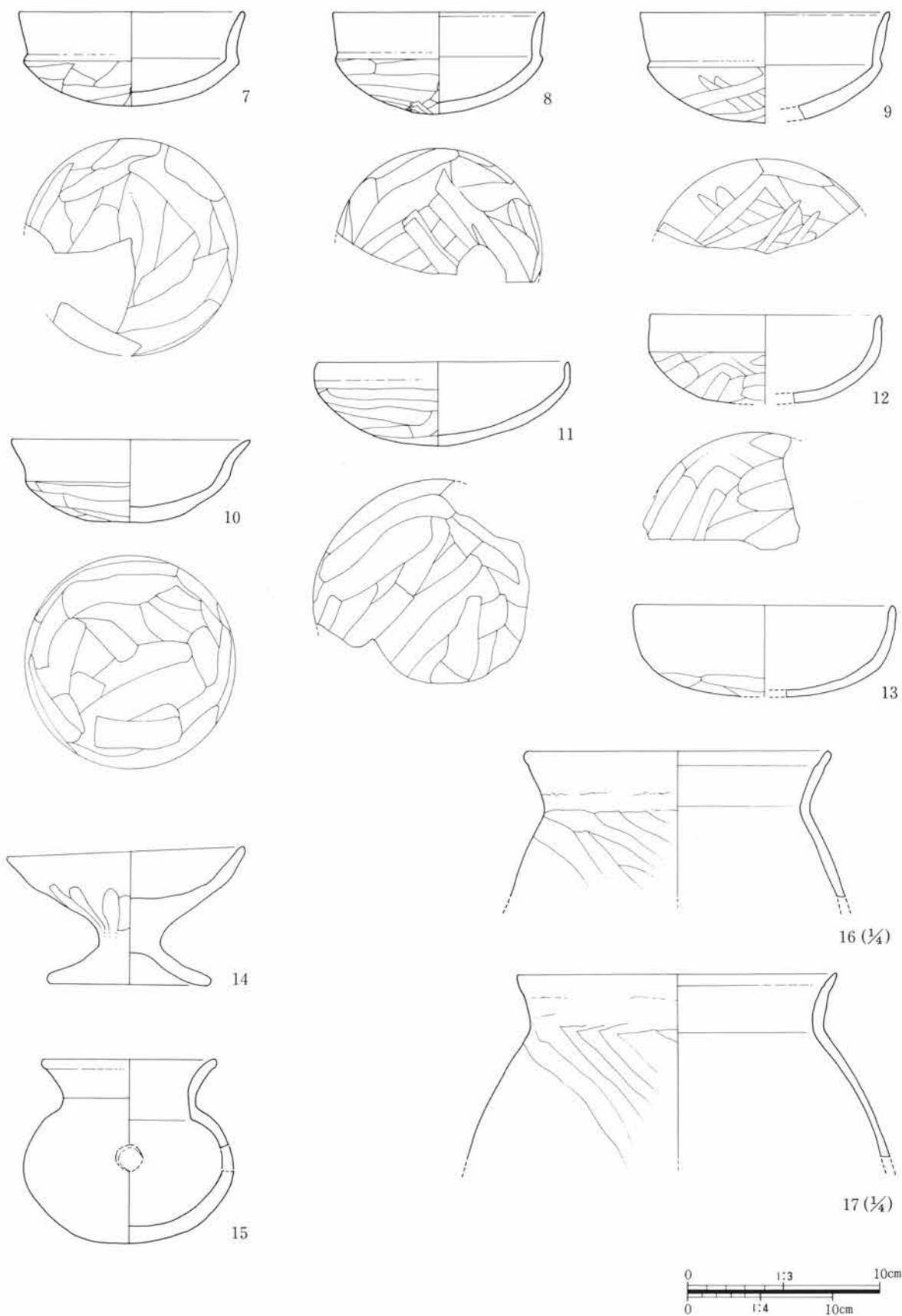
II区G-22・23、H-22・23グリッドに位置する。平面は歪んだ方形と思われるが、他遺構との重複が激しく全形は確認し得なかった。壁はやや外傾し、確認壁高は34cmを測る。床面は地山ローム土と、重複する55号住居跡覆土を利用している。カマドは北壁のやや西寄りに構築されており、煙道部は不明瞭で、本体部分が「馬蹄」形に残存する。長さ74cm幅84cmを測り、軸方向はN-7°-Wを指す。貯蔵穴、ピット、周溝等の住居内施設は検出されなかった。

遺物はカマド及びカマド左脇の壁際で出土している。甕、杯、高杯、壺があり、時期は鬼高期のものが主体を占める。なおカマド出土の小形甕(第92図-19)と高杯(第91図-14)は前者が後者の上に載せられた状態で出土した。これは当時のカマド使用状況のまま残されたものと考えられる。

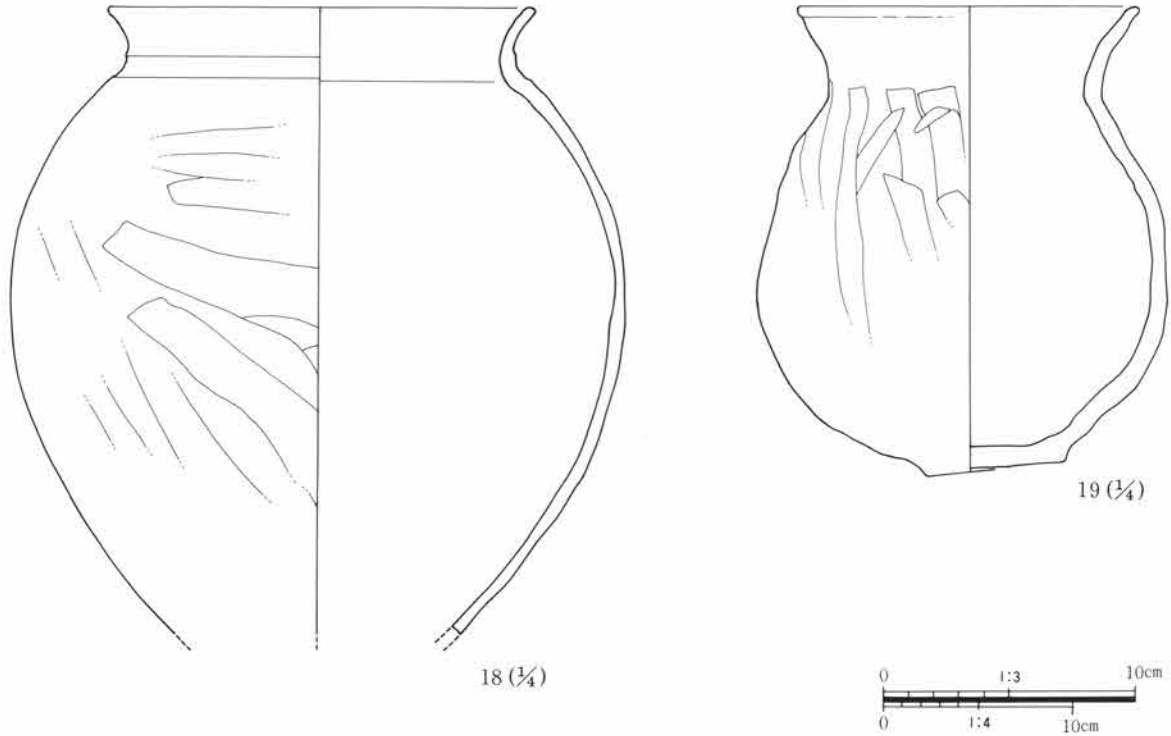
重複遺構との新旧関係は55号住→59号住→56号住であるが、本住居跡はその形態の複雑さから複数の住居跡である可能性も考えられる。



第90図 59号住居跡出土遺物(1)



第91図 59号住居跡出土遺物(2)



第92図 59号住居跡出土遺物(3)

60号住居跡 (欠番)

61号住居跡 (第93図、PL.4)

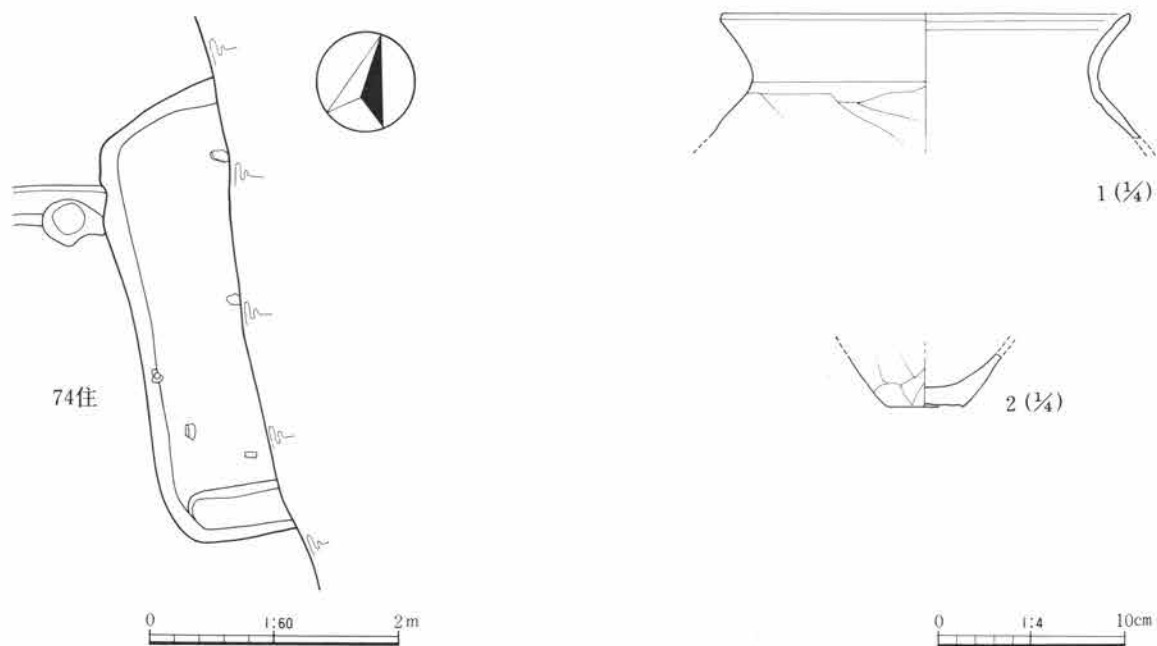
II区H-24・25グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、東半が調査区外のため全形を知り得ない。北壁-南壁間は3.60mを測る。壁は外傾し、確認壁高58-22cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、比較的平坦で硬質である。周溝は南壁に沿って検出され、幅40cm、深さ13cmを測る。覆土は上層に焼土と灰を含む黒色砂質土、下層にロームブロックを含む黒色土が堆積する。

遺物はほとんどが覆土から出土しており、器種は甕が大部分で、すべて小破片のため時期を限定し難いが数量的には鬼高期のものが多い。

重複遺構は74号住居跡で、新旧関係は土層観察より74号住→61号住である。

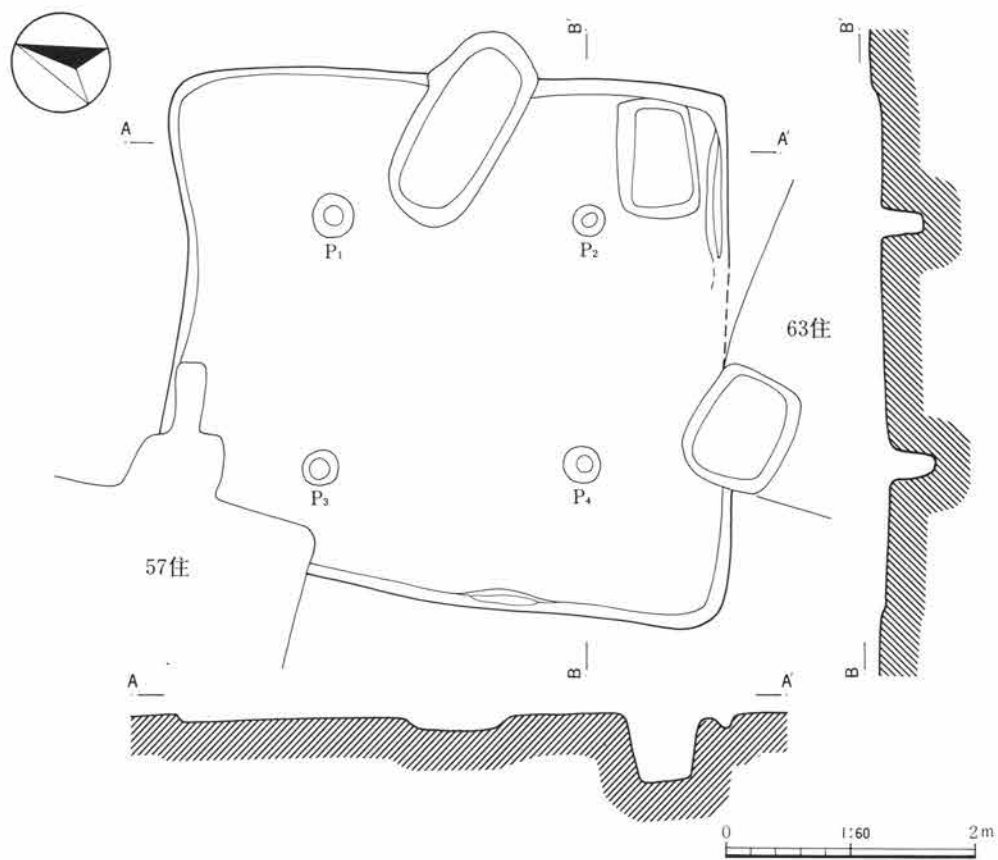
62号住居跡 (第94図、PL.4)

II区E-23・24、F-23・24グリッドに位置する。平面は南辺のやや長い歪んだ正方形を呈する。規模は4.20×4.45m、面積は19.0㎡を測る。主軸方向はN-69°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高6-1cmを測る。カマドは東壁中央部に構築されたと思われるが、掘り形しか検出されなかった。長さ165cm、幅75cmの規模で楕円形に掘り込まれている。軸方向はS-83°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー一部で検出された。平面は長方形で、規模は94×57cm深さ56cmを測る。ピットは4基検出された。これらは位置的に支柱穴と思われる。規模はP₁径33cm深さ30cm、P₂径26cm深さ35cm、P₃径29cm深さ38cm、P₄径30cm深さ36cmを測る。又柱間距離はP₁-P₂0.05m、P₃-P₄2.13m、P₂-P₄1.92m、P₁-P₃2.00mを測る。周溝は南壁沿いの貯蔵穴付近で検出され、幅16cm深さ10cmを測る。



第93図 61号住居跡及び出土遺物

遺物は鬼高期の杯片が1点覆土より出土したのみである。重複遺構との新旧関係は62号住→57号住である。

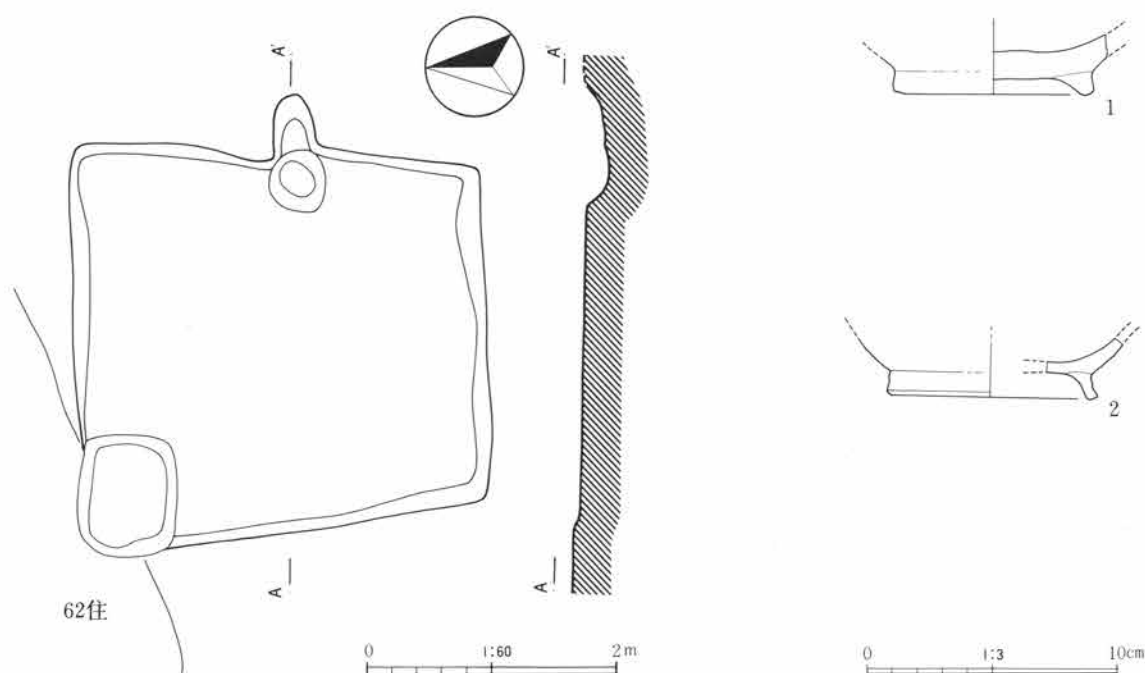


第94図 62号住居跡

63号住居跡（第95図）

II区E-22・23、F-22・23グリッドに位置する。平面は台形状を呈しており、規模は3.25×3.20mで、面積は9.97㎡を測る。主軸方向はS-87°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高12~1.5cmを測る。床面は地山のローム土とロームブロックを含む埋土を利用する。カマドは東壁中央に構築されたと思われるが、掘り形しか検出されなかった。規模は長さ93cm、幅40cm前後のもので、焚口~燃焼部の底面には径43cm、深さ18cmの浅い皿状の掘り込みがある。軸方向はS-83°-Eを指す。貯蔵穴は北西コーナー部で検出された。平面は隅丸長方形を呈し、規模は96×79cm深さ14cmを測る。ピット及び周溝は検出されなかった。

遺物は須恵器高台付杯の破片が2点出土している。重複遺構は62号住居跡で、新旧関係は不明であった。



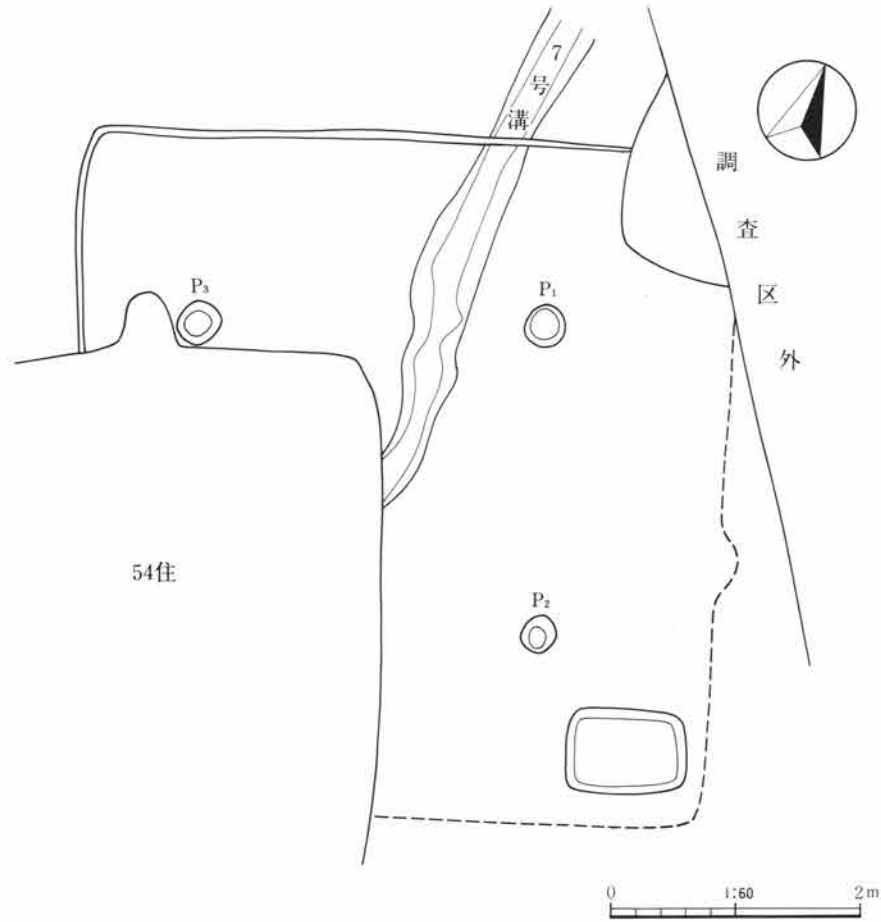
第95図 63号住居跡及び出土遺物

64号住居跡（第96図、PL.5）

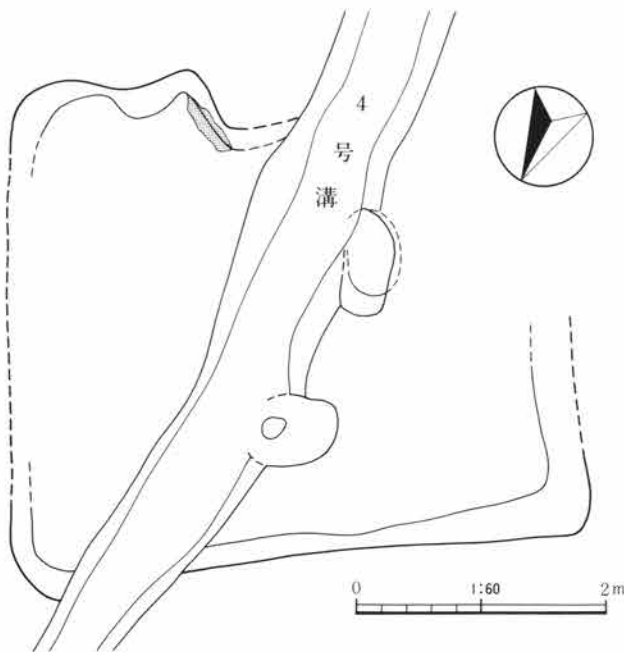
II区G-20・21・22、H-20・21・22グリッドに位置する。平面は正方形を呈すると思われる。東半及び南半部は壁、床面とも残存していない。壁の残存するのは北西部のみで、確認壁高は9~1cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは検出されなかった。貯蔵穴は南東コーナー付近に検出された。平面は隅丸長方形で、規模は96×67cm深さ69cmを測る。ピットは3基検出された。いずれも主柱穴と思われる。規模はP₁径33cm深さ27cm、P₂径28cm深さ23cm、P₃径35cm深さ7.5cmを測る。又柱間距離はP₁-P₂2.45m、P₁-P₃2.78mを測る。

遺物は床面より甕片、覆土より高台付椀、小皿、土製円板等の破片が出土している。本住居跡の形態より鬼高期の可能性が考えられるが、時期を限定できるような遺物及び出土状況は認められなかった。

重複遺構との新旧関係は64号住→54号住である。なお北東コーナー部は矩形に屈曲する幅30cm前後の溝状遺構によって切られているが、これは覆土や走向角度より住居跡となる可能性が高い。しかしここは調査区域外にあるため、調査はできなかった。



第96図 64号住居跡



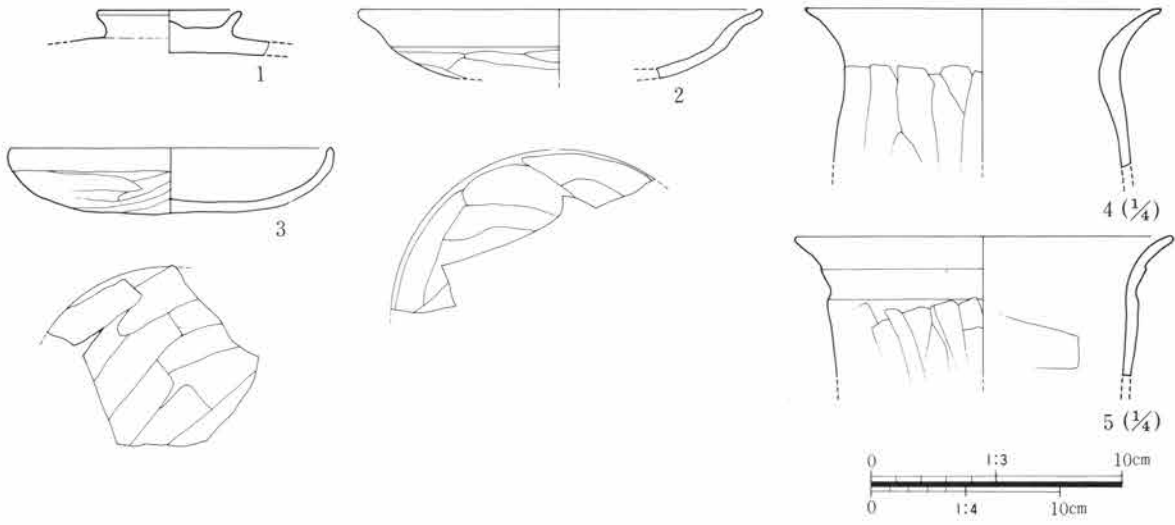
第97図 65号住居跡

65号住居跡（第97図、PL. 5）

Ⅱ区C-15・16、D-15・16グリッドに位置する。平面は歪んだ横長長方形を呈する。後世の削平や攪乱が激しく、壁と床面のほとんどは残存状態不良である。規模は(3.85×4.60)mと推定される。壁高は5～2cmを測る。カマドは南壁の東寄りに構築され、長さ65cm幅56cmの規模で残存する。そで部はほとんど認められず燃焼部は壁外へ張り出す形態を呈すると思われる。ピットは中央部分で2基検出されたが、本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

遺物は甕、杯、須恵器蓋が覆土より出土しており、時期は奈良時代に属すると考えられる。

重複遺構は4号溝で、新旧関係は不明であった。



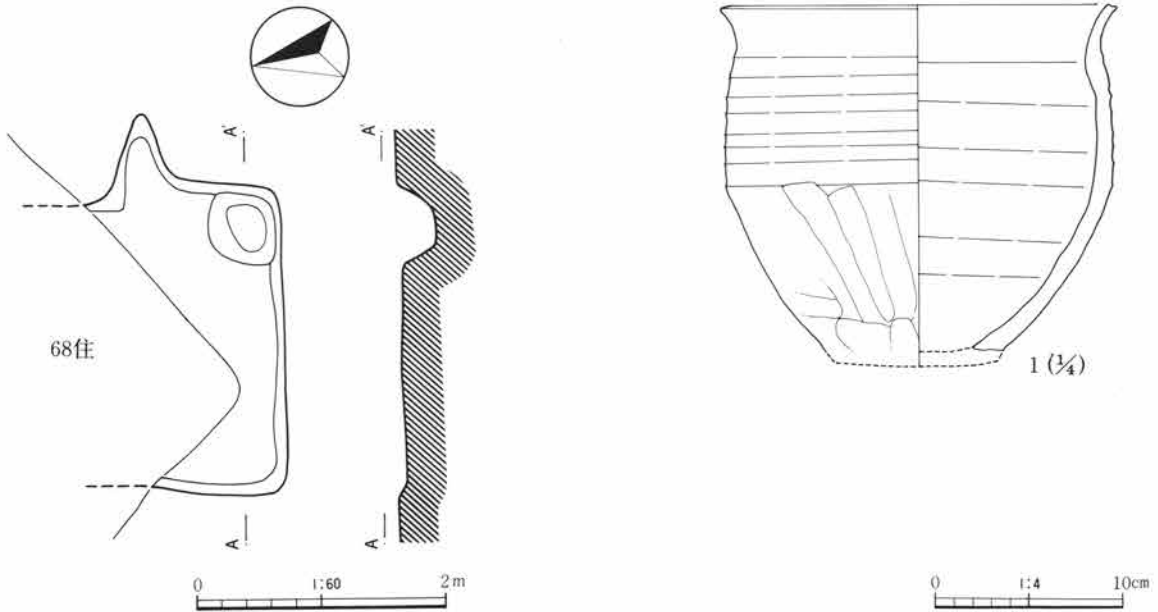
第98図 65号住居跡出土遺物

66号住居跡 (第99図)

II区B-19・20グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが、北半は他遺構と重複するため不明。東壁—西壁間は2.46mを測る。主軸方向はS-81°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は6~3cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が多い。カマドは東壁に構築され、燃烧部と煙道部が残存する。又そで部は認められないが、カマド左壁と右壁では段違いに掘り込まれる。規模は長さ75cm幅50cmを測る。軸方向はS-86°-Eを指す。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。隅丸正方形を呈し、規模は57×51cm深さ29cmを測る。

遺物は甕、杯等10数片が覆土より出土している。時期は平安時代のものが主体と考えられる。

重複遺構は68号住居跡で、新旧関係は68号住→66号住である。

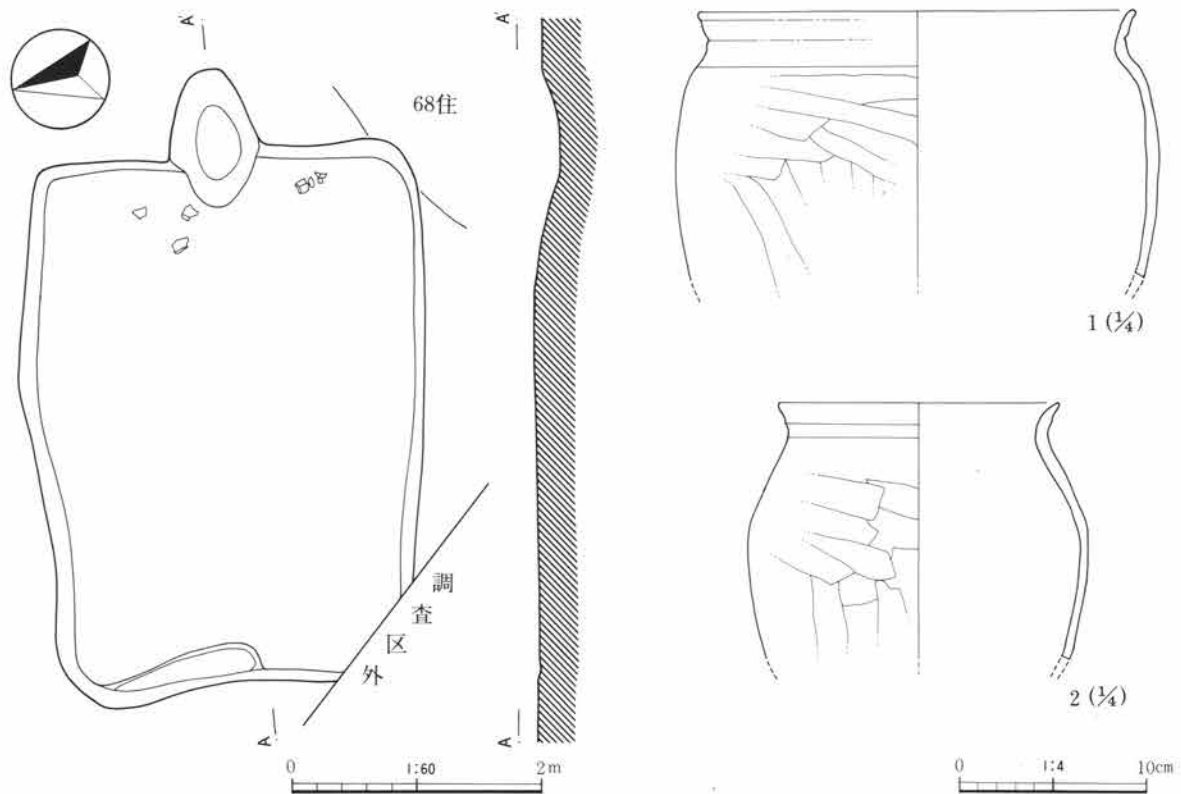


第99図 66号住居跡及び出土遺物

67号住居跡（第100図、PL.5）

II区B-21・22、C-21グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.3×3.2mで、面積は13.30㎡を測る。主軸方向はS-79°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は9～1cmを測る。おそらく後世の削平を受けたものと思われる。床面は、地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは東壁中央に構築され、そで部は認められず、掘り形のみ検出された。これは楕円形を呈し、径1.10×0.72m、床面よりの深さ約18cmを測る浅い皿状の形態のものである。これより燃焼部を含むカマド本体は壁外側に張り出す形状を呈すると思われる。周溝は明確ではないが西壁北半に沿って検出された。幅25～7cm深さ6～1cmを測る。

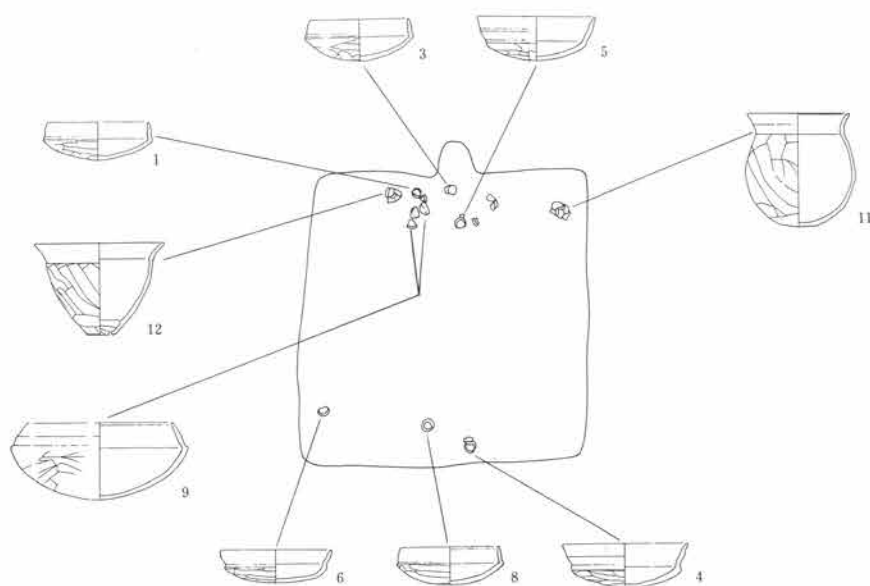
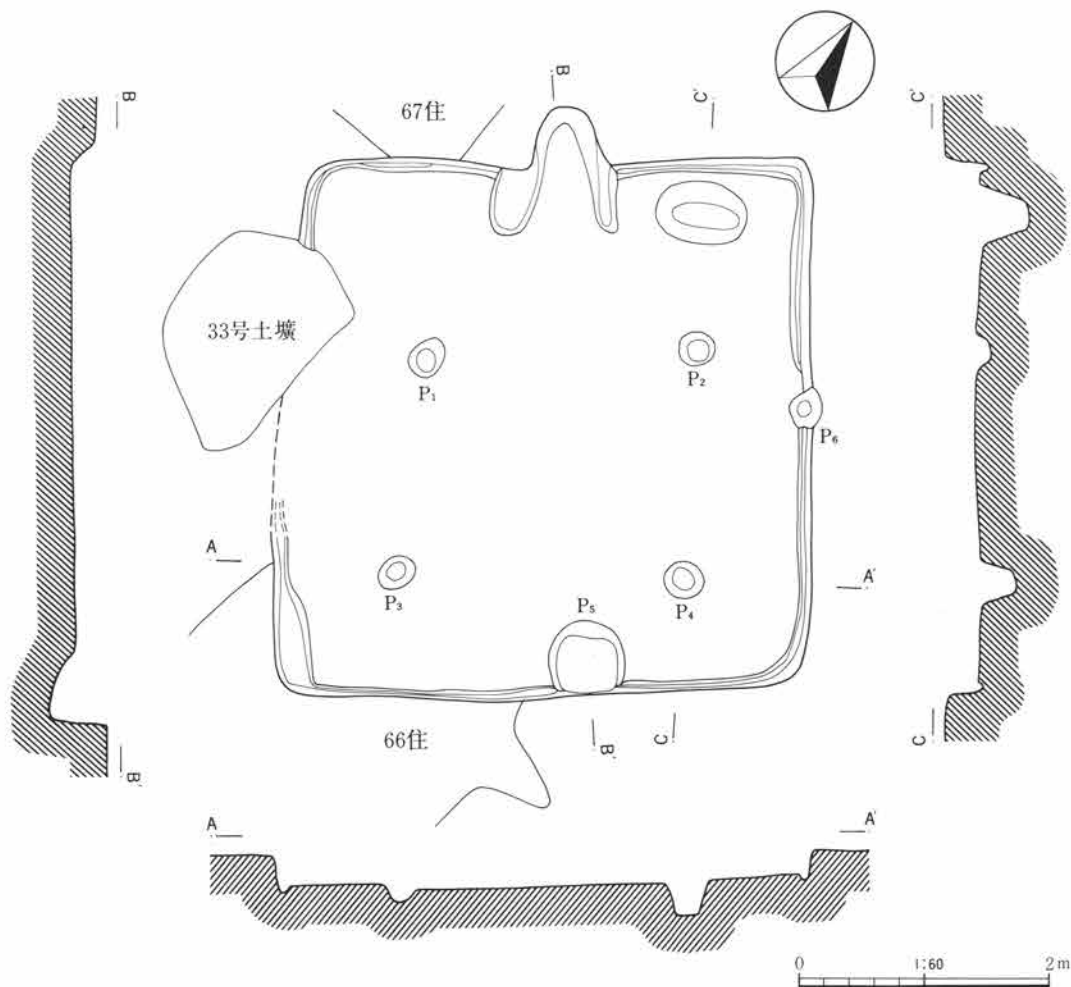
遺物は甕、高台付椀の破片がカマド周辺より10数点出土している。すべて平安時代後半のものと思われる。重複遺構は68号住居跡で、新旧関係は68号住→67号住である。



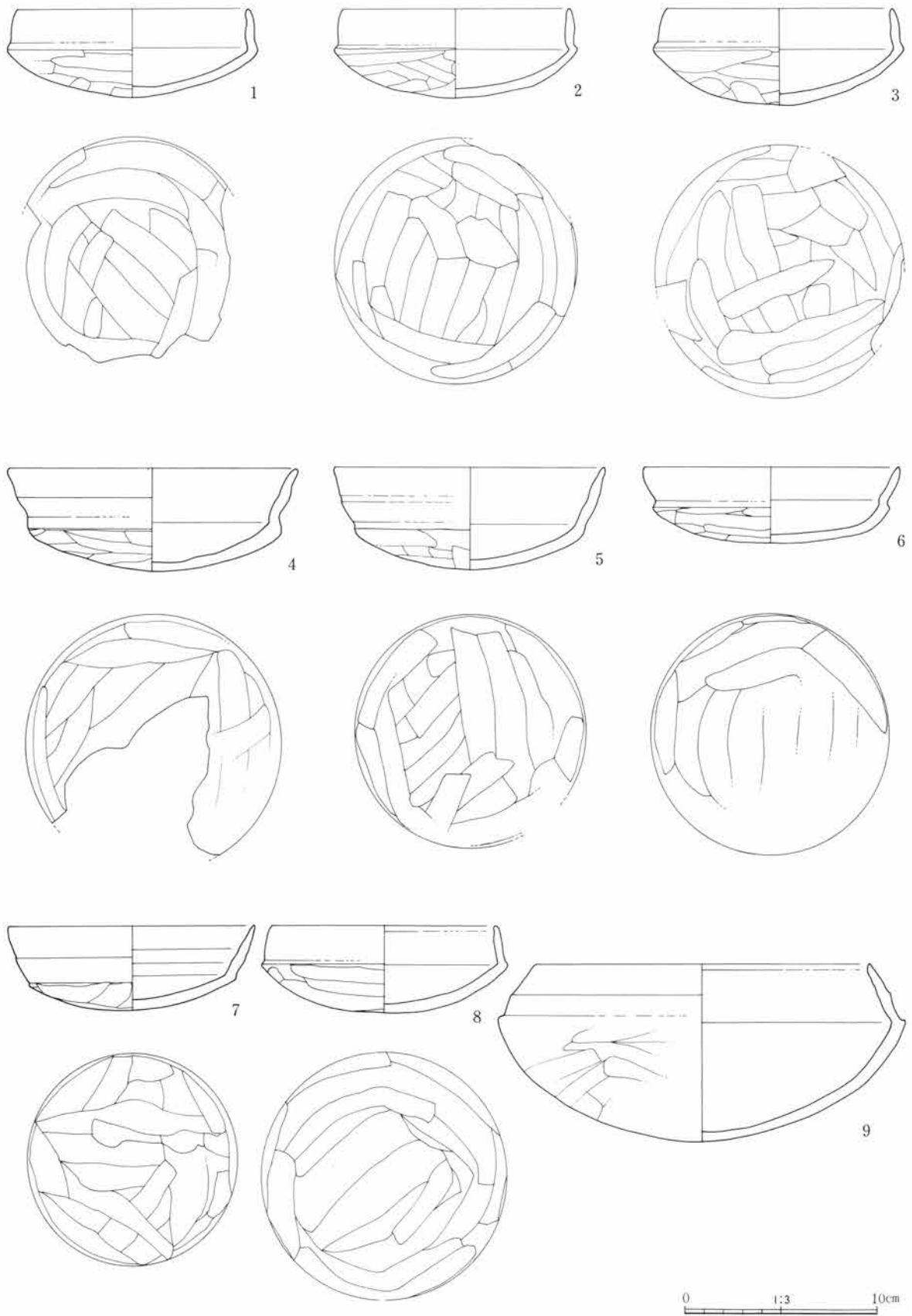
第100図 67号住居跡及び出土遺物

68号住居跡（第101図、PL.5）

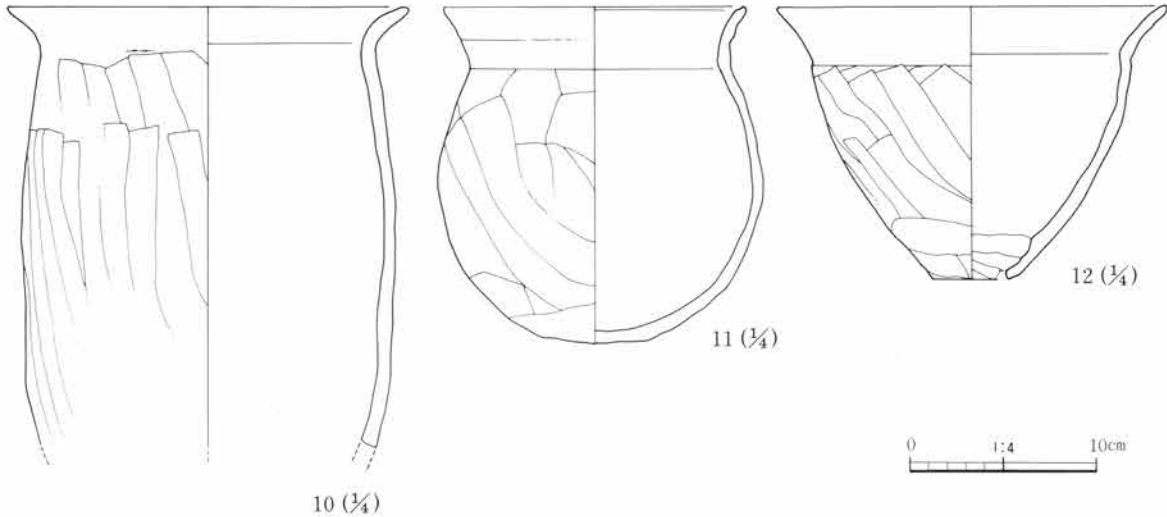
II区B-20・21、C-20・21グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模4.30×4.32m、面積18.20㎡を測る。主軸方向はN-34°-Wを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高32～12cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部がやや盛り上がっている。カマドは北西壁中央に構築され、そで部と燃焼部が残存する。規模は長さ88cm幅101cmを測る。軸方向は、N-33°-Wを指す。そでは50cm程壁内に張り出す。貯蔵穴はカマド右脇で検出され、楕円形を呈し、規模は径72×48cm深さ41cmを測る。ピットは6基検出され、うちP₁～P₄の4基は支柱穴と思われる。規模はP₁径30cm深さ11.5cm、P₂径27cm深さ11cm、P₃径25cm深さ15.5cm、P₄径29cm深さ18cm、P₅径61×57cm深さ23.5cm、P₆径27cm深さ41cmを測る。又柱間距離はP₁-P₂2.20m、P₃-P₄2.32m、P₁-P₃1.67m、P₂-P₄1.78mを測る。周溝はほぼ全周すると思われ、幅29～6cm深さ11～3cmを測る。



第101図 68号住居跡及び遺物分布図



第102図 68号住居跡出土遺物(1)



第103図 68号住居跡出土遺物(2)

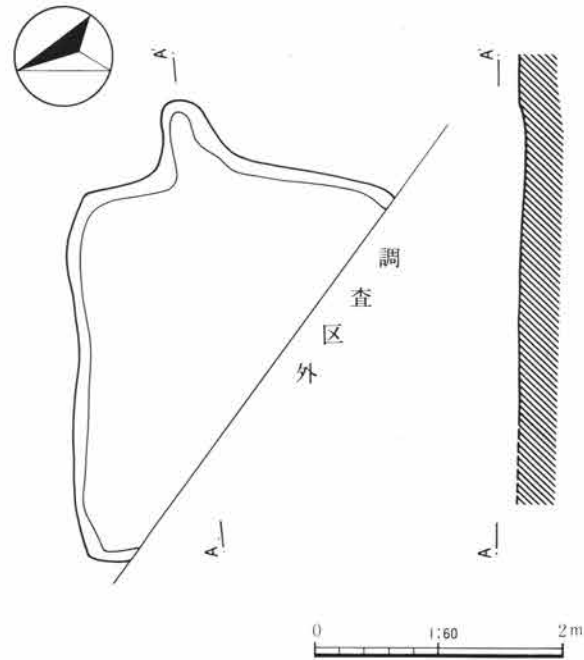
68号住居跡出土遺物は杯を主とし、他に甕、甑の破片及び紡錘車が出土している。出土分布はカマド周辺及び南壁際の床面上に集中している。時期は鬼高期のものがほとんどである。

重複遺構は66号住居跡、67号住居跡で、新旧関係は68号住→66号住・67号住である。

69号住居跡 (第104図)

II区B-18・19グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが、南西半については調査区外のため不明である。東壁-南壁間距離は2.93mを測る。主軸方向はS-86°-Eを指す。壁の残存状態は不良で、確認壁高6~2cmを測る。土層断面の観察によれば壁の上半は後世の削平によりほとんど失われているようである。床面は荒れており凹凸が多い。カマドは東壁のやや北寄りに構築されており、燃焼部の掘り込みのみ残存する。規模は長さ70cm、幅93cmを測る。軸方向はS-82°-Eを指す。なお貯蔵穴、ピット、周溝等の住居内施設に関しては、調査した範囲では全く検出されなかった。

遺物は甕、小皿、高台付碗、灰釉碗の破片が覆土より出土している。これらは全て小片で数量も少ない事から時期を限定するのは難しいが、住居形態等も考慮し、おそらく平安時代後半のものと思われる。



第104図 69号住居跡

70号住居跡 (第105図、PL. 5)

II区B-24グリッドに位置する。方形を呈すると思われるが、西半は72号住居跡に切られるため不明である。

第V章 検出された遺構と遺物

北壁—南壁間距離は3.10mを測る。主軸方向はN-66°-Eを指す。壁はほとんど残存せず、土層断面で確認できた壁高は最大値6cmである。床面は暗褐色土を基盤としており軟質である。カマドは東壁のやや北寄りに構築され、燃烧部の掘り込みのみ残存する。長さ64cm、幅63cm程の小規模なものである。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

遺物は甕、杯等の破片20数点が出土しており、いずれも鬼高期の新段階に属するものである。

71号住居跡（第105図、PL.5）

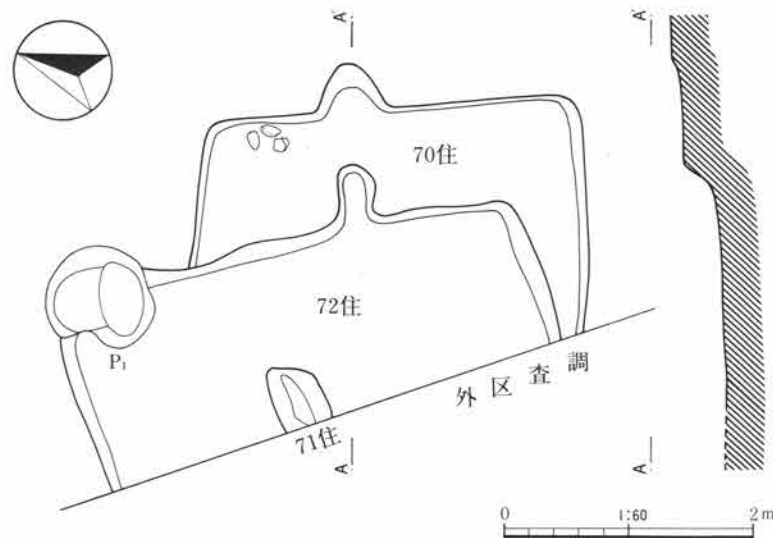
II区A-24グリッド付近に位置する。カマドのそで部のみ検出され、住居跡本体については調査区外にあたるため不明である。

72号住居跡（第105図、PL.5）

II区B-24グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、西半については調査区外にあたるため不明である。北西壁—南東壁間距離は3.28mを測る。主軸方向はN-56°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は27.5~8.5cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、比較的平坦な面を呈する。カマドは北東壁のやや南東寄りに構築されており、燃烧部~煙道部のみ残存する。規模は長さ52cm、幅37cmを測り、軸方向はN-68°-Eを指す。ピットは北コーナー部に1基検出された。階段状あるいは2基のピットの重複とも考えられる形態を呈しており、径90×83cm深さ58cmを測る。これが本住居跡に伴うものかどうかは判明できず、従ってその性格についても不明である。

遺物は器種不明の土器片20数点が出土している。これらの時期は不明である。

重複遺構は70号住居跡、71号住居跡で、新旧関係はカマド残存状況より70号住→72号住→71号住と思われる。



第105図 70・71・72号住居跡

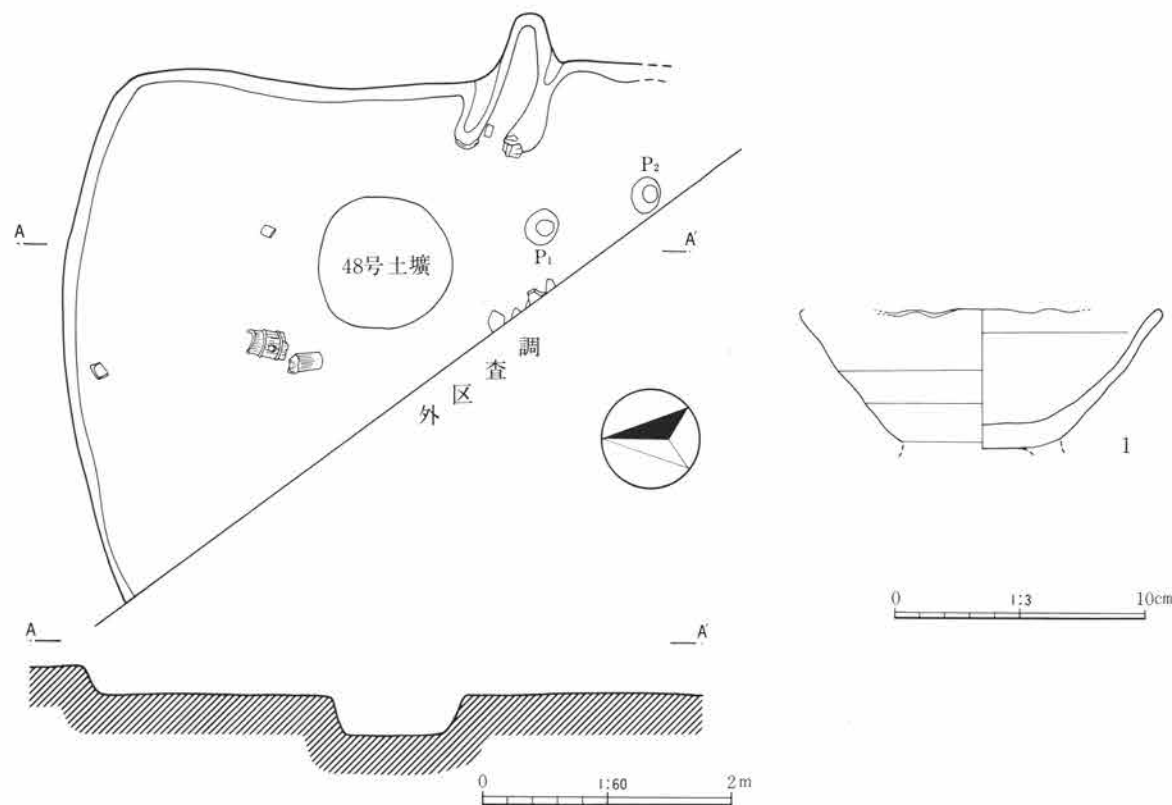
73号住居跡（第106図、PL.5）

II区B-25、III区B-1グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが南西半は調査区外のため不

明である。壁の残存状態は比較的良好で、確認壁高は24~10cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、平坦な面を呈する。カマドは東壁の中央付近に構築され、そで部と燃焼部の一部が残存する。煙道は不明瞭ながらも外傾して立ち上がる状態で検出された。規模は長さ1.23m幅0.70mを測る。軸方向はS-74°-Eを指す。ピットは2基検出された。規模はP₁径28cm深さ19cm、P₂径27cm深さ25cmを測る。これらのピットは位置的に柱穴の可能性は少ないと思われる。

遺物はカマドそで部と中央床面上より円筒埴輪片が出土している。その他には高台付椀、甕片が若干出土している。全体に遺物量は少ないが、平安時代のものが主体を占めている。

重複する遺構は48号土壙で、新旧関係は不明である。



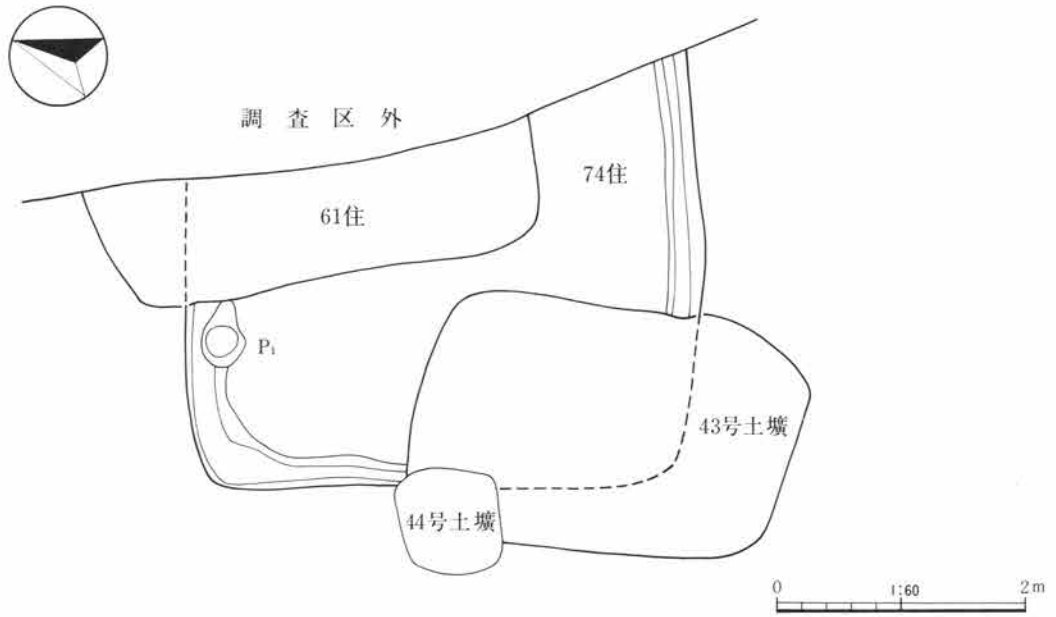
第106図 73号住居跡及び出土遺物

74号住居跡 (第107図、PL. 4)

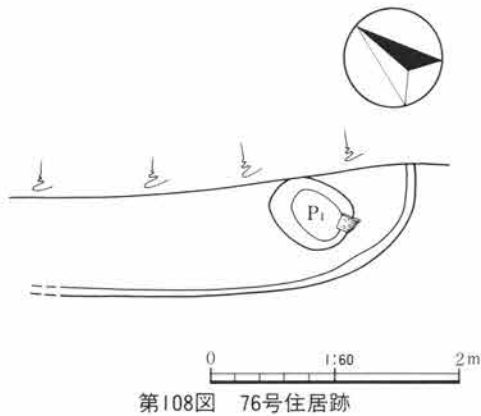
II区H-24・25グリッドに位置する。方形と思われるが、東半は調査区外にあたり、又南西コーナー部は他遺構との重複により形状、規模等は不明である。壁はやや外傾し、確認壁高は28~2cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、比較的平坦である。なお床面レベルは重複する61号住居跡床面より30cm程高位にある。カマドは検出されなかった。ピットは北壁際に1基検出された。規模は径35cm深さ64cmを測る。周溝は検出された部分においては壁に沿って全周する。幅40~20cm深さ7~1cmを測る。覆土は炭化物を含む黒色砂質土がブロック状に堆積する。

遺物は時期不明の土器片が数点出土したのみである。

重複遺構は61号住居跡と43号土壙、44号土壙で、土層観察によれば新旧関係は61号住・43号壙・44号壙→74号住と考えられる。



第107図 74号住居跡



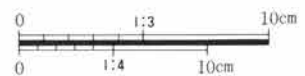
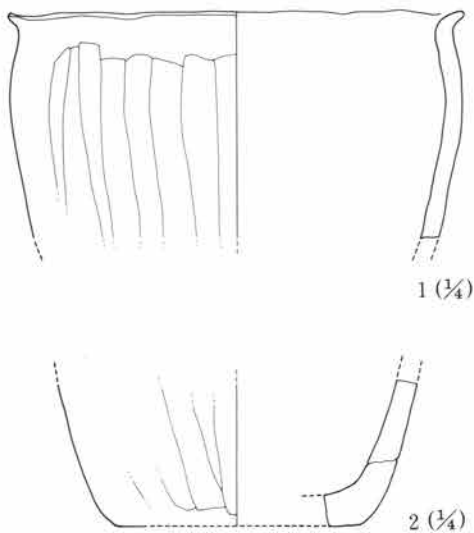
第108図 76号住居跡

75号住居跡 (欠番)

76号住居跡 (第108図、PL. 5)

II区H-25グリッドに位置する。北半、東半については形状、規模は不明。南コーナー部より貯蔵穴と思われるピットが検出されている。平面は隅丸長方形を呈し、68×52cm、深さ28cmを測る。その他のピットや周溝等は検出されなかった。覆土は黒色粘質土が堆積する。

遺物は甕、小皿等平安時代の土器片が10数点出土している。



第109図 76号住居跡出土遺物

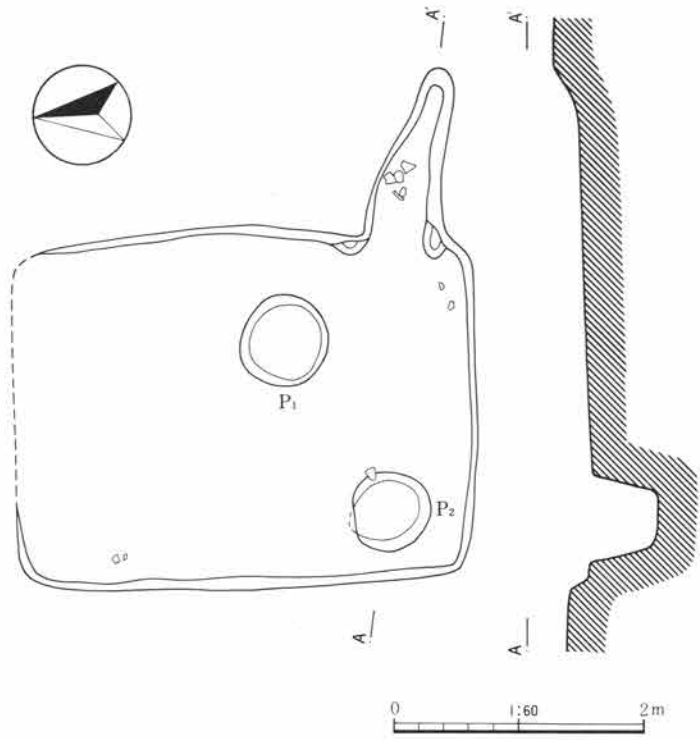
77号住居跡 (第110図、PL. 5)

III区G-2、H-2・3グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は2.90×3.66mで、面積は10.80㎡を測る。壁は残存状態不良で、確認壁高は25~15cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、比較的平坦である。なお床面は東から西方向に向かって低く傾斜している。カマドは東壁南際に構築されており、残存状態は比較的良好である。規模は長さ1.57m、幅0.70mを測り、軸方向はS-67°-Eを指す。その部は若干粘土を貼り付けて壁内に張り出させ、燃烧部~煙道部は壁外に1.3m程張り出して構築される。煙道は燃烧部底面からそのまま比較的急角度をもって立ち上がる。ピットは2基が検出された。規模はP₁径71cm深さ22cm、P₂径64cm深さ55cmを測る。これらは位置

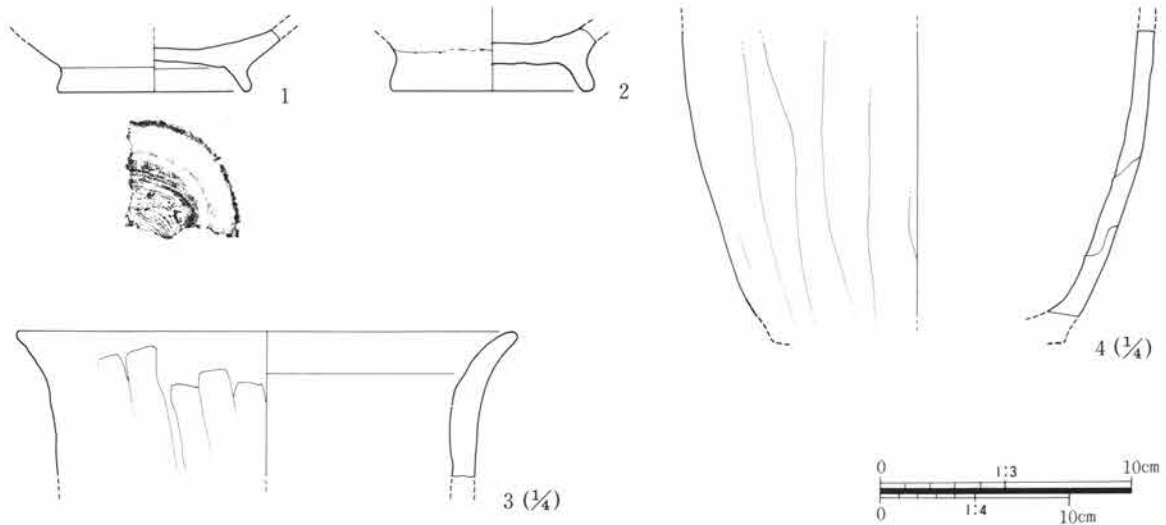
や形態、規模等から柱穴とは考え難く、P₂に関してはむしろ貯蔵穴の可能性が考えられる。周溝は検出されなかった。覆土は炭化物を多く含む黒褐色粘質土が主で、レンズ状の堆積状況を示す。この事から本住居跡は自然堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は杯、甕、甌、高台付椀、須恵器甕、土錘、滑石製模造品等の破片が覆土より出土している。時期は鬼高期と平安時代後半のものが混在する。

重複遺構はなく単独の検出である。



第110図 77号住居跡



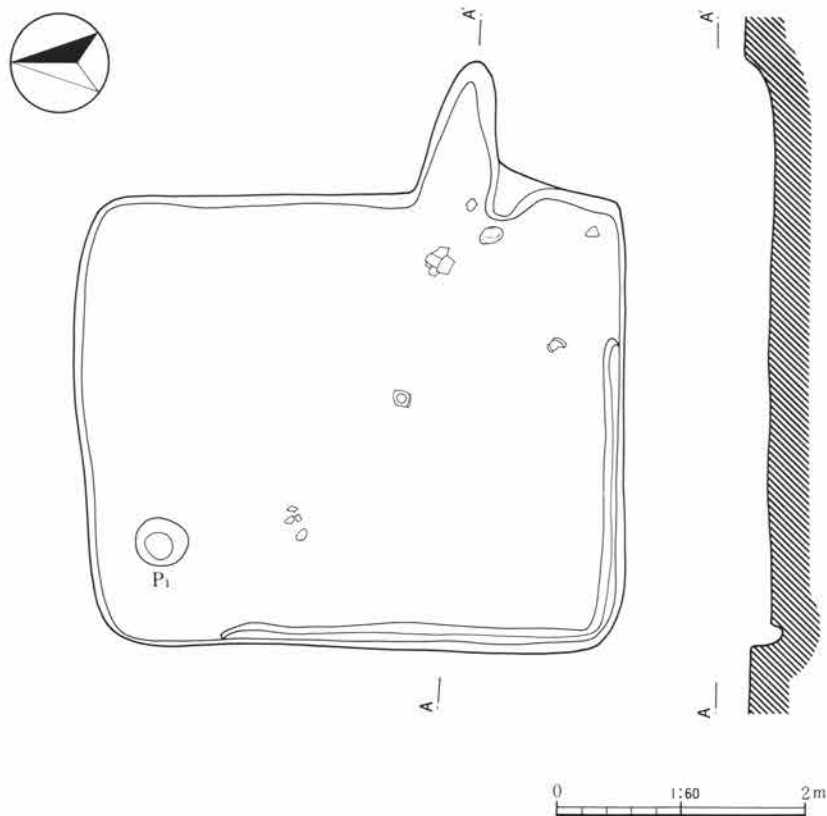
第111図 77号住居跡出土遺物

78号住居跡（第112図、PL.5）

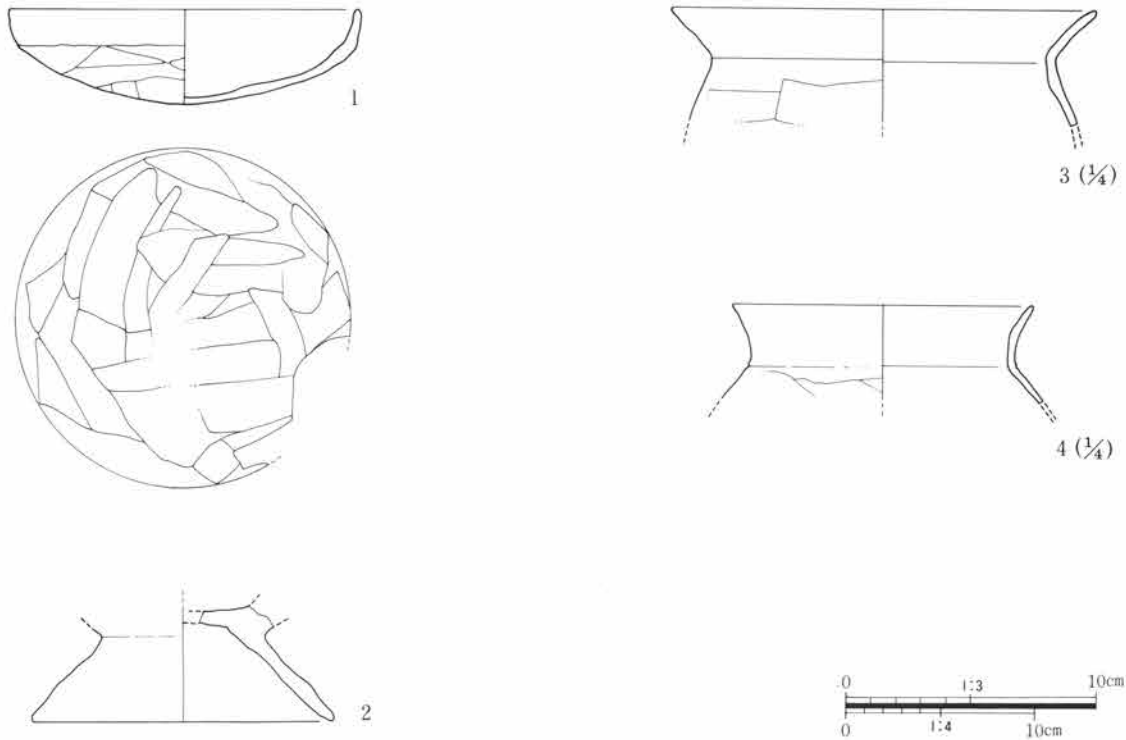
Ⅲ区F-1・2、G-1・2グリッドに位置する。平面形は横長長方形を呈し、規模は3.85×4.40m、面積は16.20㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は残存状態が比較的良好で、やや外傾し確認壁高38cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用し、比較的平坦な面を呈する。カマドはそで部、燃焼部と煙道の一部が残存する。規模は長さ1.24m、幅0.53mを測り、軸方向はS-82°-Eを指す。左そで部はほとんど確認できないが、右そで部は粘土貼り付けにより若干張り出している。燃焼部は壁外側に張り出し、煙道部との境界は不明瞭である。又煙道は燃焼部底面より強い曲線を描いて急角度で立ち上がる。ピットは北西コーナー付近で1基検出された。平面はほぼ円形を呈し、規模は径42cm、深さ15.5cmを測る。形状と規模は柱穴にふさわしいと思われるが、これに対応する柱穴については確認できなかった。周溝は西壁南半と南壁西半部分に沿って検出された。規模は幅35~20cm、深さ5~2.5cmを測る。深さは全体に一定である。覆土は上層に黒褐色粘質土、下層にロームブロックを含む黒色土が堆積する。レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積による埋没と考えられる。

遺物は甕、杯、台付甕、須恵器甕等の土器片及び砥石が出土している。時期は古墳時代後期~平安時代のものが見られるが、数量的には奈良時代のものが多い。なお覆土より出土した須恵器の甕片は前述の77号住居跡出土の土器と極めて類似しており、同一個体破片の可能性も考えられる。

重複遺構は認められず、単独で検出された。



第112図 78号住居跡



第113図 78号住居跡出土遺物

79号住居跡（第114図、PL.5）

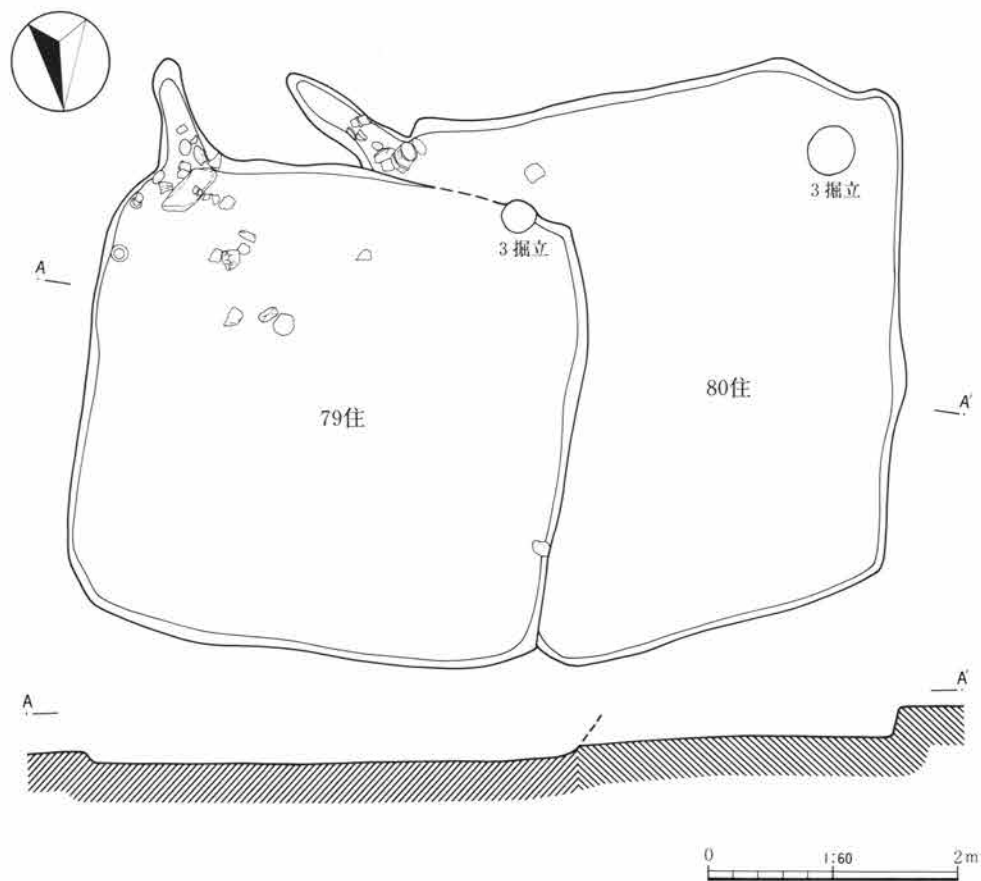
Ⅲ区E-1・2、F-1・2グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は3.85×3.98m、面積は14.6㎡を測る。主軸方向はS-12°-Wを指す。壁の残存状態は不良で、確認壁高は20～4cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で比較的平坦で中央部がやや高い。カマドは南壁の東端部に構築され燃焼部と煙道部が検出された。規模は長さ90cm、幅50cmを測り、軸方向はS-2°-Eを指す。燃焼部と煙道部の境は明瞭でない。両そで部に粘土は見られないが10cm大の円礫を直立させて構造材としている。又焚口部分に長さ50cmの長大な礫が横位で出土したが、これは焚口天井材として用いられたと考えられる。貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は認められなかった。

遺物は甕、羽釜、小皿、杯、須恵器蓋、灰釉碗等の破片約100片及び砥石、土製円板、埴輪、土錘が出土している。遺物の分布はカマド周辺に集中しており、他には覆土中からの出土が大部分で、床面出土のものは少ない。時期は古墳時代後期～平安時代のものが見られるが、カマド内出土のものは平安時代に限られる。

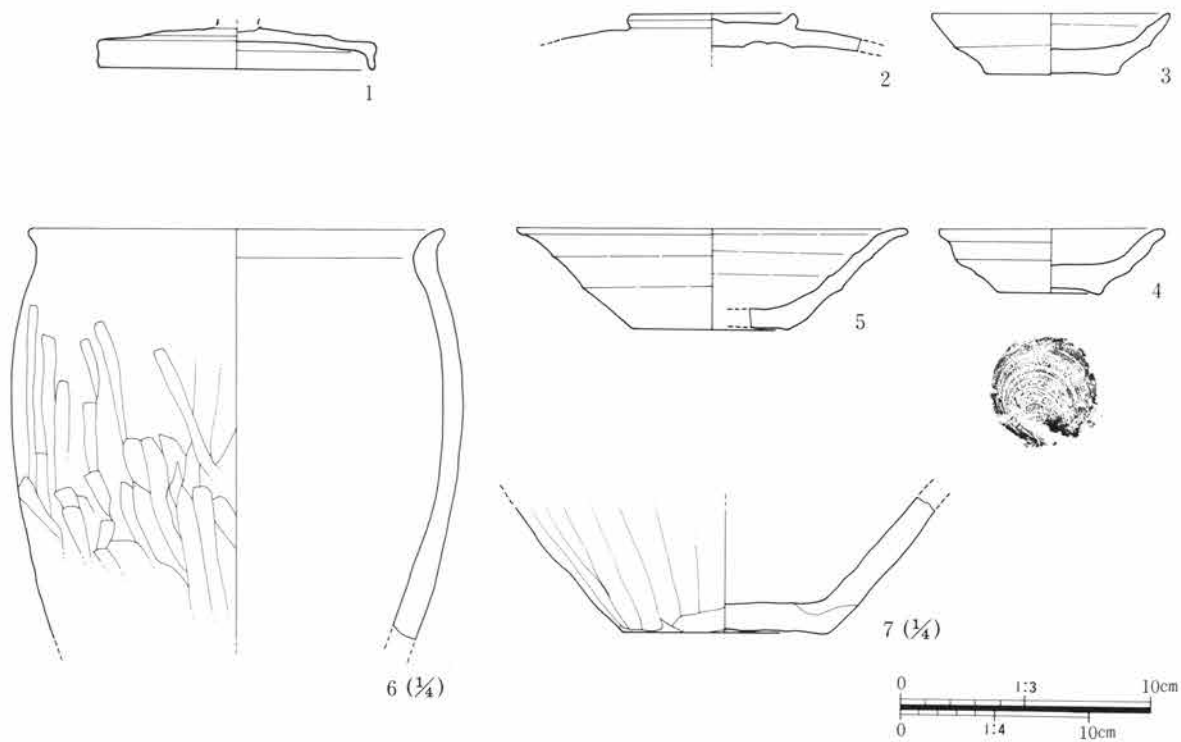
重複遺構は80号住居跡、50号土壌で土層観察より新旧関係は80号住→79号住である。

80号住居跡（第114図、PL.5）

Ⅲ区E-1・2グリッドに位置する。平面は長方形と思われるが、79号住居跡と重複するため、東半部の形状、規模は不明である。北壁-南壁間距離は2.55mを測る。主軸方向はS-12°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高26～12cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、ほぼ平坦である。なお重複する79号住居跡との床面レベル差は5～7cm程で本住居跡が低位にある。カマドは南東コーナー部に構築され、燃焼部と煙道部が残る。規模は長さ1.19m、幅0.40mを測る。軸方向はS-50°-Eを指す。焚口部分から円筒埴輪片が出土して



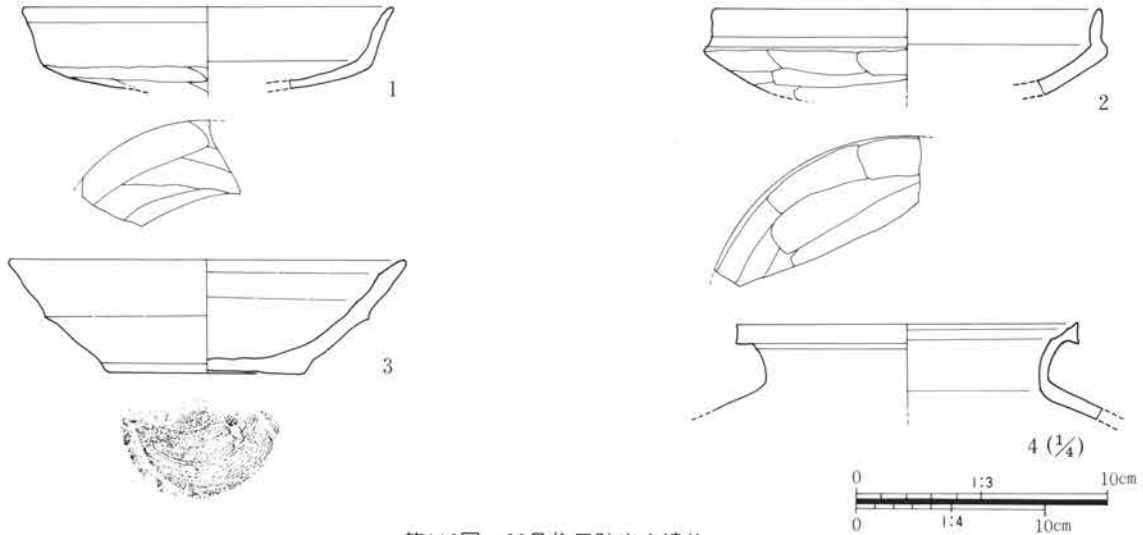
第114図 79・80号住居跡



第115図 79号住居跡出土遺物

いるが、これは焚口構造材として使用されたものと考えられる。貯蔵穴、ピット、周溝等は検出されなかった。覆土にはローム粒と炭化物を多く含む黒褐色砂質土が堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器甕、埴輪片、土錘が出土している。土錘は6点が出土しており、いずれも紡錘形を呈するものである。覆土からの出土が多く、時期は古墳時代後期～平安時代のものが見られるが、カマド内出土のものは埴輪を除き平安時代に属する。



第116図 80号住居跡出土遺物

81号住居跡 (第117図、PL. 5)

Ⅲ区B-2、C-2グリッドに位置する。平面は縦長長方形と思われるが、西半は重複する82号住居跡に切られるため不明である。規模は北壁-南壁間距離2.80mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はほぼ垂直で確認壁高は17~5cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、比較的平坦である。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、そで部はなく煙道部のみ検出された。規模は長さ87cm、幅40cmで、軸方向はS-87°-Eを指す。貯蔵穴、ピット、周溝等は検出されなかった。住居覆土は黒褐色粘質土が主体で、上位には浅間B軽石を若干含む。堆積状況はレンズ状で自然堆積かと思われる。
(註1)

遺物は覆土より杯、甕の小片10数点が出土している。時期は古墳時代後期～奈良時代のものと思われるが重複する82号住居跡出土遺物との区別が困難で、本住居跡の時期を限定できるようなものはない。

重複遺構の82号住居跡との新旧関係は土層観察とカマド残存状況より81号住→82号住と考えられる。

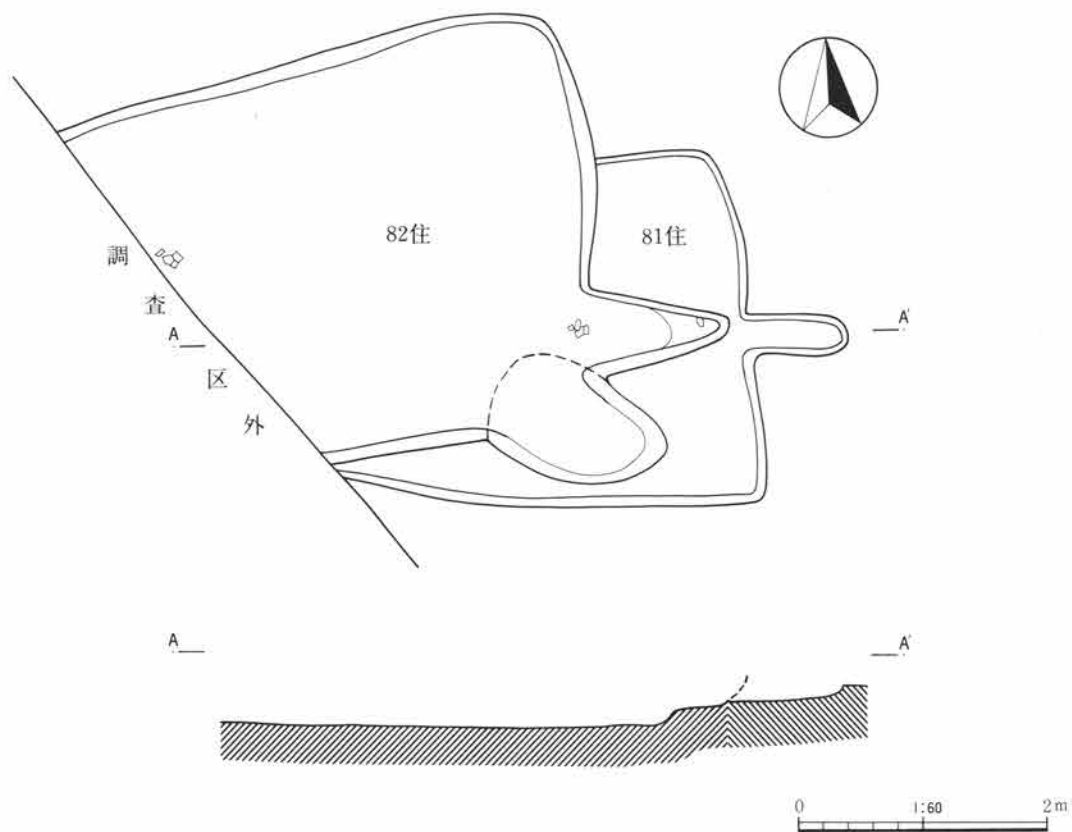
82号住居跡 (第117図、PL. 5)

Ⅲ区B-2グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われるが、南西部は調査区外にあたるため不明である。規模は(4.30以上)×3.40mである。主軸方向はN-85°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高40~17cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土で比較的平坦である。カマドは、東壁南端部に構築される。そで部は不明瞭。規模は長さ1.20m、幅0.67mを測る。軸方向はS-89°-Eを指す。なお燃焼部と煙道部の境は段をなし、煙道はやや高いレベルでほぼ水平に延びる。住居覆土は黒色粘質土で、堆積状態はレンズ状である。

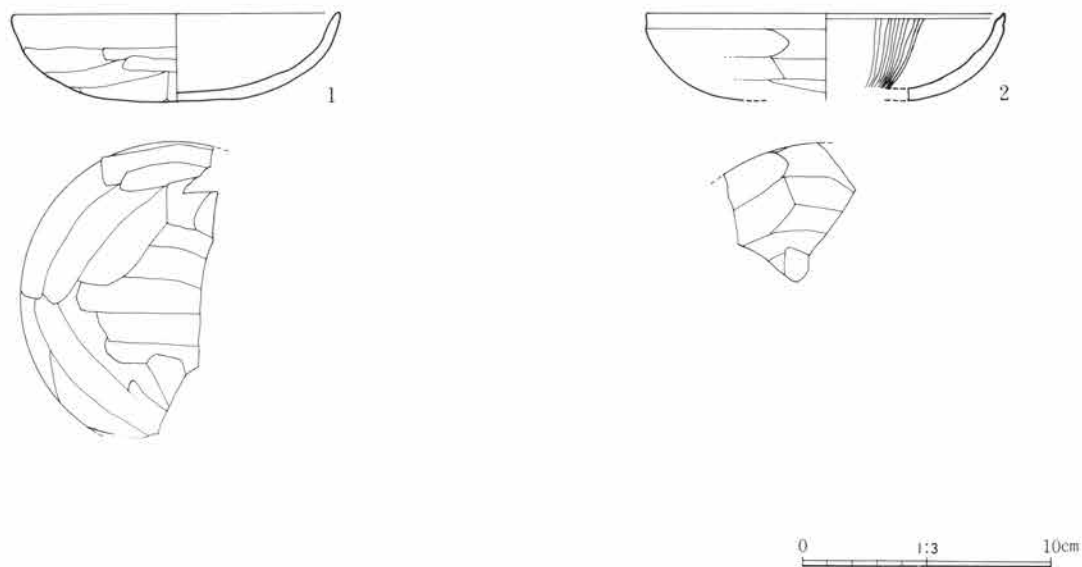
遺物はすべて覆土からの出土で、杯、甕、須恵器甕等の破片約50点である。古墳時代後期～奈良時代のものと思われるが、図示(第118図)したもの以外は小破片で時期を限定できるようなものは少ない。

第V章 検出された遺構と遺物

重複遺構は81号住居跡であるが、その他に南東コーナー部のカマド右脇に不整楕円形のピットが検出されている。規模は(1.5×0.9)mで深さ18cm前後を測る。これが単独遺構かあるいはいずれかの住居跡に伴うものかは判明できなかった。



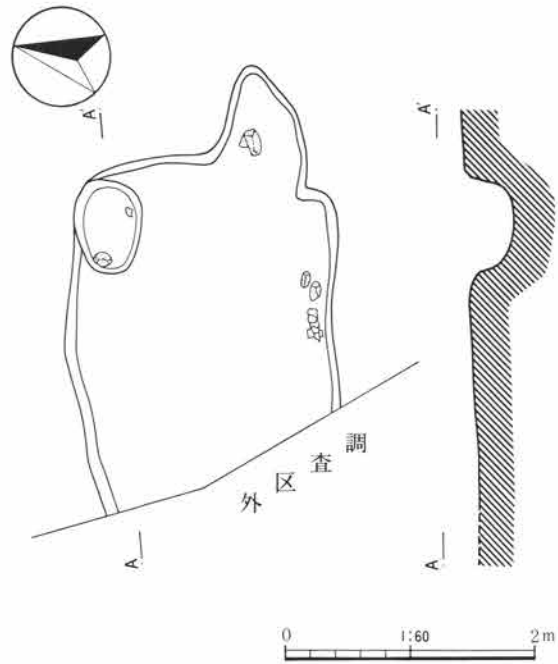
第117図 81・82号住居跡



第118図 82号住居跡出土遺物

83号住居跡（第119図、PL.5）

Ⅲ区B-4 グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。南西部は調査区外にあたるため不明である。規模は(2.70以上)×2.20mを測る。主軸方向はN-68°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は20~6cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用し、比較的平坦であるが、小さな窪みも若干見られる。カマドは東壁のやや南寄りに構築される。その部はみられないが、壁をそのまま利用したものであろう。煙道部は不明瞭である。規模は長さ78cm幅80cmを測る。燃烧部右壁側は崩壊が激しく本来の形状を残していないようである。なお燃烧部中央には20cm大の楕円形の礫が直立して出土したが、これは支脚として用いられたと考えられる。貯蔵穴は北東コーナー部で検出され、平面は楕円形を呈する。規模は72×45cm深さ35cmを測る。

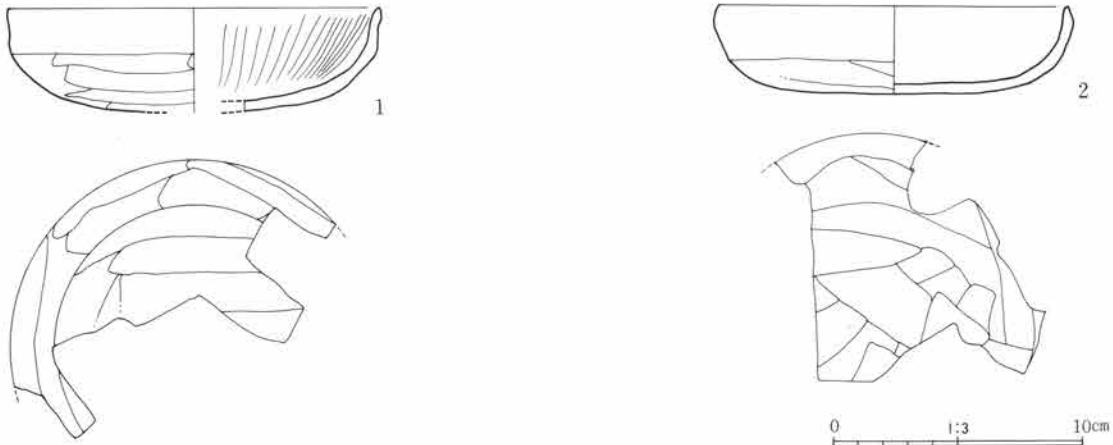


第119図 83号住居跡

その他の住居内施設は検出されなかった。住居覆土はロームブロック、粘土、焼土を含む黒褐色土が堆積する。

遺物はカマド、南壁際、貯蔵穴周辺から杯、甕、須恵器杯、同甕等の破片が出土している。奈良~平安時代のものが見られるが、数量的には奈良時代のものが主体を占める。

重複遺構はなく単独で検出された。



第120図 83号住居跡出土遺物

84号住居跡（第121図、PL.5）

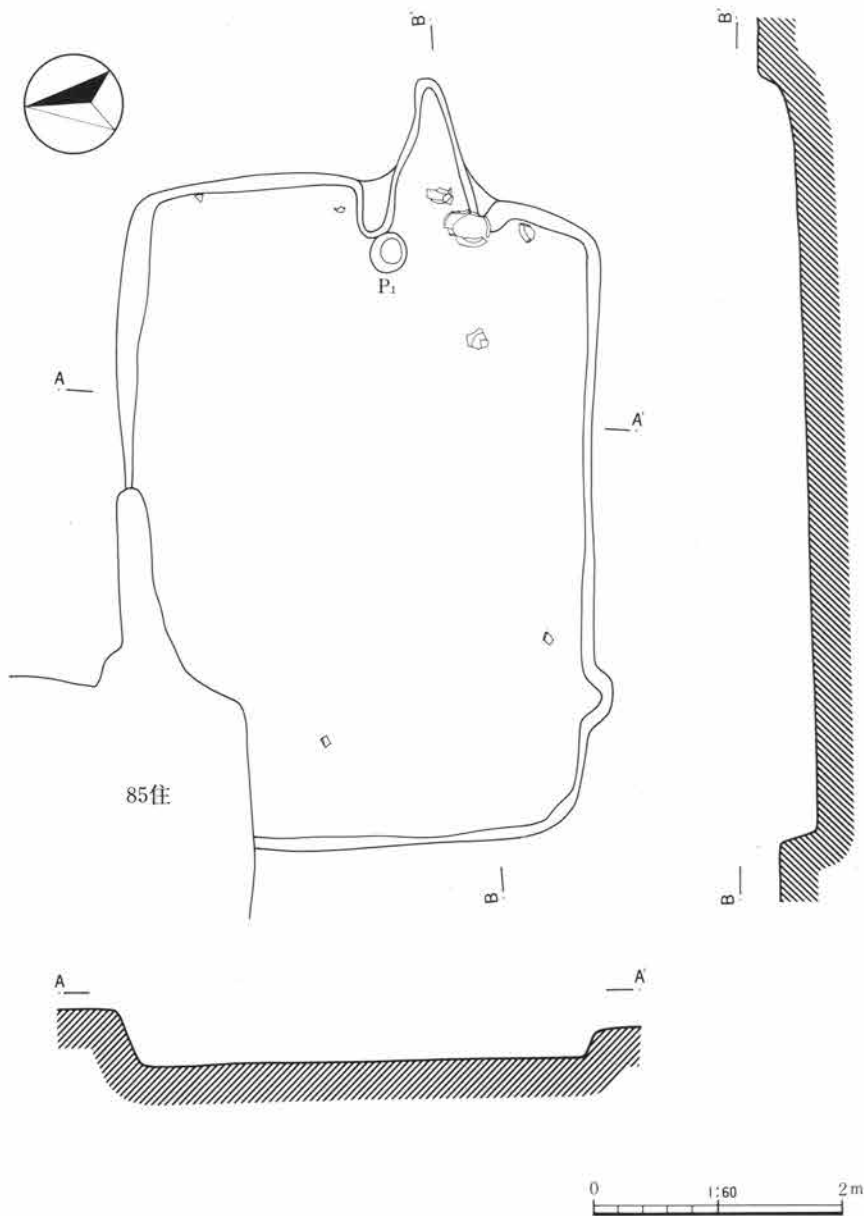
Ⅲ区D-3・4、E-3・4 グリッドに位置する。平面は縦長長方形で、規模は5.35×3.85m、面積は推定値で(19.20) m²を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は46~9cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用し、比較的平坦で硬質である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、

第V章 検出された遺構と遺物

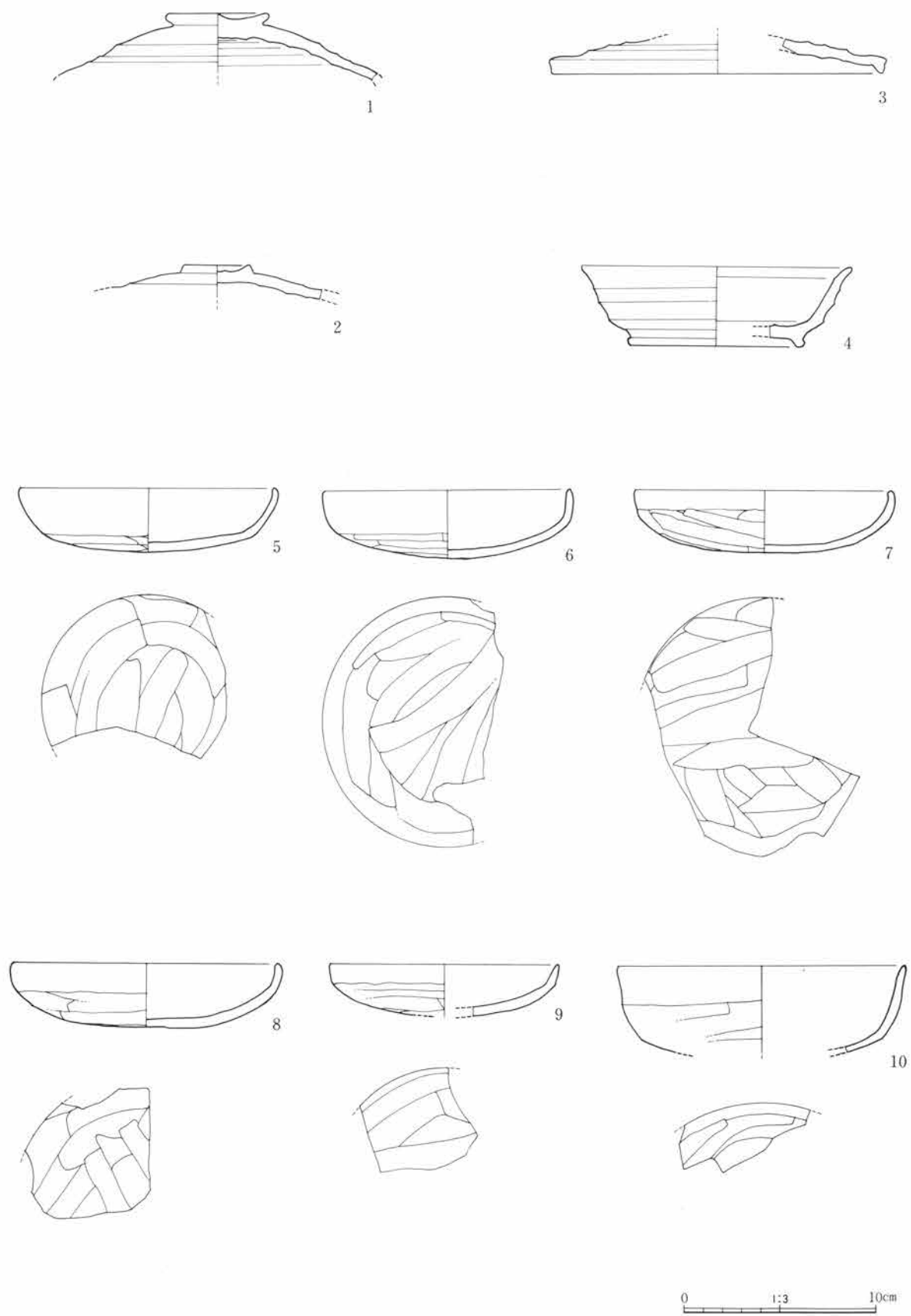
ほぼ全形が残る。長さは1.28m幅は1.25mを測る。軸方向はS-87°-Eを指す。そで部は壁内側に40cm程張り出す。右そで端部には甕が伏せられており、そでの補強材として用いられている。燃烧部はしだいに狭まり煙道部に続く。煙道は緩い傾斜で延びており、末端部で急激に立ち上がる。ピットはカマド左そでに隣接して検出された。規模は径30cm深さ19cmを測る。位置的に柱穴とは考え難く、その性格については不明である。住居覆土は浅間B軽石を含む黒褐色粘質土を主体とし、レンズ状の堆積状態を示す。

遺物はカマド周辺及び覆土中から多量の土器片が出土している。器種は杯、甕、須恵器杯、同蓋等があり数量的には杯と甕が主となる。時期は古墳時代後期～平安時代のものであるが、鬼高期新段階～奈良時代のものが多い。

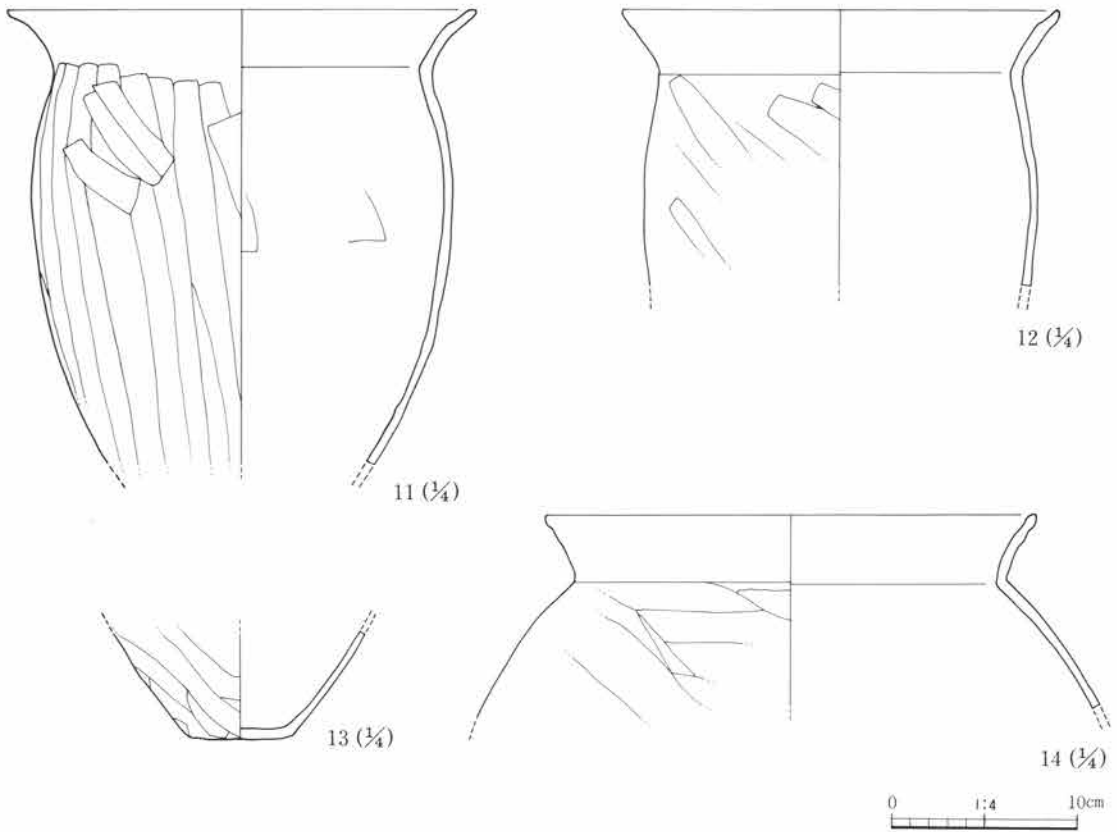
重複遺構は85号住居跡で、新旧関係はカマド残存状況より84号住→85号住である。



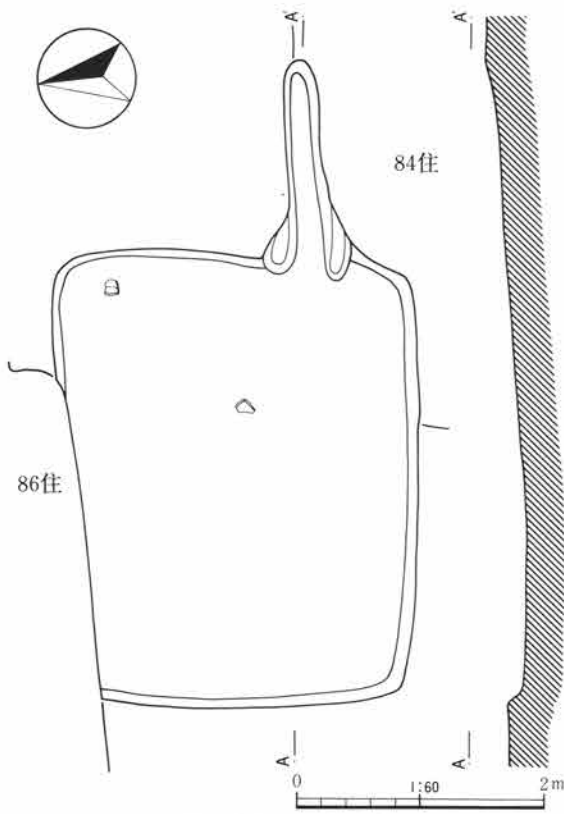
第121図 84号住居跡



第122図 84号住居跡出土遺物(1)



第123図 84号住居跡出土遺物(2)



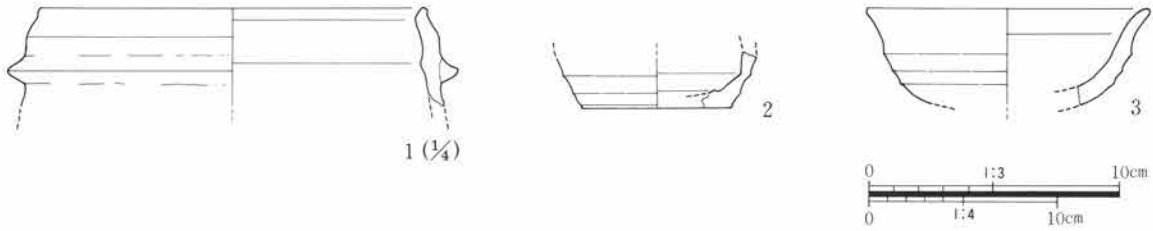
第124図 85号住居跡

85号住居跡(第124図、PL.5)

III区C-5、D-4・5グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は3.60×2.90m、面積は推定値で10.0㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高16~6cmを測る。床面は、地山の黒褐色粘質土で、やや凹凸がある。カマドは東壁の南寄りに構築される。そで部は若干壁内側に張り出すが、燃焼部は壁外側に築かれる。規模は全長1.73m、幅0.70mを測り、軸方向はN-90°-Eを指す。燃焼部は狭小で幅25cm前後を測る。貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。住居覆土は炭化物、粘土、ローム粒を含む黒褐色粘質土で、堆積状態はレンズ状である。

遺物は杯、高台付椀、羽釜、小形壺、砥石等が出土する。カマド及び覆土からの出土が多い。時期はほとんど平安時代後半期のものに限定される。

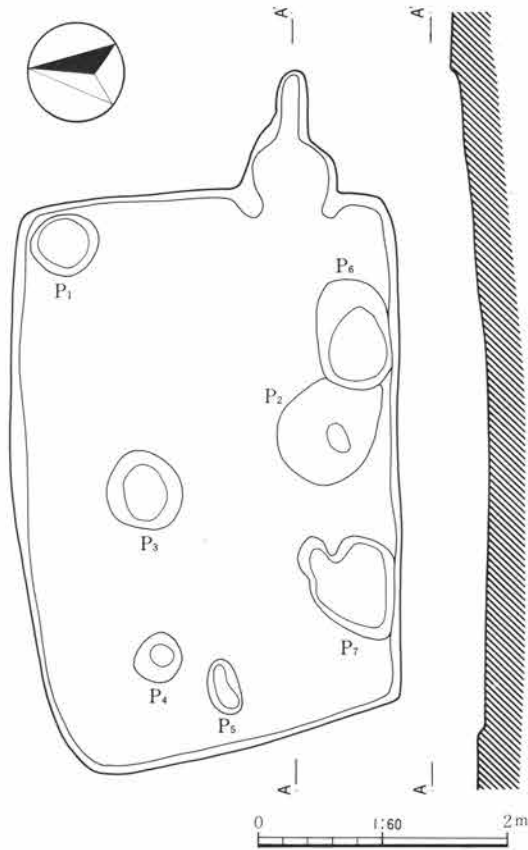
重複遺構は84号住居跡、86号住居跡で、判明した新旧関係は84号住→85号住であった。



第125図 85号住居跡出土遺物

86号住居跡 (第126図、PL. 6)

III区D-5・6、E-5・6グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.58×3.10mで、面積は13.80㎡を測る。主軸方向はN-80°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高40~3cmを測る。床面は黒色土とローム土の混合土でやや軟質。カマドは東壁の南際に構築される。そで部は若干壁内側に張り出し、本体の大部分は壁外側に張り出す。規模は全長1.16m幅0.82mで軸方向はN-89°-Eを指す。燃烧部は60×50cm程の規模で、煙道部長は50cm程を測る。ピットは7基検出された。規模はP₁径50cm深さ不明、P₂径80×75cm深さ11cm、P₃径62cm深さ53.5cm、P₄径38cm深さ14cm、P₅径45×25cm深さ16.5cm、P₆径93×60cm深さ18.5cm、P₇径104×72cm深さ15cmを測る。なおP₁、P₆、P₇は規模や形態、位置等から貯蔵穴の可能性も考えられる。しかしその他のピットで柱穴と考えられるようなものはない。住居覆土は焼土、灰、ローム粒を多く含む灰褐色土で、ブロック状の堆積状態を示す。



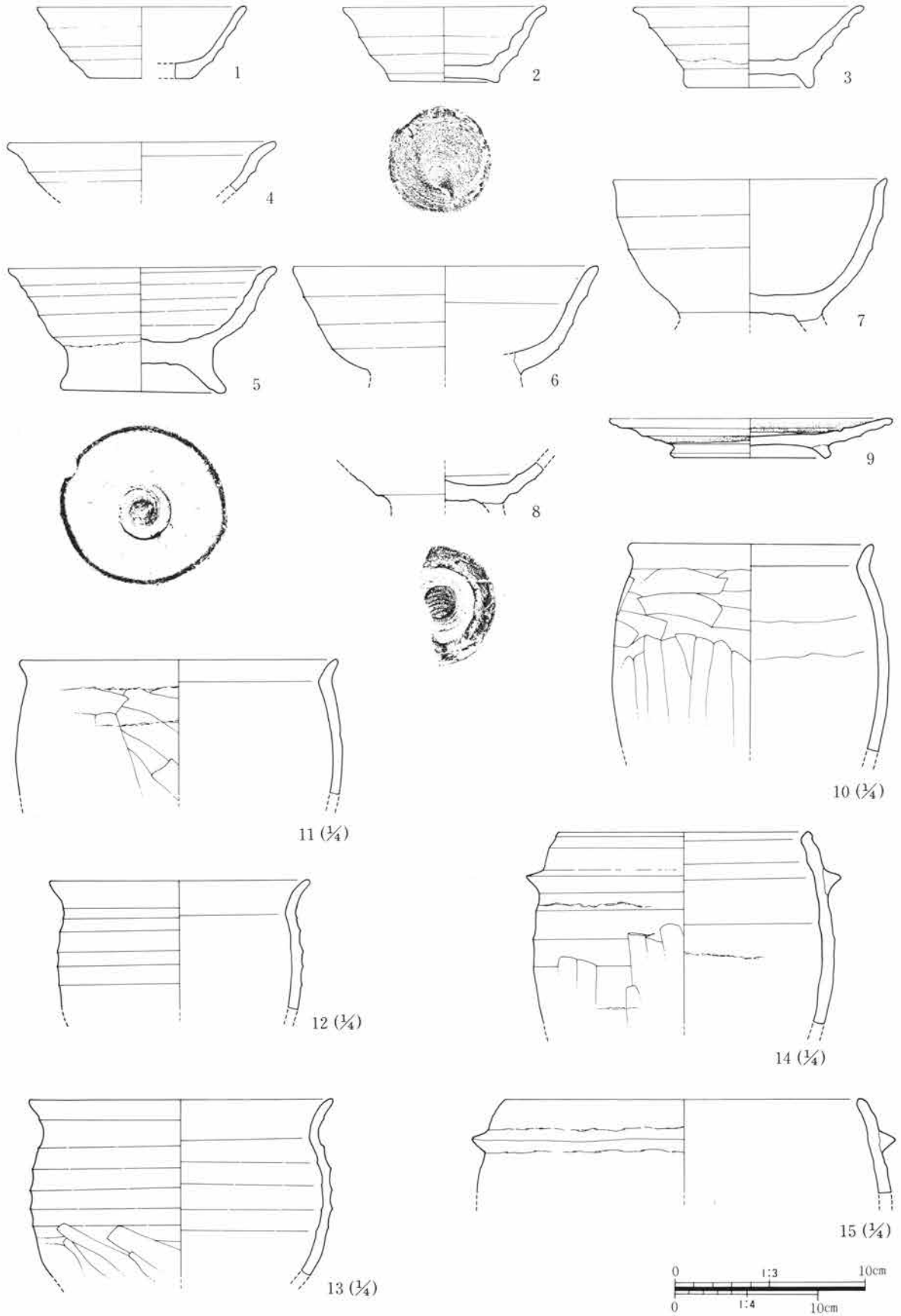
第126図 86号住居跡

遺物はカマド及び床面上より多量に出土している。器種は甕、須恵器甕が主体で、須恵器杯、高台付椀、羽釜、皿、短頸壺等が見られる。なおピットP₁、P₃、P₆より高台付椀、杯が出土している。時期は平安時代(10世紀代)と思われるものが大部分を占める。

重複遺構は120号住居跡で、土層観察より新旧関係は120号住→86号住である。

87号住居跡 (第128図、PL. 6)

III区C-6・7、D-6・7グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.16×3.35m、面積13.30㎡を測る。主軸方向はS-80°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高22~7cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用し、ほぼ平坦である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。規模は全長89cm、幅64cmを測る。軸方向はS-86°-Eを指す。そで部は若干壁内に張り出す。左そで部には15cm大の角礫が据えられており、おそらく補強材として用いられたと考えられる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。平面は円形を呈し、規模は69×62cm深さ32cmを測る。ピットは4基検出された。規模はP₁径35cm深さ15cm、P₂径45cm



第127図 86号住居跡出土遺物

深さ14cm、P₃径54×36cm深さ19cm、P₄径62×45cm深さ39cmを測る。P₁とP₂は規模がほぼ同一であり、又その位置的な関係から柱穴になる可能性もある。P₃とP₄については性格不明である。住居覆土は軽石を含む茶褐色土が堆積し、鉄分の凝集が多量に見られる。

遺物は甕、羽釜を主体としその他に杯、須恵器甕を含む。又土錘も2点出土している。出土位置はいずれも覆土中であつた。時期は平安時代に属するものを主体としている。

重複遺構はなく単独で検出された。

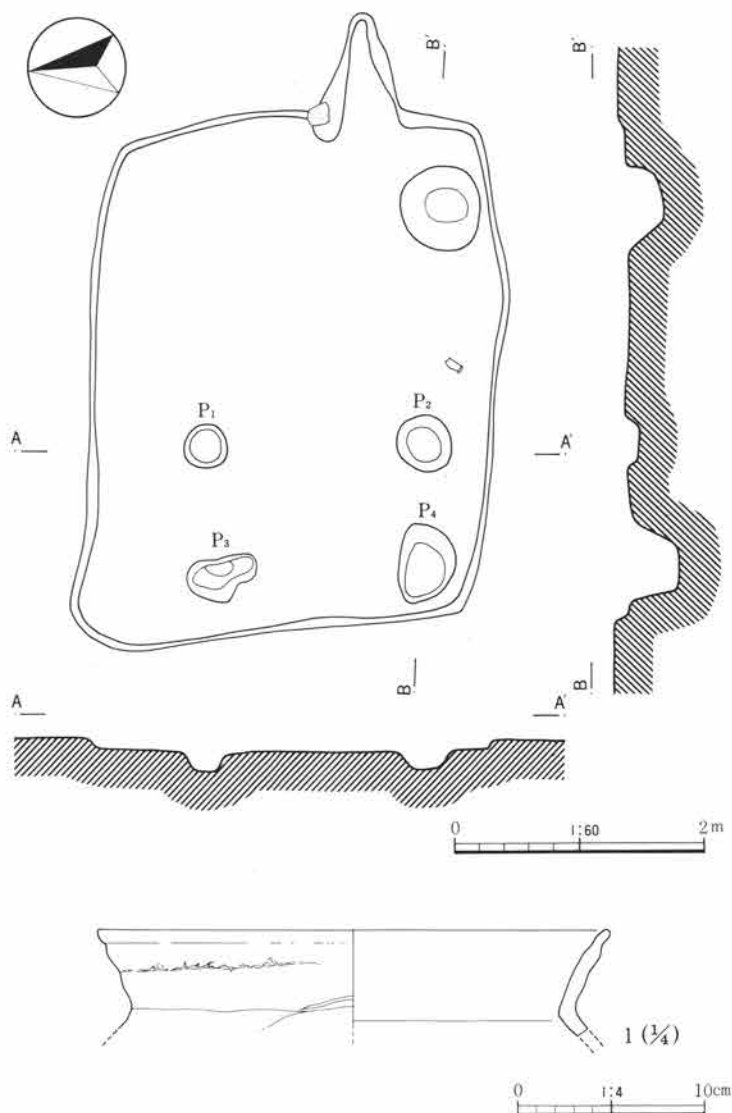
88号住居跡 (第129図、PL. 6)

III区D-7・8、E-7・8グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われ、規模は3.60m×2.50mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高25cm前後を測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、比較的平坦な面を呈する。カマドは、東壁南端に構築される。そで部は確認されず、燃烧部のみ検出された。規模は長さ70cm幅57

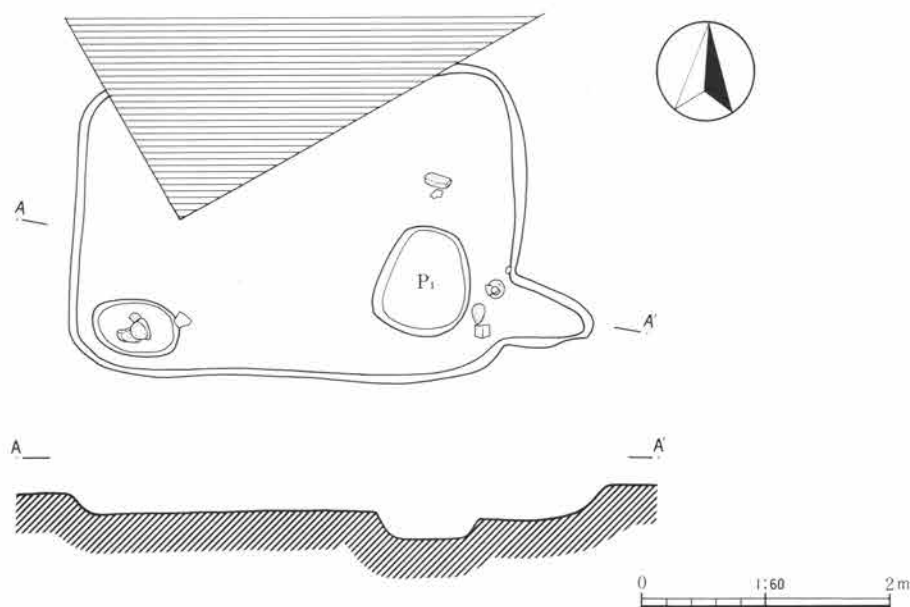
cmを測る。燃烧部前方の床面上に伏せた椀と円礫が並んで出土した。これは焚口部の構造と関係をもつものと思われる。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。平面は楕円形を呈し、規模は径70×48cm深さ16cmを測る。内部より角礫・円礫が3点出土したが、その性格については不明である。ピットはカマド前方部で1基検出された。これは卵形の平面形を呈し、規模は径87×76cm深さ15cmを測る。底面は比較的平坦で、攪乱壙や掘り形ではないと考えられる。又本住居跡に伴うと考えた場合、カマド前面に位置する事からその性格はカマドの煮沸作業に伴う施設と推定されるが、それ以上の具体的な機能を推測しうるような痕跡については検出されなかった。住居覆土は炭化物を多く含み鉄分凝集の見られる黒色粘質土で、堆積状態はブロック状であり、人為的な埋土とも解釈できるものである。

遺物は杯、高台付椀を主とし、これに灰釉椀、甕、羽釜、埴輪片等が数点加わる。時期は平安時代のものに限られる。

重複遺構はみられず、北西半部を後世の攪乱による土壌で切られている。



第128図 87号住居跡及び出土遺物



第129図 88号住居跡



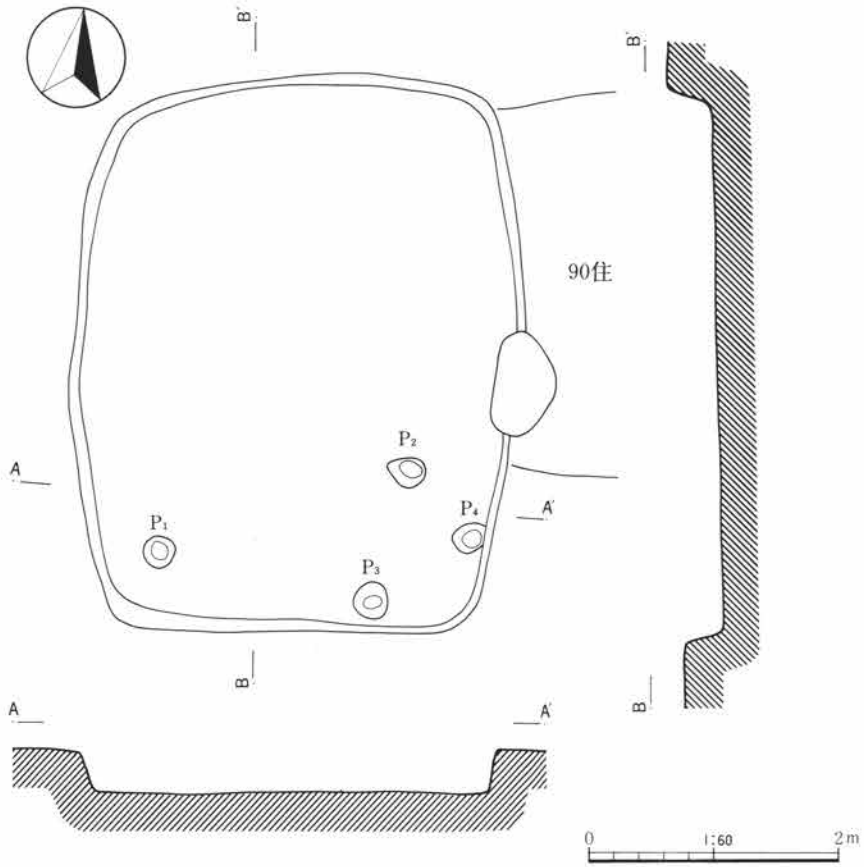
第130図 88号住居跡出土遺物

89号住居跡（第131図、PL.6）

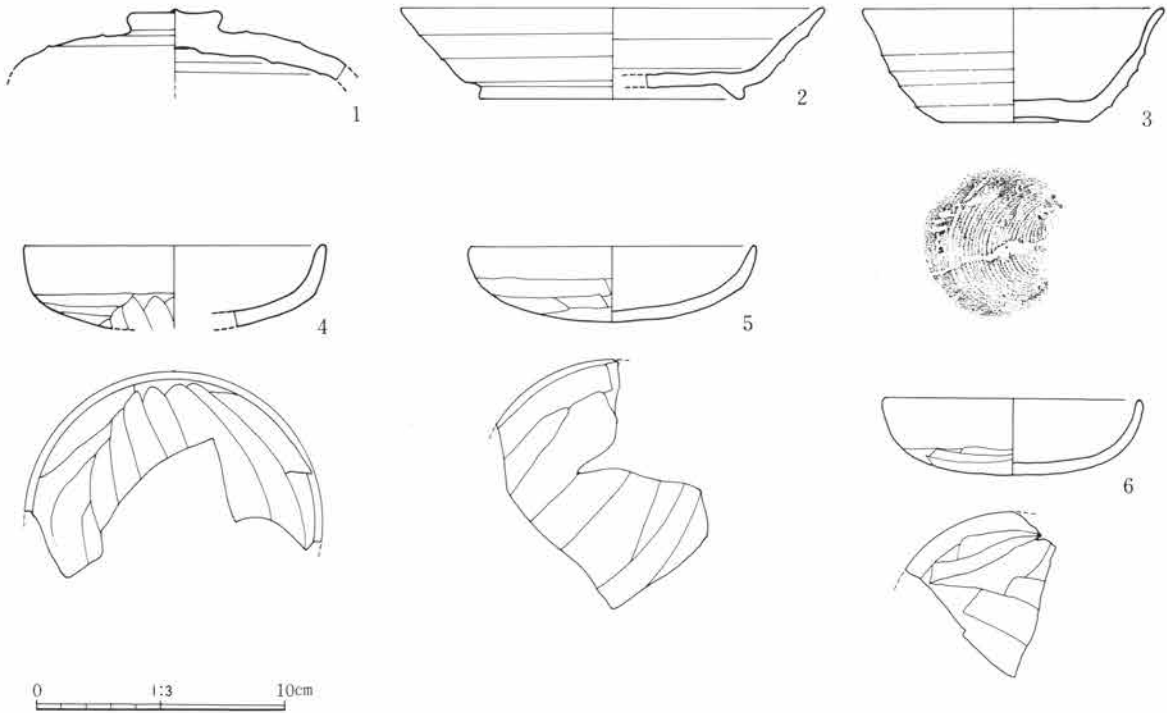
Ⅲ区F-7、G-6・7グリッドに位置する。平面は胴張りの隅丸長方形を呈し、規模は4.40×3.45m、面積14.6㎡を測る。主軸方向はN-17°-Wを指す。壁は比較的残存状態良好で、確認壁高38～31cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用しており、平坦で硬質である。カマドは検出されなかった。ピットは4基が検出された。規模はP₁径25cm深さ21.5cm、P₂径31×23cm深さ13.5cm、P₃径30cm深さ31cm、P₄径26×22cm深さ12cmを測る。いずれも住居南半部の壁際に集中する傾向が見られる。これらは規模、形状ともにほぼ同じものであるが、その性格については不明である。なお東壁の中央部に不整楕円形ピットが検出されたが、これは重複する90号住居跡に伴うものと考えられる。

遺物は覆土より杯、須恵器蓋、同杯、甕等が出土しており、数量としては甕片が最も多い。時期は奈良時代のものを主体としており、その他に古墳時代初頭の甕片がみられる。

重複遺構は90号住居跡で、新旧関係は土層観察からは判断できなかったが、出土遺物の時期を参考にすれば89号住→90号住と推定される。



第131図 89号住居跡



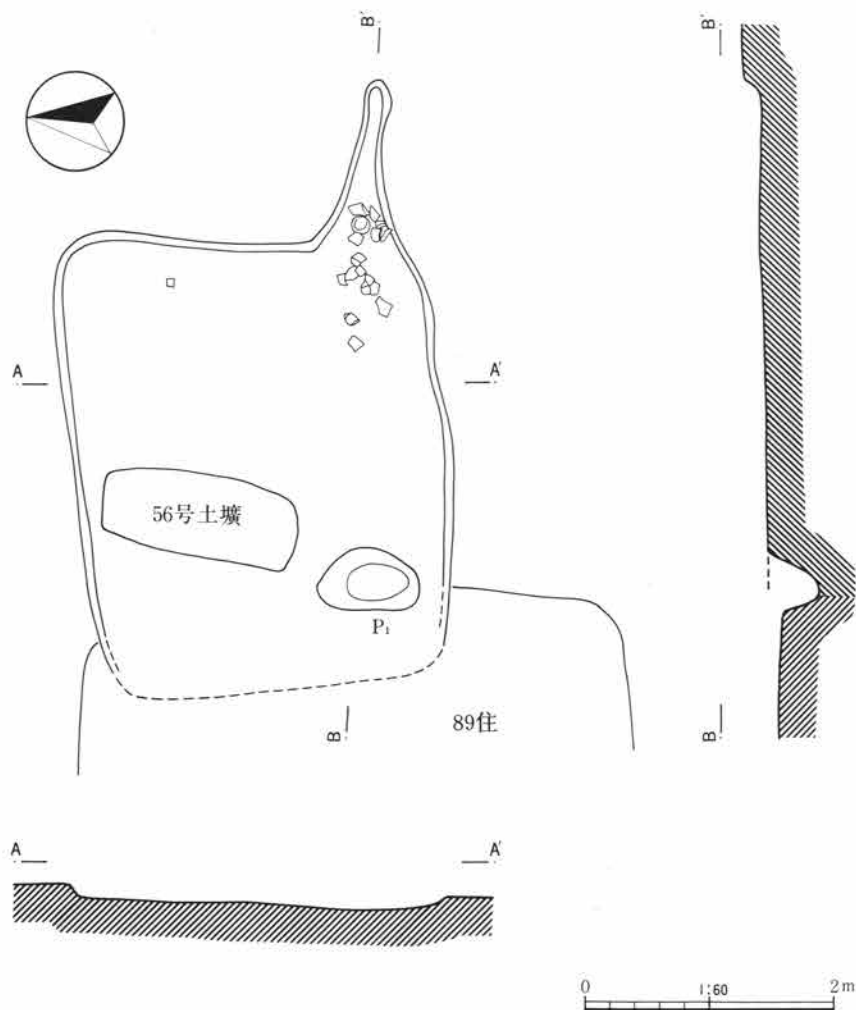
第132図 89号住居跡出土遺物

90号住居跡 (第133図、PL. 6)

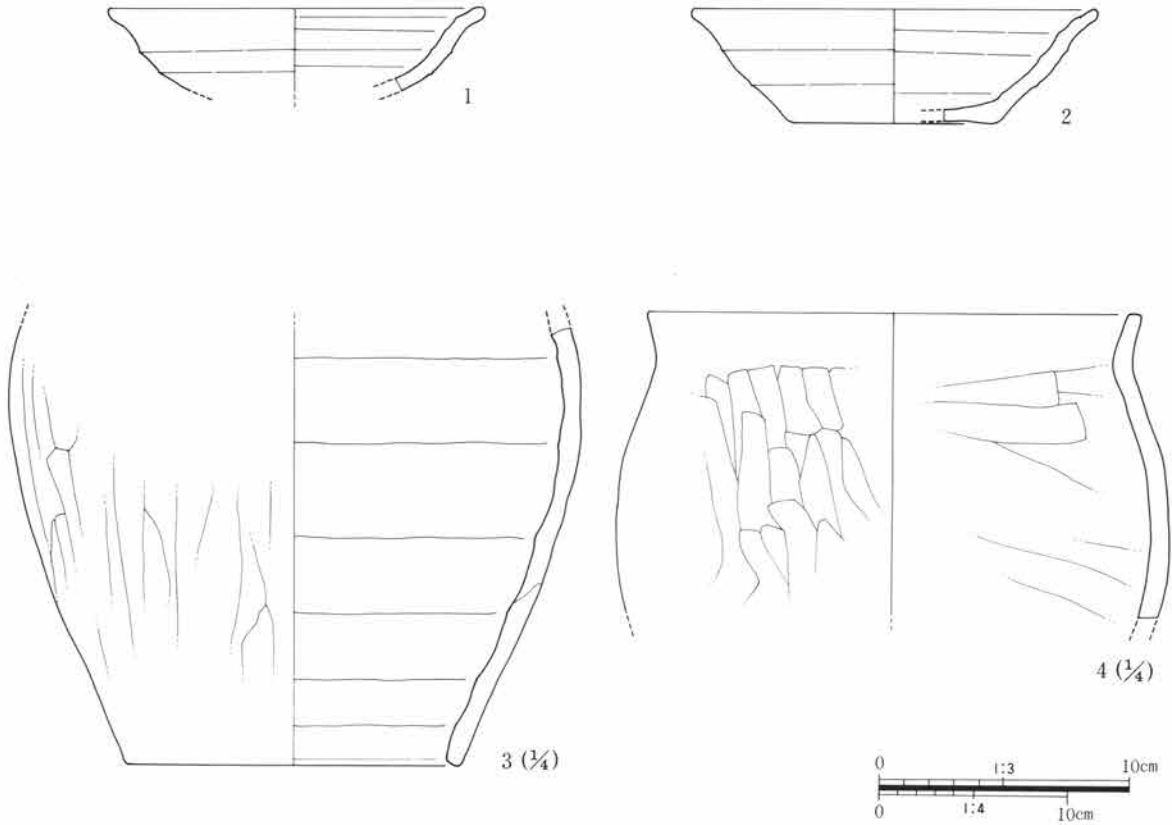
III区G-6・7、H-6・7グリットに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は3.70×3.05m、面積14.7㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は外傾し、残存状態は不良で、確認壁高は24~6cmを測る。床面は凹凸が多く、北側がやや高くなっている。カマドは東壁南端に構築され、燃焼部と煙道部が検出された。そで部は確認できなかったがおそらく壁をそのまま利用したと思われる。規模は全長1.38m、幅0.74mを測る。軸方向はS-85°-Eを指す。燃焼部~焚口部で円筒埴輪と羽釜片が出土しているが、特に埴輪については天井部補強材として用いられたものであろう。ピットは南西部隅に検出された。不整楕円形を呈し、規模は83×49cm深さ41cmを測る。これは貯蔵穴の可能性も考えられる。覆土は浅間B軽石と炭化物を含む褐色土で、レンズ状の堆積状態を示す。

遺物はカマド周辺の床面及び覆土下位から出土している。器種は甕、杯、羽釜、甌、埴輪等の破片で、時期は平安時代のものを主体とする。

重複遺構は89号住居跡、56号土塋で、新旧関係は89号住→90号住→56号塋と推定されるが、土層観察では確認できなかった。



第133図 90号住居跡



第134図 90号住居跡出土遺物

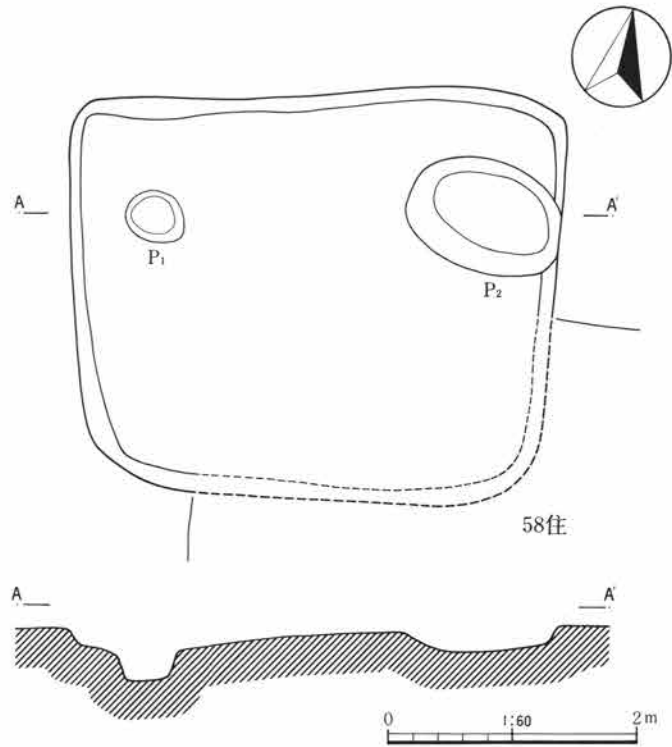
91号住居跡 (欠番)

92号住居跡 (第135図)

II区D-22・23、E-22・23グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南東部は58号住と重複するため不明である。規模は3.92×(3.33)mを測る。壁は残存状態不良で、確認壁高12～2cmを測る。床面は黒色土とロームブロック混合土を埋めたもので、軟質である。カマドは検出されなかった。ピットは2基検出され、P₁は円形を呈し、規模は径40cm深さ23.5cmを測る。P₂は楕円形を呈し浅い皿状の底面をもつもので、規模は径128×90cm深さ23.5cm前後を測る。形状からP₁は住居に伴う施設と思われるが、P₂は掘り形時の痕跡と考えられる。

遺物はない。

重複遺構との新旧関係は不明である。



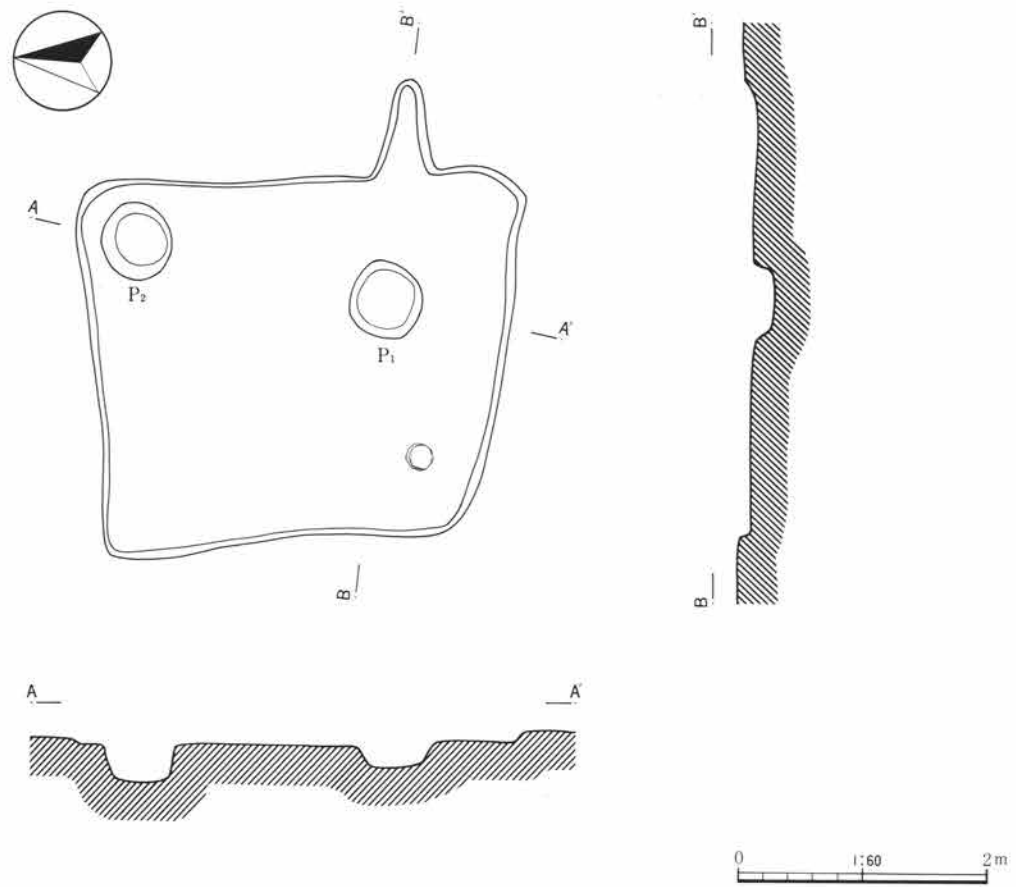
第135図 92号住居跡

93号住居跡（第136図、PL. 6）

Ⅲ区G-3・4グリッドに位置する。平面は台形に近い横長長方形を呈し、規模は3.00×3.55m、面積は9.8㎡を測る。主軸方向はN-85°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高8～3cmを測る。床面は黒色土を利用し、比較的平坦。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、燃焼部と煙道部が検出された。規模は全長76cm幅50cmを測り、軸方向はN-90°-Eを指す。そで部はおそらく壁を利用したと思われ、本体の大部分が壁外に張り出すものと思われる。ピットは2基検出された。P₁はカマド前方70cm程の位置、P₂は北東コーナー部に位置する。規模はP₁径60×55cm深さ16cm、P₂径60×55cm深さ17.5cmを測る。P₂は位置や形状から貯蔵穴の可能性が考えられるが、P₁の性格については不明である。

遺物は覆土より甕、壺、須恵器蓋、埴輪等の小破片が20数点出土している。時期は奈良～平安時代のものである。

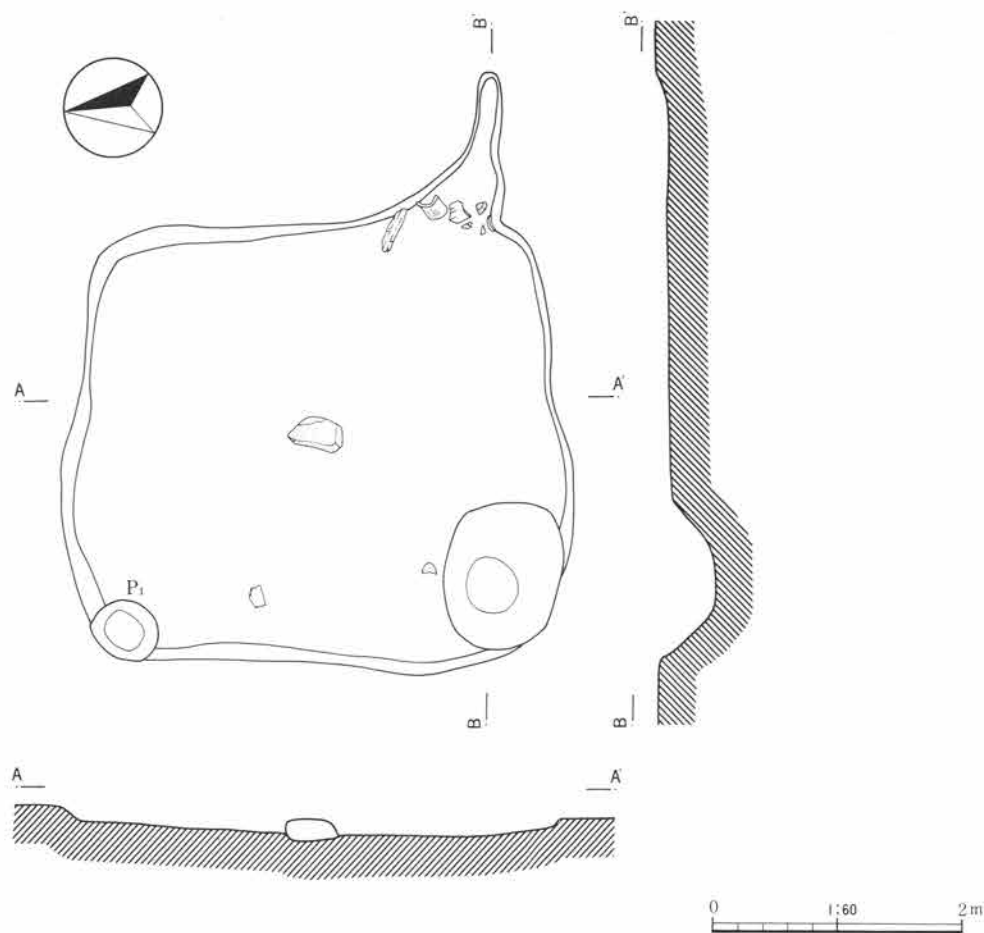
重複遺構はなく単独で検出された。



第136図 93号住居跡

94号住居跡（第137図）

Ⅲ区H-4・5、I-4・5グリッドに位置する。平面形は歪んだ横長長方形を呈し、規模は3.61×4.12m、面積は13.7㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は残存状態不良で、特に北側については後世の攪乱によりかなり削平されている。確認壁高は17cm前後を測る。床面は地山の黒褐色粘質土で、凹凸が激しい。カマドは、東壁南端部に構築される。長さ120cm幅69cmを測る。軸方向はS-71°-Eを指す。本体は住居跡の

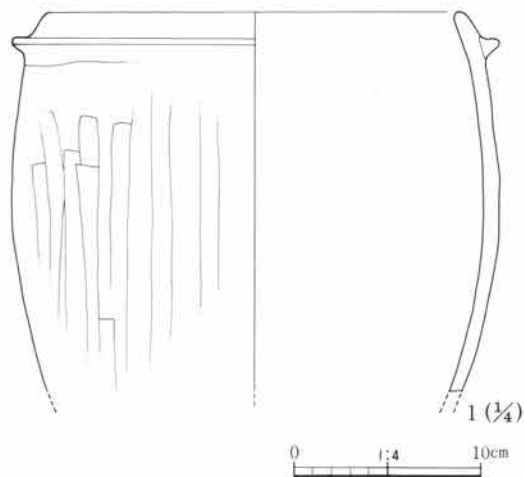


第137図 94号住居跡

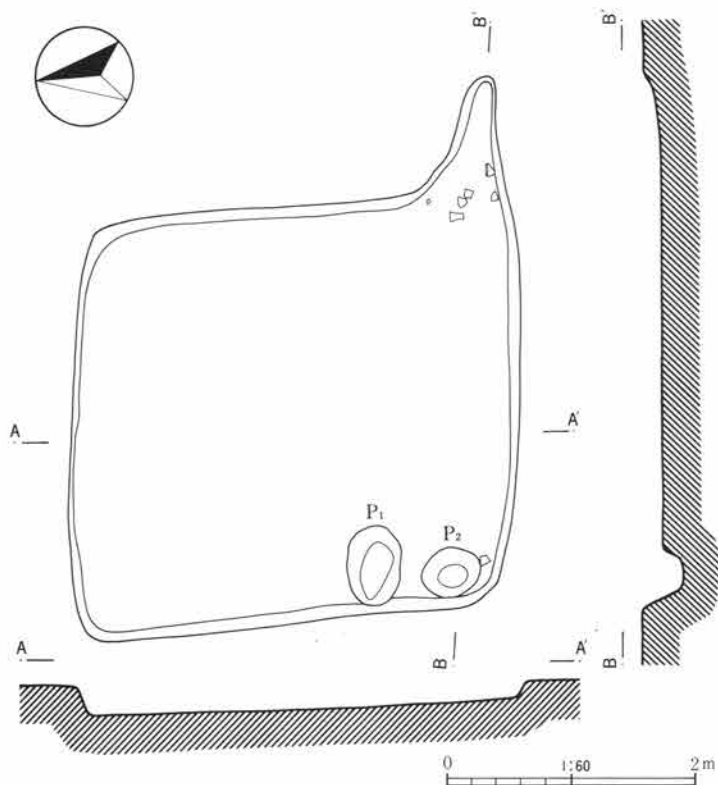
壁を掘り込んで構築されるが、この住居壁部分に円筒埴輪片を直立させそでの補強材としている。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。平面は歪んだ楕円形を呈し、規模は径130×83cm、深さ39cmを測る。ピットは北西コーナー部で検出された。規模は径47cm深さ37.5cmを測る。その性格については不明である。住居覆土は浅間B軽石と焼土を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は甕、羽釜、埴輪の破片が20点程出土している。カマド内と床面から出土したものは平安時代のものに限られる。又中央床面上に40cm大の扁平な角礫が出土したがその使用目的については不明である。

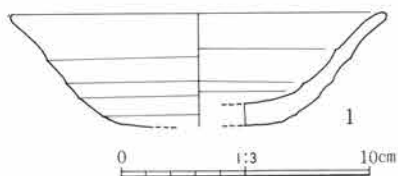
重複遺構は95号住居跡で、北東コーナー部分でわずかに重複するのみで、新旧関係は土層観察によっても判明できなかった。なお西側部分は前述のように後世の攪乱によりかなり破壊を受けているが、この攪乱自体は不定形で、いかなる遺構なのかは判明できなかった。



第138図 94号住居跡出土遺物



第139図 103号住居跡



第140図 103号住居跡出土遺物

95号・96号・97号・98号・99号・
100号・101号・102号住居跡（早川河
川改修地域調査分）

103号住居跡（第139図、PL. 6）

Ⅲ区H-8、I-8・9グリッドに位置する。やや歪んだ正方形を呈し、規模は3.33×3.58m、面積12.0㎡を測る。主軸方向はS-88°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は19~13cmを測る。床面は、地山の灰褐色砂質土を利用しており、比較的平坦である。カマドは東壁南端に構築される。規模は長さ103cm、幅73cmを測る。軸方向はS-75°-Eを指す。

ピットは南西コーナー部に2基検出された。規模はP₁径63×43cm深さ19cm、P₂径45×40cm深さ18cmを測る。

2基とも壁際で70cm程の間隔で並

列していることから入口施設に伴う階段か梯子状のもの痕跡かと思われる。住居覆土は上層に暗灰褐色砂質土、下層に灰褐色砂質土がレンズ状に堆積する。

遺物は杯と円筒埴輪片が10数点出土した。時期は平安時代に属するものと考えられる。

104号住居跡（第141図、PL. 6）

Ⅲ区H-9・10、I-9・10グリッドに位置する。平面はやや歪んだ横長方形を呈する。南壁の西半部分がやや外方に張り出す。規模は2.83×2.92m、面積10.7㎡を測る。主軸方向はS-89°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は13~3cmを測る。床面は地山の灰色粘質土を基盤とし、平坦で軟質である。カマドは東壁南端に構築される。そで部は張り出さしておらず、本体は壁外に築かれる。規模は長さ110cm、幅52cmを測り、軸方向はS-86°-Eを指す。左そで部になると思われる住居壁とのコーナー部では埴輪が直立して出土しておりそで部補強材として用いられた可能性が高い。なお検出されたカマドの前方床面において炭化物粉が散布しており、その部分が焚口になると思われる。ピットは床面中央部のやや西寄り検出された。平面はやや歪んだ円形を呈し、規模は径62×56cm深さ24cmを測る。位置的に柱穴あるいは貯蔵穴とは考え難く、その性格については不明である。住居覆土は灰色砂質土が単一で堆積している。

遺物はカマド燃焼部及び覆土中から甕及び円筒埴輪の破片が10数点出土している。甕片はいずれも平安時代のものと考えられる。

重複遺構は105号住居跡で、南西コーナー部分で重複する。新旧関係は、土層観察と床面の存在から105号

住→104号住と考えられる。

105号住居跡 (第142図、PL. 6)

Ⅲ区G-9・10、H-9・10グリッドに位置する。平面は南壁がやや歪むがほぼ正方形を呈する。規模は3.10×3.18mで、面積は9.6㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は22~11cmを測る。床面は地山の灰褐色砂質土を利用し、ほぼ平坦である。カマドは東壁南端に構築される。突出したそで部は検出されなかった。規模は長さ113cm、幅69cmを測り、軸方向はN-90°-Eを指す。煙道はほぼ水平に延び末端部分で急激に立ち上がる。なおカマド前方床面上には炭化物が集中して検出された。ピットは3基が検出された。規模はP₁径63×52cm深さ30.5cm、P₂径52×48cm深さ11.5cm、P₃径54×48cm深さ9cmを測る。性格については不明である。住居覆土は灰褐色砂質土(地山とほぼ同質)が堆積する。

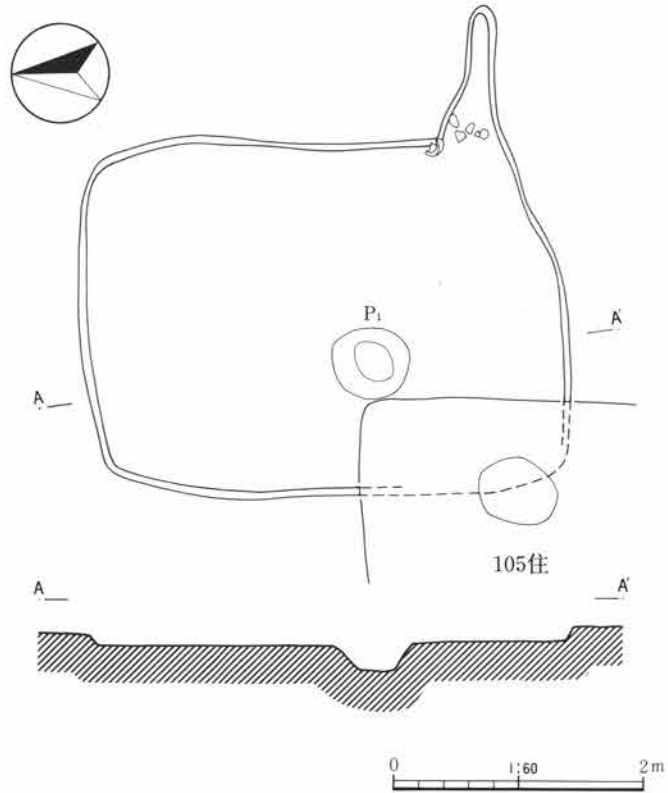
遺物は甕と羽釜を主体とし、これに埴輪片1点加わる。カマド内と南西コーナー部分に集中して出土する。時期は平安時代(10世紀後半以降)に属するものと思われる。

重複遺構との新旧関係は105号住→104号住である。

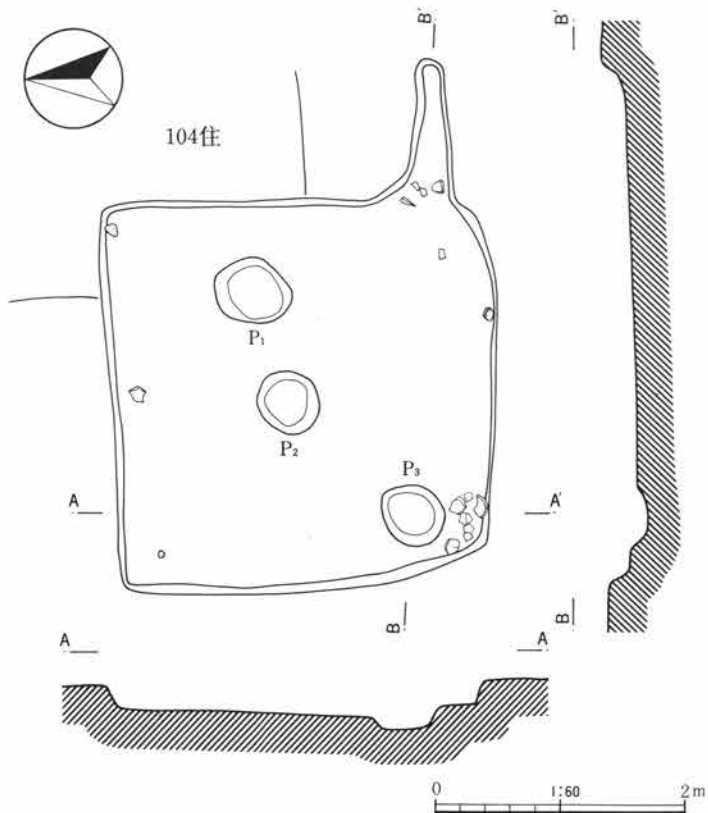
106号・107号住居跡 (早川河川改修地域調査分)

108号住居跡 (第144図、PL. 6)

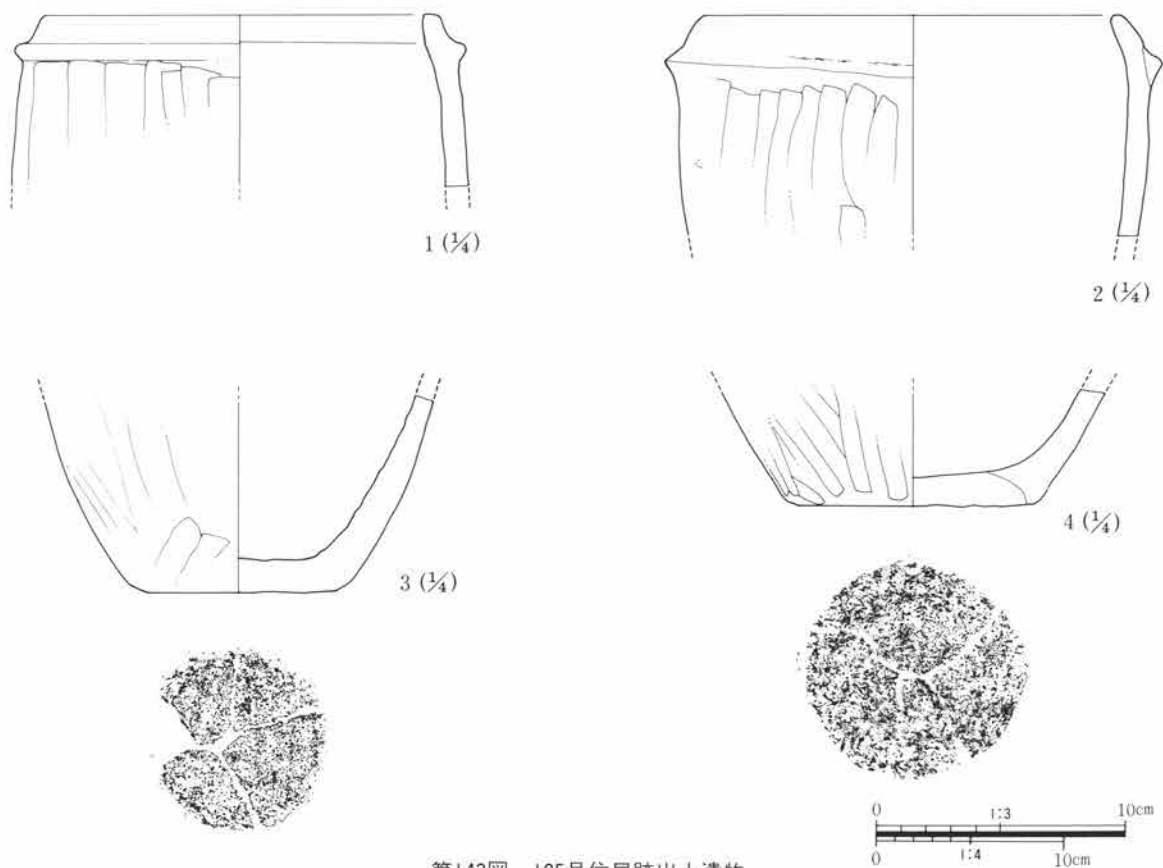
Ⅲ区H-3・4、I-3・4グリッドに位置する。平面は隅丸方形を呈すると思われるが、南東部分は調査区外にあるため形状、規模は不明で



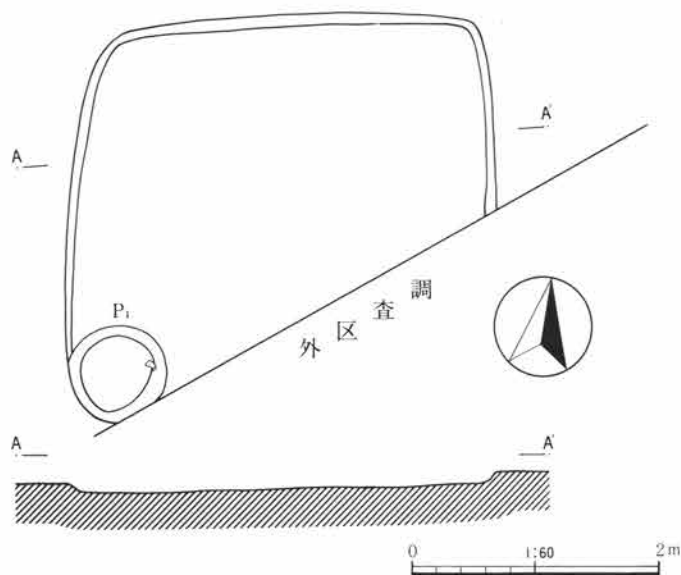
第141図 104号住居跡



第142図 105号住居跡



第143図 105号住居跡出土遺物



第144図 108号住居跡

ある。壁はやや外傾し、確認壁高は8cm前後を測る。床面はローム土粒混入の黒褐色土で平坦ではあるが軟質。ピットは南西コーナー部で検出された。規模は77×75cm深さ20.5cmを測る。規模、形状、位置から貯蔵穴の可能性はある。カマド、周溝は検出されなかった。

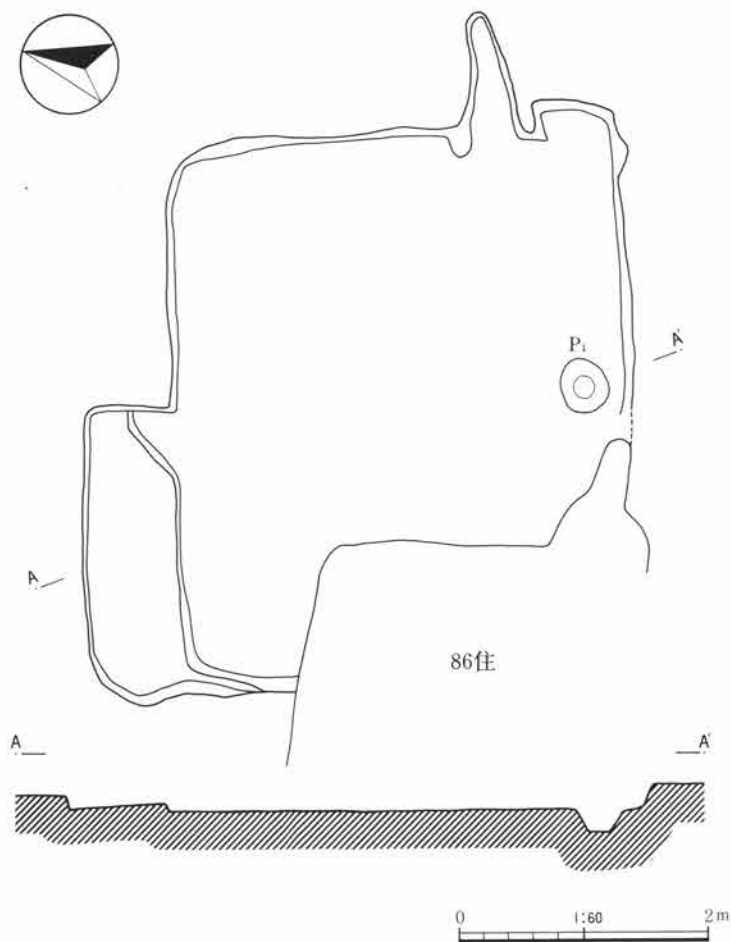
遺物はピット及び覆土中から杯、甕、高台付椀、円筒埴輪等の小破片が約20片出土した。時期は平安時代に属するものと思われる。

109号・110号・111号・112号・113号・114号・115号・116号・117号・118号・119号住居跡（早川河川改修地域調査分）

120号住居跡（第145図、PL. 6）

III区E-5・6グリッドに位置する。平面形は縦長長方形に北壁西半の方形張り出し部が付属する。規模は4.52×3.72mを測る。主軸方向はN-74°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高31~15cmを測る。床面は地山

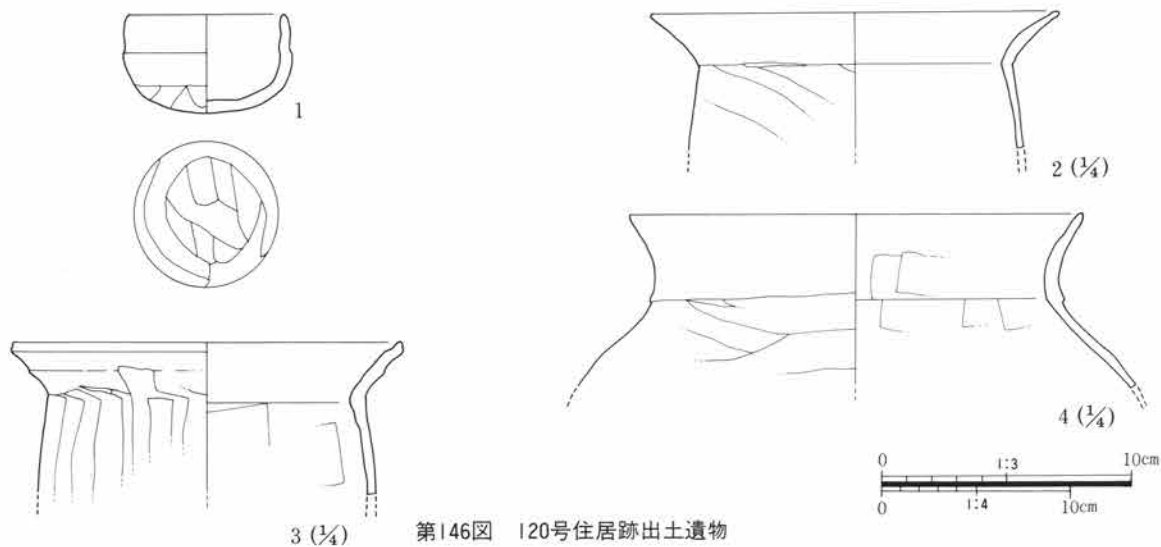
の黒褐色粘質土を利用する。小さな凹凸は見られるが、比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。残存状態は良好である。規模は長さ112cm幅50cmを測る。軸方向はN-73°-Eを指す。その一部は壁内に30cm程張り出す。煙道は緩傾斜で立ち上がる。張り出し部分は西壁の南半部に掘り込まれ、平面は長方形を呈する。規模は240×75cmを測り、底面レベルは14cm程住居床面より高く、境が段をなしている。なお張り出し部の覆土に焼土ブロックが堆積している。その性格としては階段あるいは祭祀用の壇、器具類を置く棚等が考えられるが、これについて言及できるような痕跡は検出されなかった。ピットは南壁際の中央付近に1基が検出された。規模は径40cm深さ16cmを測る。住居覆土は浅間B軽石とローム土粒を含む黒色砂質土が堆積している。



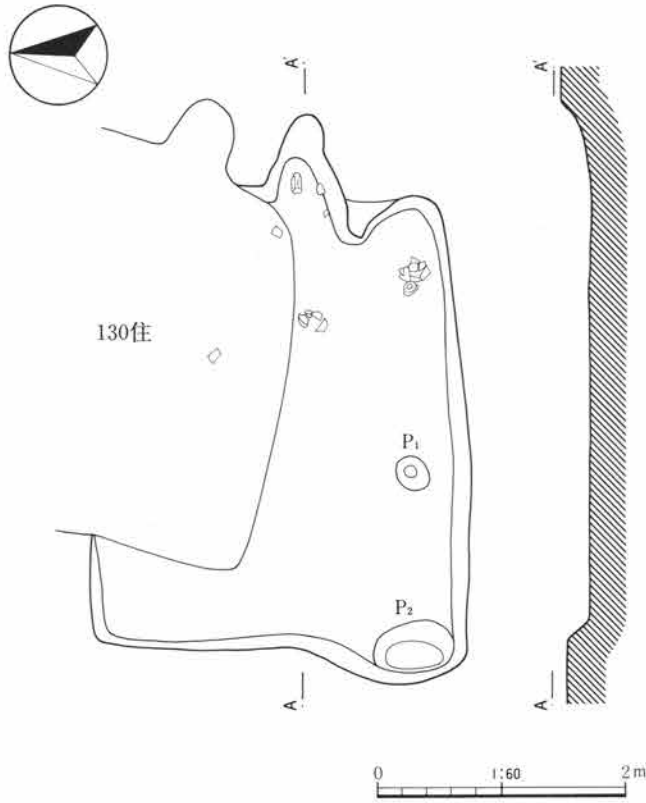
第145図 120号住居跡

遺物は杯、甕、器台等があり、カマド周辺～東側コーナー部分に集中して出土している。時期は古墳時代後期～奈良時代のものを主体としている。

重複遺構は86号住居跡で、新旧関係は120号住→86号住である。



第146図 120号住居跡出土遺物



第147図 129号住居跡

121号住居跡 (欠番)

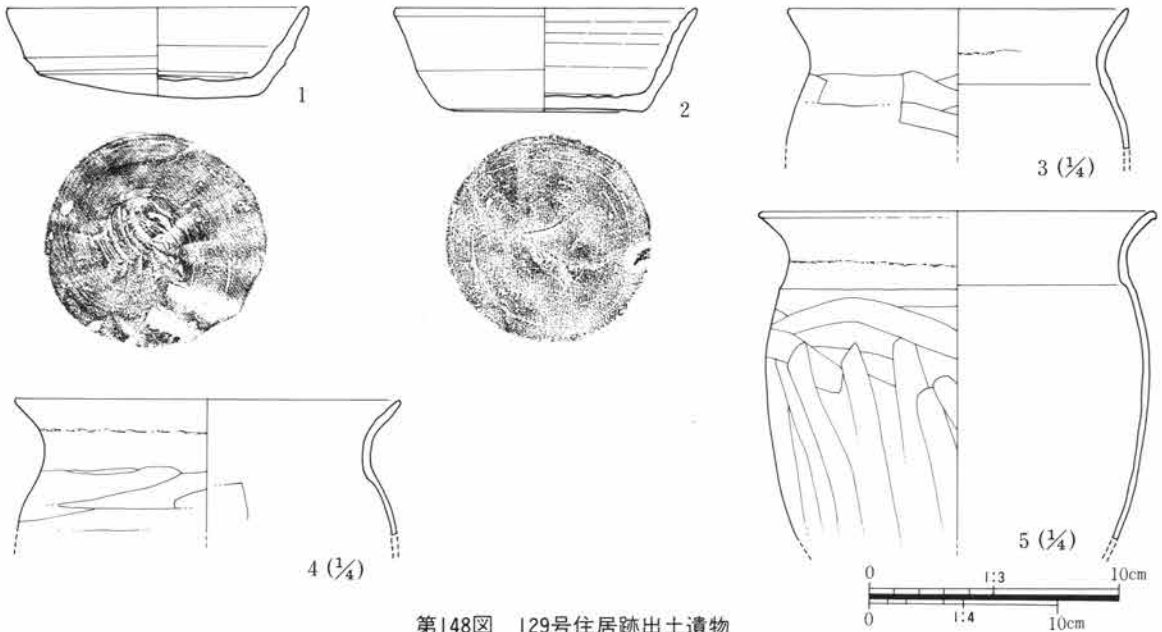
122号・123号・124号・125号・126号・
127号・128号住居跡 (早川河川改修地域
調査分)

129号住居跡 (第147図、PL. 6)

IV区H-4、I-3・4グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。西壁南端部がやや外方に張り出す。規模は3.85×(3.02)mを測り、主軸方向はN-87°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高31~10cmを測る。床面は地山のローム土を利用し小規模な凹凸が多い。カマドは東壁のほぼ中央に構築される。規模は長さ103cm幅62cmを測る。軸方向はN-77°-Eを指す。そで部は30cm程壁内に張り出す。又燃焼部中央には円礫を直立させ支脚としている。ピットは2基検出された。P₁は南壁際中央付近、P₂は南西コーナー部に位置する。規模は

P₁径30×25cm深さ29.5cm、P₂径64×40cm深さ10cmを測る。住居覆土は黒褐色土がレンズ状に堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋等が30数片出土している。甕が主体で、時期は奈良~平安時代に属する。重複遺構は130号住居跡で、新旧関係は土層観察より129号住→130号住である。

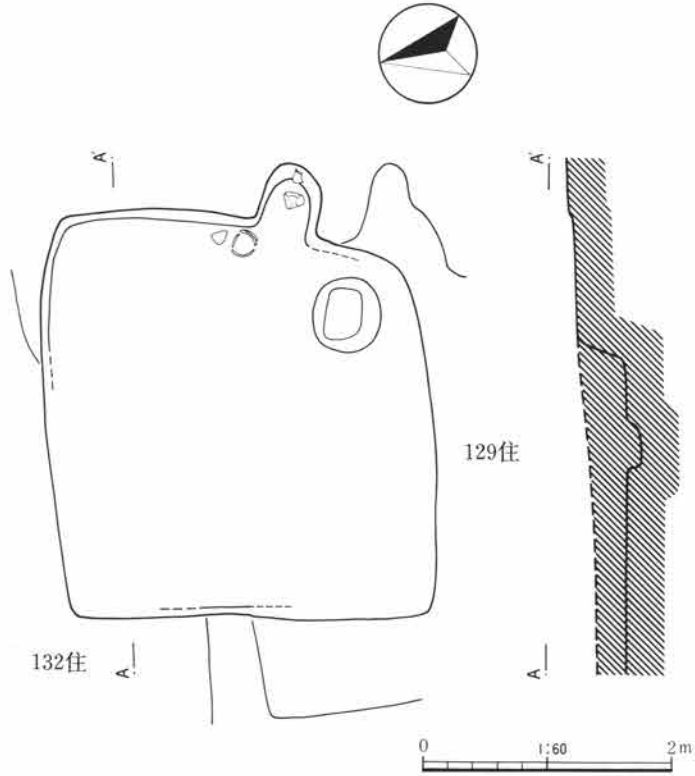


第148図 129号住居跡出土遺物

130号住居跡(第149図、PL. 6)

IV区I-4グリッドに位置する。

平面はやや歪んだ正方形を呈し、規模は3.21×(1.52)mを測る。主軸方向はS-86°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は31~3cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土を埋め貼床としている。中央部がやや高い。カマドは東壁中央よりやや南寄りに構築される。規模は長さ60cm、幅52cmを測る。軸方向はS-66°-Eを指す。煙道部は検出されなかったが、おそらく後世の削平により失なわれたと思われる。なお燃焼部の中央で礫が直立した状態で検出されたがこれは支脚として用いられたと思われる。又左そでと思われる部分に甕が倒立して出土したが、こ

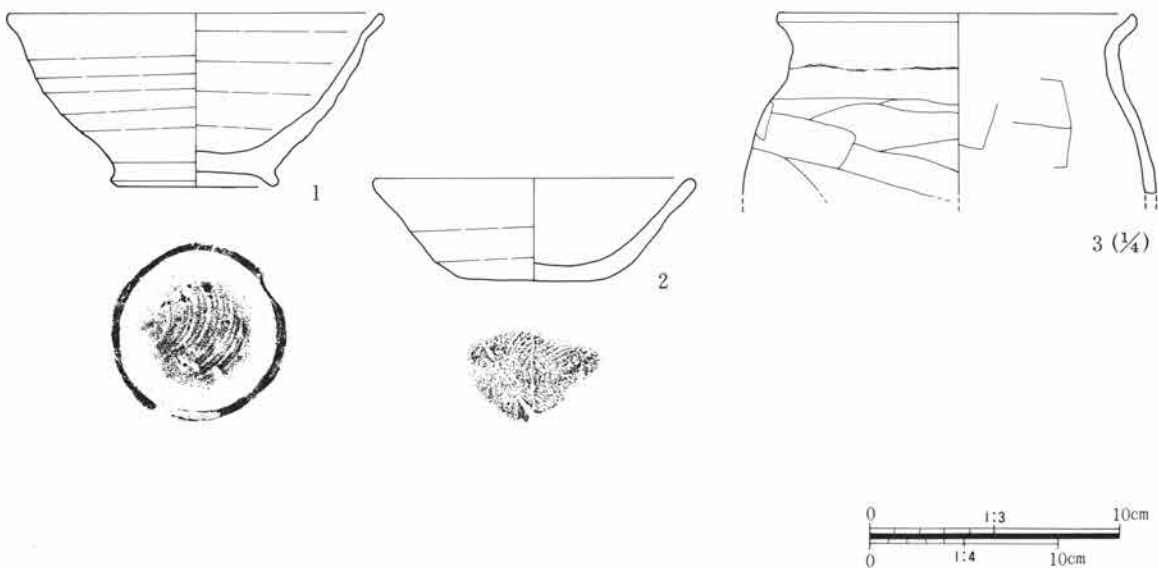


第149図 130号住居跡

れは焚口部分の補強材として用いられたものであろう。貯蔵穴は南東コーナー部で検出され、平面は楕円形を呈する。規模は径56×53cm深さ16cmを測る。

遺物は杯、甕、高台付椀、砥石が出土している。出土位置はカマド周辺に集中する。時期は奈良時代~平安時代のものである。

重複遺構は129号住居跡、132号住居跡で、新旧関係は土層観察により129号住・132号住→130号住であった。



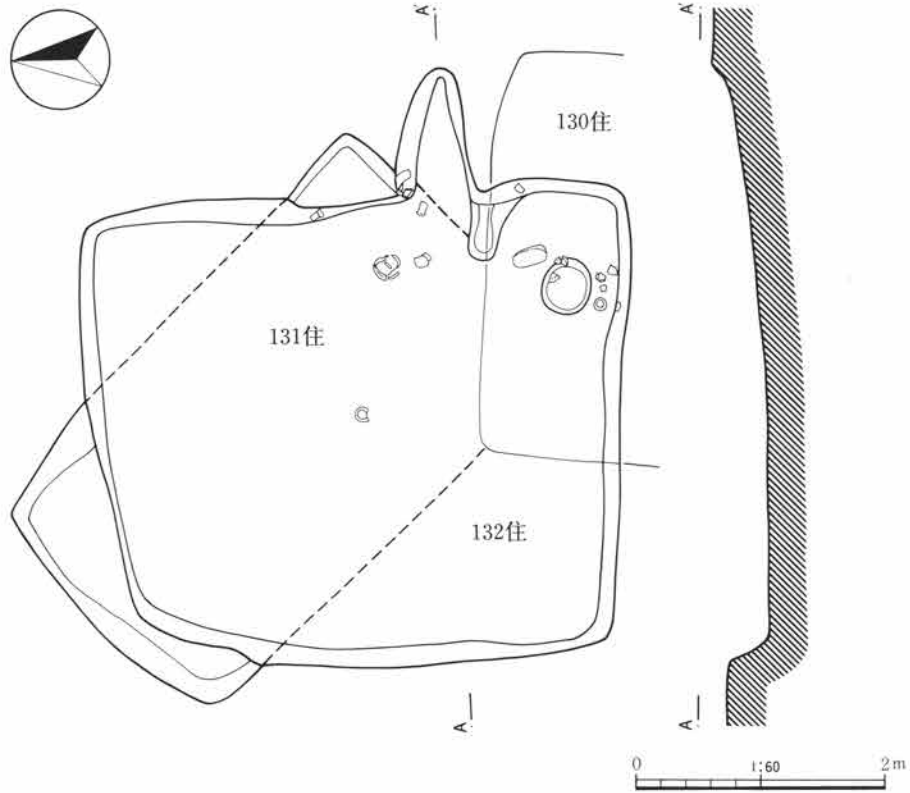
第150図 130号住居跡出土遺物

131号住居跡 (第151図、PL. 7)

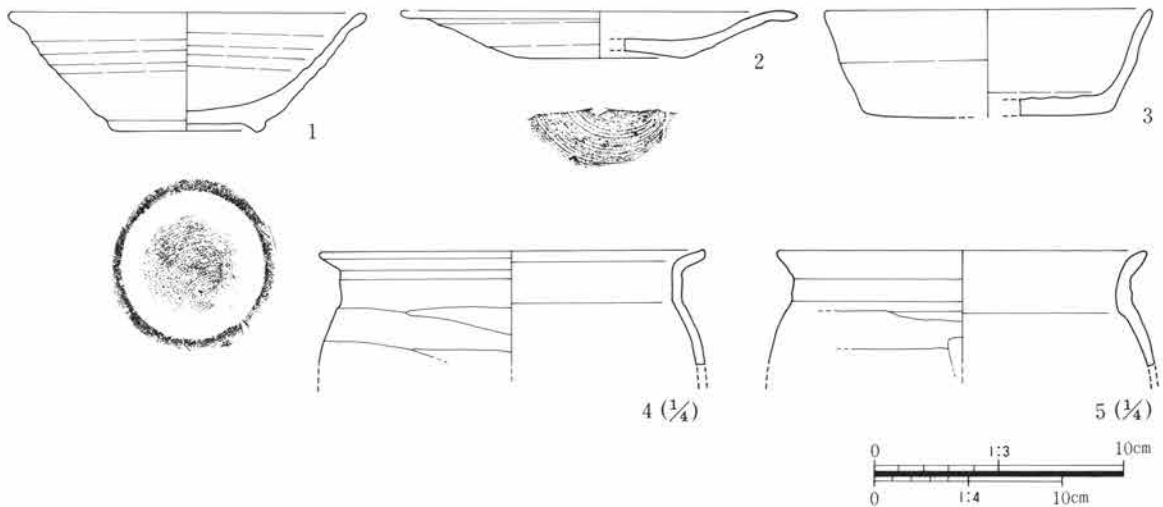
IV区I-5、J-5グリッドに位置する。平面は長方形を呈すると思われ、規模は推定値で(4.15)×(2.39)mを測る。壁はやや外傾し、確認壁高は32~18cmを測る。床面は重複する132号住居跡の覆土をそのまま利用している。本住居跡に伴うカマド、貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同壺、砥石等が出土している。時期は奈良時代~平安時代のもので、平安時代を主とするがほとんどが覆土中からの出土であるため本住居跡の時期を限定できるような遺物は少ない。

重複遺構は132号住居跡で、新旧関係は132号住→131号住である。



第151図 131・132号住居跡



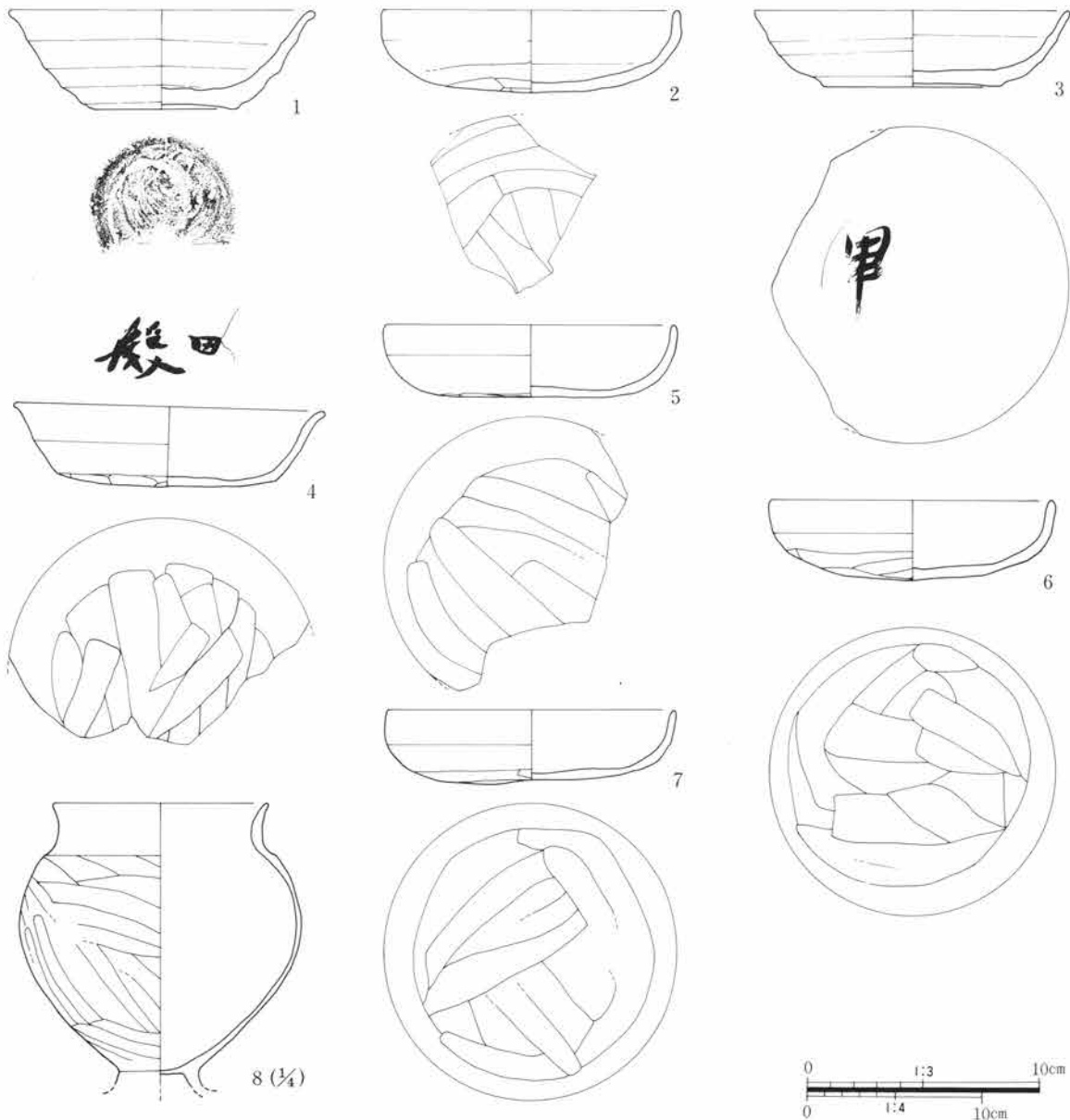
第152図 131号住居跡出土遺物

132号住居跡（第151図、PL.7）

IV区I-5、J-5グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.77×4.40m、面積は15.2㎡を測る。主軸方向はN-88°-Eを指す。壁はほぼ垂直で、確認壁高は38~21cmを測る。床面は地山のローム土を利用する。又北東コーナー部と北壁の部分は掘り形に埋土し、貼床としている。カマドは東壁の中央より南寄りに構築される。左そで部は131号住に切られている。規模は151cm、幅65cmを測る。軸方向はN-88°-Eを指す。右そで部は壁内に55cm張り出す。貯蔵穴は南東コーナー部の東壁から約50cm離れて検出された。規模は45×41cm深さ10cmを測る。ピット、周溝等は検出されなかった。

遺物はカマド及び貯蔵穴周辺に集中して出土する。器種は杯、甕、須恵器杯、同壺、高台付碗があり、時期は奈良時代~平安時代にわたるが、主体は平安時代のものである。特にカマド内、貯蔵穴内出土のものは平安時代に限られるようである。

重複遺構との新旧関係は132号住→130号住・131号住である。



第153図 132号住居跡出土遺物

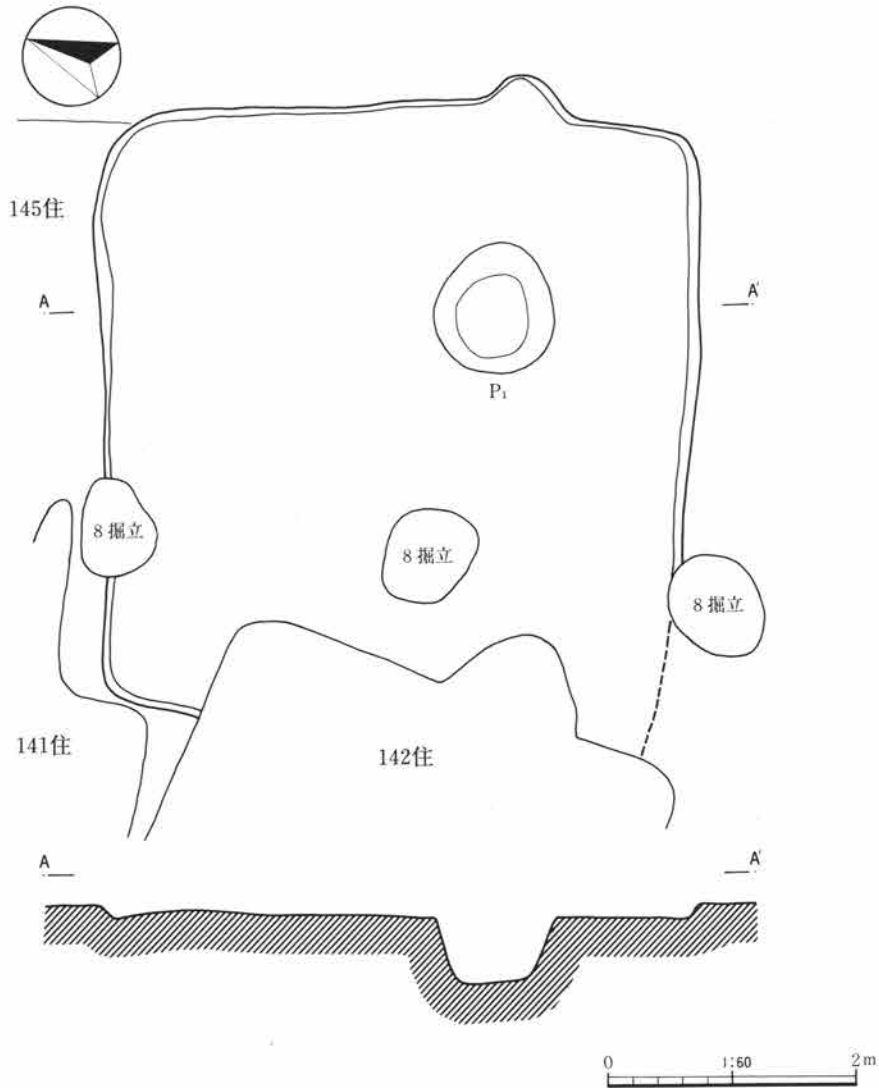
133号住居跡（早川河川改修地域調査分）

134号住居跡（欠番）

135号・136号・137号・138号・139号住居跡（早川河川改修地域調査分）

140号住居跡（第154図、PL. 7）

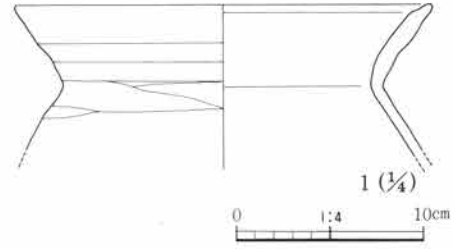
III区H-16、I-16グリッドに位置する。平面は正方形を呈し、規模は4.82×4.86mを測る。主軸方向はN-71°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高14～6cmを測る。床面は、地山のローム土を利用し比較的平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは東半部床面で1基検出され、規模は径1m深さ0.5mを測る。規模が比較的大きく、位置的にも柱穴とは考え難く、その性格は不明である。又東壁の南寄りの部分に奥行20cm程の掘り込みが見られるが、これがカマドの痕跡かあるいは別の施設かは定かでない。



第154図 140号住居跡

遺物は主に覆土から出土しており、甕を主体に土器片100点前後を数える。しかしそのうちの大部分は重複する145号住居跡出土遺物との判別が困難で、本住居跡に伴うと確認できるものは少ない。時期は古墳時代前期～平安時代にわたっている。

重複遺構は142号住居跡、145号住居跡、8号掘立柱建築遺構で、新旧関係は140号住→142号住・145号住・8号掘立と考えられる。



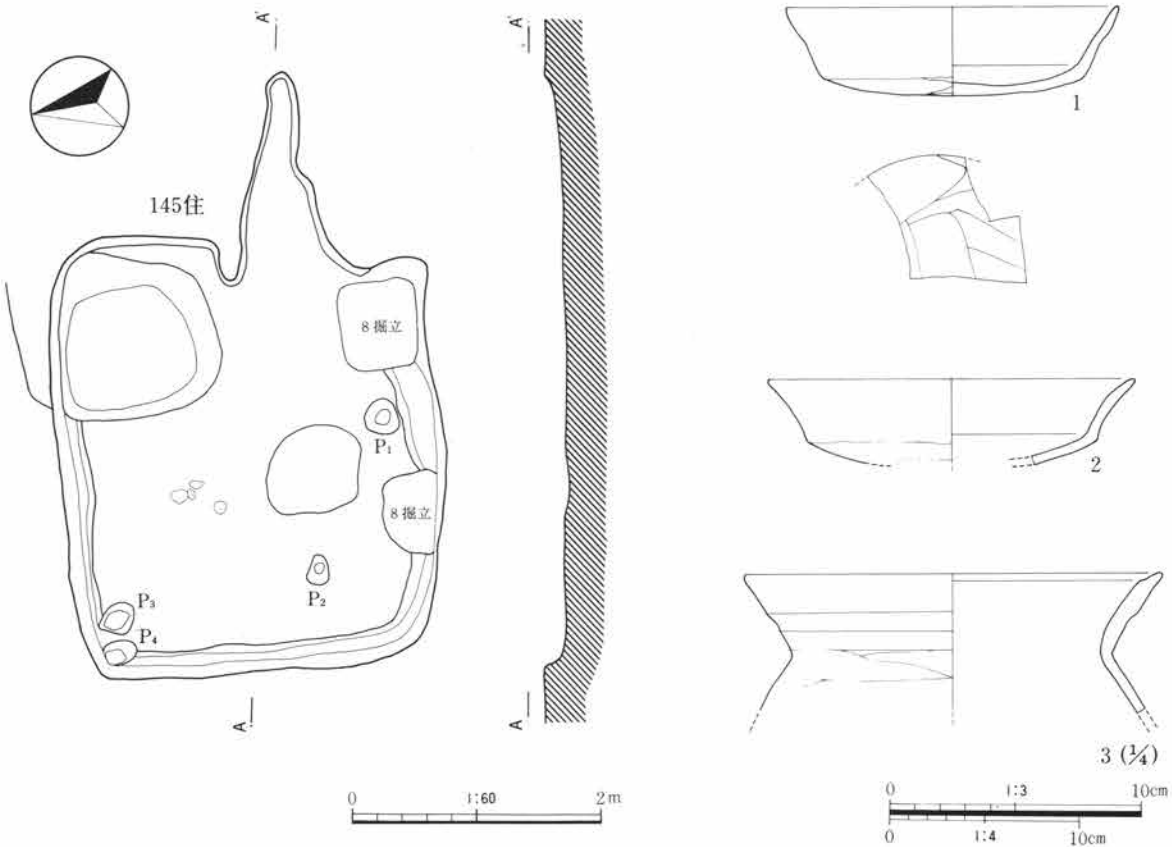
第155図 140号住居跡出土遺物

141号住居跡 (第156図、PL.7)

Ⅲ区H-17・18グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は5.90×3.87m、面積10.6㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は24～9cmを測る。床面は地山のローム土を利用し中央がやや高い。カマドは東壁中央に構築される。規模は165cm、幅71cmを測る。軸方向はS-87°-Eを指す。そで部は38cm壁内に張り出す。ピットは4基検出された。規模はP₁径28cm深さ20.5cm、P₂径25×15cm深さ31cm、P₃径32×25cm深さ16cm、P₄径25×18cm深さ12.5cmを測る。又北東コーナー部に1.32×1.33m深さ28cmを測る方形の落み込みがあるが、これが本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

遺物はカマド周辺を中心に杯、甕等の破片が出土している。時期は奈良時代を主体とする。

重複遺構は145号住居跡、8号掘立柱建築遺構で、確認された新旧関係は145号住→141号住である。

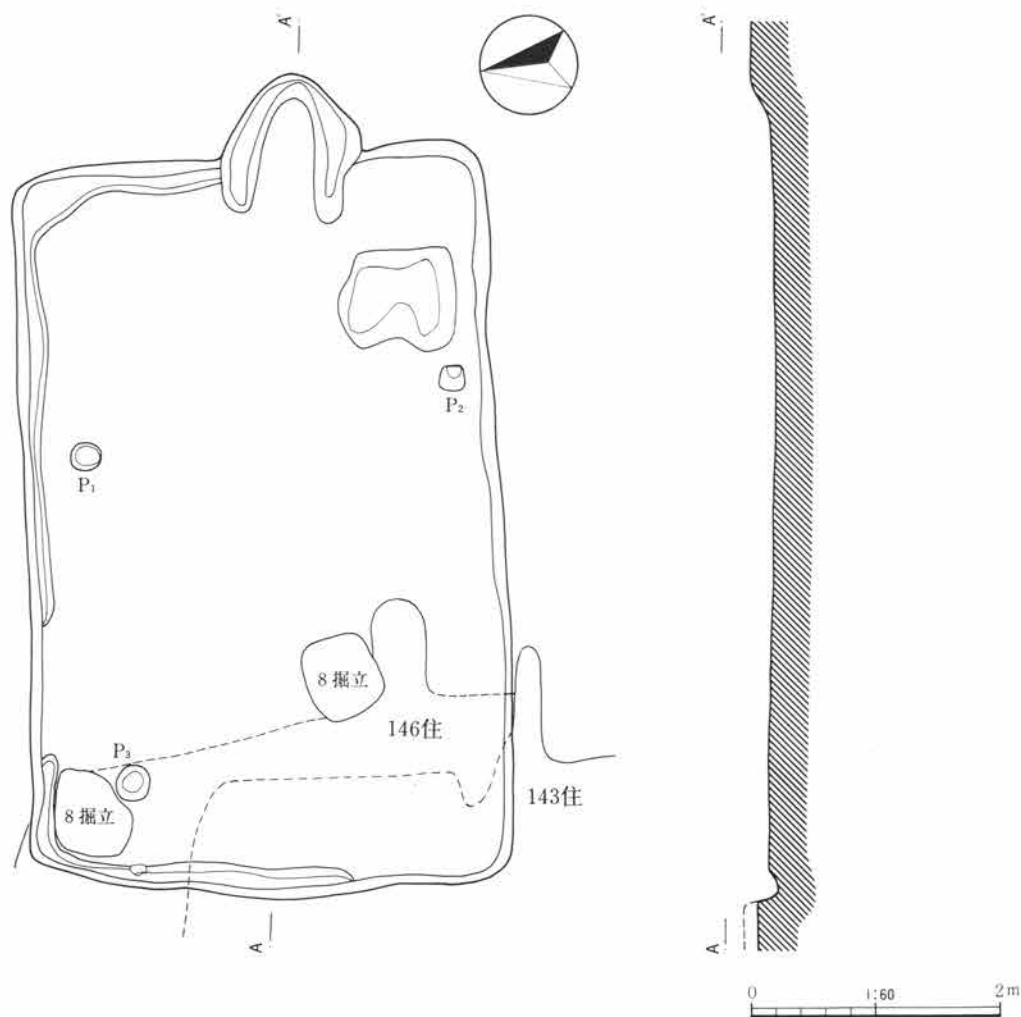


第156図 141号住居跡及び出土遺物

142号住居跡 (第157図、PL.7)

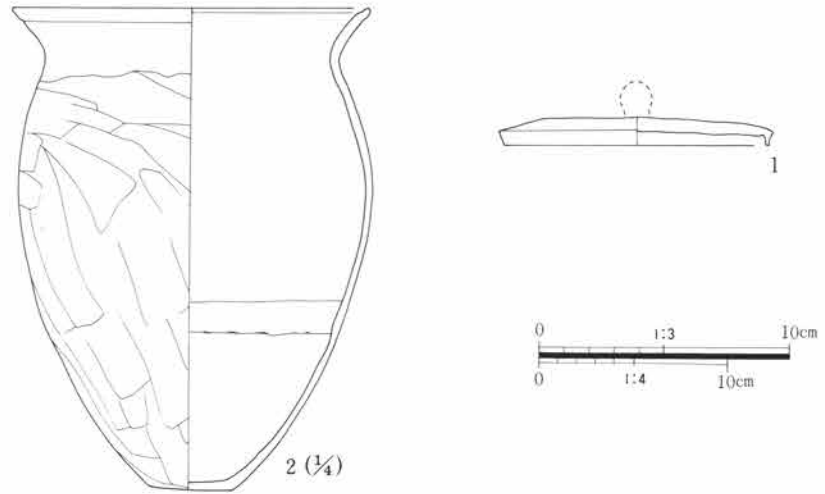
III区G-16・17、H-16・17グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は5.90×3.87m、面積は22.1㎡を測る。主軸方向はS-84°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高31~6cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部がやや高いが比較的平坦である。カマドは東壁の中央より若干南寄りに構築される。煙道部は後世の削平のため不明である。規模は長さ1.10m、幅1.20mを測る。軸方向はS-73°-Eを指す。そで部は55cm程壁内に張り出す。貯蔵穴は南壁際東端で検出された。平面は「瓢」形に近い方形で、規模は95×75cm深さ61cmを測る。ピットは3基検出された。P₁とP₂は南北壁際に相對しており、P₃は北西コーナー部にある。規模はP₁径24cm深さ46cm、P₂径20cm深さ28cm、P₃径30cm深さ9cmを測る。これらは位置的に柱穴の可能性はある。周溝は北半の壁際に沿って検出された。北壁の西半部で1m程断絶する。規模は幅40~14cm深さ7~4cmを測る。住居覆土は上層に浅間B軽石を含む褐色土、下層にローム粒を含む黑色砂質土が堆積する。

遺物は主に覆土下層から出土しており、杯、甕、高杯、高台付椀、須恵器蓋、埴輪等430点程がある。主体は平安時代の甕と杯である。



第157図 142号住居跡

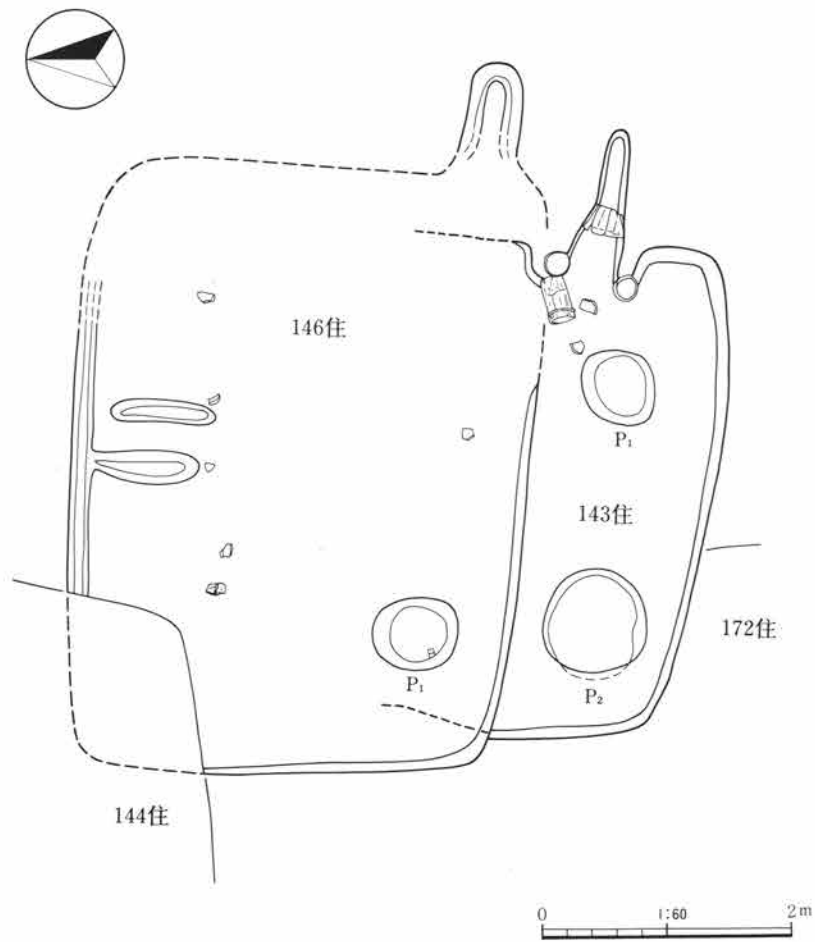
重複遺構は140号住居跡、143号住居跡、146号住居跡、8号掘立柱建築遺構で、確認できた新旧関係は140号住→142号住→143号住・146号住である。



第158図 142号住居跡出土遺物

143号住居跡（第159図、PL. 7）

Ⅲ区F-17、G-17グリッドに位置する。平面は方形と推定されるが北半は他遺構と重複するため不明瞭で



第159図 143・146号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

ある。規模は東壁—西壁間距離3.82mを測る。主軸方向はS—88°—Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は20～9cmを測る。床面は地山のローム土を利用し比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築されており、残存状態は良好である。規模は長さ130cm、幅44cmを測る。軸方向はS—78°—Eを指す。カマドの両そで部には円筒埴輪を直立させ補強材としている。なお焚口部にも埴輪が横転して出土しており、おそらく焚口天井部分に用いられたものと推定される。燃焼部奥壁には甕胴部片を埋置し補強材としている。又燃焼部中央には支脚と思われる円礫が検出されている。ピットは南壁に沿って2基が検出された。規模はP₁径58cm深さ32cm、P₂径83cm深さ57.5cmを測る。いずれも位置的には柱穴と考えられるものであるが、規模が比較的大きく貯蔵穴の可能性もある。住居覆土は浅間B軽石とロームブロックを含む黒褐色砂質土が堆積する。

遺物はカマド周辺から集中して出土している。甕・杯等の小破片30数点程及び埴輪片、勾玉1点で時期は奈良時代～平安時代のものである。

重複遺構との新旧関係は、土層観察より142号住・146号住・172号住→143号住である。

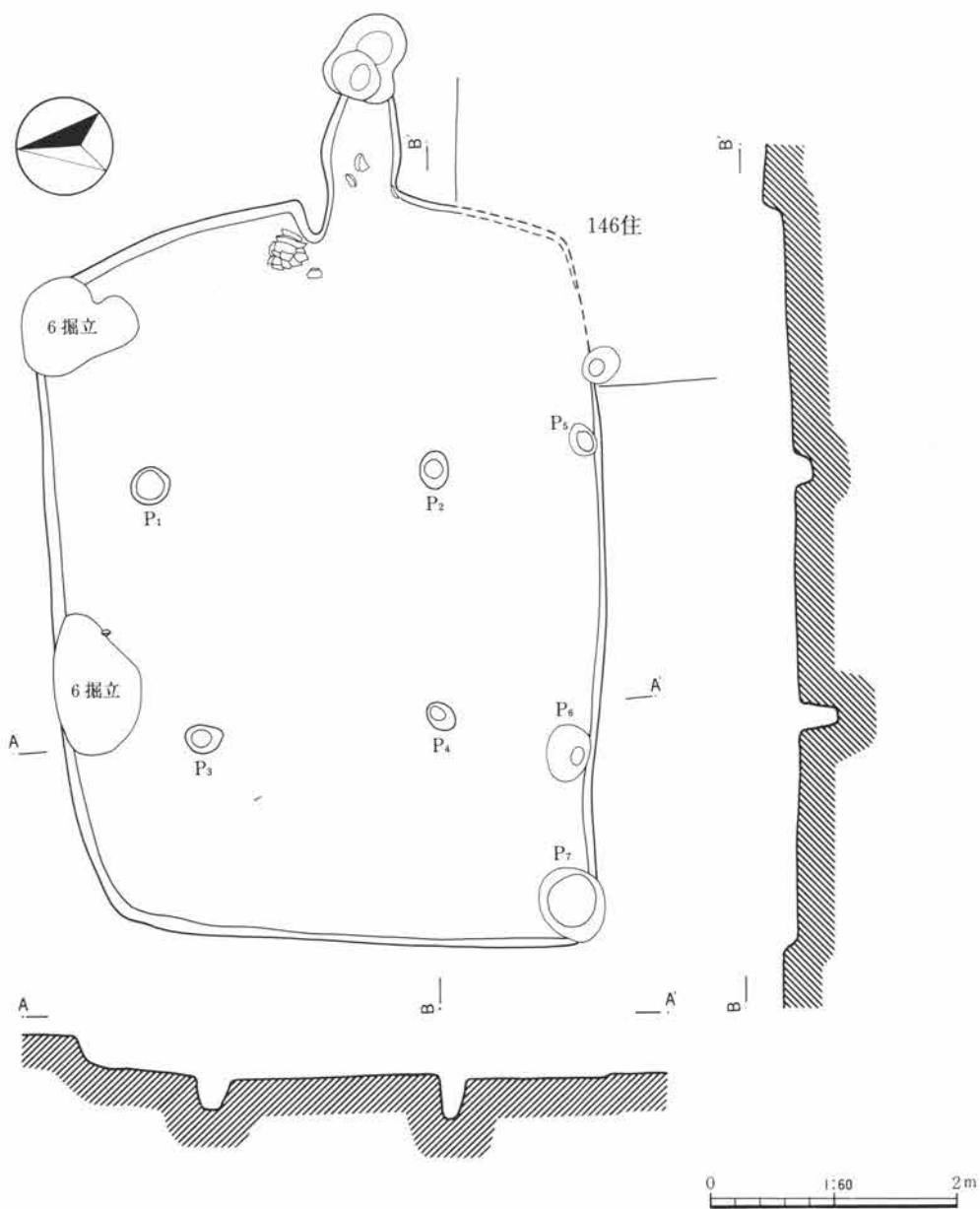
144号住居跡（第160図、PL.7）

Ⅲ区F—18・19、G—18・19グリッドに位置する。平面はやや歪んだ縦長長方形を呈し、北壁はやや胴張りの形状となる。規模は5.96×4.55m、面積は推定値で25.9㎡を測る。主軸方向はN—90°—Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高24～6cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、中央部が周辺よりやや高く硬質である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築されており、残存状態は上半を削平されており不良である。煙道部は重複遺構のピットに切られており不明である。燃焼部は壁外に掘り込まれ、平面形はやや胴張りを呈し幅は65cmを測る。そで部は左そでのみ残存し、灰色粘土を用いて壁内に35cm程張り出させている。貯蔵穴は検出されなかった。ピットは7基が検出された。P₁～P₄は床面のほぼ中央部で四角形を構成する対角線上に位置し、P₅・P₆は南壁に沿ってそれぞれ南東コーナー、南西コーナーからほぼ等距離の場所に位置する。P₇は南西コーナー部にある。規模はP₁径30cm深さ不明、P₂径30×23cm深さ15cm、P₃径30×23cm深さ26cm、P₄径20cm深さ32.5cm、P₅径25×20cm深さ49.5cm、P₆径40×35cm深さ38.5cm、P₇径60.6cm深さ17cmを測る。なおP₁～P₄は規模や位置等から主柱穴と思われるが、これらの柱間距離はP₁—P₂2.35m、P₃—P₄1.95m、P₁—P₃2.07m、P₂—P₄1.95mを測る。P₅・P₆の性格については入口施設と関連するもの、壁体の支柱、束柱等が考えられるが、具体的な痕跡は認められなかった。P₇は本住居跡の壁を一部切っており別遺構の可能性もある。周溝は検出されなかった。なお北西コーナー部に平面不定形状で床面よりの深さ約20cm程の掘り込みが検出されたが、これは底面の形状や覆土の観察から本住居跡の掘り形と推定される。従ってこの部分については人工的に埋土し貼り床としたものであろう。住居覆土は上層に浅間B軽石を含む黒褐色砂質土、下層にローム粒と粘土粒を多く含む黒褐色砂質土が堆積している。

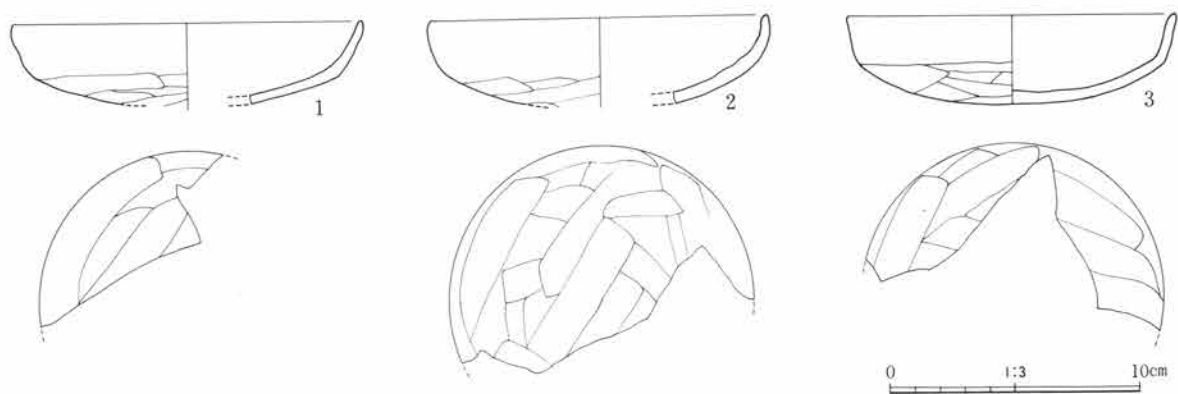
遺物はカマド内及びその周辺部と覆土下層から主に出土している。器種は杯、甕を主体としており、破片数は約580点前後を数える。時期は奈良時代～平安時代にわたるが、数量的には奈良時代に属するものが圧倒的に多い。

重複遺構は146号住居跡、172号住居跡、6号掘立柱建築遺構で、土層観察により新旧関係の判明したのは144号住→6号掘立であった。なおカマド煙道部とピットP₅東側の壁際に2基のピットが重複しているが、これらは本住居跡に伴う可能性は少なく、後世のものであると思われる。

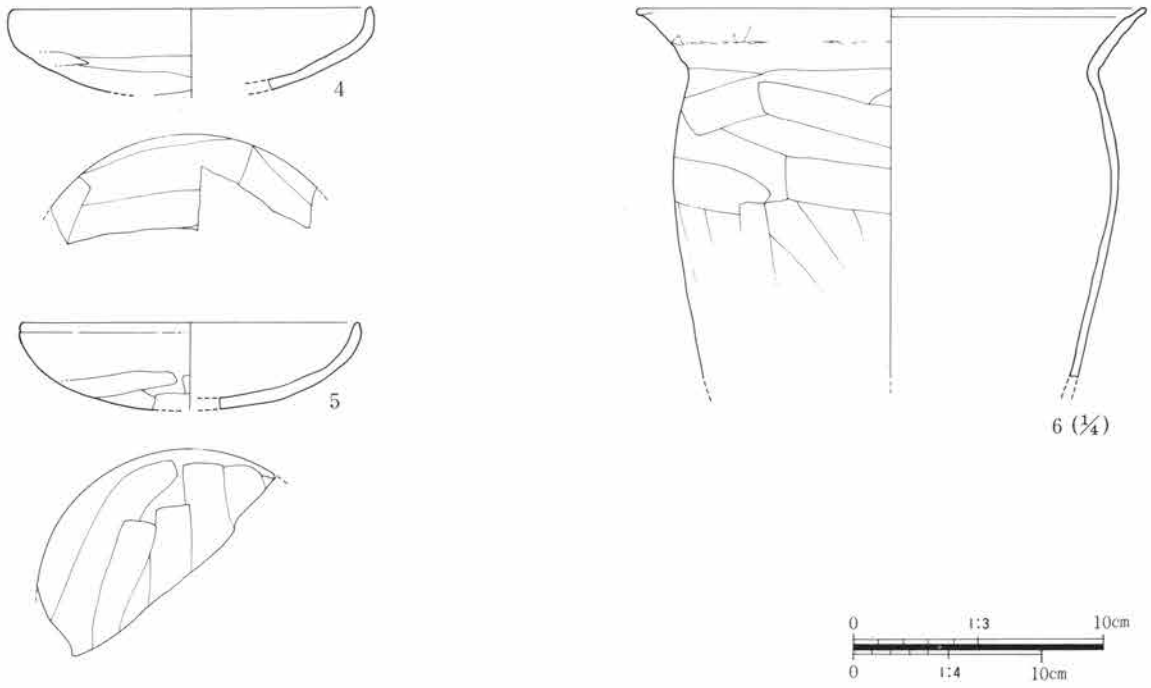
本住居跡の時期は、前述の出土遺物や住居形態の特徴等から奈良時代に限定して間違いのないものと思われる。



第160図 144号住居跡



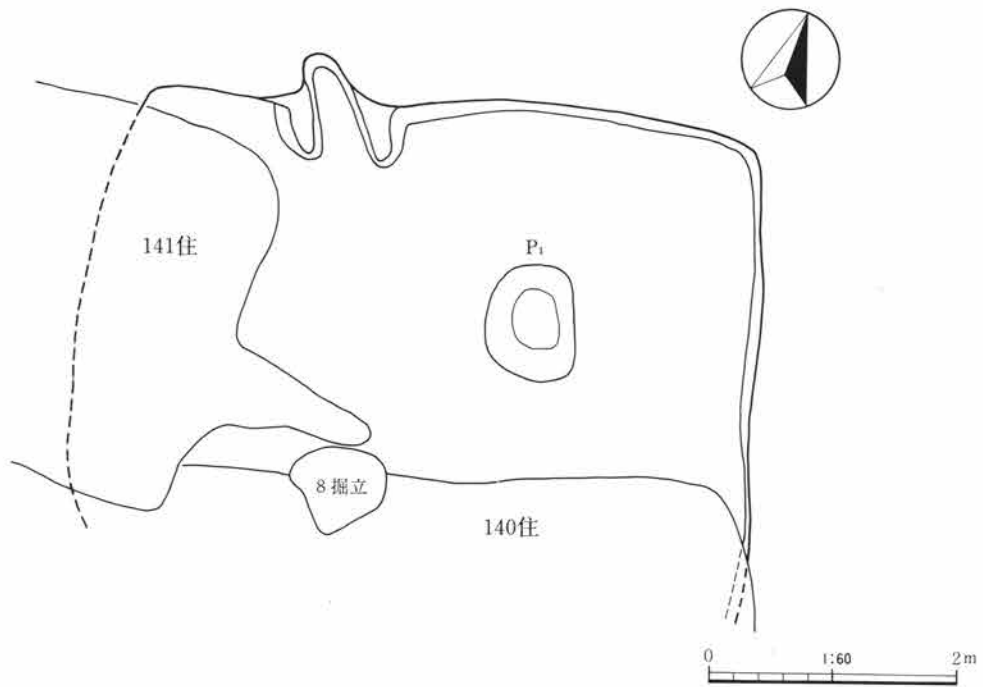
第161図 144号住居跡出土遺物(1)



第162図 144号住居跡出土遺物(2)

145号住居跡 (第163図)

III区I-16・17、J-16・17グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南半については重複遺構のため不明瞭である。主軸方向はN-20°-Wを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は23~10cmを測る。床面は、地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは北壁の西寄に構築される。規模は長さ95cm、幅110cmを測る。軸方向はN-39°-Wを指す。そで部は55cm程壁内に張り出す。ピットは床面のほぼ中央部に1基が

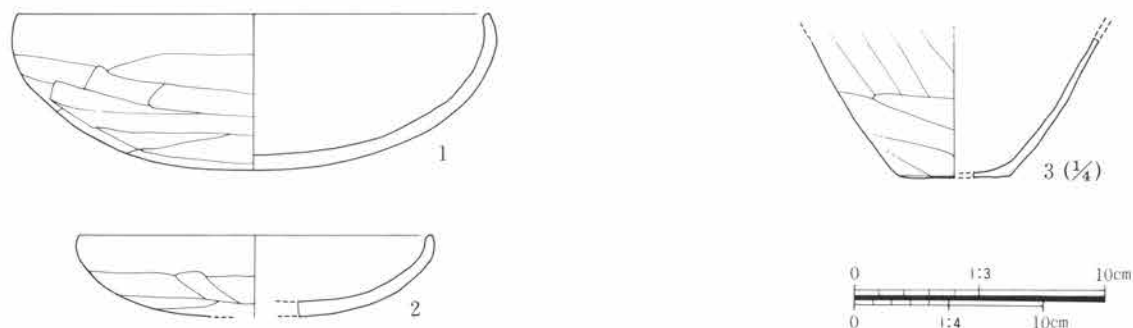


第163図 145号住居跡

検出された。平面は不整楕円形を呈し、規模は径93×72cm深さ68.5cmを測る。

遺物は杯、甕、高杯等の破片が100点前後、覆土から出土している。時期は古墳時代後期～奈良時代のものを主体としている。

重複遺構は140号住居跡、141号住居跡で、新旧関係は140号住→145号住→141号住である。



第164図 145号住居跡出土遺物

146号住居跡（第159図、PL. 7）

III区G-17・18グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は(4.90)×3.72mを測る。主軸方向はS-87°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は25～7cmを測る。床面は、地山のローム土を利用し、比較的平坦である。カマドは東壁の南端に構築される。煙道部のみ残存し、燃焼部は不明瞭である。軸方向はS-82°-Eを指す。ピットは南西コーナー部で検出され、規模は69×58cm深さ29.5cmを測る。周溝は北壁に沿って検出された。規模は幅13cm深さ3cmを測る。又北壁中央付近から周溝に直行して内側方向に2条の溝が延びる。幅25～18cmで深さはほとんど周溝と同様である。これらは20cm程の間隔をあけて90cmの長さで並走する。性格は不明である。住居覆土は上層に浅間B軽石と炭化物粒を含む褐色土、下層に粘土とローム土粒を含む褐色砂質土が堆積する。

遺物は床面及び覆土中から土器片が出土している。多くは重複する143号住居跡出土遺物との分離が困難で、本住居跡に確実に伴うと思われるものはわずかに10数点である。時期は奈良時代～平安時代のものであるが、カマド周辺及び床面上から出土したものは奈良時代に属すると考えられる。

重複遺構との新旧関係は、142号住→146号住→143号住である。

147号住居跡・148号住居跡（早川河川改修地域調査分）

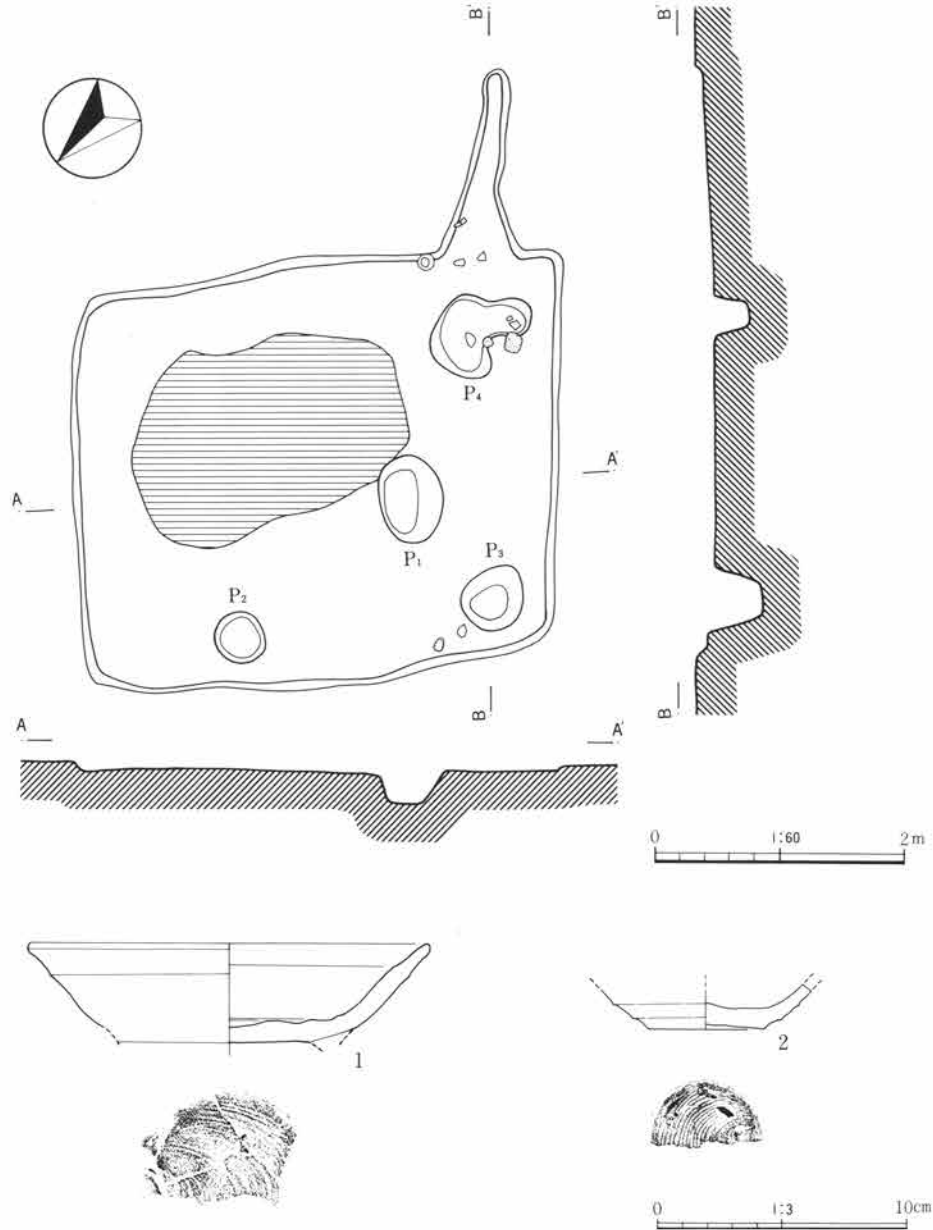
149号住居跡（第165図、PL. 7）

III区F-23・24、G-23・24グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.40×3.85m、面積は13.0㎡を測る。主軸方向はS-49°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高は14～2cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土で、比較的平坦である。カマドは南東壁の南西端に構築されており、規模は長さ153cm、幅65cmを測る。軸方向はS-38°-Eを指す。そで部はおそらく壁をそのまま利用したと思われる。煙道部は比較的長く、水平に近い緩い傾斜で立ち上がる。ピットは4基が検出された。規模はP₁径67×50cm深さ36cm、P₂径42cm深さ41.5cm、P₃径48cm深さ43cm、P₄径83×65cm深さ34cmを測る。P₁、P₃、P₄は住居の南西半部に偏り、P₂のみ北半に位置する。これらの性格については不明である。住居覆土はロームブロックとローム

粒を多く含む黒褐色砂質土がブロック状に堆積している。

遺物は杯、甕、須恵器甕、高台付碗、灰釉碗及び土錘等がカマド周辺を中心に主に覆土中から出土している。時期は平安時代にほぼ限定される。

重複遺構としては、東半部床面に後世の攪乱と思われる土層が検出されているのみである。



第165図 149号住居跡及び出土遺物

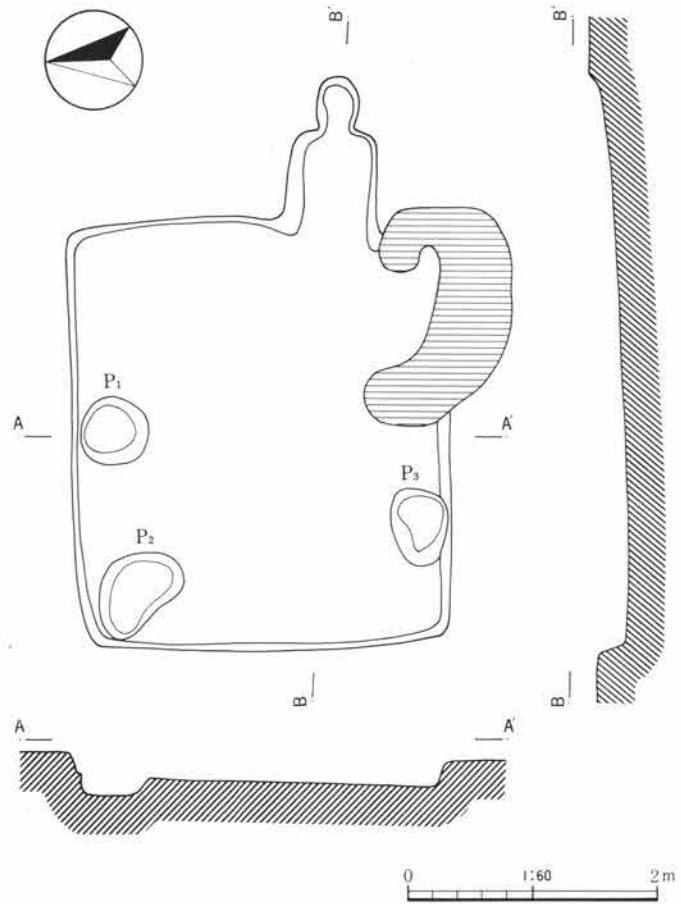
150号住居跡 (第166図、PL. 7)

III区G-24・25、H-24・25グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈すると思われる。規模は3.44×3.04 m、面積は推定値(10.8)m²を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は残存状態不良であるが、ほぼ直立し確認壁高35~16cmを測る。床面は、地山のローム土を利用しほぼ平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築されており、残存状態は比較的良好である。そで部は掘り形のまま地山のロームを掘り残したものである。

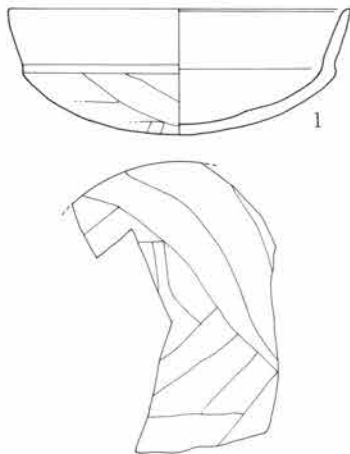
燃焼部の平面形は長方形を呈する。又煙道部は燃焼部奥壁の中位より掘り込まれ外方に延びる。規模は長さ1.38m、幅0.83mを測り、軸方向はS-88°-Eを指す。ピットは3基が検出された。P₁は北壁際中央、P₂は北西隅、P₃は南壁際西寄りの位置である。規模はP₁径59×55cm深さ16cm、P₂径79×52cm深さ14.5cm、P₃径61×45cm深さ12.5cmを測る。これらの性格は不明である。住居覆土はロームブロックを多量を含む褐色砂質土が主で、堆積状態はブロック状を呈し、人工的埋土を想起させる。

遺物は杯、甕、羽釜、器種不明の須恵器片及び紡錘車等30数点出土しており、時期は古墳時代後期～平安時代にわたる。残存状態良好なものは古墳時代後期のものであるが、本住居跡の時期決定の根拠とするには不十分である。

重複遺構はなく単独の検出であるが、南壁東半部は後世の攪乱によって破壊されている。



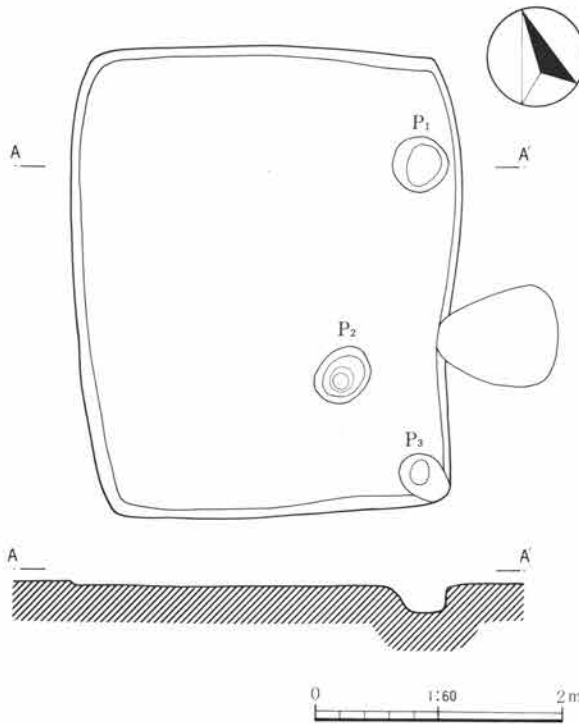
第166図 150号住居跡



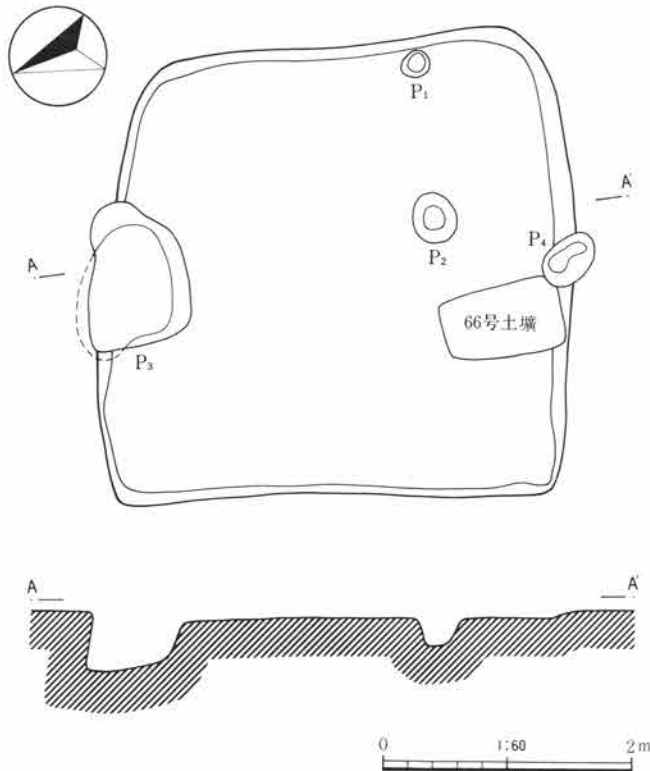
第167図 150号住居跡出土遺物

151号住居跡 (第168図、PL. 7)

III区H-23グリットに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は3.73×3.13m、面積11.0m²を測る。主軸方向はN-10°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高5.5~2.5cmを測る。床面は地山のローム土を利用



第168図 151号住居跡



第169図 152号住居跡

し、比較的平坦ではあるが、部分的に軟質で窪みを有する。カマドは検出されなかったが、東壁の中央よりやや南寄りに楕円形の浅いピットが検出された。規模は $1.0 \times 0.8\text{m}$ を測る。焼土等は確認ができなかったが、位置や形態等からカマドの痕跡である可能性が考えられる。その他にピットが3基検出された。規模は P_1 径 45cm 深さ 19.5cm 、 P_2 径 $49 \times 39\text{cm}$ 深さ 21.5cm 、 P_3 径 $45 \times 34\text{cm}$ 深さ 26.5cm を測る。これらの性格は不明である。

遺物は杯、甕、台付甕、鉢、須恵器甕等の小片が60点程覆土より出土している。時期は古墳時代後期～平安時代にわたり、本住居跡の時期を限定するには不十分である。

重複遺構はなく単独で検出された。

152号住居跡（第169図、PL. 7）

III区H-23・24、I-23・24グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈する。規模は $3.78 \times 3.70\text{m}$ 、面積は 13.1m^2 を測る。主軸方向はN-72°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高 $13.5 \sim 1\text{cm}$ を測る。床面は、地山のローム土を利用しており比較的平坦である。カマドは検出されなかった。ピットは4基が検出された。規模は P_1 径 23cm 深さ 8cm 、 P_2 径 $41 \times 35\text{cm}$ 深さ 21.5cm 、 P_3 径 $115 \times 91\text{cm}$ 深さ 40cm 、 P_4 径 $47 \times 31\text{cm}$ 深さ 16cm を測る。このうち P_3 は北壁中央に掘り込まれ、規模も大きいことから貯蔵穴の可能性が考えられる。

遺物は杯、甕、須恵器甕、高台付椀の破片160点で覆土より出土している。時期は奈良～平安時代のものであり、平安時代の高台付椀を除く杯、甕の大部分は奈良時代のもと考えられる。

重複遺構は66号土壇で、新旧関係は土層の切り合いより152号住→66号壇である。

153号住居跡(第170図、PL. 7)

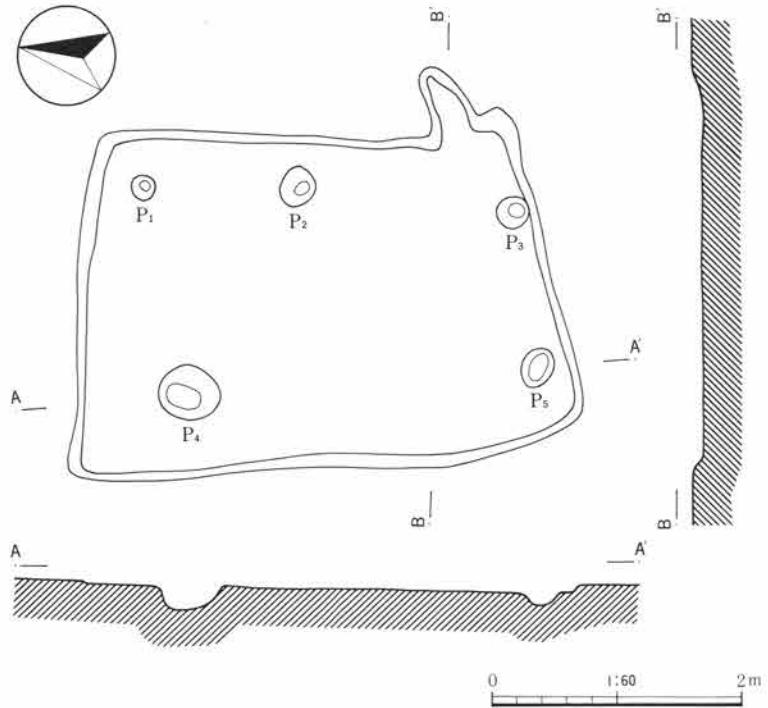
III区F-24・25、G-24・25グリッドに位置する。平面はやや西辺の長い台形状を呈し、規模は2.78×4.06mを測る。面積は10.5m²を測る。主軸方向はN-83°-Eを指す。壁の残存状態は不良で、確認壁高8~2cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており、小規模な凹凸が多い。カマドは東壁南端部に構築され、燃焼部の掘り込みだけ検出された。長さ64cm、幅43cm程の規模を測る。ピットは5基が検出された。規模はP₁径20cm深さ5cm、P₂径30cm深さ14cm、P₃径27cm深さ12cm、P₄径50×43cm深さ18.5cm、P₅径30cm深さ9cmを測る。P₁、P₃~P₅は柱穴となる可能性も考えられる。

遺物は燧片6点が覆土から出土したのみである。

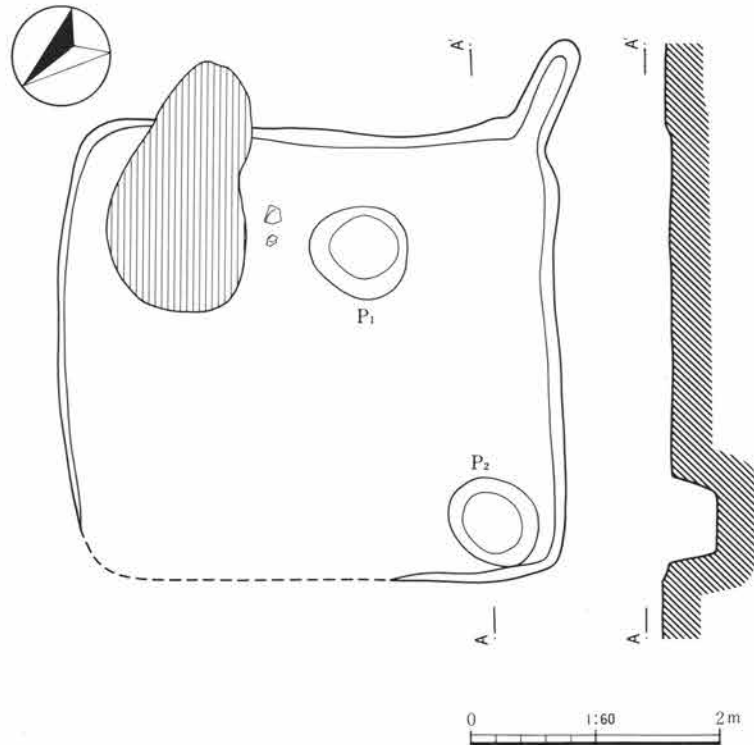
重複遺構はない。

154号住居跡(第171図、PL. 7)

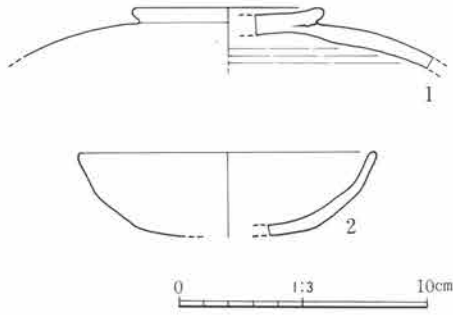
III区F-25、G-25、IV区F-1、G-1グリッドに位置する。平面はほぼ長方形を呈すると思われる。北側コーナー部は71号土壙との重複で不明瞭。規模は3.67×4.40m、面積は推定値で(14.2)m²を測る。主軸方向はS-50°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高14~3cmを測る。床面は地山のローム土を利用していると思われるが荒れていて不明瞭。カマドは南コーナー部に構築される。燃焼部は壁内と思われるが、その形状や規



第170図 153号住居跡



第171図 154号住居跡



第172図 154号住居跡出土遺物

模等については不明である。煙道は住居平面形の対角線状に延びる。長さは95cmを測る。軸方向はS-27°-Eを指す。ピットは2基が検出された。規模はP₁径80×73cm深さ40cm、P₂径78×64cm深さ37cmを測る。P₂は位置的に貯蔵穴の可能性も考えられる。

遺物は杯、甕、羽釜、須恵器杯、同甕、同蓋の破片約120点が覆土より出土しており、数量的には奈良時代のものが多い。

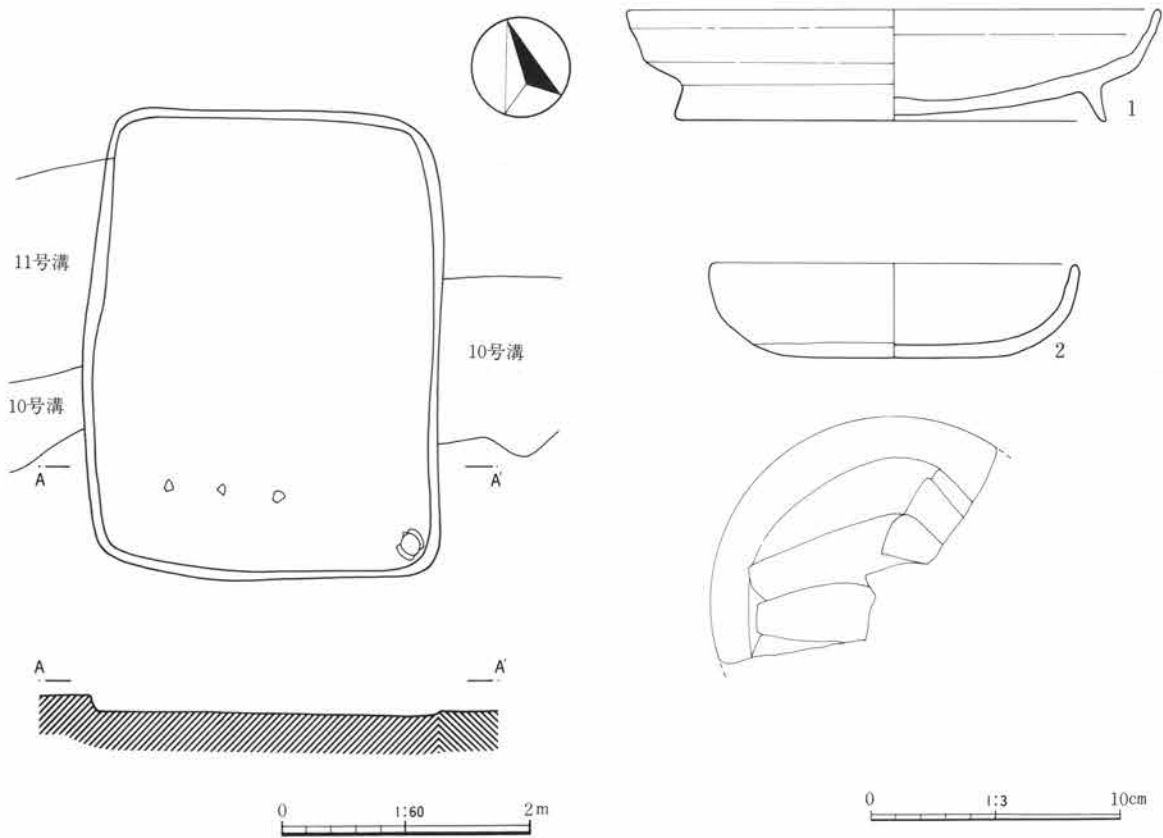
重複遺構は71号土壌で、新旧関係は不明である。

155号住居跡（第173図、PL.7）

IV区F-2・3グリッドに位置する。平面は長方形を呈する。規模は3.70×2.84mで、面積は9.9㎡を測る。主軸方向はN-20°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は25～5cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土である。比較的平坦。カマドは検出されなかった。その他ピットや周溝等は確認されなかった。なお床面の北半部中央に長方形の掘り込みが見られたが、後世の攪乱と思われる。

遺物は杯、甕、須恵器甕、同高台付盤、砥石等の破片が30点程覆土から出土している。このうち図示した高台付盤（第173図-1）は南東コーナー部の床面上より出土しており、本住居跡に伴うものと考えてよい。時期は奈良時代のもを主体とする。

重複遺構は71号土壌と10号・11号溝で、いずれも新旧関係については不明である。



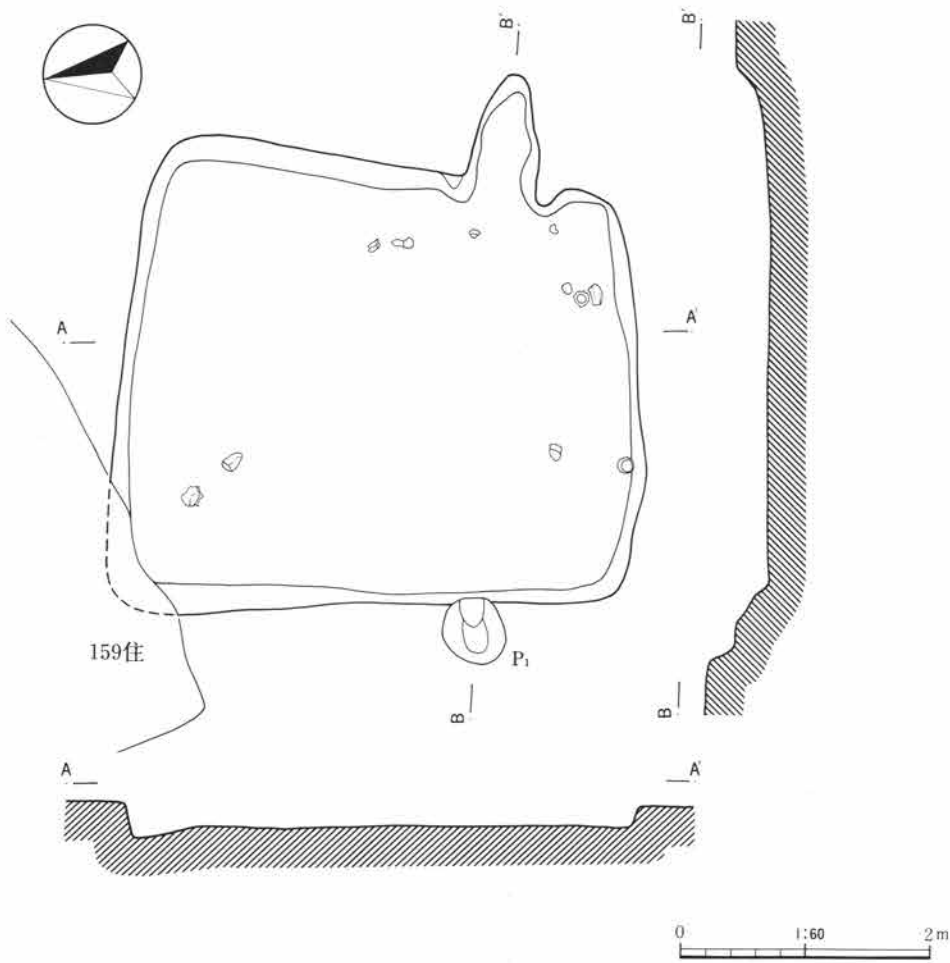
第173図 155号住居跡及び出土遺物

156号住居跡（第174図、PL.7）

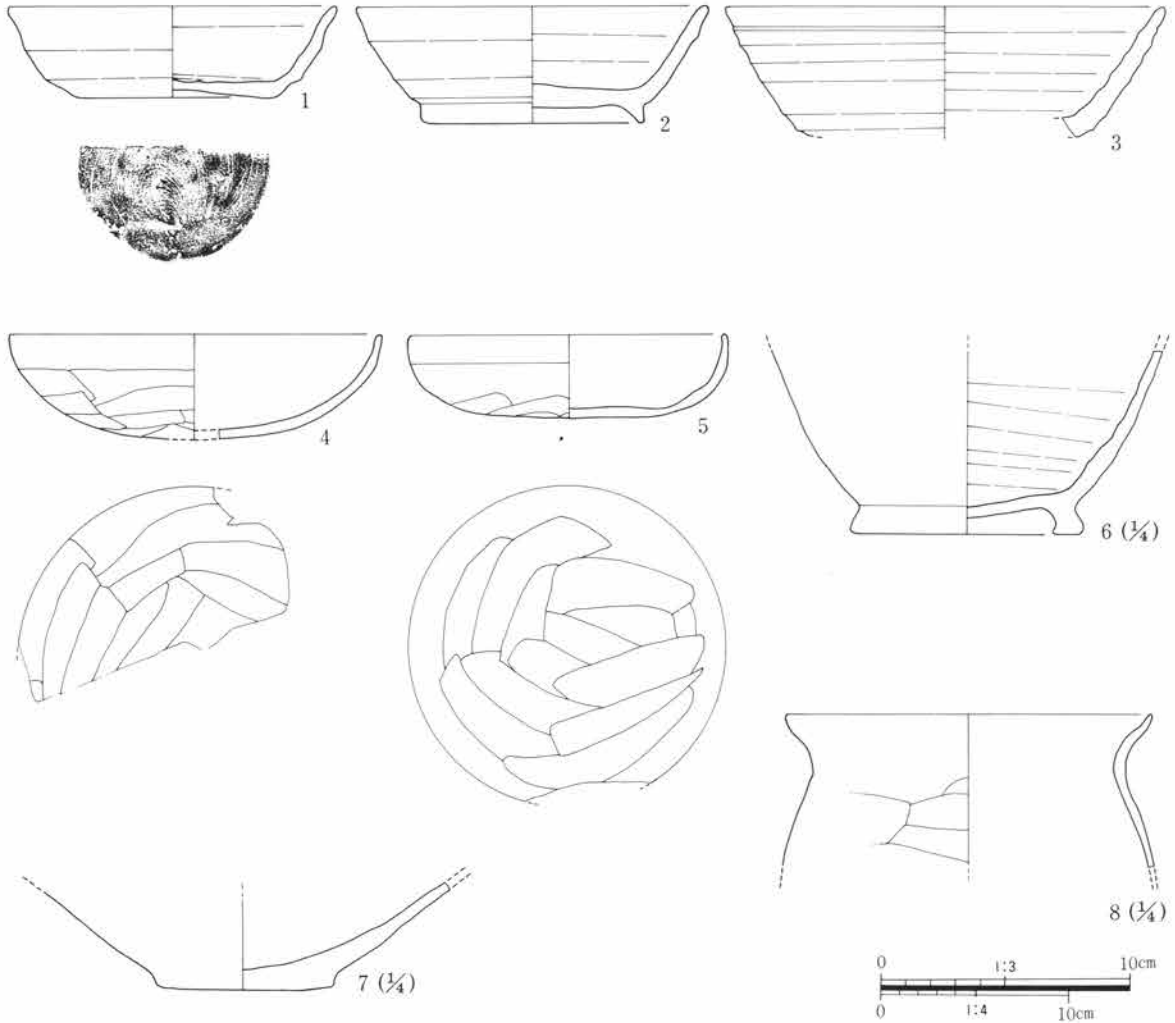
IV区F-3、G-3グリッドに位置する。平面形は歪んだ横長長方形で、規模は3.79×4.30m、又面積は14.6㎡を測る。主軸方向はS-74°-Eを指す。壁は残存状態良好で、ほぼ直立し確認壁高は54~16cmを測る。床面は地山のローム土を利用するが、一部住居跡以前の風倒木痕と思われる場所は黒色土となっている。カマドは東壁の南端部に構築され、残存状態は比較的良好である。規模は長さ113cm、幅58cmを測り、軸方向はS-74°-Eを指す。そで部は掘り形の段階で地山を若干掘り残して壁内に張り出させている。燃烧部は断面が「U」字状に掘り込まれ、底面は住居床面よりやや高い。煙道は比較急角度で立ち上がる。ピットは西壁に外接してカマドに相対する場所で1基検出された。ほぼ円形を呈し、規模は径50cm、深さ24cmを測る。本住居跡に伴う確証はないが、位置や形状から入口施設（特に階段等）と関連する可能性を考慮し、ここで扱った。住居覆土は土層に浅間B軽石を含む褐色砂質土、下層にロームブロックを多量に含む黒褐色砂質土が堆積しており、その状態はブロック状で、人為的な埋土の可能性はある。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同壺、同蓋、高台付杯が主に覆土より出土している。破片数は400点弱で、そのうち土師器杯と甕が8割強を占める。時期は奈良時代末~平安時代初頭期に集中すると思われる。

重複遺構は159号住居跡で、新旧関係は不明であった。



第174図 156号住居跡



第175図 156号住居跡出土遺物

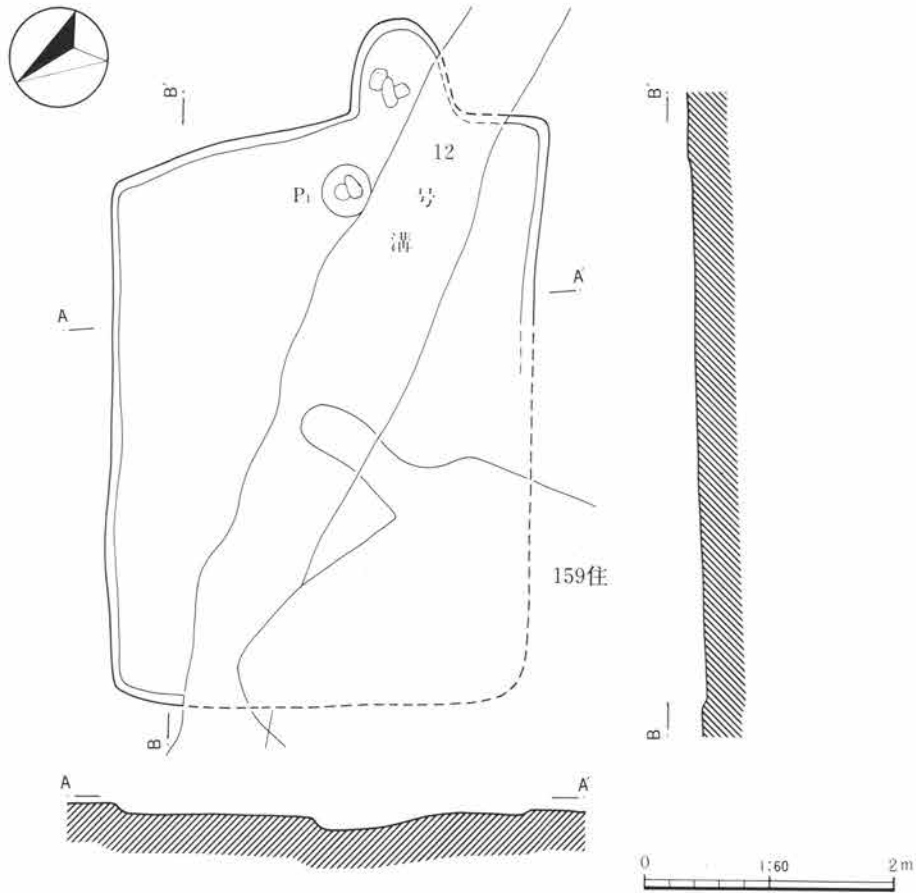
157号住居跡 (欠番)

158号住居跡 (第176図、PL. 7)

IV区H-3・4グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われるが、西半部は他遺構と重複するため形状、規模等は不明確である。規模は推定値で4.32×3.43mと思われる。主軸方向はS-71°-Eを指す。壁は残存部分で11~2cmの高さを測る。床面は地山のローム土を利用しており、凹凸が多い。カマドは南東壁の南西寄りに構築され、燃焼部が残存する。規模は長さ76cm、幅99cmを測る。なおこの部分より10cm大の円礫3点が出土したがその用途は不明である。ピットはカマド左そで部と推定される位置よりやや内側に入った位置に検出された。円形を呈し、規模は径40cm深さ27cmを測る。なおこのピットの真上より円礫2点が出土した。

遺物は杯、甕、壺、須恵器杯等の破片が50点程出土している。いずれも小片で器形の明確なものが少なく、従って時期も不明とせざるを得ない。

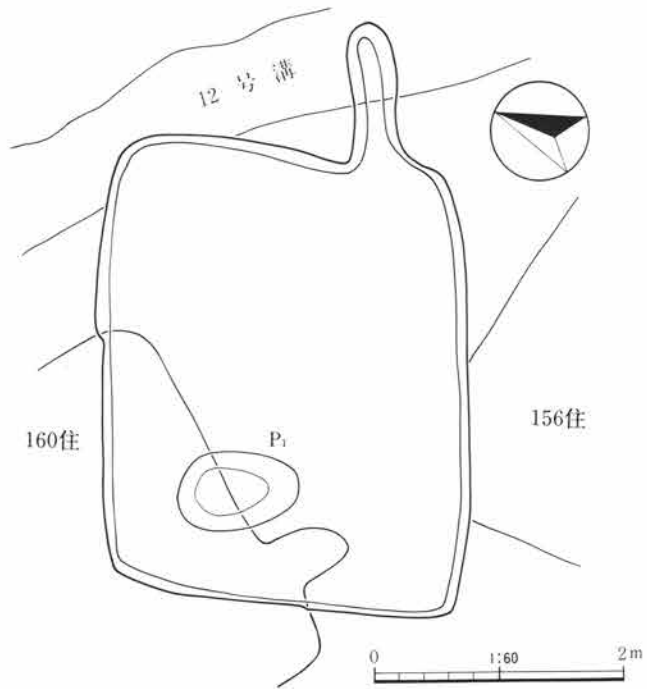
重複遺構は159号住居跡、12号溝で、新旧関係は158号住→159号住・12号溝と思われる。なおこれら他遺構との重複関係や、本住居跡の平面形態及びカマド形態等から、その時期は奈良時代の可能性が高い。



第176図 158号住居跡

159号住居跡（第177図、PL. 8）

IV区G-4、H-4グリッドに位置する。平面は歪んだ縦長方形を呈する。規模は $3.65 \times 2.98\text{m}$ 、面積 10.7m^2 を測る。主軸方向は $N-70^\circ-E$ を指す。壁は残存状態良好な部分でやや外傾し、確認壁高 $23 \sim 3\text{cm}$ を測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土で平坦。カマドは東壁の南隅に構築され、燃焼部と煙道部が残存する。燃焼部は煙道よりやや幅広いだけであり、実際は壁内に主体があったのかあるいは比較的小規模なものと思われる。規模は長さ 120cm 、幅 83cm を測り、軸方向は $N-65^\circ-E$ を指す。ピットは西側コーナー寄りに1基検出された。卵形を呈し径 $96 \times 63\text{cm}$ 、深さ 18.5cm を測る。規模や



第177図 159号住居跡

位置から貯蔵穴とも考えられるが、他と比較してやや浅いように思われる。住居覆土はロームブロックを含む褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、同甕の破片80点弱が覆土より出土している。このうち甕の胴部片が圧倒的に多い。時期は杯や甕の口縁の特徴等から奈良時代のもが多いようである。

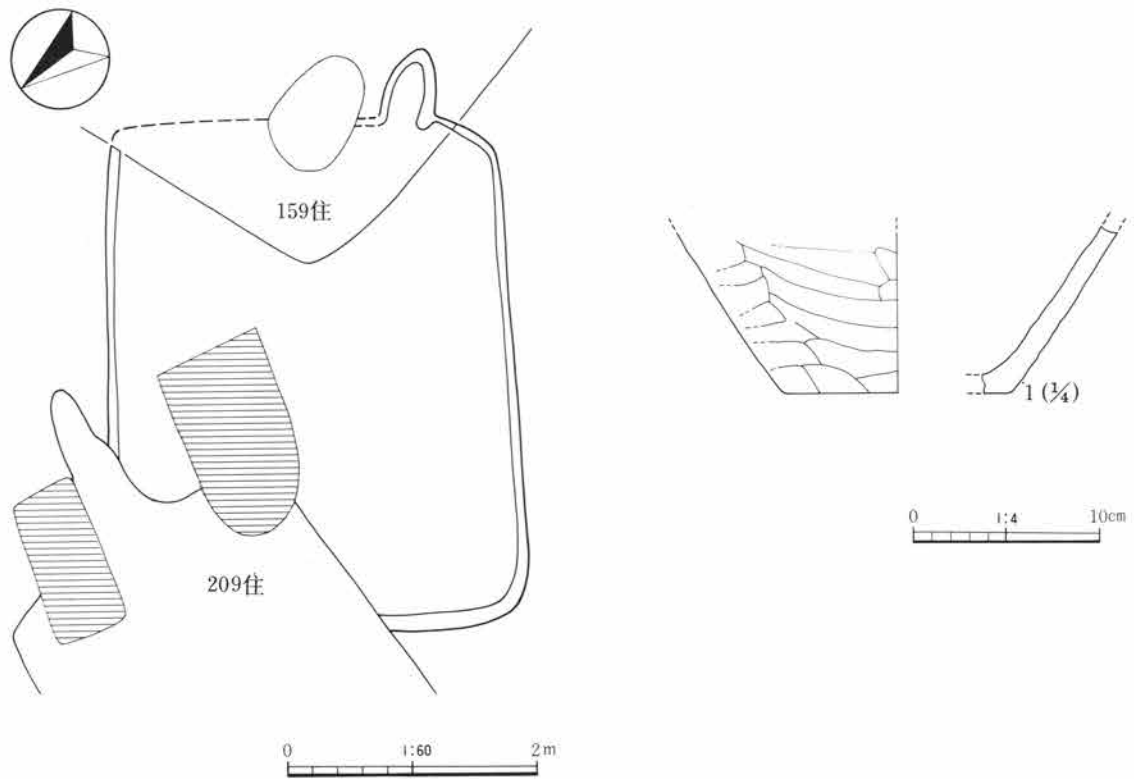
重複遺構との新旧関係は158号住→159号住→160号住である。

160号住居跡（第178図、PL. 8）

IV区G-4・5グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈する。規模は4.05×3.20mで、面積は推定値で(13.1)㎡を測る。主軸方向はS-62°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は14~3.5cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で比較的平坦である。カマドは南東壁の南西隅に構築され、燃烧部のみ残存する。平面は砲弾状を呈し、底面は住居床面とほぼ同レベルである。規模は長さ63cm、幅44cmを測る。軸方向はS-42°-Eを指す。カマドの他にピット、貯蔵穴、周溝等の施設は検出されなかった。住居覆土はローム粒を多く含む褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、同甕、同蓋、小形壺、高台付椀等の破片が約100点覆土より出土する。このうち杯類のほとんどが糸切り底であり、又甕の中に「土釜^{どかま}」といわれるものが多数ある事から平安時代^(註2)のものと考えられる。

重複遺構は159号住居跡と209号住居跡で、新旧関係はカマドの残存状況及び土層観察から159号住→160号住→209号住と思われる。



第178図 160号住居跡及び出土遺物

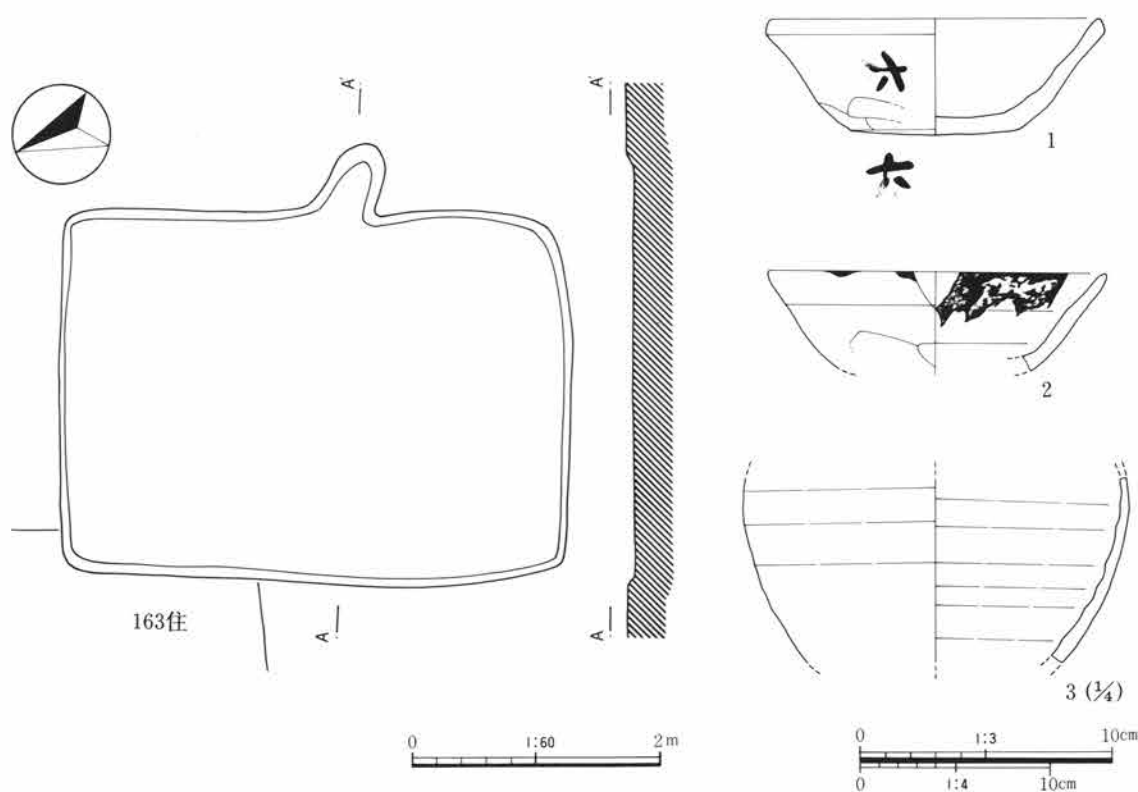
161号住居跡（欠番）

162号住居跡（第179図、PL. 8）

IV区H-6・7、I-6・7グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈する。規模は2.98×4.10mで、面積は12.0m²を測る。主軸方向はS-66°-Eを指す。壁は残存状態不良であるが、やや外傾し確認壁高17~14cmを測る。床面は地山のローム土を利用しており比較的平坦である。カマドは南東壁の中央よりやや南西寄りに構築されており燃焼部のみが残存する。規模は長さ68cm、幅59cmを測る。カマド以外の貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕、高台付椀、須恵器杯、同壺の破片及び砥石が80点程床面及び覆土下層から出土している。ほとんどが平安時代のもと思われる。

重複遺構は163号住居跡で、新旧関係は163号住→162号住である。



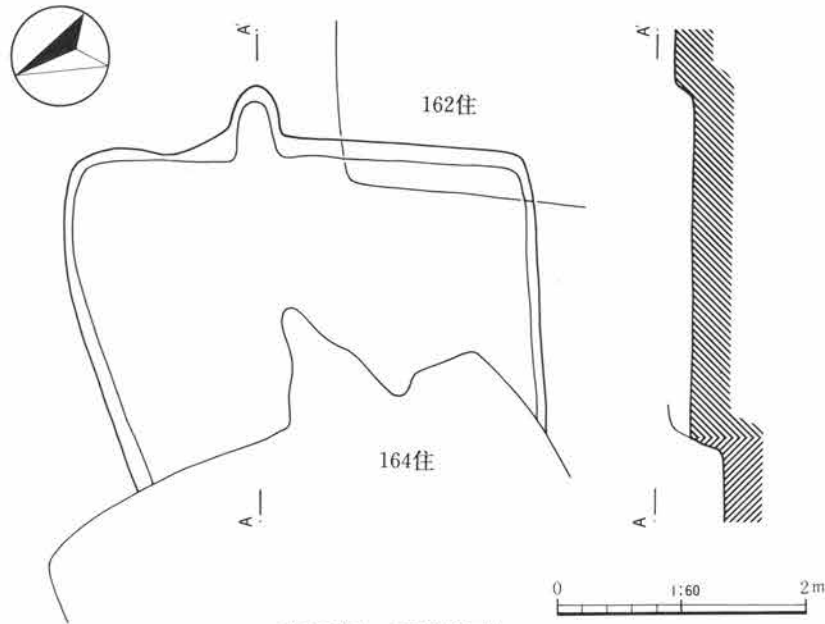
第179図 162号住居跡及び出土遺物

163号住居跡（第180図）

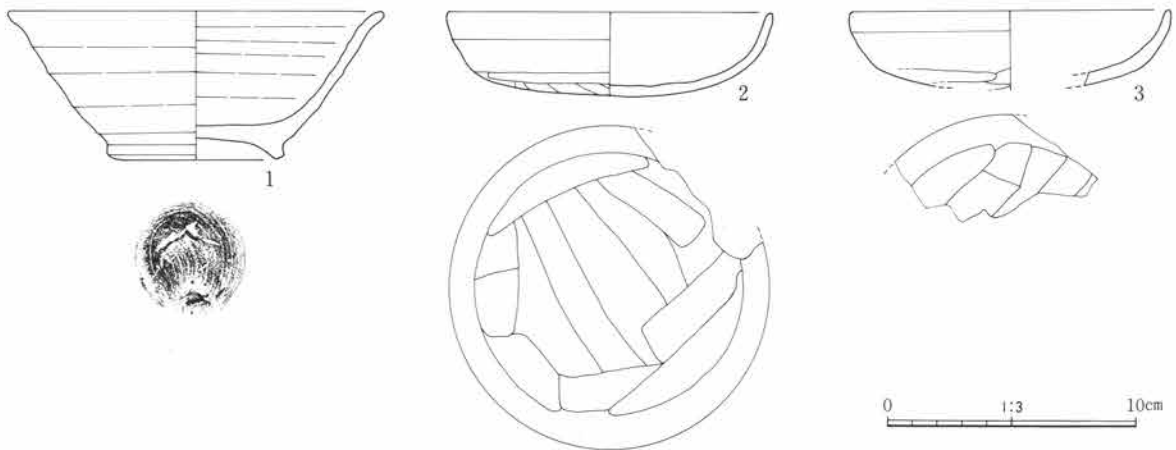
IV区H-7・8、I-7・8グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、西半は他遺構と重複するため不明。規模は北壁-南壁間距離で3.77mを測る。主軸方向はS-63°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は14~7cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で、比較的平坦。カマドは東壁のやや北寄りに構築される。燃焼部のみ残存し、規模は長さ60cm、幅54cmを測る。軸方向はS-66°-Eを指す。

遺物は杯、甕、高台付椀等の破片170点程が覆土より出土している。「コ」の字状口縁の甕や糸切り底をもつ杯、高台付椀を主体とする事から平安時代のもと思われる。

重複遺構は162号住居跡、164号住居跡で新旧関係は163号住→162号住・164号住である。



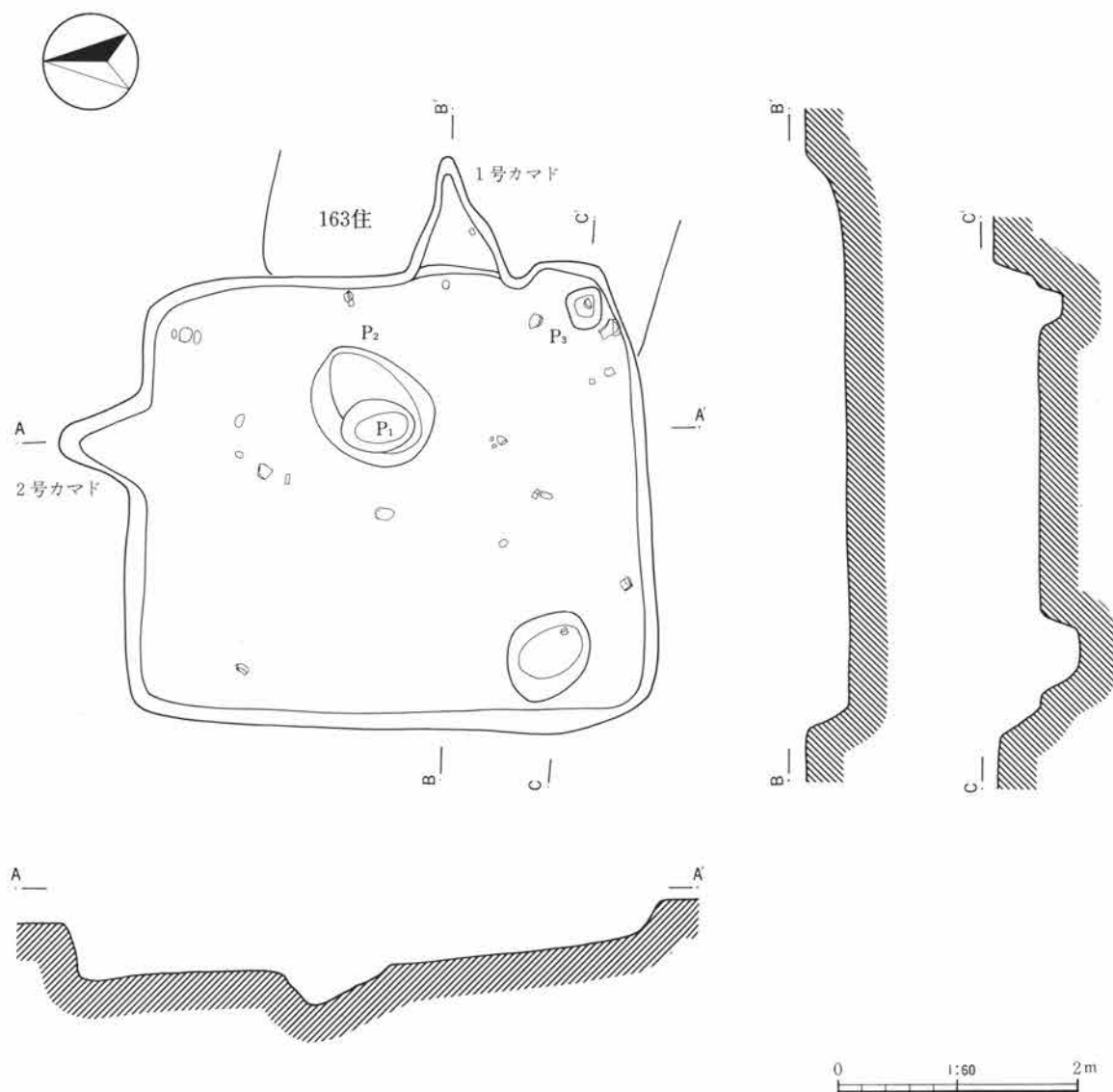
第180図 163号住居跡



第181図 163号住居跡出土遺物

164号住居跡（第182図、PL. 8）

IV区H-7・8、I-7・8グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.40×3.73m、面積は16.4m²を測る。主軸方向はN-4°-Eを指す。壁は比較的残存状態が良好で、ほぼ直立し確認壁高48~24cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りと北壁の東寄りに2基が検出された。前者を1号カマド、後者を2号カマドと呼称する。規模は1号カマドが長さ108cm、幅87cmで軸方向N-82°-Eを指す。2号カマドは長さ76cm、幅75cmで軸方向N-1°-Eを指す。1号カマド燃烧部は床面より弱い段をもってやや高い位置に掘り込まれる。又煙道は1号がやや緩い傾斜、2号が強い傾斜で立ち上がる。これら2基のカマドが同時使用されたのかあるいは時期的前後関係があるのかについては判明できなかった。貯蔵穴は西壁際南端に検出された。楕円形を呈し、規模は径81×66cm深さ33cmを測る。又ピットは3基検出された。規模はP₁径61×43cm深さ21cm、P₂径107×83cm深さ18.5cm、P₃径34cm深さ35cmを測る。このうちP₁とP₂は重複しており1基のピットである可能性も考えられる。又P₃は小規模ではあるが、カマド

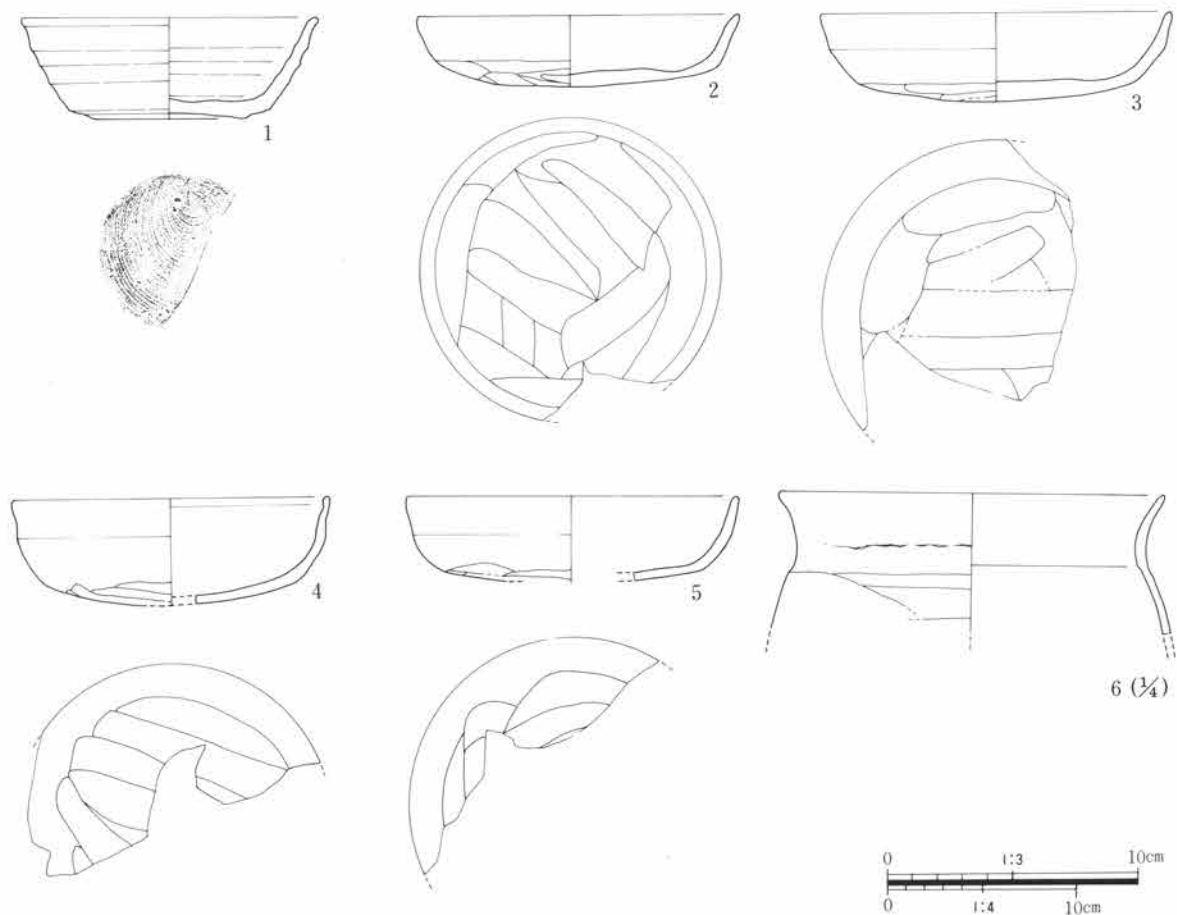


第182図 164号住居跡

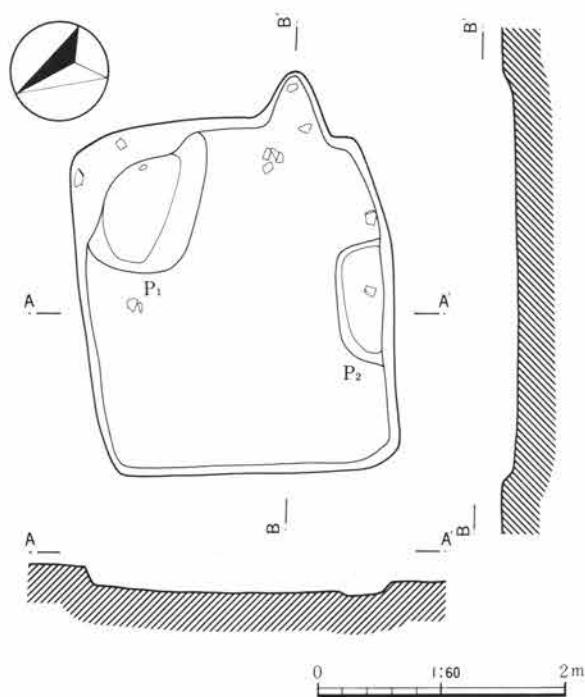
との位置関係から貯蔵穴の可能性も考えられる。周溝については検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同甕、高台付椀、砥石等の土器片約350点、大小の円礫8点が覆土下層を中心に出土している。床面上やカマド内からの出土は比較的少ない。出土した土器片のうち数量的に最も多い器種は土師器杯で全体の90%近くを占めている。須恵器杯には糸切り底が見られ、又甕の口縁部は所謂「コ」の字状口縁になる直前の段階のものと思われる。従ってこれらの時期は平安時代初頭に位置付けるのが妥当かと思われる。

重複遺構は163号住居跡で、南東部の1号カマド付近で重複する。新旧関係はカマドの残存状態からおそらく163号住→164号住と思われる。



第183図 164号住居跡出土遺物



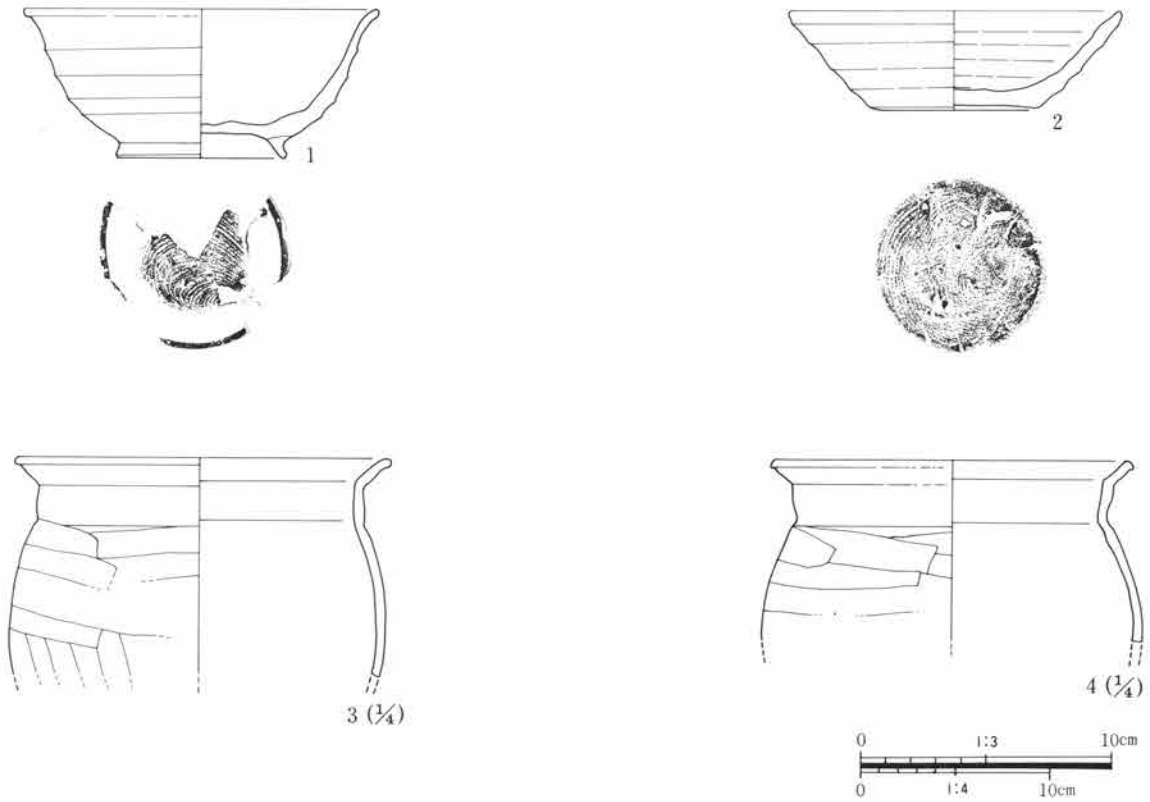
第184図 165号住居跡

165号住居跡 (第184図、PL. 8)

IV区G-8・9グリッドに位置する。平面はやや歪んだ縦長長方形を呈しており、その規模は2.83×2.54m、面積6.8㎡を測る。主軸方向はS-67°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高19~7cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で比較的平坦である。カマドは南東壁の南西隅に構築され、二等辺三角形形状に壁外へ張り出した燃焼部のみ残存する。規模は長さ60cm幅56cmで、軸方向はS-61°-Eを指す。ピットは東側コーナー部と南西壁際中央部に検出され前者は三角形、後者は方形形状を呈する。規模はP₁径118×90cm深さ12cm、P₂径94×36cm深さ4cmを測る。P₁は床下土壌か掘り形と思われるが、P₂については入口施設との関連が考えられようか。周溝、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋、高台付椀等の土器片100点程が主にカマド周辺及び覆土より出土する。甕が数量的に主体を占めており、時期は平安時代のものである。

重複遺構はないが、6号井戸と西側コーナー付近で接する。



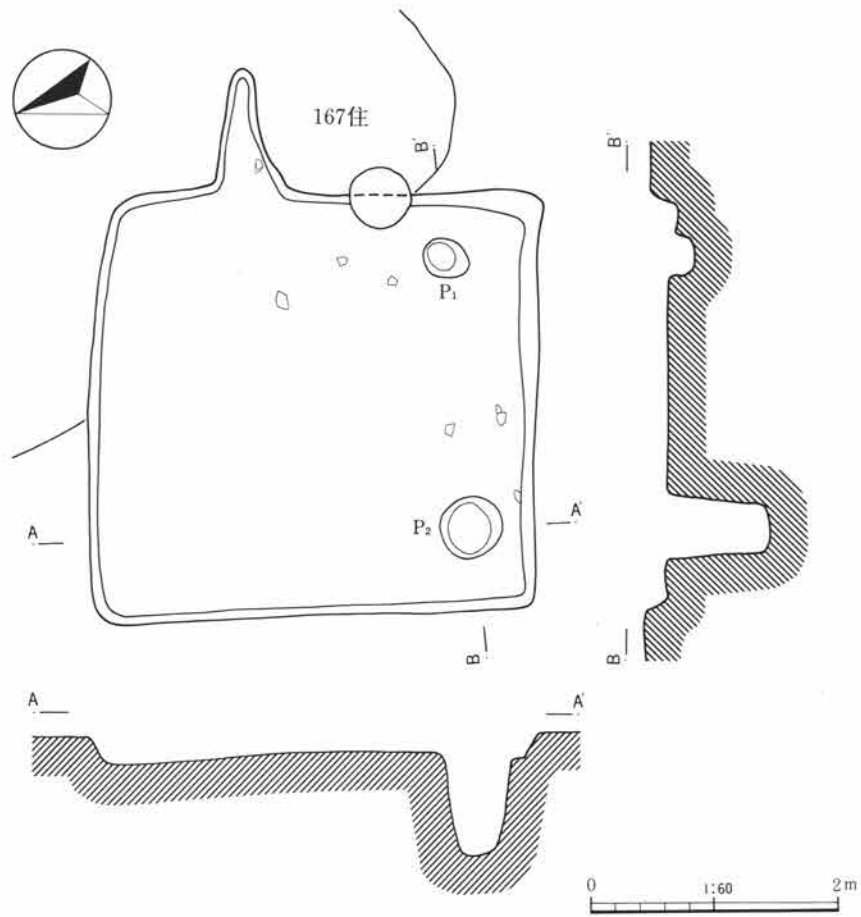
第185図 165号住居跡出土遺物

166号住居跡（第186図、PL. 8）

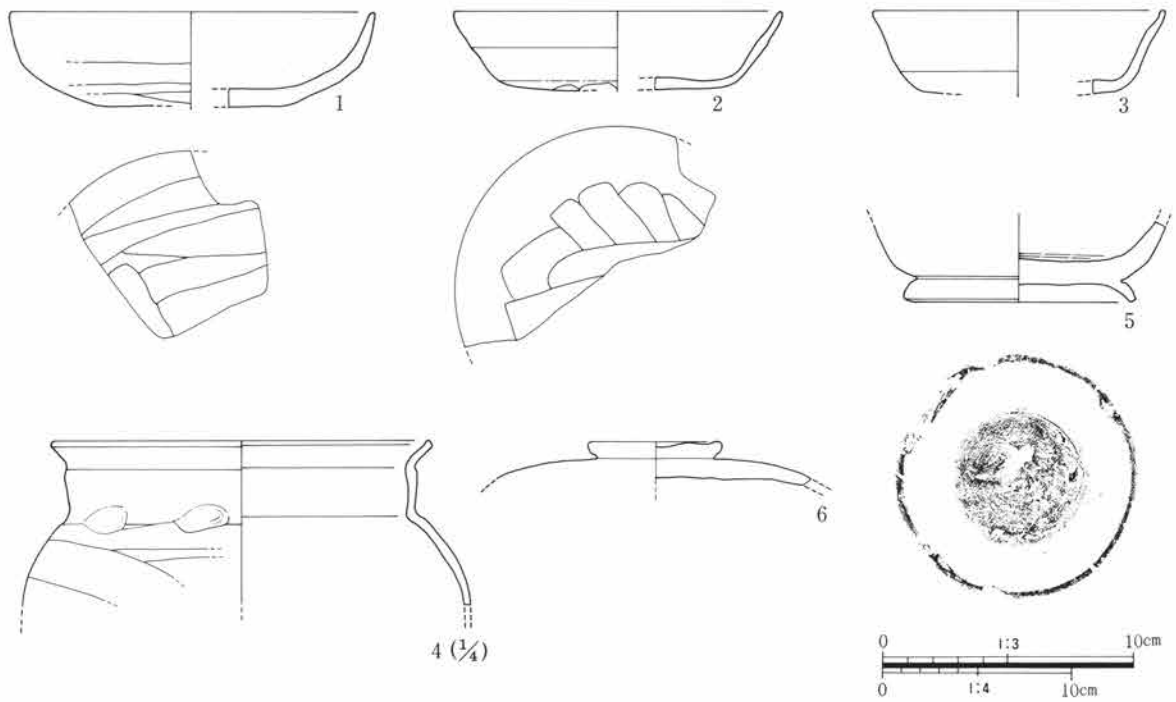
IV区H-9・10、I-9・10グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈する。規模は3.42×3.60m、面積は12.2㎡を測る。主軸方向はS-73°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は23~16cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で、比較的平坦である。カマドは東壁の北寄りに構築されており、燃烧部と煙道部が残存する。そで部はカマド掘り形の両壁をそのまま利用していると思われ、主体は壁外にあったものだろう。規模は長さ103cm、幅63cmを測る。軸方向はS-70°-Eを指す。ピットは2基が検出された。P₁は南東コーナー部分、P₂は南西コーナー部分に位置する。両者とも円形を呈し、規模はP₁径39×32cm深さ19.5cm、P₂径50×48cm深さ82cmを測る。これらのピットの性格については不明である。特にP₂については位置的に貯蔵穴とも考えられるが、他と比較して著しく深い事から別の性格を想定した方がよいと思われる。西壁に沿った床面がやや凹んでいたが、床面中央からの弱い傾斜で若干低くなっているものと解釈され、周溝とは考えられない。

遺物は杯、甕、須恵器蓋、同杯、同甕、高台付杯等の破片500点弱が出土する。出土位置は覆土中がほとんどで、床面上やカマド内から出土したものは小片数点のみである。数量的には土師器甕が最多で全体の50%程を占める。須恵器は全器種あわせて20点程である。時期は平安時代に位置付けられる。

重複遺構は167号住居跡で、北東部で重複する。新旧関係は本住居跡のカマド残存状態から167号住→166号住と思われる。



第186図 166号住居跡



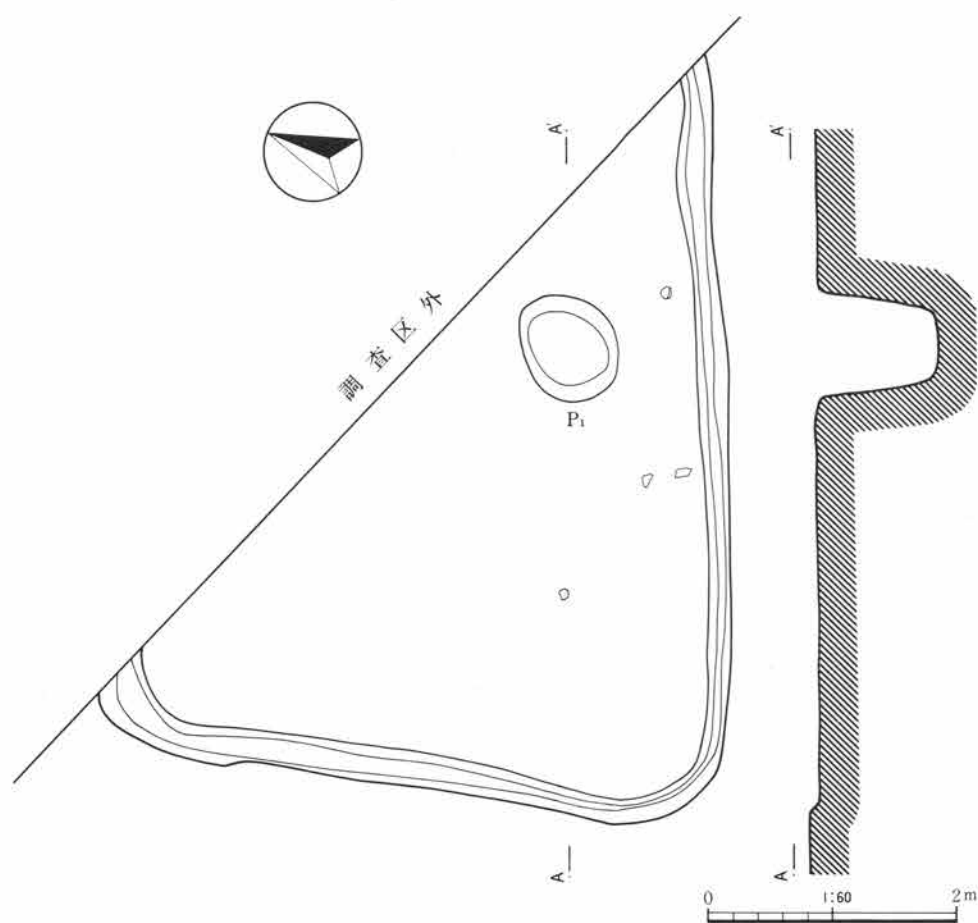
第187図 166号住居跡出土遺物

167号住居跡（第188図、PL. 8）

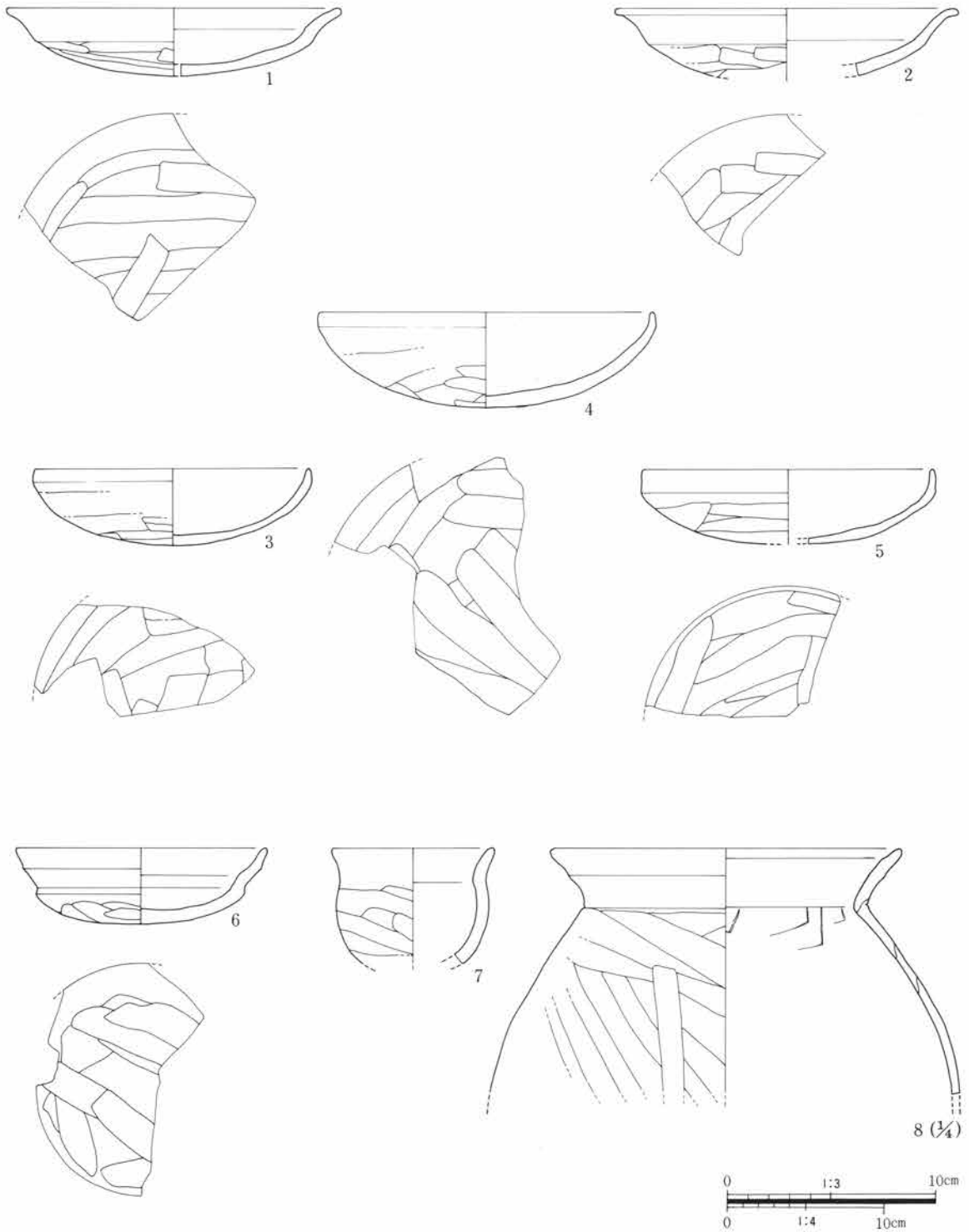
IV区J-8・9、K-8・9グリッドに位置する。平面は長方形を呈すると思われるが、北半は調査区外のために全形を知り得ない。壁はやや外傾し、確認壁高は50～38cmを測る。主軸方向は残存状態良好な南壁からN-(66°)-Eと推定される。カマドは検出されなかったが、遺物等より推定される時期から当然構築されたと考えられる。おそらく調査区外の北壁あるいは東壁に築かれたと思われるが、本遺跡における他の住居跡例からすれば東壁の可能性が高い。ピットは南壁の中央より若干東寄りの位置から約20cm程離れた内側で検出された。平面は楕円形を呈し、規模は径92×75cm、深さ95cmを測る。これは屋内施設としては著しく深いもので、その性格については不明である。周溝は検出された範囲については壁に沿って全周しており、その規模は幅42～16cm深さ8～3cmを測る。住居覆土は上層に浅間B軽石、ローム粒、焼土、炭化物粒を含む褐色砂質土、下層にローム粒を多く含む黄褐色砂質土が堆積する。又周溝部分にはローム粒を含む黒色土が堆積する。堆積状態は概ねレンズ状を呈しており自然堆積の可能性が高い。

遺物は杯、甕、小形甕、須恵器杯、同蓋、同長頸壺、S字状口縁台付甕等の破片が約200点出土している。出土位置はほとんどが覆土下層である。これらの中で数量的に主体を占めるのは土師器杯で全体の約50%程を占める。時期は古墳時代後半～奈良時代にわたるが、主体は奈良時代のものである。

重複遺構は166号住居跡で、新旧関係は167号住→166号住である。



第188図 167号住居跡



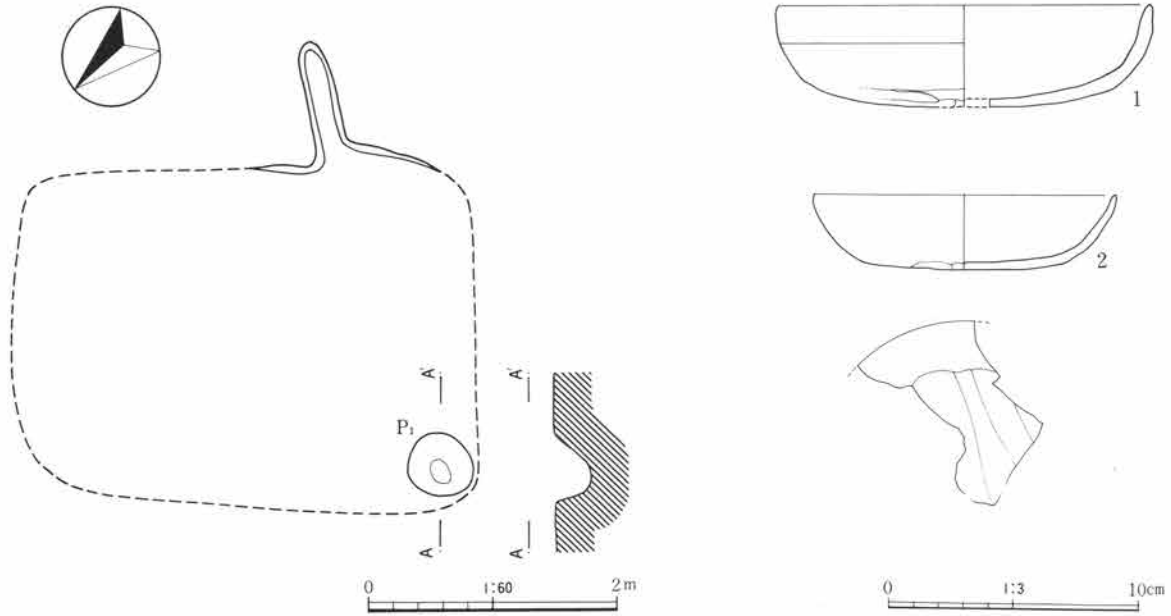
第189図 167号住居跡出土遺物

168号住居跡 (第190図、PL. 8)

III区F-11グリッドに位置する。平面は方形と推定されるが、ほとんど上半を後世の削平により失なわれており全形や規模を知り得ない。カマドとその両脇の壁のみがわずかに残存する。カマドは南東壁に構築されたと思われる。明確なのは煙道部で長さ95cm程が検出された。軸方向はS-51°-Eである。なお本住居跡の範囲内と思われる位置にピットが1基検出された。楕円形を呈し、規模は径53×50cm深さ30cmを測る。位置や

形状、規模等から本住居跡に伴う貯蔵穴の可能性はある。

遺物は床面及び覆土下層と推定される位置から土器片数点及び土製円板が出土している。いずれも平安時代に属するものと考えられる。



第190図 168号住居跡及び出土遺物

169号住居跡（第191図、PL. 8）

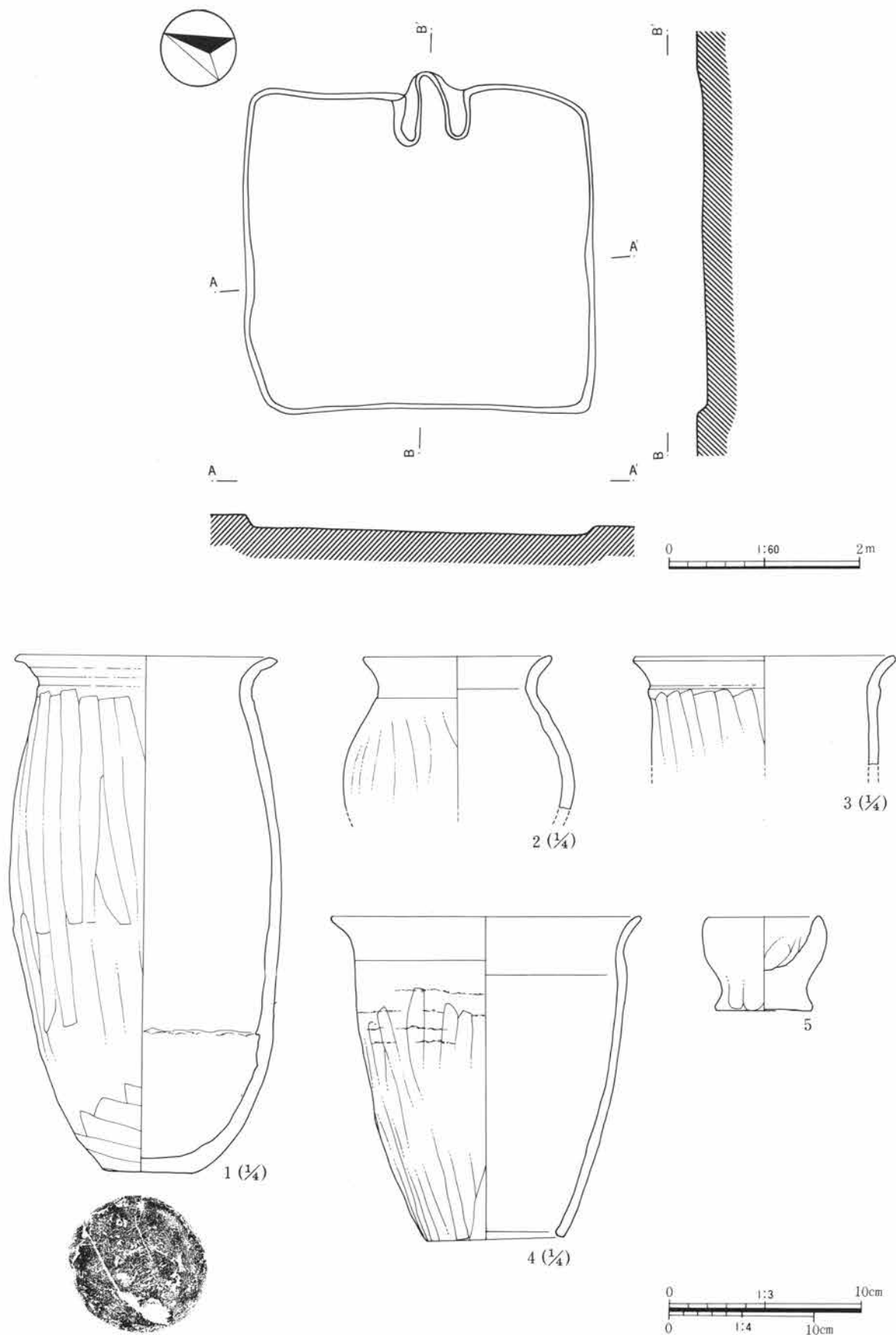
Ⅲ区H-12・13、I-12・13グリッドに位置する。平面はほぼ正方形を呈する。規模は3.35×3.67mで、面積は11.9㎡を測る。主軸方向はN-70°-Eを指す。壁は残存状態不良でやや外傾し、確認壁高は14～7cmを測る。床面は地山の黒褐色粘質土を利用している。比較的平坦な面を呈する。カマドは東壁のほぼ中央に構築されており、残存状態は比較的良好である。規模は長さ77cm、幅78cmを測る。軸方向はN-59°-Eを指す。そでは粘土で構築されており、壁内に56cm程張り出す。燃烧部は比較的狭小で幅30cmを測る。煙道は燃烧部との境が不明瞭で、弱い傾斜で立ち上がる。カマド以外の貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、高杯、甕、甗、手捏ね土器等の破片約500点程が床面及び覆土下層より出土した。又カマドの焚口部分と思われる位置で10cm大の円礫が1点出土している。器種の中では甕の破片が数量的に最も多く、全体の約80%近くを占めている。時期は古墳時代後期（鬼高期の新しい段階）と思われる。

重複遺構はなく単独で検出された。

170号住居跡（第192図、PL. 8）

Ⅲ区F-14・15、G-14・15グリッドに位置する。平面はやや胴張りの縦長長方形を呈する。規模は4.67×3.85mで、面積は16.9㎡を測る。主軸方向はN-81°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高19～2cmを測る。床面は地山のローム土を利用している。カマドは東壁の南寄りに構築され、そで部、燃烧部、煙道部が残存する。長さ154cm、幅94cmを測り、軸方向はN-(79°)-Eを指す。煙道はほぼ北東方向に延びた後、一段屈



第191図 169号住居跡及び出土遺物

曲して東方向に向かう。立ち上がりの傾斜は比較的緩やかである。そで部はロームブロックを含む粘土で築き、壁内に36cm程張り出す。周溝は北壁の東寄りの部分から西壁中央部分にかけての間で検出された。規模は幅19～8cm、深さは5～2cmを測る。その他に貯蔵穴やピット等の施設は検出されなかった。

遺物は形状、時期の不明な土器片数点が出土したのみである。

重複遺構はなく単独で検出されている。

171号住居跡 (第193図、PL. 8)

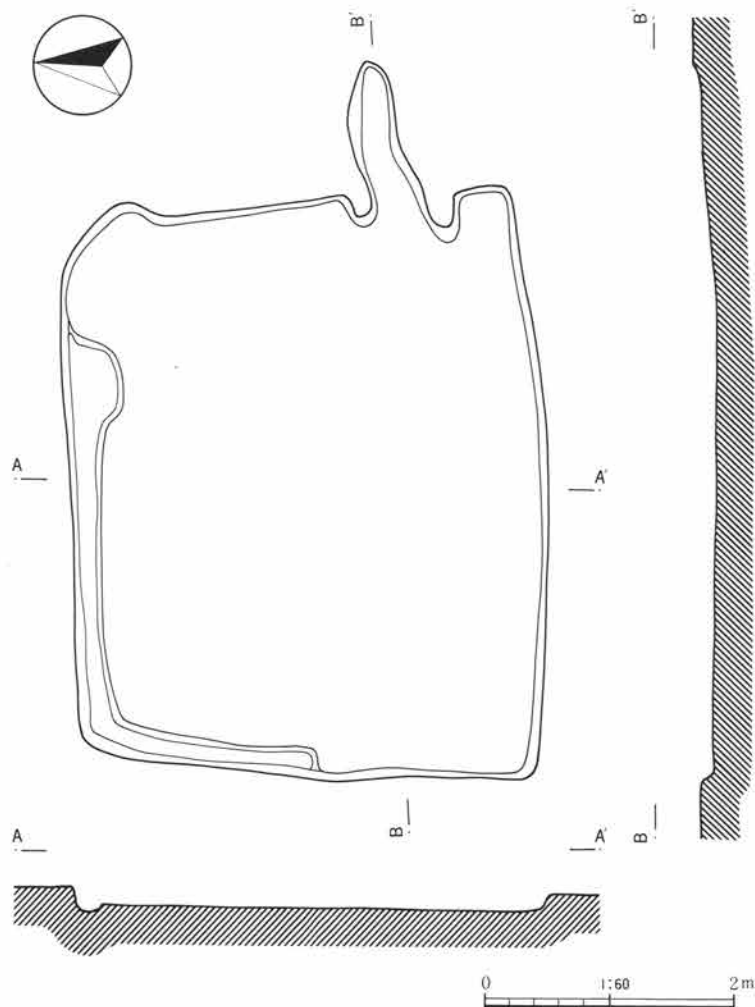
III区E-16・17グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、北半が他住居跡と重複して不明瞭なため全形、規模を明らかにしえない。主軸方向はS-89°-Eを指す。壁はわずかに残存し、確認壁高9～2cmを測る。床面は地山のロームから黒褐色土への漸移土をそのまま基盤とする。カマドは若干の焼土の存在から東壁の中央部にあったと推定されるが、形状や規模については不明である。その他に住居に伴う施設は検出されなかった。

遺物は南壁際において杯、高台付杯等の破片が20点程出土している。時期は奈良時代後半～平安時代初頭に位置付けられよう。

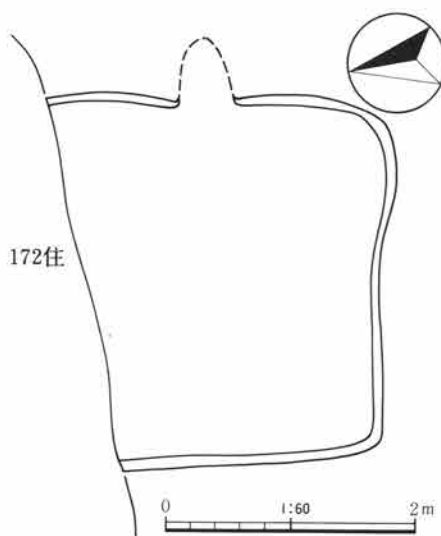
重複する遺構は172号住居跡で、新旧関係は後述するように171号住→172号住と思われる。

172号住居跡 (第195図、PL. 8)

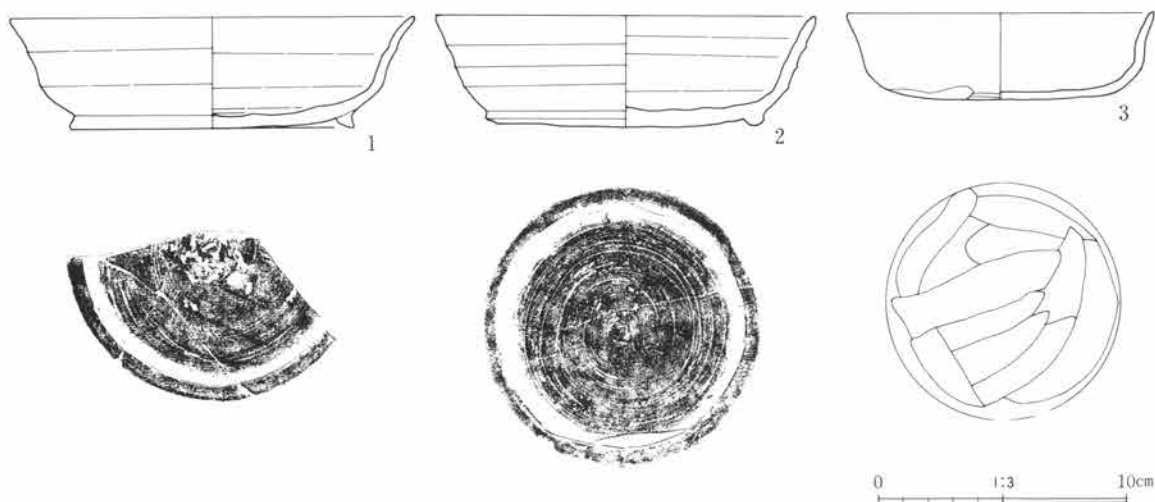
III区E-17・18、F-17・18グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈している。規模は7.83×7.95m、面積は62.9m²を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高19～3cmを測る。床面は地山のローム土を利用して



第192図 170号住居跡

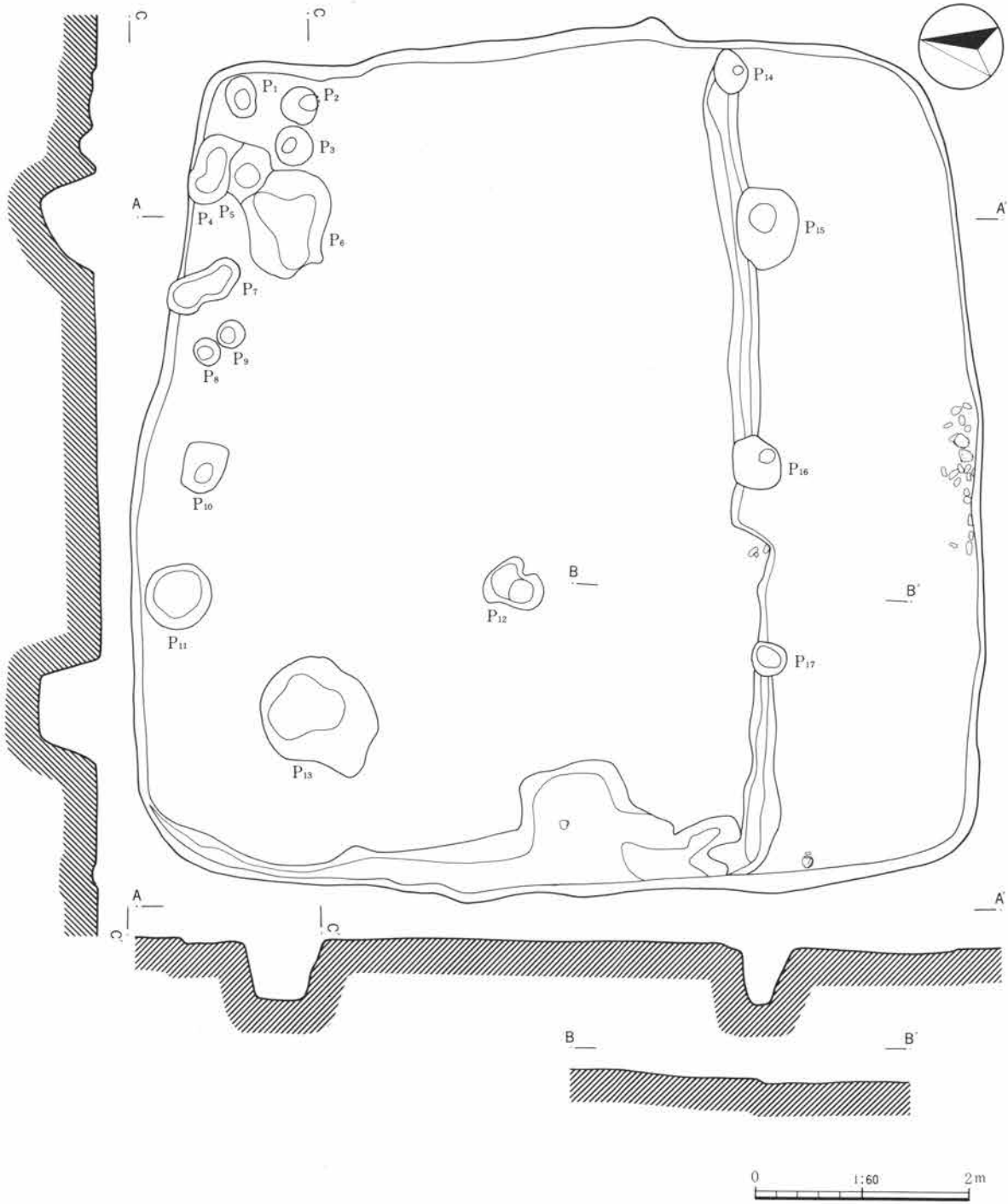


第193図 171号住居跡



第194図 171号住居跡出土遺物

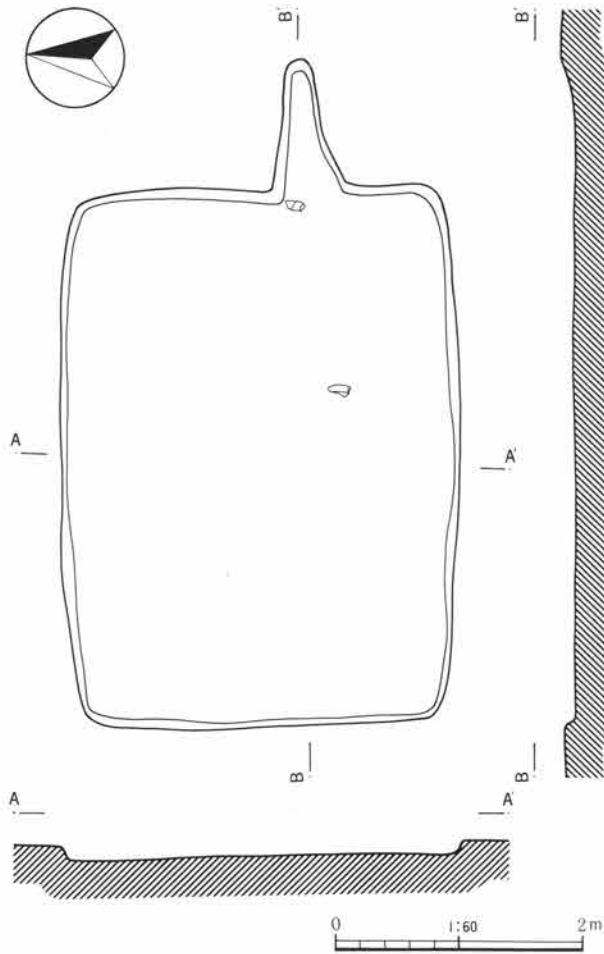
おり、小さな凹凸が比較的多い。カマドは検出されず、それらしい痕跡も認められない。ピットは全部で17基が検出された。P₁~P₁₁は西壁沿い、P₁₂とP₁₃は北西コーナーと南東コーナーを結ぶ対角線上の北西側に位置する。又P₁₄~P₁₇は南半部にあって、ほぼ東西方向の一直線上に並んでいる。規模はP₁径38×28cm深さ28cm、P₂径35×25cm深さ41cm、P₃径36×25cm深さ15cm、P₄径64×25cm深さ14cm、P₅径75×53cm深さ36cm、P₆径100×75cm深さ54cm、P₇径57×35cm深さ10cm、P₈径30×25cm深さ13cm、P₉径26×25cm深さ17cm、P₁₀径47×40cm深さ49cm、P₁₁径62×60cm深さ20cm、P₁₂径55×30cm深さ5cm、P₁₃径96×70cm深さ59cm、P₁₄径39×31cm深さ19cm、P₁₅径75×58cm深さ52cm、P₁₆径32×31cm深さ10cm、P₁₇径32×31cm深さ10cmを測る。周溝は西壁に沿った北半部分で検出され、その南端は掘り形と思われる不定形の浅い掘り込みに続く。幅は50~15cm、深さ10cm前後を測る。又住居南半部でピットP₁₄~P₁₆及びP₁₇~西壁の間に間仕切りと思われる溝が検出された。幅は35~15cm深さは11~2cmを測る。なお間仕切溝によって二分された本住居跡の面積は北側45㎡、南側16㎡を測る。なおP₁₆とP₁₇の間は1.90mを測りここには溝が検出されていない。しかし北側床面のレベルが南側床面よりも5cm高く段差がついており、明らかに両者を区別している。これら多数のピットと溝がどのような性格をもっていたのかについては推定の域を出ないが、各々の規模と位置関係よりピットP₆、P₁₃、P₁₅は主柱穴と考えたい。この場合の各柱間距離はP₆~P₁₅が4.40m、P₆~P₁₃が4.40m前後とほぼ同距離を測る。しかしながらこの配置による基本的な4本柱構造を考えた場合に残る1本の柱穴が認められない。位置と柱間距離からあえてあげるならばP₁₇がそれにあたると思われる。ただしこれは他3基に比べ著しく規模が小さい事から果して同様の性格付けをしてよいか疑問が残るところである。又P₁₄~P₁₇は間仕切溝の走行上に掘り込まれている事からこの両者が組合わされて住居構造の一部を形成していたと考えるのは自然であろう。最も可能性が高いと思われるのは、これらのピットに柱を立てて、この間の溝を利用して板あるいは藁状のものをさし込んで立て、仕切壁を作る事である。ちなみに各ピット間距離はP₁₄~P₁₅が1.4m程、P₁₅~P₁₆が2.2m程、P₁₇~西壁が2m程を測る。けっして正確な等間隔ではないが、この間仕切を四分割しようとする意識は窺う事ができる。もしこれらを仕切壁と推定した場合、溝のなかったP₁₆~P₁₇間は出入口になると考えられよう。そして住居自体の出入口を南側に想定できるとすれば、この仕切壁によって分けられた南側の狭小な部分と北側の広い部分はそれぞれ前者が「土間」で後者が「奥部屋」といった構造になる。この「奥部屋」の奥壁ともいえる北壁にそって大小のピットが11基あるが、これらの性格については不明である。



第195図 172号住居跡

遺物は杯、甕、高杯、須恵器甕の破片が140点程覆土より出土している。又「土間」部分の南壁際で10cm大の円礫約20点が出土している。編み物用の錘かあるいは入口施設に伴う何らかの痕跡かと思われる。土器片はいずれも小片で形態の不明なものが多いが、杯と甕を見るかぎり奈良時代後半～平安時代初頭のものと思われる。

重複遺構は143号・144号・146号・171号・190号住居跡であるが、新旧関係の判明したのは143号・146号・171号住→172号住である。



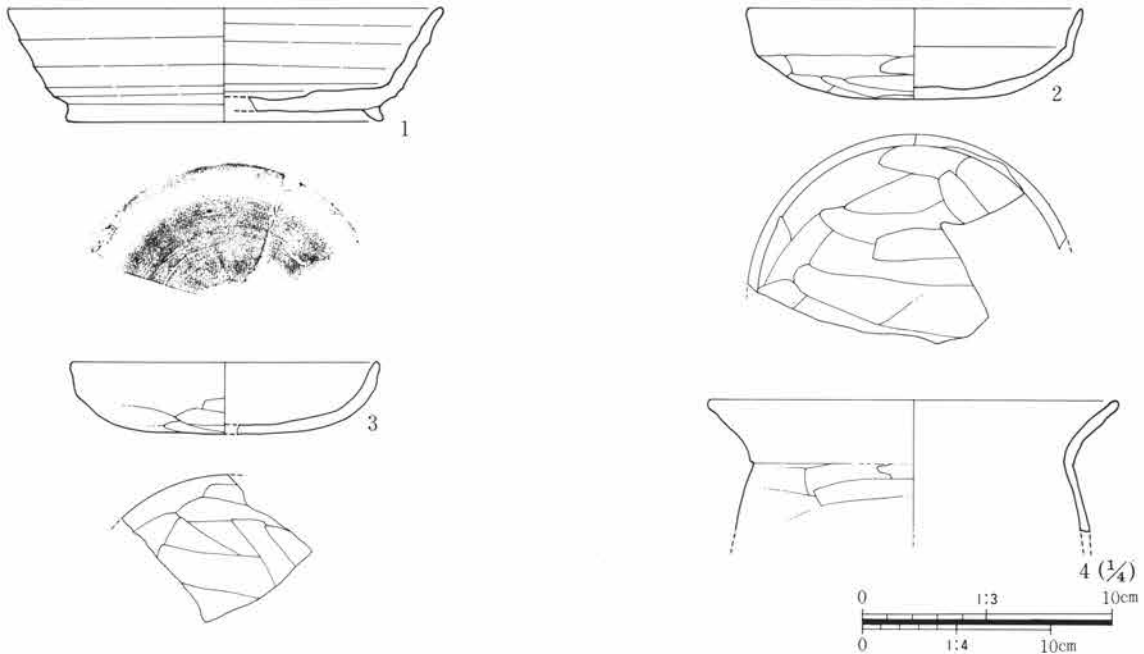
第196図 174号住居跡

174号住居跡（第196図、PL. 8）

III区B-18・19、C-19グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.30×3.18mを測る。主軸方向はN-87°-Eを指す。壁は残存状態不良で、ほぼ直立し確認壁高は12~4cmを測る。床面は地山である黒褐色粘質土でローム粒を含んでいる。比較的平坦である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。規模は長さ115cm、幅60cmを測る。軸方向はN-84°-Eを指す。燃焼部は壁外に築かれたと思われる。そこで部は両側の壁をそのまま利用したのであろう。煙道は燃焼部との境が不明瞭で、しだいにすぼまり、緩い角度で立ち上がる。カマド以外のピット、貯蔵穴、周溝等の施設は検出されなかった。住居覆土は浅間B軽石を多量に含む黒褐色土が堆積する。

遺物は杯、高杯、甕、鉢、小形壺、須恵器等の土器片約70点が床面及び覆土より出土している。時期はほとんどが奈良時代末~平安時代初頭に属するものと思われる。

重複遺構はなく単独で検出された。



第197図 174号住居跡出土遺物

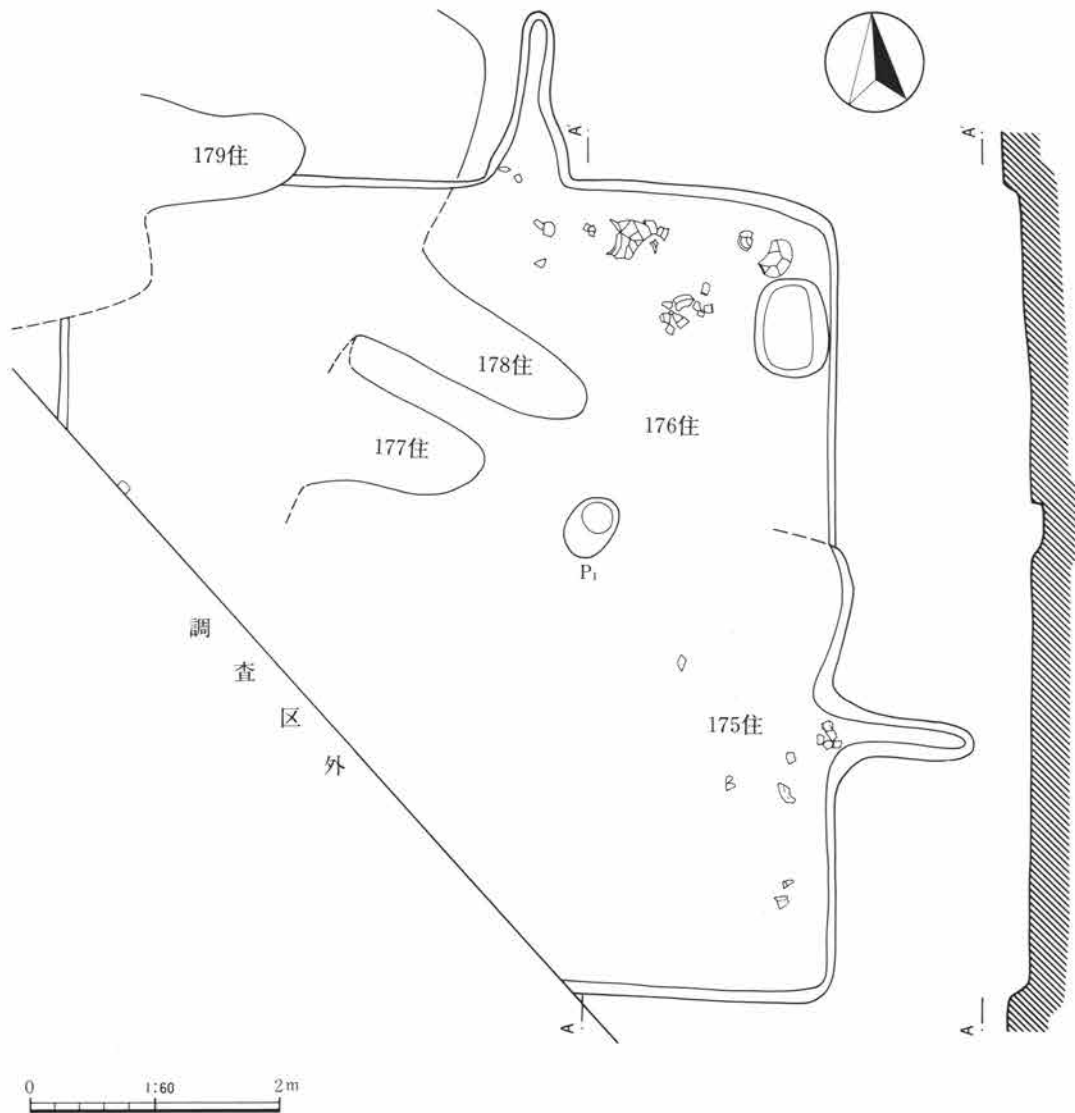
175号住居跡（第198図、PL. 8）

Ⅲ区B-19・20、C-19・20グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、176号住居跡と重複するため西半に関しては形状、規模共に不明である。主軸方向はS-88°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は24~12cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、平坦である。カマドは東壁とほぼ中央と思われる部分に構築され、規模は長さ128cm、幅70cmを測る。軸方向はS-70°-Eを指す。燃焼部は焼土分布や床面との関係から壁内に構築されたと思われるが、形状等については不明である。カマド以外に貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

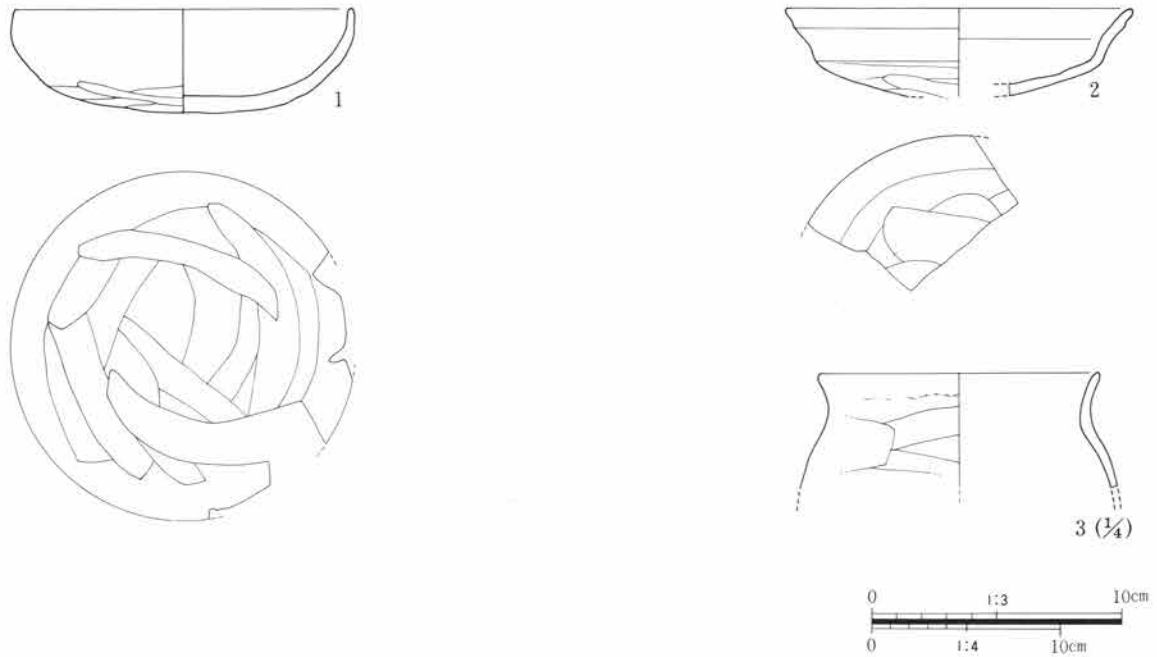
遺物は杯、甕、須恵器等の破片が約170点程床面及び覆土下層から出土している。時期は古墳時代後期~奈良時代にわたるが、主体は奈良時代のもと思われる。

重複遺構は176号住居跡で、主軸方向がほぼ直交し、更に176号住の東壁がそのまま本住居跡の東壁に続くような状態で重複する。新旧関係は不明であった。

本住居跡は床面レベルが176号住とほぼ同一である事から、両者は単一住居跡である可能性も考えられる。



第198図 175・176号住居跡



第199図 175号住居跡出土遺物

176号住居跡（第198図、PL. 8）

Ⅲ区B-20・21、C-20・21グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、他遺構との重複、及び南西部が調査区外にあたるため全形、規模は不明である。主軸方向はN-4°-Eを指す。壁は外傾し、確認壁高は22～6cmを測る。床面は地山のローム土を利用している。カマドは北壁のほぼ中央部に構築されている。規模は長さ137cm、幅68cmを測る。主軸方向はN-13°-Eを指す。燃焼部は壁外に掘り込まれている。そで部はおそらく両壁を利用したと思われる。貯蔵穴は北東隅に掘り込まれている。平面は隅丸長方形を呈し、規模は77×55cm、深さ16cmを測る。又ピットは中央よりやや東寄りの位置に検出された。平面は楕円形を呈し、規模は52×37cm深さ13cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器の破片が約120点程出土した。出土位置はカマド周辺及び貯蔵穴周辺に集中しており、覆土より出土したものが比較的多い。時期はほとんどが奈良時代に属するものと考えられる。

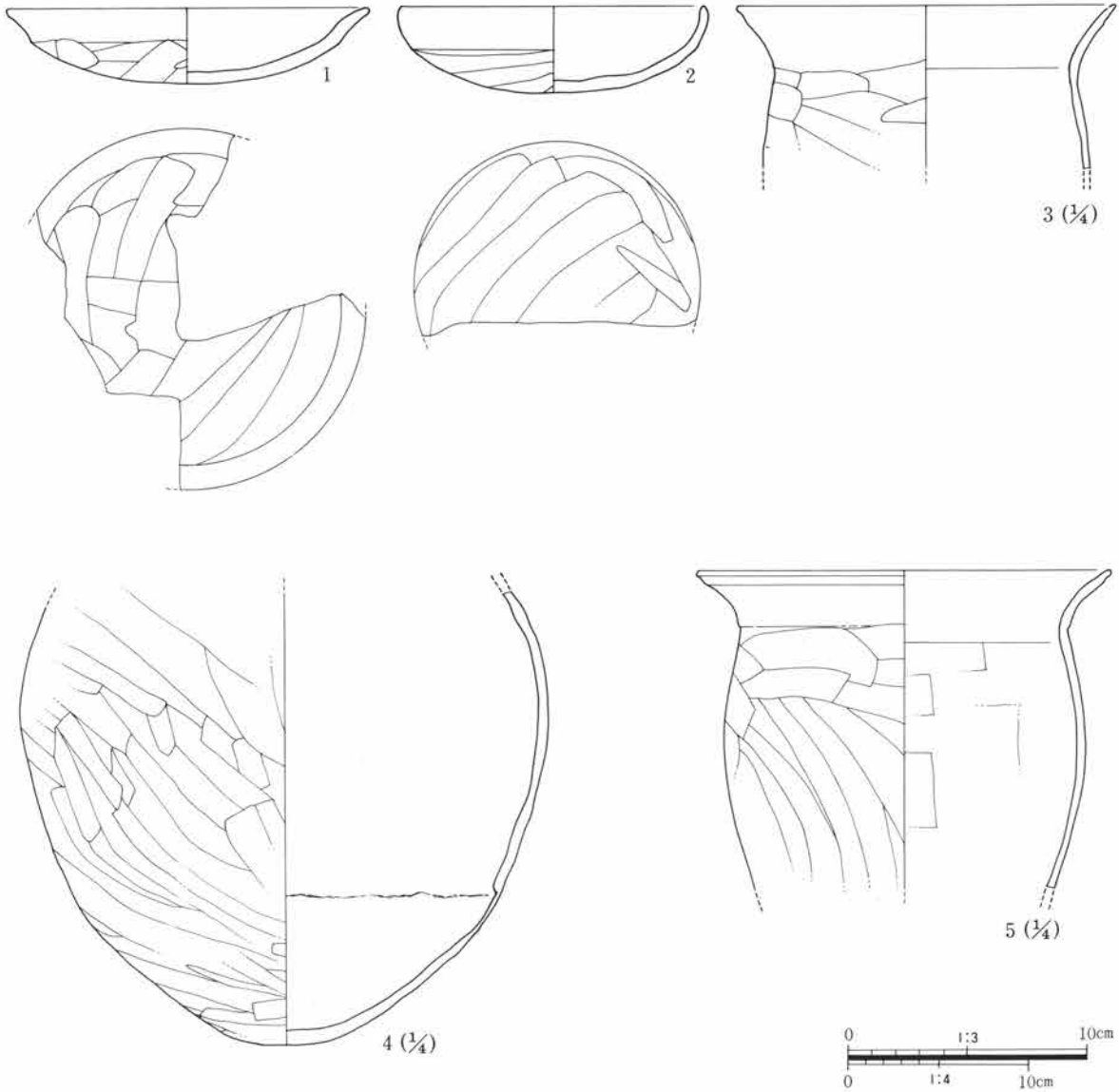
重複遺構は175号住居跡、177号住居跡、178号住居跡、179号住居跡で、新旧関係はカマドの残存状態より、176号住→177号住・178号住・179号住である。175号住との関係については、前述のとおり同一住居跡の可能性が考えられる。

177号住居跡（第201図、PL. 8）

Ⅲ区B-21グリッドに位置する。カマドのみが検出され、全形や規模等については不明である。カマドはその方向から東壁に構築されたと思われる。規模は長さ140cm、幅95cmを測り、軸方向はS-69°-Eを指す。比較的長大なもので、壁外に長く張り出す形状と思われる。

遺物は床面付近と思われる位置から杯、甕を主とした土器片が出土しているが、重複する遺構が多くその帰属は不明である。

重複遺構は176号住居跡、178号住居跡、179号住居跡で、新旧関係はカマドの残存状態より176号住→177号住と考えられる。

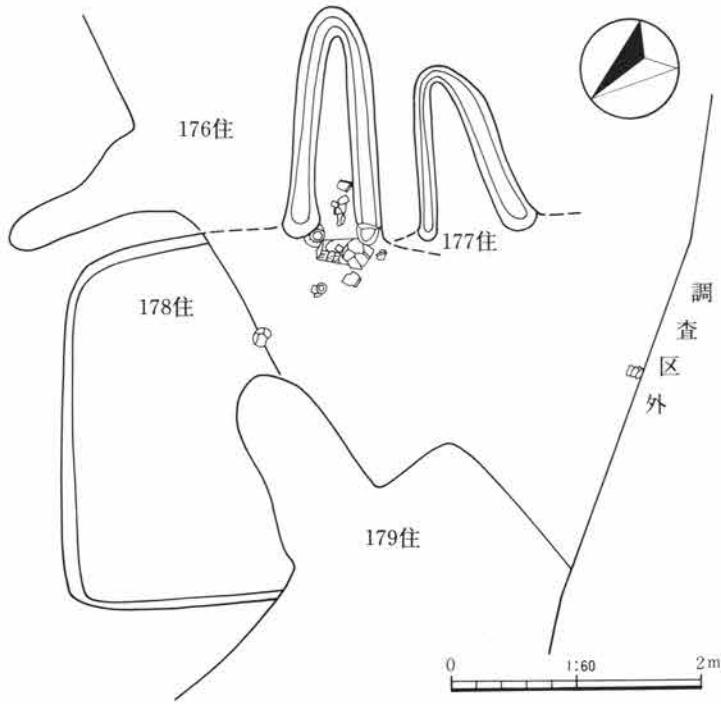


第200図 176号住居跡出土遺物

178号住居跡（第201図）

Ⅲ区B-21グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、南西半は重複遺構が多く全形は不明瞭となっている。残存する部分から東西方向は2.90mを測り、南北方向はこれよりやや長く、全体として横長長方形になると推測される。主軸方向は推定でS-(55°)-Eを指すと思われる。壁は残存部で13~7cmの壁高を測る。床面は地山のロームを利用している。南西半部は不明瞭。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築されたと思われる。規模は長さ182cm、幅78cmで、軸方向はS-56°-Eを指す。そで部は壁際であり、燃烧部は壁外に掘り込まれる。燃烧部は比較的狭小で、ほとんど変化を見せずにそのまま煙道に続く。煙道はほぼ水平に長く伸び、末端部分で急角度をもって立ち上がる。なおそで部左側には円筒埴輪、右側には河原礫が直立した状態で出土し、又焚口と思われる部分で円筒埴輪片が両そで部を繋ぐような状態で横転して出土した。これらはかなり二次的加熱を受けた痕跡が見られる事から、おそらくカマド焚口部の構造材と考えてさしつかえない。なお本住居跡からはカマド以外に貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

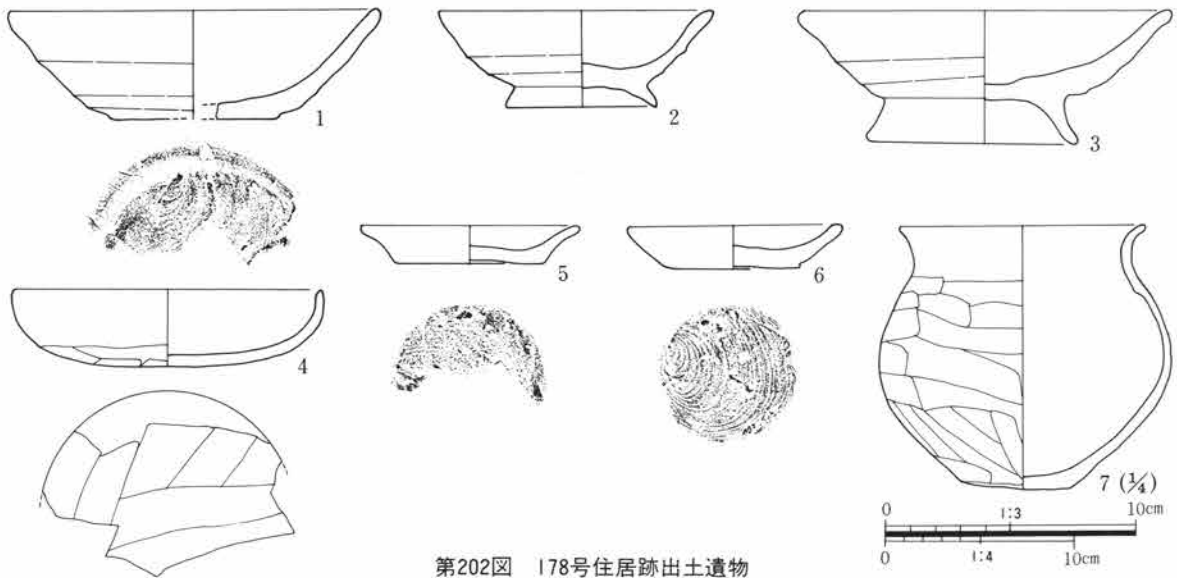
遺物は杯、甕、小皿、高台付椀等の土器片及び埴輪片が約160点程出土している。出土位置はカマド周辺に



第201図 177・178号住居跡

集中する他はほとんどが覆土からの出土である。時期は奈良～平安時代のものであるが、本住居跡に伴う可能性の高いカマド内出土土器は平安時代の厚手の甕（土釜）である事、又カマド前方の比較的床面に近い部分から小形の皿が出土している事、更に数量的に平安時代のものが主体を占めている事等より本住居跡の時期は平安時代(11世紀代)の可能性が高い。従って第202図-4・7はその特徴から本住居跡に伴うと考えるよりもむしろ他遺構(176号住か?)からの混入と解釈した方が妥当であろう。なおカマドから出土した円筒埴輪については後述(第V章-9)する。

重複遺構は176号住居跡、177号住居跡、179号住居跡で、カマドの残存状態から新旧関係は176号住→178号住→179号住と思われる。なお177号住との関係は明らかに出来なかったが、本住居跡のカマドの残存状態から177号住が古くなる可能性がある。



第202図 178号住居跡出土遺物

179号住居跡 (第203図)

Ⅲ区B-21・22グリッドに位置する。平面は方形かと思われるが、他遺構と重複する部分が多く又一部が調査区外にあたるため全形と規模については不明である。主軸方向はN-82°-Eを指す。壁は残存部分で14～9

cmを測る。床面は地山のローム土を利用し、残存部分においてはほぼ平坦である。カマドは東壁の南隅付近に構築され、規模は長さ149cm、幅88cmを測る。軸方向はS-84°-Eを指す。そで部は壁をそのまま利用しており、 combustion部は壁外に張り出す。 combustion部と煙道部の境は不明瞭で、煙道はしだいにせばまりほぼ水平に延びる。ピットは住居の南東隅付近で1基が検出された。楕円形を呈し、規模は径52×49cm深さ30cmを測る。

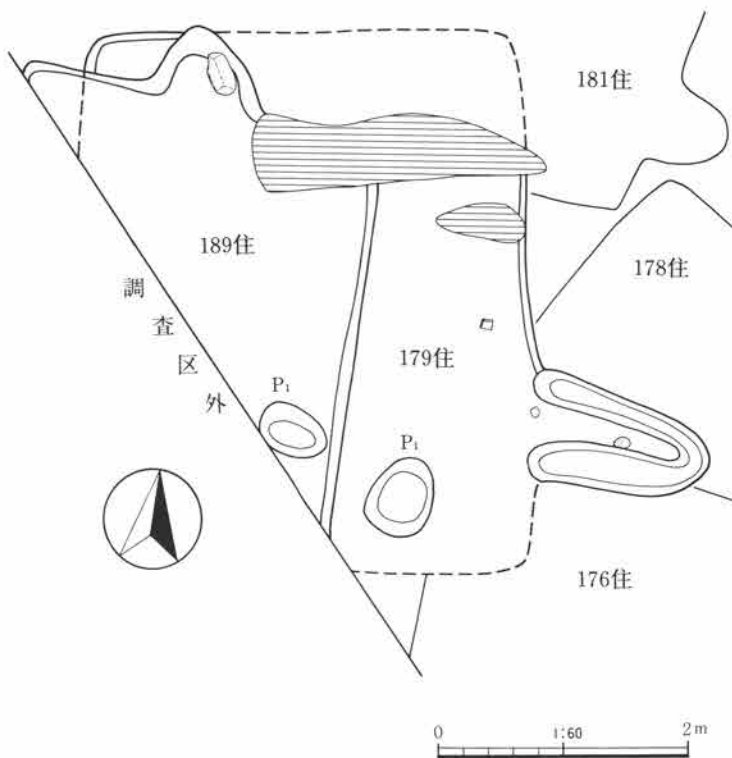
遺物はカマド周辺を中心に杯、甕等の土器片約30点程が出土しているが、ほとんど覆土中からの出土であり、重複する他遺構に伴う可能性もあるためその帰属は不明である。時期は奈良時代～平安時代のものが見られる。

重複遺構は176号住居跡、178号住居跡、181号住居跡、189号住居跡でカマド残存状態より判明した新旧関係は176号住・178号住→179号住→189号住であった。なお本住居跡の北半に細長い不定形の落ち込みが見られるが、これは後世の攪乱墳である。遺物からは判明できなかったがこの住居跡の重複関係より、本住居跡の時期は平安時代であると考えられよう。

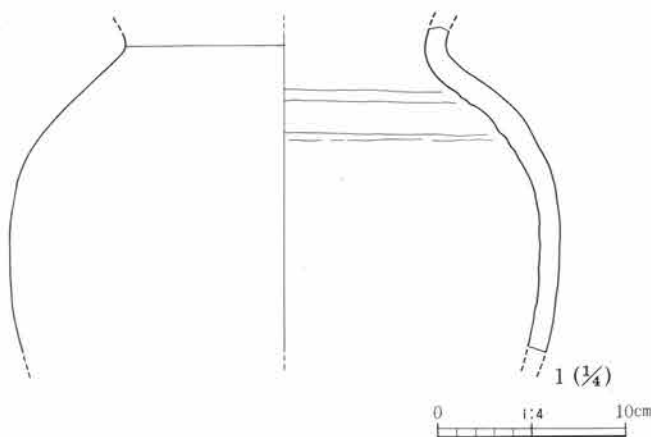
180号住居跡 (欠番)

181号住居跡 (第205図、PL.9)

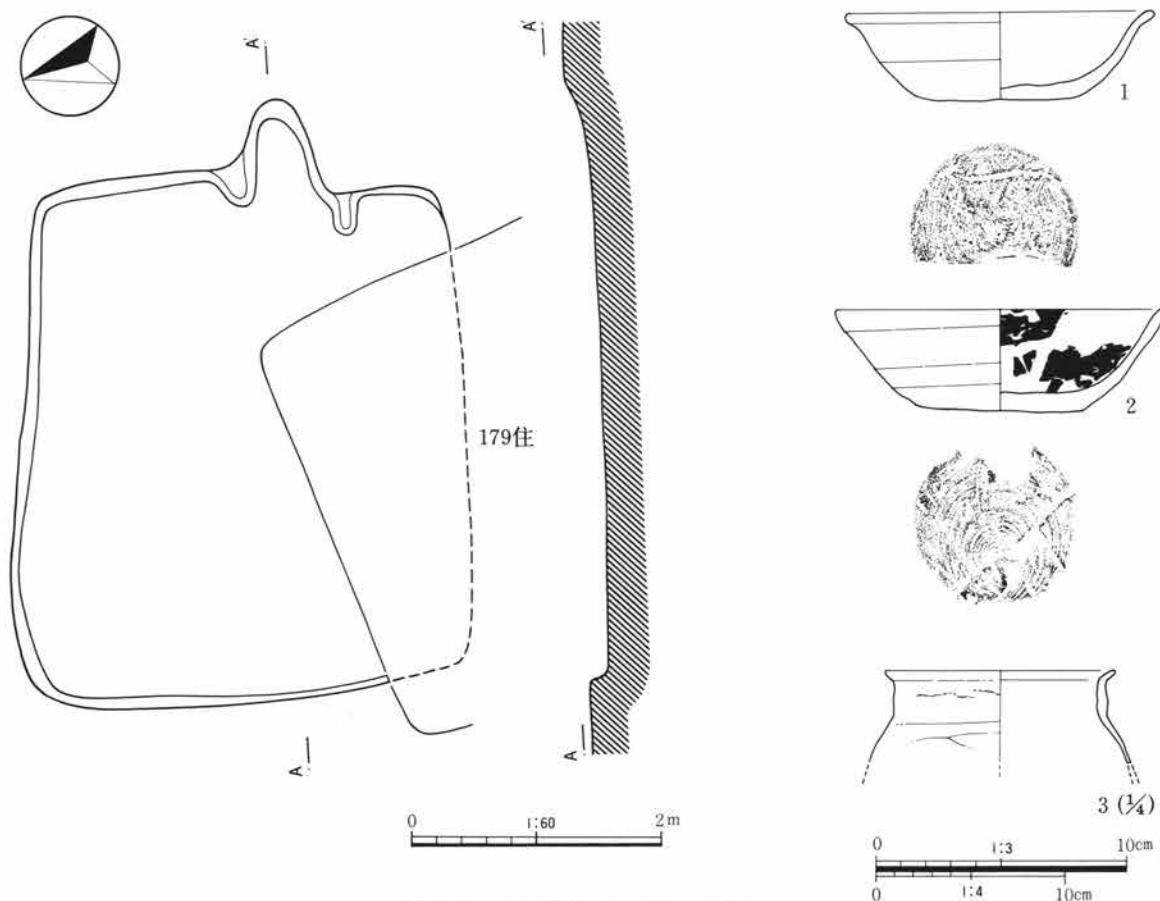
III区B-22・23、C-22・23グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は4.22×(3.55)mを測る。主軸方向はS-84°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は15～8cmを測る。床面は地山のローム土を基盤としそのまま利用している。ほぼ平坦面を呈する。カマドは東壁のやや南寄りに構築され、そで部と combustion部が残存する。規模は長さ110cm、幅110cmを測る。軸方向はS-81°-Eを指す。そで部は壁内に35cm程張



第203図 179・189号住居跡



第204図 179号住居跡出土遺物



第205図 181号住居跡及び出土遺物

り出す。そで部の左側と右側では張り出しに段差がある。これはおそらく住居掘り形の段階でカマドの両側の壁を故意に段差をつけて掘り込んだためと思われる。貯蔵穴、ピット、周溝等の住居内施設は全く検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯等の破片が約100点程出土している。出土位置は覆土中が主である。時期はほとんどが平安時代に属するものである。

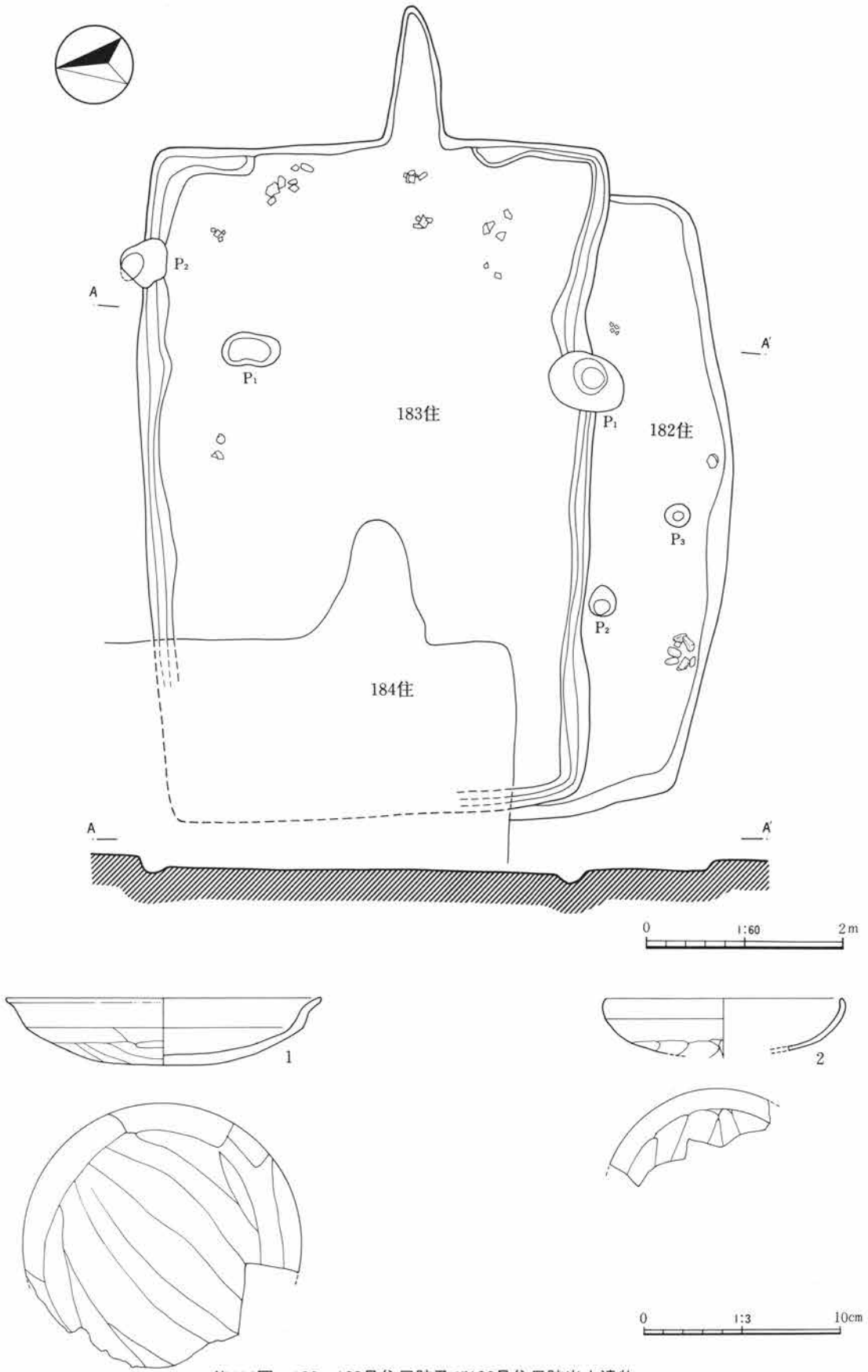
重複遺構は179号住で、新旧関係は不明であった。

182号住居跡 (第206図、PL. 9)

Ⅲ区C-20・21、D-20・21グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、北半の大部分が183号住居跡と重複するため全形、規模については不明である。わずかに残存する東壁—西壁間距離は6.08mを測る。主軸方向は南壁の走向よりS-(78°)-Eを指すと推定される。壁はほぼ直立し確認壁高18~7cmを測る。床面は地山のローム土を利用してそのまま使用している。床面レベルは重複する183号住とほとんど差がない。カマドは検出されなかった。ピットは3基が検出された。規模はP₁径75×55cm深さ31cm、P₂径30×25cm深さ30.5cm、P₃径25cm深さ19cmを測る。なおP₁とP₂は位置や規模から支柱穴になる可能性が考えられる。

遺物は杯、甕の土器片が約30点程出土したが、本住居跡に確実に伴うものは少ない。時期は奈良時代のものである。又南壁際の西寄りの位置で河原礫7点が集中して出土した。

重複遺構は183号住居跡で新旧関係は不明である。



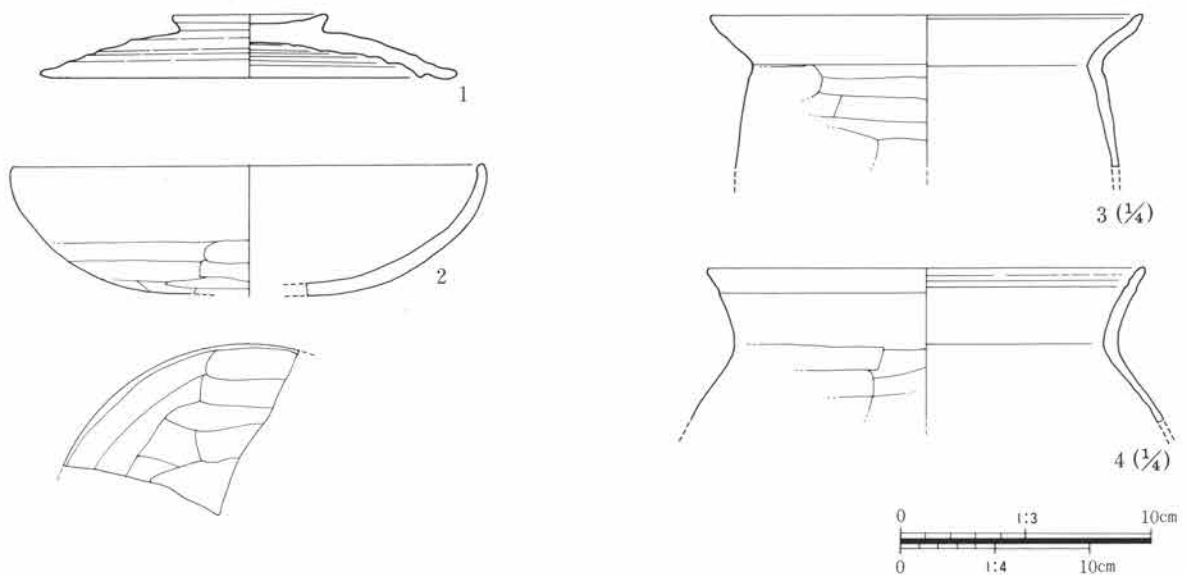
第206図 182・183号住居跡及び182号住居跡出土遺物

183号住居跡（第206図、PL. 9）

III区D-20・21、E-20・21グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は6.80×4.68mを測り、面積は推定値で27.3m²を測る。主軸方向はS-80°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は18~1cmを測る。床面は地山のローム土で、北側に小さな凹凸が多い。カマドは東壁のほぼ中央部分に構築され、燃焼部と煙道部が残存する。規模は長さ143cm、幅75cmを測る。軸方向はS-83°-Eを指す。燃焼部は壁外に張り出しており、底面は床面より若干レベルが高い。又煙道は燃焼部から弱い段を形成して1段高いレベルでほぼ水平に延びる。ピットは2基が検出された。P₁は北壁際、P₂は北壁を切る位置で検出された。規模はP₁径60×33cm深さ12cm、P₂径45×20cm深さ20cmを測る。P₁は位置的に柱穴の可能性はあるが、P₂については本住居跡に伴うかどうかは不明である。周溝はカマド両脇部を除いて全周すると思われる。規模は幅35~14cm深さ8~3cmを測る。

遺物は杯、甕、蓋、砥石等の破片約520点程が出土した。出土位置はカマド周辺の覆土下層に比較的集中する。時期は大部分が奈良時代（古段階と思われる。）に属する。

重複遺構は182号住居跡、184号住居跡で、判明した新旧関係は183号住→184号住である。なお182号住との関係は床面レベルがほぼ同じである事、主軸方向をほぼ同じくして東西の両壁がさほどずれていない事、又出土遺物の時期が同じと考えられる事等から、これは本住居跡の拡張あるいは張り出し施設の可能性も考えられる。しかしここでは土層によって同一である事が確認できなかったため、別遺構として扱った。



第207図 183号住居跡出土遺物

184号住居跡（第208図、PL. 9）

III区C-21・22、D-21・22グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈する。規模は3.90×5.44mで、面積は21.2m²を測る。主軸方向はS-83°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は34~1cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用している。凹凸は少なく比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築され残存状態は比較的良好である。規模は長さ137cm、幅130cmを測る。軸方向はS-78°-Eを指す。燃焼部は壁外に張り出す形状で、そでは両壁をそのまま利用したと思われる。燃焼部はしだいにすぼまり煙道部に続き、煙道はほぼ水平に延びる。ピットは6基検出された。規模はP₁径45cm深さ18cm、P₂径23cm深さ17cm、P₃径35×30

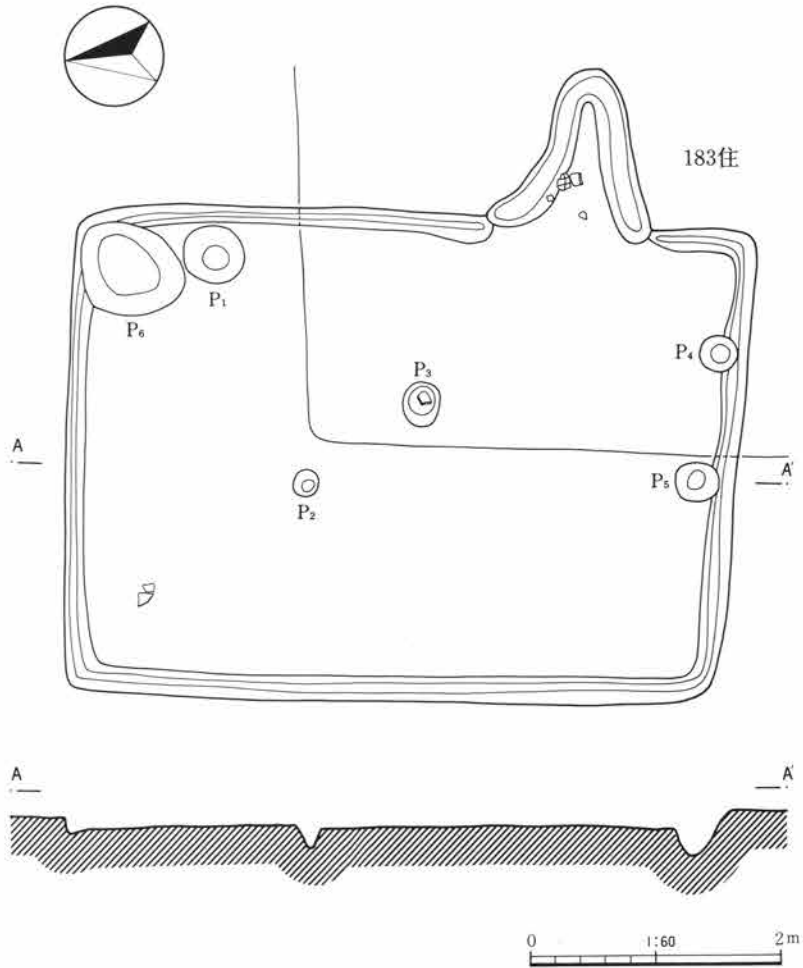
cm深さ9.5cm、P₄径30cm深さ8cm、P₅径35×30cm深さ23cm、P₆径88×73cm深さ18.5cmを測る。このうちP₆は規模が最大で、掘り形もしっかりしており、住居コーナー部に位置する事から貯蔵穴の可能性が考えられる。又P₄とP₅は南壁際に並んで約35cmの間隔をあけて掘り込まれており、出入口に関連する施設と考えられようか。周溝は全周しておりその規模は幅22~13cm、深さ14~1cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋等の土器片が約120点程出土している。出土位置はほとんどがカマド周辺か覆土下層である。小破片が多く時期不明のものが多く、全体に奈良時代と平安時代のものが混在する様相を示す。

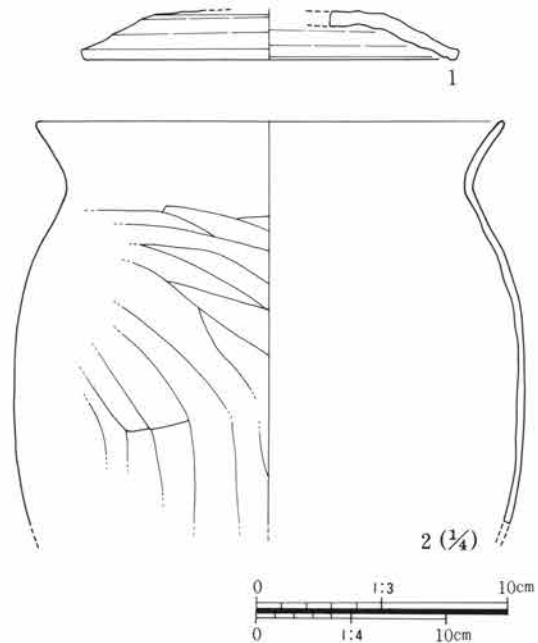
重複遺構は183号住居跡、191号住居跡で、判明した新旧関係は183号住→184号住であった。

185号住居跡 (第210図、PL. 9)

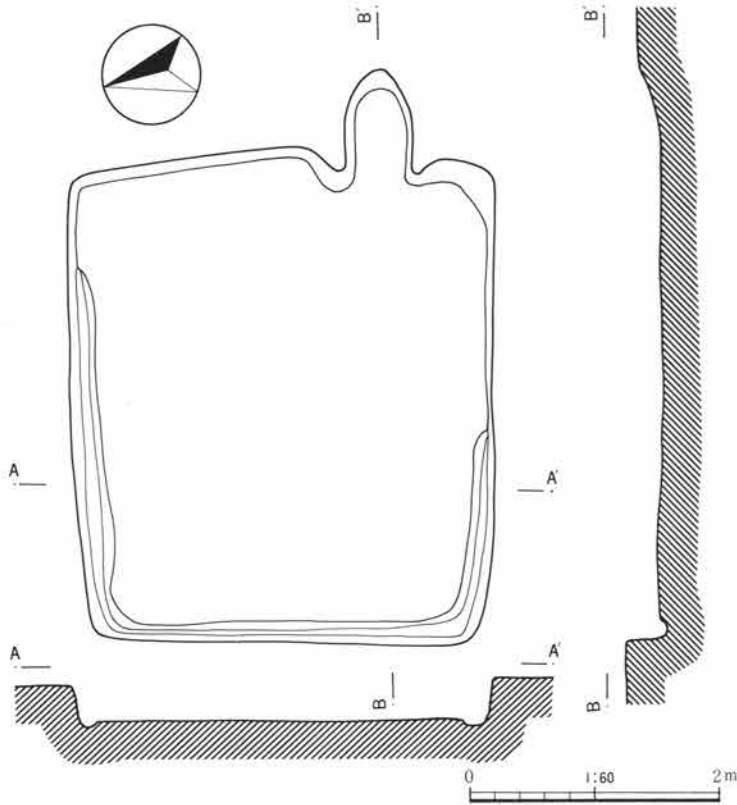
Ⅲ区C-23・24、D-23・24グリッドに位置する。平面は縦長長方形で、東壁がやや胴張り気味の形状を呈する。規模は3.90×3.40mで、面積は13.0m²を測る。主軸方向はS-86°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は38~4cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土である。カマドは東壁の南寄りに構築され、残存状態は比較的良好である。規模は長さ98cm、幅90cmを測る。軸方向はS-80°-Eを指す。そで部は灰色粘土を張って壁内に40cm程張り出させ、そこに15cm大の河原礫を直立させて補強材としている。燃烧部本体は壁外に築かれる。燃烧部の幅は約40cmを測る。煙道は不明



第208図 184号住居跡



第209図 184号住居跡出土遺物

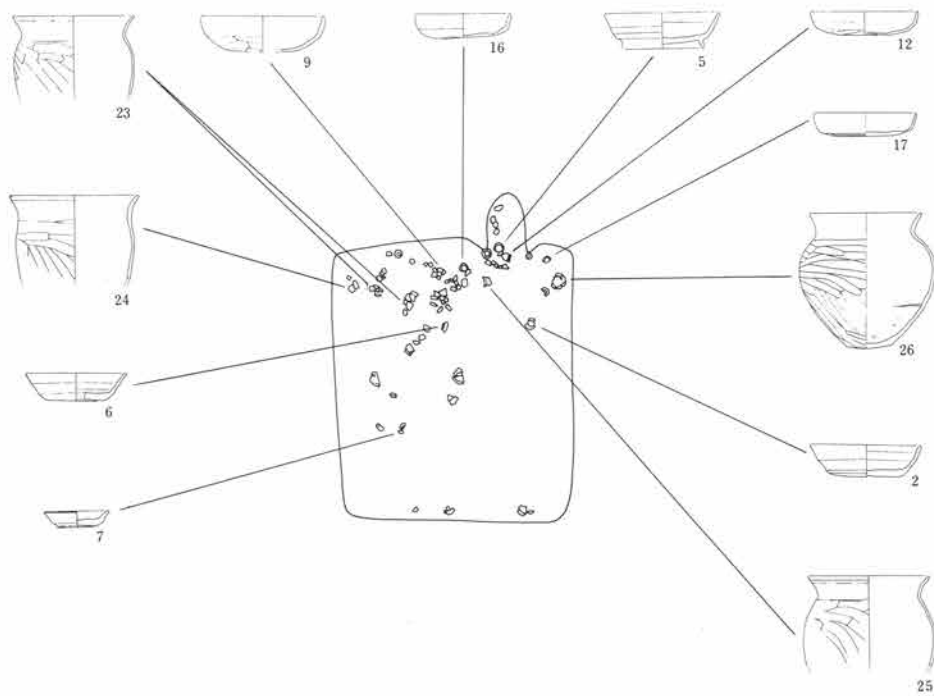


第210図 185号住居跡

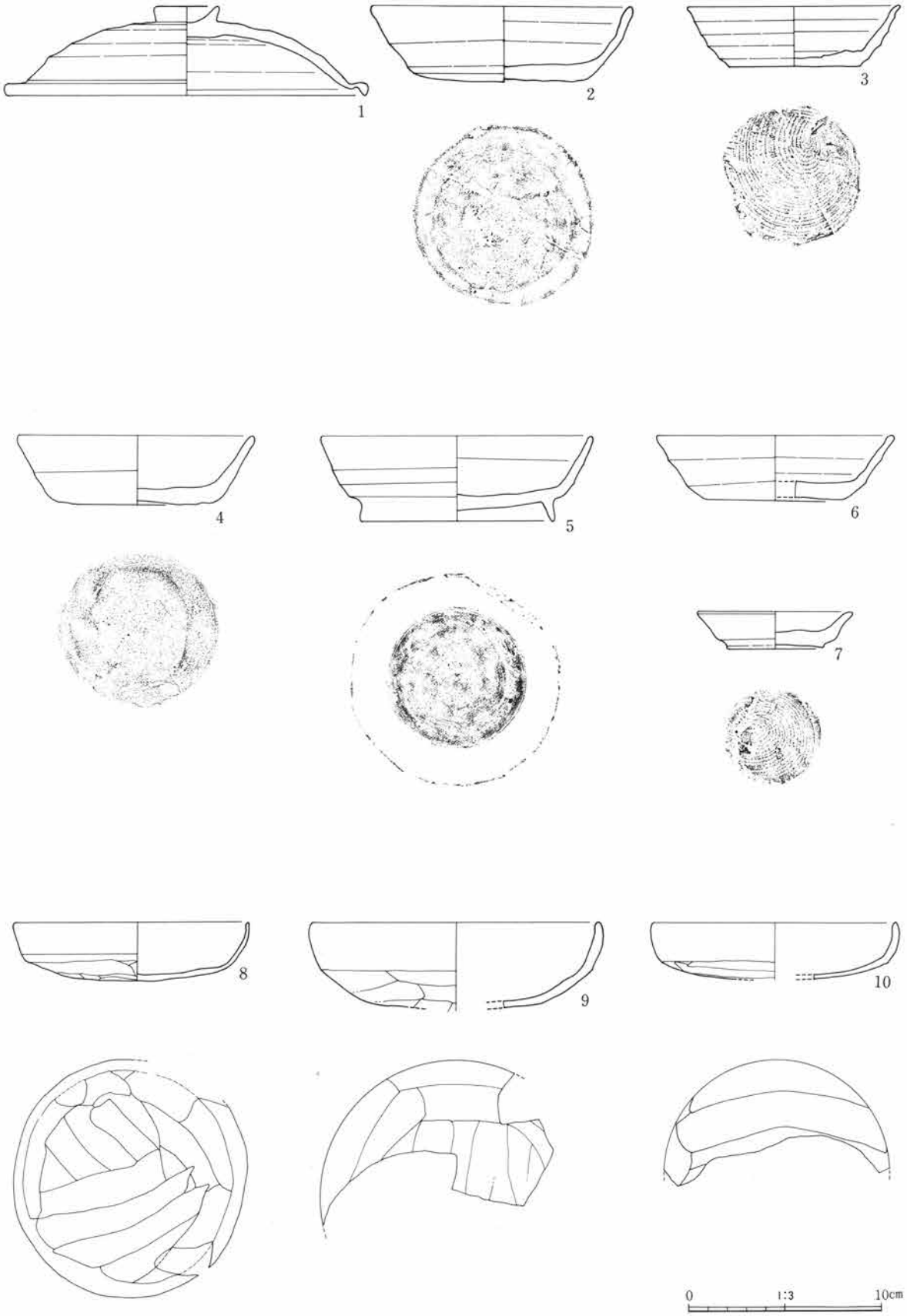
瞭であるが、おそらく燃焼部奥壁からそのまま急角度で立ち上がったと思われる。貯蔵穴、ピットは検出されなかった。周溝は北壁の東端約60cm程の位置から西壁及び南壁のほぼ中央付近まで廻っており、カマドのある東半では検出されなかった。規模は幅27~13cm深さ5~3cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同甕、蓋、高台付杯、横瓶等の土器片約700点近くが出土している。その他に土錘2点と青銅製の巡方が出土している。出土位置はカマド周辺部を中心にして床面及び覆土下層が多い。時期は平安時代初頭頃に限定してよいと思われる。

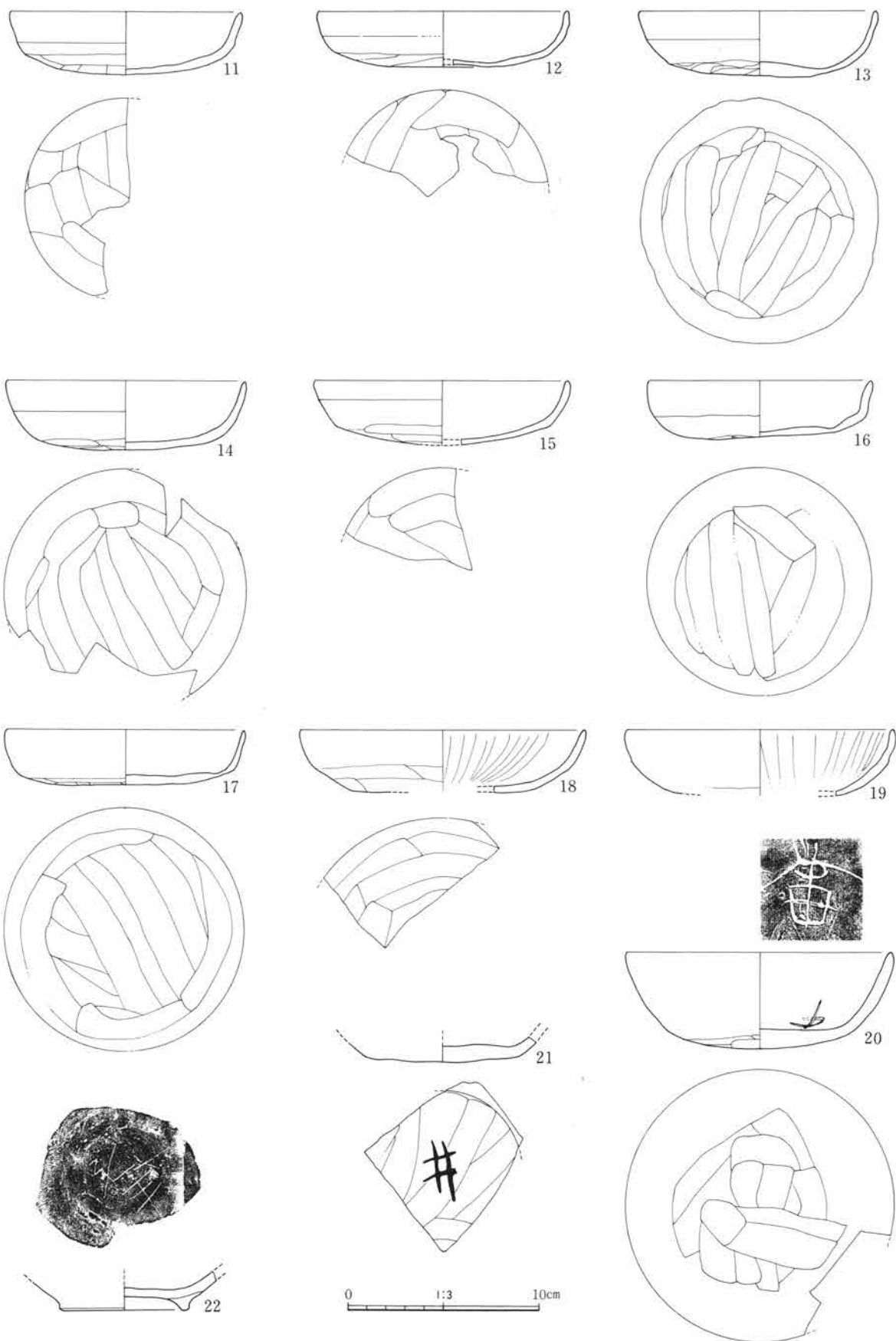
重複遺構はない。



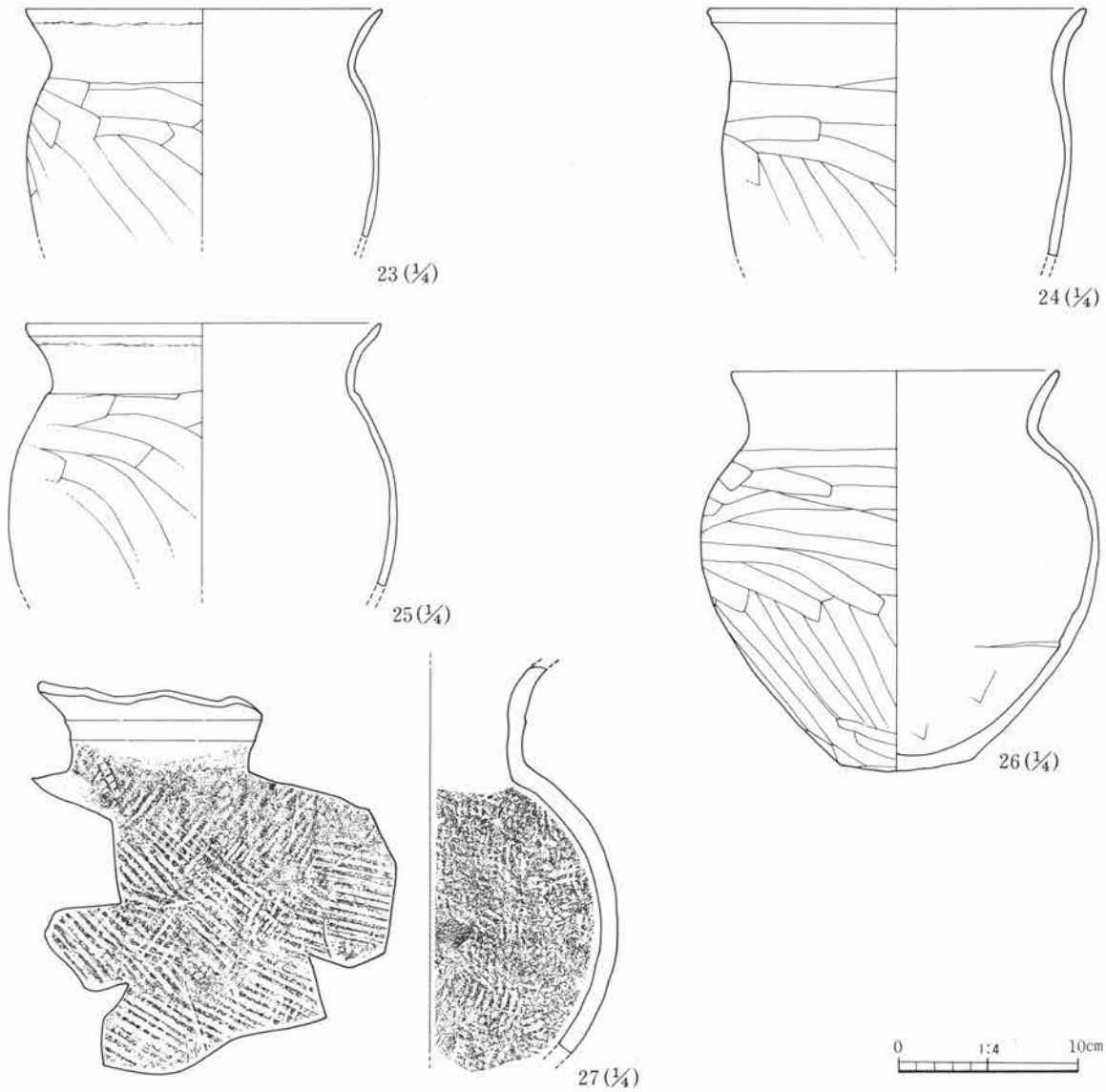
第211図 185号住居跡遺物分布図



第212図 185号住居跡出土遺物(1)



第213図 185号住居跡出土遺物(2)



第214図 185号住居跡出土遺物(3)

186号住居跡 (第215図)

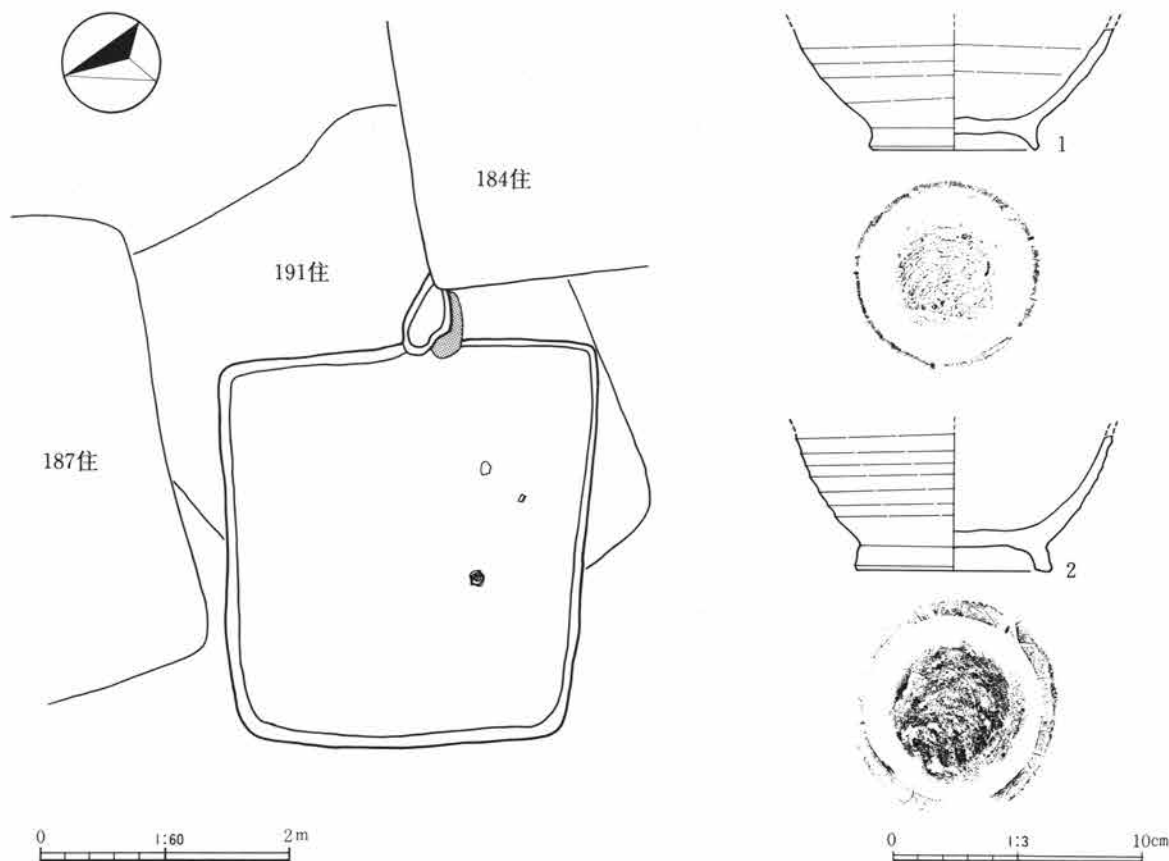
III区C-22・23、D-22・23グリッドに位置する。平面は正方形を呈する。規模は3.18×3.04m、面積は9.1㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高は9~3cmを測る。床面はやや凹凸がある。カマドは東壁に構築される。規模は長さ80cm前後、幅48cmを測り、軸方向はS-59°-Eを指す。燃烧部は壁外に張り出す。貯蔵穴、ピット、周溝等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、高台付椀等の土器片約100点が出土しているが、重複する191号住居跡に伴う遺物との分離は困難である。その中で確実に本住居跡に伴うものは図示した高台付椀を含めて平安時代のものが主体である。

重複遺構は184号住居跡、191号住居跡で、判明した新旧関係は191号住→186号住であった。

187号住居跡 (第216図)

III区D-23、E-23グリッドに位置する。平面は歪んだ長方形を呈する。北壁が他に比べてやや長い。規模は4.07×3.72m、面積は13.2㎡を測る。主軸方向はS-77°-Eを指す。壁はほぼ直立し、確認壁高は20~3cm



第215図 186号住居跡及び出土遺物

を測る。床面はほぼ平坦面を呈する。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、そで部と燃焼部が残る。規模は長さ65cm幅87cmを測る。軸方向はS-88°-Eを指す。そで部は約45cm程壁内に張り出す。ピットは2基が検出された。2基とも西壁際のほぼ中央に並列している。規模はP₁径55×50cm深さ13cm、P₂径55cm深さ18cmを測る。

遺物は杯、甕、小皿等の土器片約20点が出土した。時期は奈良～平安時代のものが混在している。

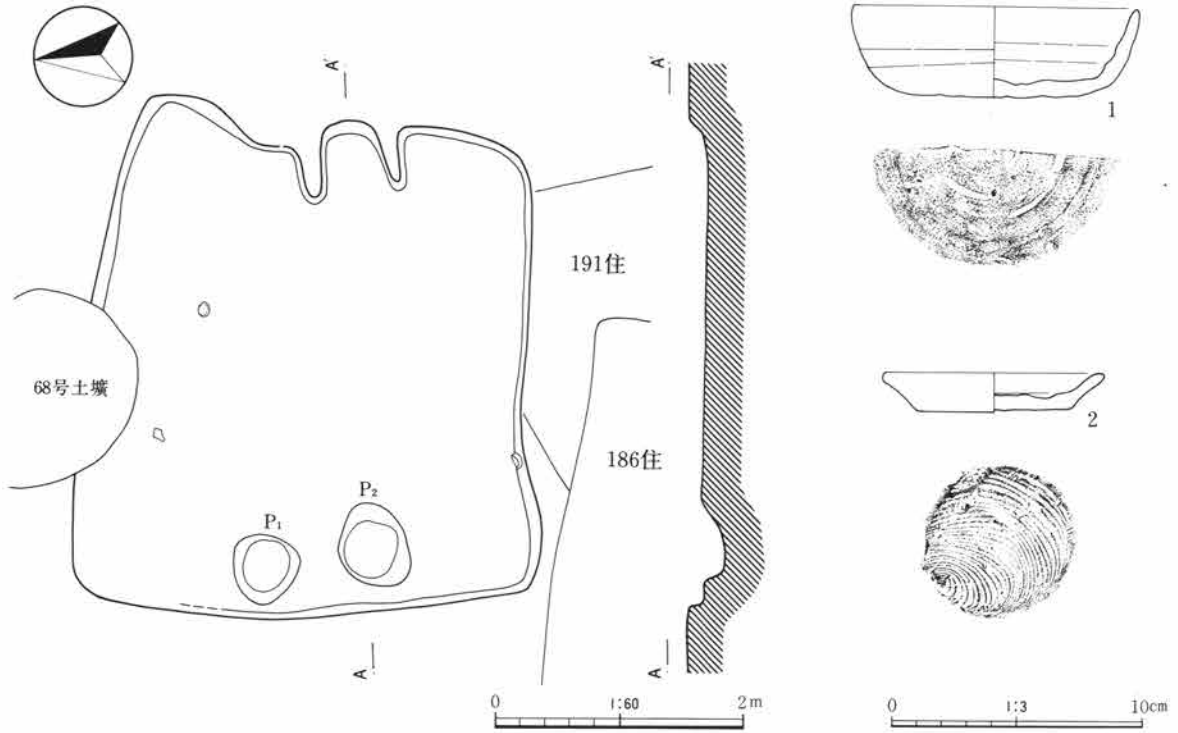
重複遺構は191号住居跡、68号土塋で、判明した新旧関係は187号住→68号塋であった。

188号住居跡（第217図、PL. 9）

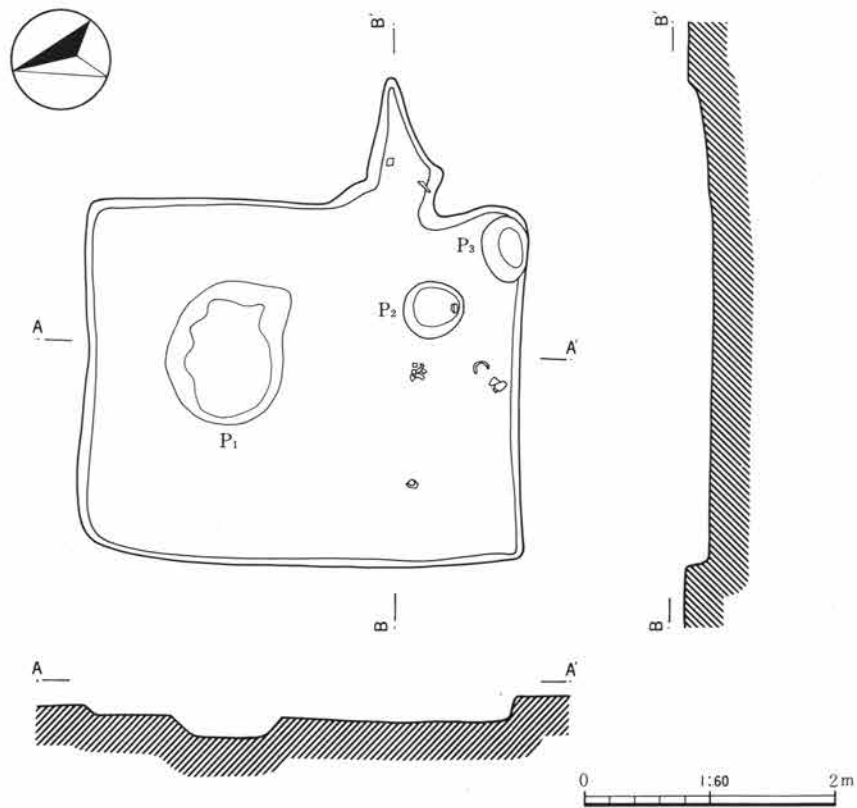
III区E-24・25グリッドに位置する。平面は横長方形を呈し、規模は2.88×3.56m、面積は10.3m²を測る。主軸方向はS-82°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は22～8cmを測る。床面は地山のローム土で、比較的平坦である。カマドは東壁の南寄に構築される。規模は長さ118cm、幅87cmを測り、軸方向はN-90°-Eを指す。右そで部が若干内側に張り出す形状である。煙道は燃焼部から急激にすぼまり、緩い傾斜で立ち上がる。主体は壁外に築かれるようである。ピットは3基が検出された。規模はP₁径118×93cm深さ18cm、P₂径45cm深さ20cm、P₃径52×38cm深さ40cmを測る。P₁はその規模や形態から床下土塋か別個の遺構になると思われる。

遺物は杯、甕、蓋等の土器片約30点が床面及び覆土下層から出土している。時期は奈良時代と思われる。

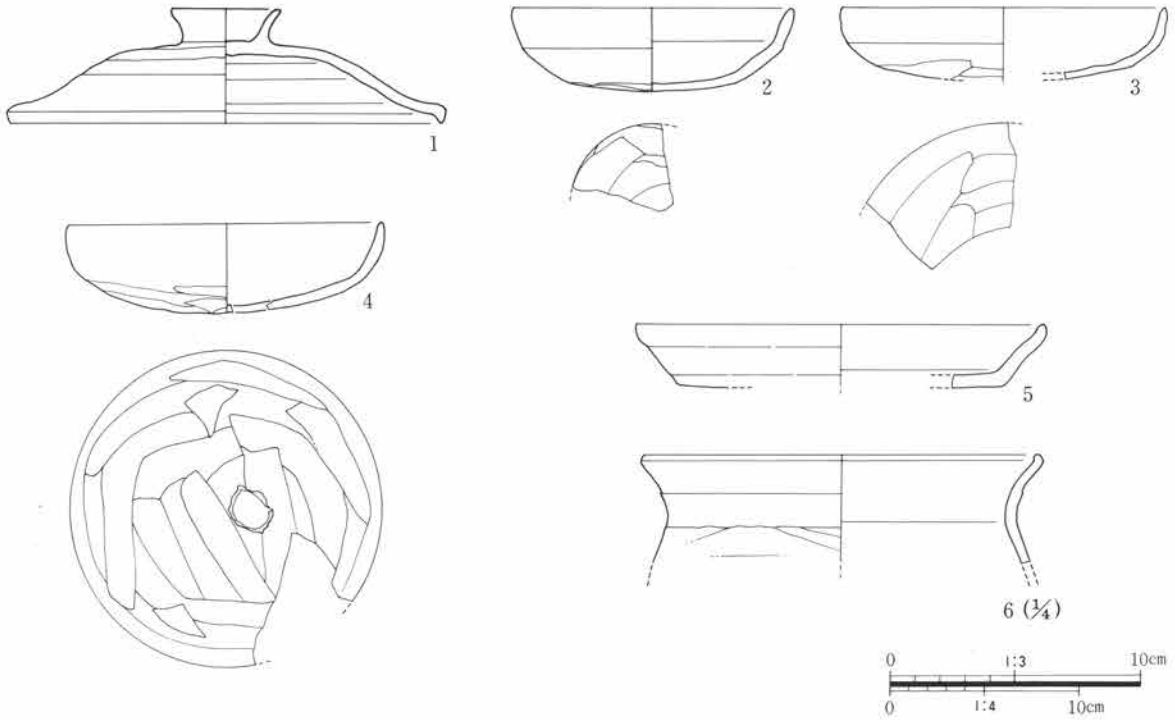
重複遺構はない。



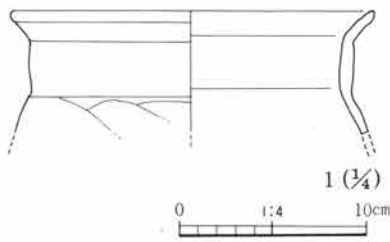
第216図 187号住居跡及び出土遺物



第217図 188号住居跡



第218図 188号住居跡出土遺物



第219図 189号住居跡出土遺物

189号住居跡（第203図）

Ⅲ区B-22グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、南西半が調査区外のため全形、規模は知りえない。主軸方向はN-3°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は26~14cmを測る。床面は地山のロームで凹凸が多い。カマドは北壁中央に構築される。規模は長さ77cm、幅93cmを測る。燃焼部のみ残存する。なお燃焼部右側の天井部と思われる付近から30cm大の河原礫が出土したが、これがカマドとどのような関係にあったのかは不明である。ピットは1基が検出さ

れた。規模は径55×40cm深さ17cmを測る。

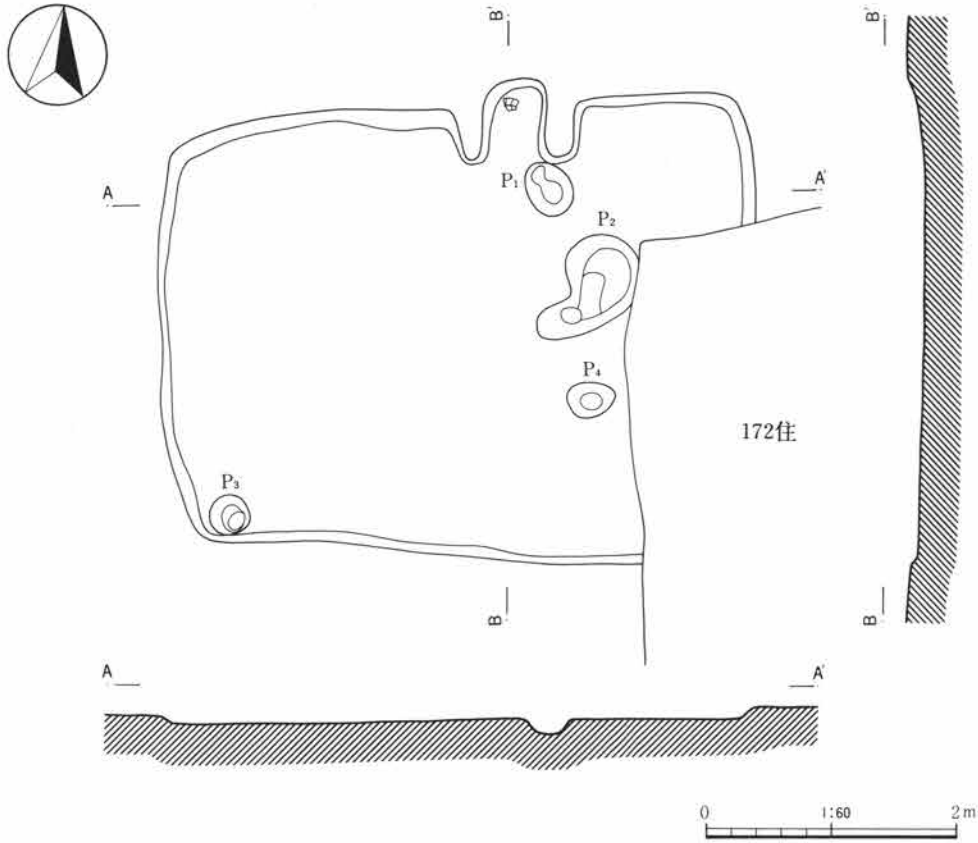
遺物は杯、甕、須恵器杯、同甕等の破片30点程及び土錘1点が覆土より出土している。時期は平安時代のもものが主である。

重複遺構との新旧関係は179号住→189号住である。

190号住居跡（第220図、PL.9）

Ⅲ区E-19・20、F-19・20グリッドに位置する。平面は横長長方形と思われる。規模は3.65×4.75mで面積は16.4㎡を測る。主軸方向はN-2°-Wを指す。壁は残存状態不良であり、確認壁高は10~4cmを測る。床面はロームブロックを含む黒色土で凹凸が激しい。カマドは北壁の中央よりやや東寄りに構築されている。規模は長さ68cm、幅108cmを測り、軸方向はN-13°-Eを指す。そで部は灰色粘土を貼り付けて壁内に48cm程張り出す。煙道部は検出されなかった。ピットは4基が検出された。規模はP₁径45×35cm深さ11cm、P₂径100×65cm深さ9cm、P₃径30cm深さ37cm、P₄径40×25cm深さ12cmを測る。

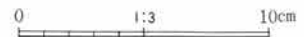
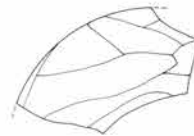
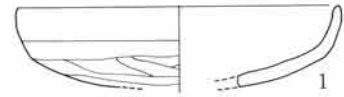
遺物は約40点程の土器片が出土している。杯と甕の破片が大部分である。時期は奈良時代に属するものが



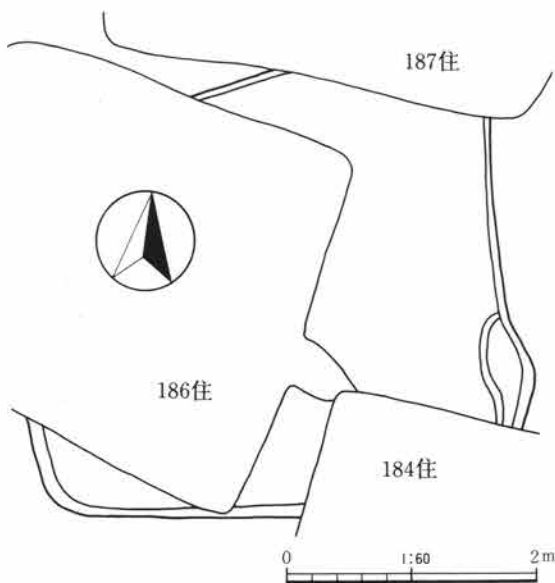
第220図 190号住居跡

大部分を占める。

重複遺構は172号住居跡であるが、新旧関係については不明であった。



第221図 190号住居跡出土遺物



第222図 191号住居跡

191号住居跡（第222図）

III区C-22・23、D-22・23グリッドに位置する。平面は方形と思われるが多数の遺構と重複しており全形、規模は明らかにしえない。壁は残存状態不良で確認壁高10～3cmを測る。床面は地山のローム土である。周溝は東壁南半で検出され、幅40～20cm深さ10cmを測る。

遺物は本住居跡に伴うものは出土していない。

重複遺構との新旧関係は191号住→186号住である。

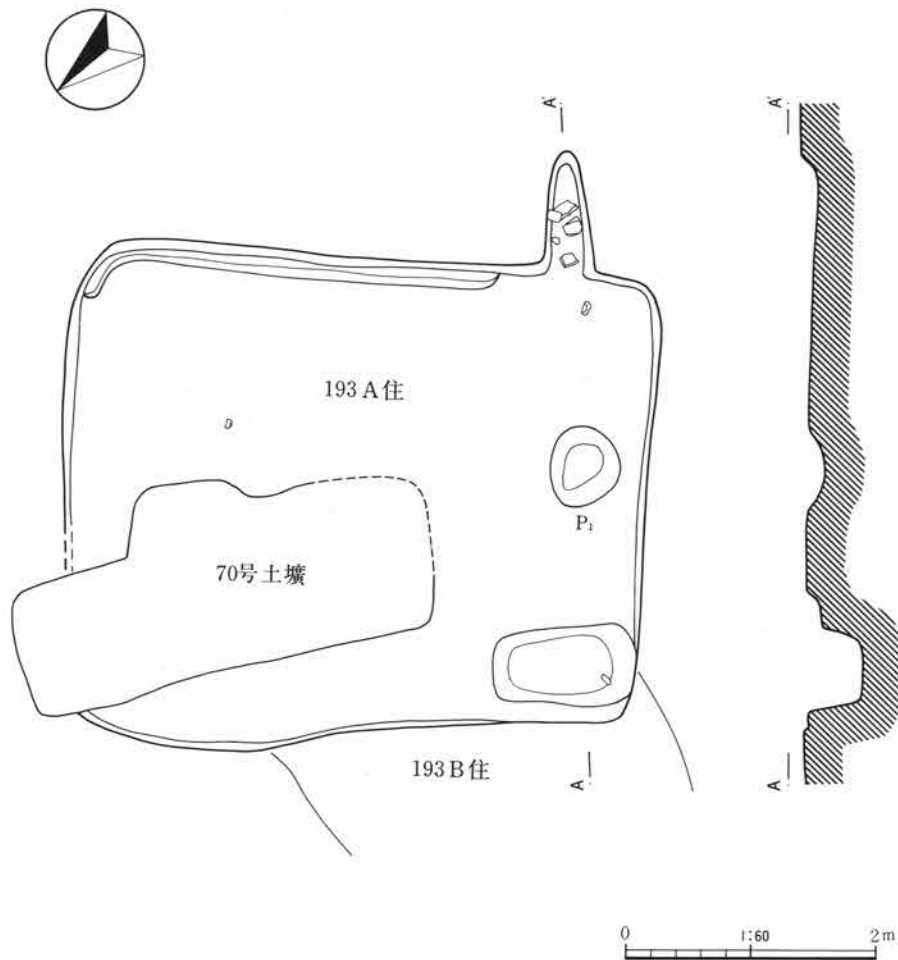
192号住居跡 (欠番)

193A号住居跡 (第223図、PL. 9)

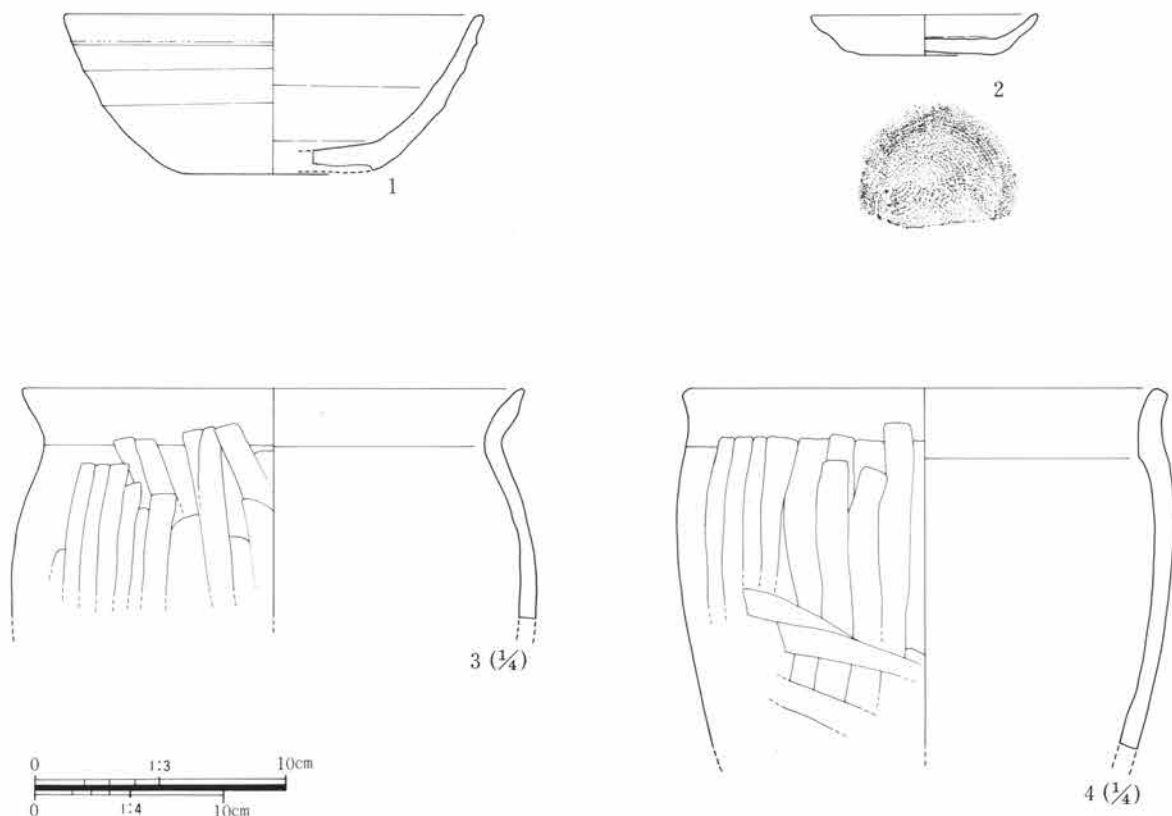
IV区D-1・2、E-1・2グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は4.00×4.73m、面積は17.8㎡を測る。主軸方向はS-45°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高は11~1cmを測る。床面は地山のローム土を基盤としそのまま利用している。カマドは南東壁の南西隅に構築され、規模は長さ100cm、幅42cmを測る。軸方向はS-52°-Eを指す。燃烧部と煙道部の境は不明瞭である。主体は壁外にあると思われる。貯蔵穴は西側コーナー部で検出され平面は長方形を呈する。規模は115×59cm、深さ46cmを測る。ピットは南西壁際のほぼ中央で検出された。楕円形を呈し、規模は径60×55cm深さ10cmを測る。周溝は南東壁に沿ってカマド左側において検出された。規模は幅20~15cm深さ4~1cmを測る。

遺物は杯、甕、台付甕、高台付椀、小皿、羽釜等の土器片約300点程が出土している。カマド及び覆土中からの出土が多い。平安時代(10世紀以降)のものが大部分である。

重複遺構は193B号住居跡と70号土壙で、193B号住との新旧関係は不明であり、70号壙との関係は193A号住→70号壙である。



第223図 193A号住居跡



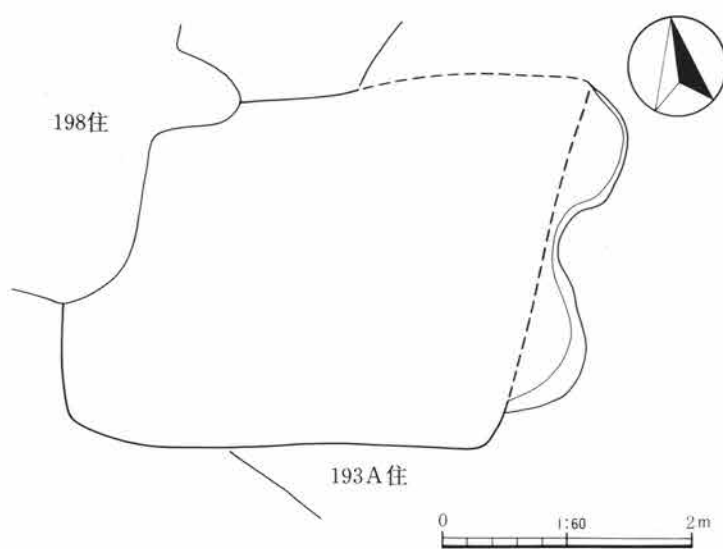
第224図 193A号住居跡出土遺物

193B号住居跡（第225図、PL.9）
IV区D-1・2、E-1・2グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、他遺構との重複が激しく全形、規模については明らかでない。壁は残存状態が悪く、壁高もほとんど計測できない。床面はローム粒を含む暗褐色土である。カマドは検出されなかったが、東側で焼土が若干見られるため東壁に構築された可能性が考えられる。

遺物は本住居跡に伴うと判断されるものは出土していない。

重複遺構は193A号住居跡、198号

住居跡、70号土塋、10号溝で、新旧関係は193B号住→198号住・70号塋で、193A号住、10号溝との関係は不明。



第225図 193B号住居跡

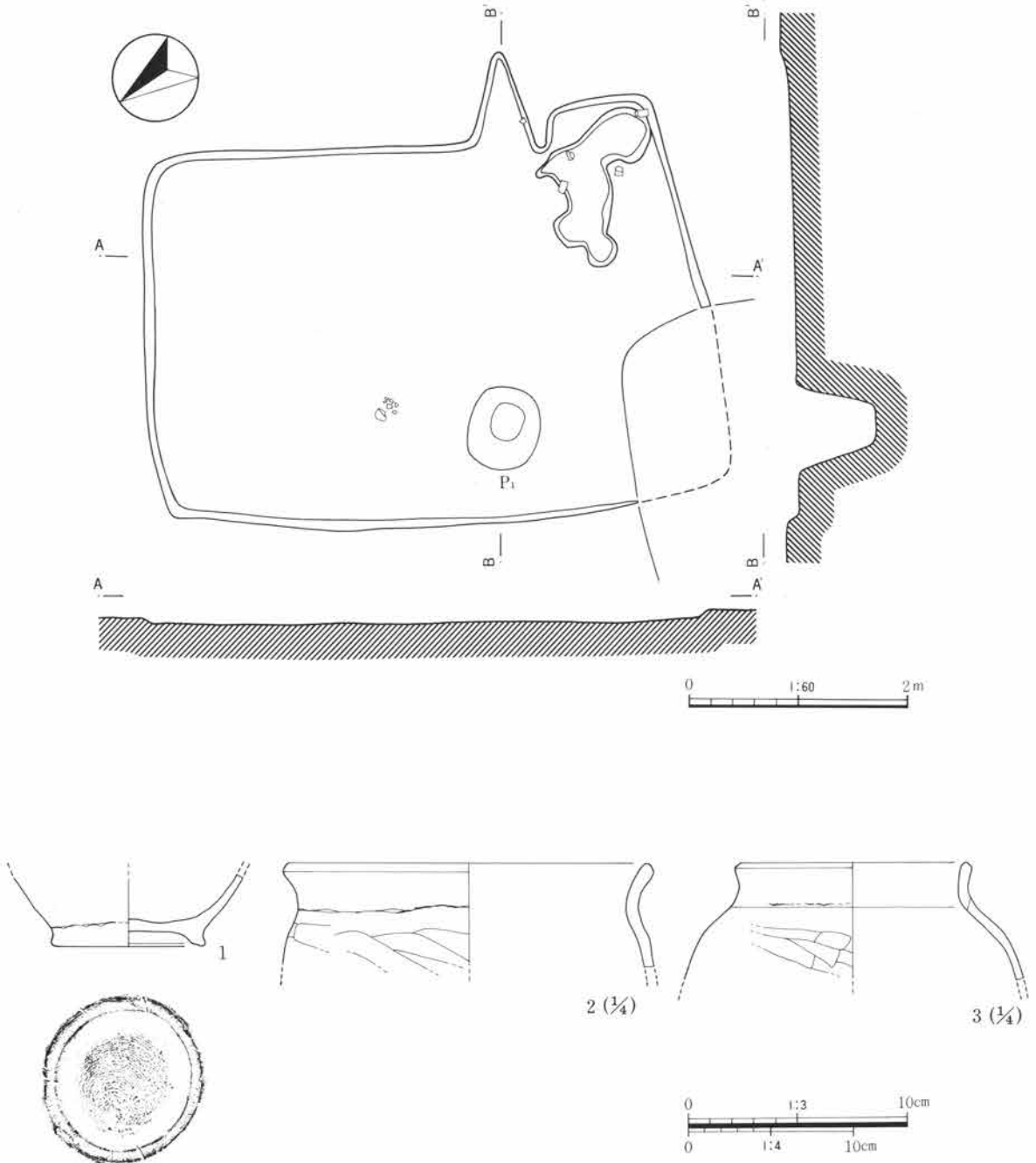
194号住居跡（第226図、PL.9）

III区C-25、D-25グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.75×5.17m、面積は17.6㎡を測る。主軸方向はS-59°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は18～5cmを測る。床面は地山のローム

漸移土ではほぼ平坦。カマドは南東壁に構築されており、規模は長さ90cm、幅76cmを測る。軸方向はS-58°-Eを指す。そでは壁内に40cm程張り出す。煙道部は燃焼部底面からそのまま続きほぼ水平に延びて末端部分で立ち上がりを見せる。ピットはカマドの反対側、北西壁から約40cm程離れた位置で検出された。楕円形を呈し、規模は径75×65cm深さ74cmを測る。性格は不明。又カマド右脇の部分で不定形で皿状を呈する掘り込みが検出されたが、これが本住居跡に伴うものかどうかは判別できない。

遺物は杯、甕、高台付碗等の破片約20点程が覆土から出土している。時期はほとんどが平安時代のもと思われる。

重複遺構はないが、西側コーナー部を攪乱により失っている。



第226図 194号住居跡及び出土遺物

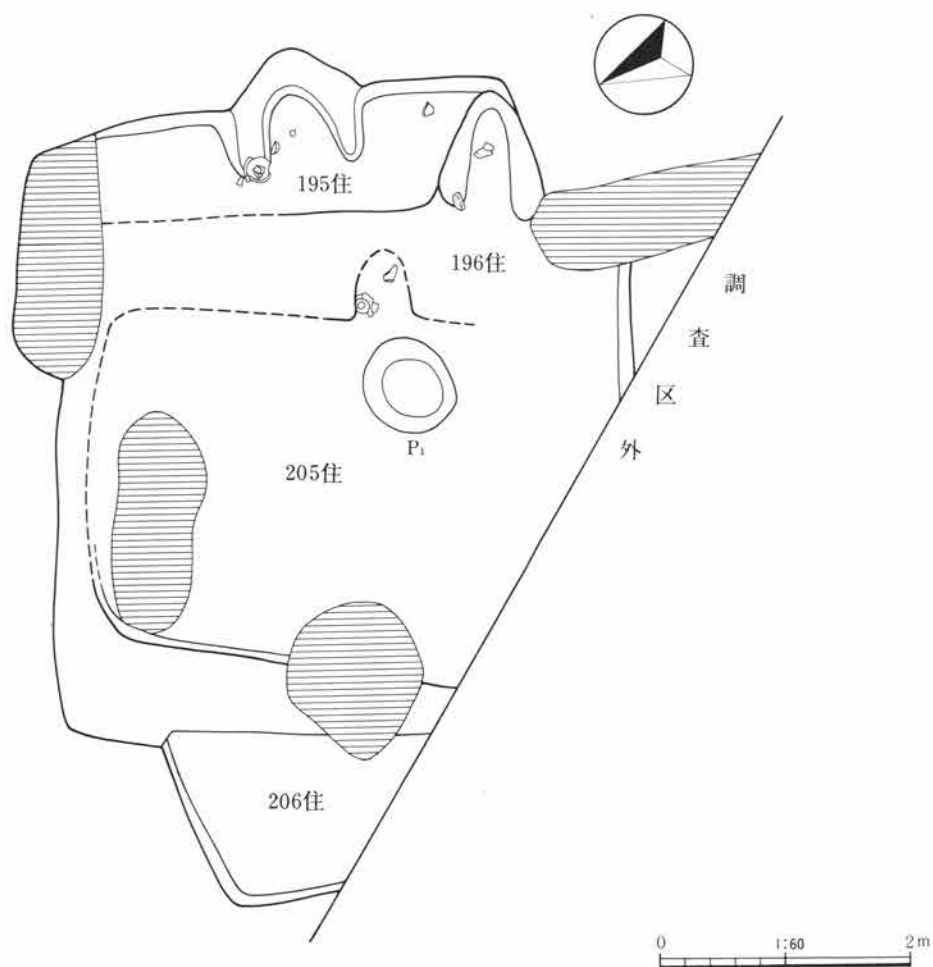
195号住居跡（第227図、PL.9）

III区B-25、C-25グリッドに位置する。平面は方形と思われる。西側の大部分は他遺構と重複するため形状、規模共に不明である。主軸方向はS-71°-Eを指す。壁は凹凸が多く荒れており確認壁高は33~16cmを測る。床面は残存部分に関しては地山のローム土である。カマドは東壁のほぼ中央に構築され、規模は長さ102cm、幅121cmを測る。軸方向はS-89°-Eを指す。そで部は壁内に60cm程張り出し、本体の大部分は壁内にあると思われる。煙道部は検出されなかったが、燃烧部奥壁のかなり高い位置から掘り込まれているようである。なお左そでの先端部で甕が潰れた状態で検出されたが、これは補強材として使用されたものと思われる。遺物は甕の破片のみ約30点が出土している。時期は奈良時代の古段階のものかと思われる。

重複遺構は196号住居跡、205号住居跡で、新旧関係はカマド残存状態より195号住→196号住→205号住である。

196号住居跡（第227図、PL.9）

IV区B-1、C-1グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈すると思われる。南西隅は調査区外のため不明。規模は(4.12) × (4.57) mを測る。主軸方向はS-68°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高は30



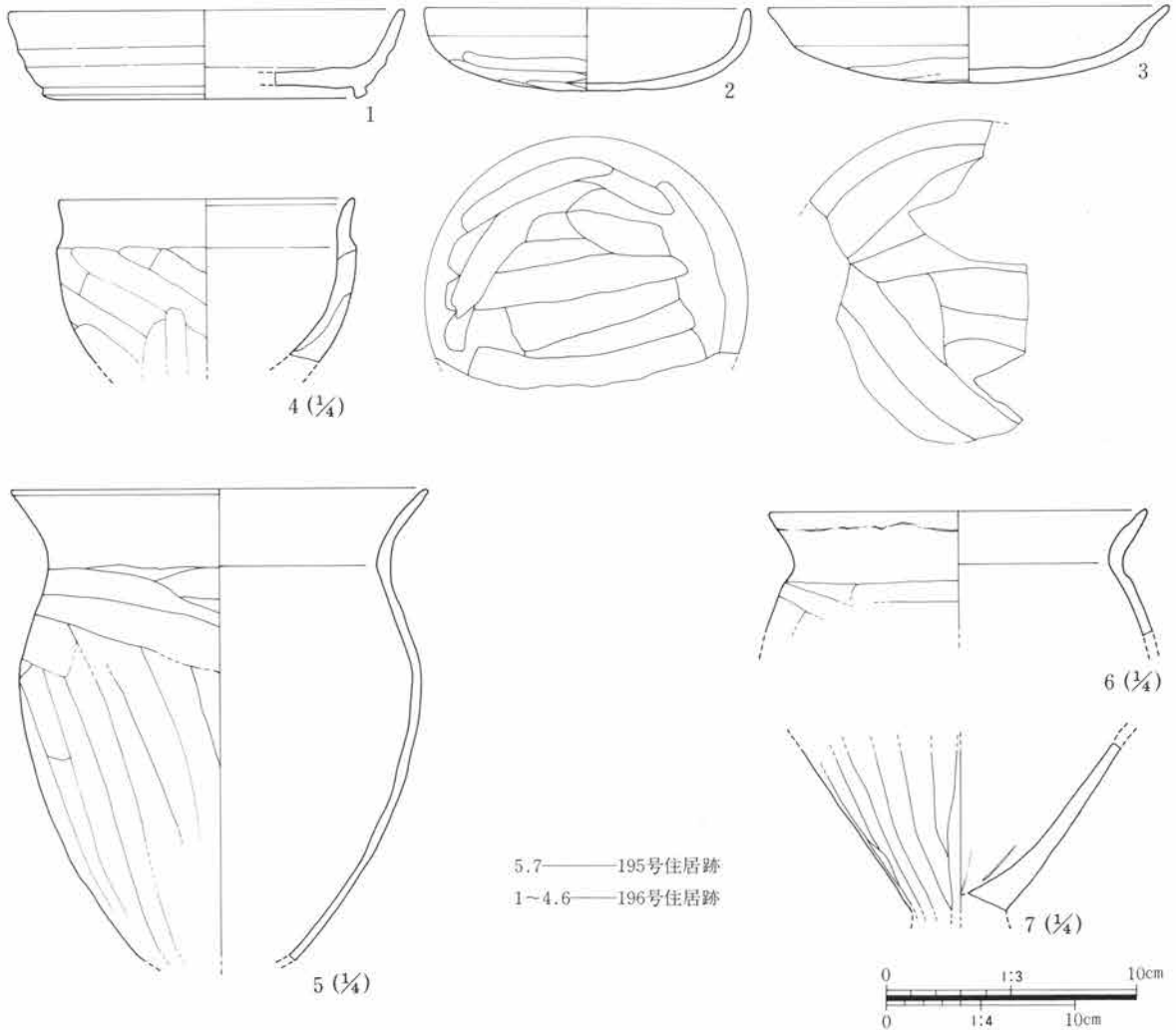
第227図 195・196・205・206号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

cm前後を測る。床面は地山のローム土をそのまま利用する。カマドは東壁南端に構築され、規模は長さ114cm、幅84cmを測る。軸方向はS-65°-Eを指す。そで部はおそらく両壁をそのまま利用したものと思われる。

遺物はカマド周辺から杯、甕、台付甕、高台付杯、小形甕等の破片及び土錘が出土している。時期はほとんどが奈良時代に属するものである。

重複遺構は195号住居跡、205号住居跡、206号住居跡で、新旧関係は195号住→196号住→205号住である。

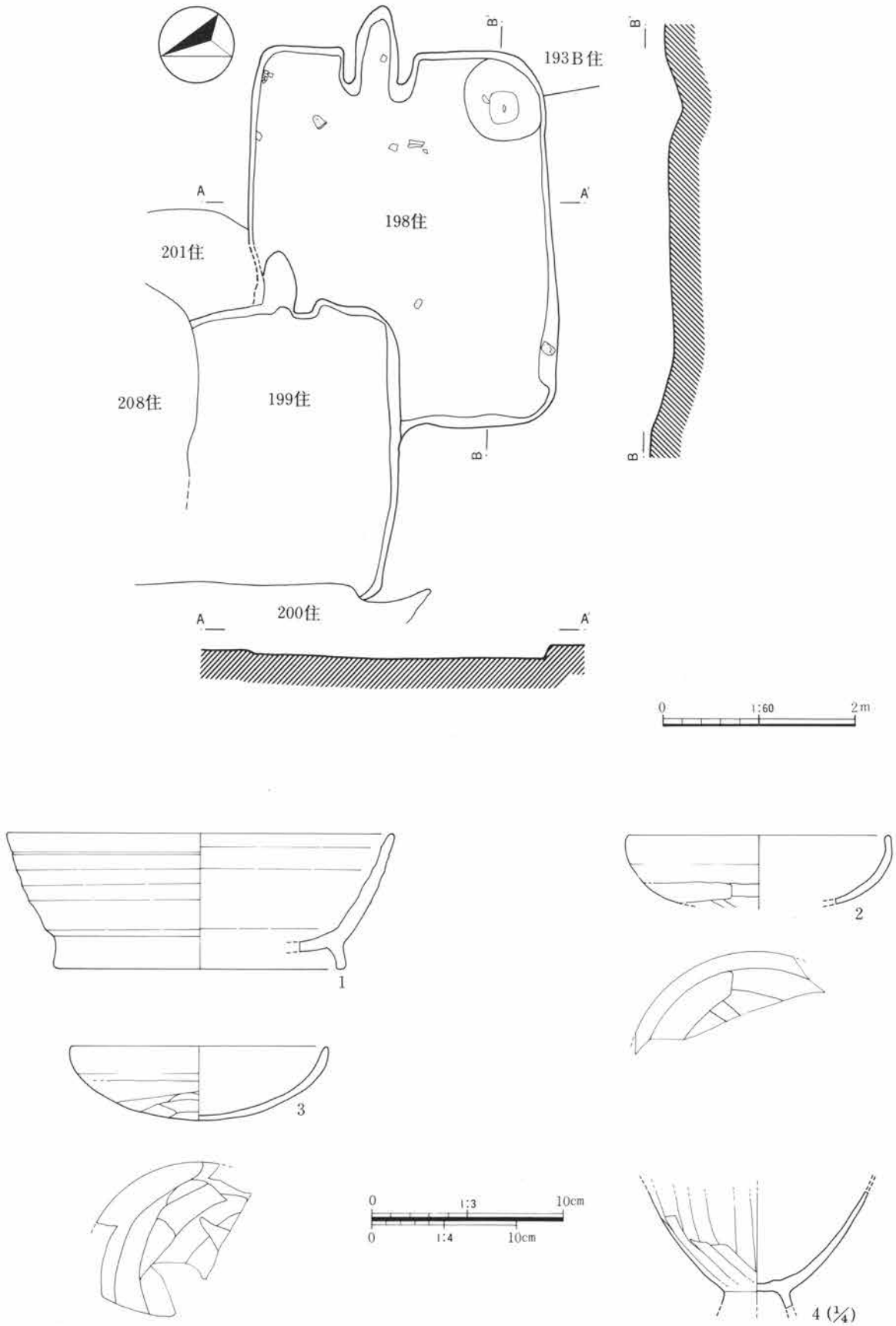


第228図 195・196号住居跡出土遺物

197号住居跡 (欠番)

198号住居跡 (第229図、PL. 9)

IV区C-2・3、D-2グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈する。規模は3.90×3.17m、面積は12.0㎡を測る。主軸方向はS-70°-Eを指す。壁は外傾し確認壁高は20～6cmを測る。床面は地山のローム土である。やや凹凸が多い。カマドは東壁のやや北寄りに構築され、規模は長さ97cm、幅80cmを測る。軸方向はS-65°-Eを指す。そで部は53cm程壁内に張り出す。燃焼部は床面よりやや窪み、煙道は燃焼部底面より直斜状に立ち上がる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出され、楕円形を呈し、その規模は径88×76cm深さ18cmを測る。



第229図 198・199号住居跡及び198号住居跡出土遺物

遺物は杯、甕、高台付杯、台付甕、羽釜等の土器片が約100点程覆土から出土している。重複遺構が多く本住居跡に伴うものの判別が困難である。時期は奈良時代後半～平安時代前半のものがみられる。

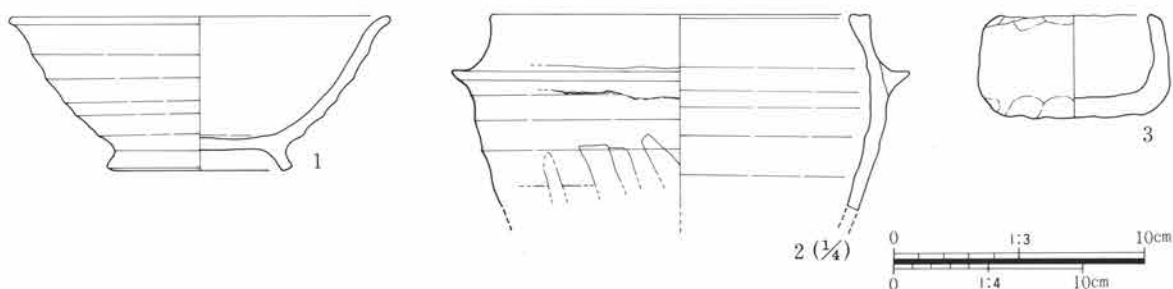
重複遺構は193B号住居跡、199号住居跡、201号住居跡で、新旧関係は193B号住→198号住→199号住である。201号住との関係は不明。

199号住居跡（第229図、PL. 9）

IV区C-3・4、D-3・4グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、他遺構との重複が激しく全形、規模は不明。主軸方向はS-73°-Eを指す。壁は15～7cmの高さを測る。床面は地山のローム土で凹凸が多い。カマドは東壁に構築される。規模は長さ67cm、幅44cmを測る。軸方向はS-80°-Eを指す。カマド本体は壁外に張り出す。

遺物は杯、甕、高台付碗、羽釜、埴輪等の破片が出土している。ほとんどがカマド周辺からの出土で、時期も平安時代に限定される。

重複遺構は198号住居跡、200号住居跡、201号住居跡、208号住居跡で、判明した新旧関係は198号住→199号住→200号住で、201号住と208号住については不明であった。



第230図 199号住居跡出土遺物

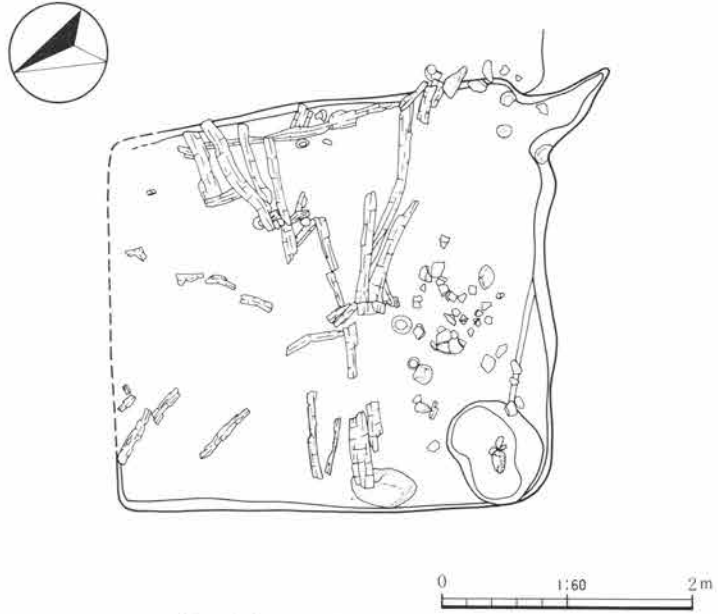
200号住居跡（第231図、PL. 9）

IV区C-3・4、D-3・4グリッドに位置する。平面はやや台形状の縦長長方形を呈し、規模は(3.55)×3.35mを測る。面積は推定値で(11.3)㎡を測る。主軸方向はS-24°-Wを指す。壁は残存状態不良であるが、南壁部分での確認壁高は24～5cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用し、比較的平坦である。カマドは南壁の東端に構築されており、規模は長さ80cm、幅62cm程を測る。軸方向はS-12°-Eを指す。本体は壁外に張り出しており、そでと思われる両壁には河原礫が検出された。煙道はしだいにすぼまり、ほぼ水平に延びる。貯蔵穴は南西コーナー部分で検出された。平面は楕円形を呈し、規模は径86×53cm、深さ44cmを測る。又貯蔵穴から南壁中央部にかけて若干段状を呈する部分がある。

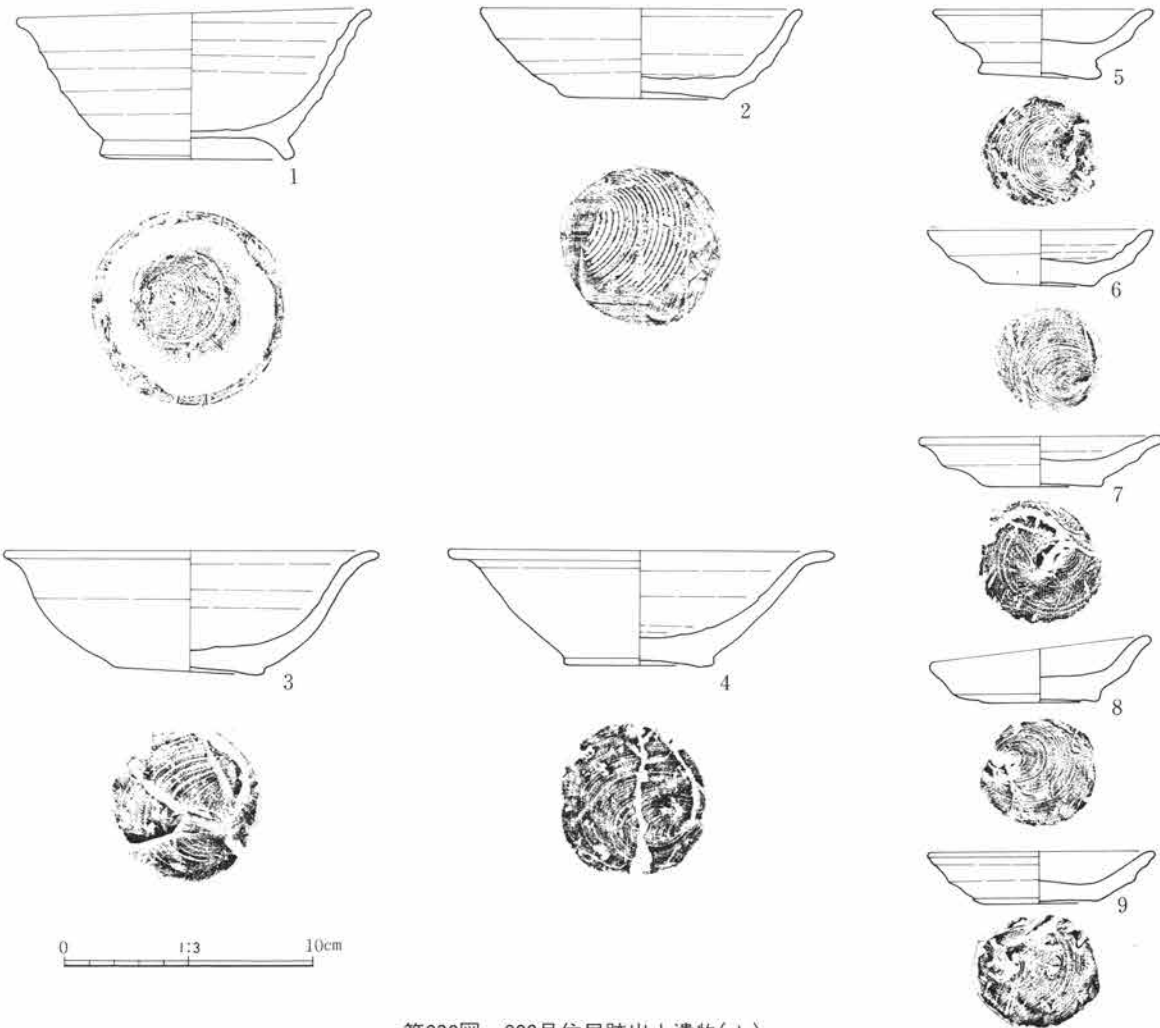
本住居跡からは崩落した上屋根材と思われる炭化材が床面から検出された。焼土はブロック状に炭化材とほぼ同レベルで検出された。この炭化材が上屋根構造をそのまま反映しているものと想定した場合、棟木と梁、桁は不明であったが、壁の走向に沿って榑木が並べられているのがわかる。最も残存状態の良い東側部分における榑木間隔は20～15cm程でかなり密であった事が知れる。

遺物はカマド周辺及び床面と床面よりやや浮いた状態の覆土中のものと出土位置で二分される。各器種は須恵器杯、高台付碗、小皿、羽釜、甕等で完形、破片を含め120点程が出土している。炭化材と同レベル以下

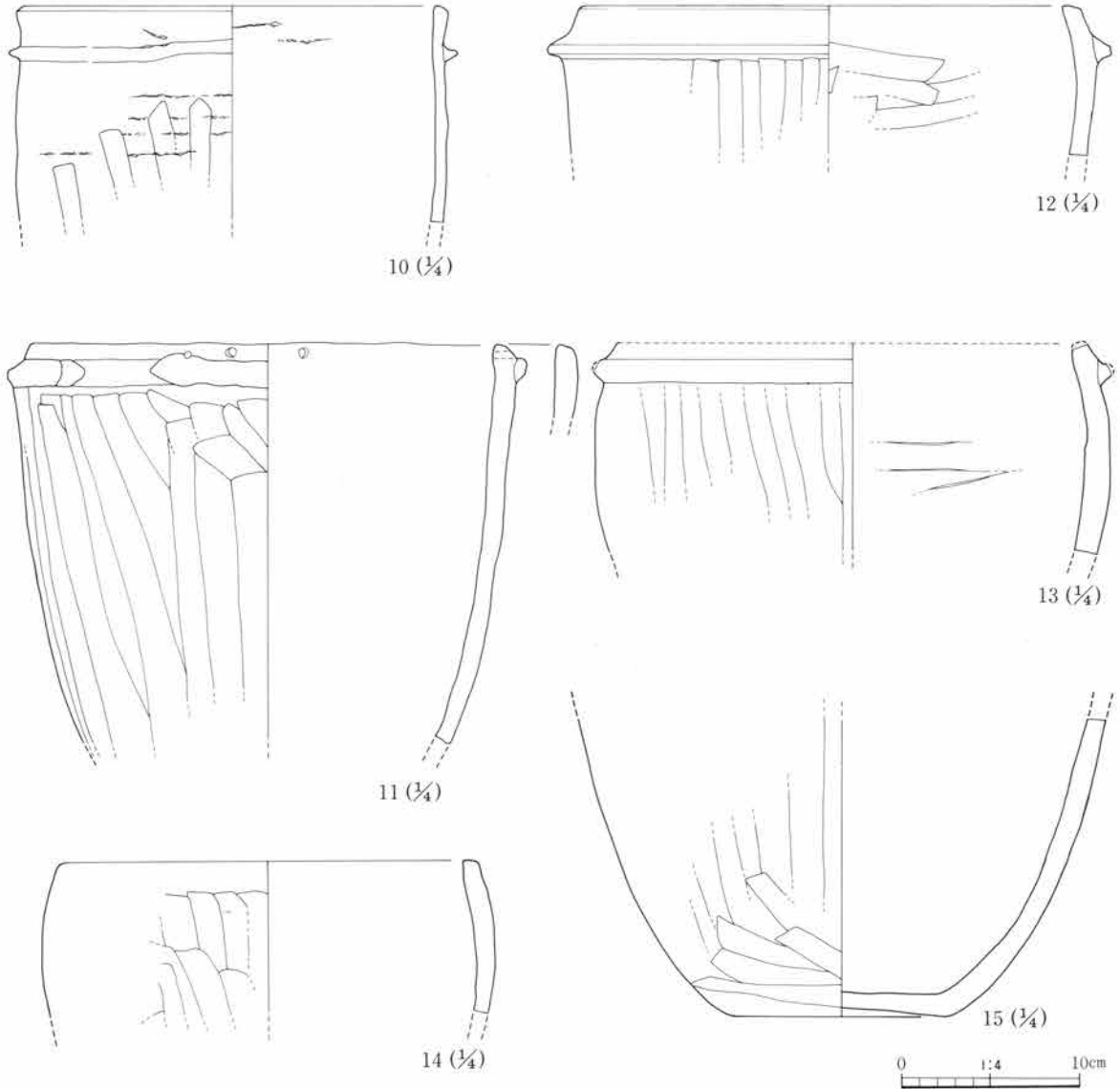
で出土したものについてはすべて平安時代に属するものであり、須恵器の特徴等から11世紀代のものと考えられよう。なお西壁際の中央よりやや南寄りの位置で54cm程の大形の河原礫が検出された。これは床面に数cm程埋め込まれた状態であり、又炭化上屋材の下から出土している事から、住居廃棄時以前より据え置かれていた可能性が高く、その性格は入口施設と関連すると思われる。



第231図 200号住居跡



第232図 200号住居跡出土遺物(1)



第233図 200号住居跡出土遺物(2)

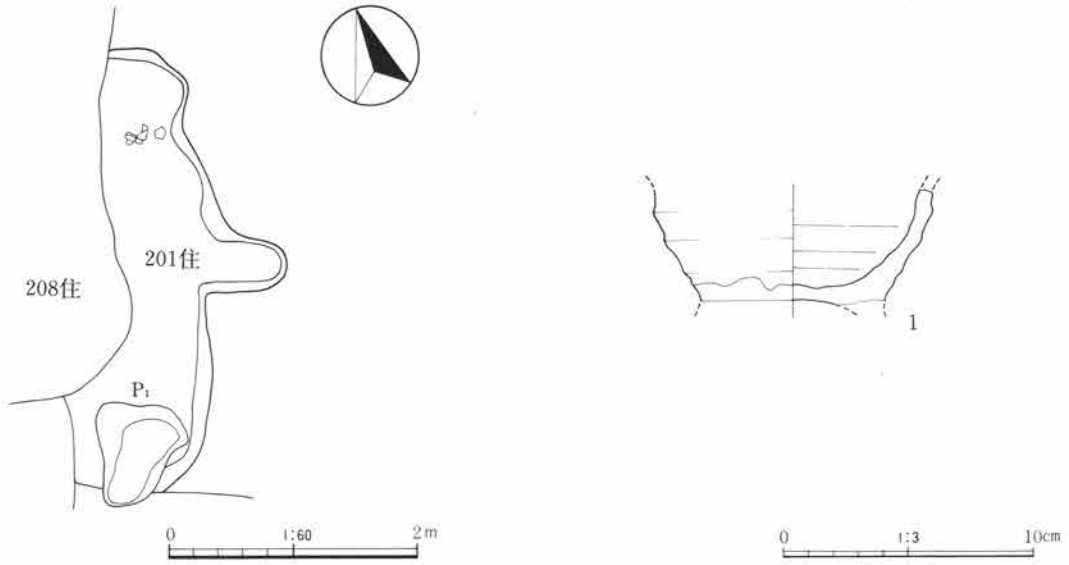
201号住居跡 (第234図、PL. 9)

IV区D-3、E-3グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。西側の大部分は他遺構と重複するため形状、規模ともに不明。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は凹凸が激しく残存状態不良である。確認壁高は17~6cmを測る。床面は地山のローム土を利用する。一部に貼床らしい痕跡が見られる。カマドは東壁中央部に構築され、規模は長さ72cm、幅62cmを測る。軸方向はS-77°-Eを指す。本体は壁外に張り出す。ピットは南東コーナー部で1基検出された。平面は不定形で、底面形状によれば楕円形に近い。規模は径90×65cm、深さ22cmを測る。これは本住居跡に伴うものかどうか不明である。

遺物は北側床面より高台付椀の破片が出土している。時期は平安時代のものであろう。

重複遺構は198号住居跡、199号住居跡、208号住居跡で、新旧関係については不明であった。

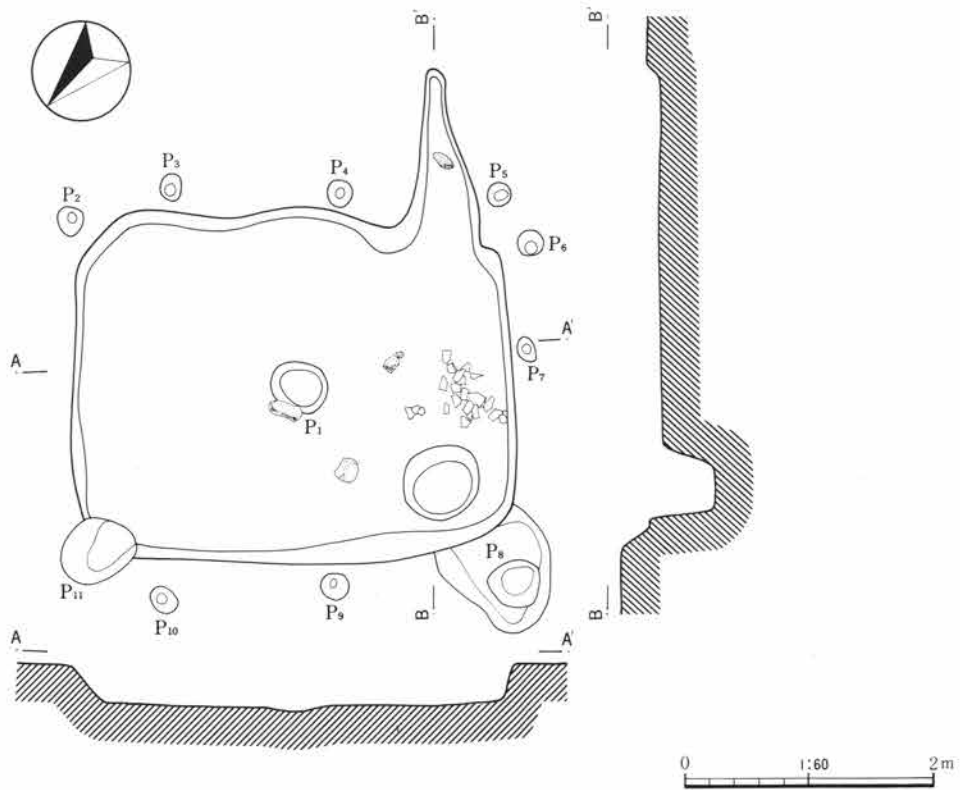
202号住居跡、203号住居跡 (欠番)



第234図 201号住居跡及び出土遺物

204号住居跡（第235図、PL. 9）

IV区F-3・4グリッドに位置する。平面はやや歪んだ横長長方形を呈し、規模は2.83×3.57m、面積は9.4㎡を測る。主軸方向はS-45°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高45~23cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用しており、平坦である。カマドは南東壁の南西隅に構築され、規模は長さ147cm、幅91cmを測る。軸方向はS-44°-Eを指す。本体は壁外に張り出す。煙道は燃焼部底面からすぼまりながらほぼ水平に延

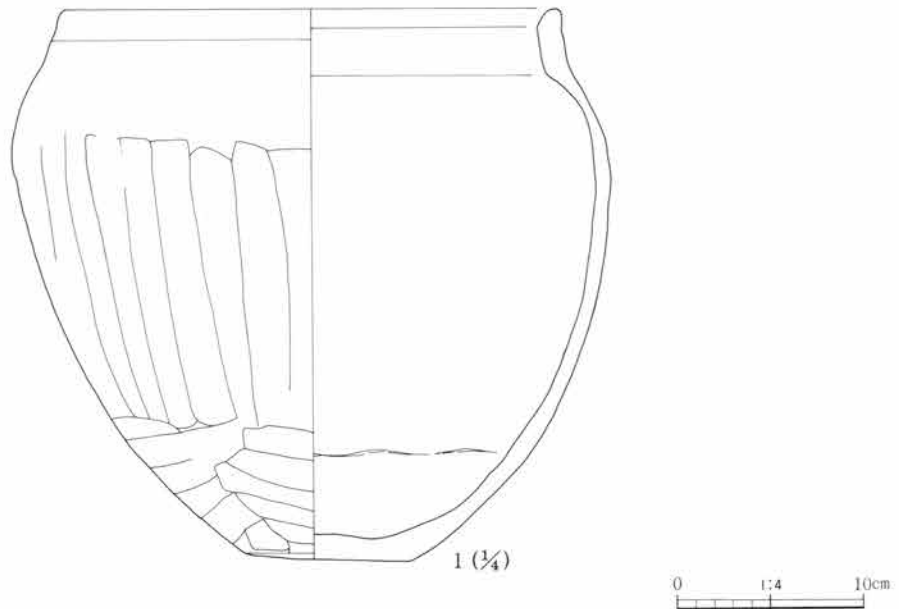


第235図 204号住居跡

び、末端部で急に立ち上がる。貯蔵穴は西側コーナー部で検出された。ほぼ円形を呈し、規模は径62×50cm深さ51cmを測る。ピットは住居のほぼ中央部で一基検出された。円形を呈し、規模は径46×38cm深さ9cmを測る。又壁外ではあるが壁に沿って11基のピットが検出された。規模はP₂径23×20cm深さ17cm、P₃径23×16cm深さ11.5cm、P₄径23×20cm深さ11.5cm、P₅径19cm深さ22cm、P₆径21cm深さ16.5cm、P₇径20×15cm深さ13.5cm、P₈は径80×90cm深さ36cmで更に径42×37cm深さ15cm程に2段掘りになっている。P₉径23×21cm深さ10cm、P₁₀径24×18cm深さ25cm、P₁₁径62×51cm深さ45.5cmを測る。P₈とP₁₁は他に比べ大きいものであるがP₂～P₇・P₉・P₁₀はほぼ同規模である。住居の各コーナー部にあり、又P₃とP₄はそれぞれP₁₀、P₉と対応する位置にある事等から本住居跡に伴う何らかの構造の痕跡と考えられる。掘り込みがほぼ垂直で、10cm以上の深さをもつ事から樺木の支柱穴の可能性が考えられる。

遺物は杯、甕、須恵器杯、羽釜、灰釉碗等の破片約80点程及び土錘6点が出土している。位置は南西壁際の床面近くに集中している。時期は平安時代（11世紀代?）と思われる。

重複遺構は11号溝で、カマド先端部で重複するため新旧関係は不明であった。



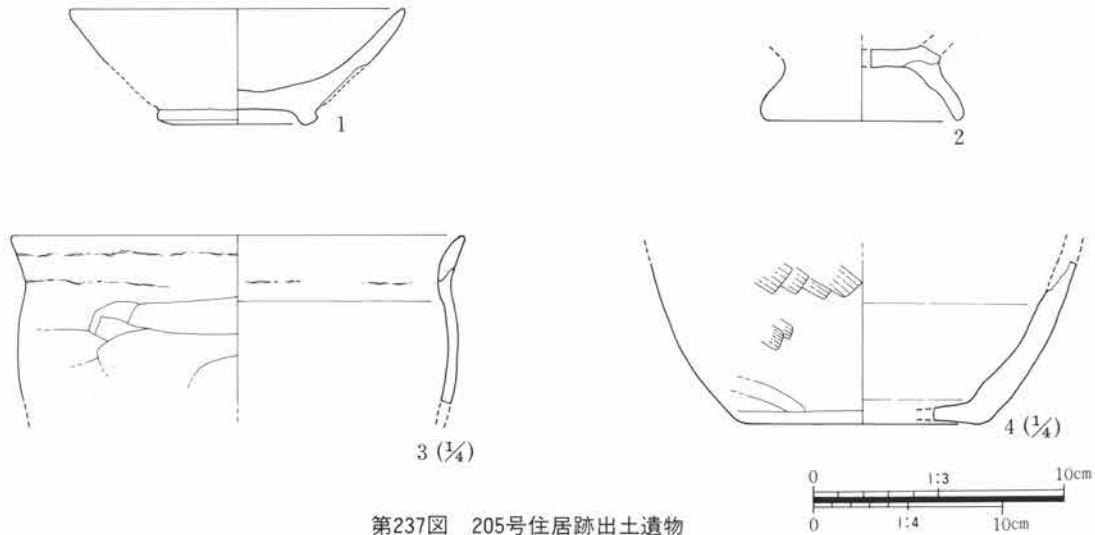
第236図 204号住居跡出土遺物

205号住居跡（第227図、PL. 9）

IV区B-1、C-1グリッドに位置する。平面は方形と思われるが、他遺構と重複するため詳細は不明である。焼土の分布からカマドと推定される部分が検出された。形状と規模は不明である。なお本住居の壁は北西部のみ検出された。壁高は30cm前後を測る。床面は北西半部分のみ残っており重複する196号住居跡よりも11cm程レベルが低い。なおピットはカマド前方部で1基検出された。平面は円形を呈し、規模は径75cm深さ11cmを測る。しかしカマド前方に位置する事や、他の住居跡と重複する事から本住居跡に伴うものとは限定できない。

遺物はカマド内より高台付碗、甕の破片が出土している。時期は平安時代（11世紀代?）と思われる。

重複遺構は195号住居跡、196号住居跡、206号住居跡で、新旧関係は195号住・196号住→205号住と思われる。



第237図 205号住居跡出土遺物

206号住居跡 (第227図、PL. 9)

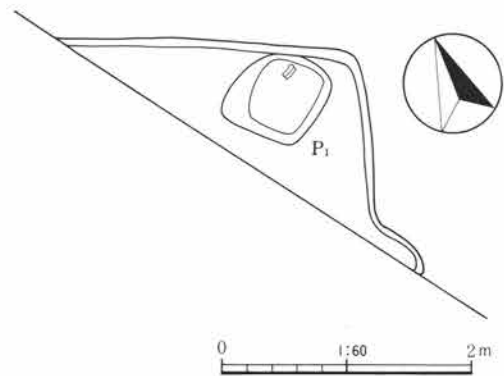
IV区B-1 グリッドに位置する。平面形は不明。北西部コーナー部分しか検出されなかった。確認壁高は26~14cmを測る。床面は地山のローム土で平坦である。カマド、ピット、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は出土していない。

重複遺構との新旧関係は不明である。

207号住居跡 (第238図)

III区B-23・24グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、西半の大部分は調査区外のため詳細は不明である。従って規模も不明。主軸方向は残存する北壁よりS-(65°)-Eを指すと思われる。壁は8cm前後の高さを測る。カマドは東壁中央部付近に構築される。南西半は調査区外で不明であるが、そで部が張り出していない事から本体は壁外に築かれたと思われる。貯蔵穴は北東隅で検出された。平面は歪んだ方形を呈し、規模は90×72cm、深さ15.5cmを測る。



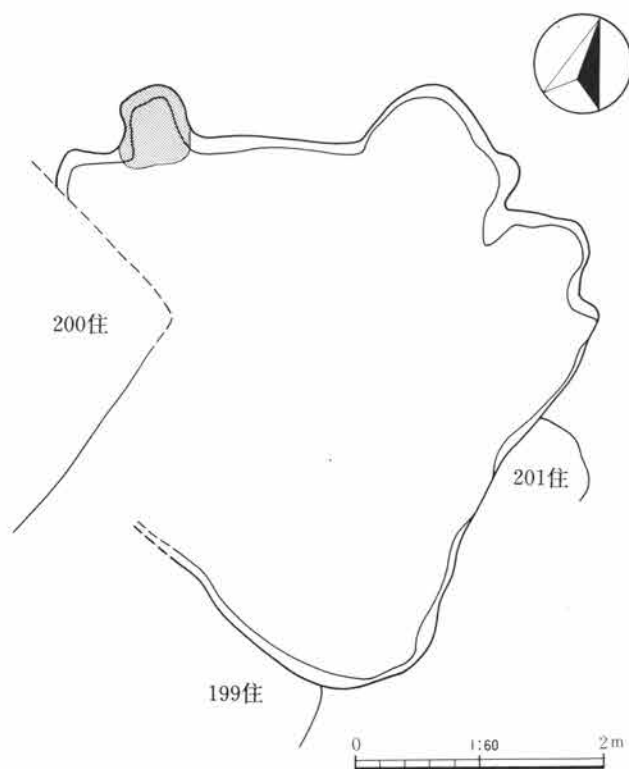
第238図 207号住居跡

遺物は杯、甕、須恵器杯、羽釜等の破片が出土している。時期は平安時代に属するものと思われる。

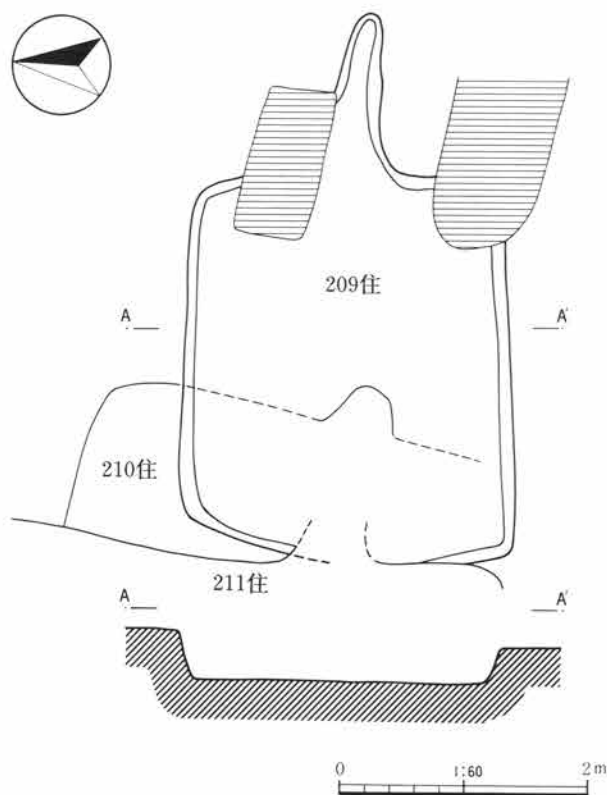
208号住居跡 (第239図)

IV区D-3・4、E-3・4グリッドに位置する。平面は不定形で検出されたが、本来の形状は方形かと思われる。明らかに住居部分と思われるのは北西部分でカマド壁の一部が残存する。この部分から主軸方向はN-26°-Wを指すと思われる。カマドは北壁の西端に構築される。規模は長さ63cm幅57cmを測る。軸方向はN-25°-Wを指す。床面は凹凸が激しく後世の攪乱層と重複しているらしい。

遺物は杯、甕、羽釜、須恵器杯、同蓋、壺等の破片約170点及び砥石が出土する。出土位置は覆土がほとん



第239図 208号住居跡



第240図 209号住居跡

どで本住居跡に確実に伴うと思われるものは残念ながら抽出できなかった。時期は奈良時代と平安時代のものが混在する。

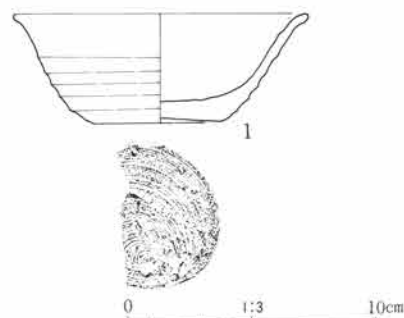
重複遺構は199号住居跡、200号住居跡、201号住居跡で、新旧関係については不明である。

209号住居跡（第240図、PL.9）

IV区F-5・6、G-5・6グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は(2.87)×2.51m、面積は推定値で(8.5)㎡を測る。主軸方向は残存状態の良好な南壁の走向よりN-87°-Eを指す。壁は全体に残存状態不良で、確認壁高は40-18cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土である。カマドは東壁の中央よりやや北寄りに構築される。左そで部は後世の攪乱により削平されて不明確なものとなっている。長さは137cm前後と思われる。壁内へのそでの張り出しがない事から本体は壁外に築かれたと思われる。燃烧部と煙道部の境は不明瞭である。住居規模に比べてカマドが比較的長大なものである。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋、台付甕等の破片が約140点程出土している。時期は奈良～平安時代で量的には平安時代が多い。

重複遺構との新旧関係はカマド残存状態より160号住→209号住→210号住である。



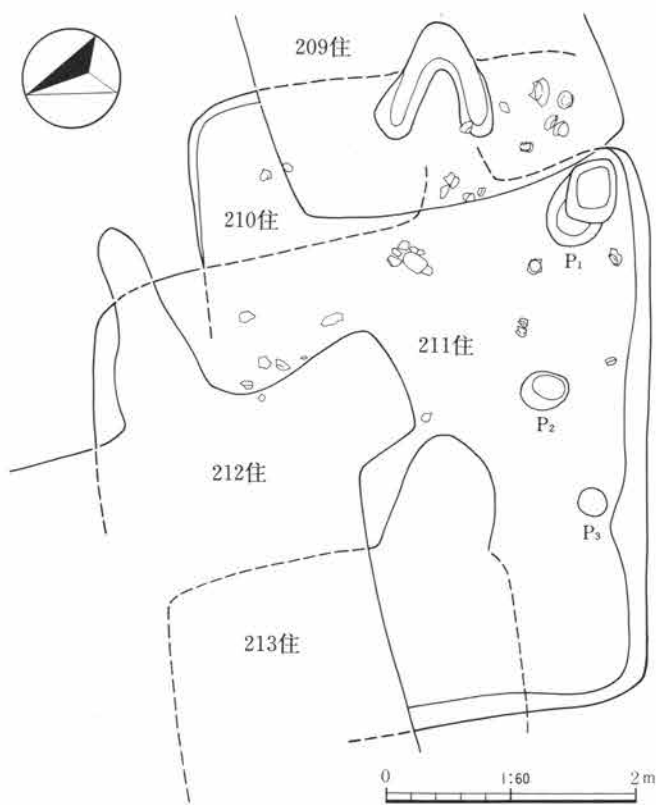
第241図 209号住居跡出土遺物

210号住居跡（第242図）

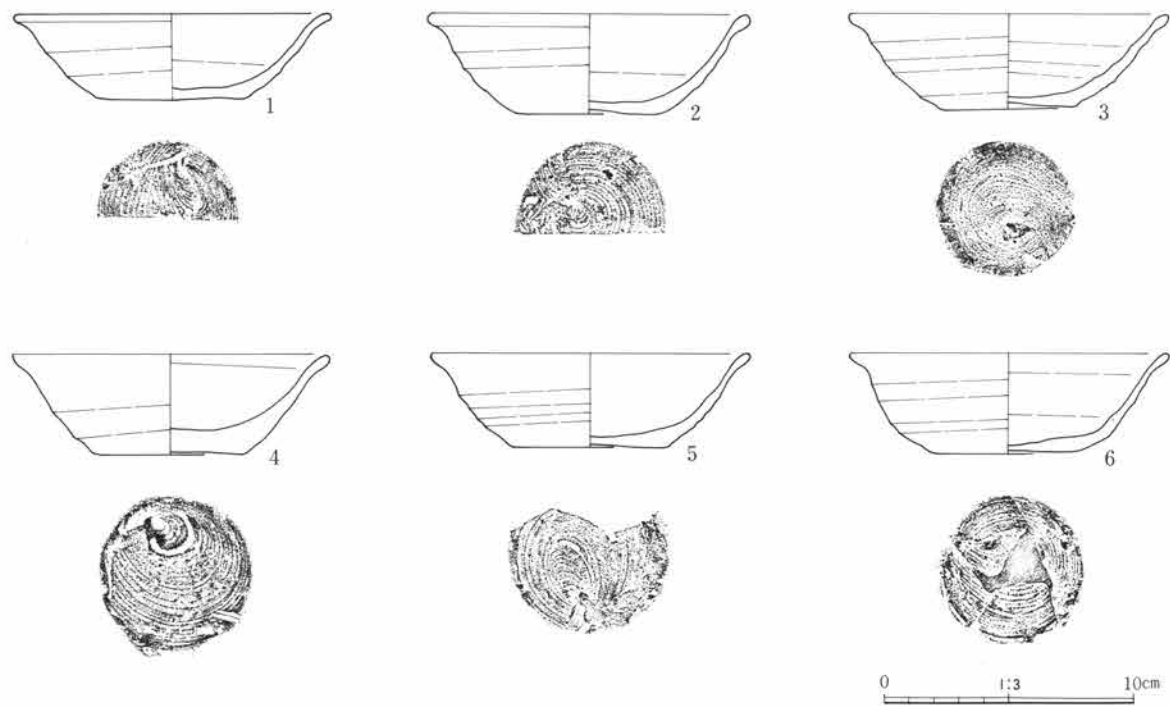
IV区F-5・6、G-5・6グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。規模及び主軸方向は不明である。壁は東側コーナー部分のみ残存しておりこの部分の確認壁高は20cm前後を測る。床面は地山のローム土と思われるが不明瞭である。カマドは東壁に構築され、規模は長さ92cm、幅95cmを測る。軸方向はS-81°-Eを指す。残存する壁を延長して東壁を推定した場合、そで部が若干壁内に張り出すようである。煙道部は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同壺、皿、高台付椀、土錘等が出土し、完形品と破片を合わせて70点程を数える。甕以外はほとんどが須恵器で、その形態的特徴から平安時代（10世紀前半）と思われる。

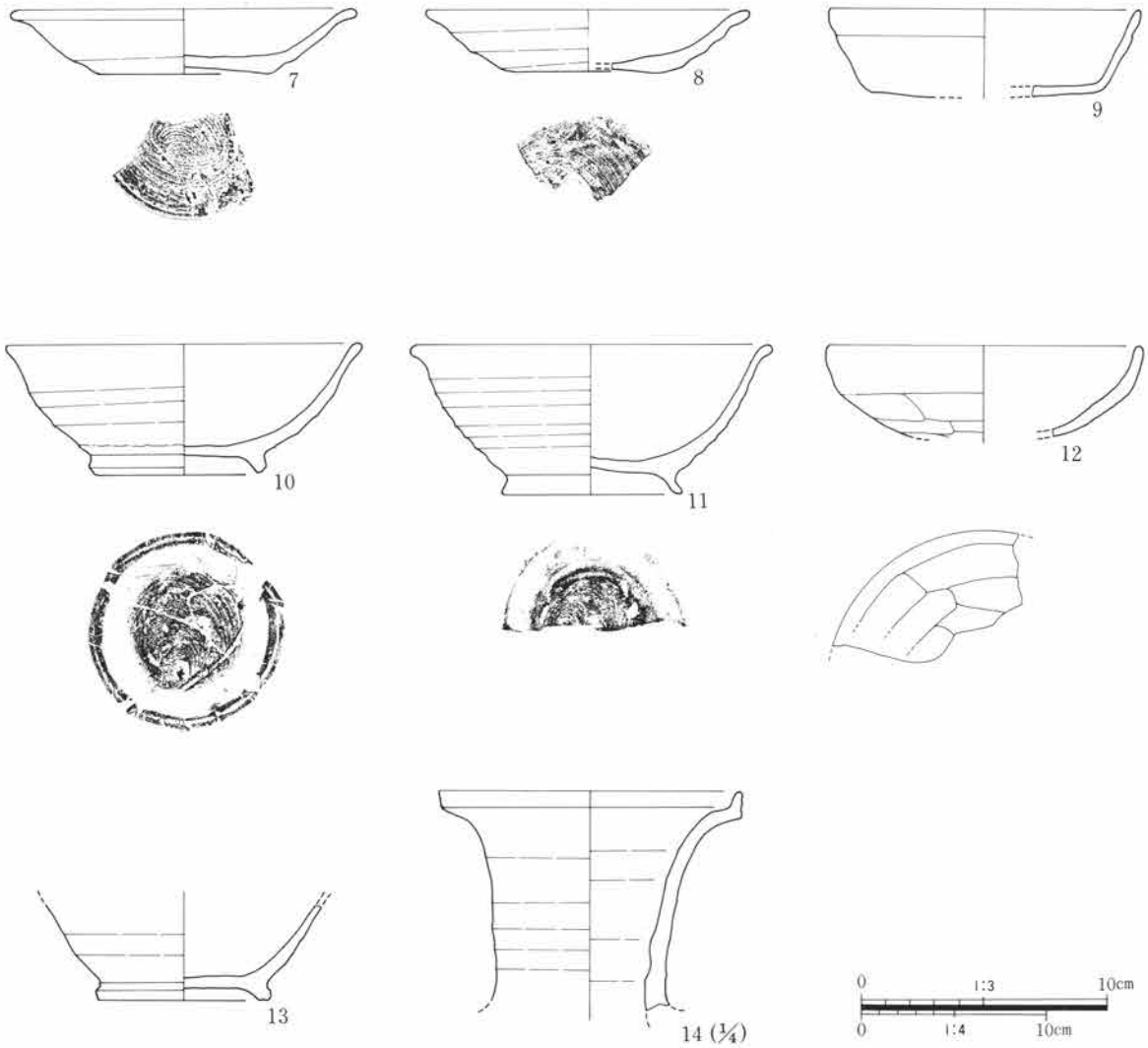
重複遺構は209号住居跡、211号住居跡、212号住居跡、213号住居跡で、新旧関係はカマド残存状態から212号住・209号住→210号住→211号住→213号住と思われる。



第242図 210・211号住居跡



第243図 210号住居跡出土遺物(1)



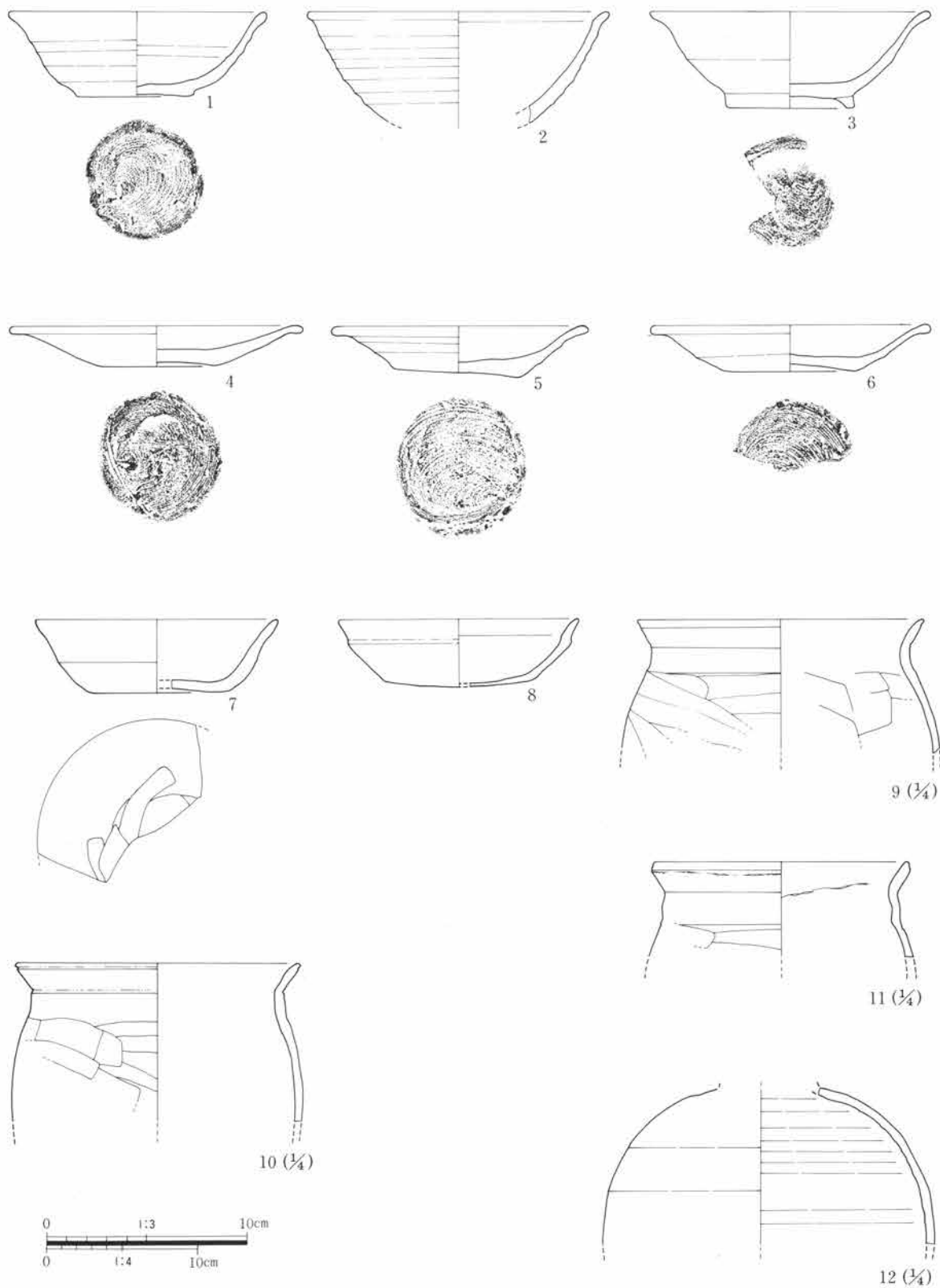
第244図 210号住居跡出土遺物(2)

211号住居跡 (第242図、PL.10)

IV区F-5・6、G-5・6グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。壁は南西部と北東コーナー部で検出された。規模は推定値で(4.30)×(4.46)mを測る。主軸方向は残存する南西壁の走向でS-71°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高は30~11cmを測る。床面はローム粒を含む黒色土で凹凸が多い。カマドは南東壁の南寄りにそれとわかる焼土の分布が検出されたのみで、形状、規模等については不明である。貯蔵穴と思われる掘り込みは南側コーナー部で検出された。平面はきっちりした長方形を呈し、規模は51×40cm深さ17cmを測る。ピットは3基検出された。P₁は貯蔵穴と重複しており、本来貯蔵穴と同一施設があるいは時期の異なるものかの判定はつかなかった。P₂は南西壁寄り中央部で検出された。規模は径37×34cm深さ25cm、P₃径23cm深さ27cmを測る。

遺物は杯、甕、高杯、須恵器杯、同壺、皿、高台付碗、灰釉碗、羽釜、土錘等が約860点程出土した。出土位置は覆土が多く、本住居跡に伴うものの判別は困難である。時期は平安時代(10世紀代)のものが多い。

重複遺構は210号住居跡、212号住居跡、213号住居跡で、新旧関係は土層観察とカマド残存状態より212号住→210号住→211号住→213号住である。



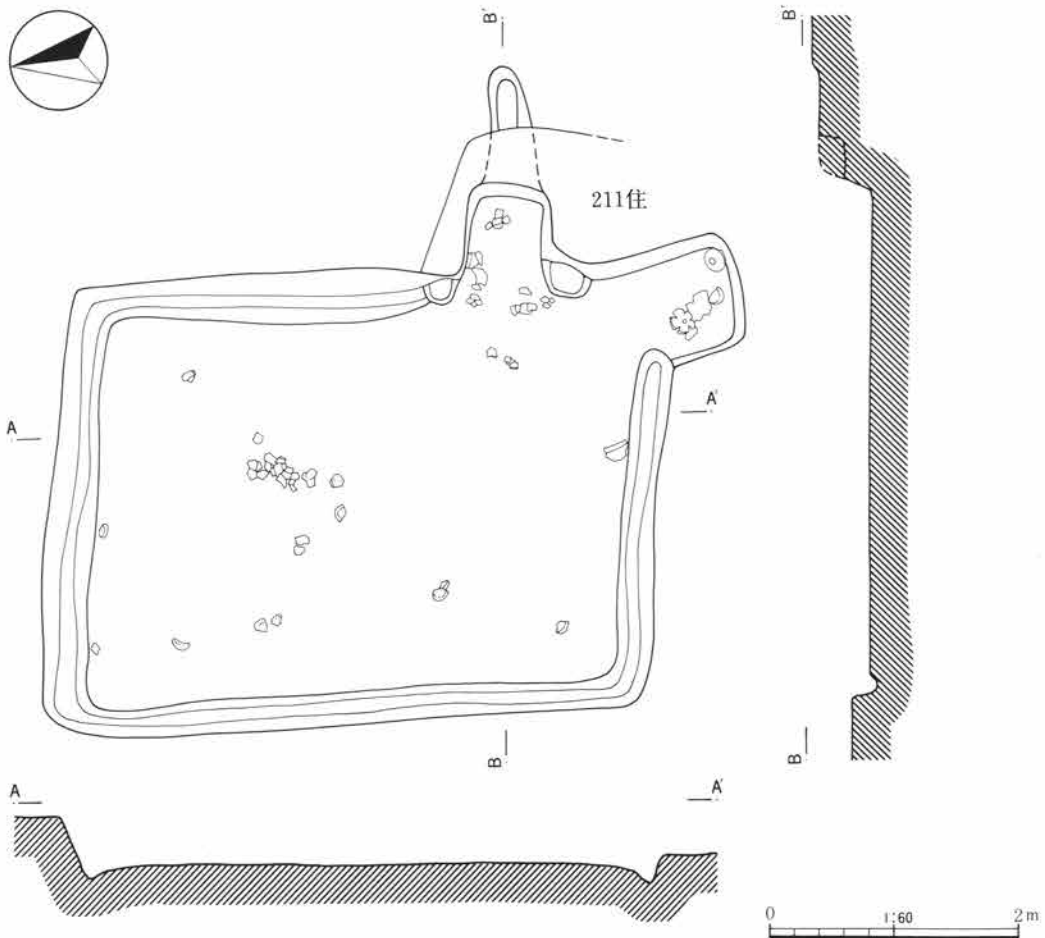
第245図 211号住居跡出土遺物

212号住居跡 (第246図、PL.10)

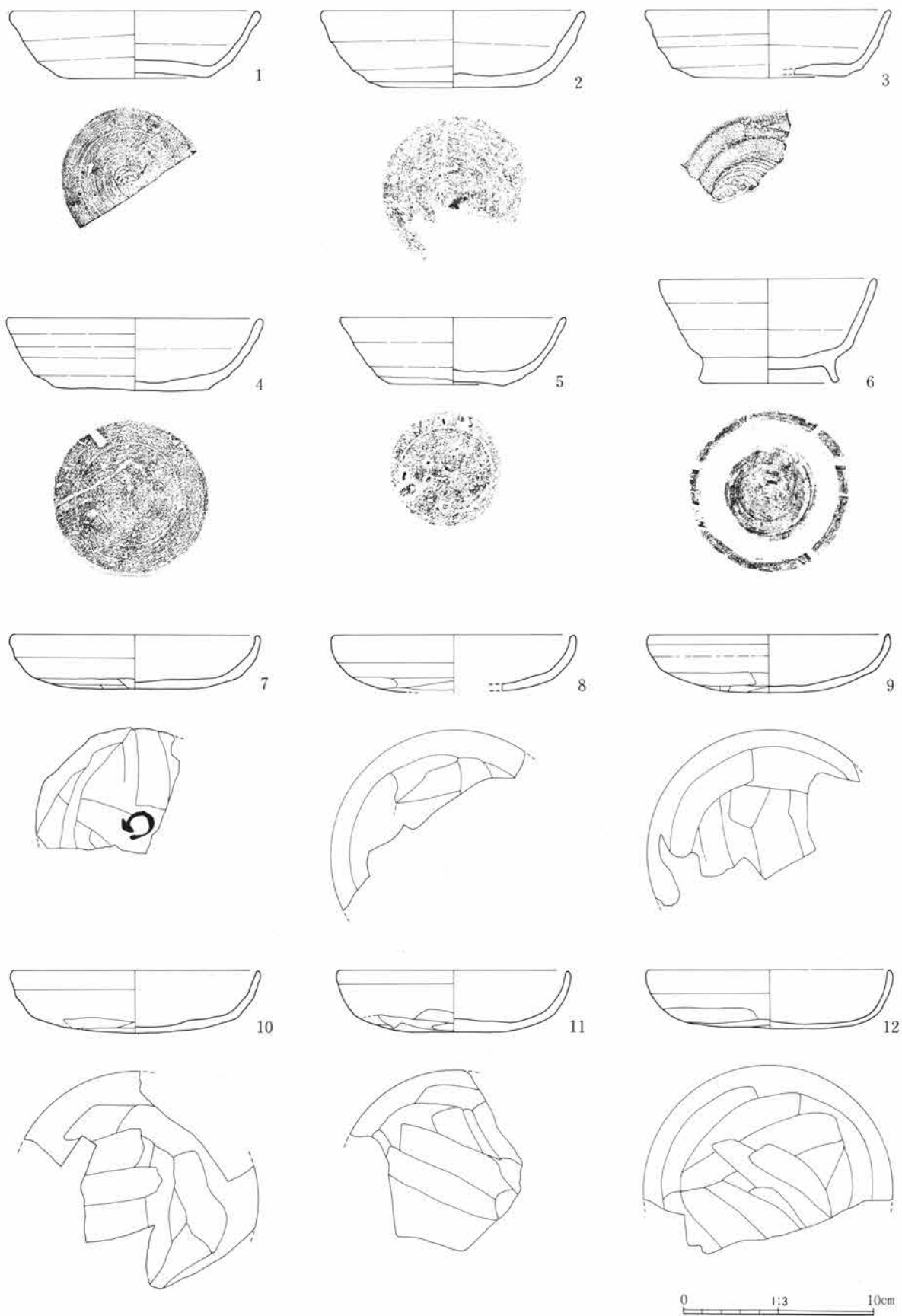
IV区F-6・7、G-6・7グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、南東コーナー部分に張り出し部分を設ける。規模は3.64×4.85m、面積は18.7㎡を測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。壁は直立し確認壁高は48~18cmを測る。床面は地山のロームをそのまま利用し、平坦である。カマドは東壁の南端部に構築される。規模は長さ170cm、幅135cmを測る。軸方向はS-86°-Eを指す。そで部は壁内へ36cm程張り出す。燃烧部は壁外に掘り込まれ、ほぼ長方形を呈し、規模は長さ90cm、幅70cmを測る。煙道は先端部分のみ検出され、中間部分は重複する211号住居跡に切られて不明であるが、おそらく燃烧部奥壁のかなり上位から立ち上がるものと思われる。南東コーナー部の張り出し施設は長方形を呈し、規模は奥行80cm、幅90cmを測る。軸方向はS-12°-Eを指す。周溝は張り出し施設を除いて全周する。規模は幅44~20cm、深さ9~2cmを測る。住居覆土は上層にローム粒、軽石、焼土粒、炭化物を含む暗褐色土、下層壁際にローム粒を含む暗黄褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、高台付盤、壺、蓋、羽釜、灰釉碗等が床面及び中央部分の覆土から出土する。破片数は約850点程で、そのうち甕が約半数を占め、次に須恵器杯が多い。時期は奈良時代と平安時代のものが混在しているが、床面及びカマド出土の土器を見る限り奈良時代末期~平安時代初頭前後のものが多いと思われる。^(註4)

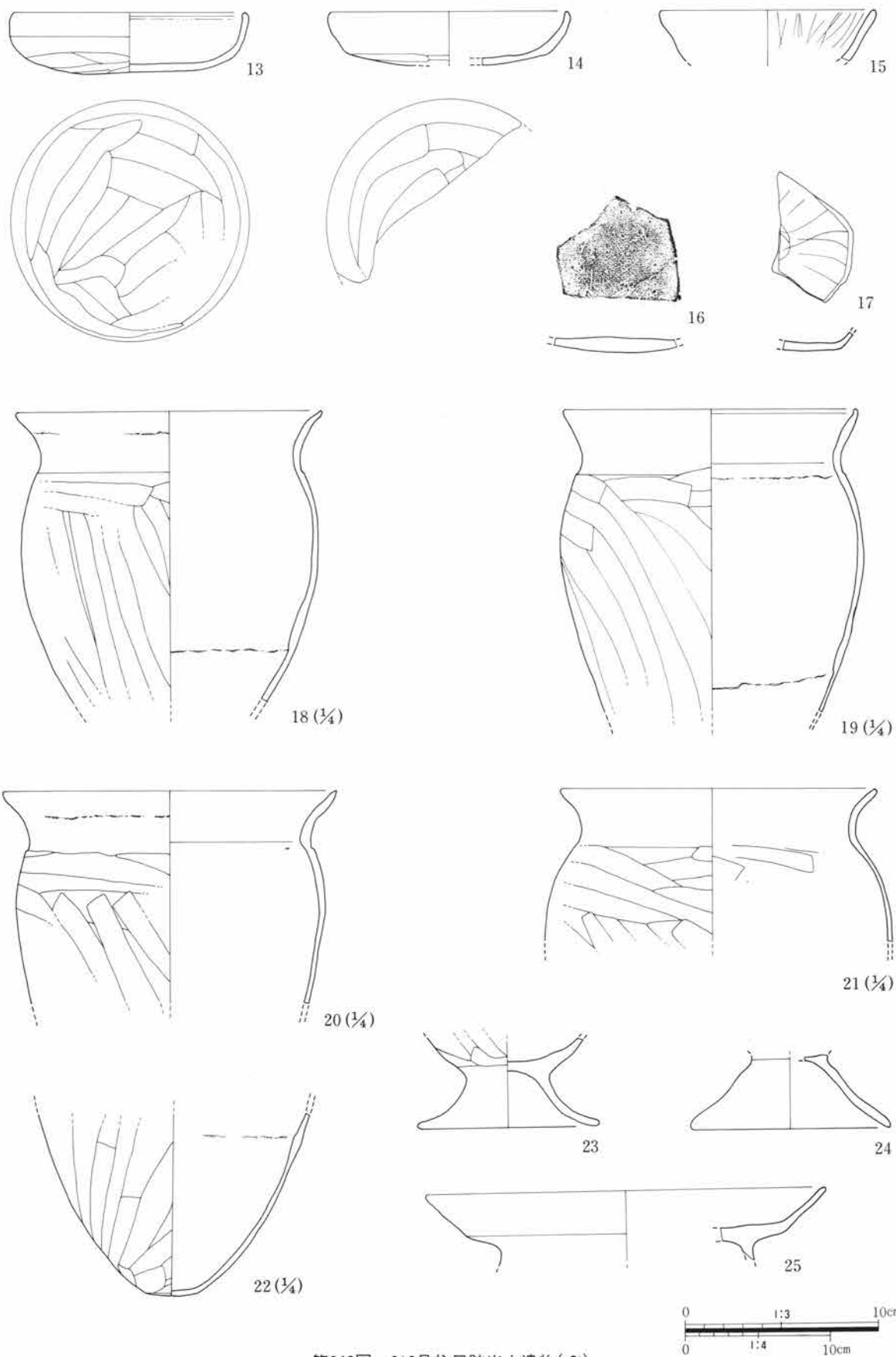
重複遺構との新旧関係は212号住→211号住・213号住である。



第246図 212号住居跡



第247図 212号住居跡出土遺物(1)



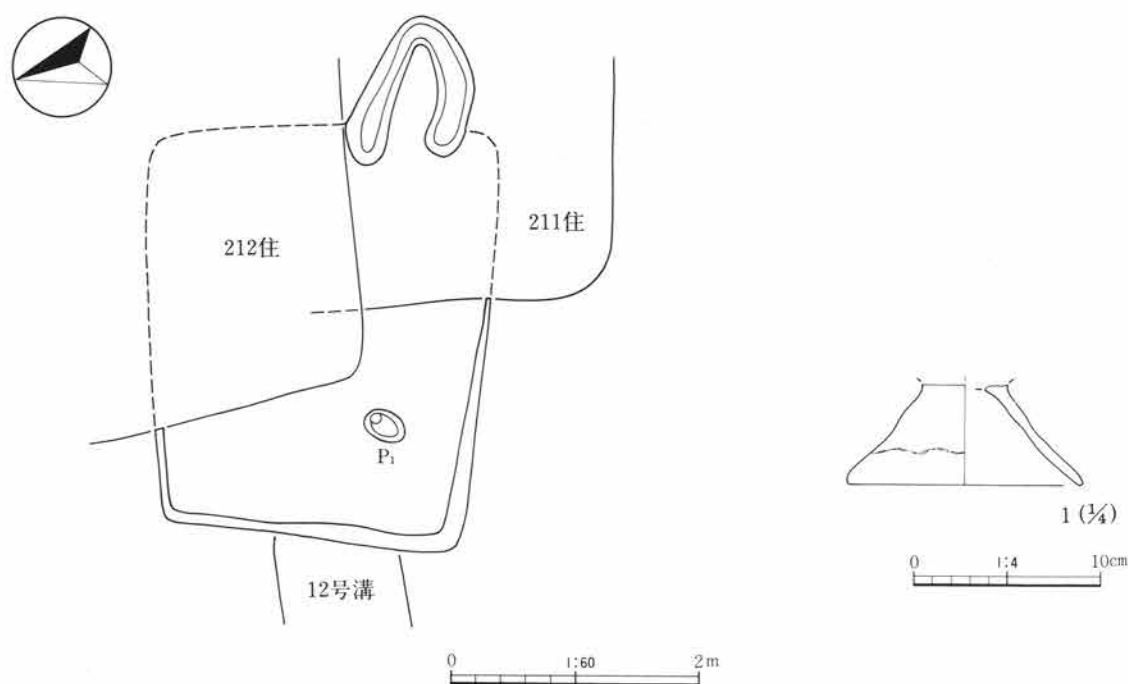
第248図 212号住居跡出土遺物(2)

213号住居跡（第249図、PL.10）

IV区F-6・7グリッドに位置する。平面は長方形を呈すると思われる。東半が他遺構と重複するため、全体の形状、規模等の詳細については不明である。壁は残存する南・西壁で確認壁高29cm前後を測る。床面はほぼ平坦で、他遺構との重複部分については不明である。カマドは東壁に構築される。規模は長さ121cm幅95cmを測り、軸方向はS-65°-Eを指す。ピットは南西部で1基検出された。楕円形を呈し、規模は径30×20cm深さ21cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同甕、灰釉碗の破片約180点及び土錘2点が出土しているが、ほとんどが覆土からの出土で本住居跡に伴うものを判別するのは困難である。時期は平安時代のものが主体を占める。

重複遺構との新旧関係は212号住→211号住→213号住で、12号溝との関係は不明である。



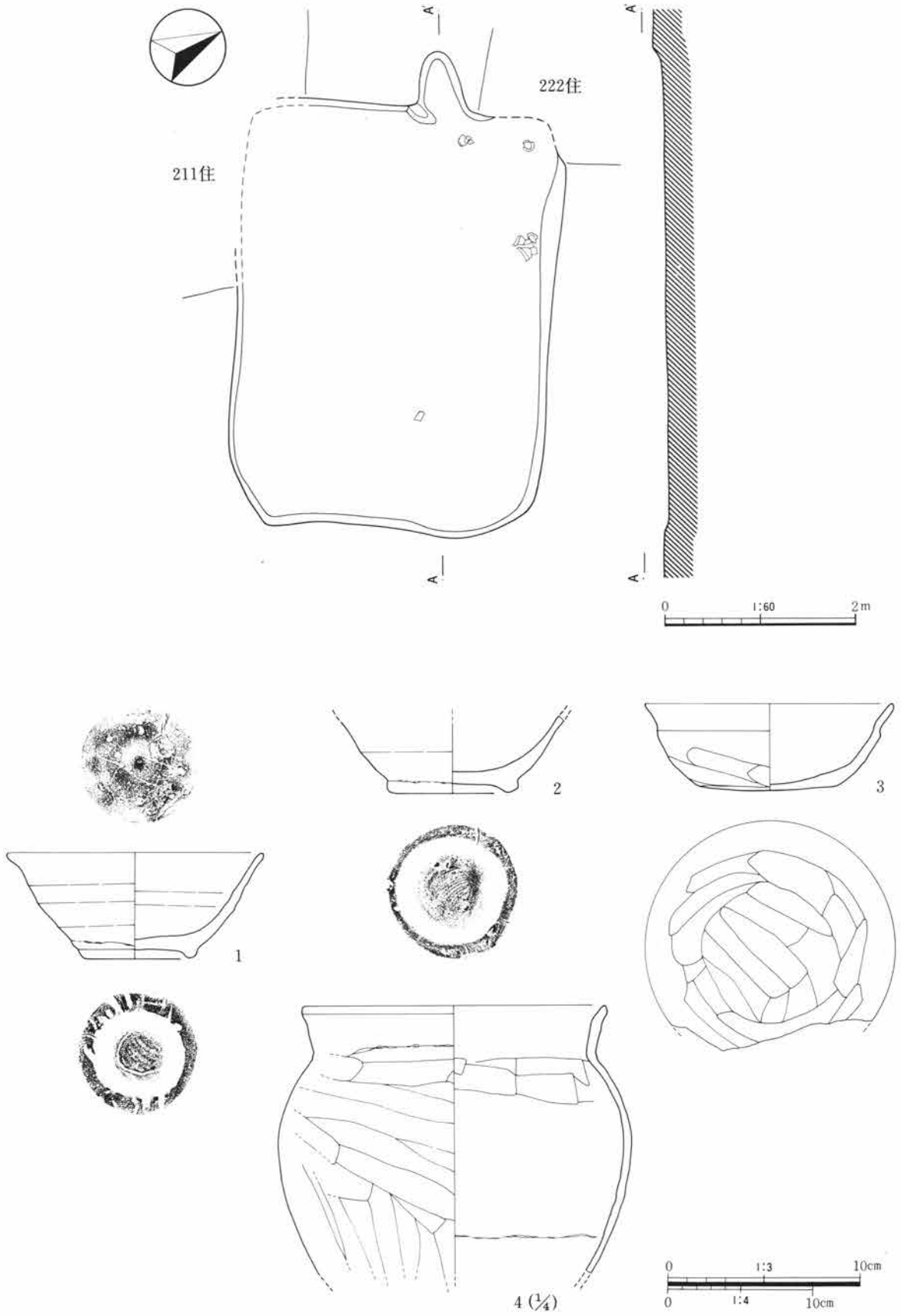
第249図 213号住居跡及び出土遺物

214号住居跡（第250図、PL.10）

IV区E-6・7、F-6・7グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は4.36m×3.26mで、面積は推定値(14.4)㎡を測る。主軸方向はS-67°-Eを指す。壁は外傾し確認壁高18~2cmを測る。床面は地山のローム土のまま利用し、平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。規模は長さ75cm、幅68cmを測り、軸方向はS-74°-Eを指す。左そでは地山を若干掘り残して築く。煙道部は不明瞭であった。貯蔵穴、ピット、周溝等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、台付甕、羽釜、高台付碗、須恵器甌等の破片が約450点及び土錘が出土した。時期は平安時代(11世紀代?)を主とする。

重複遺構は211号住居跡、222号住居跡で、新旧関係は不明であった。又北側に接して並列するように213号住居跡が位置する。



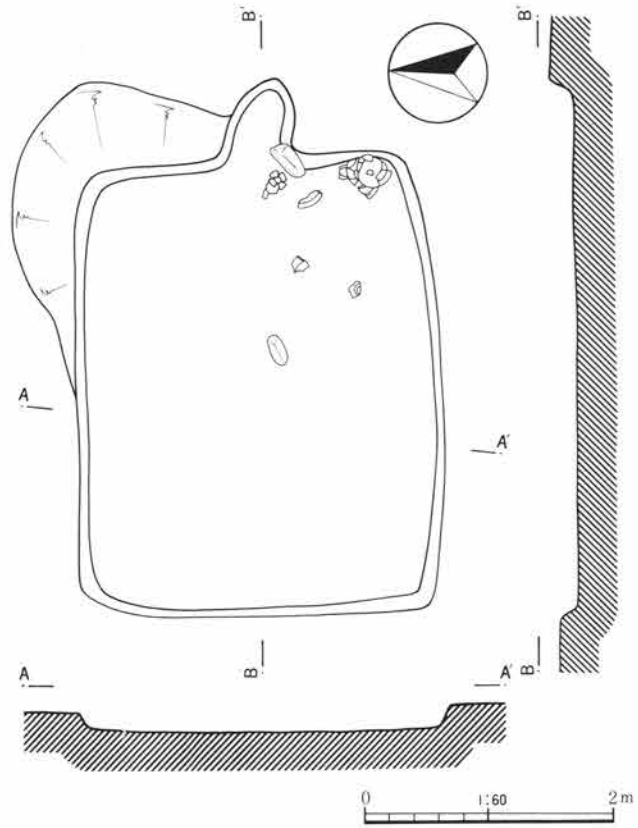
第250図 214号住居跡及び出土遺物

215号住居跡 (第251図、PL.10)

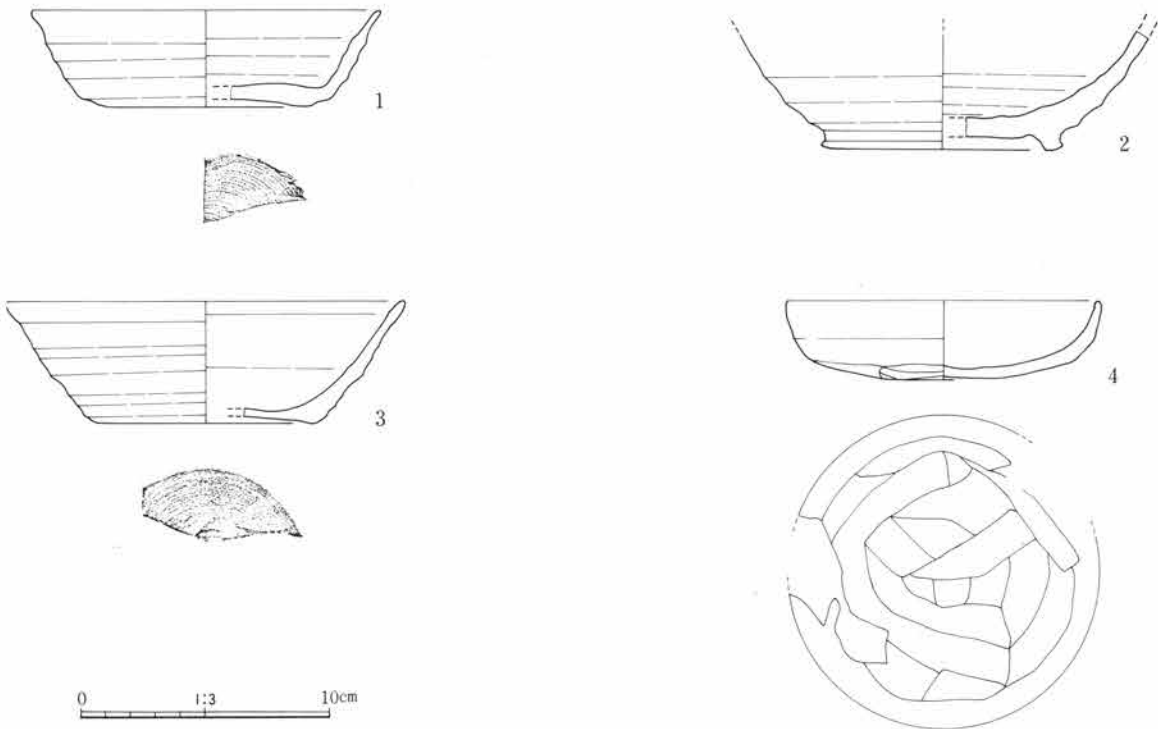
IV区F-8・9、G-8グリッドに位置する。平面はやや胴張り気味の縦長長方形を呈する。規模は長さ3.60×2.93mを測り、主軸方向はN-81°-Eを指す。面積は10.6㎡を測る。壁はやや外傾し、確認壁高は20~7cmを測る。床面は黒褐色土で平坦である。カマドは東壁のほぼ中央に構築される。規模は長さ82cm、幅59cmを測り、軸方向はS-67°-Eを指す。右そで部と思われる部分に30cm大の円礫が直立した状態で検出された。おそらくそで部の補強材として用いられたと思われる。又これと同大の円礫が床面中央部で出土したが、これも左そで部にあった可能性が考えられる。

遺物は杯、甕、壺、台付甕、高台付椀、盤等が平安時代を主体として約230点程出土している。位置はカマド周辺が多い。

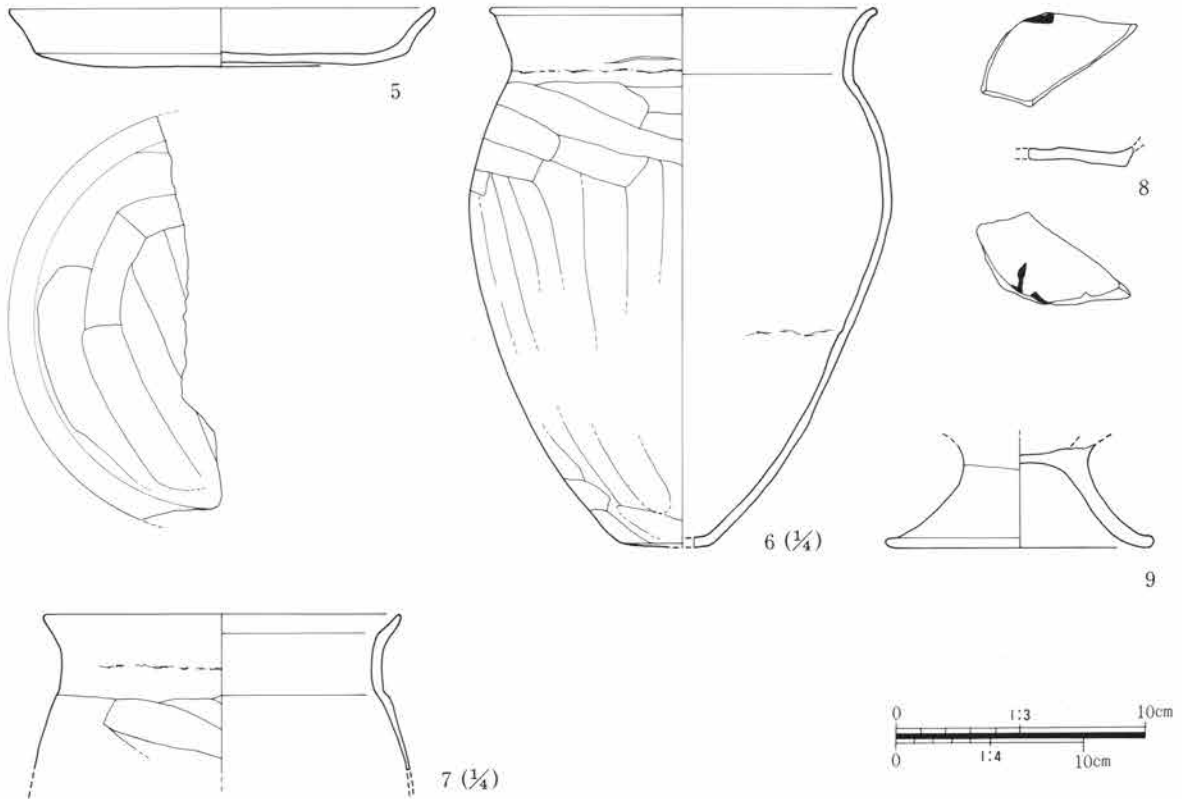
重複遺構はなく単独で検出された。



第251図 215号住居跡



第252図 215号住居跡出土遺物(1)



第253図 215号住居跡出土遺物(2)

216号住居跡 (第254図、PL.10)

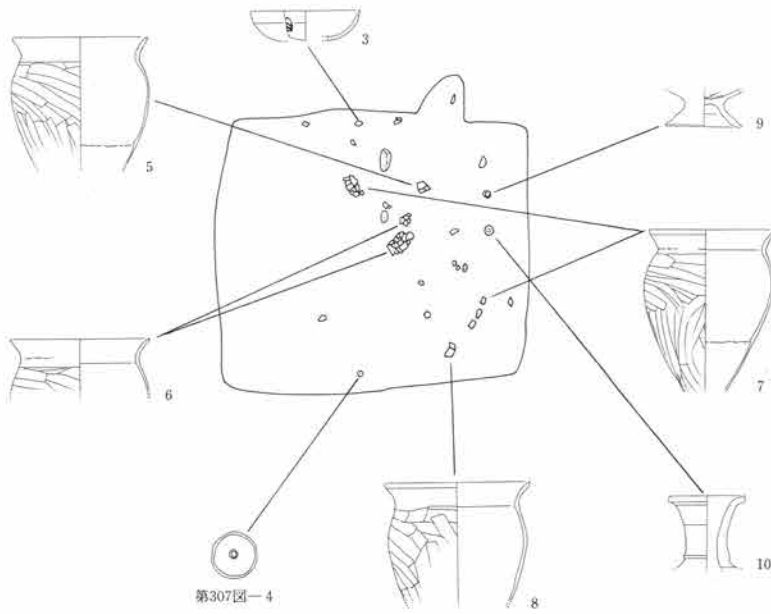
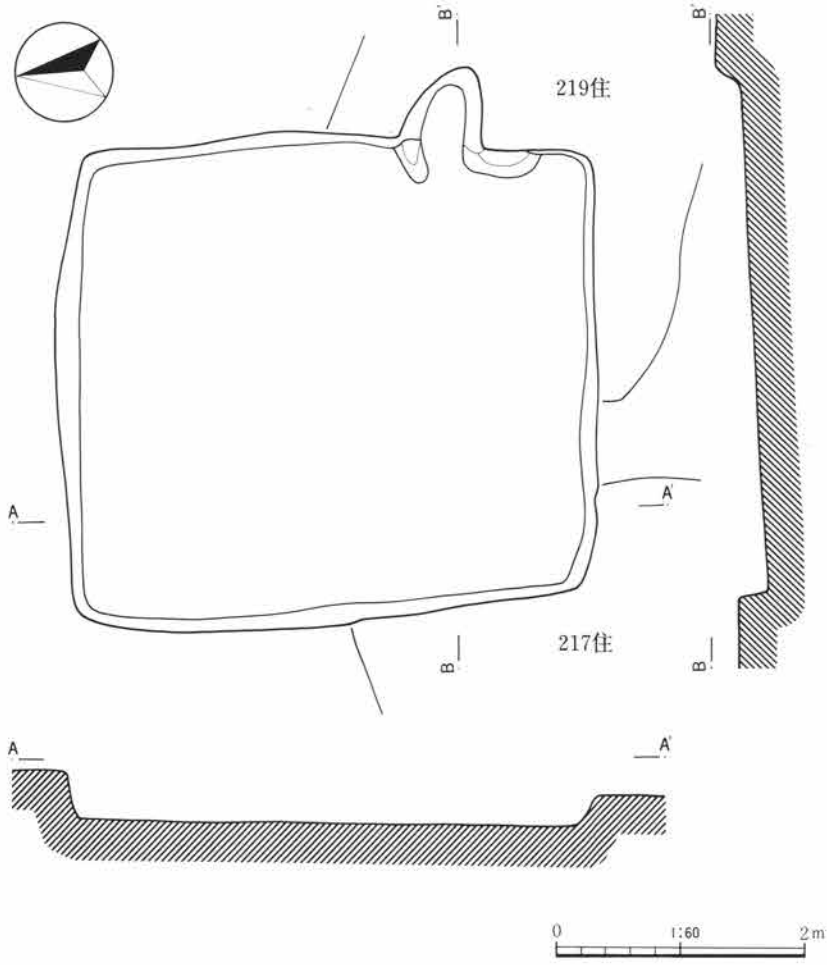
IV区D-7・8、E-7・8グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.93×4.35mを測る。面積は16.3㎡を測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高50~22cmを測る。床面は地山のローム土を利用し凹凸が多い。カマドは東壁の南寄りに構築される。規模は長さ97cm、幅120cmを測る。軸方向はS-73°-Eを指す。そで部は40~30cm壁内へ張り出す。燃烧部の大部分は壁外に張り出すと思われる。煙道部は不明であるが、燃烧部奥壁の中位から掘り込まれるようである。貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、同壺、蓋、高台付椀、羽釜、灰釉椀等の破片及び紡錘車、土錘が約650点程出土する。甕が主体を占めるが、杯では須恵器より土師器の方が量的に多い。時期は平安時代全般に亘っており、量的には平安時代初頭(9世紀前半代)のものが多い。出土位置は覆土が大部分である。

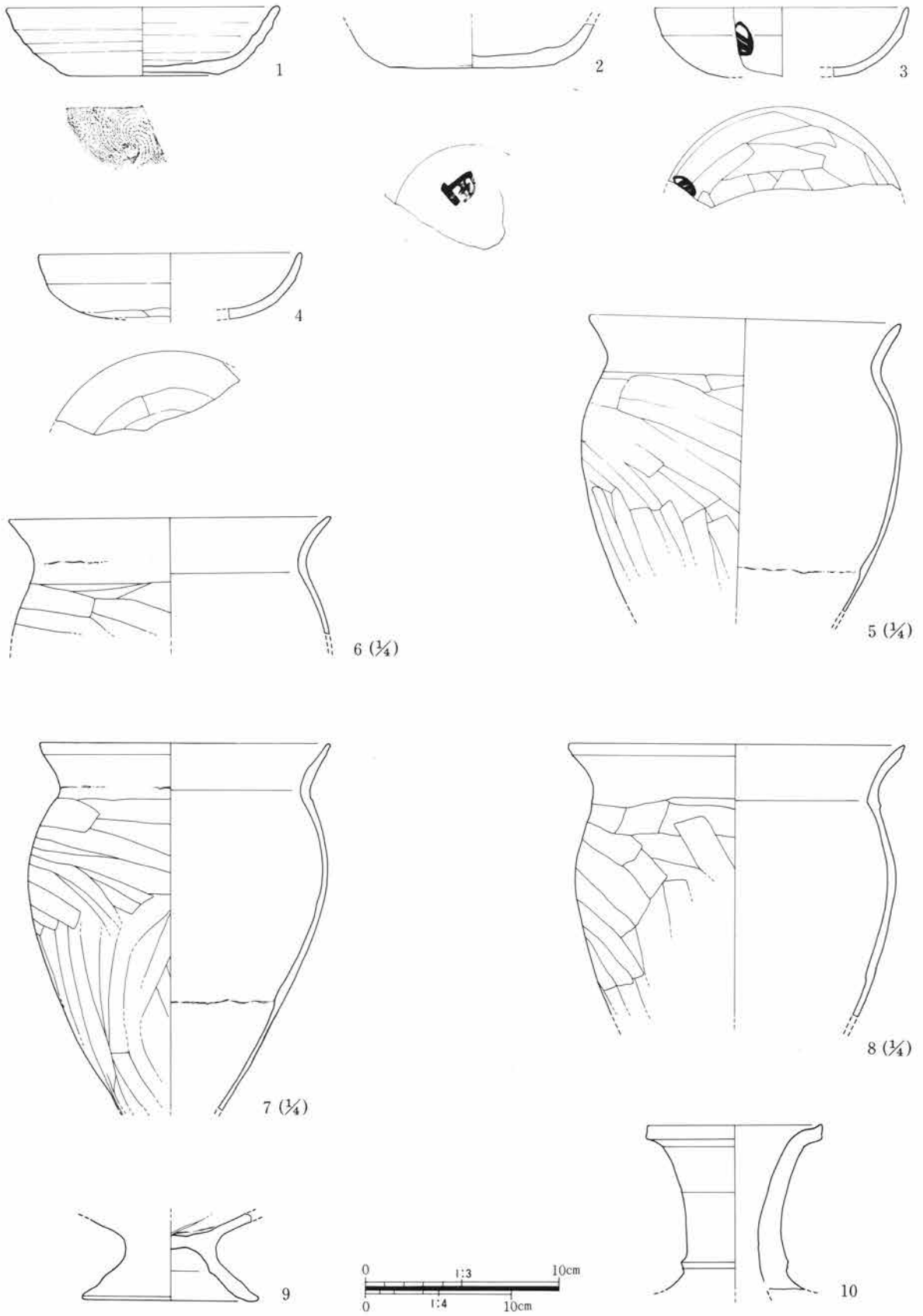
重複遺構は217号住居跡、219号住居跡で、新旧関係は217号住・219号住→216号住である。

217号住居跡 (第256図、PL.10)

IV区C-7・8、D-7・8グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。規模は南北壁間距離で4.53mを測るが、東西壁間は不明。主軸方向はN-9°-Wを指す。壁はほぼ直立し確認壁高35~11cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用する。カマドは北壁に構築され、規模は長さ120cm、幅100cmを測る。軸方向はN-10°-Wを指す。そで部はロームブロックを含む褐色土で築き壁内に38cm程張り出す。燃烧部は壁の線上付近にあると思われる。煙道は燃烧部底面から直斜状に緩い傾斜角で立ち上がる。なおカマドそで部には甕(第259図-8・9)を倒立させ補強材としている。又燃烧部には甕と台付甕と杯(第259図-



第254図 216号住居跡及び遺物分布図



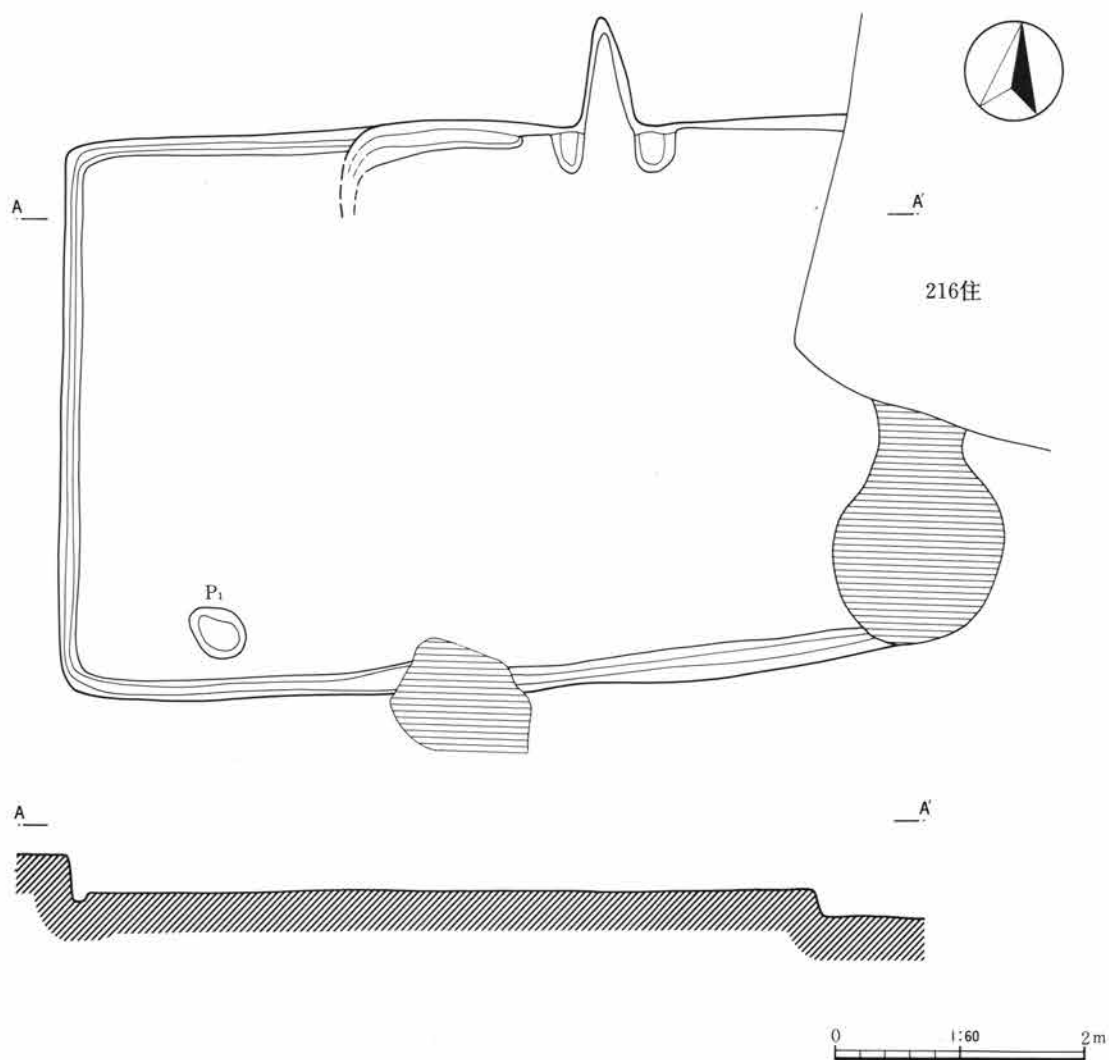
第255図 216号住居跡出土遺物

10・11・12、第258図一4)が「入れ子」の状態出土した。周溝はカマド左側の北壁に沿って廻り、西壁及び南壁にかけて検出されている。又北壁の周溝はカマド脇より1.5m程の所で住居の内側に屈曲する痕跡が残っている。これは本住居跡の旧周溝で、これより西側に拡張したものと推定される。周溝の規模は幅25～17cm、深さ16～2cmを測る。ピットは南壁際の西寄り部分で1基が検出された。平面は楕円形で規模は径50×40cm深さ9cmを測る。

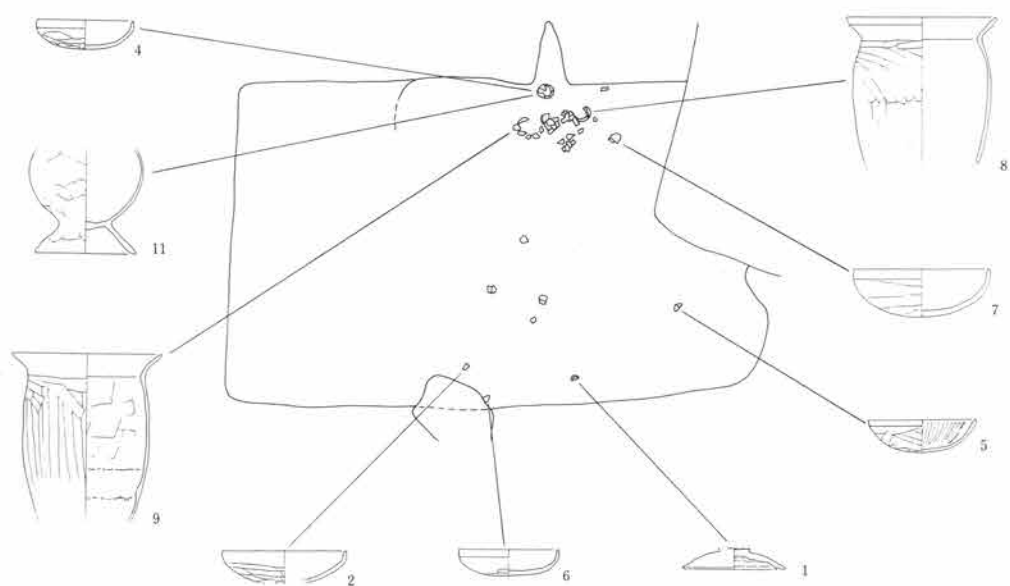
遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、同甕、蓋、高台付碗、長頸瓶等の破片が約500点程出土している。カマド周辺に集中する他は覆土からの出土がほとんどである。時期は古墳時代後期～平安時代に亘るが、カマド及び床面出土のものについては鬼高期末～奈良時代初頭と考えてよいであろう。

重複遺構は216号住居跡で、新旧関係は217号住→216号住である。なお南壁の中央部及び南東コーナー部は後世の攪乱を受けている。

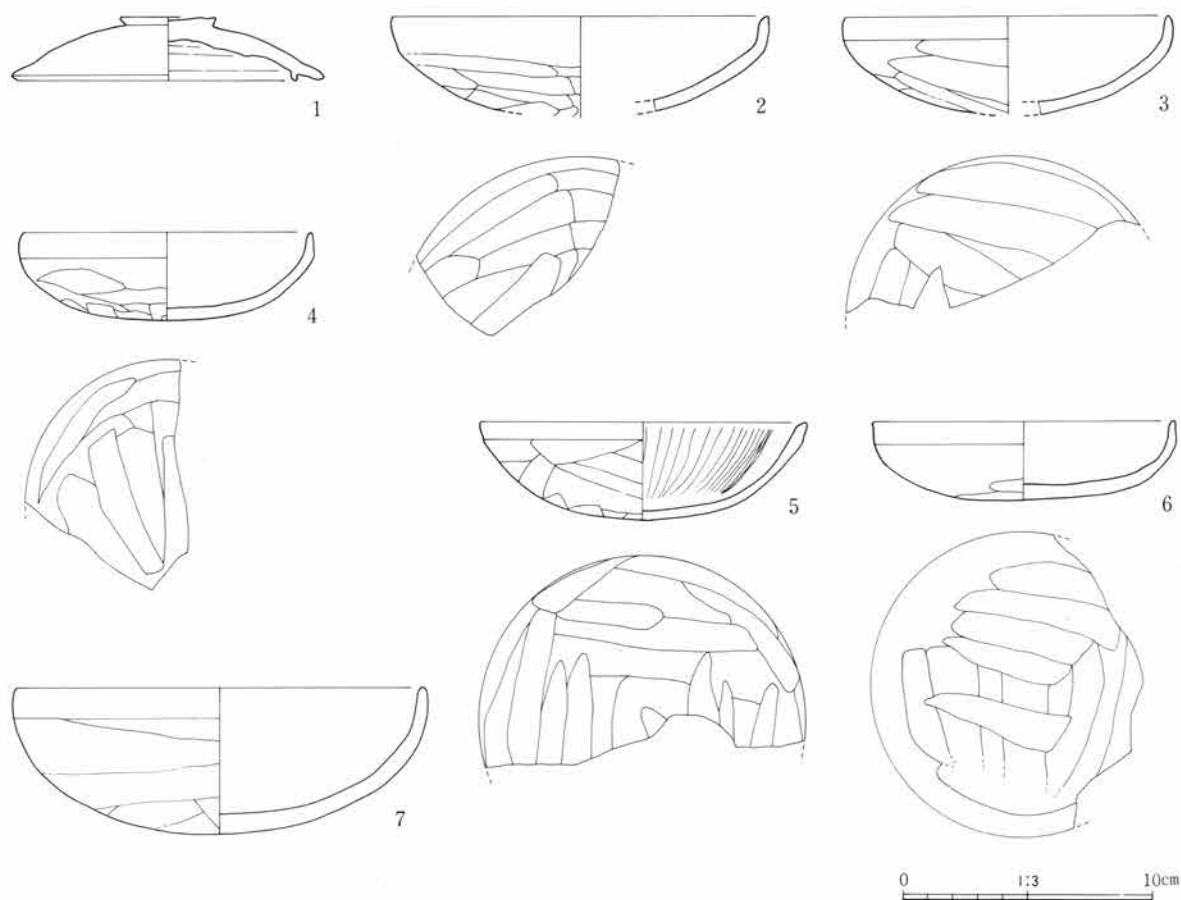
218号住居跡 (欠番)



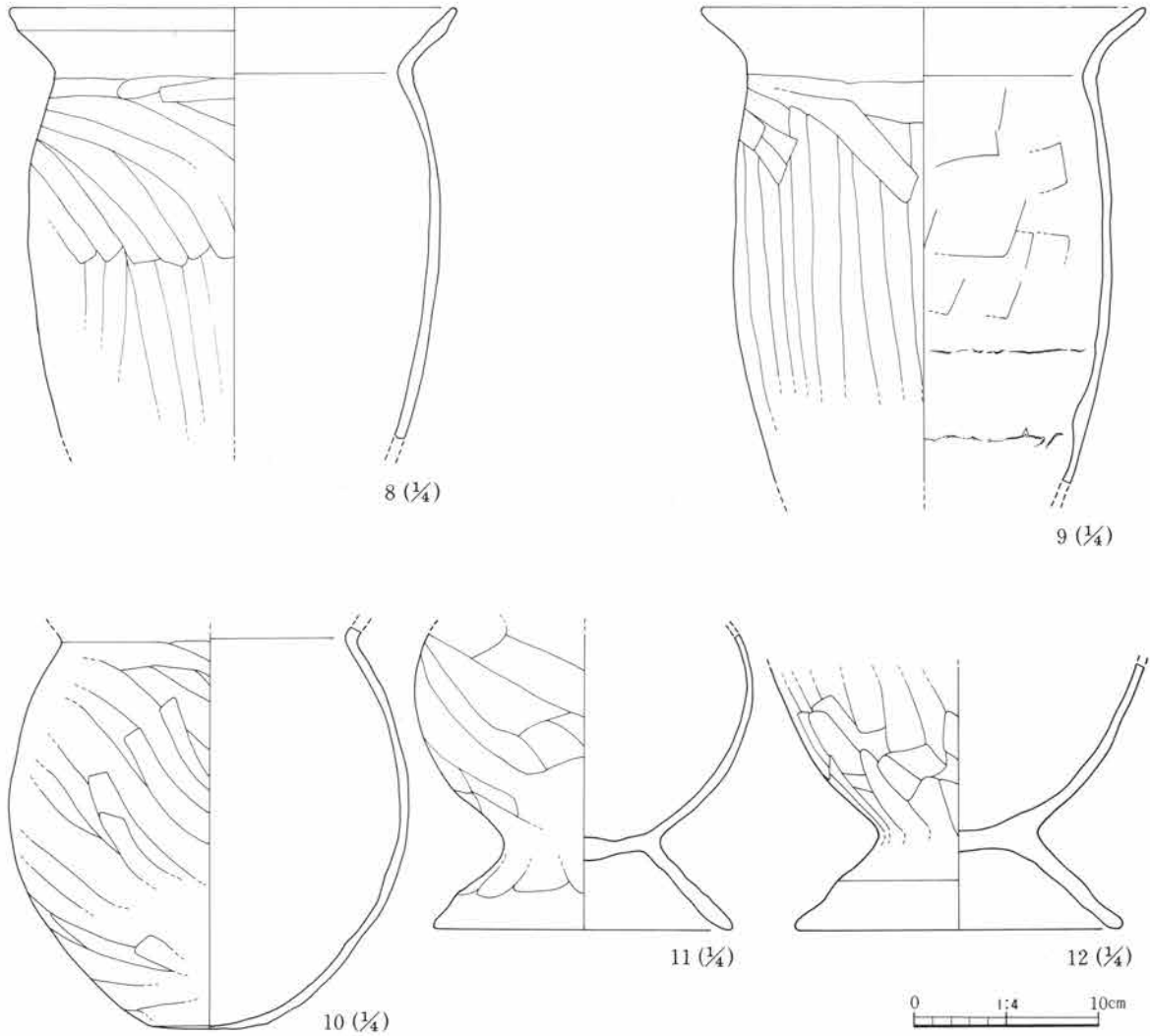
第256図 217号住居跡



第257図 217号住居跡遺物分布図



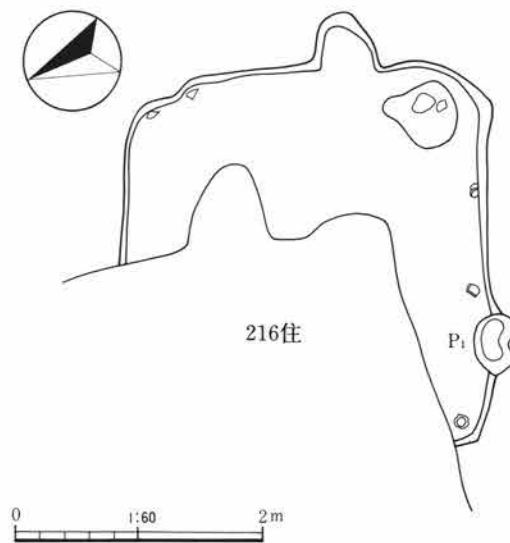
第258図 217号住居跡出土遺物(1)



第259図 217号住居跡出土遺物(2)

219号住居跡 (第260図、PL.10)

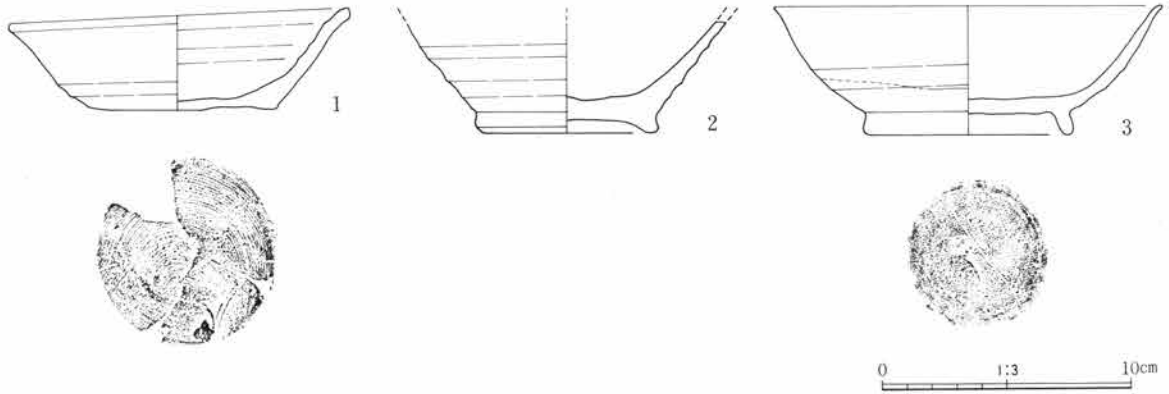
IV区D-6・7、E-6・7グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。規模は東西壁間距離で2.8mを測る。主軸方向はS-77°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高18~6cmを測る。床面は地山のローム土でやや凹凸がある。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、規模は長さ49cm、幅61cmを測る。煙道部は検出されなかった。本体は壁外に築かれる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。平面形は「瓢^{ひさこ}」形を呈し、規模は径60×46cm深さ26cmを測る。ピットは南壁の西寄り検出され、楕円形を呈しており規模は径45×25cm深さ6cmを



第260図 219号住居跡

測る。

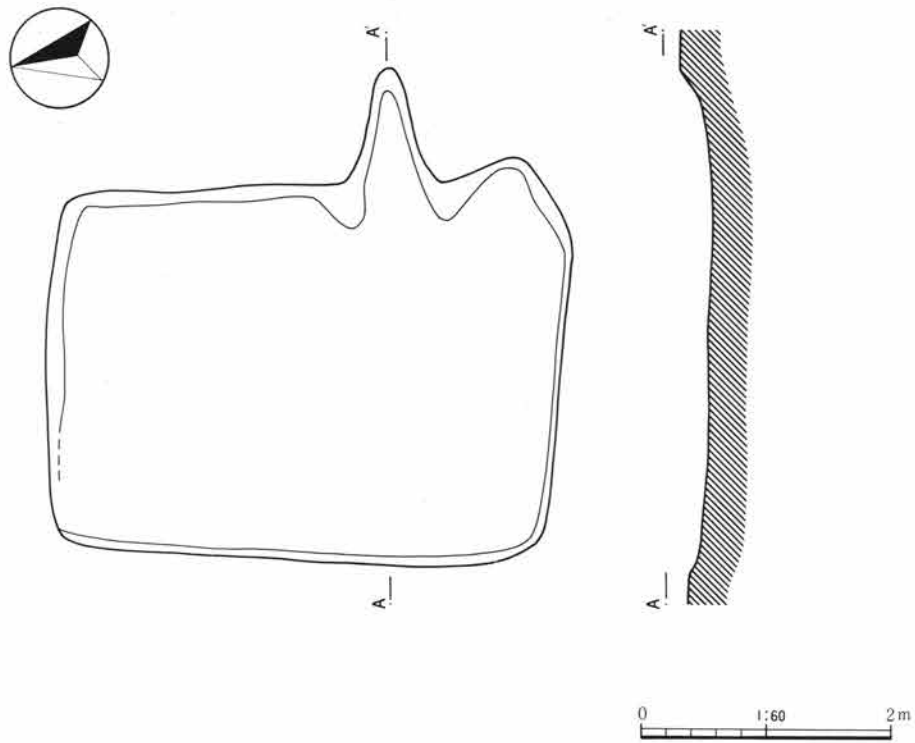
遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付碗、須恵器蓋の破片約120点が出土している。杯類は須恵器が主体を占める。出土位置はほとんどが覆土である。小破片が多いが、残存状態良好なもの時期は平安時代(10世紀代)に限られるようである。



第261図 219号住居跡出土遺物

220号住居跡 (第262図、PL.10)

IV区B-6、C-6・7グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.20×4.13m、面積12.3㎡を測る。主軸方向はS-78°-Eを指す。壁は崩落が激しく残存状態不良であり、確認壁高24~1cmを測る。床面はロームブロックを含む褐色土で比較的平坦である。カマドは東壁南寄りに構築され、長さ129cm、幅129

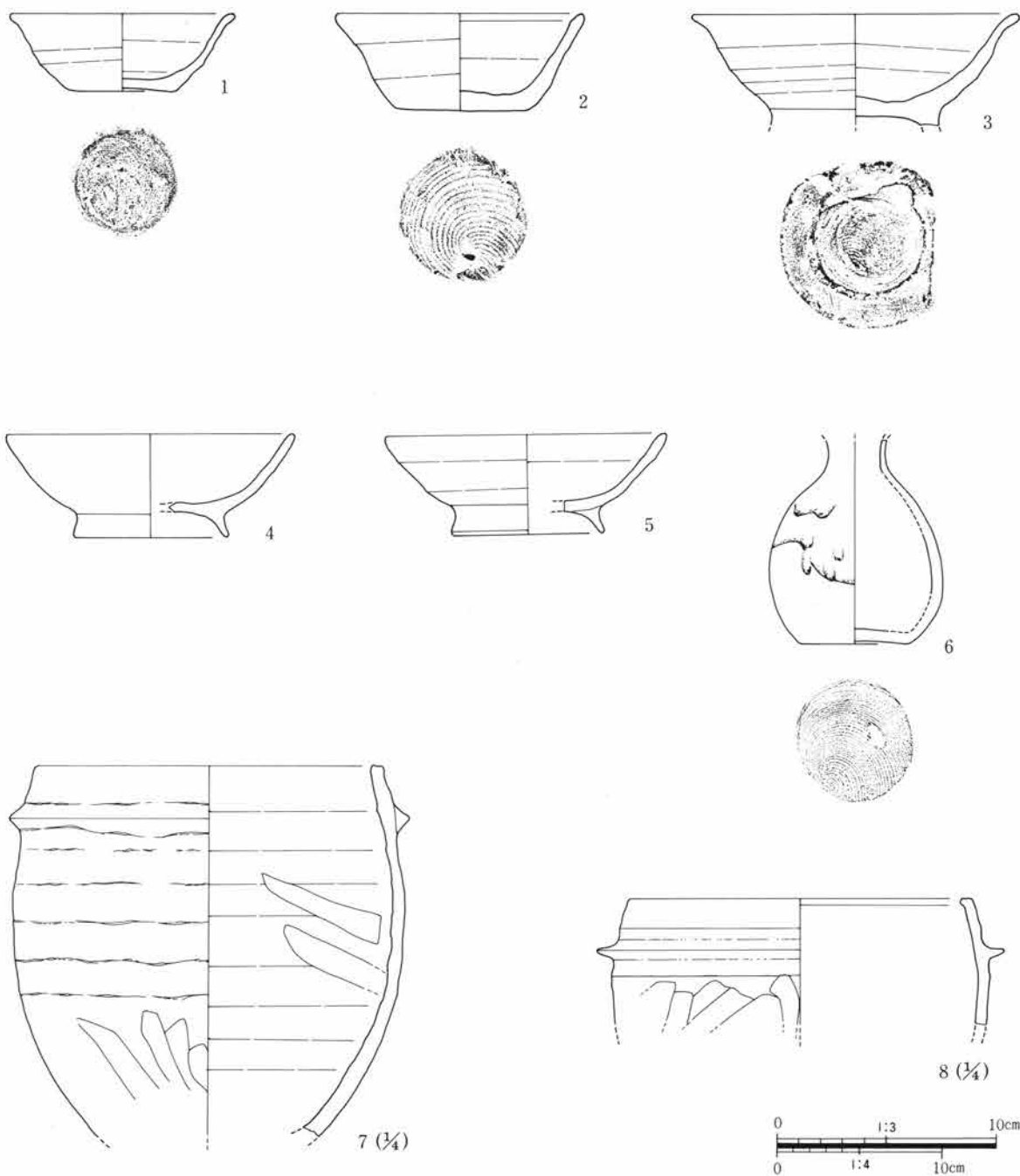


第262図 220号住居跡

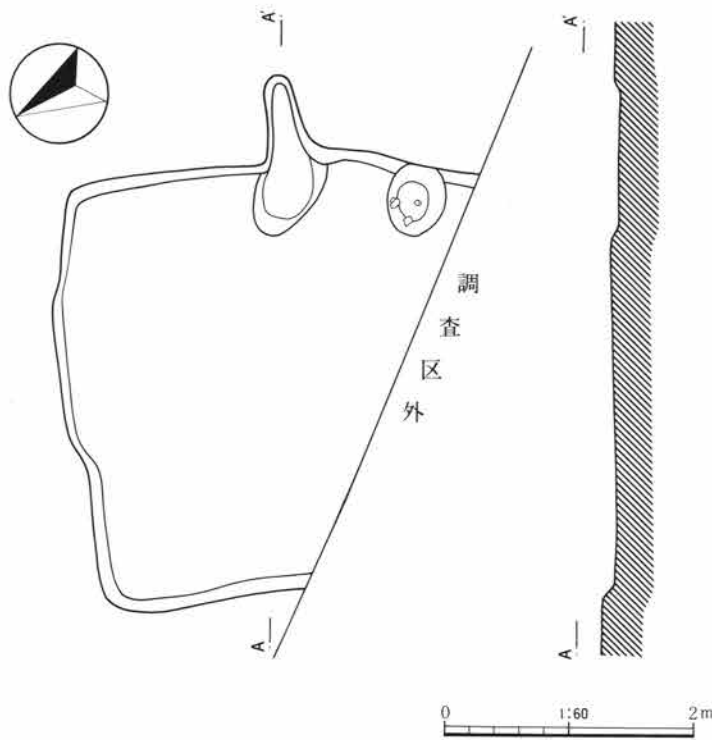
cmを測る。そで部は30cm程地山を掘り残して基部としている。燃烧部は壁外に築かれたと思われる。煙道は燃烧部底面から緩やかな曲線を描いて立ち上がる。貯蔵穴、ピット、周溝等の施設は検出されなかった。住居覆土は上層に軽石（給源不明）を若干含む褐色土、下層はローム粒と灰を含む褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器甕、同杯、高台付碗、羽釜、灰釉小瓶等が約350点、及び砥石2点が出土する。出土位置はカマド周辺に集中する以外はほとんどが覆土中である。又甕の量に比べ羽釜の占める割合が比較的多い。須恵器杯や灰釉から時期は平安時代（10世紀前半）のものと考えてよいようである。

重複遺構は11号溝で南壁部分で接しているが新旧関係は不明であった。



第263図 220号住居跡出土遺物

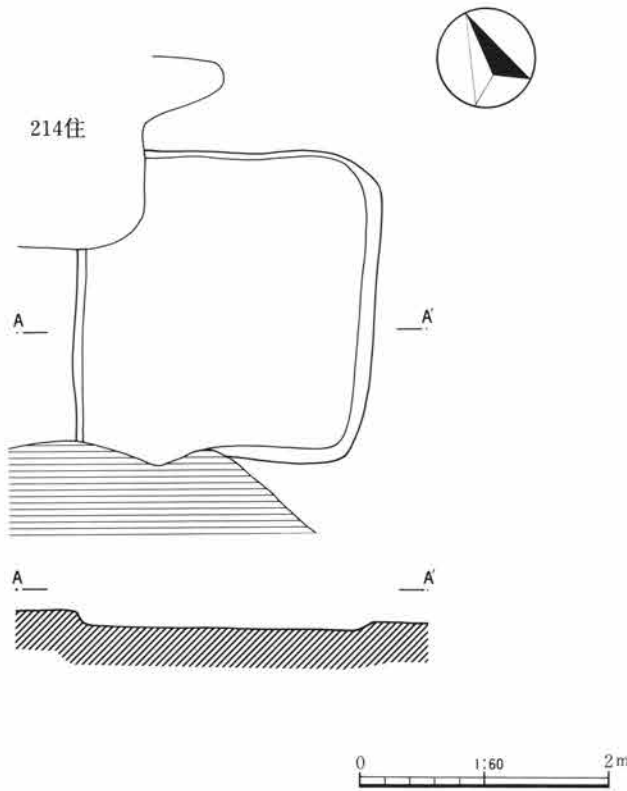


第264図 221号住居跡

221号住居跡 (第264図、PL.10)

IV区B-4・5グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。南西半は調査区外のため不明。東西壁間距離は3.40mを測る。主軸方向はS-71°-Eを指す。壁は外傾し確認壁高15~4cmを測る。床面は地山のローム土を利用し凹凸が多い。カマドは東壁のほぼ中央に構築され規模は長さ126cm、幅54cmを測る。軸方向はS-69°-Eを指す。燃烧部は床面より5cm程低く掘り込まれている。貯蔵穴は東壁際のカマド右脇で1基が検出された。円形を呈し、規模は径54×46cm深さ17cmを測る。

遺物は貯蔵穴より平安時代と思われる土器片数点が出土したのみである。重複遺構はない。



第265図 222号住居跡

222号住居跡 (第265図、PL.10)

IV区E-5・6、F-5・6グリッドに位置する。平面形は隅丸正方形を呈すると思われる。規模は2.39×2.40mで、主軸方向はN-27°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は21~10cmを測る。床面は地山のローム土を利用しておりほぼ平坦である。カマド、貯蔵穴、周溝等の住居内施設については全く検出されなかった。

遺物は覆土より時期不明の土器片が数点出土したのみである。

重複遺構は214号住居跡で、新旧関係は不明であった。

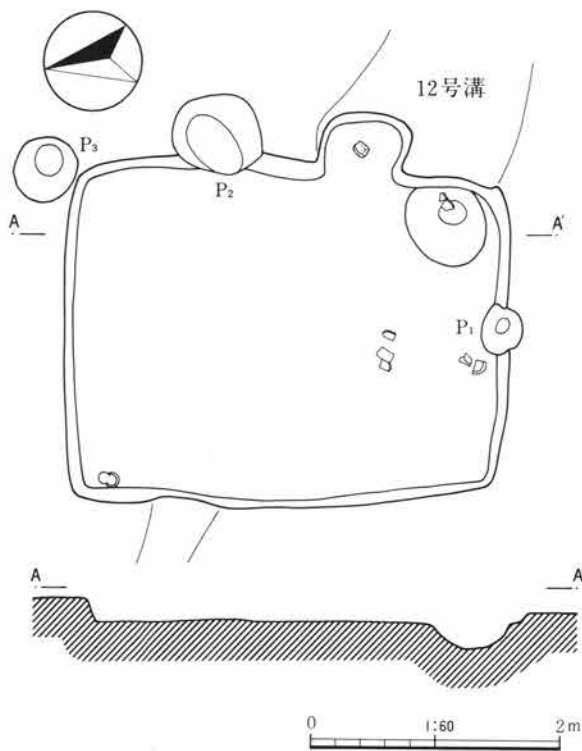
223号住居跡 (第266図、PL.10)

IV区D-8・9、E-8・9グリ

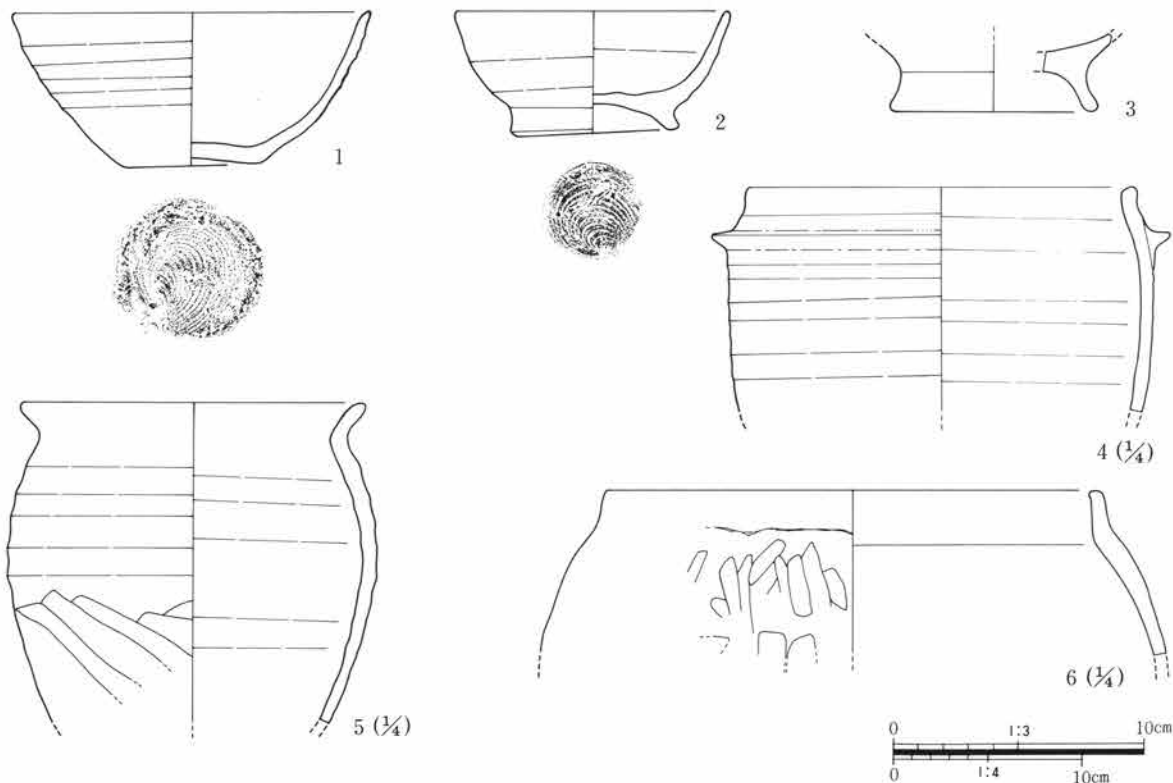
ッドに位置する。平面は横長長方形を呈し規模は2.82×3.53m、面積は9.6㎡を測る。主軸方向はS-83°-Eを指す。壁は残存状態不良で、やや外傾し確認壁高は19~9cmを測る。床面はロームブロックを混入する褐色土で、比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。燃焼部のみ検出され、長さ72cm、幅56cmを測る。壁外に築かれたと思われる。貯蔵穴は南東コーナー部で検出された。円形を呈し、規模は径72×60cm深さ22cmを測る。ピットは東壁と南壁上に3基が検出された。規模はP₁径41×33cm深さ36cm、P₂径70×67cm深さ17cm、P₃径52cm深さ40cmを測る。性格は不明。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同蓋、高台付碗、羽釜、灰釉等が約780点及び土錘が出土している。出土位置は覆土が多い。又カマド内から10cm大の河原礫が出土している。時期は平安時代(11世紀代)のものと思われる。

重複遺構は12号溝で、新旧関係は土層観察より223号住→12溝と思われる。



第266図 223号住居跡



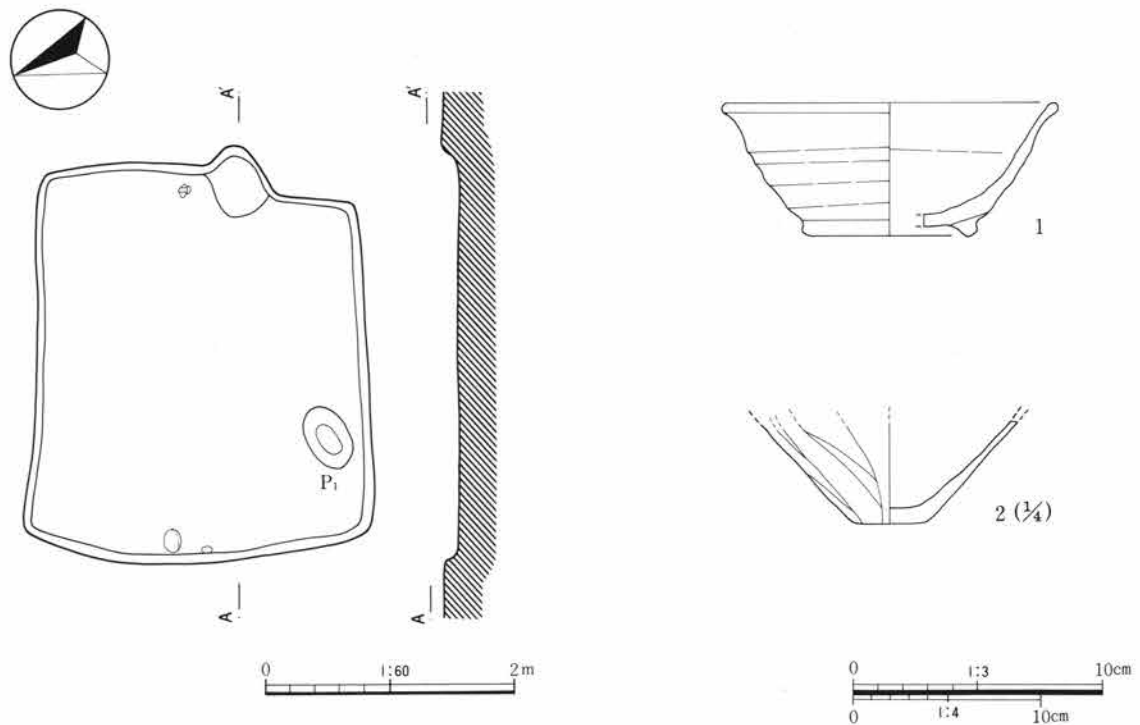
第267図 223号住居跡出土遺物

224号住居跡（第268図、PL.10）

IV区B-7グリッドに位置する。平面はやや縦長の長方形を呈する。規模は3.15×2.80m、面積8.1㎡を測る。主軸方向はS-74°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高11~1cmを測る。床面は地山のローム土をそのまま利用する。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。燃烧部のみが検出された。壁を若干掘り込んで築かれ、規模は長さ56cm、幅56cmを測る。ピットは南壁際西寄りでは1基が検出された。楕円形を呈し、規模は径50×32cm深さ25cmを測る。住居覆土は上層に軟質茶褐色土、下層に軽石（給源不明）を含む黒褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、高台付碗等の破片約10点が出土している。平安時代のものであると思われる。

重複遺構はない。



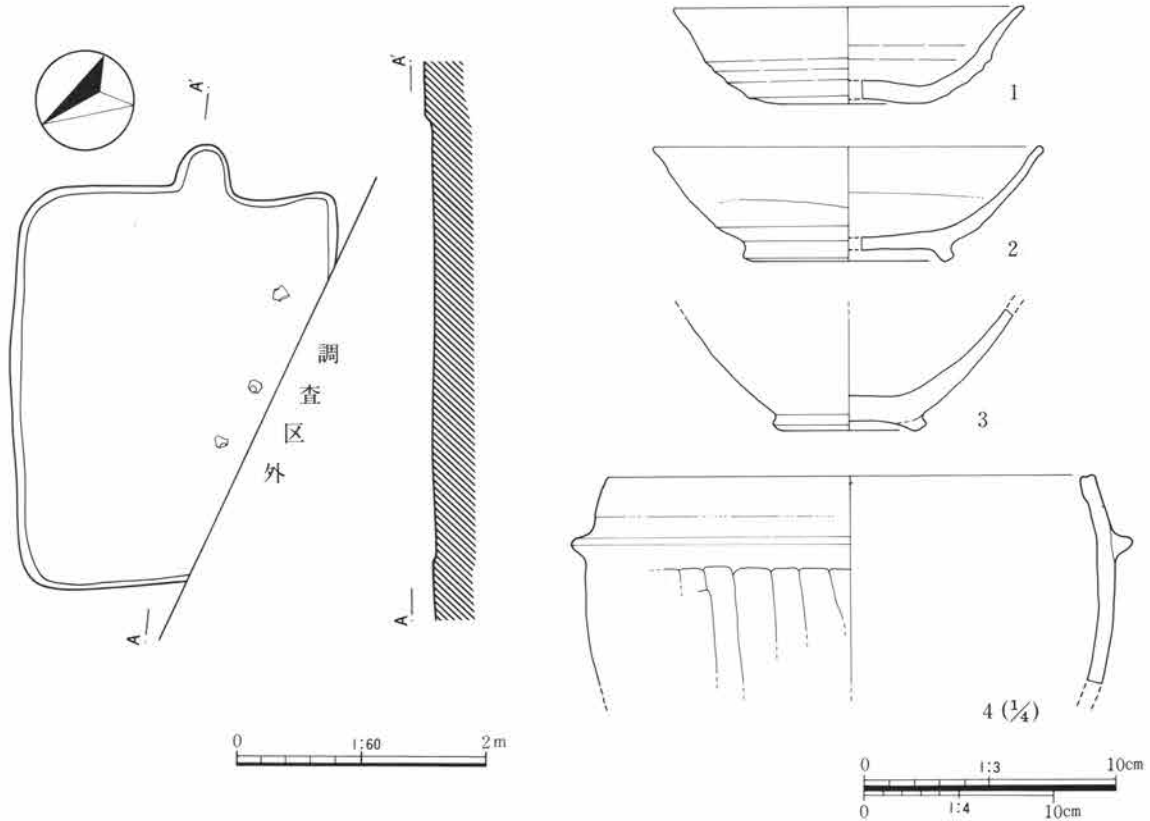
第268図 224号住居跡及び出土遺物

225号住居跡（第269図、PL.10）

IV区B-8・9グリッドに位置する。平面は縦長長方形と思われる。西半は調査区外のため不明。規模は3.16×2.54mを測る。主軸方向はS-63°-Eを指す。壁は後世の削平を受けてほとんど残存せず、確認壁高10~1cmを測るのみである。床面は地山のローム土をそのまま利用する。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。燃烧部のみ検出され、規模は長さ58cm、幅50cmを測る。燃烧部は壁を掘り込んで築かれる。その他の施設等は検出されなかった。

遺物は須恵器杯、高台付碗、甕、羽釜、灰釉碗等約90点程が出土する。出土位置は覆土が大部分である。時期は平安時代（10世紀代）のものであると思われる。

重複遺構はない。



第269図 225号住居跡及び出土遺物

226号住居跡（第270図、PL.10）

IV区C-10・11、D-10・11グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.60×4.20m、面積は14.7㎡を測る。主軸方向はS-66°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高21~2cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土で、比較的平坦である。カマドは東壁南端に構築される。規模は長さ117cm、幅70cmを測り、軸方向はS-56°-Eを指す。そで部と思われる壁コーナー部に15cm大の河原礫が検出された。おそらく補強材と思われる。燃焼部は壁外に張り出す。煙道は燃焼部底面からほぼ水平に延び、末端部で急に立ち上がる。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。歪んだ円形を呈し、規模は径64×62cm深さ42cmを測る。又東壁寄り中央部でピットが検出されており、歪んだ円形で径85×73cm深さ50cmの規模を測る。なお住居北半に断面皿状の多数の掘り込みが検出されているが、これは住居掘り形時のものかと思われる。住居覆土は上層に軽石（給源不明）を少量含む黒褐色土、下層にはローム粒と灰を含む黒色土が堆積している。

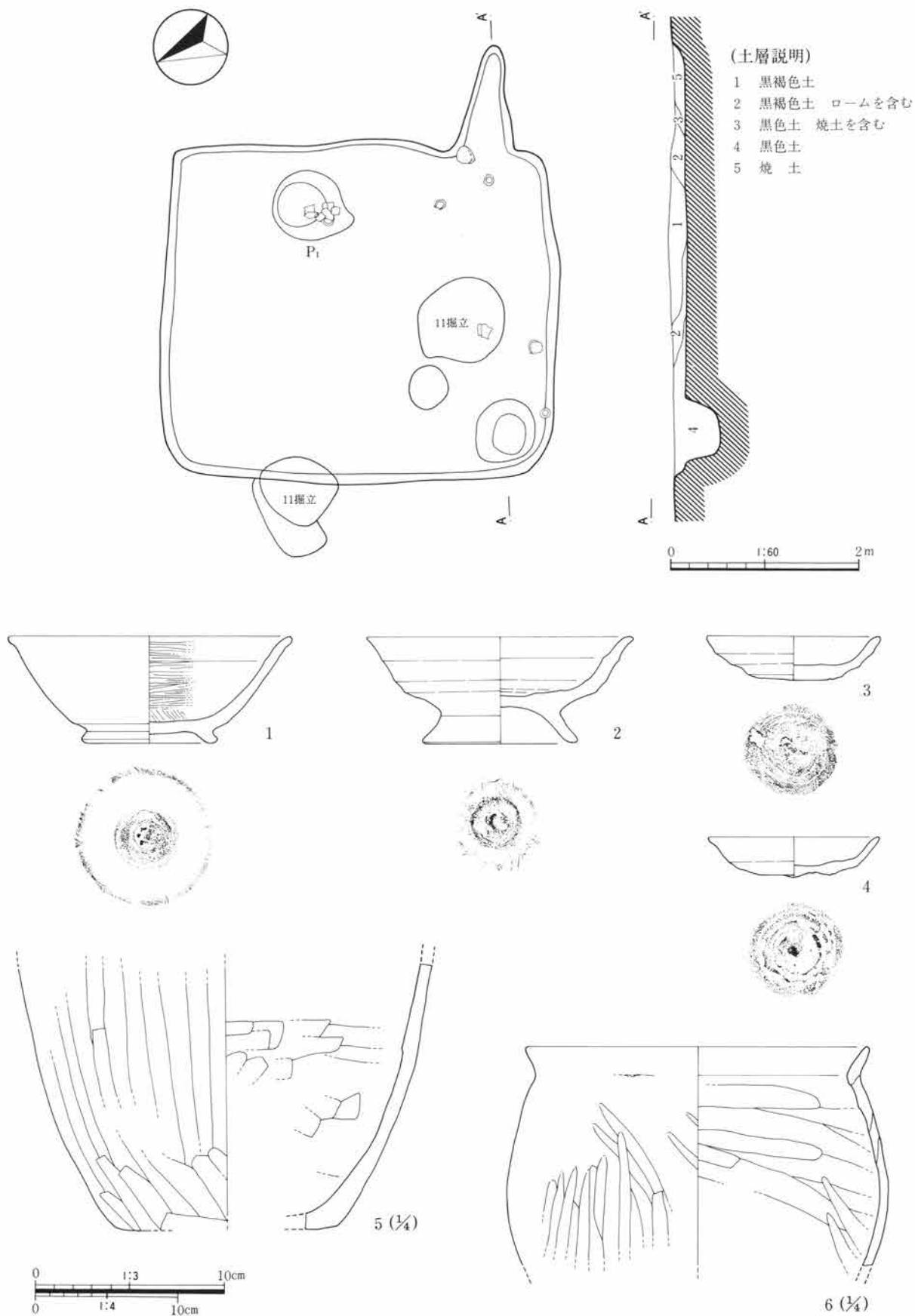
遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付碗、小皿等の破片が約120点程出土している。出土位置はカマド周辺とピットを除けば大部分は覆土である。時期は平安時代（11世紀代）のものが大部分を占める。

重複遺構は10号・11AB号掘立柱建築遺構で、新旧関係は不明であった。

227号住居跡（欠番）

228号住居跡（第271図、PL.10）

IV区E-10・11、F-10・11グリッドに位置する。平面は長方形を呈し、規模は4.10×5.05mを測る。主軸



第270図 226号住居跡及び出土遺物

方向はN-3°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高は15~1cmを測る。床面は地山のロームを利用する。カマドは検出されなかった。周溝は東壁~南壁で検出され、規模は幅31~19cm深さ5~2cmを測る。

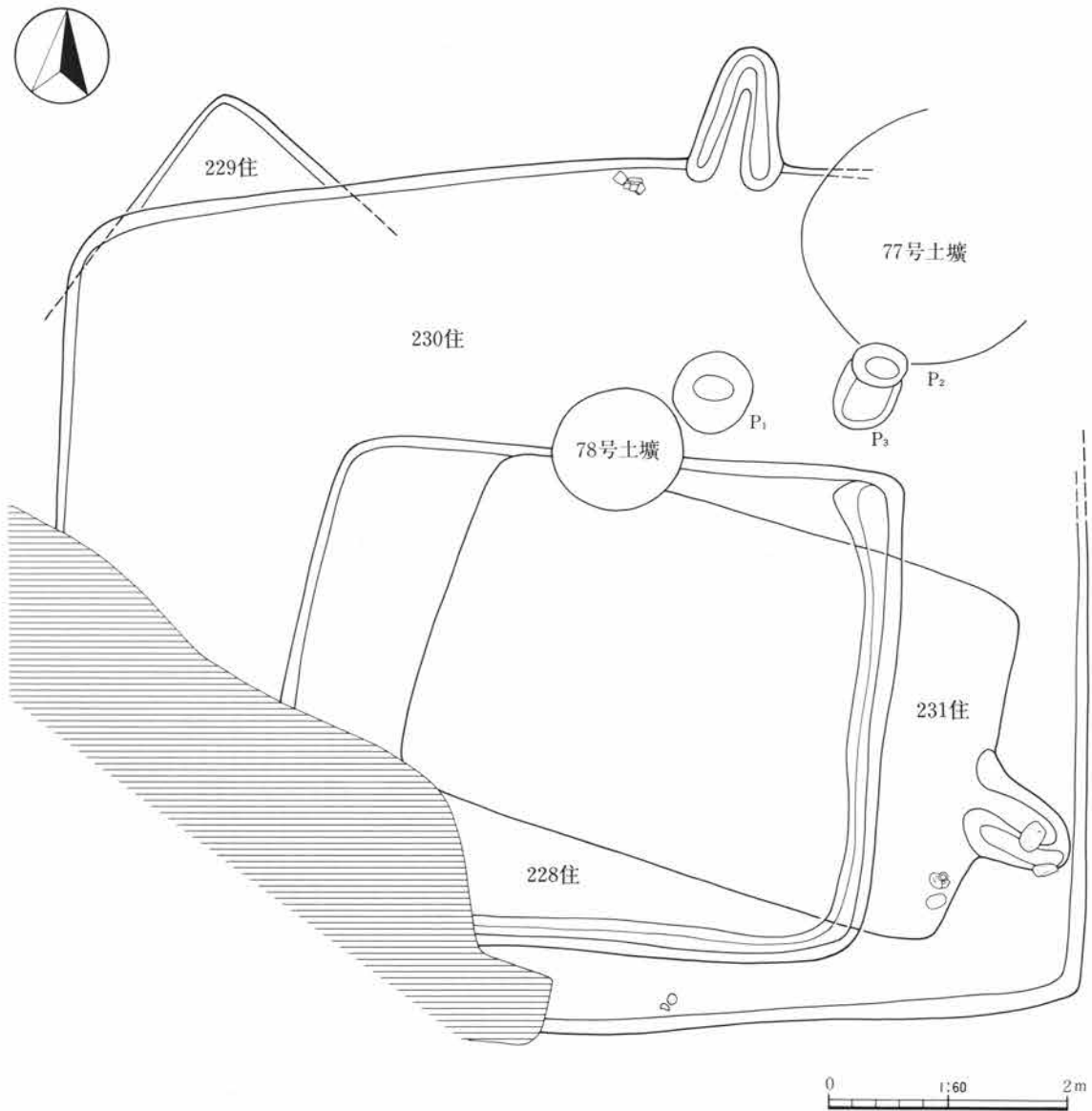
遺物は杯、甕を主体として奈良時代の土器が多量に出土しているが、大部分は覆土からの出土であり、重複する住居跡との分離は不可能であった。

229号住居跡 (第271図、PL.10)

IV区E-11グリッドに位置する。230号住居跡と重複しており、北側コーナー部のみ検出された。形状、規模ともに不明である。壁は8~1cmの高さを測る。遺物は出土していない。

230号住居跡 (第271図、PL.10)

IV区D-10・11、E-10・11、F-10・11グリッドに位置する。南西コーナー部は攪乱、北東コーナー部で



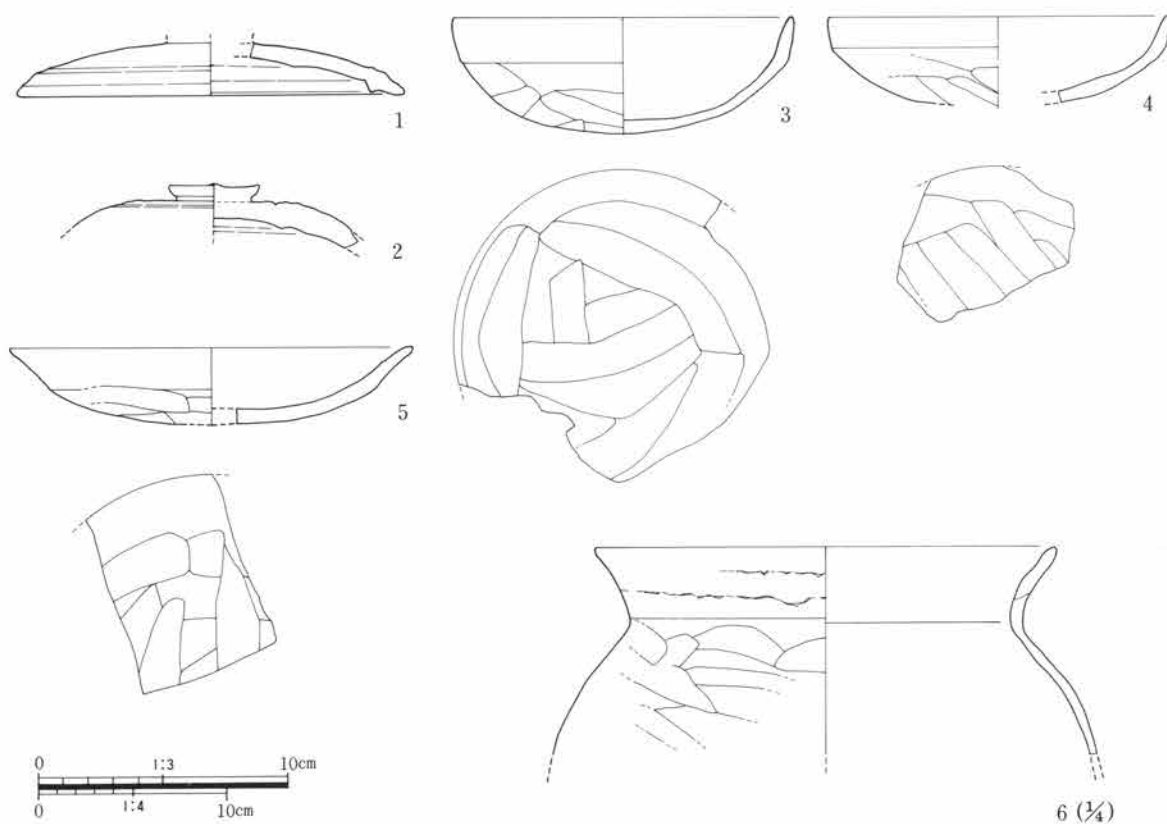
第271図 228・229・230・231号住居跡

第V章 検出された遺構と遺物

他遺構と重複するため、この部分の形状は不明。おそらく横長長方形になると思われる。規模は7.50×(8.55)mを測る。主軸方向はN-7°-Wを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は15~4cmを測る。床面は地山のローム土である。なお床面のレベルは重複する228号住居跡より10cm前後高く、229号住居跡より5cm程低い。カマドは北壁の東寄りに構築される。規模は長さ118cm、幅80cmを測り、軸方向はN-5°-Eを指す。そで部は若干壁内に張り出す。煙道は燃焼部底面よりしだいにすぼまりながら水平に延びる。ピットは3基が検出された。規模はP₁径66cm深さ58cm、P₂径46×36cm深さ46cm、P₃径51cm深さ49cmを測る。P₂とP₃は重複する。住居覆土は上層に黒褐色砂質土、下層にローム粒を含む黄褐色土が堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器蓋等の破片が多量に出土しており、出土位置は覆土が大部分である。時期は奈良時代のものが主体を占める。

重複遺構は228号住居跡、229号住居跡、231号住居跡、77号土壌、78号土壌、12号溝で、判明した新旧関係は77号土壌→230号住→231号住である。



第272図 230号住居跡出土遺物

231号住居跡 (第271図、PL.10)

IV区E-10・11、F-10グリッドに位置する。カマドと床面が検出されたが、壁は明確でない。縦長長方形を呈すると思われる。床面は重複する228号住居跡、230号住居跡の覆土を利用する。カマドは東壁に構築され規模は長さ96cm、幅86cmを測る。軸方向はS-60°-Eを指す。煙道付近で10cm大の円礫が検出されたが、その性格は不明である。

遺物は覆土より奈良時代~平安時代の土器片が出土しているが、重複遺構との分離が困難である。本住居跡に伴う可能性の高いのは図示(第273図-1)した羽釜である。

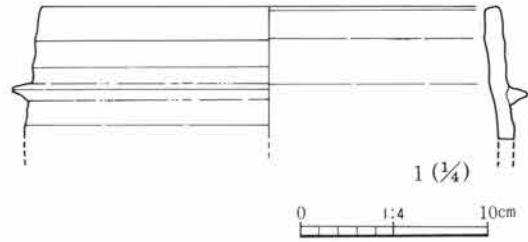
重複遺構との新旧関係は前述の通り、土層観察により228号住・230号住→231号住である事が確認された。

232号住居跡 (第274図、PL.11)

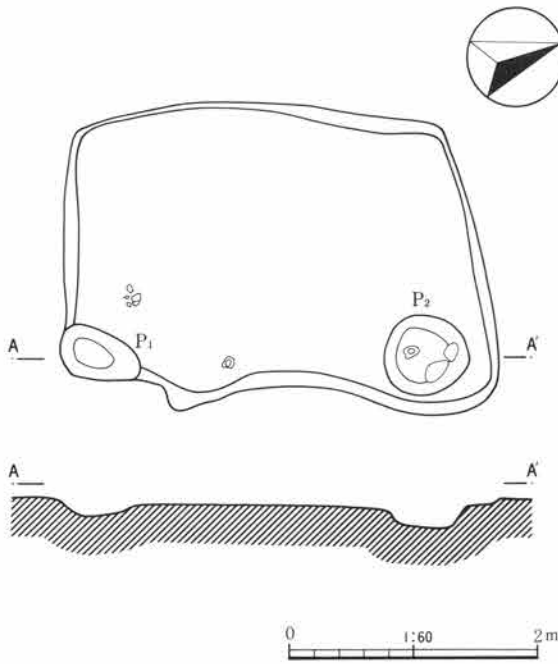
IV区D-9・10グリッドに位置する。平面は歪んだ長方形を呈する。主軸方向はN-17°-Eを指す。壁はほとんど残存しておらず、壁高12~1cmを測る。床面は地山のローム土で比較的平坦。カマドは検出されなかった。ピットは北東と南東のコーナー部で計2基が検出された。規模はP₁径65×45cm深さ7cm、P₂径65×60cm深さ20cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付椀、蓋、灰釉椀等の破片がピット、床面及び覆土下層から出土している。時期は平安時代のものを主とする。

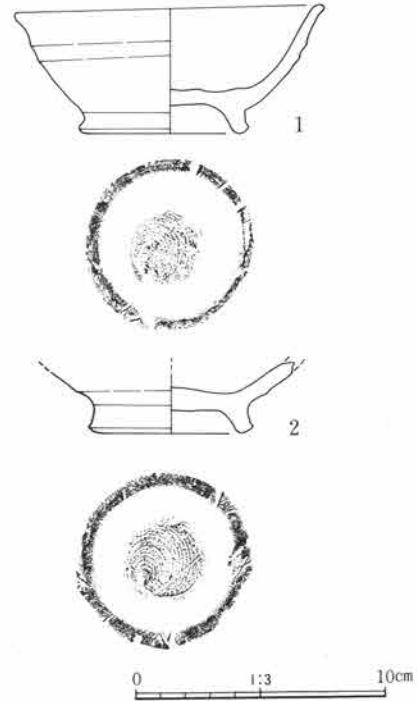
重複遺構はない。なお本住居跡は形状や規模が他と比べ異質であり、又カマドがない点等を考慮すれば住居跡ではなく、別の性格をもつ遺構と考えるべきだろう。



第273図 231号住居跡出土遺物



第274図 232号住居跡及び出土遺物



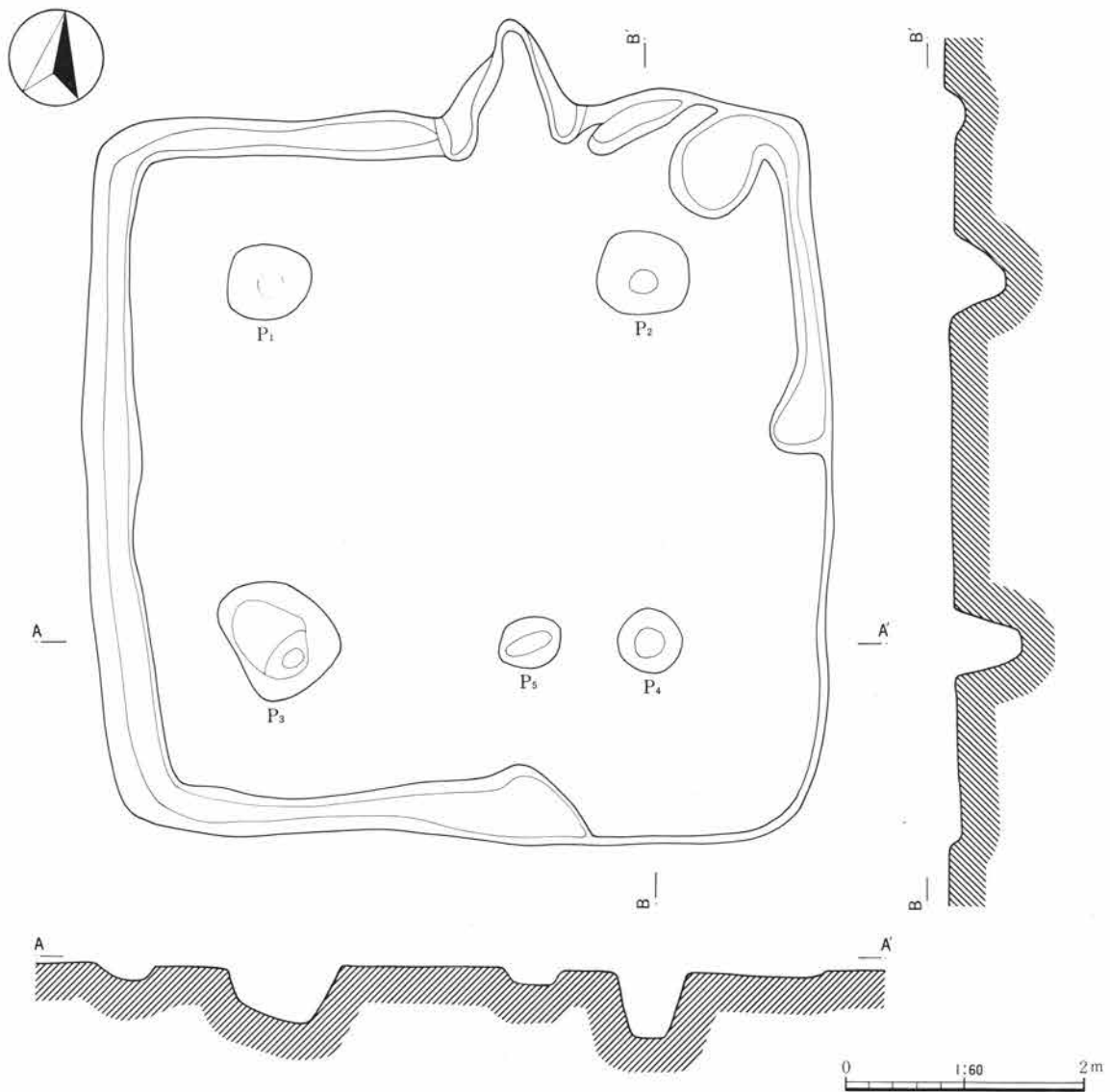
233号住居跡 (第275図、PL.11)

IV区F-12・13・14、G-12・13・14グリッドに位置する。平面は隅丸正方形を呈し、規模は6.24×6.20mを測る。面積は36.5㎡を測る。主軸方向はN-9°-Wを指す。壁はほぼ直立し確認壁高は19~3cmを測る。床面は地山のローム土でほぼ平坦。カマドは北壁の中央よりやや東寄りに構築される。規模は長さ115cm、幅は122cmを測る。軸方向はN-10°-Wを指す。そで部は若干壁内に張り出す。燃烧部は壁を掘り込んで築かれている。煙道は燃烧部奥壁の中位から掘り込まれて延びる。燃烧部中央から15cm大の河原礫が直立した状態で検出されたが、おそらく支脚として用いられたものと思われる。ピットは5基が検出された。規模はP₁径67×60cm深さ53cm、P₂径76×67cm深さ66cm、P₃径100×85cm深さ75cm、P₄径52cm深さ57cm、P₅径55×42cm深さ

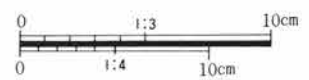
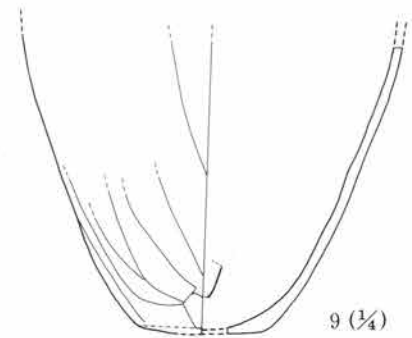
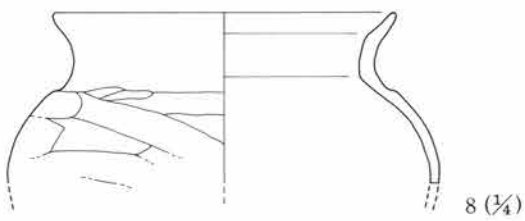
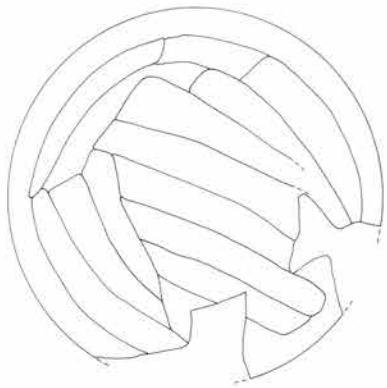
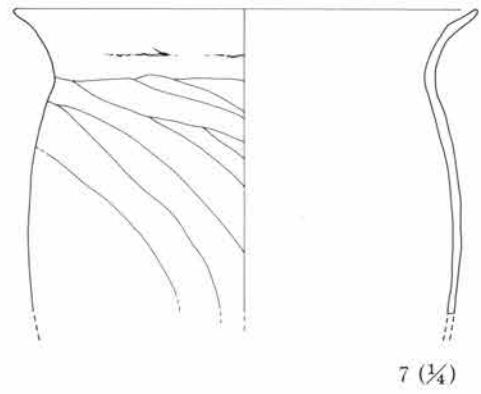
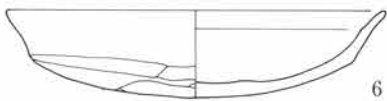
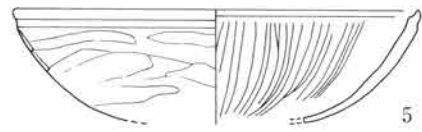
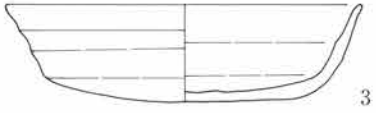
16.5cmを測る。P₁~P₄は位置や規模等から支柱穴と考えられる。各柱間距離はP₁-P₂3.10m、P₃-P₄2.95m、P₁-P₃3.06m、P₂-P₄2.95mを測る。又P₅はP₃とP₄の結ぶ線上にのる事から上屋構造と関わる可能性が考えられよう。周溝は東壁の南半から南壁の東端部にかけての部分を除いて廻っている。規模は場所により均一ではなく幅50~25cm、深さ15~6cmを測る。なお周溝に続き北東コーナー部で径80cm深さ18cmの皿状の掘り込みが検出されたが、貯蔵穴あるいは掘り形かその性格については不明である。周溝の見られない南東部分は出入口施設の存在した事を想定させる。しかしそれらしき痕跡は全く検出されなかった。

遺物は杯、甕、壺、椀、須恵器杯、高台付杯、蓋等が約300点程出土している。出土位置はカマド及び南壁際に集中する傾向を示し、他は覆土が多い。時期は鬼高期~平安時代に亘るが、本住居跡に伴うと思われるものは奈良時代前半と考えられる。

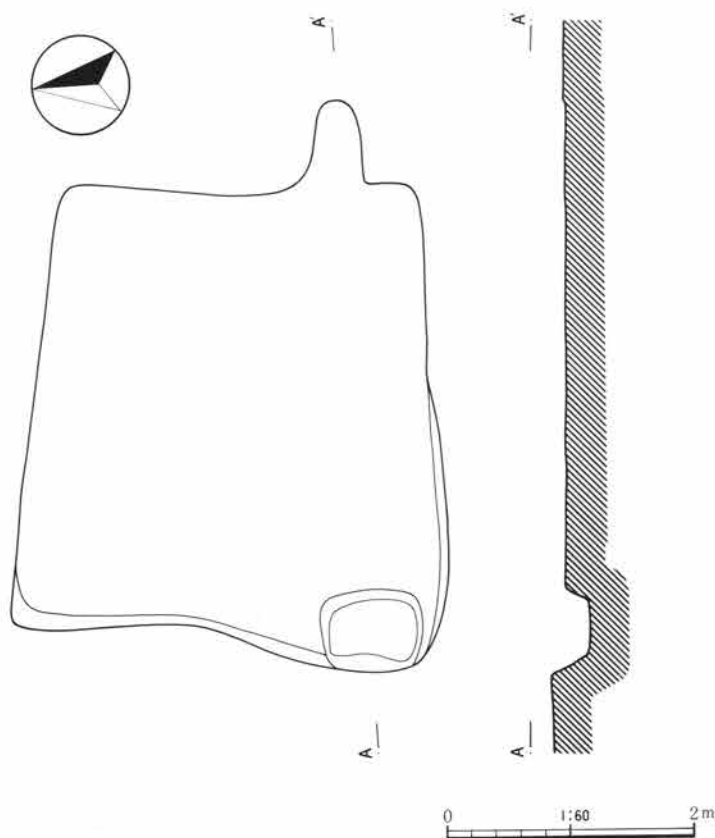
重複遺構は255号住居跡で、土層観察では確認できなかったが、出土遺物の比較から新旧関係は255号住→233号住と思われる。



第275図 233号住居跡



第276図 233号住居跡出土遺物



第277図 234号住居跡

234号住居跡 (第277図、PL.11)

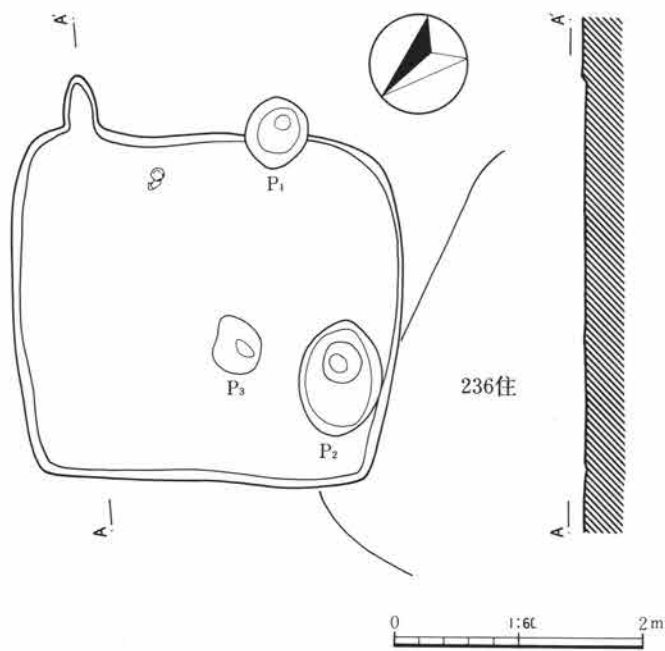
IV区G-15・16、H-16グリッドに位置する。平面は歪んだ長方形を呈する。規模は3.88×3.45mで、面積9.6㎡を測る。主軸方向はS-78°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高6～1cmを測る。床面は地山のローム土である。カマドは東壁南端に構築され、規模は長さ65cm、幅55cmを測る。軸方向はS-85°-Eを指す。燃烧部底面のみの検出で煙道は不明。貯蔵穴は南西コーナー部で検出された。長方形を呈し、規模は82×65cm深さ33cmを測る。

遺物は時期不明の土器片数点が出土したのみである。

235号住居跡 (第278図、PL.11)

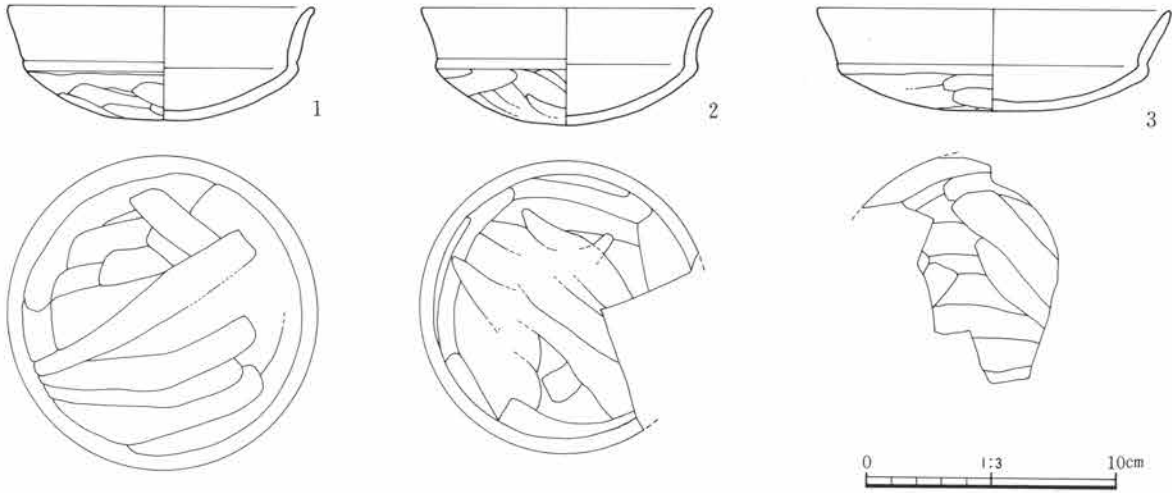
IV区F-14・15、G-14・15グリッドに位置する。平面はやや胴張りの正方形を呈し、規模は2.75×3.05mを測る。主軸方向はS-48°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高11～2cmを測る。床面はローム土を利用し凹凸が激しい。カマドは南東壁の北東隅に構築される。燃烧部あるいは煙道と思われる掘り込みが若干残るのみで、規模は長さ52cm幅30cmを測る。ピットは3基検出された。規模はP₁径57×50cm深さ39cm、P₂径92×66cm深さ26cmを測る。なおP₂は2段になっており下段の径は32cmを測る。P₃は径45×38cm深さ25cmを測る。遺物は床面より杯、甕が20点程出土している。時期は鬼高期に属する。

重複遺構は236号住居跡で、土層観察では確認できなかったが、出土遺物の比較から新旧関係は236号住→235号住

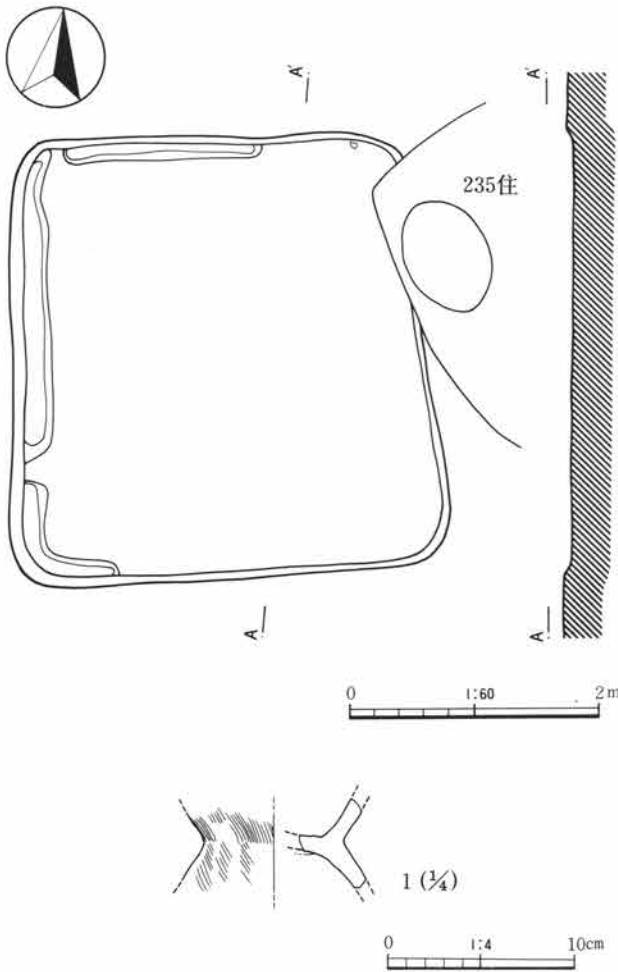


第278図 235号住居跡

と思われる。



第279図 235号住居跡出土遺物



第280図 236号住居跡及び出土遺物

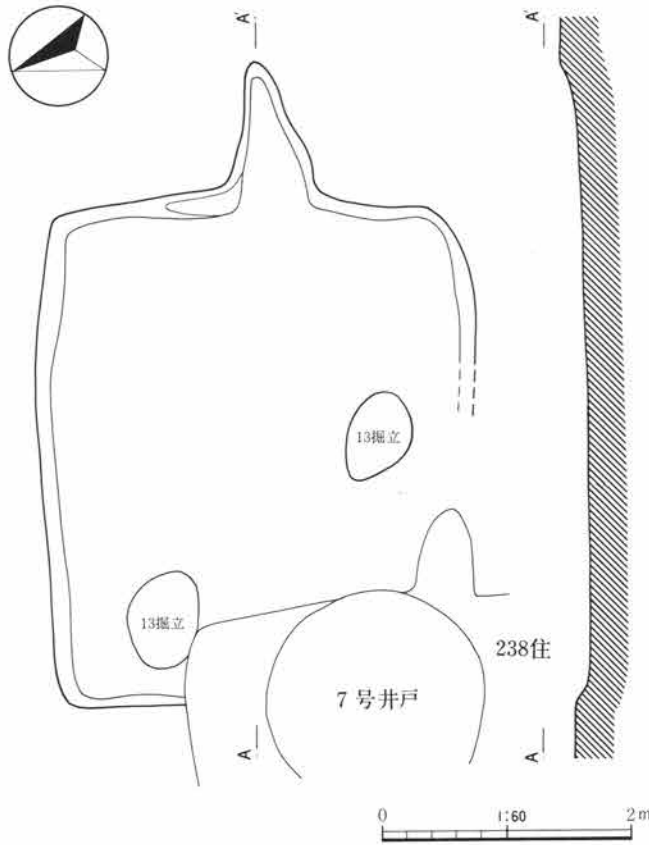
236号住居跡 (第280図、PL.11)

IV区E-15・16、F-15・16グリッドに位置する。平面は隅丸方形を呈すると思われる。規模は3.50×3.55m、面積10.8㎡を測る。主軸方向はN-70°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高14~2cmを測る。床面はロームブロックを含む黒褐色土である。周溝は北壁、西壁、南西コーナー部と3ヶ所で検出された。幅は30~15cm、深さ5~2cmを測り、底面は凹凸が多い。

遺物は甕、S字状口縁台付甕の破片約15点が出土している。古墳時代初頭の石田川期のものと思われる。

237号住居跡 (第281図、PL.11)

IV区C-13・14、D-13・14グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈すると思われる。規模は4.00×3.50mを測る。主軸方向はS-72°-Eを指す。壁は崩落部が多く外傾する。確認壁高は33~6cmを測る。床面は主軸方向の中央部分に地山のロームを掘り残し、その両側を断面皿状に掘り窪めており、ここに貼床を行ったらしい。カマ

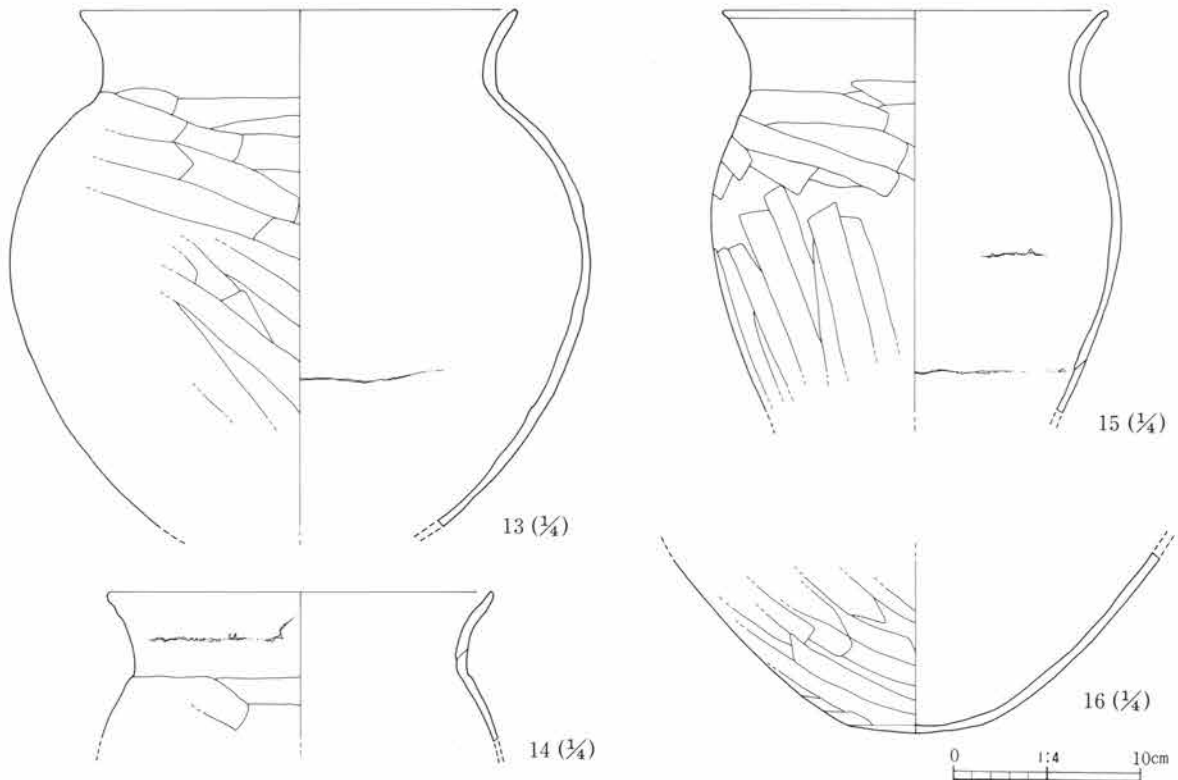


第281図 237号住居跡

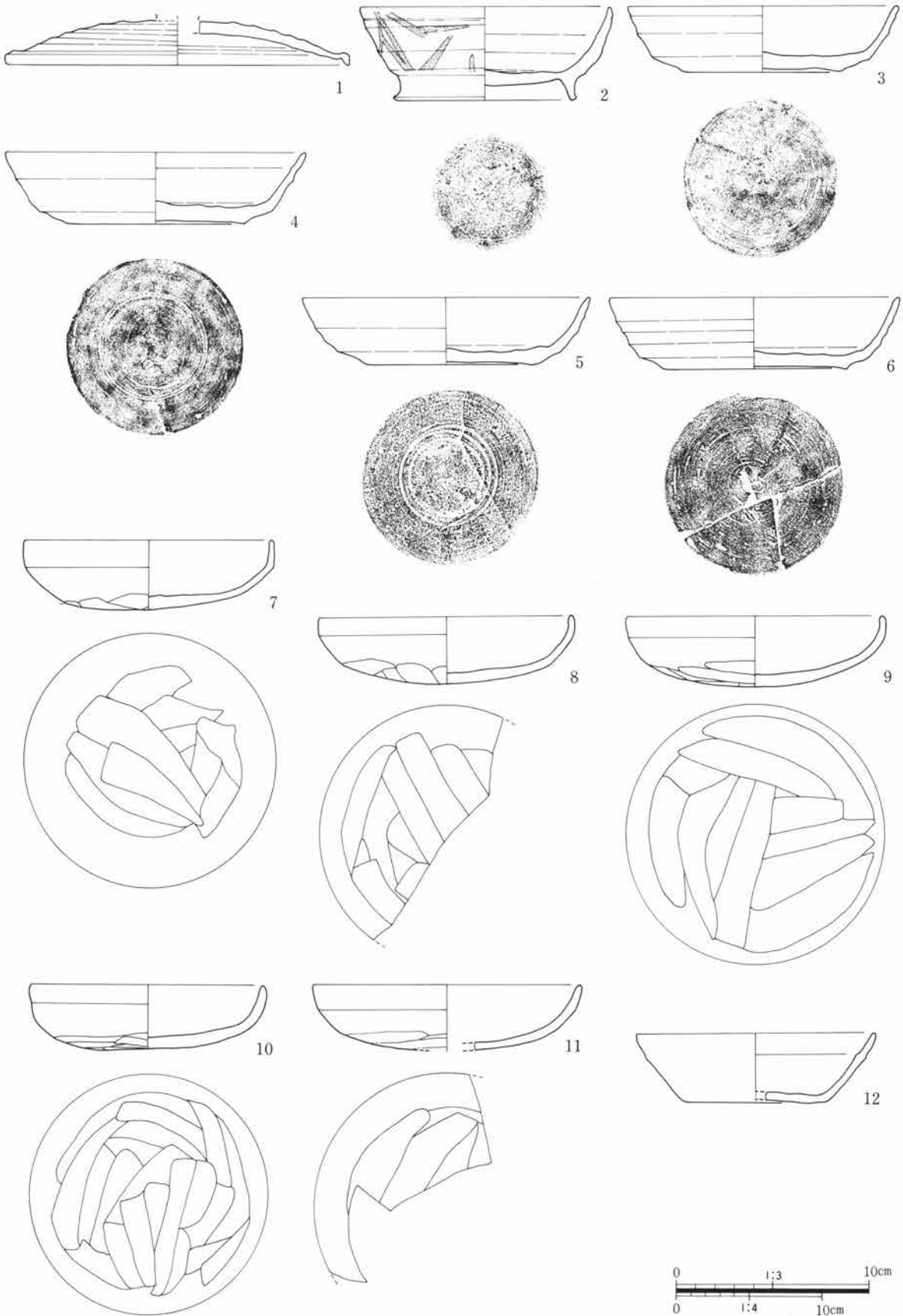
トは東壁中央部に構築され、規模は長さ120cm、幅80cmを測る。軸方向はS-76°Eを指す。燃烧部は壁外に張り出し、底面はしだいに立ち上がり煙道に続く。煙道との境は不明瞭である。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。住居覆土は上層に軽石（給源不明）とロームブロックを含む褐色土、下層にロームブロックを含む暗褐色土が堆積しており、堆積状態から人為的に埋土された可能性が高い。

遺物は杯、甕、台付甕、灰釉瓶、須恵器杯、蓋、高台付杯等の完形品及び破片が約300点程出土している。出土位置はカマド周辺及び南東コーナー部に集中し、他は覆土中央部からのものが多い。床面、カマド、覆土下層のものは平安時代初頭のものと思われる。

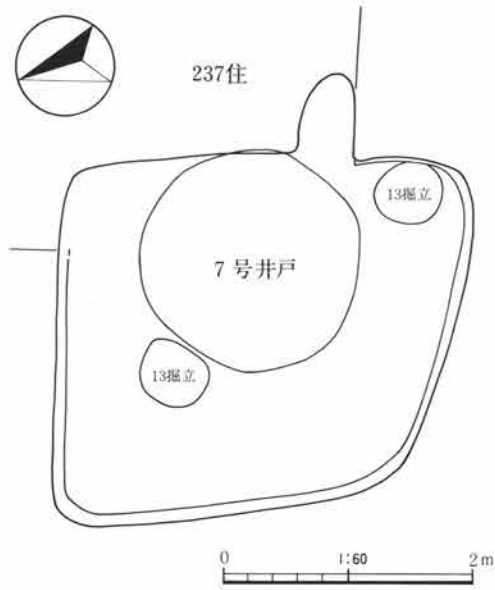
重複遺構との新旧関係は237号住→238号住→7号井戸である。



第282図 237号住居跡出土遺物(1)



第283図 237号住居跡出土遺物(2)



第284図 238号住居跡

238号住居跡 (第284図、PL.11)

IV区C-14・15グリッドに位置する。平面は歪んだ横長長方形を呈し、規模は2.85×3.30mを測る。主軸方向はS-73°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高は10~2cmを測る。床面は地山のローム土で比較的平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築され燃焼部のみ残存する。規模は長さ68cm幅43cmを測る。

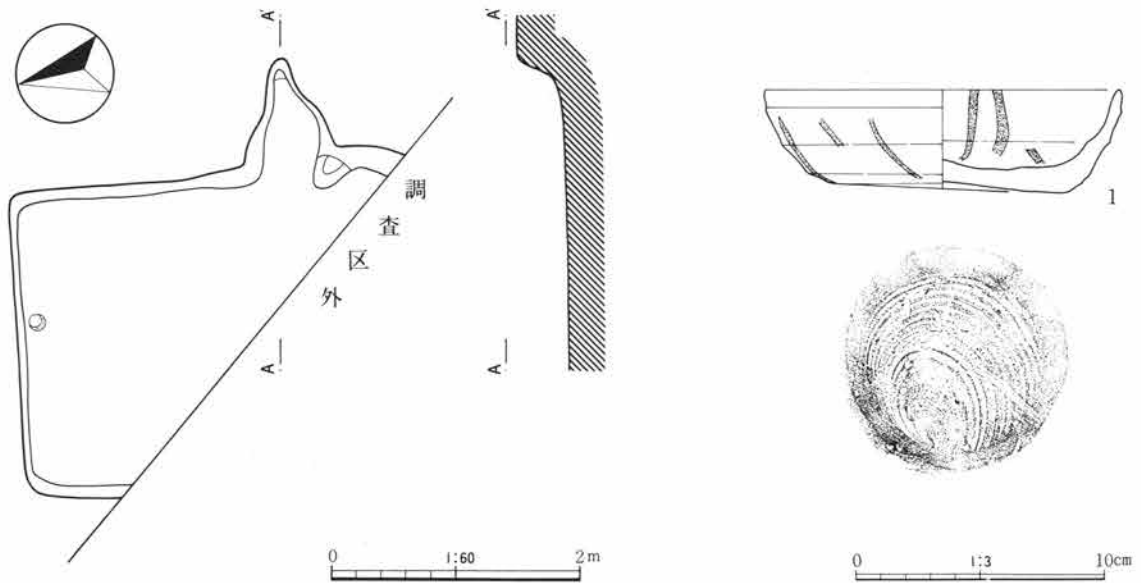
遺物は甕、須恵器杯の破片10点が出土したのみである。時期は平安時代に属するものと思われる。

重複遺構は237号住居跡、7号井戸、13号掘立柱建築遺構で、土層観察で判明した新旧関係は237号住→238号住→7号井戸であった。

239号住居跡 (第285図、PL.11)

IV区B-12・13グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈すると思われる。南西半は調査区外のために不明である。規模は東西壁間距離で2.46mを測る。主軸方向はS-80°-Eを指す。壁はやや外傾し、確認壁高52~31cmを測る。床面は地山のローム土で平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。規模は長さ105cm、幅86cmを測り、軸方向はS-84°-Eを指す。そでは地山を若干掘り残して基部を造り出している。燃焼部底面はしだいに傾斜して立ち上がり煙道に続く。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯等の破片約40点程が出土している。時期は奈良時代(8世紀後半)と思われる。重複遺構はない。



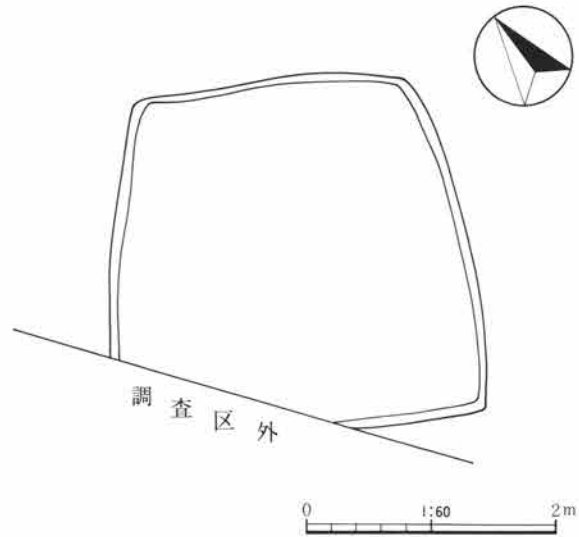
第285図 239号住居跡及び出土遺物

240号住居跡（第286図、PL.11）

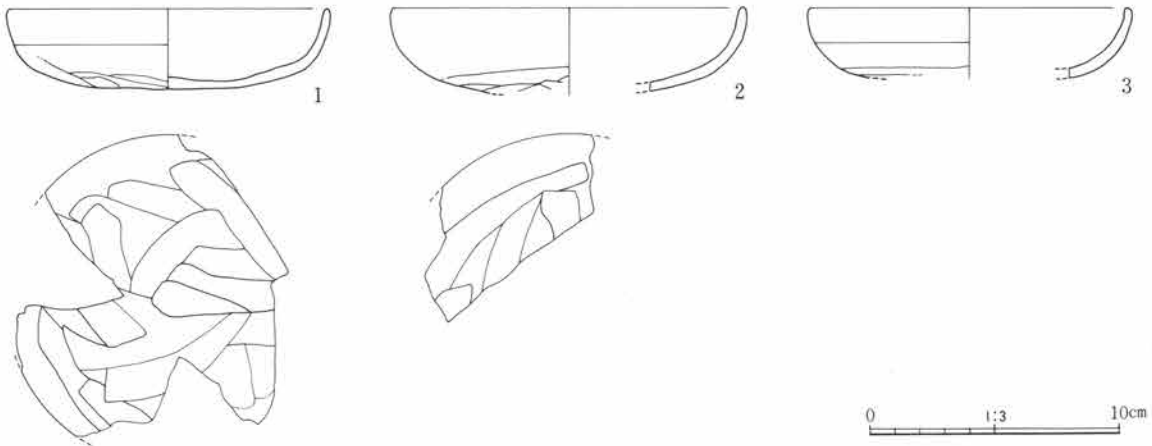
IV区B-13・14グリッドに位置する。平面は台形状を呈し、規模は2.85×3.00mを測る。南西コーナー部は調査区外のため不明。主軸方向はN-34°-Eを指す。壁は残存状態不良で、確認壁高16～5cmを測る。床面は地山のローム土で一部ロームブロックを混入する茶褐色土となっている。カマド、貯蔵穴等の住居内施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕、台付甕、高杯の破片約35点が出土している。ほとんどが覆土からの出土で、時期は奈良時代のものが主体を占める。

重複遺構はない。



第286図 240号住居跡



第287図 240号住居跡出土遺物

241号住居跡（第288図、PL.11）

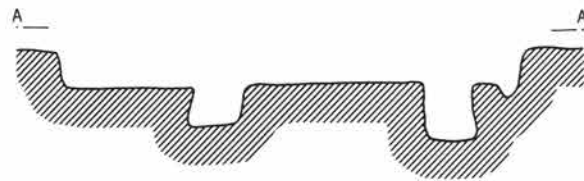
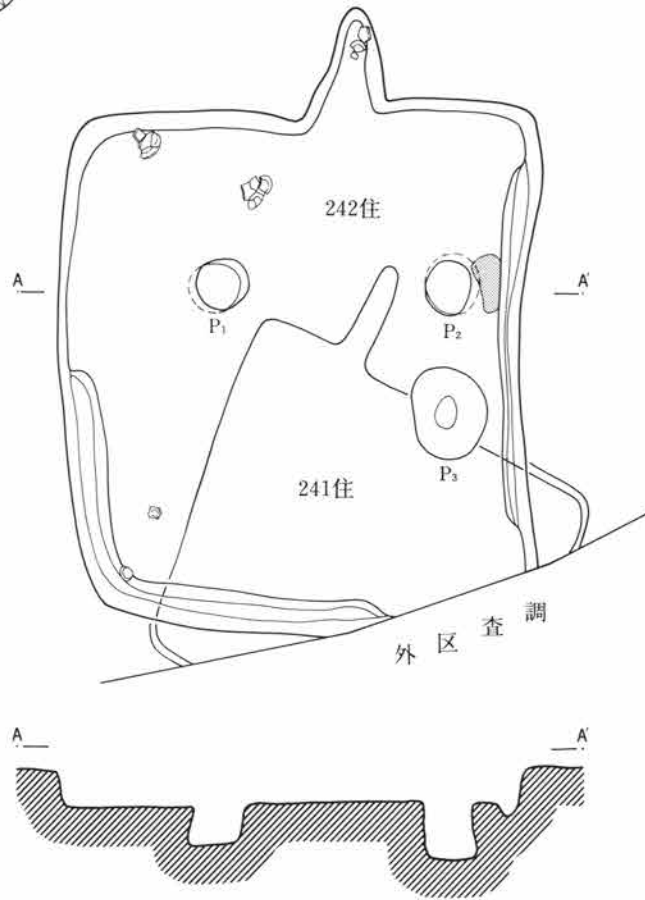
IV区B-15・16、C-16グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。242号住居跡と重複し、又南西部は調査区外にあたるため規模と主軸方向については不明確である。壁は外傾し、確認壁高7cmを測る。床面は不明瞭である。カマドは焼土分布より東壁北寄りに構築されている事が判明した。

遺物は覆土より杯、甕、高台付碗、羽釜の破片約20点程及び土錘が出土している。時期はほとんどが平安時代に属するものである。

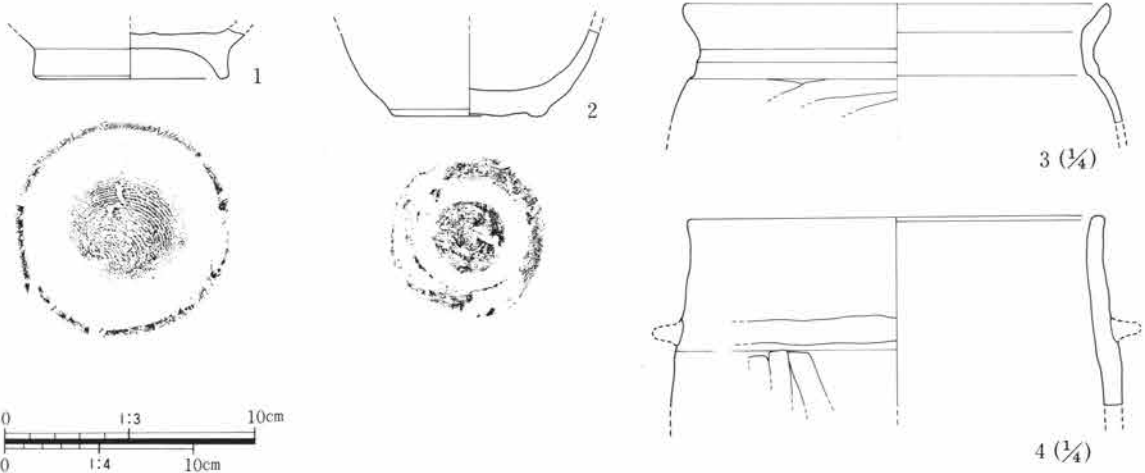
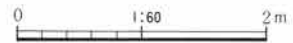
重複遺構との新旧関係は242号住→241号住である。

242号住居跡（第288図、PL.11）

IV区B-15・16、C-16グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈する。規模は4.10×3.85m、面積は15.5㎡前後を測る。主軸方向はN-69°-Eを指す。壁はやや外傾し確認壁高33～13cmを測る。床面はカマド側はローム粒を含む褐色土、反対側は地山のローム土である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築される。



第288図 241・242号住居跡

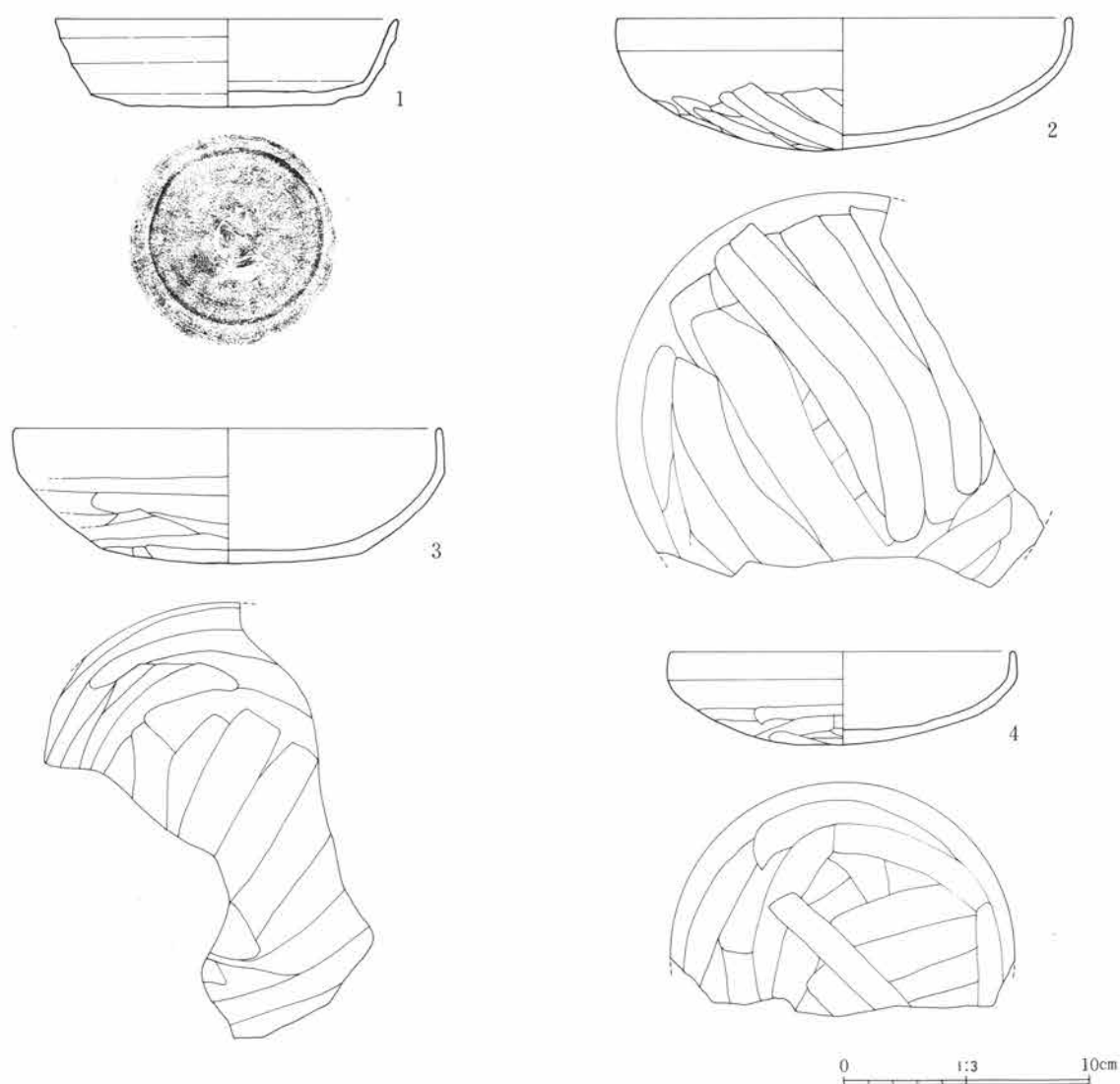


第289図 241号住居跡出土遺物

規模は長さ100cm、幅55cmを測る。軸方向はN-79°-Eを指す。燃烧部は壁外に掘り込まれて張り出しており、煙道は燃烧部奥壁の中位から掘り込まれ緩い角度で傾斜して立ち上がる。ピットは3基が検出された。規模はP₁径43cm深さ33cm、P₂径44cm深さ49cm、P₃径76×58cm深さ27cmを測る。位置的にP₁、P₂は支柱穴の可能性が考えられよう。P₁-P₂の距離は1.85mである。周溝は南壁及び中央部~西壁の部分で検出された。規模は幅35~15cm深さ38~9cmを測る。住居覆土は上層にロームブロックを多量に含む明褐色土、下層に軟質褐色土が堆積する。なおP₂と壁との間に焼土が散布している。

遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、蓋等が出土している。覆土出土のものは241号住居跡との分離が困難であるが、本住居跡に確実に伴うと思われるものは奈良時代の所産と考えられる。

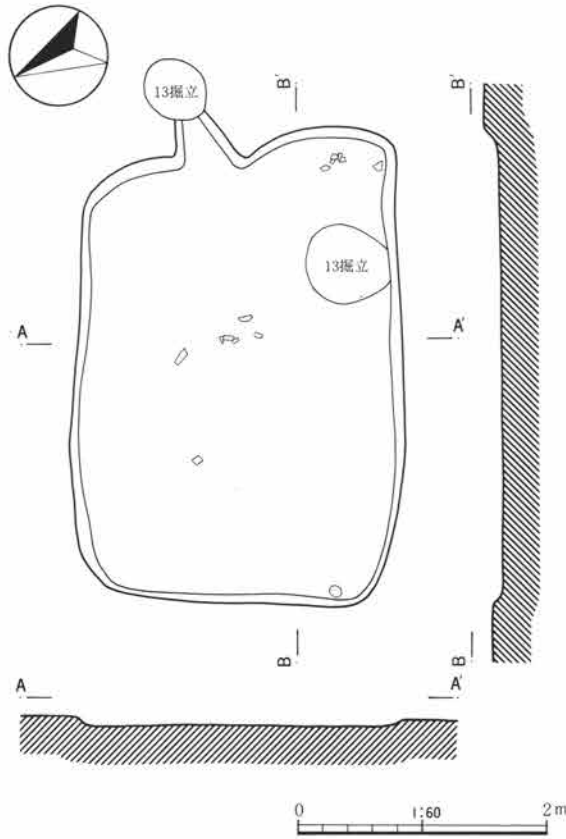
重複遺構との新旧関係は前述の通り242号住→241号住である。



第290図 242号住居跡出土遺物

243号住居跡 (第291図、PL.11)

IV区C-15・16、D-15・16グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈する。規模は3.75×2.65m、面積は9.2㎡を測る。主軸方向はS-70°-Eを指す。壁は崩落が激しく残存状態不良である。確認壁高は13~3cmを



第291図 243号住居跡

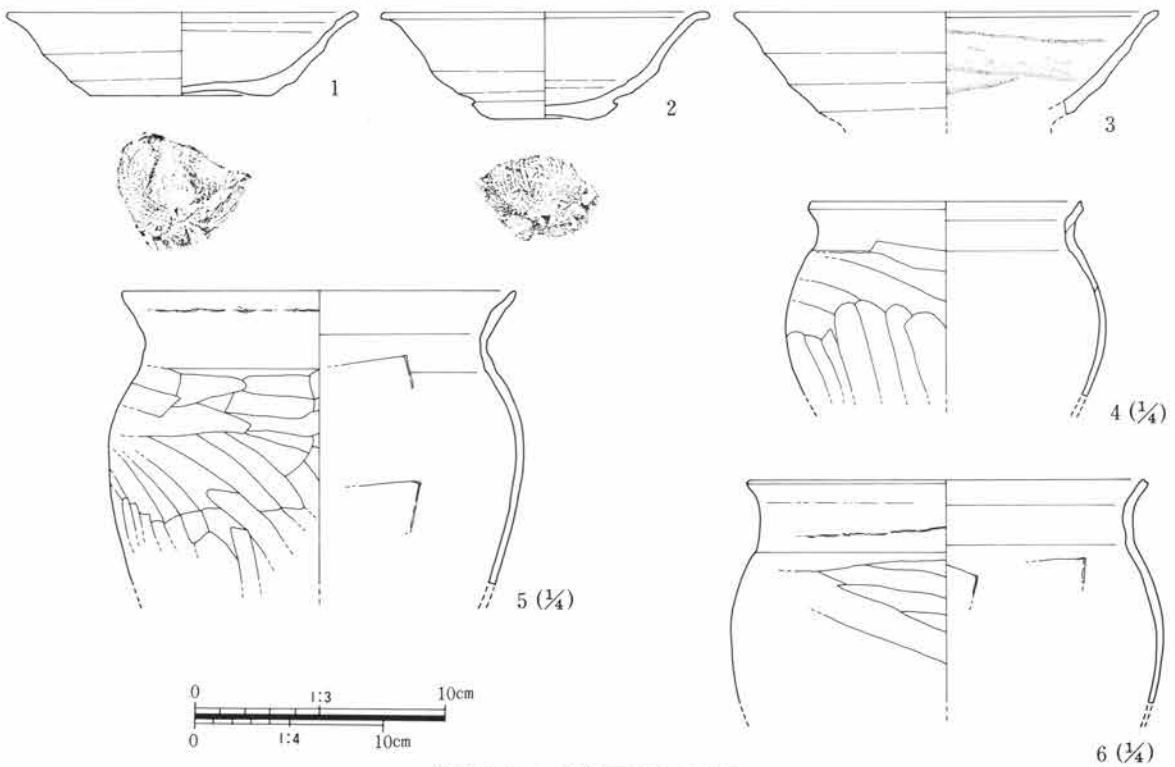
測る。床面は地山のローム土を利用しおそらく貼床をしたと思われる。カマドは東壁の北寄りに構築される。燃烧部のみ残存し、規模は長さ50cm以上、幅55cmを測る。軸方向はS-88°-E付近を指すと思われる。貯蔵穴、ピット等は検出されなかった。

遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付椀、蓋、灰釉椀、土錘等の破片約200点程が出土している。時期は平安時代に属するものがほとんどである。出土位置は床面及び覆土下層である。

重複遺構は13号掘立柱建築遺構で、新旧関係は不明であった。

244号住居跡 (第293図)

IV区E-16・17グリッドに位置する。北半は248号住居跡と重複しており、西半は削平され全形、規模は不明。壁は東南部のみ確認され13~3cmの高さを測る。床面は地山のローム土と思われるが不明瞭。ピットはほぼ中央と思われる部分で1基が検出された。楕円形を呈し規模は

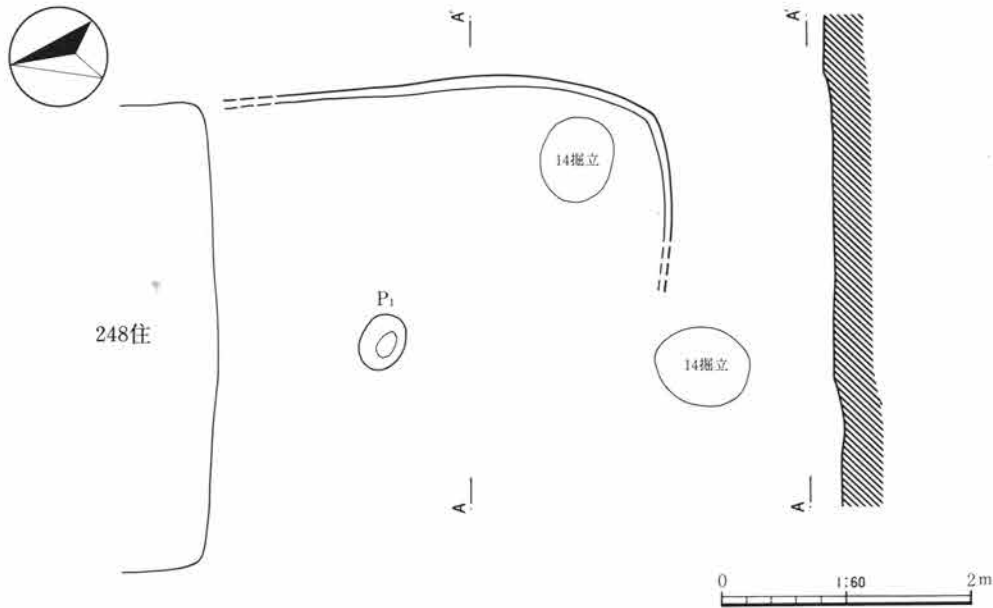


第292図 243号住居跡出土遺物

径45×35cm深さ19cmを測る。

遺物は時期不明の土器片が数点出土したのみである。

重複遺構は248号住居跡、14号掘立柱建築遺構で、新旧関係はいずれも不明であった。



第293図 244号住居跡

245号・246号住居跡 (欠番)

247号住居跡 (第294図、PL.11)

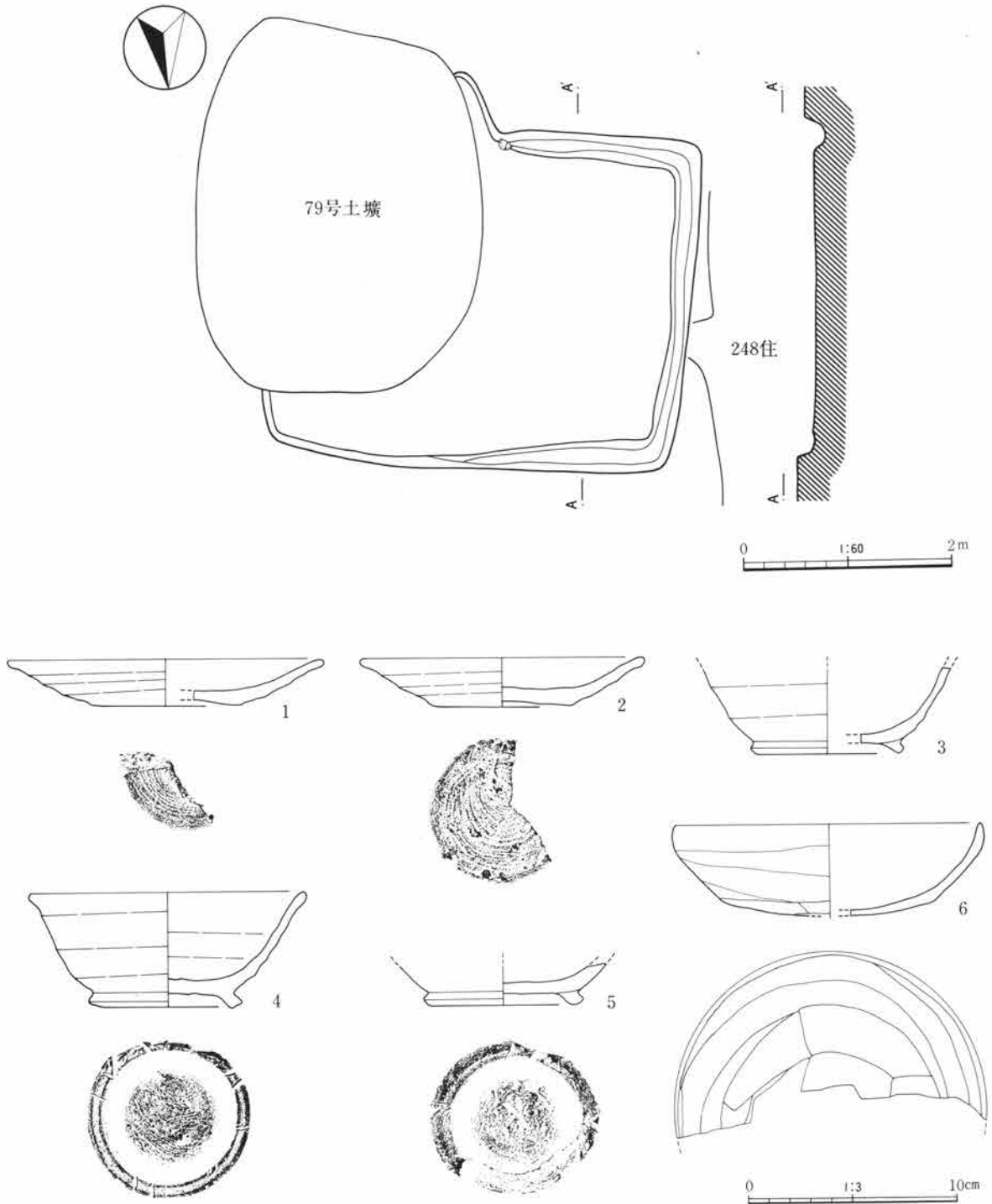
IV区F-16・17グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈すると思われる。東半は79号土壙と重複するため不明。規模は3.20 × (3.95)mを測る。主軸方向はS-13°-Wを指す。壁は外傾し確認壁高22~7cmを測る。床面は中央部分をひとまわり小さく掘り込んでこの部分に埋土し貼床としたらしい。カマドは南壁の東寄りに構築されている。形状、規模ともに不明。周溝は西半部の壁に沿って検出された。幅35~15cm深さ6~1cmを測る。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同皿、高台付碗等の破片約150点が出土している。時期は奈良時代~平安時代に亘るが、数量的には平安時代(10世紀代)のものが主体を占める。

重複遺構は248号住居跡、79号土壙で、新旧関係は不明であった。

248号住居跡 (第295図、PL.11)

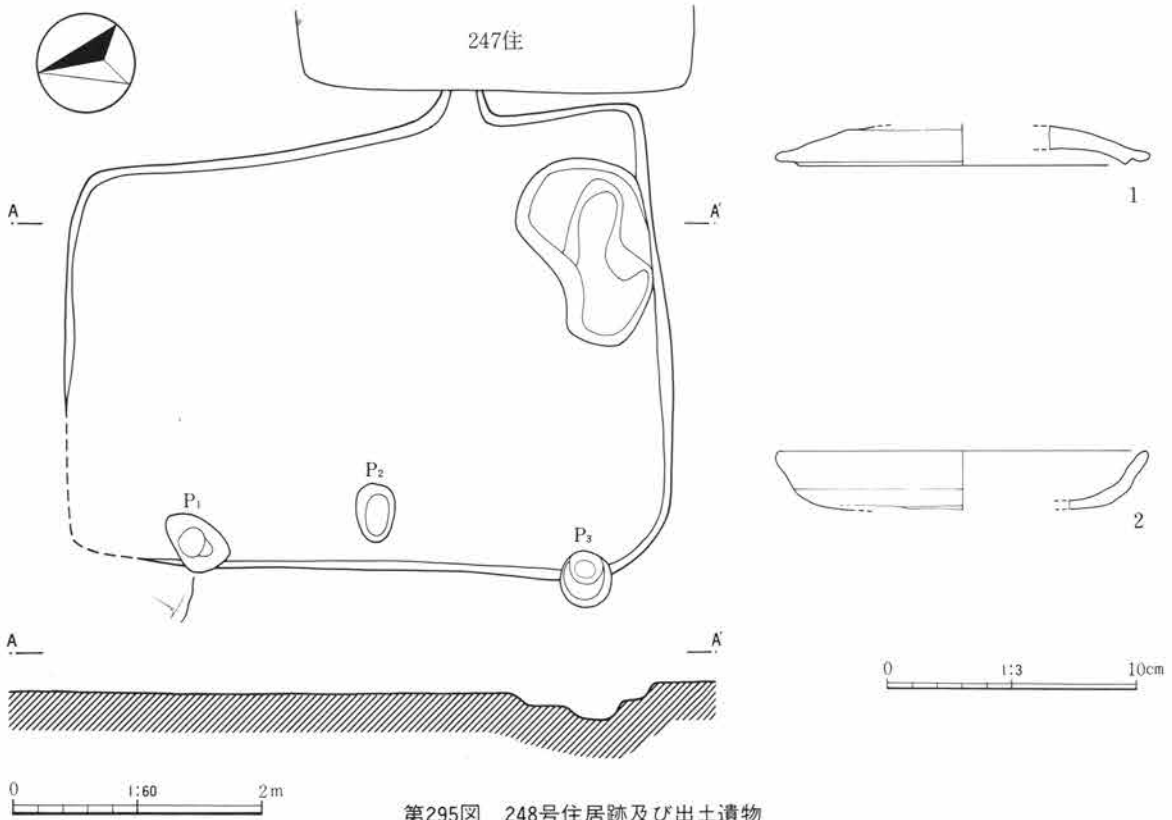
IV区E-17・18、F-17・18グリッドに位置する。平面は横長長方形を呈し、規模は3.70×4.86m、面積16.4㎡を測る。主軸方向はS-87°-Eを指す。壁は外傾し確認壁高14~4cmを測る。床面は地山のローム土で小さな凹凸がある。カマドは東壁の南寄りに構築されるが、形状、規模は不明瞭である。ピットは西壁際に3基検出された。規模はP₁径57×36cm深さ15cm、P₂径47×32cm深さ18cm、P₃径45×42cm深さ34cmを測る。なお南壁際東寄りの部分で不定形の落ち込み(径152×103cm深さ31cm)が検出されたがその性格については不明である。



第294図 247号住居跡及び出土遺物

遺物は杯、甕、須恵器杯、蓋等の破片約55点が出土した。ほとんど小破片で時期の判明するものは少ないが、奈良時代に属するものが主体を占めるようである。なお出土位置は床面及び覆土中がほとんどでピットやカマドからは出土していない。なお北西コーナー部分で10cm大の円礫が出土している。

重複遺構は247号住居跡で、新旧関係は不明であった。なお本住居跡の北壁は早川の浸食による崖によって削られた可能性が高い。



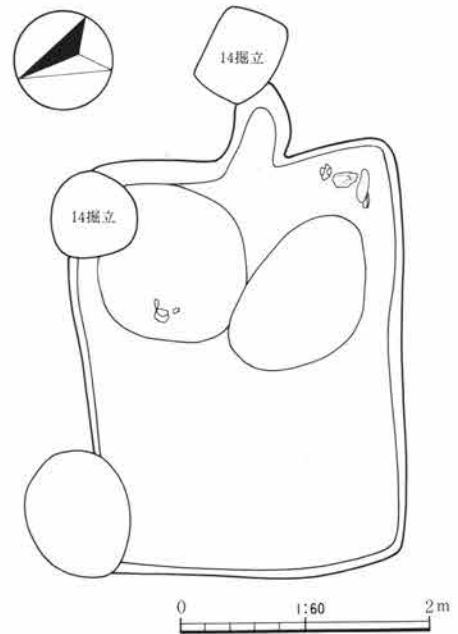
第295図 248号住居跡及び出土遺物

249号住居跡 (第296図、PL.11)

IV区D-16・17グリッドに位置する。平面形は縦長長方形を呈し、規模は3.45×2.67m、面積8.7㎡を測る。主軸方向はS-64°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高45～8cmを測る。床面は住居プランよりひとまわり小さな方形の掘り込み(掘り形と思われる。)がある事から中央部分が貼床であった可能性が考えられる。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに構築され、規模は長さ(78)cm、幅48cmを測る。燃焼部のみ残存し煙道は不明である。住居覆土はロームブロックを多量に含む黒褐色土が堆積している。

遺物は杯、甕、台付甕、須恵器杯、同甕、灰釉碗の破片が約430点程出土している。出土位置は覆土がほとんどである。時期は平安時代のものが大部分を占める。

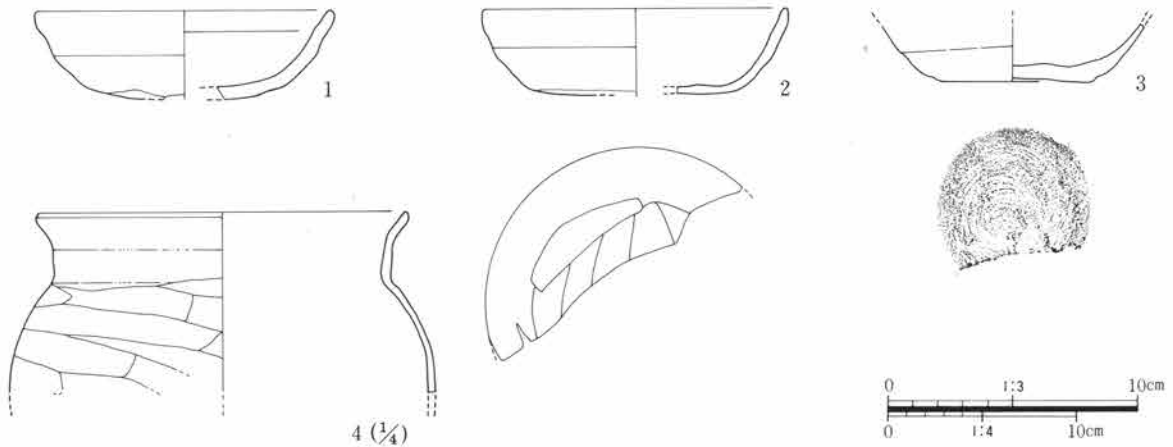
重複遺構は14号掘立柱建築遺構で、新旧関係は不明である。なお東半と北西コーナー部は後世の攪乱層によって切られている。



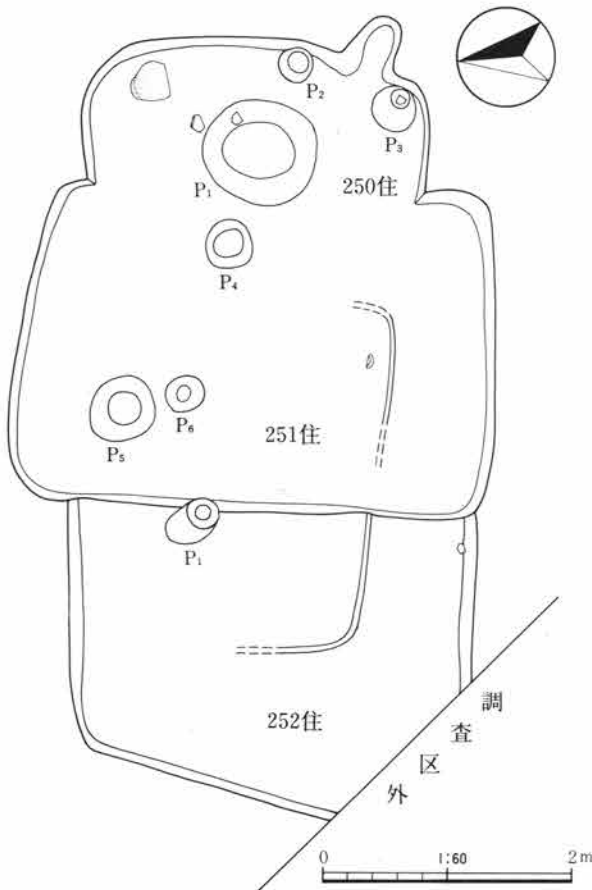
第296図 249号住居跡

250号住居跡 (第298図、PL.11)

IV区C-17グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われるが、他遺構との重複が激しく全体の形状や



第297図 249号住居跡出土遺物



第298図 250・251・252号住居跡

規模は不明であった。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁は直立し確認壁高18~15cmを測る。床面は地山のローム土でほぼ平坦である。なお床面レベルは重複する251号住居跡と同一で、そのまま続く可能性がある。カマドは東壁南端に構築され、燃焼部のみ検出された。規模は長さ53cm、幅47cmを測る。軸方向はS-56°-Eを指す。ピットは重複する251号住まで含めて、合計6基が検出された。規模はP₁径83×80cm深さ44cm、P₂径27cm深さ19cm、P₃径35cm深さ26.5cm、P₄径38cm深さ33cm、P₅径50cm深さ24cm、P₆径30×28cm深さ12cmを測る。これらの性格については不明である。

遺物は杯、甕、須恵器杯、高台付碗、灰釉碗等の破片約180点が出土している。覆土からの出土がほとんどで251号住居跡との分離は困難である。時期は平安時代に属するものがほとんどである。

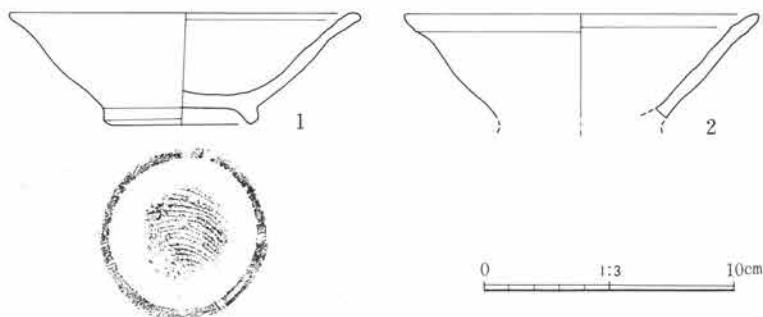
重複遺構は251号住居跡で、覆土がほぼ同一である事や床面がほぼ同一面である事から本住居跡と同一住居の可能性も考えられる。

251号住居跡 (第298図、PL.11)

IV区B-17・18、C-17・18グリッドに位置する。平面は長方形を呈すると思われるが、上記の通り250号住居跡と同一であった場合、カマド部分を含めた東側部分は方形の張り出し施設となるだろう。規模は2.6×3.9mを測る。主軸方向はS-85°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高25~6cmを測る。床面は地山のローム土である。住居覆土は黄褐色土が堆積する。

遺物は250号住居跡と共に取り上げたため本住居跡に伴うものは不明である。

重複遺構は252号住居跡で、土層観察より新旧関係は252号住→251号住である。



第299図 250号住居跡出土遺物

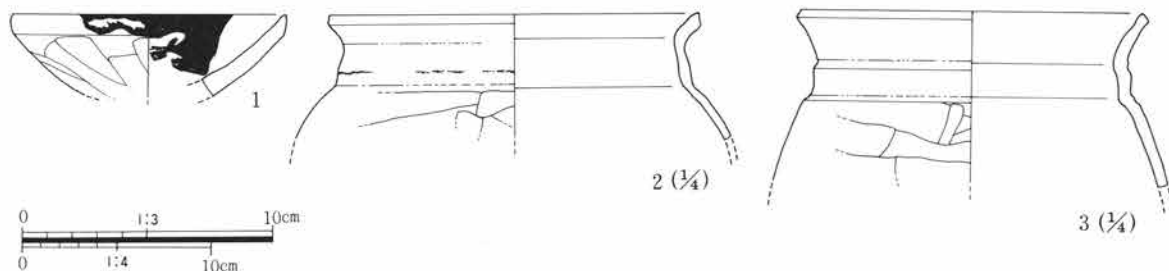
252号住居跡 (第298図、PL.11)

IV区B-17・18グリッドに位置する。平面は方形と思われる。規模は南北間距離で3.26mを測る。壁はほぼ直立し、確認壁高10～4

cmを測る。主軸方向はS-(85°)-Eを指す。床面は地山のローム土でほぼ平坦である。ピットは251号住居跡壁際で1基検出された。規模は径46×26cm深さ41cmを測る。住居覆土は黒色粘質土が堆積する。

遺物は杯、甕、須恵器杯、同甕、蓋、高台付椀、台付甕(?)、壺等の破片約200点が出土した。出土位置は覆土がほとんどで、時期は平安時代を主体とする。

重複遺構との新旧関係は252号住→251号住である。



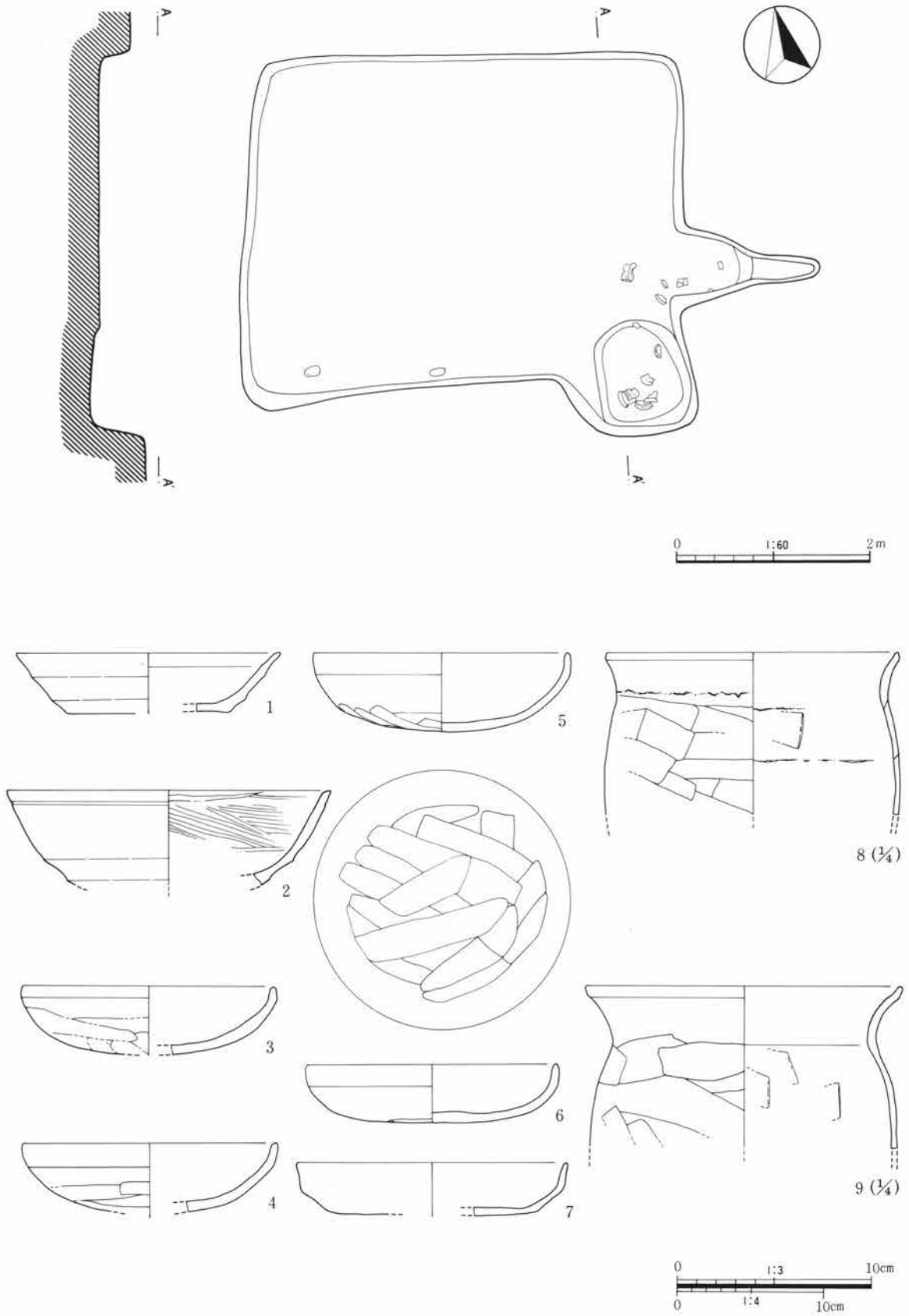
第300図 252号住居跡出土遺物

253号住居跡 (第301図、PL.12)

IV区B-20・21、C-20・21・22グリッドに位置する。平面は縦長長方形を呈し、規模は4.55×3.55mで面積は16.5㎡を測る。主軸方向はS-80°-Eを指す。壁はほぼ直立し確認壁高37～19cmを測る。床面は地山のローム土でほぼ平坦である。カマドは東壁の南寄りに構築される。規模は長さ154cm、幅92cmを測る。軸方向はS-77°-Eを指す。そで部は見られない事から本体は壁外に張り出す形態と考えられる。燃焼部は地山を横穴状に掘り込んで築かれており、両壁はオーバーハングしている。底面はやや窪んでいるが、これが灰掻きのために出来たものか、あるいは燃焼部掘り形面であるのかは確認できなかった。煙道部は燃焼部奥壁の中位から段をなして掘り込まれており、緩い角度で傾斜して立ち上がる。貯蔵穴は南東コーナー部に設けられた120×80cm程の方形を呈する張り出し施設の中で検出された。これも隅丸方形を呈し、規模は108×94cm、深さ14cmを測るものである。一般的な貯蔵穴に比べて深さが浅い事から、これは掘り込んだ部分のみでなく張り出し施設全体が貯蔵穴の用途を持っていたと考えられよう。その他のピットや周溝は検出されなかった。

遺物は杯、甕、台付甕、羽釜、鉢、壺、蓋、須恵器杯等の土器片約180点及び円礫3点が出土した。出土位置はカマド周辺と張り出し施設に集中する傾向を示す。時期は奈良～平安時代に亘るが、本住居跡に伴うと思われるものは奈良時代に属するものと考えられる。

重複遺構はない。なお早川の浸食によると思われる崖線が西方約1mに迫っている。



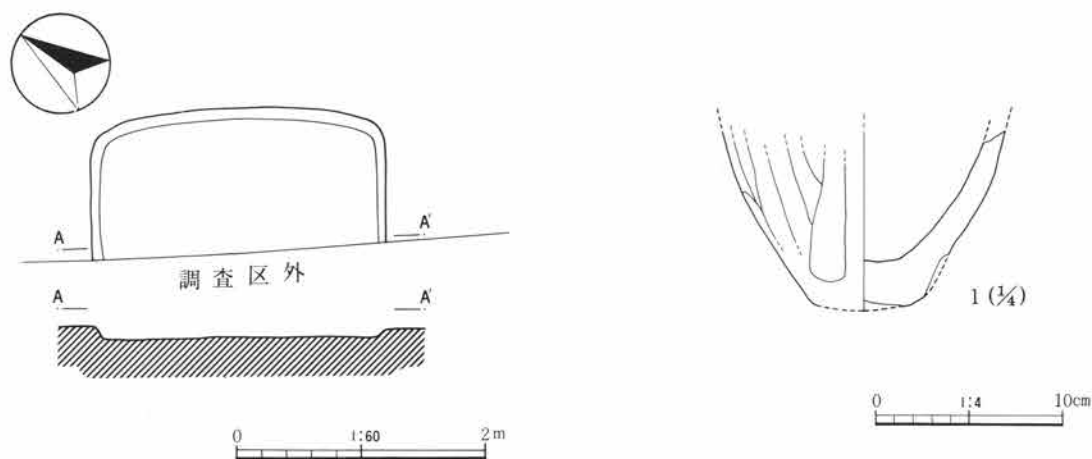
第301図 253号住居跡及び出土遺物

254号住居跡（第302図）

IV区B-19・20グリッドの調査区西境で検出された。平面は方形と思われるが、西半については調査区外のため、その形状は不明である。規模は検出された北西壁と南東壁間距離で2.36mを測る。主軸方向は北東壁の方向よりN-39°-Wを指す。壁は外傾しており、壁高は9~5cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、地山が黒褐色土を主とするため不明瞭。カマド、貯蔵穴、ピット等の施設は検出されなかった。

遺物は杯、甕等の小破片が若干出土している。具体的な形状を知り得るものが少なく、時期的な把握は困難である。図示した土器は小形の甕底部片で、厚手なつくりや胎土の特徴から平安時代所産の可能性が考えられる。

重複遺構はない。



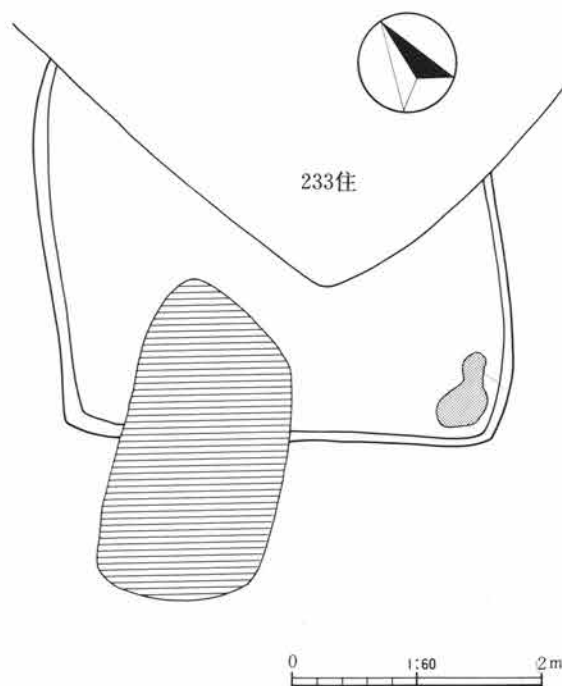
第302図 254号住居跡及び出土遺物

255号住居跡（第303図、PL.12）

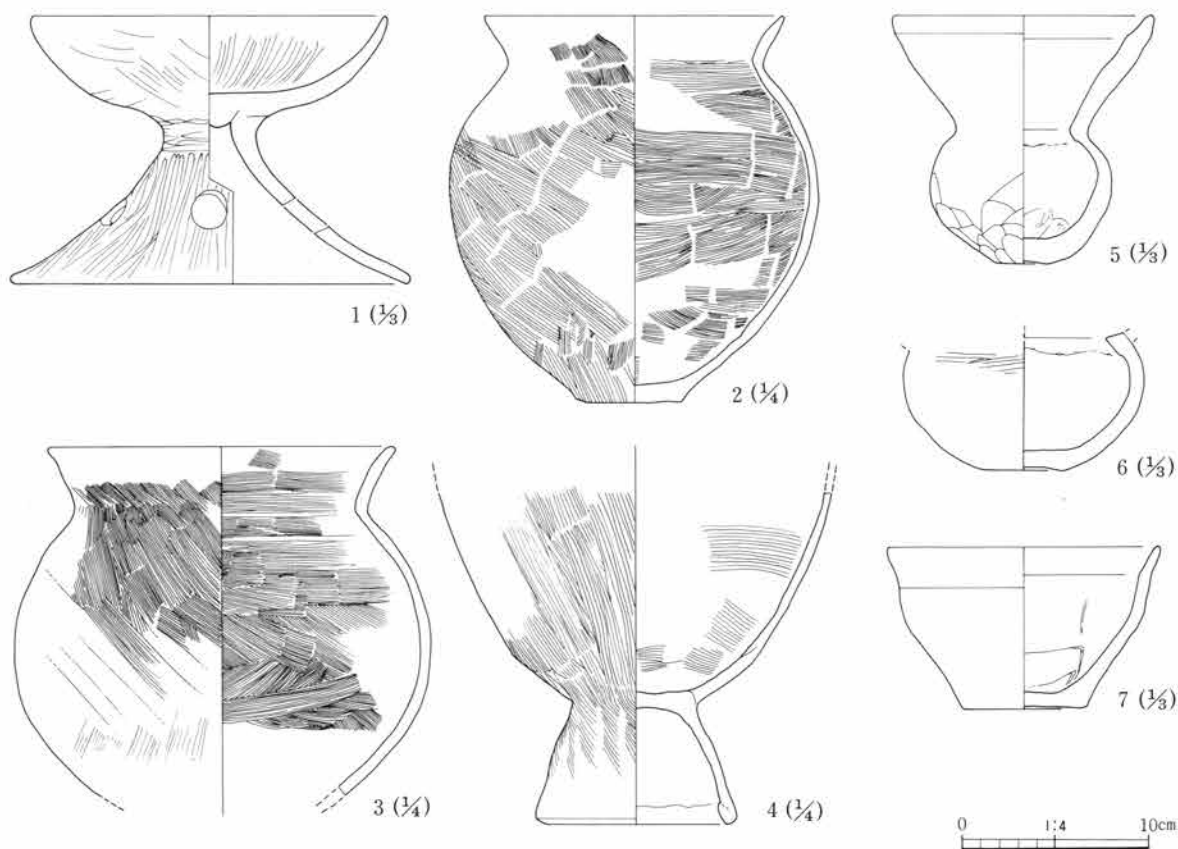
IV区E-12・13グリッドに位置する。平面は方形を呈すると思われる。規模は残存する東西壁間距離で3.60mを測る。主軸方向はN-30°-Eを指す。壁は残存状態不良で確認壁高13~7cmを測る。床面は地山のローム土を利用しほぼ平坦である。カマド、ピット、貯蔵穴等の施設は検出されなかった。

遺物は甕、S字状口縁台付甕、高杯、柑、小形鉢、砥石等が約120点程出土している。出土位置は床面及び覆土で部分的に集中する傾向はないようである。時期は古墳時代初頭のものと同良時代のものが混在するが、数量的には古墳時代初頭（石田川期）が主体を占める。

重複遺構との新旧関係は255号住→233号住である。



第303図 255号住居跡



第304図 255号住居跡出土遺物

2 住居跡出土遺物

本遺跡の竪穴住居跡からは土器、玉類、滑石製模造品、紡錘車、砥石、カマド支脚、埴輪等が出土している。遺物の出土状況は各住居跡の項で述べたが、そのうち覆土出土としたものは廃棄あるいは流れ込みによるものと考えられる。しかしほとんどの住居跡がその上半部を失った状態で検出された可能性が強く、従って覆土は全般的に薄く、床面に近接した位置における出土遺物が多い。この事から本文中で覆土出土として扱ったものは住居廃絶時から1次埋没土の堆積時前後までの間に堆積した可能性が強いと思われる。ただし重複遺構のある場合はこの限りでなく、遺構毎の分離が不可能だったものもある。

以下各遺物毎に詳細を述べる。

土器

竪穴住居跡出土土器は、その器種、出土状況、時期等について各住居跡の項で概述し、又その実測図を掲載している。カマドや貯蔵穴出土等のものを除けば、明らかに一括遺物として取り上げられるのはわずかであった。又従来の土器編年研究からみて時期が異なると判断されるものについても当該住居跡に伴うか否かは別問題とし、あくまでも出土位置を示す意味でここで取り上げ、図示をしている。

以下に各竪穴住居跡出土土器の詳細について一覧表を掲げた。個体数は752点で、住居跡毎に記述している。なお図については前節の各住居跡の項を参照されたい。

住居跡出土土器観察表

口径と底径については原則として1/2以上残存するものを計測したが、それ以下でも値が推定できるものについては()で記載した。

1号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第5図-1 PL.17	土 師 杯	カマド	口12.0 高4.3 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第5図-2	土 師 杯	カマド	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第5図-3 PL.17	土 師 鉢	床 面	口21.4 高12.5 底6.0 完形	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面へラナデ	
第5図-4	土 師 甕	床 面	口(20.0) 口縁~体中位1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	
第5図-5 PL.17	土 師 甕	床 面	口22.6 口縁~体下位	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	
第5図-6 PL.17	土 師 甕	床 面	口22.6 口縁~体下位	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	

6号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第9図-1 PL.17	土 師 甕	カマド	口(27.6) 口縁~体中位1/2	①粗砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位は横、中位は 縦へラケズリ 内面上位へラナデ	体内面に積み上げ 痕

7号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第11図-1	須 恵 高台杯	覆 土	底(11.3) 1/4	①白色砂粒若干目立つ ②灰 ③還元、硬質	底回転へラ削り後付高台	
第11図-2	土 師 甕	床 面	口(14.7) 口縁~体上位1/2	①砂粒やや多 ②黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第11図-3	土 師 (甕)	床 面	体下位~底1/3	①粗砂やや多 ②黒褐 ③普通	体外面横へラケズリ 底へラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

8号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第13図-1 PL.17	土 師 杯	床 面	高3.7 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第13図-2 PL.17	土 師 高 杯	カマド	口19.0 杯のみ残存	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 杯底外面無調整?	杯底近くに穿孔あり
第13図-3 PL.17	土 師 高 杯	カマド	口17.0 杯~脚中位	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 杯底外面~脚縦へラケズリ 内面ナデ縦放射状へラミガキ	
第13図-4 PL.17	土 師 杯	床 面	口 (13.0) 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面下位横へラケズリ 内面ナデ後放射状へラミガキ	
第13図-5 PL.17	土 師 鉢	カマド	口14.0 高8.7 底6.0 完形	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ナデ 内面縦ナデ	
第13図-6 PL.17	土 師 鉢	貯蔵穴	口13.6 高8.2 底4.0 完形	①細砂やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面中位以下斜へラケズリ 内面ナデ	内面へラ押さえ痕
第13図-7 PL.17	土 師 埴	壁 際	口6.6 高8.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ後へラミガキ 体外面へラケズリ 後へラミガキ 内面ナデ	体中位焼成後穿孔
第13図-8 PL.17	土 師 埴	貯蔵穴	口12.2 高14.0 完形	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面下位へラケズリ 内面ナデ	
第13図-9 PL.17	土 師 台付鉢	壁 際	口13.8 高15.5 底8.4 口~体1/2	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 脚縦 へラケズリ 体部と脚部内面ナデ	
第13図-10	土 師 甕	覆 土	口 (18.8) 口縁~体上位1/2	①粗砂やや多 ②黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体横へラケズリ	

11号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第15図-1 PL.18	土 師 杯	覆 土	口 (12.5) 高4.0 1/3	①細砂を含む ②灰褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第15図-2	土 師 甕	覆 土	口 (17.2) 口縁~体中位	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位は横、中位以下は縦へラケズリ 内面ナデ	
第15図-3 PL.18	土 師 甕	床 面	口14.5 口縁~体中位	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面へラナデとナデ	
第15図-4	土 師 (甕)	壁 際	底7.7 底部のみ残存	①砂粒やや多 ②赤褐 ③普通	体外面へラケズリ 内面ナデ	
第15図-5	土 師 高 杯	床 面	脚のみ残存、裾欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	脚外面ナデ後縦へラミガキ	内面紋り目痕あり

13号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第18図-1 PL.18	土 師 杯	床 面	口12.2 高4.7 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-2 PL.18	土 師 杯	床 面	口12.6 高4.4 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-3	土 師 杯	床 面	口 (12.7) 高3.7 1/2弱	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-4 PL.18	土 師 杯	床 面	口12.4 高4.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-5 PL.18	土 師 杯	床 面	口12.7 高5.1 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-6 PL.18	土 師 杯	床 面	高6.5 1/4	①細砂を含む ②黄褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第18図-7 PL.18	土 師 甕	壁 際	口16.5 高16.5 底7.3 口一部欠	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面へラナデ	
第18図-8 PL.18	土 師 甕	焚 口	口 (16.0) 高21.4 口縁1/2	①砂粒を含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横斜へラケズリ 内面ナデ	
第18図-9 PL.18	土 師 甕	焚 口	口16.4 口縁～体下位	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜縦へラケズリ 内面ナデ	
第19図-10 PL.18	土 師 甕	焚 口	口20.1 高37.5 底3.5 完形	①粗砂やや多 ②黄褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	底木葉痕
第19図-11 PL.18	土 師 甕	床 面	口18.8 高36.9 底4.4 体一部欠	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	底木葉痕
第19図-12 PL.18	土 師 甕	床 面	口 (14.7) 高25.5 口一部欠	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第19図-13 PL.18	土 師 甕	床 面	口20.4 底欠	①砂粒やや多 ②黄褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜縦へラケズリ 内面ナデとへラナデ	
第19図-14	土 師 甕	焚 口	口縁～体上位1/3	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第19図-15	土 師 甕	床 面	口縁～体上位1/3	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

17号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第22図-1 PL.18	土師杯	覆土	口径15.0 高6.7 口縁一部欠	①細砂を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第22図-2 PL.18	土師杯	覆土	口径13.8 高4.0 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

19号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第23図-1	土師甕	床面	口縁～体上位1/4	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	口縁に積み上げ痕
第23図-2	土師甕	床面	口縁～体上位	①細砂を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	頸部に積み上げ痕
第23図-3 PL.19	土師台付甕	覆土	脚部	①砂粒やや多 ②にぶい橙 ③普通	体ヘラケズリ 内面ナデ 脚内外面横ナデ	

20号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第25図-1 PL.19	土師杯	覆土	口径(13.8) 1/3	①細砂を含む ②黒褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

21号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第26図-1	土師杯	覆土	1/4	①酸化鉄鉱物粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第26図-2 PL.19	土師甌	覆土	高16.0 底6.0 口縁2/3欠	①酸化鉄鉱物粒目立つ ②にぶい褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ 底孔ヘラ切り	
第26図-3 PL.19	土師小形鉢	覆土	口径9.3 高4.9 底3.6 完形	①砂粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ナデ 内面ナデ	底木葉痕

23号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第29図-1 PL.19	土師 杯	壁際	口12.4 高3.8 1/2強	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-2 PL.19	土師 杯	覆土	口12.4 高4.2 1/2強	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-3	土師 杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-4 PL.19	土師 杯	覆土	1/3弱	①砂粒を含む ②黒褐 ③普通	口縁2段の横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第29図-5 PL.19	土師 甕	ピット P ₂	口23.4 口縁～体下位	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半は縦、下半以 下は斜へラケズリ 内面ナデ	
第29図-6	土師 甕	床面	口縁～体中位1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第29図-7	土師 甕	ピット P ₂	口縁～体上半	①粗砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜及び縦へラケズ リ 内面ナデ	
第29図-8	土師 甕	床面	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第29図-9	土師 甕	床面	口縁～体上半1/5	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第29図-10	土師 甕	床面	体下位～底	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	体外面斜へラケズリ 内面ナデ 底周辺へラケズリ	

24号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第31図-1 PL.19	須惠 高杯	床面	口縁1/3と脚	①細砂を含む ②灰黒 ③還元、硬質	杯部外面に櫛描波状文 脚部中位カキ 目を施す	脚長方形透孔3ヶ 所
第31図-2	土師 杯	床面	口縁1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第31図-3 PL.19	土師 杯	床面	口12.6 高5.0 2/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第31図-4 PL.19	土師 甕	床面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦横へラケズリ 内面ナデ	
第31図-5 PL.19	土師 甕	床面	口縁～体上半1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第31図-6 PL.19	土師 甕	床面	口17.8 口縁～体上位2/3	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第31図-7	土師 甕	床面	口縁～体上位1/4	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面横ヘラケズリ	
第31図-8 PL.19	土師 甕	床面	口(14.8) 口縁～体上半1/2	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第31図-9	土師 甕	床面	口縁～体上位1/4	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面横ヘラナデ	

25号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第32図-1 PL.19	土師 杯	床面	口縁1/4	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第32図-2 PL.19	土師 杯	床面	1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面下半横ヘラケズリ 内面ナデ	
第32図-3	土師 甕	床面	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半は横、下半は 縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第32図-4 PL.19	土師 甕	床面	口縁～体上半	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半は横、中位は 斜、下半は縦ヘラケズリ 内面ヘラケ ズリ	口縁外面積み上げ 痕

26号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第34図-1 PL.20	手握ね 土器	床面	1/3弱	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面無調整 底ナデ 内面ナデ	
第34図-2	土師 (甕)	床面	1/4	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第34図-3 PL.20	土師 杯	床面	1/4	①酸化鉄粒目立つ ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

28号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第38図-1 PL.20	須 惠 高 杯	床面	高17.6 脚径16.4 口縁1/2脚一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	杯ロクロ右回転 杯底外面回転ヘラケ ズリ 脚は逆転してロクロ左回転整形	脚方形透孔2段、 交互に3ヶ所づつ

第V章 検出された遺構と遺物

第38図-2 PL.20	須 恵 短頸壺	床 面	口8.0 高5.7 底5.0 口縁1/2欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ左回転 肩部に二段の櫛描波状 文	
第38図-3 PL.20	須 恵 短頸壺	床 面	口6.0 高9.7 体約2/3	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底へラケズリ整形	口縁の歪み大
第38図-4 PL.20	土 師 杯	床 面	口14.4 高4.4 口縁1/4欠	①細砂を含む ②黒褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ後粗い へラミガキ 内面ナデ	
第38図-5 PL.20	土 師 杯	床 面	口14.0 高4.7 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-6 PL.20	土 師 杯	床 面	口13.0 高5.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-7 PL.20	土 師 杯	床 面	口13.4 高4.9 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-8 PL.20	土 師 杯	床 面	口13.2 高5.1 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-9 PL.20	土 師 杯	床 面	口13.0 高4.4 約1/4欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第38図-10 PL.20	土 師 杯	床 面	約1/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-11 PL.20	土 師 杯	床 面	口13.6 高4.5 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	口唇上面に沈線
第39図-12 PL.20	土 師 杯	床 面	口13.2 高4.8 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-13 PL.20	土 師 杯	床 面	1/3	①細砂を含む ②にぶ い黄橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-14 PL.21	土 師 碗	床 面	1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-15 土 師 (鉢)	土 師 鉢	床 面	口縁～体上半1/5	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第39図-16 PL.21	土 師 甌	床 面	口13.8 高11.0 底3.4 口一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面縦へラケズリ	
第39図-17 PL.21	土 師 甌	床 面	口19.4 高10.5 底3.2 口一部欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第39図-18	土 師 甌	床 面	体下半～底	①粗砂目立つ ②橙 ③普通	体外面縦へラケズリ 内面ナデ後へラ ナデ	
第39図-19 PL.21	土 師 甌	床 面	口25.0 高29.7 底8.7 体一部欠	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ後へラナデ	
第40図-20	土 師 甌	床 面	口縁～体上位1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第40図-21	土 師 甌	床 面	口縁～体上位1/4	①粗砂やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第40図-22	土 師 甌	床 面	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第40図-23 PL.21	土師 甕	床面	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第40図-24 PL.21	土師 甕	床面	体中位～底	①砂粒を含む ②明褐 ③普通	体外面縦へラケズリ 内面ナデ	体部内面に積み上 げ痕 底木葉痕
第40図-25 PL.20	土師 甕	床面	口14.1 高15.1 底5.3 口一部欠	①砂粒を含む ②明黄 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第40図-26 PL.20	土師 甕	床面	口15.6 体下位～底欠	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	体部内面に積み上 げ痕
第40図-27 PL.20	土師 甕	床面	口縁約3/4欠	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	

29号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第42図-1 PL.21	土師 杯	床面	口13.1 高3.8 口縁約2/3破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第42図-2 PL.21	土師 杯	貯蔵穴	口(15.1) 高6.9	①細砂を含む ②にぶ い赤褐 ③普通	底外面へラケズリ 内面ナデ	底二次焼成痕あり。
第42図-3 PL.21	土師 甕	カマド 右袖	口17.3 口縁～体上位	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第42図-4 PL.21	土師 甕	カマド	口縁～体上位1/4	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面へラナデ	
第42図-5	土師 甕	カマド	口縁～体上半1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位縦へ ラケズリ 内面ナデ	
第42図-6	土師 (甕)	覆土	口縁約1/8	①黒色鉱物を含む ②淡黄褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ハケメ 内面ナデ	二次焼成痕あり 東北系か？

30号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第44図-1	土師 杯	床面	口縁1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

31号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第47図-1 PL.22	土師 杯	覆土	口12.0 高5.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第47図-2	土師杯	覆土	口12.9 高6.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第47図-3 PL.22	土師杯	覆土	口(12.6) 高6.4 口縁3/4欠	①細砂を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第47図-4	土師(器台)	覆土	脚のみ残存	①細砂を含む ②橙 ③普通	脚外面縦へラケズリ 内面ナデ 裾横ナデ	

32A号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第48図-1 PL.21	土師杯	貯蔵穴	口12.6 高4.3 完形	①砂粒を含む ②にぶ い黄褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第48図-2 PL.21	土師杯	貯蔵穴	口13.0 高4.4 完形	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第48図-3 PL.21	土師杯	貯蔵穴	口13.2 高4.2 完形	①砂粒を含む ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第48図-4 PL.21	土師杯	床面	口12.0 高4.1 1/3欠	①砂粒を含む ②黒褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第48図-5 PL.21	土師杯	覆土	口13.9 高4.4 2/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第48図-6 PL.21	土師杯	壁際	1/3	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第48図-7	土師鉢	床面	口縁～体上半	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	

34号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第52図-1	須恵高台椀	覆土	底のみ残存	①細砂を含む ②にぶ い赤褐 ③酸化、軟質	付高台	
第52図-2	須恵高台椀	覆土	底のみ残存	①白色砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	回転糸切り後付高台周辺部ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

35号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第54図-1	土師 杯	覆土	口縁小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 口唇内側に沈線	
第54図-2	土師 甕	覆土	口縁～体上半1/5	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第54図-3	土師 甕	壁際	口縁～体上半1/4	①白色砂粒目立つ ②にぶい褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第54図-4	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/3	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第54図-5 PL.22	土師 高杯	カマド	脚のみ残存	①細砂やや多 ②橙 ③普通	脚内面はユビによるナデ	全体に磨減

36号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第56図-1	須恵 高台椀	床面	底1/4のみ残存	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	付高台 回転糸切りと思われる	
第56図-2 PL.22	土師 鉢	床面	口18.2 高14.8 底13.5 完形	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	体部外面に積み上げ痕
第56図-3 PL.22	土師 甕	床面	口縁～体上半1/4	①粗砂やや目立つ ②にぶい褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ後ヘラ ナデ 内面ナデ	
第56図-4	土師 甕	床面	体下位～底	①粗砂やや目立つ ②にぶい褐 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデと ナデ	
第56図-5 PL.22	土師 甕	床面	口(28.0) 口縁～体下位1/2	①粗砂やや目立つ ②にぶい褐 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

37号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第58図-1 PL.22	土師 杯	床面	1/4	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第58図-2	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体ヘラケズリか?	口縁に積み上げ痕

第59図-3	土師 甕	床面	口縁～体上位小片	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラズリ 内面ナデ	
第59図-4	土師 甕	床面	口18.2 口縁～体上半	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ後ナデ 内面ナデ	
第59図-5 PL.22	土師 甕	床面	口縁～体上半1/2	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第59図-6 PL.22	土師 甕	床面	高26.7 孔径(6) 口縁～底1/3	①砂粒やや多 ②灰褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

38号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第61図-1 PL.22	土師 杯	貯蔵穴	口12.3 高4.7 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第61図-2 PL.22	土師 杯	床面	口(12.2) 1/2弱	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第61図-3	土師 鉢	カマド	高13.3 1/4	①砂粒を含む ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

39号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第62図-1	土師 杯	覆土	高(4.9) 1/4	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第62図-2 PL.22	土師 壺	貯蔵穴	口22.0 口縁～体下位	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ナデ 内面ナデ	口縁に積み上げ痕 体部外面ヘラ描文

45号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第67図-1 PL.22	土師 杯	覆土	口12.8 高4.4 完形	①細砂やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第67図-2 PL.22	土師 杯	覆土	口12.0 高4.2 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

47号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第68図-1 PL.23	土師 甕	覆土	口縁～体上位小片	①砂粒やや多い ②にぶい ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面へラナデとナデ	

49号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第71図-1 PL.23	土師 杯	床面	口11.6 高4.8 完形	①細砂を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第71図-2 PL.23	土師 杯	床面	口12.3 高4.6 完形	①細砂を含む ②にぶい ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第71図-3 PL.23	土師 杯	床面	口11.8 高5.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第71図-4 PL.23	土師 杯	床面	口13.0 高4.8 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第71図-5 PL.23	土師 杯	床面	口13.0 高4.3 口縁1/3欠	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第71図-6 PL.23	土師 杯	床面	口11.8 高4.5 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第71図-7 PL.23	土師 杯	床面	口12.5 高3.7 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第71図-8	土師 高杯	覆土	脚1/2のみ残存	①細砂を含む ②にぶい ③普通	脚へラケズリ後縦へラミガキ 裾横ナデ	
第71図-9 PL.23	土師 甕	床面	口15.5 高17.7 底8.2 体一部欠	①砂粒やや多い ②にぶい ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第71図-10 PL.23	土師 甕	床面	口16.7 高14.3 底5.5 口一部欠	①砂粒やや多い ②にぶい ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第72図-11 PL.23	土師 壺	カマド	口14.0 口縁～体下位	①粗砂やや目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第72図-12 PL.23	土師 甕	床面	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②にぶい ③普通	口縁横ナデ 内面へラナデ	
第72図-13 PL.23	土師 甕	カマド	口18.6 口縁～体上位	①砂粒やや多い ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第72図-14 PL.23	土師 甕	カマド	口21.0 口縁～体中位	①砂粒やや多い ②にぶい ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面へラナデとナデ	
第72図-15 PL.23	土師 甕	焚口	口20.3 口縁～体	①砂粒やや多い ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	

第72図-16 PL.23	土師 甕	焚口	口24.0 口縁～体1/2	①粗砂やや目立つ ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第72図-17	土師 (壺)	カマド	口縁と体下半欠	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデ	

50号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第73図-1	土師 杯	カマド	口(15.0) 高4.8 約1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第73図-2	土師 甕	カマド	口(20.3) 口縁～体上位1/2	①砂粒を含む ②にぶ い黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

51号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第75図-1 PL.24	土師 杯	覆土	口縁1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第75図-2 PL.24	土師 高杯	カマド	口(15.5) 口唇と裾部欠	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 杯底外面横ナデとナデ 内面ヘラナデとナデ 脚ナデ	
第75図-3 PL.24	土師 甕	カマド	口14.0 高13.8 底6.4 完形	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	口縁と体部外面に 積み上げ痕
第75図-4 PL.24	土師 甕	カマド 左袖	口18.0 口縁～体下位	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ後ヘ ラナデ 内面ヘラナデとナデ	口縁に積み上げ痕 体外面に煤附着
第75図-5 PL.24	土師 甕	カマド	口20.3 口縁～体下位	①細砂やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

52号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第77図-1	土師 甕	カマド	口縁～体上位1/5	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ヘラケズリ後ナデ	
第77図-2 PL.24	(須恵) 高台杯	カマド	口8.4 高4.1 高台一部欠	①白色鉱物若干目立つ ②橙 ③酸化、軟質	ナデ後ヘラミガキ	

53号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第79図-1	土 師 杯	カマド	1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第79図-2 PL.24	土 師 杯	カマド	高4.4 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第79図-3	土 師 高 杯	カマド	杯底～脚上位	①細砂を含む ②橙 ③普通	杯底横へラケズリ 脚縦へラケズリ	
第79図-4	土 師 甕	カマド	底3.8 体下半～底	①砂粒やや多 ②黒褐 ③普通	体外面斜へラケズリ 内面ナデ	

54号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第81図-1 PL.24	土 師 杯	床 面	口10.9 高3.8 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第81図-2 PL.24	土 師 甕	貯蔵穴	口13.3 高16.9 底6.5 完形	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	体部に煤付着
第81図-3 PL.24	土 師 甕	カマド	口22.3 高39.6 底4.0 完形	①粗砂やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面上位へラナデ 下位ナデ	体部に積み上げ痕
第81図-4 PL.24	土 師 甕	壁 際	口18.2 高15.2 底5.8 口縁体一部欠	①砂粒やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦、斜へラケズリ 内面ナデ 孔は外面より内面へ穿つ	径5mmの孔27ヶ所

55号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第83図-1 PL.24	土 師 杯	壁 際	口13.4 高4.4 1/2	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第83図-2 PL.24	土 師 杯	壁 際	口12.8 高4.6 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第83図-3 PL.24	土 師 鉢	覆 土	口21.0 高15.1 底7.0 体一部欠	①白色、黒色砂粒が目 立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	

第83図-4 PL.25	土師 甕	カマド	口18.1	①砂粒を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第83図-5 PL.25	土師 甕	カマド	口21.2 高34.7 底4.6 底一部欠	①砂粒やや多 ②浅黄 橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第83図-6 PL.25	土師 甕	カマド	口21.5 高40.4 底4.3 口縁1/2欠	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	底木葉痕
第83図-7 PL.25	土師 甕	カマド	口22.2 胴下半部欠	①砂粒多く含む ②暗 赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体部外面縦ヘラケズリ 内面横ヘラナデとナデ	

56号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第84図-1 PL.25	土師 杯	床 面	口13.8 高4.8 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-2 PL.25	土師 杯	壁 際	口(12.5) 高3.2 1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-3	土師 杯	覆 土	1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-4	土師 杯	覆 土	1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-5	土師 杯	覆 土	1/5	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-6 PL.25	土師 杯	床 面	口15.0 高4.8 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-7 PL.25	土師 杯	床 面	口17.2 高4.1 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-8 PL.25	土師 杯	床 面	口16.4 高3.6 2/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第84図-9 PL.25	須 恵 杯	床 面	口(17.5) 高4.5 底7.2 2/3	①長石を含む ②灰 ③還元、やや軟質	底右回転ヘラケズリ 内面一方向ナデ	
第84図-10 PL.25	須 恵 瓶	覆 土	肩部～体上半	①白色鉱物を含む ②灰 ③還元、硬質	内外面とも回転利用のナデ 外面屈曲部に弱い沈線	肩に自然釉

57号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第86図-1	須 恵 高台椀	床 面	底6.8 高台のみ残存	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	回転系切り後付高台周辺部ナデ	

58号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第88図-1	土 師 杯	カマド	1/4	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面無調整 底へラケズリ 内面ナデ	
第88図-2	土 師 甕	覆 土	口 (18.0) 口縁~体上半1/4	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第88図-3	(須恵) 羽 釜	カマド	口縁~体上半1/4	①酸化鉄粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ後ナデ 内面ナデ	
第88図-4	土 師 甕		1/4	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ	
第89図-5	土 師 甕	カマド	口縁~体上半1/4	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第89図-6	土 師 甕	カマド	口縁小破片	①砂粒を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	

59号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第90図-1 PL.25	土 師 杯	覆 土	口13.0 高4.5 底7.2 完形	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第90図-2 PL.25	土 師 杯	壁 際	口14.0 高5.7 口縁2/3欠	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	底外面に靱圧痕
第90図-3 PL.25	土 師 杯	覆 土	口 (13.5) 高5.2 口縁1/2欠	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第90図-4	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第90図-5	土 師 杯	壁 際	口12.5 高3.8 完形	①酸化鉄粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第90図-6 PL.26	土 師 杯	床 面	口13.0 高3.8 完形	①砂粒を含む ②褐~黒褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第91図-7 PL.26	土 師 杯	壁 際	口11.8 高4.8 1/4欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第91図-8 PL.26	土 師 杯	床 面	口 (11.0) 高4.9 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第91図-9	土 師 杯	床 面	口 (13.0) 高 (5.5) 1/3	①細砂を含む ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第91図-10 PL.26	土師杯	壁際	口12.4 高4.3 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第91図-11 PL.26	土師杯	床面	高4.3 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第91図-12	土師杯	床面	1/4	①砂粒を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第91図-13	土師杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第91図-14 PL.26	土師高杯	カマド	口12.2 高7.2 脚径8.2	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 杯底外面へラケズリ 脚へラケズリ 裾横ナデ	
第91図-15 PL.26	土師甕	覆土	高9.5 1/2	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	胴部中位に円孔を 穿つ
第91図-16	土師甕	カマド	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第91図-17	土師甕	カマド	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第92図-18 PL.26	土師甕	カマド	口(22.4) 口縁～体下半1/2	①砂粒やや多 ②浅黄 橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第92図-19 PL.26	土師甕	カマド	口18.0 高24.5 口縁一部欠	①粗砂やや多 ②橙 ③普通	口縁外面横ナデ、外面縦へラケズリ 内面へラナデ	

61号住居跡

図 Na 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第93図-1	土師甕	覆土	口縁～体上位1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	
第93図-2	土師甕	覆土	底4.2 底のみ残存	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	体下位へラケズリ 底へラケズリ 内面ナデ	

63号住居跡

図 Na 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第95図-1	(土師) 高台椀	覆土	高台1/2	①白色鉱物若干目立つ ②褐 ③酸化、軟質	付高台	内面黒色処理
第95図-2	須 恵 高台椀	覆土	高台1/3	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	付高台	

65号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第98図-1	須 恵 蓋	覆 土	つまみ径5.4 つまみ部のみ残存	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ左回転	
第98図-2	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第98図-3	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ	
第98図-4	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第98図-5 PL.26	土 師 甕	覆 土	1/4	①細砂を含む ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	

66号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第99図-1 PL.26	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/4	①輝石、カクセン石等 の黒色鉱物若干目立つ ③にぶい褐 ③普通	口縁横ナデ 内外面共回転利用のナデ 後体下半へラケズリ	

67号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第100図-1	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第100図-2 PL.26	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	

68号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第102図-1 PL.27	土 師 杯	カマド 左 袖	口 (12.0) 高4.5 口縁2/3欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面へラナデとナデ	

第102図-2	土師杯	カマド	口12.0 高4.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面へラナデとナデ	
第102図-3 PL.27	土師杯	カマド	口11.8 高5.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面へラナデとナデ	
第102図-4 PL.27	土師杯	壁際	口(15.2) 高(5.3) 1/3欠	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第102図-5 PL.27	土師杯	床面	口14.0 高5.2 口縁一部欠	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第102図-6 PL.27	土師杯	床面	口13.2 高4.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第102図-7 PL.27	土師杯	床面	口12.8 高4.3 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面へラナデとナデ	
第102図-8 PL.27	土師杯	床面	口11.2 高4.5 完形	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面へラナデとナデ	
第102図-9 PL.27	土師杯	カマド 左袖	口17.4 高9.1 口縁~体一部欠	①酸化鉄粒を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第103図-10 PL.27	土師甕	覆土	口21.4 口縁~体上半	①砂粒やや多 ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	
第103図-11 PL.27	土師甕	壁際	口16.1 高17.8 体一部欠	①砂粒を含む ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第103図-12 PL.27	土師甕	床面	口20.5 高14.4 底4.0 完形	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面横ナデ	

73号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第106図-1 PL.26	須惠 高台碗	覆土	口14.4 高(5.5) 高台欠	①粗砂若干含む ②明褐 ③酸化、軟質	ロクロ左回転 底回転糸切り	

76号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第108図-1 PL.26	土師甕	覆土 下層	口縁~体上半	①粗砂やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	口縁歪む
第109図-2	土師甕	覆土 下層	体下位~底	①砂粒を含む ②明褐 ③普通	体下位縦へラケズリ	
第109図-3 PL.26	須惠 皿	覆土 下層	口(10.6) 1/2 高1.7 底7.4	①砂粒を含む ②明褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 糸切り	

第V章 検出された遺構と遺物

77号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第111図-1	須 惠 高台椀	覆 土	1/4	①砂粒を含む ②橙 ③酸化、軟質	底糸切り後付高台	
第111図-2	須 惠 高台椀	覆 土	杯底～高台	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底糸切り後付高台	
第111図-3	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/4	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	
第111図-4	土 師 甕	覆 土	体下半1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

78号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第113図-1 PL.27	土 師 杯	覆 土	口14.0 高3.8 口縁底一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第113図-2	土 師 台付甕	覆 土	脚台1/6	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	脚台縦ヘラケズリ 内面ナデ 裾横ナデ	
第113図-3	土 師 甕	カマド	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第113図-4	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/6	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

79号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第115図-1 PL.27	須 惠 蓋	覆 土	小破片	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質		
第115図-2	須 惠 蓋	覆 土	つまみ部1/2	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質		
第115図-3 PL.27	須 惠 皿	床 面	口(11.6)高2.4 底5.0 1/2	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右回転クロコ整形 底回転糸切り	
第115図-4 PL.27	須 惠 皿	床 面	口9.0 高2.5 底4.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底回転糸切り	

第115図-5 PL.27	須 惠 杯	覆 土	口15.6 高4.0 1/2	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右回転クロ整形	
第115図-6 PL.27	土 師 甕	焚 口	口22.0 口縁～体上半1/2	①細礫、粗砂若干含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ後ナ デ 内面ナデ	
第115図-7	土 師 甕	床 面	底 (11.0) 体下位～底1/4	①細礫、粗砂若干含む ②赤褐 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	

80号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第116図-1	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第116図-2	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第116図-3	須 惠 杯	覆 土	高4.5 1/4	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底右回転糸切り	
第116図-4	須 惠 甕	覆 土	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	回転利用のナデ整形	

82号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第118図-1	土 師 杯	覆 土	口 (13.2) 高3.5 1/2	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第118図-2	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口唇ツマミナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ後放射状ヘラミガキ	

83号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第120図-1 PL.27	土 師 杯	壁 際	1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ後放射状ヘラミガキ	
第120図-2 PL.27	土 師 杯	壁 際	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

84号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第122図-1 PL.28	須 惠 蓋	覆 土	つまみ径5.3 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質		
第122図-2	須 惠 蓋	覆 土	つまみ径3.4 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質		
第122図-3	須 惠 蓋	覆 土	1/4	①白色鉱物を若干含む ②灰 ③還元、硬質		
第122図-4 PL.28	須 惠 高台杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底切り離しは糸切りと思われる	
第122図-5 PL.28	土 師 杯	床 面	高3.3 1/3	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第122図-6 PL.28	土 師 杯	床 面	口12.8 高3.5 2/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第122図-7	土 師 杯	床 面	高3.2 2/3	①細砂を含む ②にふ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第122図-8	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第122図-9	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第122図-10	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第123図-11 PL.28	土 師 甕	カマド	口 (25.0) 口縁～体上半	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	
第123図-12 PL.28	土 師 甕	カマド 左 袖	口 (23.0) 口縁～体上半1/3	①細砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第123図-13	土 師 甕	床 面	底5.6 体下位～底	①細砂やや多 ②内橙 外黒 ③普通	体下位斜へラケズリ 底へラケズリ 内面ナデ	
第123図-14	土 師 甕	カマド 右 袖	口 (26.0) 口縁～体上位1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	

85号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第125図-1	(須惠) 羽 釜	覆 土	口縁小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	紐積み上げ後、ロクロ整形	

第125図-2	須 恵 (瓶)	カマド	底小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質		
第125図-3	須 恵 杯	カマド	1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転	

86号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第127図-1	須 恵 杯	床 面	口縁～底小破片	①酸化鉄粒若干含む ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転	
第127図-2 PL.28	須 恵 杯	ピット P ₁	口10.6 高4.0 底6.6 完形	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 底右回転糸切り	
第127図-3 PL.28	須 恵 高台碗	覆 土	口 (12.0) 高4.2 口縁1/2欠	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③酸化	ロクロ右回転 底右回転糸切り後付高 台	
第127図-4	須 恵 杯	覆 土	口 (12.8) 口縁1/4	①細砂を含む ②褐 ③酸化、軟質		
第127図-5 PL.28	須 恵 高台碗	ピット P ₃	口14.0 高6.5 底8.4 口縁1/3欠	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 付高台 高台内全面ナ デ	
第127図-6	須 恵 高台碗	ピット P ₆	口 (16.0) 1/2 高台欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 付高台	
第127図-7 PL.28	須 恵 高台碗	覆 土	1/5	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 付高台 高台内全面ナ デ	
第127図-8	土 師 高台碗	覆 土	1/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	回転糸切り後付高台周辺ナデ	
第127図-9 PL.28	灰 釉 段 皿	床 面	1/3	①細砂を含む ②灰 ③普通	ロクロ右回転	見込部に重ね焼痕
第127図-10 PL.28	土 師 甕	カマド	1/5	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横へラケズリ 中位縦へラケズリ 内面ナデ	
第127図-11	土 師 甕	床 面	口縁～体小破片	①細砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラケズリ 内面ナデ	体部外面積み上げ 痕
第127図-12	(土師) 甕	床 面	口縁～体小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体内外面回転利用ナデ	
第127図-13	(土師) 甕	床 面	口 (21.0) 口縁～体上半1/2	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半ロクロ整形 下半縦へラケズリ 内面ナデ	
第127図-14	(須恵) 羽 釜	床 面	口縁～体上半1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	ロクロ整形 体中位縦へラケズリ	
第127図-15	(須恵) 羽 釜	床 面	口縁小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	ロクロ整形	

87号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第128図-1 PL.28	土師 甕	覆土	口縁小破片	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ	外面に積み上げ痕

88号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第130図-1	土師 杯	覆土	1/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第130図-2 PL.28	須恵 杯	覆土	口(11.0) 高3.2 1/2	①細砂を含む ②赤褐 ③酸化、軟質	底右回転糸切り	
第130図-3 PL.28	須恵 杯	覆土	口(10.6) 高5.6 1/2	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底回転糸切り	
第130図-4 PL.28	須恵 高台碗	カマド	口14.0 高6.8 底8.0 完形	①細砂やや多 ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 付高台 高台内全面ナ デ	
第130図-5 PL.28	灰釉 高台碗	覆土	口(17.0) 高6.0 底8.4 1/2	①細砂を含む ②灰白 ③普通	ロクロ右回転 高台端は丸味をもつ 釉は口縁のみつけかけ	

89号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第132図-1 PL.29	須恵 蓋	覆土	1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	回転方向不明	
第132図-2	須恵 高台杯	覆土	高3.5 小破片	①細砂を含む ②灰白 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底回転へラケズリ 付高台後周辺ナデ	
第132図-3	須恵 杯	覆土	高4.5 1/3	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底右回転糸切り	
第132図-4 PL.29	土師 杯	覆土	口(12.0) 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第132図-5	土師 杯	覆土	高2.9 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第132図-6	土師 杯	覆土	高3.0 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

90号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第134図-1 PL.29	須 惠 杯	覆 土	口縁1/3	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右回転ロクロ整形	
第134図-2 PL.29	須 惠 杯	覆 土	高(4.5) 1/4	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右回転ロクロ整形 底回転糸切り	
第134図-3	土 師 甌	焚 口	体下半1/4	①粗砂やや多 ②にぶ い橙 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第134図-4	土 師 甌	カマド	口縁～体上半1/5	①粗砂やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ	

94号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第138図-1	須 惠 羽 釜	覆 土	口縁～体上半1/5	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

103号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第140図-1	(須惠) 杯	カマド	1/4	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	右回転ロクロ整形	

105号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第143図-1	(須惠) 羽 釜	カマド	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体部外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第143図-2 PL.29	(須惠) 羽 釜	カマド	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体部外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第143図-3	土 師 甌	覆 土	体下位～底	①粗砂やや多 ②明褐 ③普通	体部外面縦ヘラケズリ	底面靱圧痕
第142図-4	土 師 甌	覆 土	体下位～底	①粗砂やや多 ②明褐 ③普通	体部外面縦ヘラケズリ	底面靱圧痕

第V章 検出された遺構と遺物

120号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第146図-1 PL.29	土 師 杯	床 面	口6.3 高3.9 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第146図-2	土 師 甕	床 面	口縁小破片	①砂粒やや多 ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第146図-3	土 師 甕	床 面	口縁～体上半1/2	①砂粒を含む ②明褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	
第146図-4	土 師 甕	床 面	口縁～体上位	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面へラナデ	

129号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第148図-1 PL.29	須 恵 杯	壁 際	口12.0 高3.5 底8.9 完形	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底糸切り後手持ちへラ ケズリ	
第148図-2 PL.29	須 恵 杯	壁 際	口12.0 高4.1 底8.0 口一部欠	①白色鉱物目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底切り離し不明	
第148図-3	土 師 甕	覆 土	口縁小破片	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第148図-4	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/2	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面へラナデ	
第148図-5	土 師 甕	壁 際	口縁～体上半1/2	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、下半縦へ ラケズリ 内面ナデ	

130号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第150図-1 PL.29	須 恵 高台椀	カマド	口15.2 高6.9 底6.2 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 回転糸切り後付高 台	
第150図-2 PL.29	須 恵 杯	カマド	高4.0 1/4	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	回転糸切り	
第150図-3 PL.29	土 師 甕	カマド 左 袖	口19.2 口縁～体上位	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面へラナデ	

131号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第152図-1 PL.29	須 惠 高台椀	覆 土	高4.7 底6.3 口縁1/2欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り	
第152図-2 PL.29	須 惠 皿	覆 土	高2.0 1/3	①粗砂やや多 ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り	
第152図-3	須 惠 杯	覆 土	高4.2 小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底切り離し不明	
第152図-4	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/4	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第152図-5	土 師 甕	覆 土	口縁小破片	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

132号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第153図-1	須 惠 杯	覆 土	高4.2 底6.4 口縁3/4欠	①酸化鉄粒目立つ ②明褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 底回転糸切り	
第153図-2	土 師 杯	覆 土	高3.5 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第153図-3	須 惠 杯	覆 土	口13.6 高3.3 底7.6 口一部欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底回転ヘラケズリ	底部外面に墨書
第153図-4	土 師 杯	覆 土	高3.4 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底面ヘラケズリ 内面ナデ	底部内面に墨書
第153図-5 PL.29	土 師 杯	覆 土	口(12.7) 高3.0 1/3欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底面ヘラケズリ 内面ナデ	
第153図-6 PL.29	土 師 杯	覆 土	口12.4 高3.4 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第153図-7 PL.29	土 師 杯	覆 土	口12.7 高3.2 口縁一部欠	①細砂やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第153図-8	土 師 台付甕	覆 土	口12.4 体一部、台欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体上半横、下半斜ヘラケ ズリ 内面ナデ	体部下半煤付着

第V章 検出された遺構と遺物

140号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第156図-1	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/5	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	

141号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第156図-1	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第156図-2	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第156図-3	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位1/5	①砂粒やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	

142号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第158図-1 PL.30	須 恵 蓋	覆 土	径11.0 高1.1 つまみ欠	①砂粒を含む ②灰 ③還元・硬質	ロクロ左回転整形	
第158図-2 PL.30	土 師 甕	覆 土	高28.5 底5.0 口縁2/3欠	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	体内面に積み上げ 痕

144号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第161図-1 PL.30	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第161図-2 PL.30	土 師 杯	覆 土	1/2強	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第161図-3 PL.30	土 師 杯	カマド	1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第162図-4	土師杯	カマド	1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第162図-5	土師杯	カマド	1/4	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第162図-6 PL.30	土師甕	覆土	口(23.2) 口縁~体上位	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横、下半縦へ ラケズリ 内面ナデ	口縁に積み上げ痕

145号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第164図-1 PL.30	土師杯	覆土	口19.0 高6.2 口縁1/3欠	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第164図-2	土師杯	覆土	1/4	①細砂やや多 ②にふ い褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第164図-3	土師甕	覆土	体下半~底1/3	①細砂やや多 ②橙 ③普通	体下半縦で底付近横へラケズリ 内面ナデ	

149号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第165図-1	須恵 (高台碗)	カマド 左袖	口16.0	①細砂を含む ②にふ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺ナデ	
第165図-2	須恵 杯	ピット P ₄	底1/2	①細砂を含む ②橙 ③酸化、軟質	底回転糸切り	

150号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第167図-1	土師杯	覆土	高4.9 1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第167図-2	土師甕	覆土	口縁小破片	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	

154号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第172図-1	須 惠 蓋	覆 土	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形	
第172図-2	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

155号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第173図-1 PL.30	須 惠 高台盤	壁 際	口21.4 高4.3 底7.3 口一部欠	①砂粒やや多 ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 回転ヘラケズリ後付高台	
第173図-2 PL.30	土 師 杯	覆 土	高3.7 1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

156号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第175図-1	須 惠 杯	床 面	高3.6 1/4	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	左回転ロクロ整形 底回転糸切り後周 辺回転ヘラケズリ	
第175図-2	須 惠 高台杯	壁 際	口14.1 高4.6 口縁1/2欠	①砂粒やや多 ②灰 ③還元、硬質	回転ヘラケズリ後付高台	
第175図-3	須 惠 杯	床 面	口縁1/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形	
第175図-4 PL.30	土 師 杯	床 面	高(4.2) 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第175図-5 PL.30	土 師 杯	床 面	口12.8 高3.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第175図-6	須 惠 壺	床 面	底12.2 体下半～底	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 付高台	自然釉かかる
第175図-7	土 師 壺	床 面	底9.4 体下半～底	①酸化鉄粒目立つ ②明赤褐 ③普通	体外面ヘラケズリ後ナデ 底ヘラケズリ 内面ナデ	
第175図-8	土 師 甕	床 面	口縁～体小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

160号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第178図-1	土 師 甕	覆 土	体下半～底1/4	①粗砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	体外面横へラケズリ 底へラケズリ 内面ナデ	

162号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第179図-1 PL.30	土 師 杯	覆 土	1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体下半へラケズリ 底無調整 内面ナデ	体部外面に墨書
第179図-2	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底周辺へラケズリ 内面ナデ	口縁内面に煤付着
第179図-3	須 恵 (壺)	覆 土	体下半1/4	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	右回転クロコ整形	

163号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第181図-1 PL.30	須 恵 高台椀	床 面	高5.9 底7.2 口縁1/2欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転クロコ整形 底回転糸切り後付 高台周辺部ナデ	
第181図-2 PL.30	土 師 杯	床 面	口13.0 高3.3 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ②普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第181図-3	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

164号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第183図-1 PL.30	須 恵 杯	床 面	高4.0 底6.0 1/2	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	クロコ右回転 底回転糸切り	
第183図-2 PL.30	土 師 杯	貯蔵穴 壁 際	口13.6 高2.8 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第183図-3 PL.30	土師杯	壁際	高3.4 1/2	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第183図-4	土師杯	覆土	1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第183図-5	土師杯	床面	1/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第183図-6	土師甕	壁際	口縁~体上位1/5	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	口縁積み上げ痕

165号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第185図-1 PL.30	須惠 高台椀	覆土	口径14.2 高5.9 底6.6 2/3	①白色大粒砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り 付高台周辺部ナデ	
第185図-2 PL.30	須惠 杯	覆土	口径13.2 高3.9 底6.8 口縁1/3欠	①大粒黒色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り	内面に重ね焼き痕
第185図-3	土師 甕	焚口	1/4	①砂粒やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第185図-4	土師 甕	焚口	1/4	①砂粒やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	第185図-3と同一 の可能性

166号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第187図-1	土師 杯	覆土	1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第187図-2 PL.30	土師 杯	覆土	1/3	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ	
第187図-3	土師 杯	床面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面無調整	
第187図-4	土師 甕	床面	小破片	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	頸部に指頭痕
第187図-5	須惠 高台杯	壁際	底8.8 下半~高台	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	底回転糸切り後付高台周辺ナデ	
第187図-6	須惠 蓋	覆土	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ左回転	

167号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第189図-1	土 師 杯	覆 土	高(3.3) 1/4	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第189図-2	土 師 杯	覆 土	1/5	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第189図-3	土 師 杯	床 面	高3.6 1/5	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第189図-4	土 師 杯	床 面	高4.5 約1/3	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第189図-5	土 師 杯	床 面	1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第189図-6	土 師 杯	覆 土	口 (12.0) 高3.6 約1/3	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第189図-7	土 師 小形甕	覆 土	1/4	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第189図-8	土 師 甕	壁 際	口縁～体上半1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜へラケズリ 内面へラナデとナデ	

168号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第190図-1	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第190図-2	土 師 杯	覆 土	高3.0 小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

169号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第191図-1 PL31	土 師 甕	床 面	口18.0 高30.6 底6.0 口一部欠	①砂粒やや多 ②にぶ い黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 下位横へラケズリ 内面ナデ	体積み上げ痕 底木葉痕
第191図-2	土 師 甕	床 面	口縁～体上位1/2	①酸化鉄粒目立つ ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第191図-3 PL.31	土師甕	床面	口縁~体上半1/4	①粗砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第191図-4 PL.31	土師甕	床面	口21.4 高22.4 底9.5 口一部欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ後縦ヘラミガキ	体部積み上げ痕
第191図-5	手捏ね 土器	覆土	高4.9 底5.0 上半1/2欠	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通		

171号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第194図-1 PL.31	須恵 高台杯	床面	高4.3 約1/3	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転ヘラケズリ後付 高台周辺部ナデ	
第194図-2 PL.31	須恵 高台杯	床面	高4.4 底11.2 口縁1/2欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転ヘラケズリ後付 高台周辺部ナデ	
第194図-3 PL.31	土師 杯	床面	口12.4 高3.4 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

174号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第197図-1 PL.31	須恵 高台杯	覆土	1/3	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転ヘラケズリ後付高台	
第197図-2	土師 杯	焚口	高3.7 1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第197図-3	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	底外面ヘラケズリ	底部内面に煤附着
第197図-4	土師 甕	床面	口縁~体上位1/5	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

175号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第199図-1 PL.31	土師 杯	焚口	口12.8 高4.1 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

第199図-2	土師杯	床面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第199図-3	土師甕	床面	口縁1/4破片	①砂粒やや多 ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	口縁積み上げ痕

176号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第200図-1	土師杯	覆土	口15.2 高3.1 約1/2	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第200図-2 PL.31	土師杯	覆土	口12.8 高3.6 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第200図-3	土師甕	覆土	口縁~体上位1/2	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第200図-4	土師甕	覆土	口縁~体上半1/2	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜へ ラケズリ 内面へラナデ	
第200図-5	土師甕	覆土	口縁~底1/2	①細砂やや多 ②橙 ③普通	体中位斜、下位横へラケズリ 内面へラナデ	体部内面積み上げ 痕

178号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第202図-1	須恵杯	覆土	高4.3 約1/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ左回転整形 底回転系切り	
第202図-2	(土師) 高台椀	覆土	口10.4 高3.8 底6.0 完形	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 付高台周辺ナデ	内面黒色処理
第202図-3 PL.31	須恵 高台椀	覆土	口15.0 高8.3 底8.4 口一部欠	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 付高台後全体ナデ	
第202図-4	土師杯	覆土	高3.1 1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底へラケズリ 内面ナデ	
第202図-5	須恵 皿	カマド	高1.5 底6.0 約1/4	①砂粒を含む ②褐 ③酸化、軟質	回転系切り	
第202図-6 PL.31	須恵 皿	焚口	口8.2 高1.7 底5.4 完形	①砂粒やや多 ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ左回転整形 底回転系切り	
第202図-7 PL.31	土師甕	覆土	口13.0 高13.8 底5.2 完形	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横、下半斜へ ラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

179号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第204図-1	須 恵 壺	覆 土	体1/3	①細砂を含む ②灰 ③普通	紐積み上げ後 回転利用のナデ整形	

181号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第205図-1 PL.31	須 恵 杯	覆 土	口12.4 高4.0 底6.5 口一部欠	①粗砂を含む ②灰褐 ③還元、硬質	ロクロ右回転? 底回転糸切り	
第205図-2 PL.31	須 恵 杯	覆 土	口13.2 高4.1 底6.5 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	内面に煤付着
第205図-3	土 師 甕	覆 土	口縁~体上位1/3	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	

182号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第206図-1 PL.31	土 師 杯	覆 土	口16.0 高3.4 口縁1/2欠	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第206図-2	土 師 杯	床 面	口縁1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体外面無調整	

183号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第207図-1 PL.31	須 恵 蓋	床 面	口16.7 高2.5 2/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ左回転? 断面三角形の小規模 なかえりがつく	
第207図-2	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第207図-3	土 師 甕	覆 土	口縁~体上位1/4	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第207図-4 PL.31	土 師 甕	覆 土	口縁~体上位1/3	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁2段の横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	

184号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第209図-1	須 惠 蓋	ピット P ₂	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	天井部は低く比較的平坦 口唇は丸味をもつ	
第207図-2	土 師 甕	カマド	口縁～体上半1/3	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	

185号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第212図-1	須 惠 蓋	覆 土	高4.5 1/6	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形	
第212図-2 PL.32	須 惠 杯	床 面	口13.7 高3.9 底9.2 完形	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り後周辺ヘラケズリ	
第212図-3 PL.32	須 惠 杯	覆 土	口11.0 高3.1 底6.8 口縁1/3欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り無調整	
第212図-4 PL.32	須 惠 杯	覆 土	口12.3 高3.6 底8.2 口一部欠	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り後周辺ヘラケズリ	
第212図-5 PL.32	須 惠 高台杯	カマド	口14.2 高4.4 底16.2 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転ヘラケズリ後付高台	
第212図-6 PL.32	須 惠 杯	床 面	1/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ左回転 底糸切り後周辺ヘラケズリ	
第212図-7 PL.32	須 惠 皿	床 面	口8.0 高1.9 底5.0 1/2	①砂粒を含む ②明赤 褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転 底回転糸切り	
第212図-8 PL.32	土 師 杯	覆 土	口12.2 高3.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第212図-9	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第212図-10 PL.32	土 師 杯	覆 土	1/2弱	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第213図-11 PL.32	土 師 杯	覆 土	高3.2 1/2	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第213図-12 PL.32	土 師 杯	カマド	1/3	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第213図-13 PL.32	土 師 杯	覆 土	口12.4 高3.3 完形	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第213図-14 PL.32	土師杯	覆土	口12.6 高3.5 口縁1/2欠	①細砂やや多 ②にぶい赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体外面無調整	
第213図-15	土師杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体外面無調整	
第213図-16 PL.32	土師杯	カマド	口11.8 高3.1 底一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体下半無調整	
第213図-17 PL.32	土師杯	壁際	口12.6 高2.9 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶい褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第213図-18	土師杯	床面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ後放射状ヘラミガキ	
第213図-19 PL.32	土師杯	覆土	口縁1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 内面ナデ後放射状ヘラミガキ	
第213図-20 PL.32	土師杯	覆土	口14.0 高4.9 口縁一部欠	①細砂を含む ②浅黄橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底部内面刻書 「田」か?
第213図-21	土師杯	覆土	底のみ残存	①細砂を含む ②にぶい橙 ③普通	底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底外面墨書 「井」
第213図-22	須恵高台椀	覆土	底のみ残存	①砂粒を含む ②褐灰 ③還元、硬質	付高台後全体にナデ	底部内面刻書
第214図-23	土師甕	床面	口縁～体上半1/2	①細砂を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第214図-24 PL.32	土師甕	床面	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第214図-25 PL.32	土師甕	床面	口縁～体上半1/3	①砂粒やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜ヘラケズリ 内面ナデ	口縁積み上げ痕
第214図-26 PL.32	土師甕	壁際	口18.2 高32.1 底7.0 完形	①砂粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横、下半斜ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ痕
第214図-27 PL.32	須恵横瓶	覆土	口縁～体下位	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質		体部内外面に叩き目

186号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第215図-1	須恵高台椀	覆土	底6.8 1/3(口縁欠)	①白色粗砂目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後付高台周辺ナデ	
第215図-2	須恵高台椀	覆土	底7.7 口縁欠	①黒色砂粒目立つ ②灰、③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転糸切り後付高台周辺ナデ	

187号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第216図-1	須 恵 杯	壁 際	高3.6 1/4	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転 底回転ヘラケズリ	
第216図-2 PL.33	須 恵 皿	覆 土	口8.5 高1.7 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ左回転 底回転糸切り	

188号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第218図-1 PL.33	須 恵 蓋	床 面	口17.2 高4.5 1/2弱	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	回転方向不明 かえりは断面三角形状	
第218図-2	土 師 杯	壁 際	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 体外面無調整	
第218図-3	土 師 杯	ピット P ₂	小破片	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体下位無調整	
第218図-4 PL.33	土 師 杯	壁 際	口12.6 高3.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	底部焼成後穿孔
第218図-5	土 師 杯	床 面	高(2.5) 口縁小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ	口縁に煤付着
第218図-6	土 師 甕	床 面	口縁小破片	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体上位横ヘラケズリ	

189号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第219図-1	土 師 甕	覆 土	口縁小破片	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体上位横ヘラケズリ	

190号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第221図-1	土 師 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

193A号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第224図-1	須 恵 杯	カマド	高 (6.2) 1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	右回転ロクロ整形	高台がつくか？
第224図-2	須 恵 皿	カマド 右 袖	口9.0 高1.5 1/2強	①細砂を含む ②灰褐 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底回転糸切り	
第224図-3	土 師 甕	カマド	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第224図-4	土 師 甕	カマド	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②暗赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

194号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第226図-1	須 恵 高台椀	ピット P ₁	底7.2 高台のみ残存	①細砂を含む ②にぶ い黄橙 ③酸化 軟質	底右回転糸切り後付高台周辺ナデ	
第226図-2	土 師 甕	床 面	口縁～体上位1/4	①砂粒を含む ②にぶ い黄褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第226図-3	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位小片	①細砂を含む ②にぶ い黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ	

195・196号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第228図-1	須 恵 高台杯	覆 土	高3.5 小破片	①砂粒やや多 ②灰 ③普通	回転ヘラケズリ後付高台 高台端は外 側に平坦面をもつ	
第228図-2 PL.33	土 師 杯	カマド	口13.0 高3.2 2/3	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第228図-3	土 師 杯	床 面	高2.9 1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第228図-4	土 師 甕	覆 土	2/3	①細砂やや多 ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第228図-5	土 師 甕	カマド 左 袖	口 (22.0) 口縁～体下位	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 縦ヘラケズリ 内面ナデ	

第228図-6	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/2	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第228図-7	土師 台付甕	床面	体下半のみ残存	①細砂を含む ②橙 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 底内面ヘラナデ	

198号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第229図-1 PL.33	須惠 高台杯	覆土	高6.9 1/3弱	①細砂を含む ②赤灰 ～橙 ③酸化、軟質	右回転ロクロ整形付高台 口縁外面に1条の沈線を廻らす	
第229図-2	土師 杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第229図-3	土師 杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第229図-4	土師 台付甕	覆土	体下位1/3	①砂粒やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	体外面縦、斜ヘラケズリ 内面ナデ 脚台接合部横ナデ	体部外面に煤付着

199号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第230図-1 PL.33	須惠 高台碗	覆土	高6.2 1/4	①細砂を含む ②灰褐 ③還元、硬質	左回転ロクロ整形か	
第230図-2	(須惠) 羽釜	覆土	口縁～体上半1/5	①細砂を含む ②にぶ い黄褐 ③普通	紐積み上げ後ロクロ整形 体外面下半 に縦ヘラケズリ	体部鈔下積み上げ 痕
第230図-3 PL.33	手握ね 土器	覆土	高4.0 1/2	①砂粒を含む ②赤褐 ③普通		

200号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第232図-1 PL.33	須惠 高台碗	床面	口4.0 高6.0 底6.4 口一部欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底回転糸切り後付 高台周辺ナデ	胎土分析資料

第V章 検出された遺構と遺物

第232図-2 PL.33	須 惠 杯	覆 土	高3.6 底6.5 口縁2/3欠	①細砂を含む ②灰褐 ③酸化、軟質	ロクロ左回転整形 底回転糸切り後周 辺回転ヘラケズリ調整	
第232図-3 PL.33	須 惠 杯	床 面	口14.6 高4.9 底6.0 口一部欠	①金雲母含む ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第232図-4	須 惠 杯	床 面	口15.4 高4.6 底6.0 2/3	①金雲母含む ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第232図-5 PL.33	須 惠 皿	床 面	口8.8 高2.7 底4.9 口一部欠	①細砂を含む ②褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第232図-6 PL.33	須 惠 皿	床 面	口9.0 高2.2 底4.5 口一部欠	①細砂を含む ②褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第232図-7 PL.33	須 惠 皿	床 面	口9.6 高2.0 底3.9 口1/4欠	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第232図-8 PL.33	須 惠 皿	床 面	口8.6 高2.6 底4.6 完形	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第232図-9 PL.33	須 惠 皿	床 面	口8.8 高2.1 底4.9 完形	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第233図-10	(須惠) 羽 釜	覆 土	口縁～体上半1/5	①砂粒を含む ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラナデ 内面ナデ	体部外面積み上げ 痕
第233図-11 PL.33	(須惠) 羽 釜	覆 土 上 層	口 (26.0) 口縁～体1/2底欠	①粗砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ 鈎は一部で消える	口縁穿孔2ヶ所
第233図-12	(須惠) 羽 釜	覆 土	口縁～体上位1/5	①粗砂やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデ	体部外面煤付着
第233図-13	(須惠) 羽 釜	覆 土	口縁～体上半1/2	①粗砂やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	鈎部横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ヘラナデとナデ	
第233図-14	土 師 甕	床 面	口縁～体上半小片	①粗砂やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第233図-15	土 師 甕	覆 土	体下半1/2～底	①粗砂やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	体外面縦、下位横ヘラケズリ 内面ナデ	

201号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第234図-1	須 惠 高台碗	床 面	下半小破片	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形	

204号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第236図-1 PL.34	土師 甕	壁際	口27.0 高29.1 底9.0 3/4	①粗砂やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位無調整、中位 縦、下位横ヘラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ痕

205号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第237図-1	須惠 高台椀	覆土	高4.6 底6.4 口縁大部分欠	①細砂を含む ②にぶ い赤褐 ③酸化、軟質	付高台周辺ナデ	器面剝離
第237図-2	須惠 (高台椀)	覆土	高台のみ残存	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、軟質		
第237図-3	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第237図-4	須惠 甕	カマド	体下半～底	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	体下位ヘラナデ 底外面周辺部ヘラケ ズリ	外面に叩き目痕

209号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第241図-1 PL.34	須惠 杯	覆土	高4.4 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 回転糸切り	

210号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第243図-1 PL.33	須惠 杯	床面	口13.0 高5.9 底4.0 1/2	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第243図-2 PL.33	須惠 杯	床面	高3.4 底6.0 1/2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第243図-3 PL.33	須惠 杯	覆土	口12.8 高3.8 底5.4 完形	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	

第V章 検出された遺構と遺物

第243図-4	須 惠 杯	覆 土	口12.2 高4.0 底6.0 口一部欠	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	
第243図-5	須 惠 杯	覆 土	口12.8 高3.7 1/2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	胎土分析資料
第243図-6 PL.33	須 惠 杯	覆 土	口12.8 高4.0 底6.0 口縁1/3欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	
第244図-7	須 惠 皿	覆 土	高2.6 1/4	①砂粒を含む ②褐灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	
第244図-8	須 惠 皿	覆 土	高2.4 1/4	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	
第244図-9 PL.33	土 師 杯	覆 土	高(3.3) 1/4	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底無調整	
第244図-10 PL.33	須 惠 高台椀	覆 土	高5.2 底7.1 口縁1/2欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り後付 高台周辺ナデ	
第244図-11	須 惠 高台椀	覆 土	高5.9 口縁1/4 底1/2	①砂粒を含む ②褐 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り後付 高台周辺ナデ	胎土分析資料
第244図-12	土 師 杯	床 面	口縁1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ	
第244図-13	須 惠 高台椀	覆 土	底(7.0) 口縁欠1/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	回転系切り後付高台周辺ナデ	胎土分析資料
第244図-14 PL.33	須 惠 長頸瓶	覆 土	口12.4 口縁のみ残存	①粗砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形	

211号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第245図-1 PL.34	須 惠 杯	覆 土	口12.9 高4.3 底6.0 口縁1/3欠	①細砂を含む ②明褐 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	
第245図-2	須 惠 (高台椀)	床 面	口縁小破片	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ整形	
第245図-3 PL.34	須 惠 高台椀	覆 土	1/3	①砂粒やや多 ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り後付 高台	
第245図-4 PL.34	須 惠 皿	覆 土	高2.0 底6.0 口縁1/3欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	
第245図-5 PL.34	須 惠 皿	床 面	口12.9 高3.0 底6.2 口縁2/3	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	
第245図-6 PL.34	須 惠 皿	覆 土	高2.3 1/4	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り	

第245図-7	土師杯	床面	高3.6 1/4	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第245図-8 PL.34	土師杯	覆土	高(3.3) 1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ	
第245図-9	土師甕	床面	口縁～体上位1/5	①砂粒を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面へラナデ	
第245図-10	土師甕	覆土	口縁～体上位1/5	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第245図-11	土師甕	覆土	口縁～体上位1/5	①細砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第245図-12	須恵壺	覆土	肩～上半小破片	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	回転利用のナデ調整	肩に自然釉

212号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第247図-1 PL.34	須恵杯	張り 出し	口13.2 高3.5 底7.8 1/2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺回転へラケズリ	
第247図-2	須恵杯	覆土	口14.0 高4.0 底9.0 1/2	①黒色砂粒目立つ ②灰 ③還元 硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺手持ちへラケズリ	
第247図-3	須恵杯	覆土	高3.5 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺へラケズリ	
第247図-4 PL.34	須恵杯	張り 出し	口13.5 高3.8 底8.2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転へラケズリ	
第247図-5	須恵杯	覆土	高3.5 底6.3 口縁大部分欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺へラケズリ	
第247図-6 PL.34	須恵 高台杯	覆土	高5.4 底7.3 口縁1/2	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ左回転整形 付高台周辺ナデ	
第247図-7	土師杯	覆土	高2.8 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	底部外面に墨書
第247図-8	土師杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第247図-9	土師杯	覆土	高(3.0) 1/2	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第247図-10	土師杯	覆土	高(3.2) 1/3	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第247図-11	土師杯	覆土	高3.2 1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第247図-12	土師杯	カマド	高3.0 1/2	①細砂を含む ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第248図-13 PL.34	土師杯	覆土	口12.4 高3.2 底一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第248図-14 PL.34	土師杯	覆土	1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第248図-15	土師杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	底外面ヘラケズリ 内面放射状ヘラミ ガキ	
第248図-16	土師杯	覆土	底小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	底外面ヘラケズリ 内面ナデ	内外面格子目刻線
第248図-17	土師杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	底外面ヘラケズリ 内面放射状ヘラミ ガキ	
第248図-18	土師甕	カマド 右袖	口縁～体上半1/2	①酸化鉄粒目立つ ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 縦ヘラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ痕
第248図-19	土師甕	カマド 右袖	口縁～体上半1/2	①細砂やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 斜ヘラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ痕
第248図-20	土師甕	カマド	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第248図-21	土師甕	床面	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜ヘ ラケズリ 内面ヘラケズリとナデ	
第248図-22	土師甕	張り出し	体下半	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第248図-23	土師台付甕	床面	体下位～脚台1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	体外面ヘラケズリ 内面ナデ 脚台横ナデ	
第248図-24	土師台付甕	覆土	脚台のみ残存	①細砂を含む ②赤褐 ③普通	脚台横ナデ	
第248図-25	須恵盤	覆土	小破片	①砂粒やや多 ②灰 ③還元、硬質	付高台 ロクロ回転方向不明	

213号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第249図-1	土師台付甕	覆土	脚台のみ残存	①細砂を含む ②褐 ③普通	脚台部横ナデ	

214号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第250図-1 PL.34	須恵高台椀	覆土	口13.4 高5.5 底6.1 口一部欠	①砂粒を含む ②灰褐 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後付 高台周辺ナデ	

第250図-2	須惠高台碗	壁際	底3.8 口縁欠	①細砂を含む ②灰褐 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転系切り後付 高台周辺ナデ	
第250図-3 PL.34	土師杯	覆土	口12.0 高4.5 底7.0	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第250図-4 PL.34	土師甕	覆土	口縁～体上半1/2	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位縦へ ラケズリ 内面へラナデとナデ	口縁積み上げ痕

215号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第252図-1	須惠杯	覆土	高3.8 小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転系切り	
第252図-2 PL.34	須惠高台碗	床面	1/4 (口縁欠)	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底付高台周辺ナデ	
第252図-3	須惠杯	覆土	高4.8 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底回転系切り	
第252図-4 PL.34	土師杯	壁際	口12.4 高3.1 口縁一部欠	①細砂を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第253図-5 PL.34	土師杯	覆土	口(17.0) 1/2弱	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第253図-6	土師甕	壁際	口26.4 高28.5 体上半一部欠	①酸化鉄粒目立つ ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位縦へ ラケズリ 内面へラナデ、ナデ	口縁積み上げ痕
第253図-7 PL.34	土師甕	床面	口縁～体上位1/5	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第253図-8	須惠杯	覆土	底小破片	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質		内外面に墨書
第253図-9 PL.34	土師台付甕	カマド袖部	脚台のみ残存	①細砂、酸化鉄粒目立 つ ②橙 ③普通	裾横ナデ	

216号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第255図-1	須惠杯	覆土	高3.4 約1/3	①白色砂粒若干目立つ ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形 底回転系切り後へ ラケズリ調整	
第255図-2	須惠杯	床面	底部小破片	①砂粒を含む ②灰黄 ③還元、硬質	底部へラケズリ	底部外面に墨書 「田」
第255図-3	土師杯	覆土	1/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	口縁部外面に墨書

第V章 検出された遺構と遺物

第255図-4	土師杯	覆土	1/4	①細砂を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第255図-5	土師甕	床面	口21.2 口縁～体上半	①砂粒やや多 ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横、下半斜へラケズリ 内面ナデ	
第255図-6	土師甕	床面	口縁～体上位	①細砂やや多 ②赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横へラケズリ 内面ナデ	
第255図-7 PL.35	土師甕	覆土	口19.8 口縁～体下半	①細砂を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半横、下半縦へラケズリ	
第255図-8	土師甕	覆土	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜へラケズリ 内面ナデ	
第255図-9	土師台付甕	床面	脚台のみ残存	①細砂を含む ②にぶい橙 ③普通	裾横ナデ 体内面へラナデ	
第255図-10 PL.35	須志長頸瓶	覆土	口9.0 口縁のみ残存	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	頸部下位に突帯を廻らす 口唇は上方につまみ上げ	口縁内面自然袖頸部積み上げ痕

217号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第258図-1	須志蓋	床面	高2.5 1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	つまみは平担 小さな突起状のかえりをつける	
第258図-2	土師杯	床面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第258図-3 PL.35	土師杯	覆土	1/3	①砂粒を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第258図-4	土師杯	カマド	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第258図-5 PL.35	土師杯	床面	1/2	①砂粒を含む ②明赤褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ後放射状へラミガキ	
第258図-6 PL.35	土師杯	壁際	口12.0 高3.1 口縁1/3欠	①砂粒を含む ②褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第258図-7 PL.35	土師杯	床面	口16.4 高5.8 1/2強	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第259図-8	土師甕	カマド 右袖	口縁～体上半1/4	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横斜へラケズリ 下位縦へラケズリ 内面ナデ	
第259図-9 PL.35	土師甕	カマド 左袖	口(24.0) 口縁～体下位1/2	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下縦へラケズリ 内面へラナデとナデ	体部積み上げ痕
第259図-10	土師甕	カマド	口縁欠	①砂粒やや多 ②褐 ③普通	体外面斜へラケズリ 内面ナデ	
第259図-11 PL.35	土師台付甕	カマド	脚径12.4 上半欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	体外面斜へラケズリ 内面ナデ 脚台上位へラケズリ 裾横ナデ	

第259図-12 PL.35	土師 台付甕	カマド	脚径13.3 上半欠	①細砂やや多 ②にぶ い褐 ③普通	体外面斜縦ヘラケズリ 内面ナデ 脚台横ナデ	
-------------------	-----------	-----	---------------	----------------------	--------------------------	--

219号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第261図-1 PL.35	須惠 杯	壁際	口13.6 高4.0 底7.5 口一部欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第261図-2	須惠 高台碗	床面	底7.4 口縁欠	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	付高台 底全面ナデ	
第261図-3	灰釉 高台碗	床面	高5.1 底8.4 口縁大部分欠	①細砂を含む ②素地 灰白 ③良好	口縁は弱く外反 体部下半は膨らむ 高台端は丸味をもつ 釉つけかけ	

220号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第263図-1 PL.35	須惠 杯	覆土	口10.4 高3.5 底5.2 完形	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第263図-2 PL.35	須惠 杯	覆土	口11.4 高4.4 底6.0 完形	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③還元、普通	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第263図-3	須惠 高台碗	カマド	口15.0 口縁1/2、高台欠	①砂粒やや多 ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後付 高台周辺ナデ	
第263図-4	須惠 高台碗	覆土	高4.7 小破片	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	付高台周辺ナデ	
第263図-5 PL.35	須惠 高台碗	覆土	1/4	①細砂を含む ②にぶ い黄橙 ③酸化、軟質	付高台周辺ナデ	第263図-4と同一 の可能性あり
第263図-6 PL.35	灰釉 小瓶	覆土	底5.0 口縁欠	①細砂を含む ②素地 灰釉灰オリーブ ③良好	右回転ロクロ整形 底回転糸切り 釉つけかけ	
第263図-7 PL.35	(須惠) 羽釜	覆土	口縁~体下位2/3	①砂粒を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上半ナデ下半縦ヘ ラケズリ 内面ナデ	体部積み上げ痕
第263図-8 PL.35	(須惠) 羽釜	覆土	口縁~体上位1/4	①砂粒やや多 ②黄橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

223号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第267図-1 PL.36	須 惠 椀	壁 際	口14.5 高6.2 底5.5 口一部欠	①砂粒やや多 ②褐 ③酸化気味、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第267図-2 PL.36	須 惠 高台椀	壁 際	口10.2 高5.0 底6.8 口一部欠	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底糸切り後付高台 高台周辺ナデ	
第267図-3	須 惠 高台椀	覆 土	下半小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	付高台	
第267図-4 PL.36	(須惠) 羽 釜	壁 際	口縁～体上半1/3	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	回転利用のナデ調整	
第267図-5	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/4	①酸化鉄粒やや目立つ ②橙 ③酸化、軟質	回転利用のナデ調整 体下半斜へラケズリ	
第267図-6	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位小片	①砂粒を含む ②灰褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面へラナデ	口縁積み上げ痕

224号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第268図-1	須 惠 高台椀	覆 土	高5.3 1/5	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	付高台	
第268図-2	土 師 甕	覆 土	下半1/3	①細砂を含む ②褐 ③普通	体下半縦へラケズリ 内面ナデ	

225号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第269図-1	須 惠 杯	覆 土	高3.8 1/2弱	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第269図-2 PL.36	灰 釉 高台椀	覆 土	高4.5 底8.4 1/2	①細砂を含む ②灰褐 ③還元、硬質	付高台周辺ナデ	
第269図-3 PL.36	須 惠 (高台椀)	覆 土	底6.2 口縁欠	①細砂を含む ②灰褐 ③還元、硬質	付高台後全面ナデ	
第269図-4 PL.36	(須惠) 羽 釜	覆 土	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②黄褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面ナデ	

226号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第270図-1 PL.36	(土師) 高台椀	覆 土	高5.6 底6.6 口縁大部分欠	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③酸化、硬質	ロクロ整形後内面横へラミガキ 付高台周辺ナデ	内面黒色処理
第270図-2 PL.36	須 恵 高台椀	覆 土	高5.6 口縁、高台1/2欠	①砂粒やや多 ②にぶ い褐 ③酸化、軟質	付高台 高台内全面ナデ	
第270図-3 PL.36	須 恵 皿	壁 際	口9.2 高2.9 底4.9 口一部欠	①金雲母含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	底回転へラ切り無調整	
第270図-4 PL.36	須 恵 皿	焚 口	口9.0 高2.1 底5.0 完形	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	底回転へラ切り無調整	
第270図-5 PL.36	土 師 甕	貯蔵穴	下半1/3	①粗砂やや多 ②にぶ い褐 ③普通	体外面縦へラケズリ 内面へラナデ	
第270図-6	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/3	①粗砂やや多 ②褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦へラケズリ 内面横へラナデ	

230号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第272図-1	須 恵 蓋	覆 土	小破片	①白色砂粒若干目立つ ②灰 ③還元、硬質	わずかにかえりをつける	
第272図-2 PL.36	須 恵 蓋	床 面	つまみ、天井部	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	扁平な宝珠状つまみをつける	
第272図-3 PL.36	土 師 杯	覆 土	高4.6 口縁2/3欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第272図-4	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第272図-5	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
第272図-6 PL.36	土 師 甕	床 面	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横斜へラケズリ 内面ナデ	

231号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第273図-1	(須恵) 羽 釜	覆 土	口縁小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

232号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第272図-1 PL.36	須 惠 高台椀	ピット P ₂	口14.3 高5.1 底6.2 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後付 高台周辺ナデ	
第274図-2	須 惠 高台椀	床 面	底6.6 下半～高台	①砂粒やや多 ②黒灰 ③還元、硬質	底回転糸切り後付高台周辺ナデ	

233号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第276図-1 PL.36	須 惠 蓋	床 面	1/5	①粗砂を若干含む ②灰 ③還元、硬質	右回転ロクロ整形	
第276図-2 PL.36	須 惠 高台杯	覆 土	高4.3 底10.4 口縁大部分欠	①砂粒多く含む ②灰 ③還元	底回転ヘラケズリ後付高台	
第276図-3 PL.36	須 惠 杯	覆 土	口14.2 高3.9 底10.0 口一部欠	①黒色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	底回転ヘラケズリ	
第276図-4	須 惠 杯	覆 土	1/4	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転ヘラケズリ	
第276図-5	土 師 杯	覆 土	1/3	①砂粒を含む ②赤褐 ③普通	口縁ナデ 底外面ヘラケズリ 内面放射状ヘラミガキ	
第276図-6 PL.36	土 師 杯	床 面	口15.0 高3.4 口縁一部欠	①砂粒やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第276図-7 PL.36	土 師 甕	カマド	口縁～体上半1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面斜ヘラケズリ 内面ナデ	
第276図-8	土 師 甕	カマド 袖 部	口縁～体上半	①細砂やや多 ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第276図-9	土 師 甕	カマド	下半1/4	①細砂やや多 ②にぶ い褐 ③普通	体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ 底ヘラナデ	

235住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第279図-1 PL.37	土 師 杯	床 面	口13.6 高4.5 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第279図-2 PL.37	土 師 杯	床 面	口11.6 高4.6 口縁一部欠	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

第229図-3	土師杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②にぶい橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ	
---------	-----	----	-----	------------------	------------------------	--

236号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第280図-1	土師台付甕	覆土	脚台部上位小破片	①砂礫やや多 ②橙 ③普通	斜ハケメを施す	S字状口縁台付甕 と思われる

237号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第283図-1	須恵蓋	覆土	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形	
第283図-2 PL.37	須恵高台杯	床面	口13.0 高4.8 底9.6 口一部欠	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後へ ラ調整、付高台	外面ひだすき様痕
第283図-3 PL.37	須恵杯	床面	口14.0 高3.4 底8.4 完形	①粗砂若干含む ②灰 褐 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転へラケズリ	
第283図-4	須恵杯	床面	高3.7 底9.4 口縁3/4欠	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転へラケズリ	
第283図-5 PL.37	須恵杯	床面	口15.0 高3.5 底8.8 口縁2/3	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ左回転整形 底回転へラケズリ	
第283図-6	須恵杯	床面	高3.7 底9.6 口縁3/4欠	①砂粒やや多 ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転へラケズリ	
第283図-7 PL.37	土師杯	床面	口13.0 高3.6 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第283図-8	土師杯	覆土	高3.4 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第283図-9 PL.37	土師杯	床面	口13.4 高3.6 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第283図-10 PL.37	土師杯	床面	口12.4 高3.4 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第283図-11	土師杯	覆土	1/3	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面へラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第283図-12 PL.37	須恵杯	覆土	高3.5 1/2	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転へラケズリ	

第V章 検出された遺構と遺物

第282図-13 PL.37	土師 甕	覆土	口縁～体下位1/3	①細砂やや多 ②橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第282図-14	土師 甕	覆土	口縁～体上位1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	口縁に積み上げ痕
第282図-15	土師 甕	覆土	口縁～体上半1/2	①細砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横 中位以下 縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第282図-16	土師 甕	覆土	体下位～底	①細砂やや多 ②橙 ③普通	体外面斜ヘラケズリ 底ヘラケズリ 内面ナデ	

239号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第285図-1 PL.37	須恵 杯	床 面	口14.2 高4.0 底9.5 口一部欠	①白色砂粒若干目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後周 辺回転ヘラケズリ	内外面ひだすき様 痕

240号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第287図-1	土師 杯	覆土	口(13.0)高3.2 2/3弱	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第287図-2	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第287図-3	土師 杯	覆土	小破片	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

241号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第289図-1	須恵 高台椀	覆土	底7.8 高台のみ残存	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	回転糸切り後付高台周辺ナデ	
第289図-2	須恵 (高台椀)	覆土	下半(高台欠)	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	付高台	器面荒れる
第289図-3 PL.37	土師 甕	床 面	口縁～体上半1/3	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第289図-4	土師 釜	床 面	口縁小破片	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	

242号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第290図-1 PL.37	須 恵 杯	カマド	口径13.9 高3.5 底11.0 口一部欠	①細砂を含む ②灰褐 ③酸化気味、硬質	ロクロ右回転整形 底回転ヘラケズリ	
第290図-2 PL.37	土 師 杯	床 面	口径18.4 高5.3 口縁2/3欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第290図-3	土 師 杯	カマド	高5.5 1/3	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第290図-4 PL.37	土 師 杯	カマド	口径14.0 高3.7 1/2	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	

243号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第292図-1	須 恵 杯	覆 土	高3.3 1/4	①酸化鉄粒目立つ ②褐 ③酸化、軟質	底回転糸切り	
第292図-2	須 恵 杯	覆 土	高4.2 1/4	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	底回転糸切り	
第292図-3	灰 釉 (高台椀)	覆 土	口縁小破片	①細砂を含む ②釉灰 オリーブ ③良好	右回転ロクロ整形 釉はけかけ	
第292図-4	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/4	①砂粒を含む ②にぶ い赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位以下 縦ヘラケズリ 内面ナデ	
第292図-5 PL.37	土 師 甕	覆 土	口径20.8 口縁～体上半	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体上位横、中位斜ヘラケ ズリ 内面ヘラナデ	
第292図-6	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半1/4	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横斜ヘラケズリ 内面ヘラナデ	体外面煤付着 口縁積み上げ痕

247号住居跡

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第294図-1	須 恵 皿	覆 土	高2.2 1/4	①粗砂粒若干含む ②灰 ③還元、硬質		
第294図-2 PL.37	須 恵 皿	覆 土	高2.3 底6.6 1/2	①白色砂粒目立つ ②灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第294図-3	須 恵 高台椀	覆 土	下半1/2	①粗砂若干含む ②灰 ③還元、硬質	付高台周辺ナデ	

第V章 検出された遺構と遺物

第294図-4 PL.37	須 惠 高台椀	覆 土	口13.3 高5.5 底7.4 口縁1/3欠	①白色砂粒目立つ ② 灰 ③還元、硬質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り後付 高台	
第294図-5	須 惠 高台椀	覆 土	底7.0 高台のみ残存	①細砂を含む ②明赤 褐 ③酸化、軟質	回転糸切り後付高台	
第294図-6 PL.37	土 師 杯	床 面	1/2弱	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

248号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第295図-1	須 惠 蓋	覆 土	小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	小規模なかえりをつける	
第295図-2	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	

249号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第297図-1	土 師 杯	覆 土	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第297図-2	土 師 杯	覆 土	1/3	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第297図-3	須 惠 杯	覆 土	底6.0 下半2/3	①酸化鉄粒目立つ ②橙 ③酸化、軟質	ロクロ右回転整形 底回転糸切り	
第297図-4	土 師 甕	覆 土	口縁～体上半	①砂粒を含む ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

250号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第299図-1	須 惠 高台椀	覆 土	口12.7 高4.7 底6.6 口縁1/4欠	①砂粒を含む ②灰 ③還元、硬質	底回転糸切り後付高台周辺ナデ	口縁歪む
第299図-2	須 惠 高台椀	覆 土	口縁1/4	①砂粒を含む ②灰褐 ③酸化気味、硬質		

252号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第300図-1	土 師 杯	床 面	口縁1/4	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	内外面煤付着 灯明皿か
第300図-2	土 師 甕	覆 土	口縁～体上位小片	①細砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	
第300図-3	土 師 甕	床 面	口縁～体上位小片	①細砂を含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横ヘラケズリ 内面ナデ	

253号住居跡

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第301図-1	須 惠 杯	床 面	高2.9 小破片	①細砂を含む ②灰 ③還元、硬質	回転方向、切り難し不明	
第301図-2	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③酸化、軟質	口縁外面に1条の沈線が廻る 内面同心円状ヘラミガキ	内面黒色処理
第301図-3	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第301図-4	土 師 杯	床 面	1/4	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第301図-5 PL.38	土 師 杯	床 面	口13.2 高4.0 完形	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第301図-6	土 師 杯	貯蔵穴 床 面	口13.0 高3.0 口縁一部欠	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ 体部無調整	
第301図-7	土 師 杯	床 面	小破片	①細砂を含む ②橙 ③普通	口縁横ナデ 底外面ヘラケズリ 内面ナデ	
第301図-8	土 師 甕	床 面	口縁～体上半1/4	①金雲母含む ②にぶ い褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面横斜ヘラケズリ 内面ヘラナデ	口縁積み上げ痕
第301図-9 PL.38	土 師 甕	貯蔵穴	口21.6 口縁～体上半	①細砂やや多 ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体外面上位横、中位斜ヘ ラケズリ 内面ヘラナデ	

254号住居跡

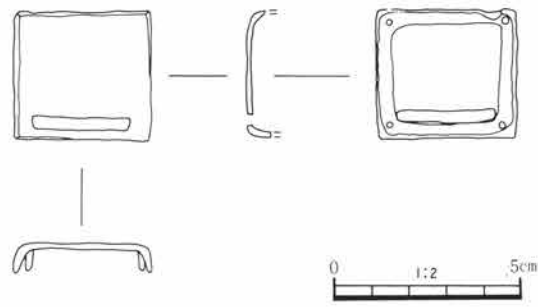
図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第302図-1	土 師 甕	覆 土	底5.2 胴下半～底	①大粒砂粒を含む ②灰褐 ③やや不良	外面縦ヘラケズリ 内面ナデ	底面は二次的焼成 を受け器面剥離

255号住居跡

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第304図-1 PL.38	土 師 高 杯	覆 土	口径14.2 高10.6 杯、脚各1/2残存	①細砂を含む ②にぶ い橙 ③普通	杯内外面ヘラミガキ 脚外面ヘラミガ キ 内面ナデ 裾横ナデ 杯、脚の接 合部粘土埋填	赤色塗彩（脚内面 除く） 脚中位に 径1.5cmの円孔4 ヶ所穿つ
第304図-2	土 師 甕	覆 土	口径17.8 高22.8 底5.3 口縁1/2欠 体1/3欠	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	紐積み上げ後口縁横ナデ 頸斜ハケメ 体外面上半～下半斜ハケメ、下半～底 近く縦ハケメ 内面横ハケメ	体部外面煤付着
第304図-3 PL.38	土 師 甕	床 面	口径18.4 口縁～体上半1/3	①砂粒やや多 ②明赤 褐 ③普通	紐積み上げ後口縁横ナデ 頸、体外面 斜ハケメ 内面、口縁～体横ハケメ	ハケメ工具2種類 使用
第304図-4 PL.38	土 師 台付甕	床 面	底10.7 体下半～脚台	①砂粒を含む ②橙 ③普通	体外面縦ハケメ 脚外面まばらに斜ハ ケメ 内面横ハケメ、ナデ	脚底折り返し S字状口縁台付甕
第304図-5 PL.38	土 師 罎	覆 土	口径(10.4)高(9.8) 口縁1/3	①細砂を含む ②明赤 褐 ③普通	口縁横ナデ 体上半無調整体下半ヘラ ケズリ 底ナデ、内面ナデ	底部内面指頭痕
第304図-6 PL.38	土 師 罎	覆 土	口縁欠	①砂粒やや多 ②にぶ い橙 ③普通	体外面ナデ	
第304図-7 PL.38	土 師 小形鉢	覆 土	高6.4 底5.2 口縁1/2	①酸化鉄粒目立つ ②にぶい赤褐 ③普通	口縁横ナデ 体、底ナデ 内面ヘラナデ	

鍔帯具（第305図、PL.39）

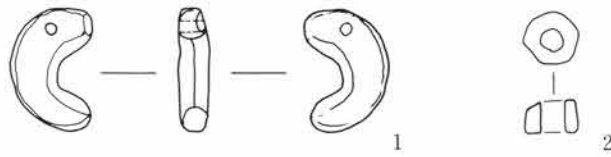
185号住居跡の床面上より巡方が1点出土している。長さ3.67cm、幅3.35cm、高さ0.81cmを測る。下端に長さ2.64cm、幅0.37cmの長方形の透かし穴があげられている。裏面の四隅には裏金具をとめるための釘が4本鑄出されている。材質は全面に緑青が発生している事から銅あるいは銅合金である事は間違いないが、表面に漆の痕跡が全く見られない事からすれば青銅製の可能性が考えられる。



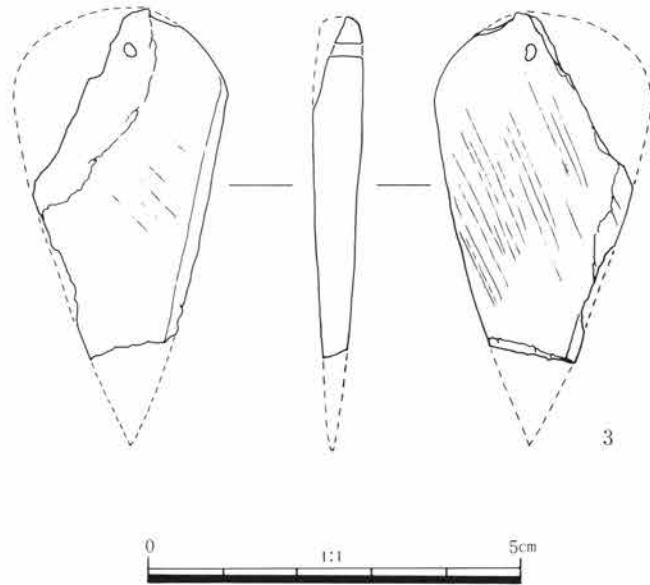
第305図 住居跡出土鍔帯具

玉類と滑石製模造品（第306図）

1は143号住居跡出土の石製勾玉である。「C」字形を呈する小形品で、長さ1.60cm、厚さ0.43cmを測る。頭部の穿孔は両側面からあげられており、孔径2mmを測る厚さは全体に均等である。頭部背面部分をやや薄く仕上げているが、これは穿孔を容易にするためかと思われる。全面に研磨を施し、光沢をもつ。研磨によって背と腹部は丸味をもち、両側面は平坦に仕上げられている。石材は硬質で、緑色の斑文を有するものを用いている。



2は51号住居跡出土の白玉である。直径6.9mm、厚さ5.2mmを測る。孔はほぼ中央に穿たれており、孔径は2.7mmを測る。側面には縦方向の研磨痕、孔内面には穿孔時のものと思われる横方向の擦痕が認められる。なお側面形が整った方形でなく台形状を呈するのは、未製品段階での調整が不十分であったか、あるいは管玉状のものを幾等分かに打割る事によって製作したためと思われる。石材は黒灰色を呈する滑石である。



第306図 住居跡出土玉類・滑石製模造品

3は剣形の滑石製模造品で、77号住居跡より出土している。長さ4.6cm、幅2.4cm程を測るが一方の側辺と剣先部を欠失するため、全体形状、大きさについては不明。茎部付近に径2.1mmの孔を穿つ。穿孔方向は不明

である。形状は基部が丸味を帯び、剣先に向かってしだいにすぼまるものと思われる。又表裏両面は平坦で剣先部に向かって薄くなる傾向がみられる。なお側辺部は鑄を意識したような弱い稜をつくり出している。表裏面、側面とも研磨によって仕上げられており、斜方向の擦痕が明瞭に残る。石材は灰緑色を呈しており、滑石あるいは緑泥片岩を使用した可能性がある。

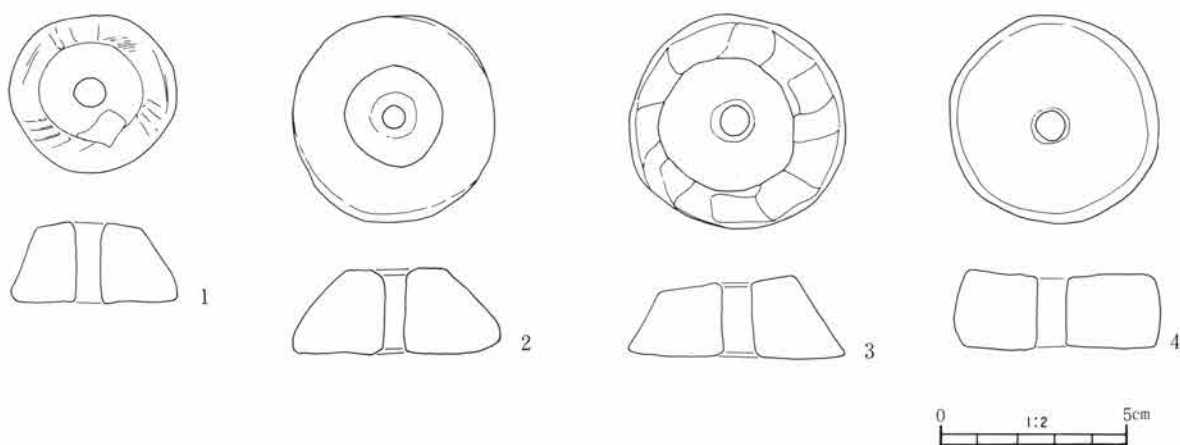
紡錘車（第307図、PL.39）

1は49号住居跡出土の滑石製の紡錘車である。平面形はほぼ円形で、側面は丸味を持つ台形状を呈する。大きさは上面径2.85cm、下面径3.80×3.60cm、高さ1.40cmを測る。上面の一部を欠くが、擦痕や磨滅痕が他の部位と同様に残っている事からそのまま使用されたと思われる。重量は56.1gを測る。又紡茎を差し込む孔はほぼ中央部に穿たれる。孔茎は上面部で8.3mm、中位で7.8mm、下面部で8.3mmを測る。内面には回転穿孔の擦痕が残る。整形時のものと思われる横方向の擦痕、又放射状の研磨痕が残る。なお下面縁辺部はかなり磨耗しており光沢を帯びている。

2は68号住居跡出土の土製紡錘車である。平面は円形で、側面は丸味を持つ台形状を呈する。大きさは上面径2.90×2.63cm、下面径5.55×5.49cm、高さ2.37cmを測る。重量は64.4gを測る。中央孔はほぼ垂直に穿たれ、孔口部分が上下両面とも剥離している。孔径は上面部5.9mm、下面部で6.3mm、中位で6.0mmを測る。下面縁辺はヘラケズリで小平坦面をつくり出しており、この一部は使用によると思われる磨滅が激しい。胎土には酸化鉄粒を含む小砂粒を多く含む。焼成はやや還元気味である。

3は150号住居跡出土の土製紡錘車である。平面はやや角の立つ円形で、側面は整った台形を呈する。大きさは上面径3.60cm、下面径5.77×5.62cm、高さ2.19cmを測る。重さは68.2gを測る。中央孔は中心よりややずれて穿たれる。孔径は上面で11mm、下面で8.6mm、中位で7.6mmを測る。下面孔口部の剥離が激しい事から上面から下面にかけて穿孔した可能性がある。全体にヘラケズリによって整形し、その後粗いヘラミガキを加えている。胎土は黒色、白色の小鉱物を主とする砂粒を含む。焼成は酸化気味で、一部に黒斑あり。

4は216号住居跡出土の土製紡錘車である。他の截頭円錐形と異なり、背の低い樽形を呈する。上面径5.07cm、下面径4.90cm、中位の最大径5.66cmを測る。高さは縁辺部が1.96cm、中央部で1.91cmを測る。重量は77.1gである。中央孔は中心よりややずれて穿たれる。孔径は上面で9.1mm、下面で10.3mm、中位で8.8mmを測る。側面及び側縁部は磨滅が激しい。胎土は白色針状物質を多く含む。焼成は還元質である。厚手の須恵器片を再利用した可能性がある。



第307図 住居跡出土紡錘車

土製円板（第308図、PL.39）

いずれも土器の一部を再利用したものである。なお7、8は中央を穿孔しており「はずみ車」としての使用も推察される。1～5は79号住居跡、6は144号住居跡、7は64号住居跡、8は168号住居跡出土である。

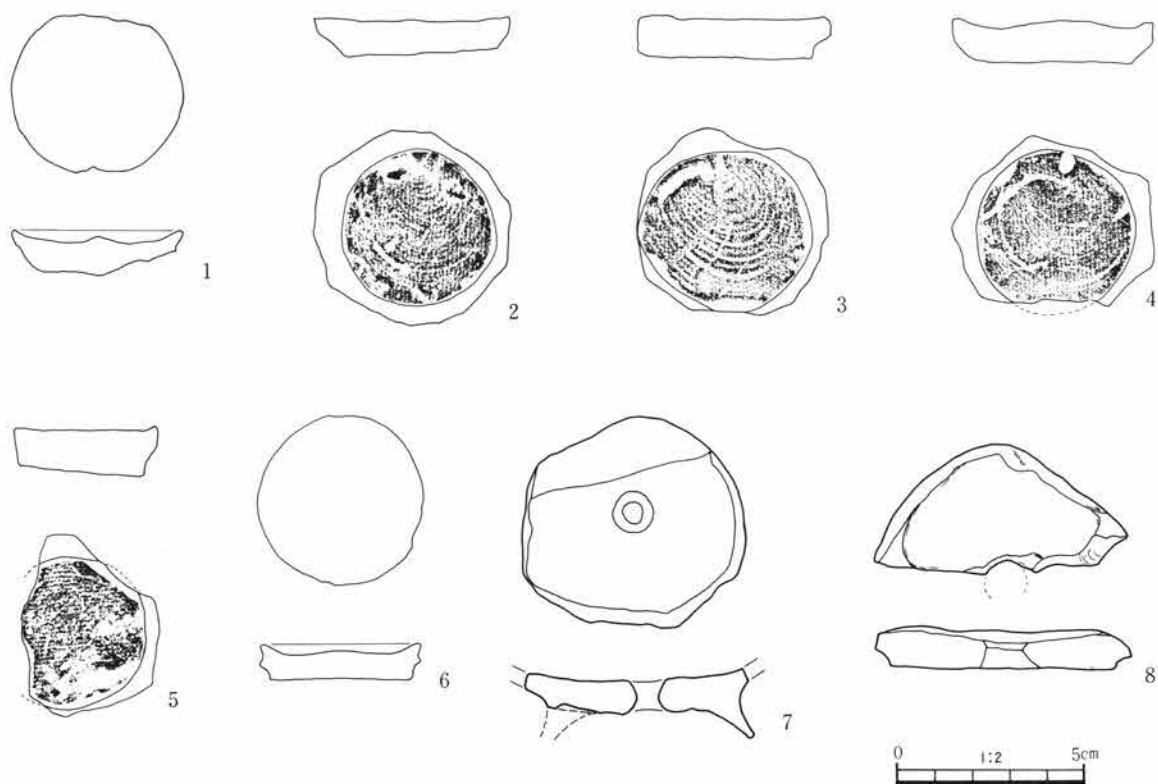
1は須恵器蓋のつまみを利用したもので径4.51cm、厚さ1.07cmを測る。端部の一部を欠く。全体に縁辺部が磨滅している。胎土に長石の小砂粒を含む。十分な還元がなされず軟質である。

2～5はいずれも土師器皿（あるいは杯）の底部を利用したものである。周辺部を打ち欠くか折る等により成形し、調整は施されない。大きさは2が径5.52cm、厚さ0.96cm、3が径5.15cm、厚さ1.14cm、4が径5.40cm、厚さ1.04cm、5は径（残存部で）4.72cm、厚さ1.23cmを測る。底面にはいずれも右回転糸切痕が残る。底面及び周縁部が磨滅している。

6は須恵器蓋のつまみを利用している。大きさは径4.33cm、厚さ0.90cmを測る。縁辺部が磨滅している。胎土には黒色小鉱物を含む。十分な還元がなされず、軟質である。

7は高台付碗の高台部を利用したもので、高台の約1/2を欠く。残存部の径5.80cmを測る。中央の円孔は両面から回転穿孔されている。孔口径は9.4mm、中位は5.8mmを測る。全体に磨滅している。胎土は比較的金メが細かく金雲母を含む。色調は淡黄褐色を呈し、酸化焼成されている。

8は杯底部破片を利用し、約1/2を欠く。直径は推定で6～7cmのものと思われる。中央部で円孔を両面から回転穿孔する。底面に糸切痕が残る。胎土には小砂粒を多く含み、焼成は酸化気味である。



第308図 住居跡出土土製円板

砥石（第309・310図、PL.40）

第309図-1は17、18、19号住居跡のいずれかの覆土から出土したものである。平面はほぼ長方形で、側面



第309図 住居跡出土砥石(1)

は外反する形状を呈する。大きさは長さ8.34cm、幅2.60~2.41cm、厚さ1.92~1.29cmを測る。全面を使用している事から完形品と思われる。下面には製作時の打割痕が残る。石材は目の細かい青灰色を呈する凝灰岩を使用する。ほぼ全体が磨耗しており、一部に擦痕が残る。本遺跡出土砥石の中では最小の部類であり、当初から小形品として製作されたか、あるいは使用するにつれ小さくなったものと思われる。

第309図-2は78号住居跡出土の上部破片である。おそらく長方形を呈すると思われ、中央部に一ヶ所円孔が穿たれる。幅4.38cm、厚さ2.30cmを測る。孔径は5.5mmである。穿孔は回転によると思われる。石材は黄灰色を呈する凝灰岩で表面がやや黒味を帯びる。欠損部以外は全面を使用しており、一部に斜方向の浅い擦痕が残る。円孔がある事からここに紐等を結び、携帯用あるいは住居内等に吊しておいたものであろう。

第309図-3は162号住居跡出土の小片である。大きさは長さ3.93cm、幅2.99cmを測る。裏面に打割痕あるいは折損痕が残る。石材は目の細かい灰白色凝灰岩である。表面の一部のみ使用しており、おそらく部分的な研ぎに使われたのであろう。

第309図-4は79号住居跡出土で、上半が楕円形状、下半が台形状を呈する。長さは13.25cm、幅4.07~3.90cm、厚さ3.44~1.69cmを測る。上端は製作時の打割痕あるいは使用時の折損痕が残る。下面は製作時の細かい調整がなされ、ほぼ平坦になっている。表裏両面及び両側面とも使用されており、表裏面が外反し、側面が内湾するのは研ぎ方の相違によるものだろう。石材は青灰色の目の細かい凝灰岩である。

第309図-5は85号住居跡から出土した破片である。平面は台形状、側面は一方向に湾曲する形状を呈する。長さは8.49cm、幅5.65~4.20cm、厚さ2.07~1.99cmを測る。上面は製作時の打割痕が残る。なお下半は折損したと思われる。石材は黄灰色を呈する目の細かい凝灰岩である。表裏両面、両側面が使用される。側面に鋭い削痕が残る。

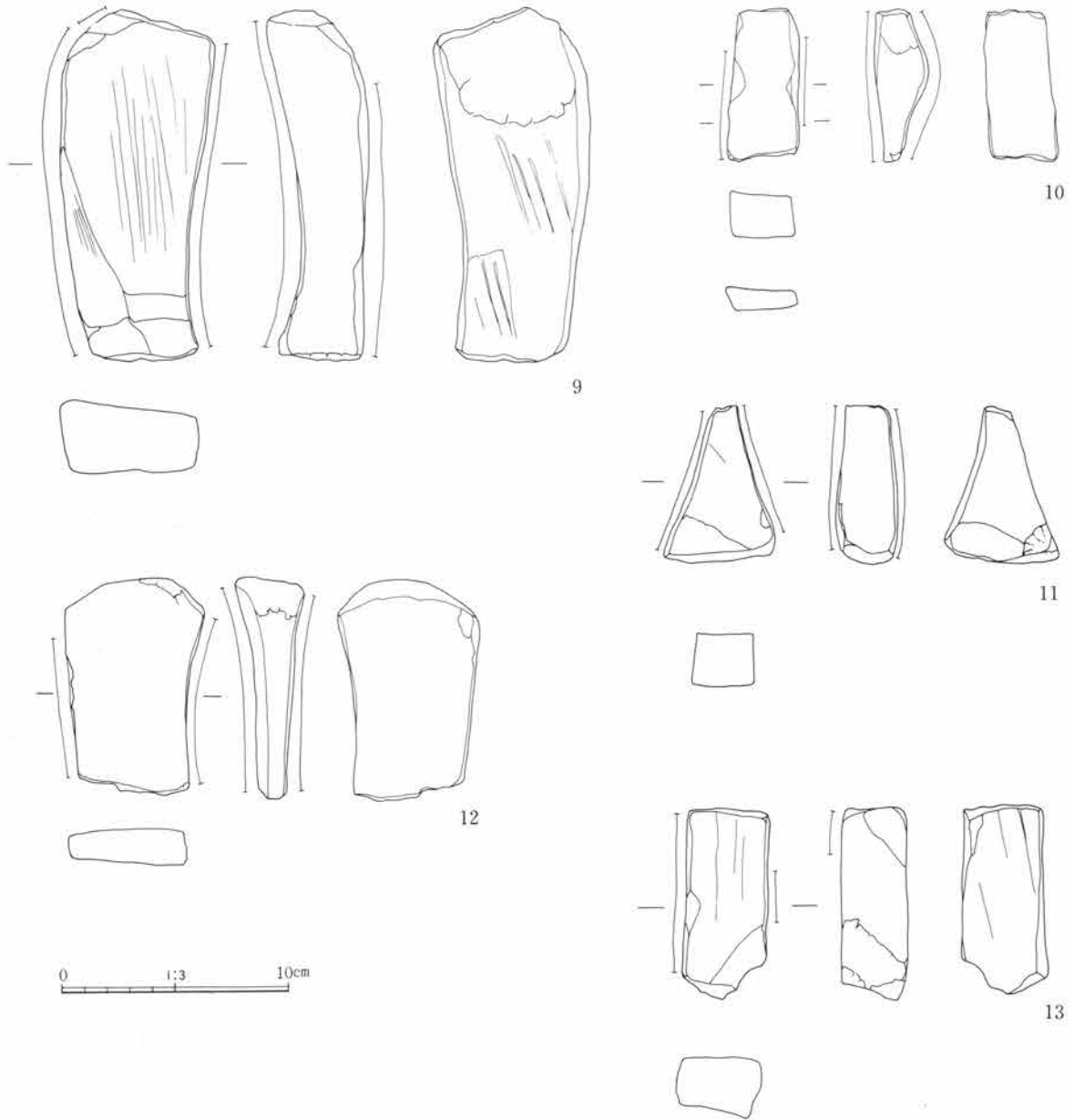
第309図-6は130号住居跡から出土しており、下半部を欠く破片である。表裏、両側面とも弱く外反しており、中央部がかなり細くなる。長さは10.80cm、幅6.40~3.90cm、厚さ5.39~4.08cmを測る。上面は製作時の細部調整がなされ平坦面をなす。下半は使用時の折損と思われる。石材は赤城山系の安山岩を使用し、やや目が荒い。表裏面及び両側面とも使用されている。なお上端部に赤色の顔料と思われる物質が付着する。

第309図-7は131号住居跡から出土している。平面は長方形に近いが、側面形は著しく内湾し、中央部が薄くなっている。長さは10.4cm、幅4.94~3.04cm、厚さ3.38~1.18cmを測る。上面、下面は製作時の細部調整がなされ、平坦面をなす。表裏面及び両側面とも使用されているが、使用頻度は表面が最も高いようである。又裏面の下位で欠損と思われる部分があるが、ここに鋭い削痕が認められる。石材は青灰色の目の細かい凝灰岩である。

第309図-8は183号住居跡から出土している。ほぼ直方体を呈し、長さ3.48cm、幅3.88cm、厚さ2.08~1.88cmを測る。上面は折損あるいは製作時の打割と思われるが、細調整がなされ平坦面をなす。下面は約1/2が剝離するがこの部分も使用している。石材は灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。上面を除いて他面は使用されている。

第310図-9は164号住居跡から出土している。平面は長方形を呈し、側面形は一方向に湾曲している。大きさは長さ15.26cm、幅6.61~4.78cm、厚さ3.53~2.51cmを測る。上下両面は打割したままである。石材は灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。表面は縦方向の鋭い削痕がみられるが、鎌用に使われた可能性が高い。裏面は縦方向の削られたような痕跡が残っており、刀子状の鉄器を研いだものかと思われる。

第310図-10は208号住居跡から出土している。平面は長方形で、側面形は表面上半部が膨らむ形状を呈する。長さは6.65cm、幅3.02~2.40cm、厚さ2.22~0.80cmを測る。両側面はあまり使用されておらず、製作時



第310図 住居跡出土砥石(2)

と思われる削痕が残る。石材は青灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。表裏両面を使用しており、特に表面は上半と下半に分けて使用したようである。なお上下両端は折損している。

第310図-11は220号住居跡出土の欠損破片である。両側面が極端に外反する。大きさは長さ6.98cm、幅は4.94~1.18cm、厚さ2.53~1.84cmを測る。下面は製作時の調整痕が残るが、やや使用された磨滅痕が残る。石材は青灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。側面の湾曲から鎌用に使用されたものだろう。

第310図-12は220号住居跡出土の欠損品である。平面は上部が丸味をもつ長方形で側面は表面が外反する形状で中央部が薄くなる。下半は欠損する。長さ9.54cm、幅6.18~4.88cm、厚さ3.10~1.03cmを測る。上面は製作時の調整痕が残り、この部分に数条の鋭い削痕が走る。石材は青灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。表面と右側面はよく使用されているが、他面は磨耗が少ない。

第310図-13は255号住居跡出土である。ほぼ直方体を呈する。長さ8.08cm、幅3.59～3.55cm、厚さ2.80～2.64cmを測る。上面及び表裏両面に整形時のものと思われる削り痕が残る。石材は灰白色を呈する目の細かい凝灰岩である。右側面が多用され、他面はさほど使用されなかったようである。

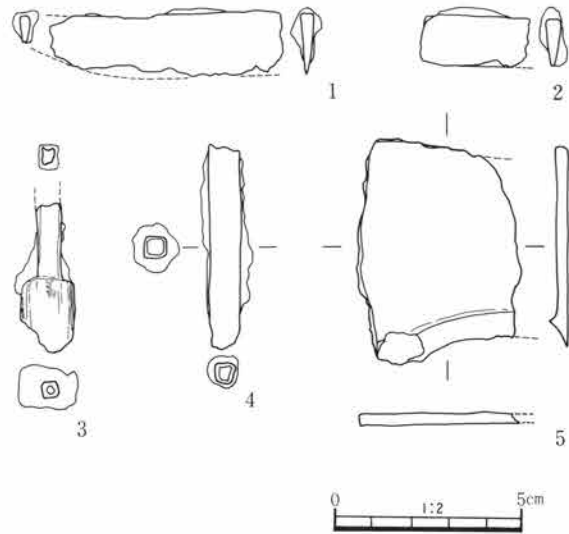
鉄製品 (第311図、PL.39)

1、2は143号住居跡出土の刀子である。鋒と関部を欠く刀身破片である。1は長さ6.06cm、幅1.67cm、棟厚3.8mmを測る。2は長さ2.80cm、幅1.25cm、棟厚4.2mmを測る。いずれも銹化が進んでおり、原形の復元は困難である。

3は161号住居跡出土で、鉄鎌と思われる。茎付近の破片で矢柄の木質部が銹化して残存する。幅6mm、厚さ5mm、木質部幅13.6mm、厚さ11.0mmを測る。茎を矢柄に差し込んでいる。

4は166号住居跡出土で、鉄鎌と思われる。長さは5.14cm、幅6.9mm、厚さ5.6mmを測る。銹化が進んでいる。

5は199号住居跡出土のもので、上下両辺が内湾、左側辺が外湾する。断面は板状を呈し、下辺に「一」形の刃部のような形をつくり出している。他の縁辺は「コ」字状を呈する。裏面は平坦である。右半分は欠損する。長さ5.76～5.45cm、幅4.30cm以上、厚さ5.3mmを測る。全形状及び用途は不明である。



第311図 住居跡出土鉄製品

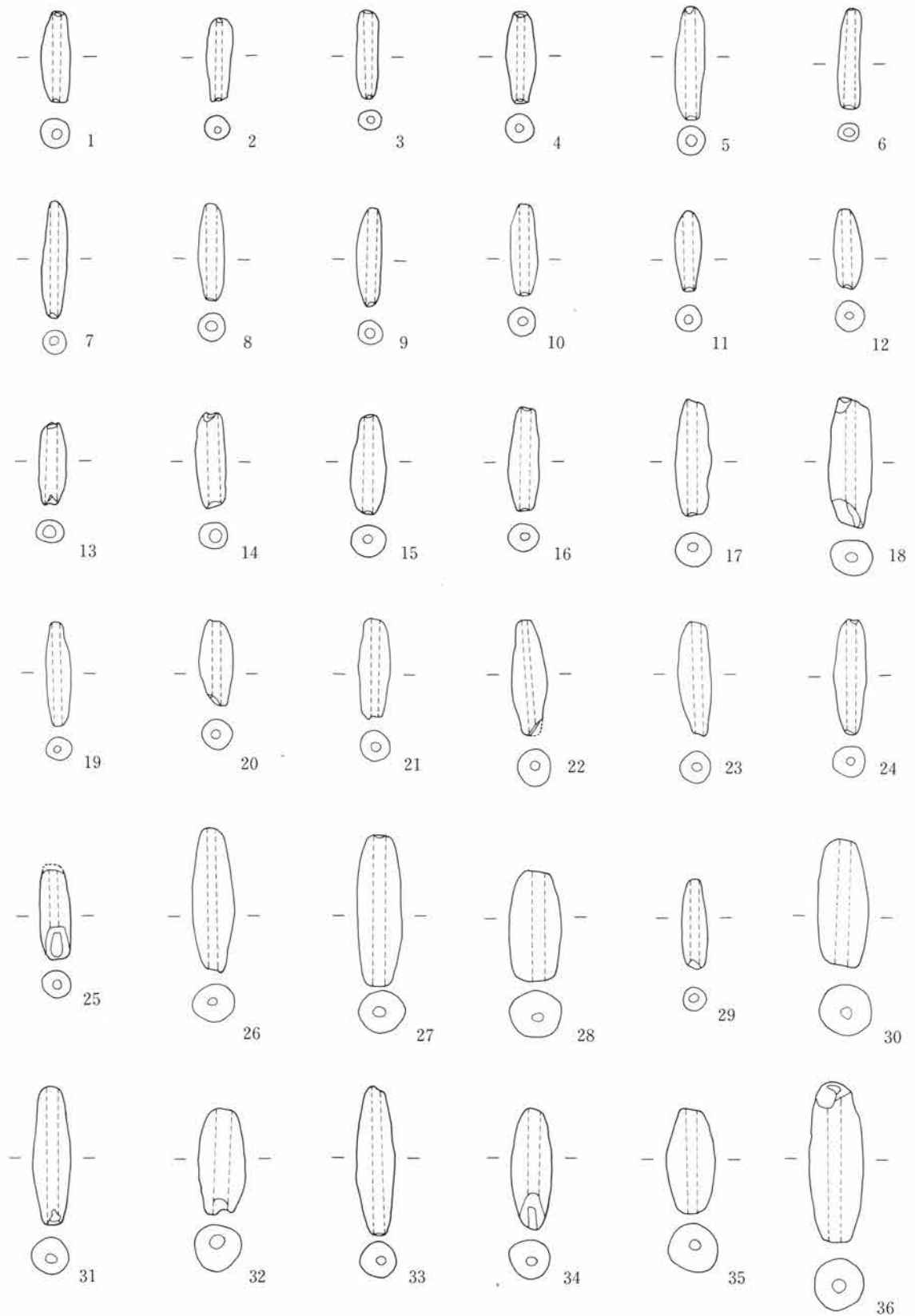
土 錘 (第312図、PL.41)

すべて小形の紡錘形を呈する。平安時代のものが大部分で、他は鬼高期1点、奈良時代1点であった。

土錘一覧表

No	出土位置	法 量 (cm, g)			備 考
		長 さ	最大径	重 量	
1	7号住	3.18	1.04	3.5	平安。
2	10号住	3.00	0.95	2.3	時期不明。
3	10号住	3.10	0.73	1.7	時期不明。
4	11号住	3.20	0.98	2.8	古墳時代後。
5	77号住	3.87	1.09	4.4	平安。
6	79号住	3.53	0.84	2.9	平安。
7	80号住	4.10	0.89	3.2	平安。
8	80号住	3.45	1.11	3.9	平安。
9	80号住	3.56	0.93	3.0	平安。
10	80号住	3.21	1.03	3.6	平安。
11	80号住	2.82	1.04	2.8	平安。
12	80号住	2.96	1.12	3.4	平安。
13	87号住	2.78	0.85	2.1	端部一部欠。平安。
14	87号住	3.29	0.98	2.6	端部一部欠。平安。
15	149号住	3.48	1.20	4.8	平安。
16	185号住	4.03	1.26	6.3	平安。
17	185号住	3.54	1.10	4.0	平安。
18	189号住	4.56	1.44	8.8	両端部欠。平安。

No	出土位置	法 量 (cm, g)			備 考
		長 さ	最大径	重 量	
19	196号住	3.50	0.79	2.3	奈良。
20	204号住	2.92	1.16	3.5	端部一部欠。平安。
21	204号住	3.38	1.05	3.8	平安。
22	204号住	3.77	1.18	4.7	平安。
23	204号住	3.81	1.10	4.6	平安。
24	204号住	3.88	1.05	4.0	平安。
25	204号住	3.10	1.08	2.9	両端部欠。平安。
26	210号住	4.84	1.34	7.3	平安。
27	211号住	5.01	1.58	11.7	端部一部欠。平安？
28	211号住	3.73	1.67	12.1	平安？
29	211号住	2.98	0.81	2.1	平安？
30	213号住	4.44	1.88	15.6	平安？
31	213号住	4.88	1.36	7.1	平安？
32	214号住	3.76	1.62	8.5	端部一部欠。平安。
33	216号住	5.16	1.40	9.0	平安。
34	223号住	4.28	1.48	8.6	平安。
35	241号住	3.62	1.70	9.2	平安。
36	243号住	5.57	1.68	16.2	端部一部欠。平安。



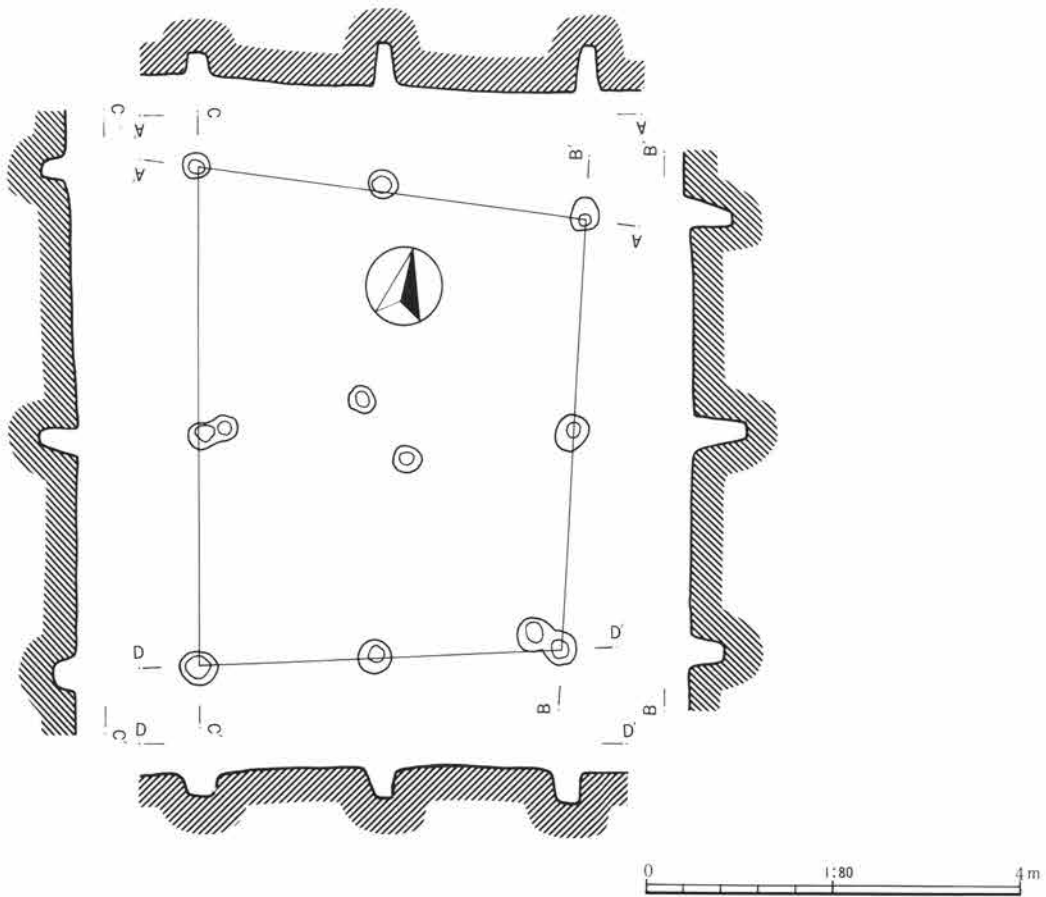
0 1:2 5cm

第312図 住居跡出土土錘

3 掘立柱建築遺構

1号掘立柱建築遺構（第313図、PL.12）

Ⅲ区D-2グリッド付近にある2間(4.5~5.2m)×2間(4.0m)のやや南北に長い歪んだ方形建物である。つまり北辺と南辺は長さは同一であるが、東辺に比して西辺が0.7m長く、台形状を呈す。柱間寸法は、北辺、南辺は2.0m(7尺)等間、東辺は2.25m(7.5尺)、西辺は2.6m(8.5尺)等間である。柱穴の掘形は径30cmの円形を呈し、深さは10~30cmを測る。総柱建物の可能性もある。主軸方向はN-10°-Wを指す。

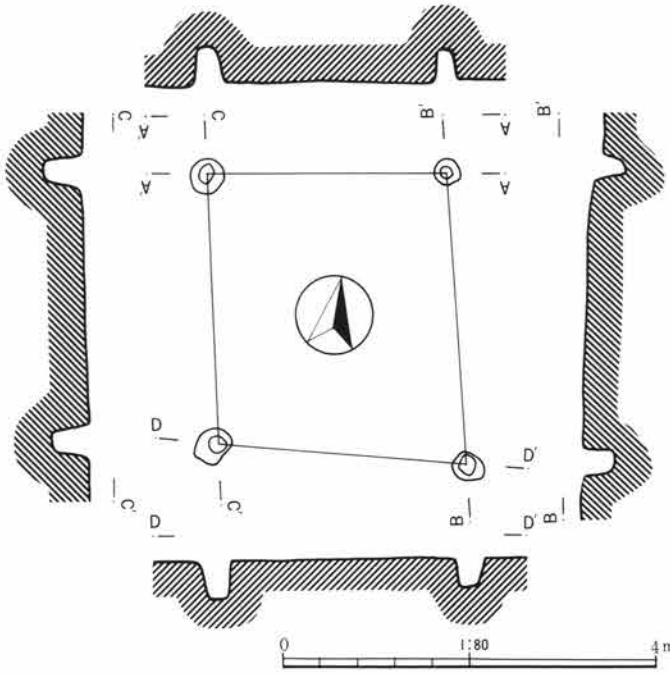


第313図 1号掘立柱建築遺構

2号掘立柱建築遺構（欠番）

3号掘立柱建築遺構（第314図、PL.12）

Ⅲ区E-2グリッド付近に位置しており、1間(2.4~3.0m)×1間(2.5m)の歪んだ方形建物である。柱間寸法は、東辺が2.4m(8尺)、西辺が3.0m(10尺)、北辺と南辺が2.5m(8尺)である。柱穴の掘形は、径30cm程の円形を呈し、深さは20cmを測る。主軸方向はN-12°-Wを指す。



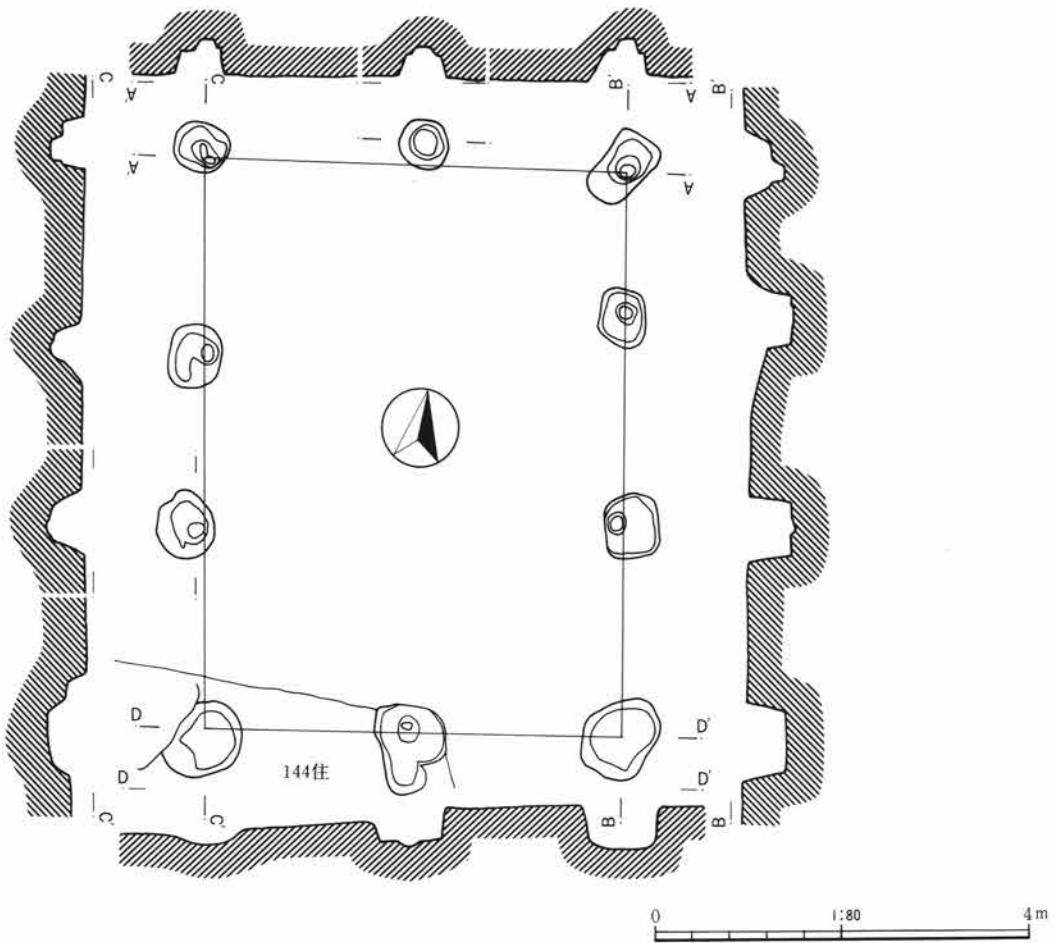
第314図 3号掘立柱建築遺構

重複遺構は79号住居跡、80号住居跡で、いずれも新旧関係は不明であった。なお1号掘立柱建築遺構とは主軸方向をほぼ同一にして隣接するが、これが1棟の建物を構成するのか、あるいは別個の建物かは明らかにしえなかった。柱穴からの出土遺物はなく時期は不明である。

4号・5号掘立柱建築遺構（早川河川改修地域調査分）

6号掘立柱建築遺構（第315図、PL 12）

Ⅲ区H-19・20グリッド付近にある3間（6.0m）×2間（4.5m）の南北



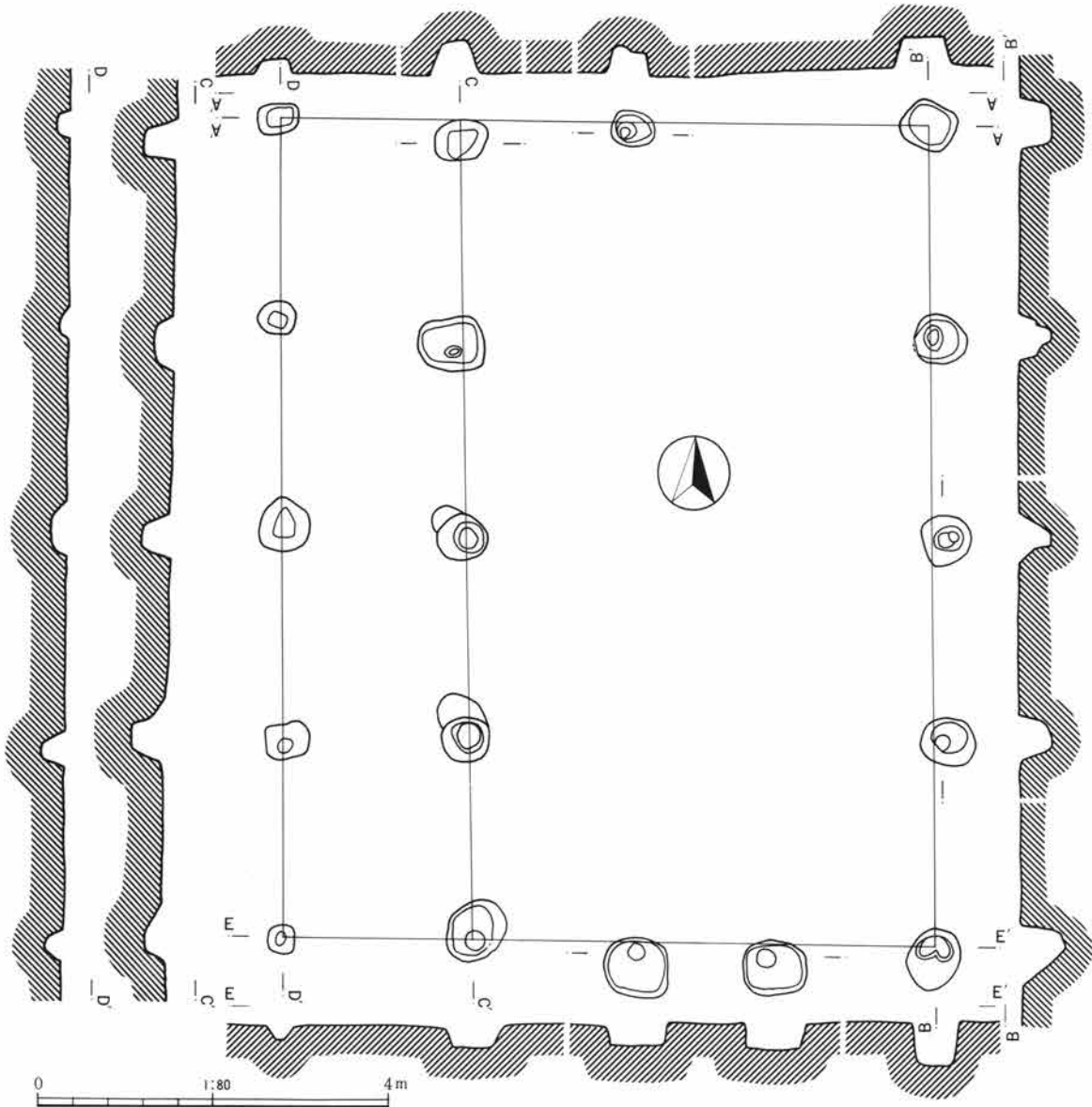
第315図 6号掘立柱建築遺構

棟建物である。柱間寸法は桁行は2m（7尺）梁行は2.5m（8.5尺）等間であるが、桁行西面の柱位置は不規則である。柱穴の掘形は径60cm、深さ20cmで平面形は長方形、不整形など不揃いである。掘形内には径20cmほどの柱痕のみられるものもある。主軸方向はN-10°-Wである。

重複遺構は144号住居跡、5号井戸跡で、判明した新旧関係は144号住→6号掘立であった。
出土遺物はなく時期は不明である。

7号掘立柱建築遺構（第316図、PL.12）

Ⅲ区E-20・21、F-20・21・22グリッドにある4間（9.2m）×4間（7.5m）の南北棟建物であり、西面に廂がつく。柱間寸法は桁行は2.3m（7.5尺）等間、梁行は、身舎部分は1.8m（6尺）等間、廂の出は2.1m（7尺）である。柱穴の掘形は身舎部分は径60~80cm深さ20~40cm、径30~60cm、深さ20cmであって概して不整形である。廂の柱穴掘形は、径20~30cm、深さ25cmほどであって、身舎部より小規模である。身舎部では大部分の柱穴掘形内に20cmほどの柱痕跡がみられる。主軸方向はN-3°-Wである。



第316図 7号掘立柱建築遺構

重複遺構は9号溝で、新旧関係は不明であった。

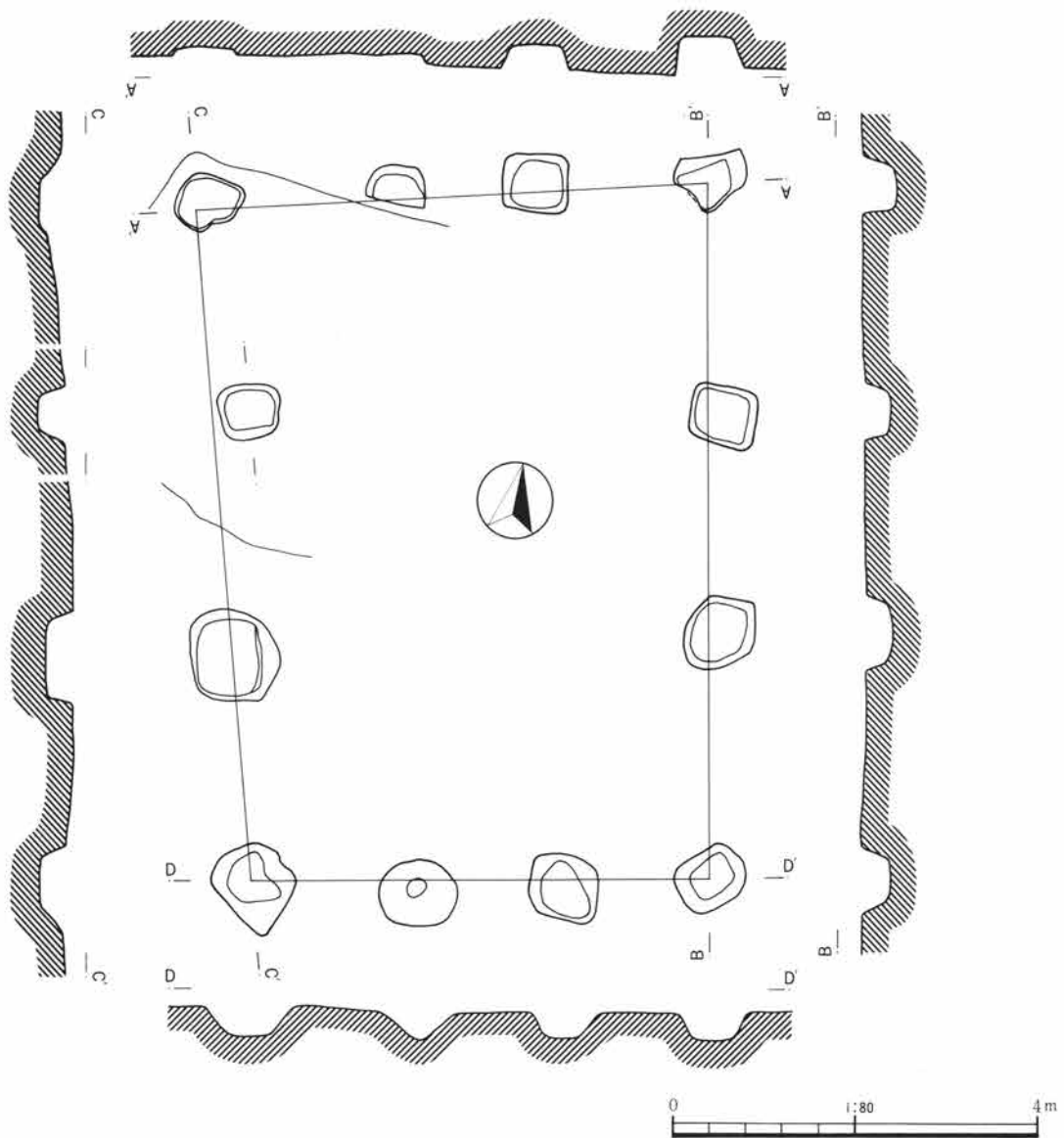
時期は平安時代と思われる。

8号掘立柱建築遺構（第317図、PL.12）

III区G・H-15・16・17グリッドにある3間(7.2m)×3間(4.8~5.4m)の南北棟建物である。桁行は両辺とも長さは同じであるが、梁行は南辺が北辺よりも0.6m短いため建物の平面形は台形状を呈する。柱間寸法は桁行は2.4m(8尺)等間、梁行は北辺が1.8m(6尺)等間、南辺が1.6m($\frac{16}{3}$ 尺)等間である。柱穴の掘形は不整形形状であって、径60~90cm、深さ20cm程である。主軸方向はN-10°-Wを指す。

重複遺構は140号、141号、142号、146号住居跡で、確認された新旧関係は140号住→8号掘立であった。

出土遺物はなく、時期は不明である。

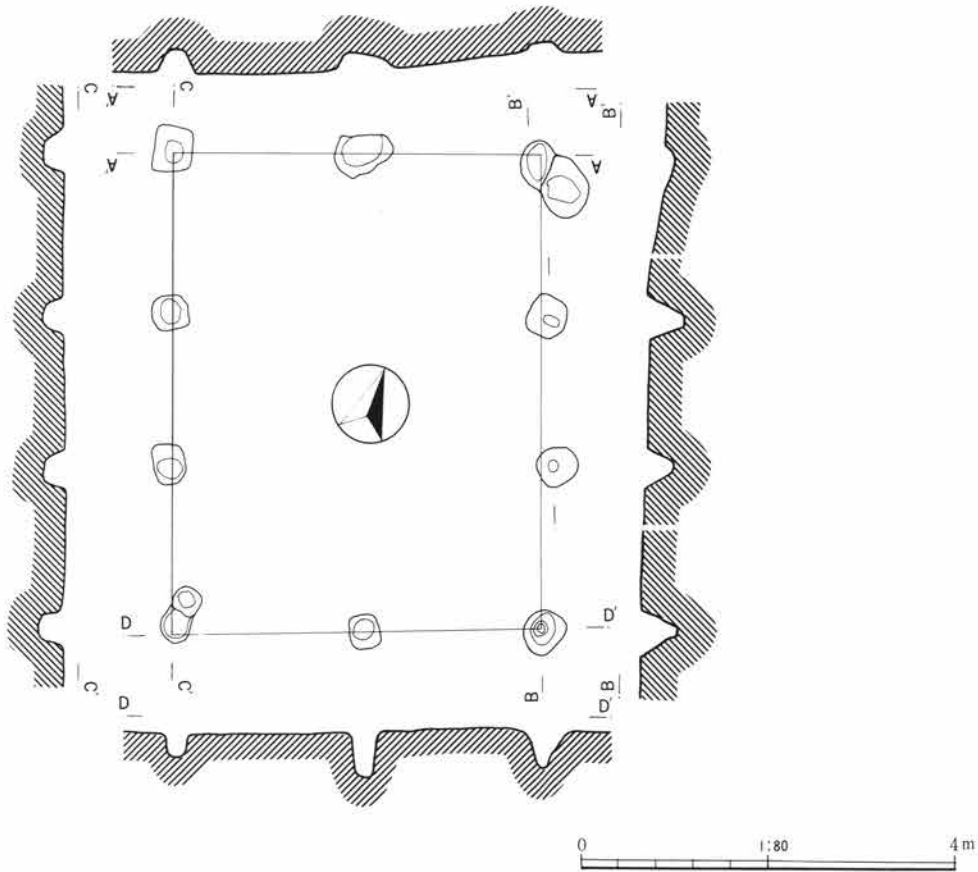


第317図 8号掘立柱建築遺構

10号掘立柱建築遺構（第318図、PL.12）

IV区B-10、C-10グリッドにある3間（5.1m）×2間（3.9m）の南北棟建物である。柱間寸法は桁行が1.7m（ $\frac{17}{3}$ 尺）等間、梁行が1.95m（ $\frac{13}{2}$ 尺）等間である。柱穴の掘形は不整形を呈し、径40cm深さ20cmを測る。主軸方向はN-23°-Wを指す。

重複遺構は226号住居跡、75号土塼で、新旧関係は不明であった。出土遺物はなく、時期は不明である。



第318図 10号掘立柱建築遺構

11A号・11B号掘立柱建築遺構（第319図、PL.12）

IV区C-11・12グリッドにある3間×2間の南北棟建物である。建替えと考えられ、内側（小規模）のものを11A号、外側（大規模）のものを11B号と呼びわけらる。

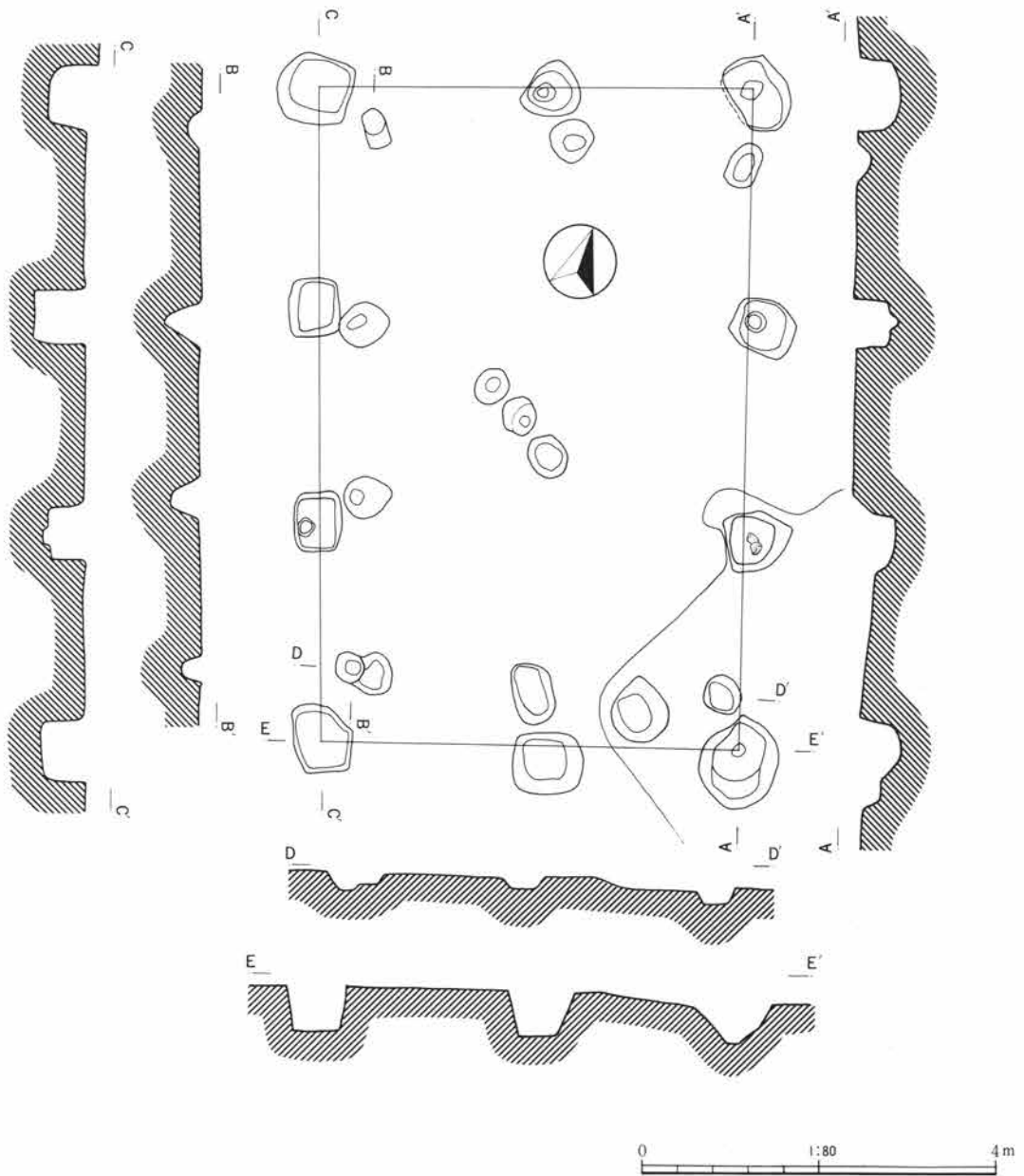
11A号掘立は3間（6.0m）×2間（4.2m）である。柱間寸法は桁行が2.0m（ $\frac{20}{3}$ 尺）等間、梁行が約2.1m（7尺）等間である。柱穴掘形は不整形を呈し、径40～50cm、深さ20～40cmである。主軸方向はN-20°-Wを示す。

11B号掘立は3間（7.2m）×2間（4.8m）である。柱間寸法は桁行、梁行とも2.4m（8尺）等間である。柱穴掘形は方形を呈し、径50～20cm深さ10cm内外の柱痕跡が認められるものがある。主軸方向はN-23°-Wを指す。

なお11A号と11B号の柱穴間の切り合い関係は不明であった。226号住居跡と重複するが、その新旧関係は

不明であった。

遺物は出土せず、時期は不明である。



第319図 II A号・II B号掘立柱建築遺構

12号掘立柱建築遺構（欠番）

13号掘立柱建築遺構（第320図、PL.12）

IV区C-13・14、D-13・14グリッドにある3間（6.75m）×4間（6.0m）の方形状建物である。柱間寸法は桁行が2.25m（7.5尺）等間、梁行が1.5m（5尺）等間である。柱穴掘形は不整形を呈するが径50～70cm

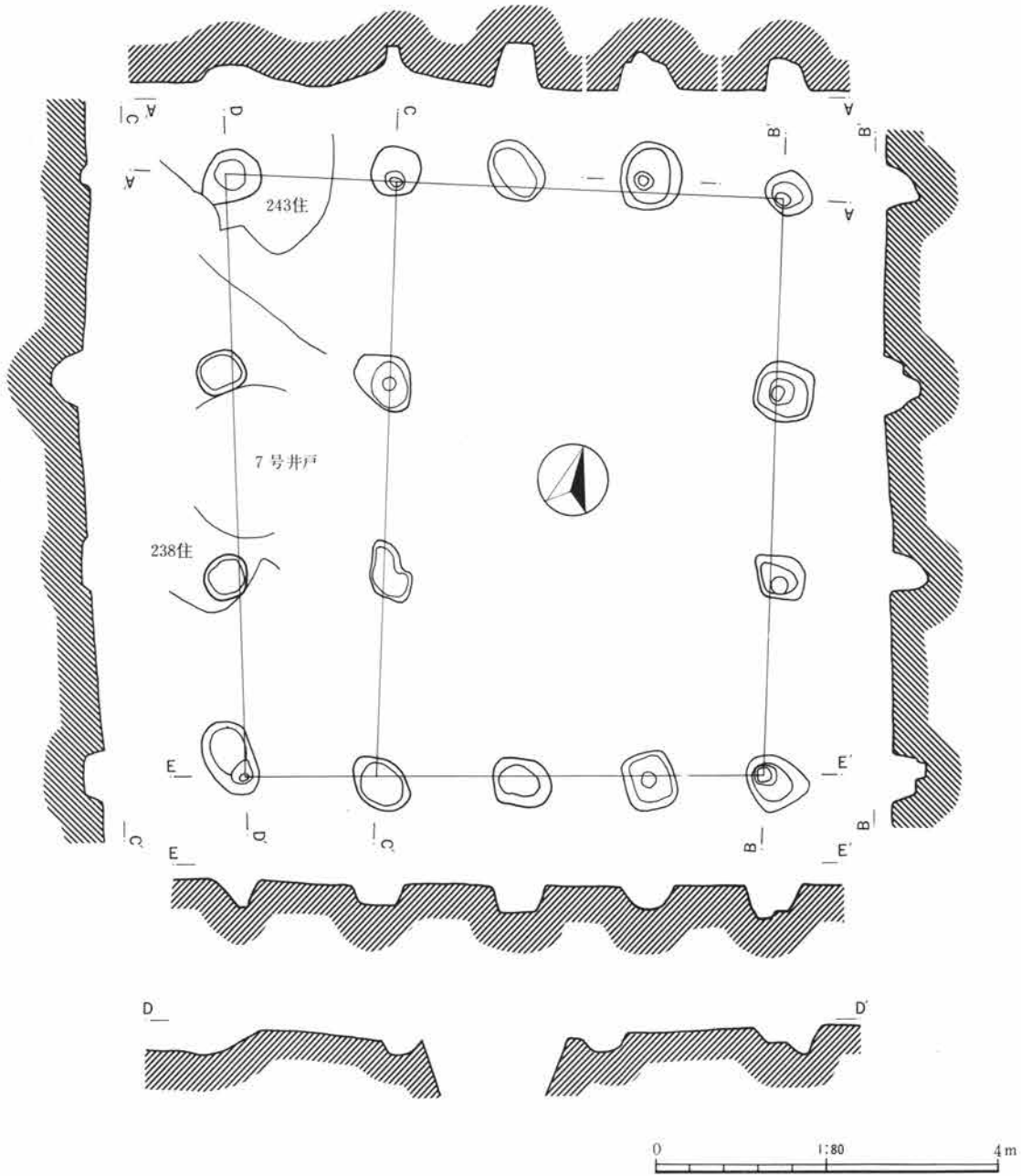
深さ20～30cmとやや大きめである。柱穴掘形内に径20～30cm深さ10～15cmの柱痕跡のみられるものもある。主軸方向はN-15°-Wである。本建物は身舎が3間×3間で、西側に廂をもつ可能性を有する。

重複遺構は237号、238号、243号住居跡、7号井戸で、新旧関係は不明であった。

時期は不明である。

14号掘立柱建築遺構（第321図、PL.12）

IV区D-16、E-16グリッドにある2間（3.6～3.9m）×2間（3.6～3.9m）の不整形方を呈する総柱建物で



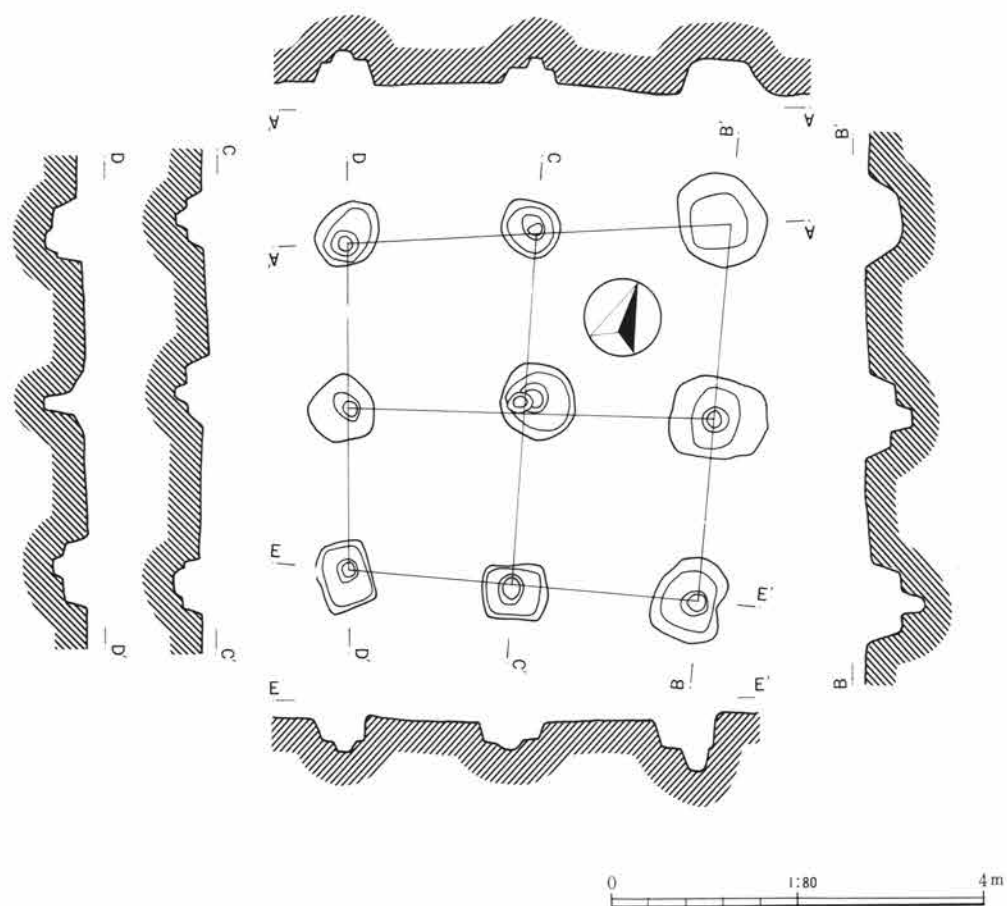
第320図 13号掘立柱建築遺構

第V章 検出された遺構と遺物

ある。柱間寸法は西辺と南辺が1.8m（6尺）等間、北辺と東辺が1.95m（6.5尺）等間である。柱穴掘形は長方形ないし不整形を呈し、径50～100cm深さ20～30cmを測る。柱痕跡は北東隅柱を除いて他の柱穴に認められ、径20～30cm深さ10～20cmを測る。主軸方向はN-17°-Wを指す。

重複遺構は244号住居跡、249号住居跡で、新旧関係は不明であった。

柱穴覆土の上位から土器片が数点出土しているが、形態や時期については不明である。



第321図 14号掘立柱建築遺構

4 土 壙

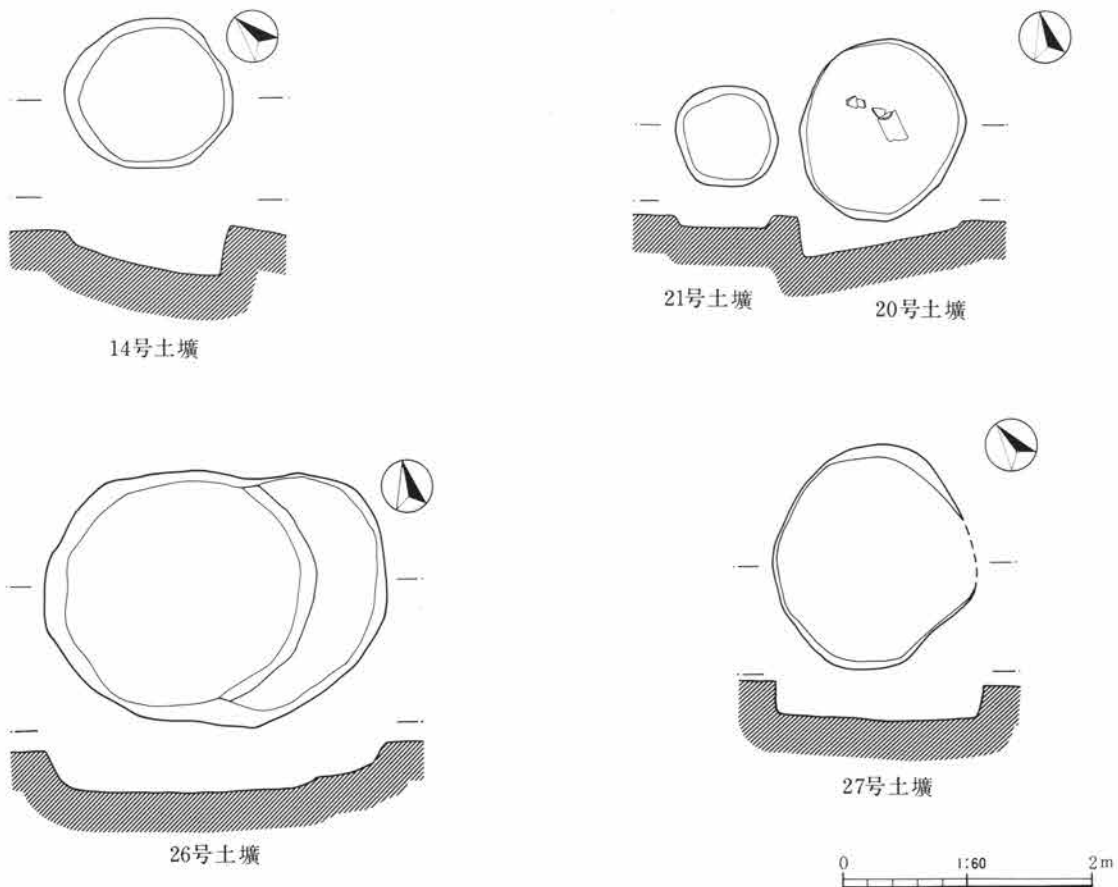
本遺跡全体で検出された土壙数は82基で、そのうち上武国道地域調査分は72基、早川河川改修地域分は10基であった。平面形態は円形、長方形、楕円形が主で、その他に不定形のもの等がある。なお調査段階で住居跡あるいは住居跡に伴う施設と考えられたもののうち、調査及び整理作業が進む段階で土壙に変更したものもある。又当初土壙として考えられている中で、住居跡に伴う貯蔵穴や、掘立柱建築遺構の柱穴等と判断されたものについてはこれらの遺構記述で取り扱った。

時期の明確な土壙は15基で、他は不明であった。以下時期別による特徴と出土遺物について概説する。なお各土壙の具体的な位置、計測値等の記述については一覧表にまとめて掲載した。

縄文時代の土壙と出土遺物（第322・323図、PL.14・45）

縄文時代に属する土壙は14、20、26、27号土壙の計4基である。すべて円形を呈しており、規模は直径2～1.5m前後を測る。底面は比較的平坦で、壁の立ち上がりは比較的急角度を呈しており、皿状あるいは椀状の断面形を呈するものはないようである。遺物は覆土より土器片が出土しており、27号土壙を除いて他は中期末（加曾利E4期）の時期と考えられる。

なおこれらの土壙は調査区の南東側台地のほぼ中央付近に集中しており、又この周辺からは遺構に伴わない縄文土器も比較的多く出土している。



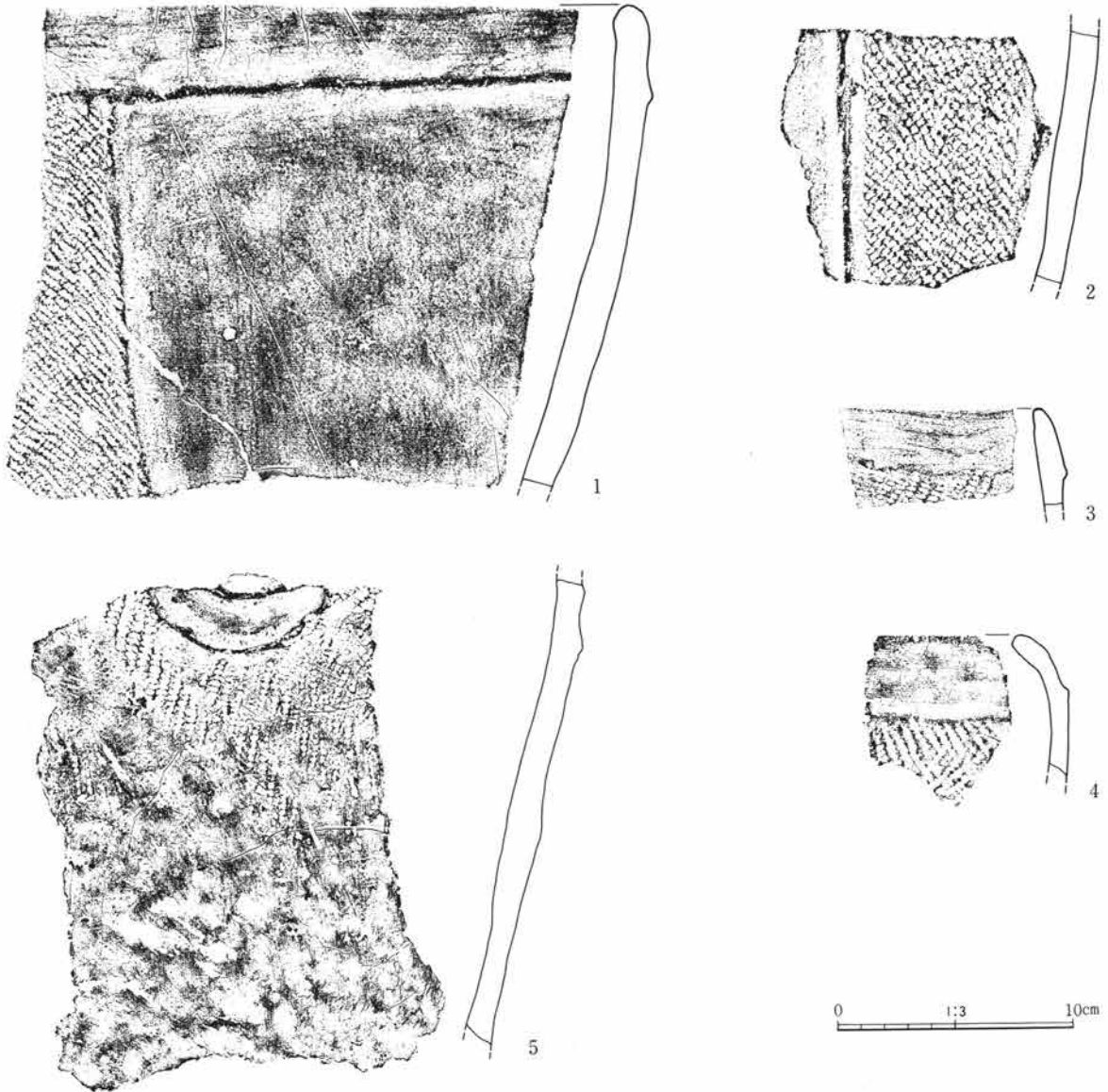
第322図 縄文時代の土壙

第323図-1は14号土壌覆土から出土した土器である。口縁部が弱く内湾しながら開く深鉢の口縁部破片で、口唇下に無文部をおいて断面三角形の微隆帯をめぐらし、そこから同微隆帯で区画された充填縄文帯を垂下させている。口唇下の無文部、および胴部無文部には研磨が施されており、後者には斜位の細沈線が認められる。縄文はLRの縦位施文である。加曾利E4式土器。

第323図-2～4は26号土壌覆土から出土した土器である。3・4は内湾する口縁部破片で、いずれも口唇下に無文部をおいて断面三角形の微隆帯をめぐらし、以下に縄文を施している。2は深鉢の胴部破片で、微隆帯で区画された充填縄文帯で文様が構成される。縄文は2がLR、3・4がRLで、いずれも縦位に施文が施されており、4では微隆帯下の帯のみ横位に施されている。3点とも加曾利E4式土器である。

第323図-5は20号土壌覆土中から出土している。断面三角形の2本の微隆帯で曲線的な文様が構成される。微隆帯の周囲にRL縄文が施される。加曾利E4式土器である。

なお27号土壌から土器片が数点出土しているが、時期は不明であった。



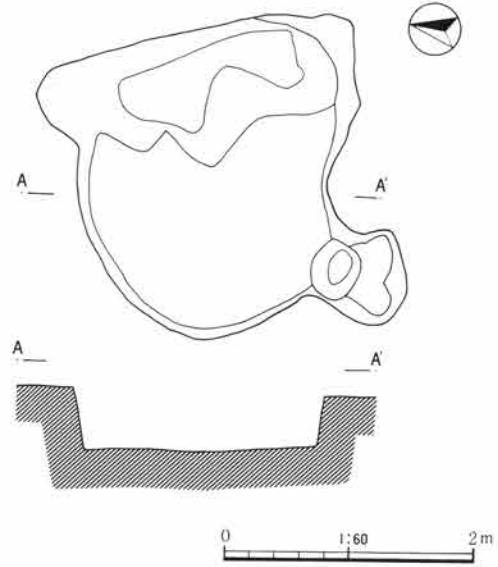
第323図 土壌出土遺物（縄文土器）

弥生時代の土壇と出土遺物 (第324・325図、PL.45)

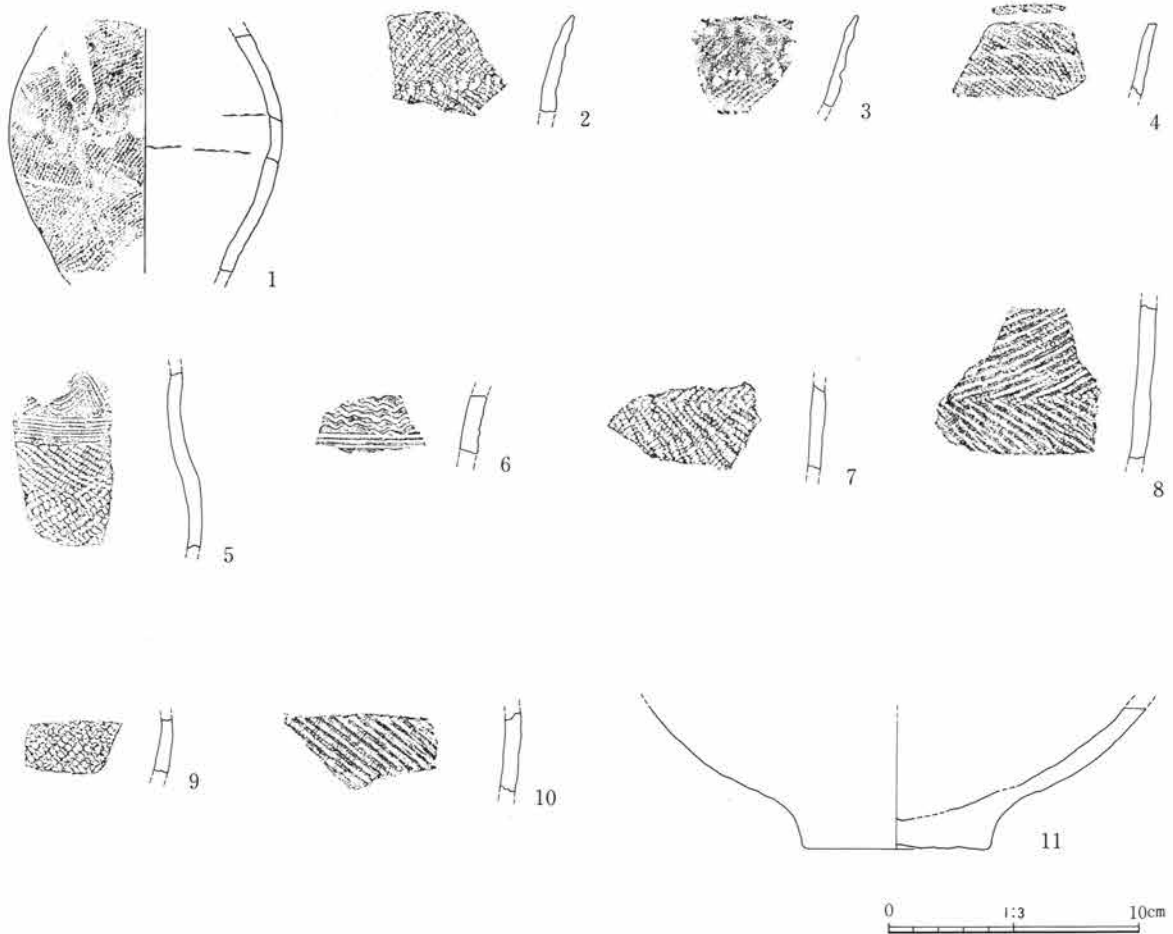
IV区F-11グリッドで検出された77号土壇が弥生時代に属する。平面形態は歪んだ円形を呈している。掘り込みの壁はほぼ直立しており、底面はほぼ平坦である。なお東側に不定形の細長い掘り込みが見られるが、本土壇の一部というよりは、風倒木痕あるいは後世の攪乱壕かと思われる。又南西部に直径80cm程のピットがあり、これも本土壇に伴うものではないだろう。

重複遺構は230号住居跡で、土層観察では確認できなかったが、出土遺物から本土壇が古いものである事は明らかである。

遺物は30点程の土器片で、ほとんどが覆土中からの出土である。縄文及び櫛描文と縄文の組合せを主文様としており、その特徴から栃木県に分布の中心をもつ二軒屋式系の土器と思われる。なおこれらに伴って古墳時代初頭期と思われる壺の底部が一点出土している事から、本土壇の時期は弥生後期～古墳時代初頭の幅をもつ。



第324図 弥生時代の土壇



第325図 土壇出土遺物(弥生土器)

土壌出土遺物観察表(1) 弥生時代

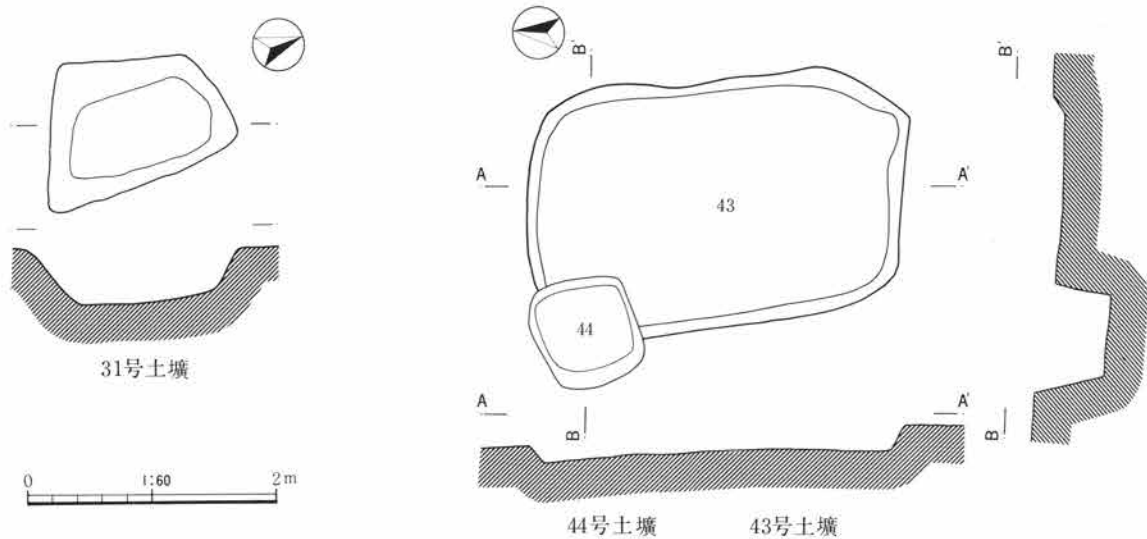
図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第325図-1 PL.45-23	弥 生 甕	77 号 土 壙	胴部約1/3破片	①比較的確密で、小砂粒を含む ②黒褐～淡褐 ③普通	外面全体に縄文を施す。原体はLRの軸縄にRの縄2条を付加した附加条第1種である。内面は横ナデ。	二軒屋式系。
第325図-2 PL.45-24	弥 生 (甕)	77 号 土 壙	口縁破片	①長石等の砂粒を多く含む ②赤褐 ③良好	外面に羽状縄文を施す。羽状の交差部分で上位の施文原体の末端部を押捺しながら回転させる。原体は上位かLR軸縄にR2条付加、下位はRL軸縄にL2条付加の附加条第1種である。内面は丁寧なナデ。	二軒屋式系。
第325図-3 PL.45-25	弥 生 (甕)	77 号 土 壙	口縁部片	①小砂粒を含む ②黒褐 ③普通	口唇部に縄文施文具と思われる原体で刻目文を施す。外面には縄文と原体先端部を押捺して文様を構成する。原体はLR軸縄にR2条附加と思われるがやや不鮮明である。	二軒屋式系。
第325図-4 PL.45-26	弥 生 (甕)	77 号 土 壙	口縁部片	①白色小砂粒を含む ②黒褐～暗褐 ③普通	口唇部～口縁外面に縄文を施す。外面に2条の粘土紐積み上げ痕を残す。縄文原体はRL軸縄にL2条附加した附加条第1種と思われる。	赤井戸式か。
第325図-5 PL.45-27	弥 生 (甕)	77 号 土 壙	頸部～胴上半部片	①小砂粒を含む ②赤褐～暗褐 ③普通	頸部に櫛描波状文、頸部と胴上部の境に横線文、胴部に羽状縄文を施す。施文原体の櫛描文は先端の丸く不揃いな8本前後の櫛状具、縄文は単節のLRとRLを用いる。櫛描文は右回り(時計回り)に施している。羽状縄文は2種の原体を横回転で交互に施文している。内面ナデ。	二軒屋式系。
第325図-6 PL.45-28	弥 生 (甕)	77 号 土 壙	頸部破片	①小砂粒を含む ②外面黒、器肉と内面淡黄～赤褐 ③普通	櫛描波状文とその下に横線文を施す。原体は5本の不揃いな目をもつ櫛状具(植物の茎状のものか)を用いる。	二軒屋式系か。
第325図-7 PL.45-29	弥 生 (甕)	77 号 土 壙	胴部破片	①小砂粒を多く含む ②黒～黒褐 ③普通	縄文を全面に施す。原体はRL軸縄にL2条を附加した附加条第1種と思われる。羽状を構成するらしい。	
第325図-8 PL.45-30	弥 生 (甕)	77 号 土 壙	胴部破片	①比較的確密を多く含む ②暗褐 ③普通	羽状縄文を施す。原体はRL軸縄にL2条付加、LR軸縄にR2条付加の2種類を用いる。内面粗いナデ。	二軒屋式系か。
第325図-9 PL.45-31	弥 生 (甕)	77 号 土 壙	胴部破片	①砂粒を多く含む ②淡褐 ③普通	LR軸縄にR2条附加した原体を用いて施文している。羽状を構成する可能性あり。	
第325図-10 PL.45-32	弥 生 (甕)	77 号 土 壙	胴部破片	①赤色酸化鉄粒が目立つ ②にぶい黄褐 ③普通	RL軸縄にL2条附加した原体を用いて施文。羽状を構成する可能性あり。	
第325図-11	(土師) 壺	77 号 土 壙	底7.5 底部破片	①大粒砂粒を多量に含む ②淡褐 ③普通	縦ヘラミガキ。底面ヘラケズリ。外面に赤色塗彩の痕跡が残る。底部は突出している。	

古墳時代の土壌と出土遺物（第326・327図、PL.14・43）

本時期に属するものとして31号土壌、43号土壌、44号土壌の計3基が検出されている。そのうち43号土壌は規模が比較的大きく、当初住居跡と考えられたが、カマド等の炊飯施設がない点や、床面が不明瞭である事等から土壌として取り扱った。規模や形態がそれぞれ異なる事からこれらは異なる性格をもつものとしてとらえられよう。

遺物はいずれも鬼高期に属するものと思われる。

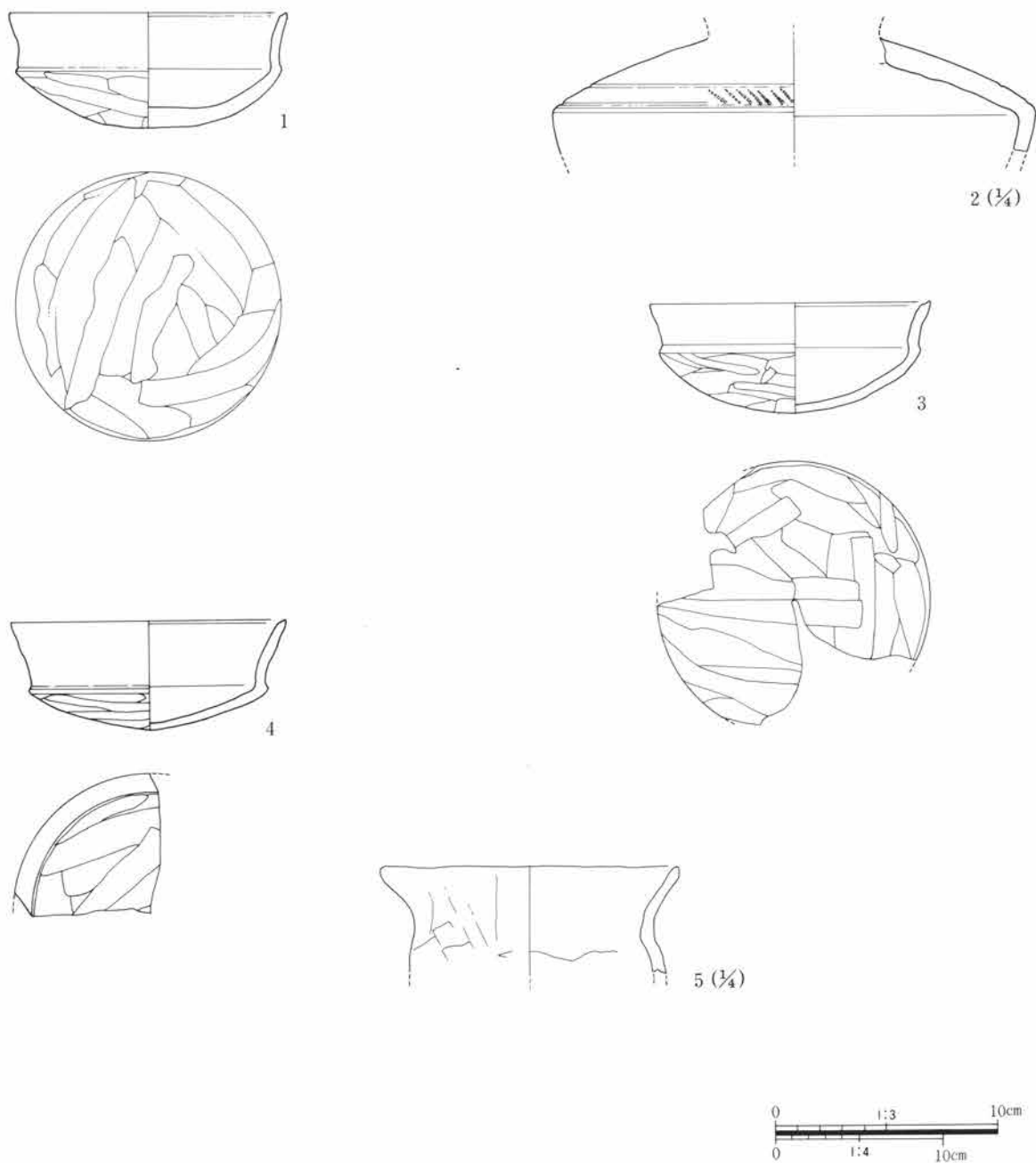
なお43号土壌と44号土壌は重複しているが、新旧関係は不明であった。



第326図 古墳時代の土壌

土壌出土遺物観察表(2) 古墳時代

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第327図-1 PL.43	土師 杯	43号 土壌	口12.4 高5.2 口縁、底部の一部 欠	①酸化鉄粒等の小砂粒 を含む ②橙 ③普通	口唇部内側に稜をもち小さな平坦面を つくり出す。口縁～杯内面に横ナデ。 底面中央は横方向、周辺部は同心円状 のヘラケズリ。	
第327図-2 PL.43	須恵 (長頸壺)	43号 土壌	肩部約1/4破片	①長石粒を若干含む ②灰 ③還元、硬質	内外面にロクロ目を残す。肩部端に同 心円状の浅い沈線を2条廻らし、その 中に櫛状具先端の押捺による文様を充 填する。	
第327図-3	土師 杯	44号 土壌	口(12.6) 高4.9 口縁部約2/3を欠	①酸化鉄粒等の砂粒を 含む ②橙 ③普通	口唇部内側に稜をもち小さな平坦面を つくり出す。口縁～杯内面を横ナデ。 底面横方向と同心円状のヘラケズリ。	
第327図-4	土師 杯	44号 土壌	口(12.3)高(4.9) 口縁～底部の 約1/4破片	①小砂粒を含む ②橙 ～黒褐 ③良好	口唇部内側に稜をもち小さな平坦面を つくり出す。口縁～杯内面を横ナデ。 底面ヘラケズリ。	



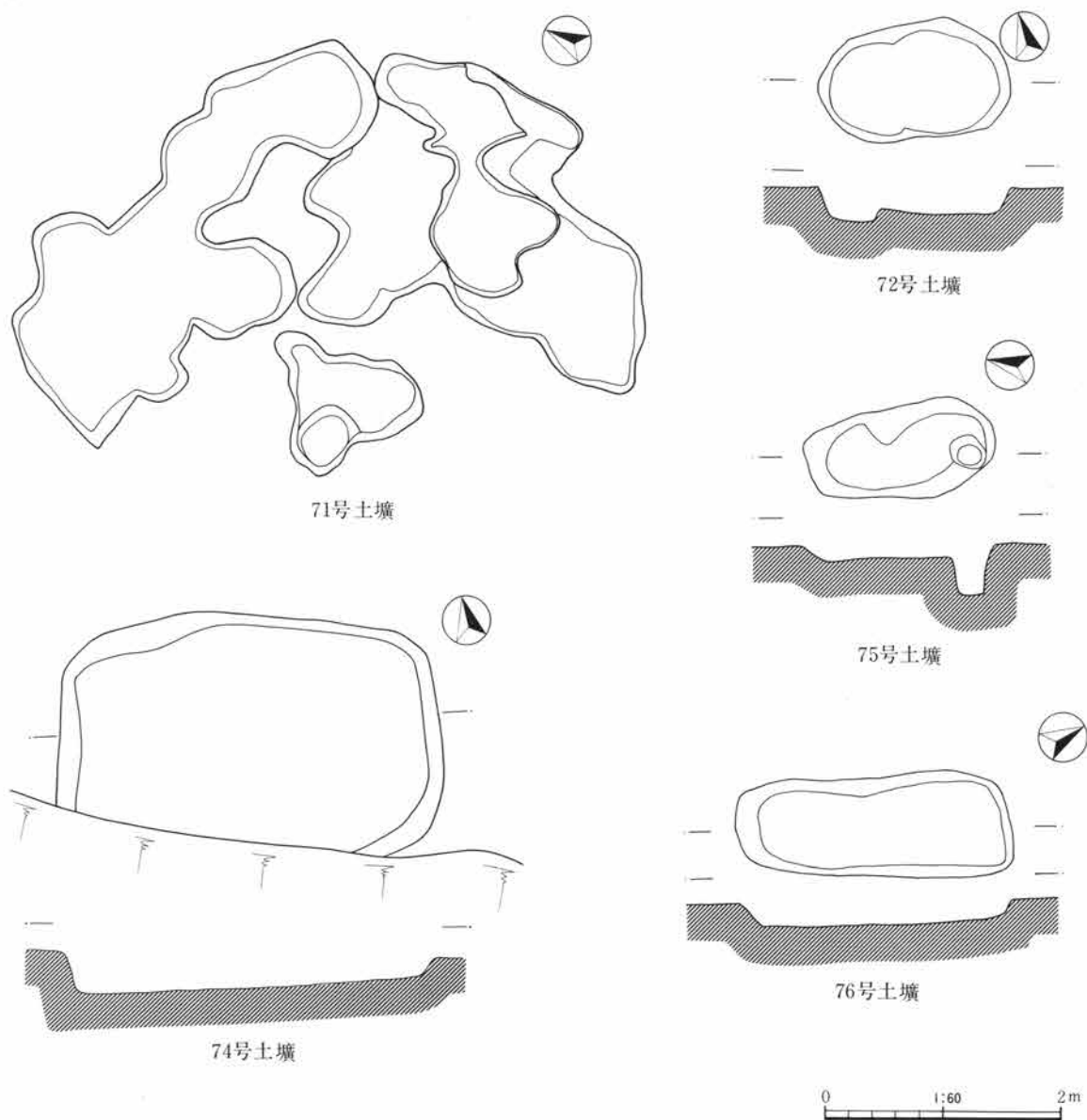
第327図 土壙出土遺物（古墳時代）

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第327図-5	土師 甕	44号 土壙	口(18.0) 口縁部約1/6破片	①砂粒を多く含む ② にふい黄褐 ③酸化	頸部縦へラケズリ。口縁部内外面とも 横ナデ。頸部内面横ハケメ。なお口縁 部外面に横ナデ以前のものと思われる 縦方向のへらをあてたような沈線が残 る。	

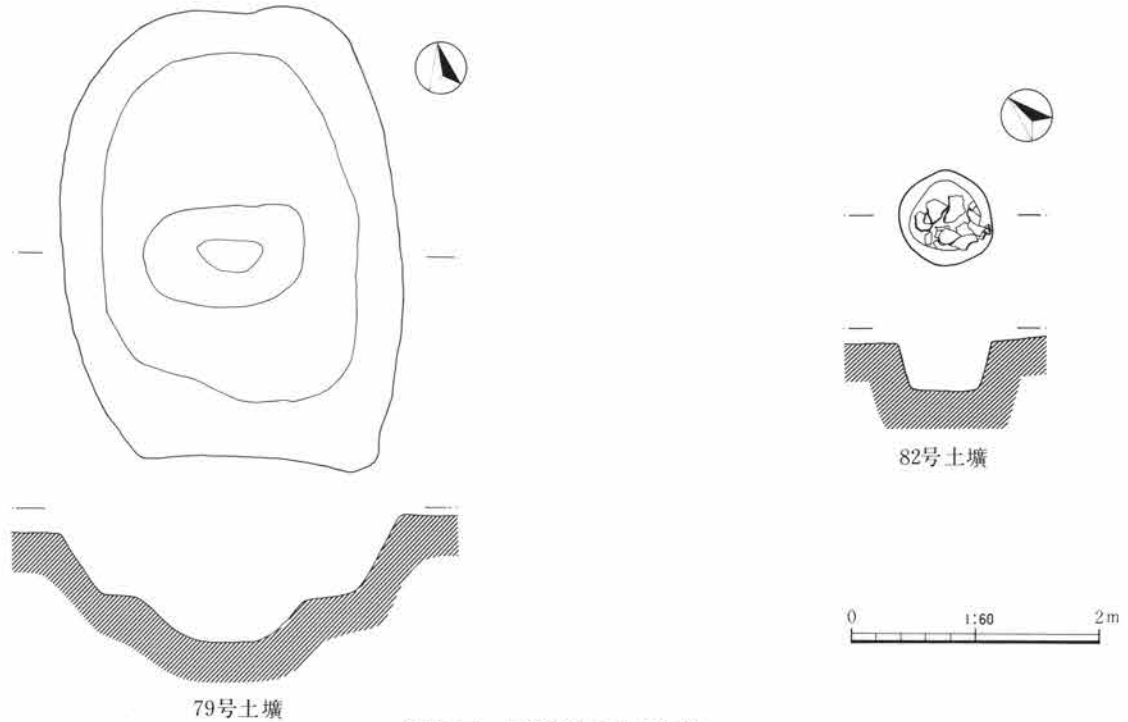
平安時代の土壌と出土遺物（第328・329・330・331図、PL.43）

本時期に属すると思われるものは71号、72号、74号、75号、76号、79号、82号土壌の計7基であった。平面形態は72号、74号、75号、76号土壌が長方形ないしは楕円形を呈し、これらは断面形状も近似し、共通して浅い。これに対し79号土壌は規模の大きな楕円形で中央が2段に掘り込まれている。又82号土壌はピット状を呈する。71号土壌は不定形を呈する。これらの性格はいずれも不明であるが、71号と82号は隣接している事、71号は確認プランが方形に近かった事、更にこの部分に土器片が多く出土している事等から、71号土壌は住居跡の掘り形跡で82号はこれに伴う貯蔵穴である可能性も考えられる。

遺物は土器片が主で、いずれも平安時代のもと考えられる。特に71号土壌と82号土壌から煮沸具の甕類（所謂「土釜」を指す。）が多く出土した事は注目される。



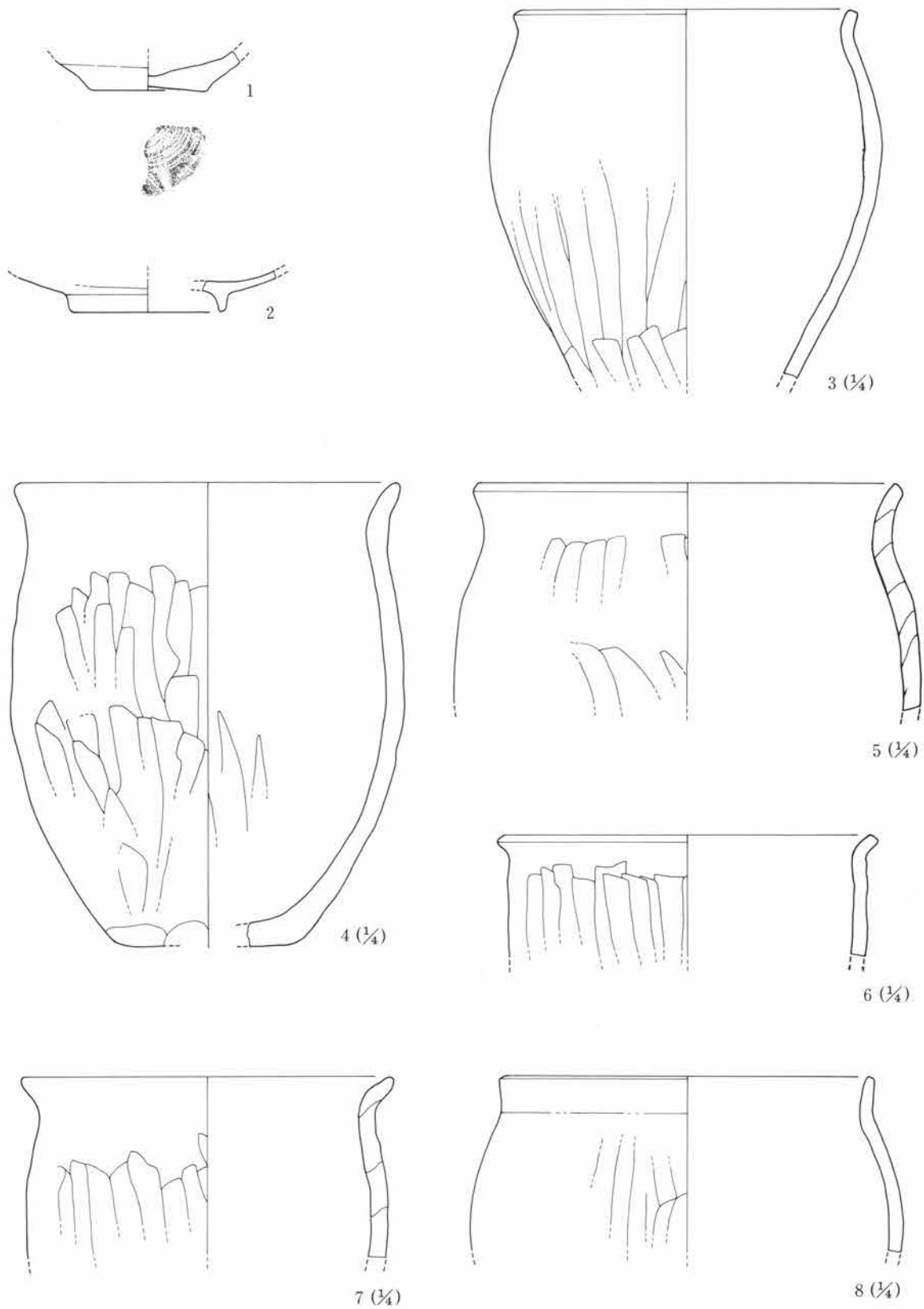
第328図 平安時代の土壌(1)



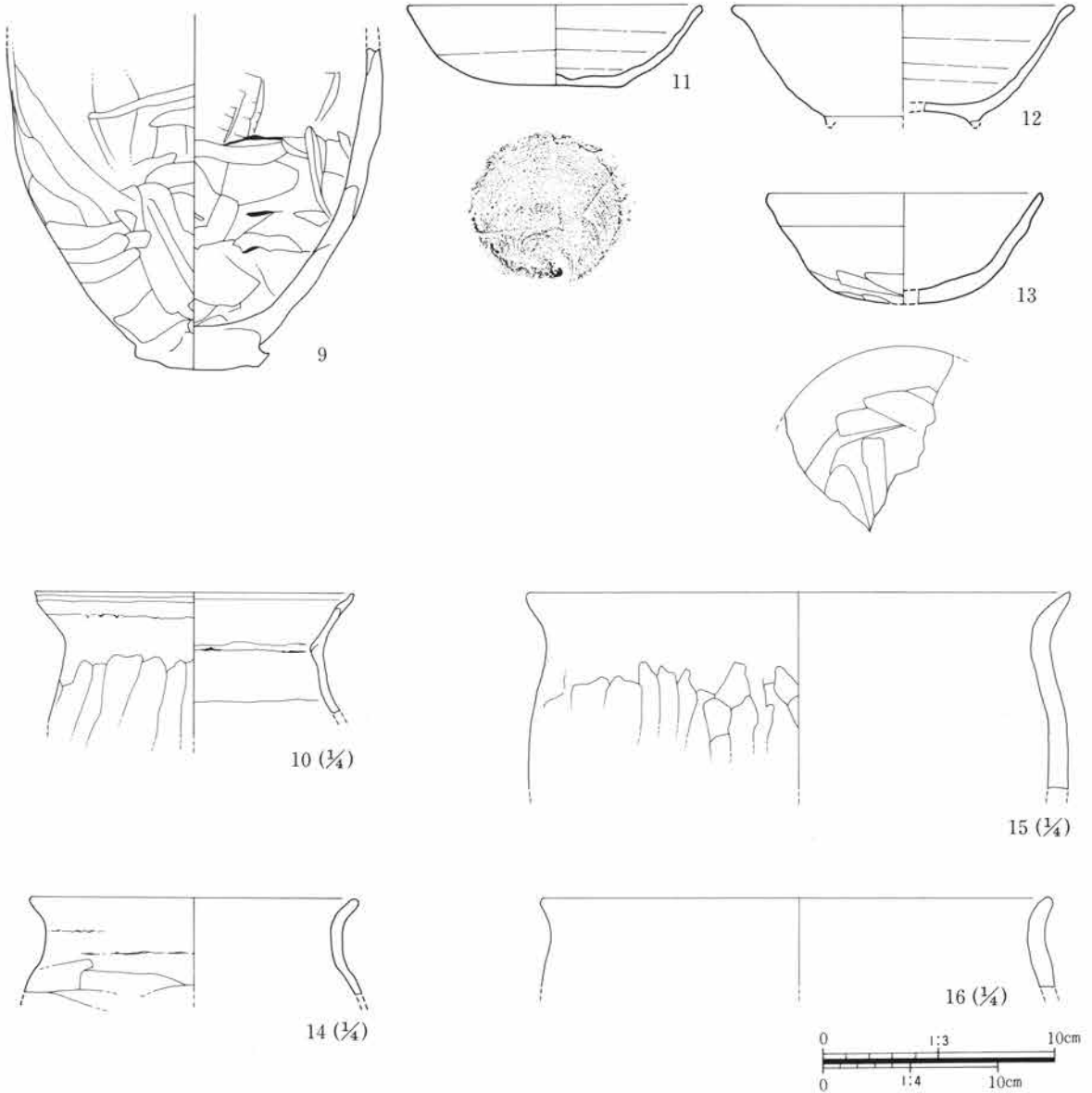
第329図 平安時代の土坑(2)

土坑出土遺物観察表(3) 平安時代

図 No 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第330図-1	土 師 皿	71 号 土 坑	底 (5.7) 底部約1/5破片	①金雲母を含む ②淡 黄褐 ③軟質	ロクロ左回転成形と思われる。底糸切 り無調整。	
第330図-2	灰釉陶 (皿)	71 号 土 坑	底部小破片	①緻密 ②淡灰 ③良 好	高台部は横ナデで端部は丸味をもつ。 底部内外面を除いて淡黄灰色の灰釉を かける。釉かけは刷毛ぬりと思われる。	東濃産か。
第330図-3	土 師 甕	71 号 土 坑	口 (23.0) 口縁～胴下半部約 1/4破片	①白色小砂粒、大粒の 赤色酸化鉄粒を含む ②黄褐 ③普通	口縁外面～胴上半は縦へラケズリの後 横へラミガキ。胴下半部外面は縦へラ ケズリ。内面全体は指頭による横ナデ。 なお胴下半の一部にへラミガキ状の痕 跡が見られる。	
第330図-4	土 師 甕	71 号 土 坑	口(26.0) 高30.6 底 (11.5) 口縁～底部約1/6 破片	①大粒砂粒を多量に含 む ②黄褐 ③普通	口縁部横ナデ、体部外面は縦方向、底 部付近は横方向へラケズリ。内面は縦 方向のナデ、口縁部～頸部内面は横ナ デ。	
第330図-5	土 師 甕	71 号 土 坑	口 (28.6) 口縁～胴上半部約 1/4破片	①大粒砂粒を多量に含 む ②黄褐 ③普通	口縁部は緩く外反し、口唇外側に弱い 稜をもつ。口縁～頸部外面は縦へラナ デ、胴部中位以下外面は縦へラケズリ、 口縁部内面は横方向、胴部は縦方向の ナデ。	
第330図-6	土 師 甕	71 号 土 坑	口 (25.0) 口縁部約1/6破片	①砂粒を多く含む ② 暗褐 ③軟質	口縁内外面横ナデ、胴上半外面は縦へ ラケズリ、胴部内面は縦ナデ。	



第330図 土壙出土遺物(平安時代)(1)



第331図 土壇出土遺物(平安時代)(2)

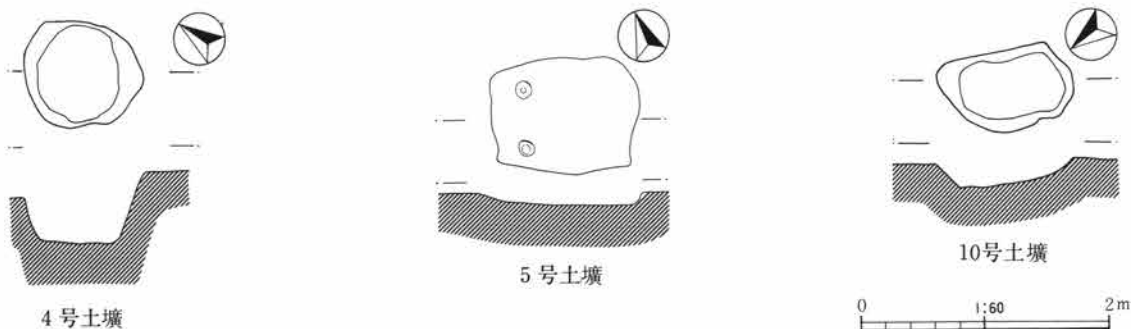
図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第330図-7	土師 甕	71号 土壇	口(25.5) 口縁部約1/5破片	①大粒砂粒を多量に含む ②橙 ③普通	口縁は小さく外反し、口唇部外側に稜をつくる。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦ヘラケズリ、胴部内面は縦ナデ。	
第330図-8 PL.43	土師 甕	71号 土壇	口(25.0) 口縁~胴上部 約1/6破片	①大粒を多量に含む ②暗黄褐 ③普通	口縁は弱く外反し、口唇部外側に強い稜をつくる。口縁部ナデ、頸部に縦ヘラナデ。	
第331図-9	土師 甕	72号 土壇	底5.1 胴中位以上を欠	①砂粒を多く含む ②外面黒褐、内部赤褐 ③軟質	外面は縦方向を主としたヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。内面はヘラあて痕を残す等粗雑な仕上げである。	古墳時代の可能性あり。

図 No. 写真図版No.	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口 径・器 高・底 径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第331図-10	土 師 甕	72 号 土 壙	口18.4 胴部以下欠	①砂粒を含む ②淡褐 ③普通	口唇部は上方に屈曲し、外側に調整時の沈線が廻る。頸部外面は縦ヘラケズリ、口縁～頸部内面は横ナデ。	
第331図-11	須 惠 杯	74 号 土 壙	口12.8 高3.5 底6.0 口縁部約1/3欠	①白色鉱物（針状のもの を若干含む）を含む ②灰 ③還元、普通	ほぼ直斜状に立ち上がり、口唇部は小さく肥厚してやや外反する。ロクロ右回転成形、口縁部は横ナデ調整、底回転糸切り無調整。	
第331図-12	須 惠 高台椀	74 号 土 壙	口(16.8)底(6.7) 口縁～底部約1/3 破片	①黑色酸化鉄粒を含む ②淡褐灰 ③還元、やや軟質	体部の湾曲が強く、口唇部は肥厚して外反する。ロクロ右回転成形、内外面ともナデ調整か。底回転糸切後付高台	器面は風化して荒れる。
第331図-13	土 師 杯	74 号 土 壙	口(12.0)高(4.7) 口縁～底部約1/5 破片	①小砂粒を含む ②黄褐 ③普通	体部上位は外側に屈曲。口縁部内外面とも横ナデ、底面ヘラケズリ、内面ナデ体部中央は無調整。	内面に煤付着
第331図-14	土 師 甕	74 号 土 壙	口(19.0) 口縁部約1/6破片	①黑色鉱物、赤色酸化 鉄粒等を含む ②橙 ③普通	口縁部内外面横ナデ、胴上半部外面横ヘラケズリ、胴上半部内面ナデ。口縁の屈曲部分外面に粘土紐積み上げ痕が残る。	
第331図-15	土 師 甕	82 号 土 壙	口(31.2) 口縁部約1/4破片	①大粒砂粒を多量に含 む ②暗褐 ③普通	口縁部内外面横ナデ。胴上半部外面は縦ヘラケズリ、胴部内面はナデか。	
第331図-16	土 師 甕	82 号 土 壙	口(29.4) 口縁部約1/8破片	①小砂粒を含む ②暗 黄褐 ③普通	口縁部内外面横ナデ、胴上半部外面縦ヘラナデ、胴部内面は指頭による横ナデ。	

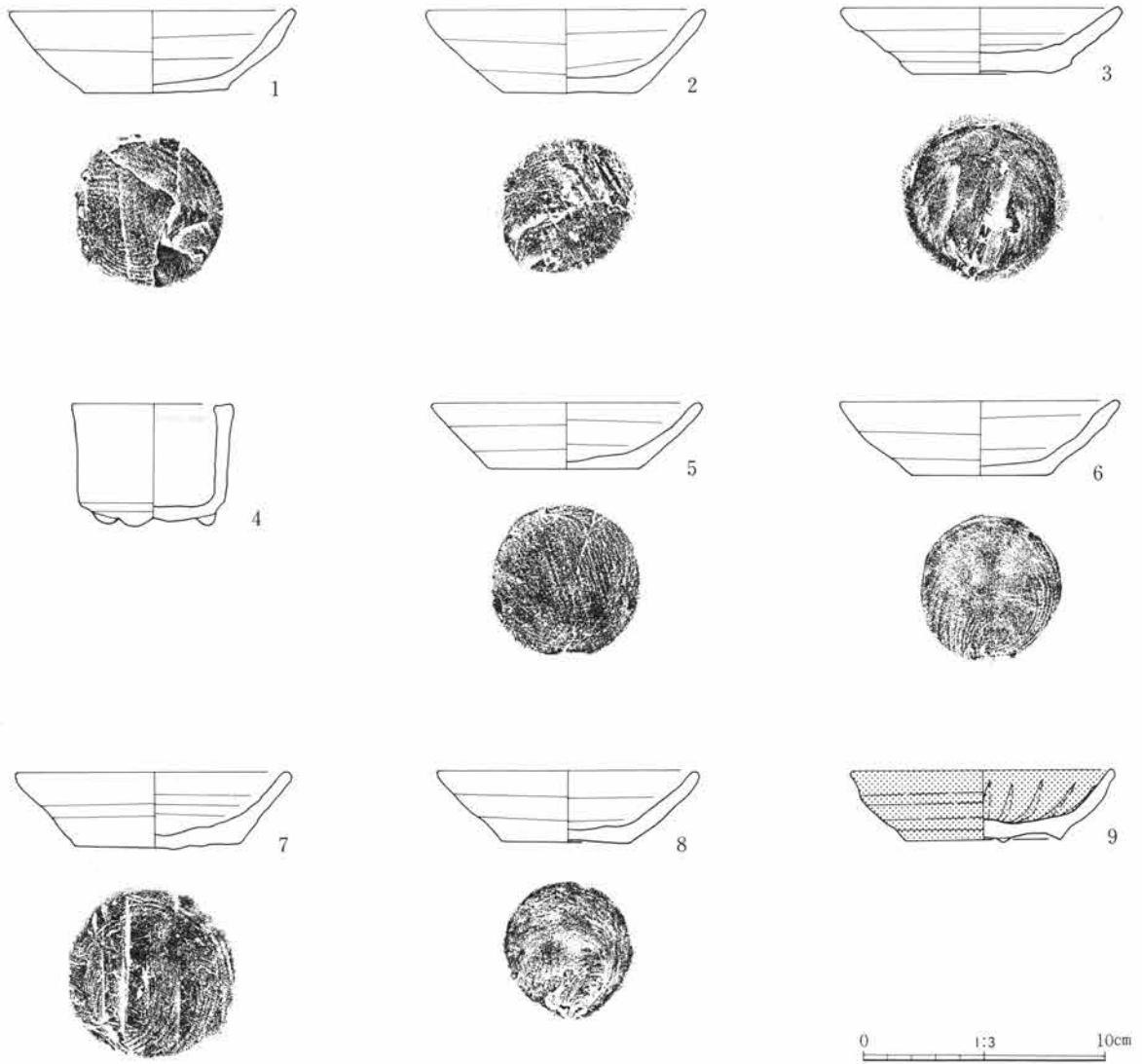
中世の土壙と出土遺物（第332・333・334・335図、PL.14・43・44）

本時期に属すると思われるものは4号、5号、10号土壙の計3基であった。いずれもI区の中央付近（C-21、D-22、E-22グリッド）で検出され、ほぼ等間隔で並ぶ。4号は円形、5号は方形、10号は楕円形とそれぞれ平面形態や規模は異なるが、出土遺物の検討からすべて中世の墓壙と判断された。

遺物は骨片（大腿骨か）、土師器小皿、陶器、銭貨が出土している。土器類は正立位できちんと並べられていた。銭貨はすべて永楽通宝6枚ずつで土壙内に散在していた。陶器は4号から香炉、10号から皿が出土し、時期は16世紀代のものと考えられる。



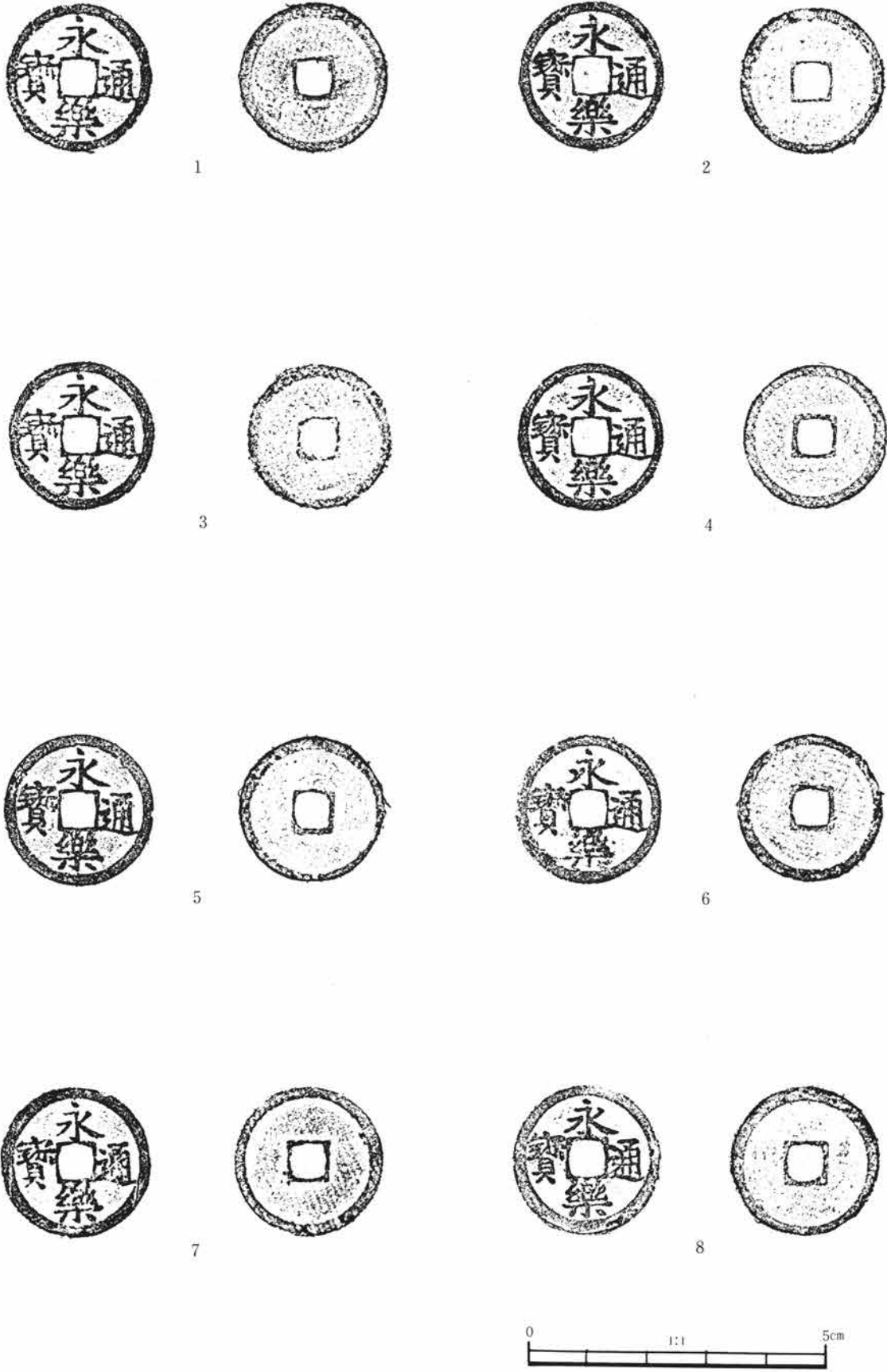
第332図 中世の土壙



第333図 土壌出土遺物(中世)

土壌出土遺物観察表(4) 中世

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第333図-1 PL.43	土師 皿	4号 土壌	口径11.8 高3.4 底5.9 完形	①カクセン石等黒色鈺物が目立つ ②淡橙 ③普通	ロクロ左回転成形、体部を上下2段横ナデ調整し、中央部が肥厚する。見込み部ユビナデ。底糸切り後ヘラケズリ状の調整。	
第333図-2 PL.43	土師 皿	4号 土壌	口径11.5 高3.4 底5.5 体部一部欠	①素地緻密、黒色鈺物が目立つ ②器肉黒、器表黄褐 ③器肉還元、器表酸化、良好	ロクロ左回転成形。体部横ナデ調整。見込み部ユビナデ。底糸切り後ヘラケズリ状の調整。底面に板目状圧痕が残る。	



第334図 土壙出土遺物(銭貨)

第V章 検出された遺構と遺物

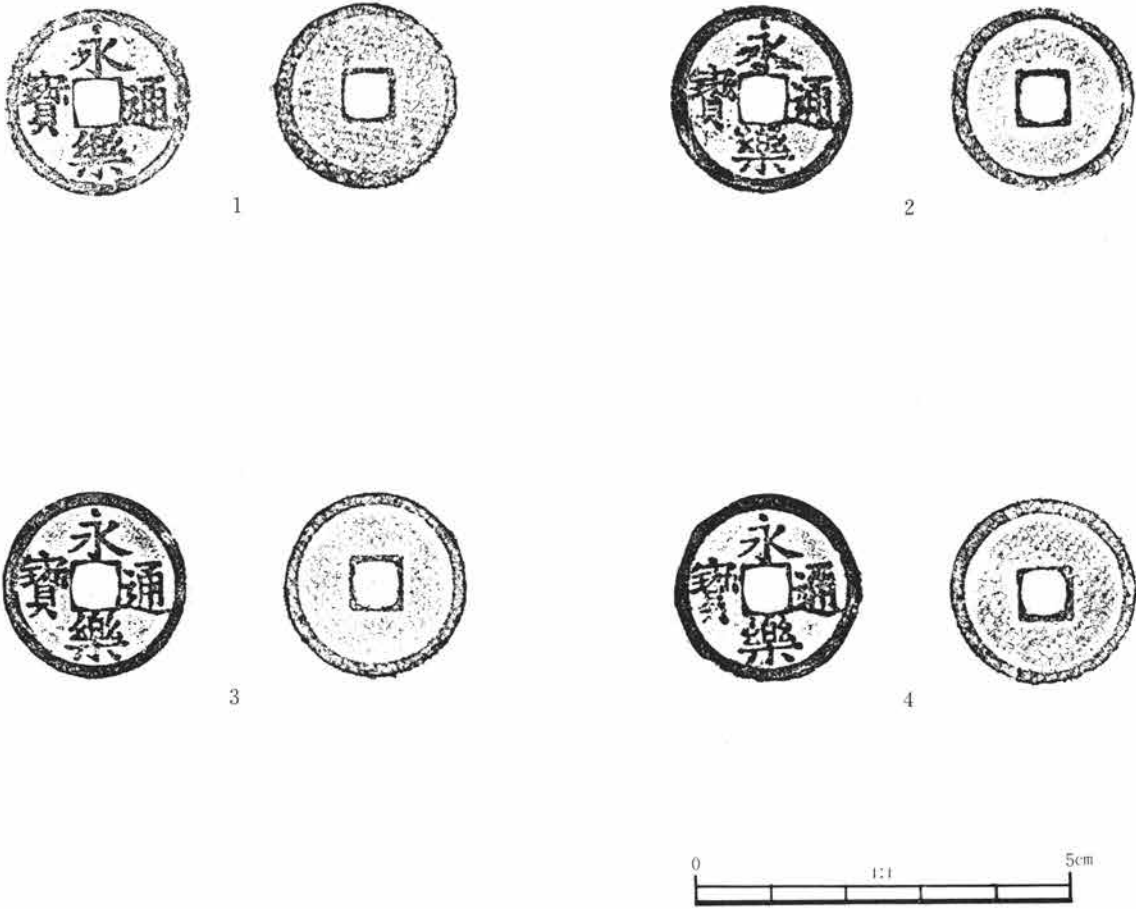
図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第333図-3	土師 皿	4号 土壙	口(11.7) 高2.7 底5.7 体部2/3欠	①粗く赤色酸化鉄粒、 白色砂粒を含む ②淡 橙 ③やや軟質	ロクロ右回転成形、口唇部肥厚。底回 転糸切り後ヘラケズリ状の調整。底面 に並行する2条の板目状圧痕が残る。	
第333図-4 PL.43	陶器 香炉	4号 土壙	口6.6 高4.8 底5.9 完形	①やや粗く黒色の小鉱 物粒を若干含む ②胎 土黄白、釉白緑 ③酸 化、普通	ロクロ右回転成形、底回転ヘラ切り後 小粘土塊による低い3脚を貼付する。 釉は淡緑色と白色の「霜降り」状で、 内面全体及びに外面体部全体にかける。	美濃産か。
第333図-5 PL.43	土師 皿	5号 土壙	口11.2 高2.7 底6.1 完形	①カクセン石等黒色鉱 物が目立つ ②赤味を 帯びた黄褐 ③普通	ロクロ右回転成形、口縁部横ナデ調整、 見込み部ユビナデ。底糸切り後の目の 細かい板目状圧痕が残る。	
第333図-6 PL.43	土師 皿	5号 土壙	口11.5 高3.0 底5.6 完形	①カクセン石等黒色鉱 物が目立つ ②淡橙 ③普通	ロクロ左回転成形。口縁～体部内外面 とも横ナデ調整。見込み部ユビナデ。 底糸切り後一部ヘラケズリ状の調整。 底面に目の細かい板目状圧痕が残る。	
第333図-7 PL.43	土師 皿	10号 土壙	口11.4 高3.0 底6.8 完形	①カクセン石等黒色鉱 物、赤色酸化鉄粒が目 立つ ②淡橙 ③普通	ロクロ右回転成形。口縁内外面横ナデ 調整。ロクロ目を明瞭に残す。見込み 部ユビナデ。底糸切り後の板目状圧痕 が残る。	
第333図-8 PL.43	土師 皿	10号 土壙	口10.8 高2.9 底5.2 口縁1部欠	①カクセン石等黒色鉱 物、赤色酸化鉄粒が目 立つ ②赤味を帯びた 黄褐 ③普通	ロクロ左回転成形。口縁～体部内外面 横ナデ調整。底糸切り無調整。	
第333図-9 PL.43	陶器 皿	10号 土壙	口10.9 高2.8 底6.4	①やや粗 ②胎土黄白、 釉淡緑 ③酸化普通	ロクロ成形、腰部が強く張り出し、口 縁部がやや外反する。見込み部に菊花 弁状の陰刻文を描く。透明度の高い灰 釉を内外面とも施す。底面に重ね焼き 用の輪トコの痕跡が残る。	

土壙出土の銭貨（第334・335図、PL.44）

5号土壙、10号土壙から永楽通宝6枚づつが出土している。おそらく明の渡来銭と思われる。いずれも鋳出しが明瞭で、重量もほぼ均一である。

出土銭貨一覧表

図 No.	写真図版No.	出土位置	直径 (cm)	重量 (g)	図 No.	写真図版No.	出土位置	直径 (cm)	重量 (g)
第334図-1	PL.44	5号土壙	2.54	3.1	第334図-7	PL.44	10号土壙	2.54	2.8
第334図-2	PL.44	5号土壙	2.45	2.2	第334図-8	PL.44	10号土壙	2.52	3.3
第334図-3	PL.44	5号土壙	2.48	2.7	第335図-1	PL.44	10号土壙	2.48	2.2
第334図-4	PL.44	5号土壙	2.44	3.1	第335図-2	PL.44	10号土壙	2.47	2.6
第334図-5	PL.44	5号土壙	2.46	3.3	第335図-3	PL.44	10号土壙	2.48	2.5
第334図-6	PL.44	5号土壙	2.47	2.4	第335図-4	PL.44	10号土壙	2.50	3.1



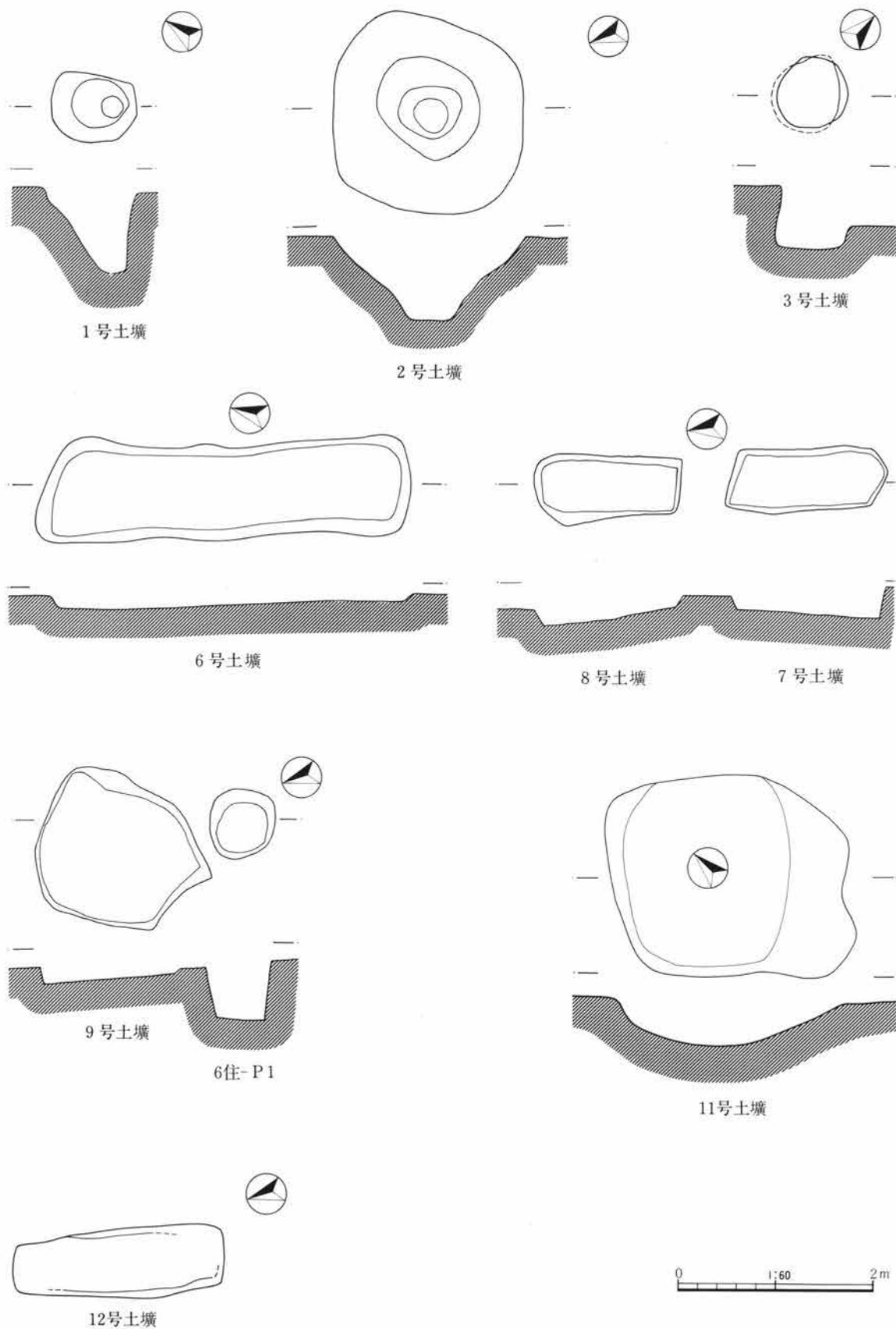
第335図 土壌出土遺物(銭貨)

時期不明の土壌 (第336・337・338・339・340図、PL.14)

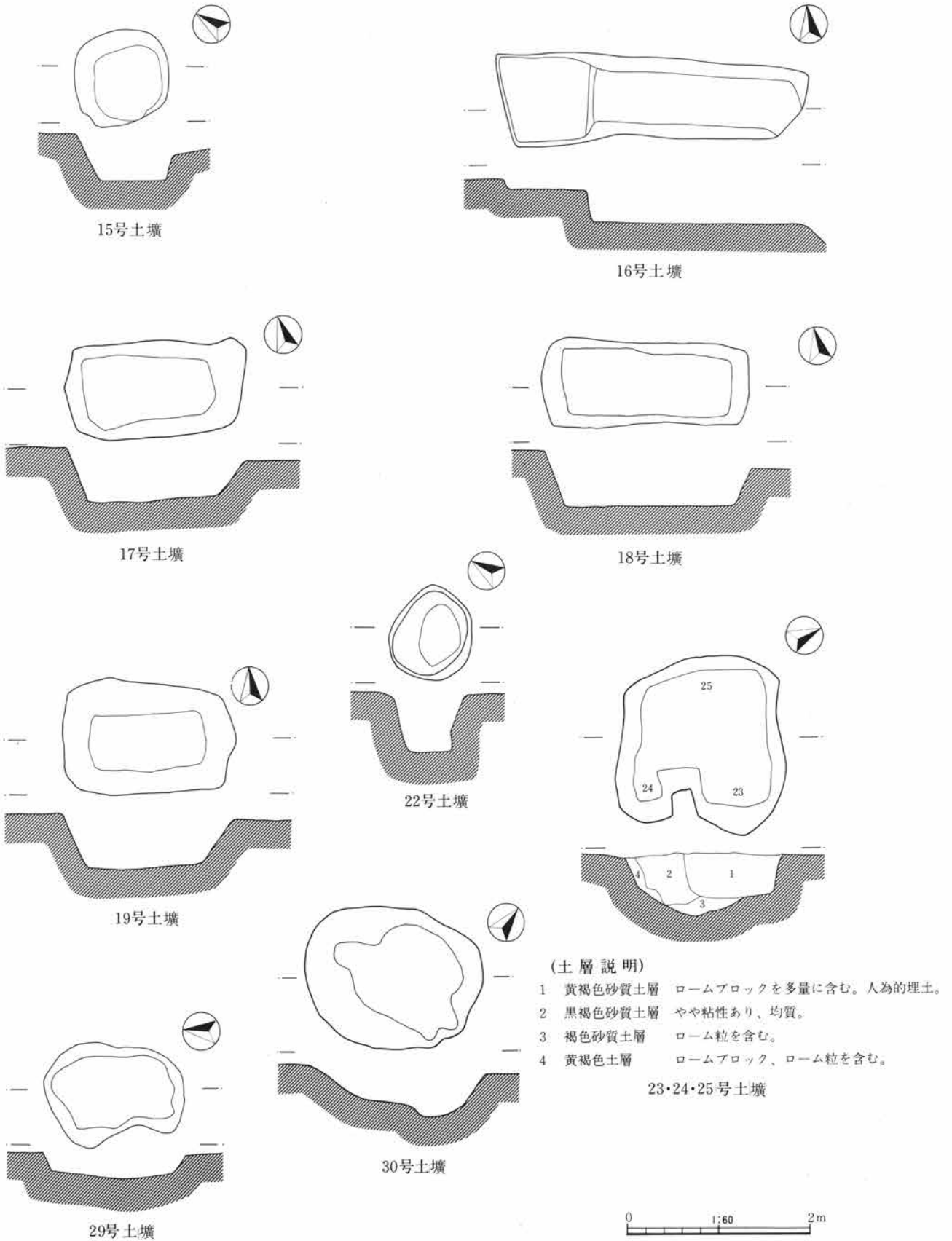
総数52基が検出された。(早川河川改修地域調査分を除く。)ここで取り上げた土壌はいずれも出土遺物が無いが非常に乏しいもので、又重複遺構との関係も不明確である事からその時期を限定し得ないものである。平面形態は長方形、円形、楕円形、その他の不整円形、不定形等で、数量は長方形(隅丸長方形を含む。)が16基、円形が13基、楕円形が10基、その他13基であった。

長方形土壌は長さ1.5m前後、幅0.6m前後を測る小形のものと、長さ2m以上、幅1.0m前後を測る長大なもの二種に分ける事ができるようである。主軸方向については北北東と西北西を指すものが大部分を占める。覆土については全土壌の検討はできなかったが、概してロームブロックを多量に含む人工的埋土が多いようである。性格付けについては推定の域を出ないが、小形ものは墓塚、長大なものは畠作に伴う貯蔵穴(「イモアナ」あるいは「ムロ」等と呼称されるもの)の可能性が考えられる。

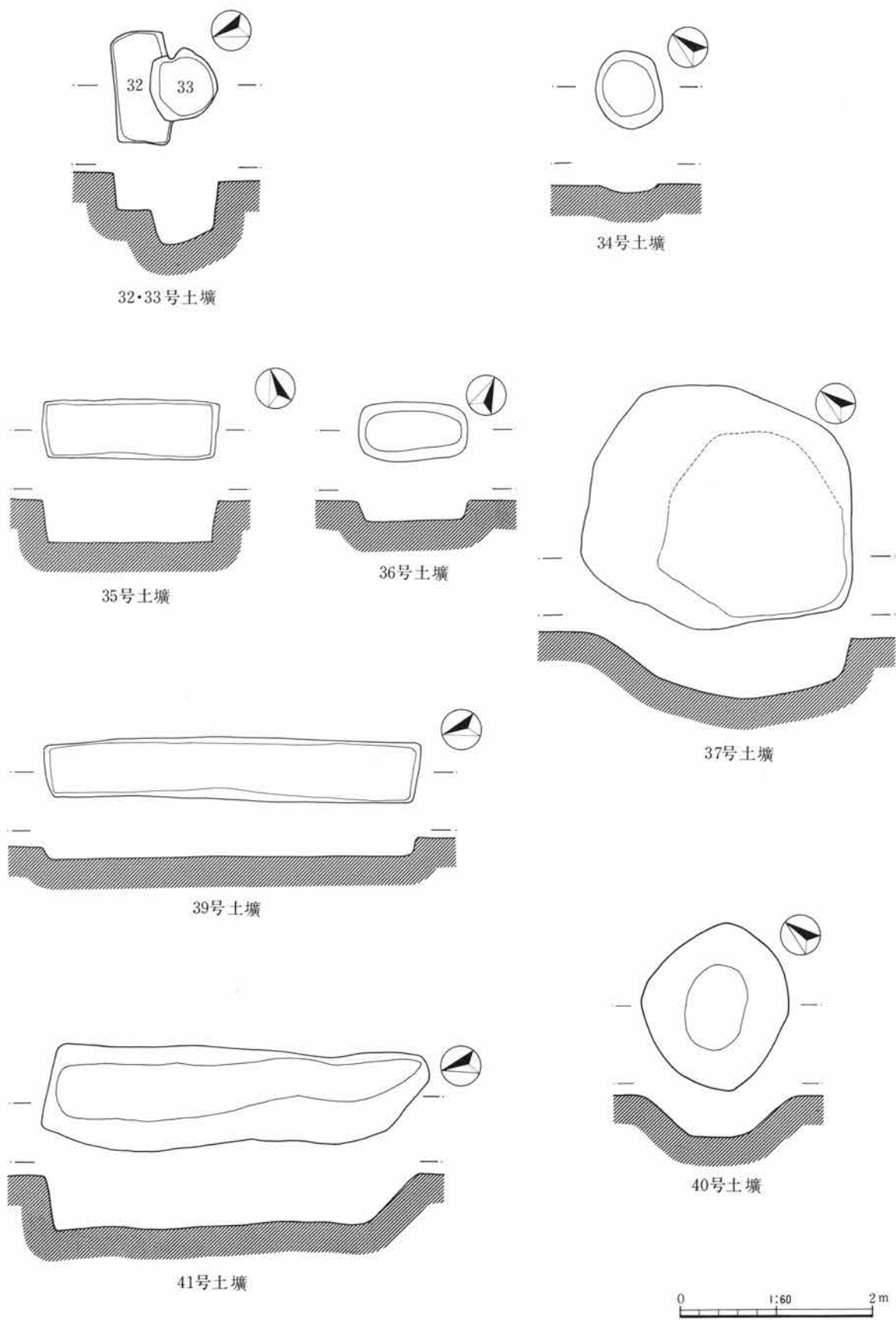
円形土壌についてはその規模や断面形状からかなりのバラエティがあるようである。形態の近似性から井戸、墓塚、柱穴等の性格が考えられるが、根拠となる具体的な痕跡や他遺構との関連性は見られなかった。



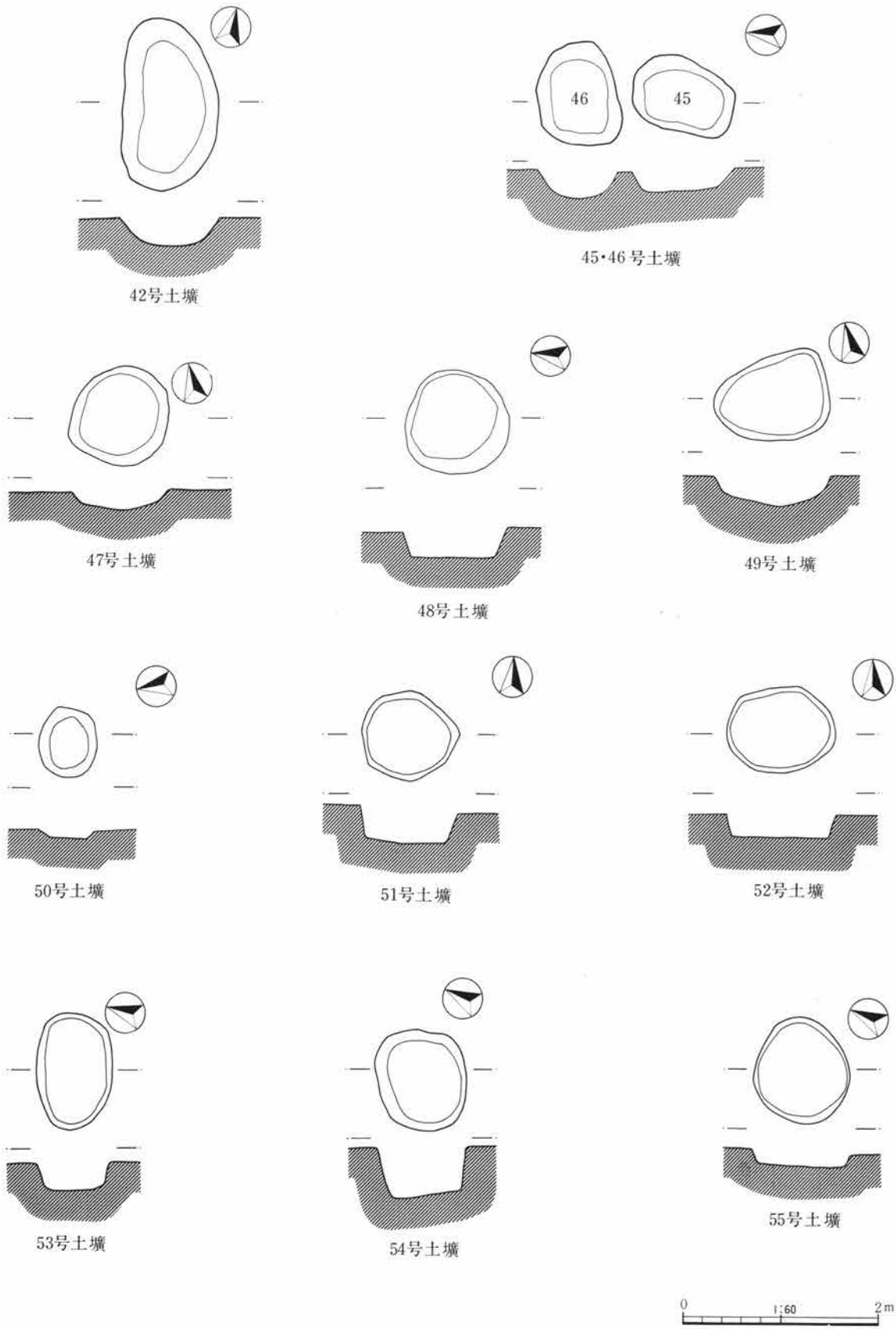
第336図 土坑(1)



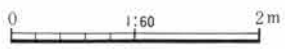
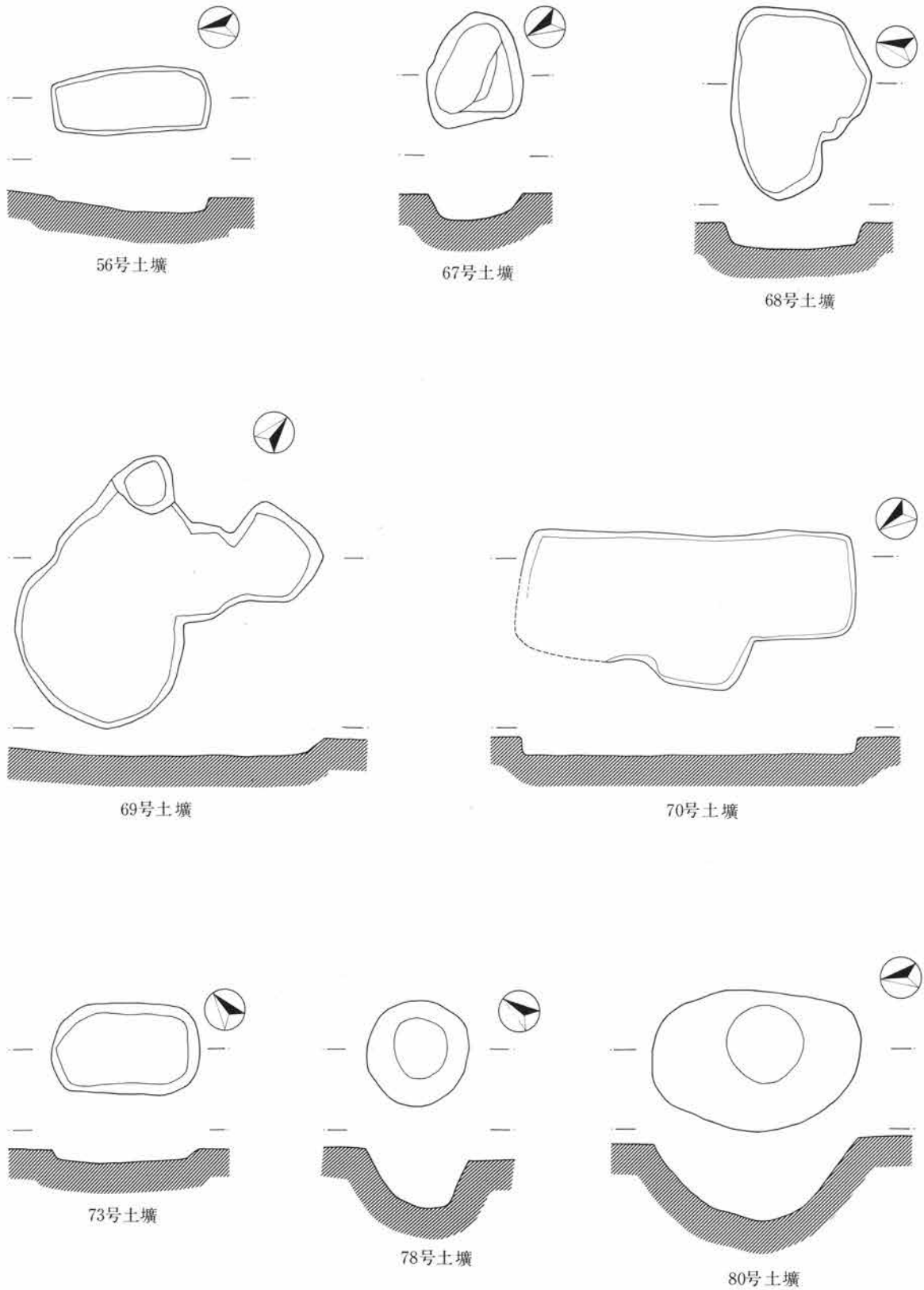
第337図 土壌(2)



第338図 土壇(3)



第339図 土坑(4)



第340図 土坑(5)

土壌一覧表

土壌No. 図 No.	位 置	平面形態	規 模 (m)		重複遺構 新旧関係	出土遺物	備 考
			長径(辺)×短径(辺)	深さ 主軸方向 (方形のもの)			
1号土壌 第336図	I 区 C-18・19	楕円形	0.89×0.68	0.87	32A・B号住 と接する。		柱穴痕の可能性あり。
2号土壌 第336図	I 区 F-18	円形	1.95×1.94	1.24			
3号土壌 第336図	I 区 C-20、D-20	円形	0.75×0.73	0.63		礫3	
4号土壌 第332図	I 区 D-21・22	円形	0.95×0.85	0.42		骨片、土師小皿 3、陶器香炉1	墓塚と思われる。
5号土壌 第332図	I 区 E-22	(方形)	(1.25)×(0.95)	(0.10)		土師小皿2、永 楽通宝6	墓塚と思われる。
6号土壌 第336図	I 区 B-23	隅丸長方形	3.74×0.90 N-10°-W	0.45	48号住居跡を 切る。		
7号土壌 第336図	I 区 G-18	長方形	1.55×0.62 N-17°-E	0.30	42A・B号住 居跡を切る。		
8号土壌 第336図	I 区 G-18・19	長方形	1.50×0.63 N-18°-E	0.16	42A・B号住 居跡を切る。		
9号土壌 第336図	I 区 A-12・13	不整円形	1.83×1.55	0.15	6号住居跡 新旧不明。		
10号土壌 第332図	I 区 C-21	不整楕円形	1.10×0.65	0.36	38号住居跡を 切る。	骨片、土師皿2 陶器皿1、永楽 通宝6	墓塚と思われる。
11号土壌 第336図	I 区 E-11	(方形)	2.50×2.05	0.33			当初住居跡と考えられたが、検 討後に土壌に変更。
12号土壌 第336図	I 区 F-14	長方形	2.17×0.73 N-12°-E	不明	20号住居跡		
13号土壌 (欠番)							6号住居跡ビットP ₁ に変更。
14号土壌 第322図	II 区 D-1	円形	1.32×1.18	0.42		縄文土器(加曾 利E4)	
15号土壌 第337図	II 区 C-1	円形	1.05×1.00	0.59			
16号土壌 第337図	II 区 E-2	隅丸長方形	3.42×1.00 N-82°-W	0.48	方形周溝墓南 東溝		西半部は深さ10cm程の段を呈す るが土壌の重複か。
17号土壌 第337図	II 区 F-3	隅丸長方形	1.97×1.05 N-78°-W	0.74			
18号土壌 第337図	II 区 E-3	隅丸長方形	2.26×0.98 N-76°-W	0.66			

第V章 検出された遺構と遺物

土壌No. 図 No.	位置	平面形態	規模 (m) 長径(辺)×短径(辺) 深さ 主軸方向 (方形のもの)	重複遺構 新旧関係	出土遺物	備考
19号土壌 第337図	II 区 D-4、E-4	隅丸長方形	1.90×1.27 0.79 N-90°-W			16号土壌、17号土壌、18号土壌 と規模、主軸方向、土層ともほ ぼ近似し、同様の性格のものか。
20号土壌 第322図	II 区 D-3	円形	1.40×1.25 0.36		縄文土器 (加曾 利E4式) 礫	
21号土壌 第322図	II 区 D-3	円形	0.84×0.80 0.14			
22号土壌 第337図	II 区 D-4、E-4	楕円形	1.05×0.85 0.64			
23号土壌 第337図	II 区 D-4	(長方形)	1.95×(1.10) 0.43 N-65°-W	24号溝を切る 25号溝は不明		
24号土壌 第337図	II 区 D-4	不明		23号土壌、25 号土壌		
25号土壌 第337図	II 区 D-4	不明		23号土壌、24 号土壌		
26号土壌 第322図	II 区 B-3	楕円形	2.74×1.95 0.30		縄文土器 (加曾 利E4式) 礫	円形土壌の重複の可能性あり。
27号土壌 第322図	II 区 D-6	楕円形	1.75×1.62 0.34	方形周溝墓北 西溝、新旧不 明	縄文土器 (型式 不明)	
28号土壌	II 区 B-10	円形	1.25×1.13 0.43			
29号土壌 第337図	II 区 C-14、D-14	不整楕円形	1.53×1.00 0.29			
30号土壌 第337図	II 区 E-14・15	不整楕円形	1.90×1.55 0.57	5号溝 新旧不明		攪乱溝か。
31号土壌 第326図	II 区 B-15	不整方形	1.63×1.15 0.56		土師器片 (甗の 可能性有。鬼高 期)	
32号土壌 第338図	II 区 B-17	(長方形)	1.13×(0.56) 0.38	33号土壌 新旧不明		
33号土壌 第338図	II 区 B-17	円形	0.70×0.68 0.63			
34号土壌 第338図	II 区 B-18	円形	0.80×0.66 0.10		土器片 (時期不 明)	
35号土壌 第338図	II 区 C-17	長方形	1.80×0.60 0.46 N-75°-W			
36号土壌 第338図	II 区 D-17	隅丸長方形	1.12×0.60 0.27 N-65°-E			

土壇No. 図 No.	位 置	平面形態	規 模 (m)		重複遺構 新旧関係	出土遺物	備 考
			長径(辺)×短径(辺)	深さ 主軸方向 (方形のもの)			
37号土壇 第338図	II 区 D-19・20 E-19・20	不整楕円形	2.72×2.50	0.69			
38号土壇	II 区 B-20	不定形	1.60×1.17	0.65			攪乱墳か。
39号土壇 第338図	II 区 B-22 C-22・23	長方形	3.85×0.63 N-14°-E	0.27			
40号土壇 第338図	II 区 C-21	円形	1.66×1.54	0.40			
41号土壇 第338図	II 区 C-2 2	楕円形	1.76×0.97	0.30			
42号土壇 第339図	II 区 F-22	(長方形)	3.93×1.00 N-10°-E	0.75			
43号土壇 第326図	II 区 G-24、H-24	長方形	3.20×1.90 N-10°-W	0.29	74号住居跡 に切られる。	杯(鬼高期) 碗(平安)長頸壺	当初住居跡と考えられたが検討 後に土壇に変更。
44号土壇 第326図	II 区 G-24・25 H-24・25	方形	0.85×0.81 N-63°-E	0.67	74号住居跡 に切られる。	杯、甕(鬼高期)	
45号土壇 第339図	II 区 E-23	楕円形	1.03×0.74	0.26			
46号土壇 第339図	II 区 E-24	楕円形	1.04×0.83	0.31			
47号土壇 第339図	II 区 C-22・23	円形	1.10×0.97	0.16			
48号土壇 第339図	II 区 B-25	円形	1.08×1.06	0.33	73号住居跡 新旧不明		
49号土壇 第339図	II 区 G-25	不整楕円形	1.18×0.86	0.31			
50号土壇 第339図	III 区 F-1・2	楕円形	0.70×0.60	0.11	79号住居跡 新旧不明		
51号土壇 第339図	III 区 E-3	円形	0.95×0.90	0.40			
52号土壇 第339図	III 区 F-2	楕円形	1.08×0.86	0.26			
53号土壇 第339図	III 区 F-3、G-3	楕円形	1.18×0.78	0.30			
54号土壇 第339図	III 区 H-5	不整円形	1.02×0.94	0.52			

第V章 検出された遺構と遺物

土壇No. 図 No.	位置	平面形態	規模 (m) 長径(辺)×短径(辺) 深さ 主軸方向 (方形のもの)	重複遺構 新旧関係	出土遺物	備考
55号土壇 第339図	Ⅲ区 H-6	円形	1.06×0.98 0.10			
56号土壇 第340図	Ⅲ区 G-7、H-7	長方形	1.58×0.64 0.17 N-4'-E	90号住居跡を 切る。		
57号土壇	Ⅲ区 I-6					早川河川改修地域調査分
58号土壇	Ⅲ区 L-12					早川河川改修地域調査分
59号土壇	Ⅲ区 L-11・12					早川河川改修地域調査分
60号土壇	Ⅲ区 O-15					早川河川改修地域調査分
61号土壇	Ⅲ区 K-17、L-17					早川河川改修地域調査分
62号土壇	Ⅲ区 J-17・18					早川河川改修地域調査分
63号土壇	Ⅲ区 J-23					早川河川改修地域調査分
64号土壇	Ⅲ区 J-24					早川河川改修地域調査分
65号土壇	Ⅲ区 I-24、J-24					早川河川改修地域調査分
66号土壇 第169図	Ⅲ区 H-24、I-24	長方形	0.96×0.58 不明 N-9'-E	152号住居跡 を切る。		
67号土壇 第340図	Ⅲ区 F-16	卵形	1.10×0.95 0.31		土器片 (時期不明) 数点	
68号土壇 第340図	Ⅲ区 D-23・24 E-23・24	不定形	1.90×1.40 0.30	187号住居跡 を切る。	土器片 (時期不明) 数点	
69号土壇 第340図	Ⅳ区 B-3、C-3	不定形	3.10×2.58 0.22		土器片 (時期不明) 数点	数基の土壇が重複している可能性 がある。
70号土壇 第340図	Ⅳ区 D-2、E-2	(長方形)	3.33×1.51 0.17 N-25'-E	193A・B号住 居跡を切る。		
71号土壇 第328図	Ⅳ区 F-1・2 G-1・2	不定形	(5.13)×(4.33) 0.18	154・155号住 居 新旧不明	杯、甕、椀 (平安)、 埴輪片	住居跡掘形が複数の土壇の重複 した可能性がある。
72号土壇 第328図	Ⅳ区 C-2・3	楕円形	1.60×0.97 0.22		甕 (平安)	

第V章 検出された遺構と遺物

土壌No. 図 No.	位 置	平面形態	規 模 (m)		重複遺構 新旧関係	出土遺物	備 考
			長径(辺)×短径(辺)	深さ 主軸方向 (方形のもの)			
73号土壌 第340図	IV 区 E-4・5	隅丸長方形	1.48×0.89	0.14 N-52°-W			
74号土壌 第328図	IV 区 G-5・6 H-5・6	(隅丸長方形)	3.19×(2.05)	0.28 N-77°-W	12号溝 新旧 不明	杯、碗、甕(平安)	当初住居跡と考えられたが検討後に土壌に変更。
75号土壌 第328図	IV 区 B-10	隅丸長方形	1.57×0.75	0.43	10号掘立柱建 築遺構	土器片(平安) 約25点	
76号土壌 第328図	IV 区 C-9、D-9	隅丸長方形	2.31×0.80	0.25 N-28°-E		土器片(平安) 約30点	
77号土壌 第324図	IV 区 F-11	(円形)	2.05×1.45	0.50	230号住居跡 に切られる。	土器片(弥生後 期、古墳時代初)	東側の掘り込みは風倒木痕の可能性 がある。
78号土壌 第340図	IV 区 E-11、F-11	円形	1.03×1.03	0.61	228号・231号 住居跡		
79号土壌 第329図	IV 区 F-16・17	楕円形	3.57×2.68	1.03	247号住居跡 新旧不明	土器片(平安)	中央部に楕円形の小ピットが掘 られ、2段になる。
80号土壌 第340図	IV 区 D-17・18 E-17・18	楕円形	2.07×1.39	0.89			
81号土壌	III 区 L-14						早川河川改修地域調査分
82号土壌 第329図	IV 区 F-2	円形	0.75×0.74	0.38		甕(平安)	

5 井戸跡

1号井戸跡 (第341図)

I区A-12、B-12グリッドに位置する。平面は歪んだ楕円形を呈する。上端規模は2.07×2.02m、深さは3.14mを測る。掘り込みはほぼ垂直で、底面は平坦。底面規模は径1.00×0.90mを測る。覆土上位から須恵器甕、灰釉皿、壺、甕等の土器片が出土する。6号住居跡と重複しており、床面の存在から新旧関係は1号井戸→6号住である。

2号井戸跡 (第341図、PL.14)

II区B-19グリッドに位置する。平面は楕円形を呈し、上端規模は1.01×0.77m、深さ1.20mを測る。掘り込みはほぼ垂直と思われるが、南壁がややオーバーハングする。底面は「擂鉢」状を呈し、規模は0.5×0.3mを測る。遺物は出土していない。形態から柱穴に近い性格を持つ可能性もある。

3号井戸跡 (第341図)

III区I-20グリッドに位置する。平面は歪んだ楕円形を呈し、上端規模は2.31×1.85m、深さ0.79mを測る。掘り込みは台形状で、中央部に径50×35cm、深さ12cm程の小ピットがある。遺物は出土していない。

4号井戸跡 (早川河川改修地域調査分)

5号井戸跡 (第341図)

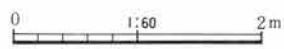
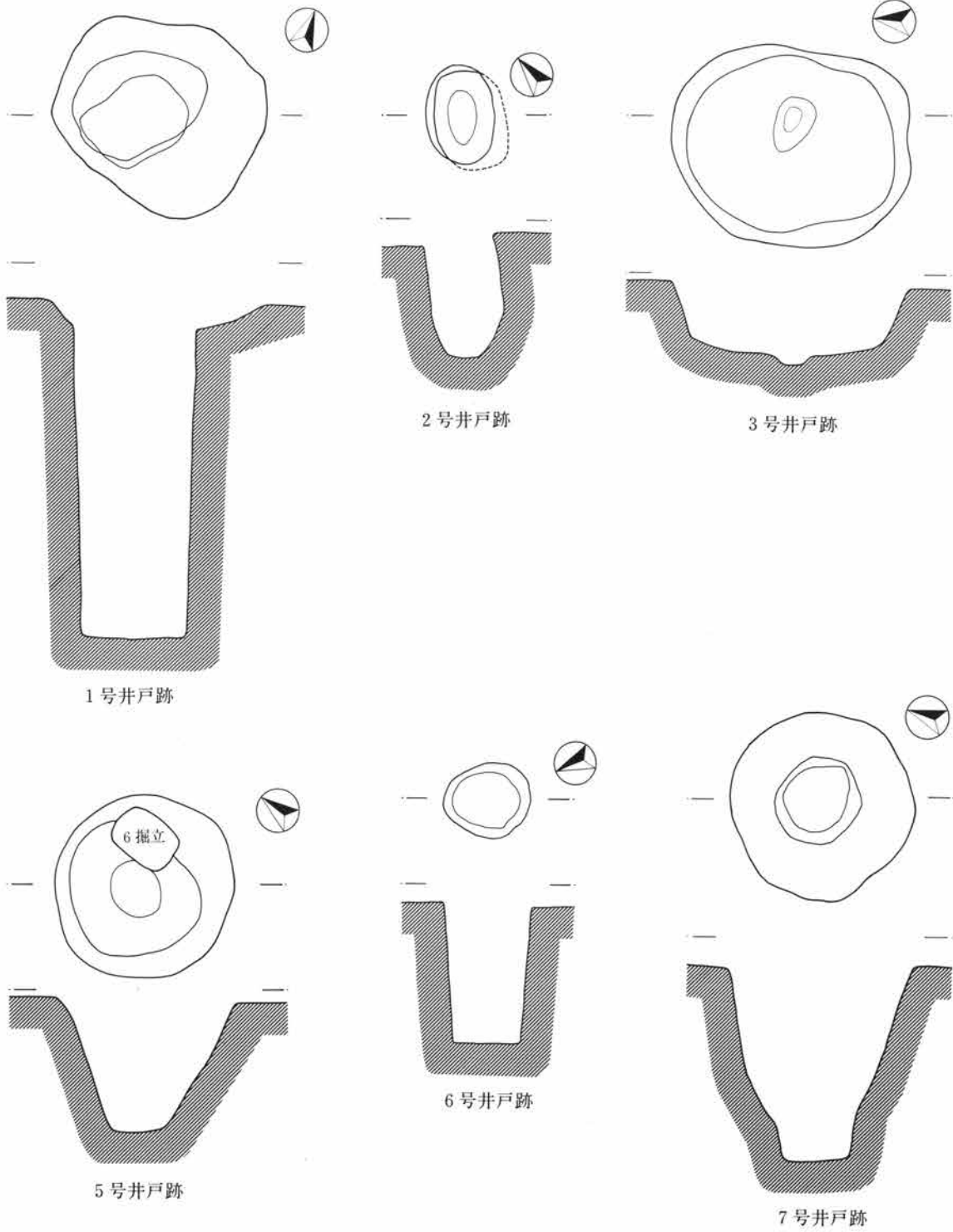
III区H-19、I-19グリッドに位置する。平面はほぼ円形を呈し、上端規模は径1.75m、深さ1.27mを測る。掘り込みは逆台形状で、底面は平坦である。底面規模は径55cmを測る。遺物は出土していない。なお6号掘立柱建築遺構の柱穴と重複しているが、新旧関係は不明であった。深さがやや浅く形態上からは井戸よりむしろ柱穴的な性格を持つ可能性がある。

6号井戸跡 (第341図、PL.14)

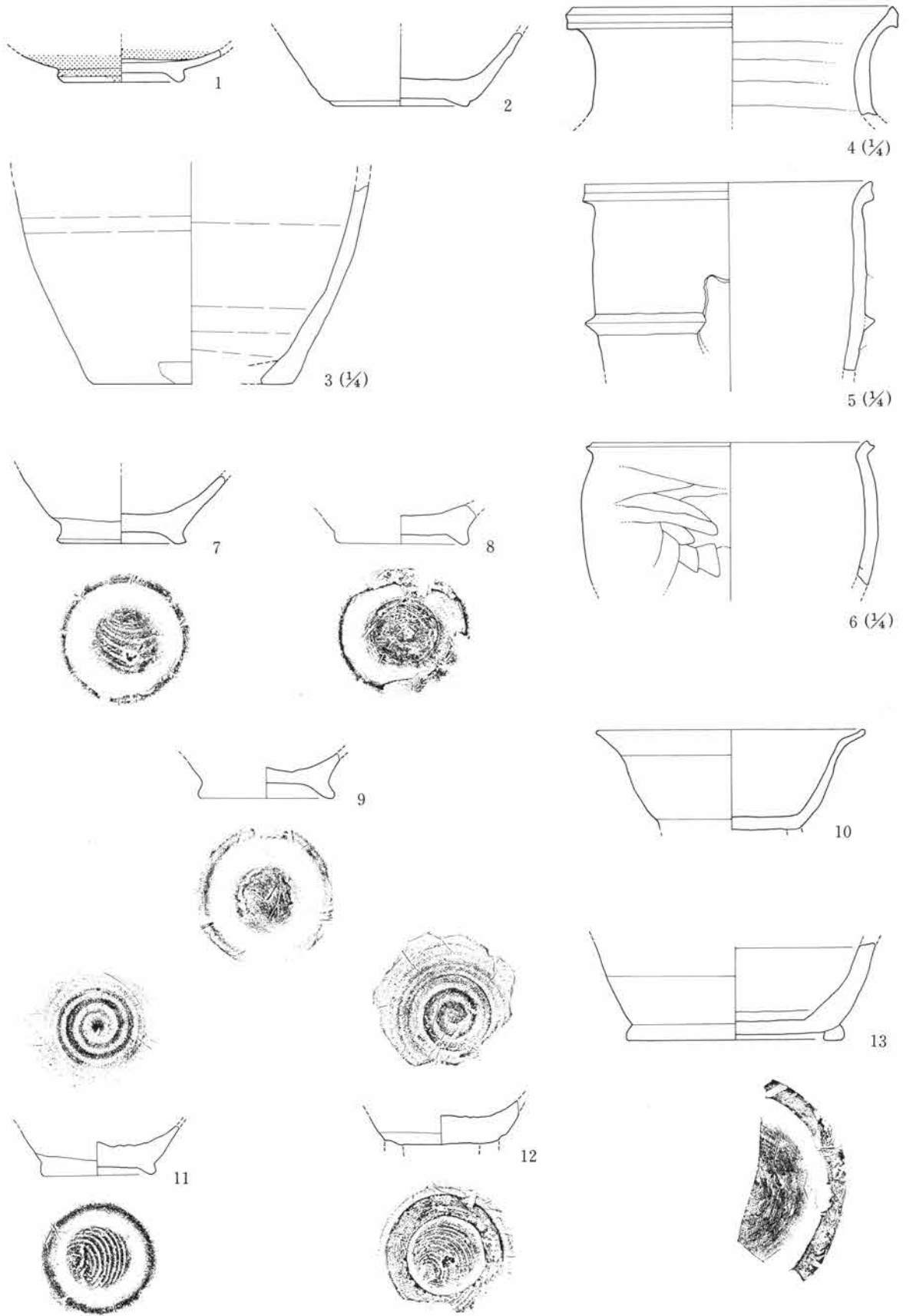
IV区G-9グリッドに位置する。平面は楕円形を呈し、上端規模は0.86×0.69m、深さ1.38mを測る。掘り込みはほぼ垂直で、底面は平坦である。底面規模は径60cm前後を測る。覆土は最下層に黒色砂質土、中層にロームブロックを多量に含む黒色砂質土、上層に浅間B軽石を含む褐色土が堆積している。遺物は出土していない。重複する遺構はないが、東側で165号住居跡と10cm程で隣接している。

7号井戸跡 (第341図、PL.14)

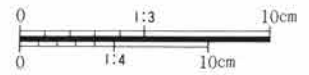
IV区C-14グリッドに位置する。平面は円形を呈し、上端規模は1.70×1.37m、深さ1.80mを測る。掘り込みは下半まで逆台形状で、底部付近がほぼ垂直になっている。底面はほぼ平坦であり、規模は径60cmを測る。逆台形部分は地山の崩落によるかあるいは人為的なものかは判断できない。覆土は最下層に灰褐色砂質土、中層はロームブロックと黄褐色土の互層、上層はローム粒と焼土粒を含む暗褐色土が堆積する。遺物は高台付椀、須恵器壺等が出土している。重複する238号住居跡を切っている。時期は平安時代以降と思われる。



第341図 井戸跡



第342図 井戸跡出土遺物



井戸跡出土観察表

図 No. 写真図版No	土器種 器 形	出 土 位 置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
第342図-1	灰 釉 皿	1 号 井 戸	底 (6.7) 底部約1/2破片	①緻密、黒色粒を含む ②灰白 ③良好	高台部外側に弱い稜をもつ。付高台。釉は刷毛塗りと思われ、色調は淡緑色で透明度が高い。	見込み部分に重ね焼きの痕跡が残る。
第342図-2	須 恵 高台椀	1 号 井 戸	底 (7.0) 下半部約1/2破片	①石英、白色粒を含む ②淡灰 ③還元、軟質	紐輪積成形か。低い高台で底部に丁寧なナデを施し切り離し痕を消す。ロクロ目をほとんど残さない。	器表面が荒れる。
第342図-3	須 恵 (壺)	1 号 井 戸	底 (14.0) 下半部約1/4破片	①大粒の石英、長石を含む ②灰 ③還元、普通	紐輪積後ロクロ整形か。内外面共横ナデ。底面へラケズリ。	
第342図-4	須 恵 壺	1 号 井 戸	口 (25.7) 口頸部約1/8破片	①大粒の砂粒を多く含む ②器内一紫、器面一黒 ③酸化気味	紐輪積。内外面共横ナデ。	
第342図-5	須 恵 甌	1 号 井 戸	口 (22.3) 口縁～体部上半約1/5破片	①大粒の白色鉱物(長石等)を多く含む ②暗灰 ③還元、硬質	紐輪積。内外面共横ナデ。体部上半に断面三角形の鐙を廻らす。	体部上半に把手をつけた痕跡あり。
第342図-6	土 師 甕	1 号 井 戸	口 (22.3) 口縁～体部上半約1/8破片	①大粒砂粒(径5mm)を多く含む ②淡赤褐 ③酸化、やや軟質	紐輪積。外面下半は縦、上半は横方向のへラケズリ。内面ナデ。口唇部はナデによる凹線を廻らす。	
第342図-7	須 恵 高台椀	7 号 井 戸	底6.7 口縁～体部上半欠	①小砂粒を含む ②淡灰 ③還元、軟質	ロクロ整形。回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	
第342図-8	須 恵 高台椀	7 号 井 戸	底7.0 底部破片 高台の一部欠	①小砂粒を含む ②淡灰 ③還元、軟質	ロクロ整形と思われる。見込み部は丁寧なナデ。底部回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	底面に繊維状のものゝの圧痕あり。
第342図-9	須 恵 高台椀	7 号 井 戸	底7.1 底部破片	①輝石、カクセン石等黒色鉱物が目立つ ②灰～灰白 ③還元気味軟質	ロクロ整形。見込み部中心は盛り上がる。底部回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	
第342図-10	須 恵 高台椀	7 号 井 戸	口(14.0)高(5.5) 体部約2/3と高台部欠	①小砂粒を含む ②灰 ③還元、普通	右回転ロクロ整形。口縁部は大きく外反しやや肥厚する。底部回転糸切り後ほぼ全面をナデ。	
第342図-11	須 恵 高台椀	7 号 井 戸	底6.1 底部破片	①赤色酸化鉄粒を含む ②黒～灰白 ③酸化気味、やや軟質	右回転ロクロ整形。見込み部はロクロ目を明瞭に残す。底部回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	
第342図-12	須 恵 高台椀	7 号 井 戸	高台部を欠く底部破片	①赤色酸化鉄粒を含む ②器内一黒灰、器表一淡褐 ③酸化、軟質	右回転ロクロ整形。見込み部はロクロ目を明瞭に残す。底部回転糸切り後付高台後周辺部横ナデ。	
第342図-13	須 恵 壺	7 号 井 戸	底 (11.3) 体部下半～底部約1/3破片	①大粒の長石粒を含む ②灰黒 ③還元、硬質良好	紐輪積後ロクロ整形か。内外面にロクロ目様のナデ痕が残る。底部回転へラケズリ調整?後付高台後周辺部ナデ。	内面底部に自然釉がかかる。

6 溝

1号溝 (第345図)

II区D-11、E-11、C-12グリッドで検出された。N-50°~60°-Eを指して走向する。北東端は3号溝に入り、南西端は2号溝に合流する。上端幅は38cm~20cm程で、深さは10cm前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。遺物は出土しておらず、時期は不明。2号溝とほぼ併行して走り、これに合流するような重複関係を示している事から、1号、2号溝はほぼ近似した時期の同一性格を有するものの可能性がある。

2号溝 (第345図、PL.13)

II区B-12、C-12、D-12、E-12グリッドで検出された。N-40°~60°-Eを指して走向しDグリッドライン付近で屈曲する。北東端は3号溝と重複し、南西端は調査区外に延びるため不明。上端幅は、南西端で最も広く1.15mを測り、他は65~40cm前後を測る。深さは平均的に20~30cmを測る。断面形状は箱形を呈する。覆土は細砂を多量に含む灰褐色土が堆積する。遺物は出土しておらず、時期は不明。

3号溝 (第345図、PL.13)

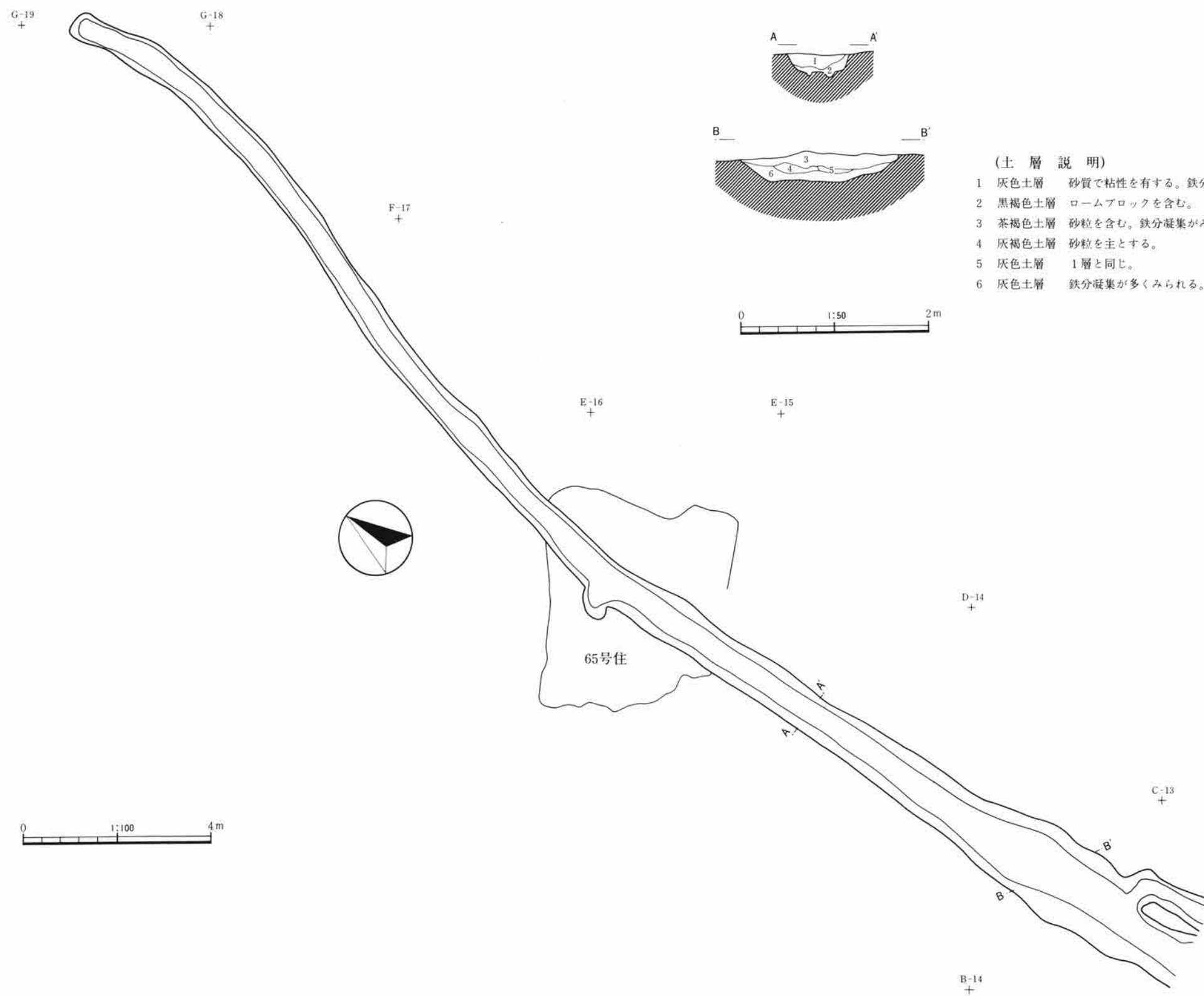
II区B-12、C-12、D-12、E-11・12グリッドで検出された。N-70°-E、N-40°-Eを指して走向し、D-12グリッドで屈曲する。北東端は早川崖に落込み、南西端は調査区外のため不明。上端幅は2.0~1.2m程を測る。深さ70cm前後で、断面は薬研堀の形状を呈する。南西より東方向へ傾斜している。遺物は底面及び覆土より鬼高期の杯、平安時代(10世紀以降と思われる)の甑、埴輪等が出土している。周辺には住居跡が検出されず、重複遺構は溝及び時期不明の攪乱墳である事から、出土遺物は廃棄されたものと考えられよう。時期は平安時代以前ととらえておきたい。

4号溝 (第343図、PL.13)

II区B-13、C-14・15、D-16、E-16・17、F-17・18グリッドで検出された。ほぼ南北方向に走向する。G-18グリッド付近でその北端が終結する。南端は調査区外になるため不明である。上端幅は1.65m~0.50mで、深さは30~12cm程を測る。断面形状は深皿状を呈する。覆土には砂利層が堆積する。重複遺構は65号住居跡で、新旧関係は不明である。遺物は住居跡との重複付近から破片が出土しているが、これは65号住居跡に属するものであろう。

5号溝 (第346図、PL.13)

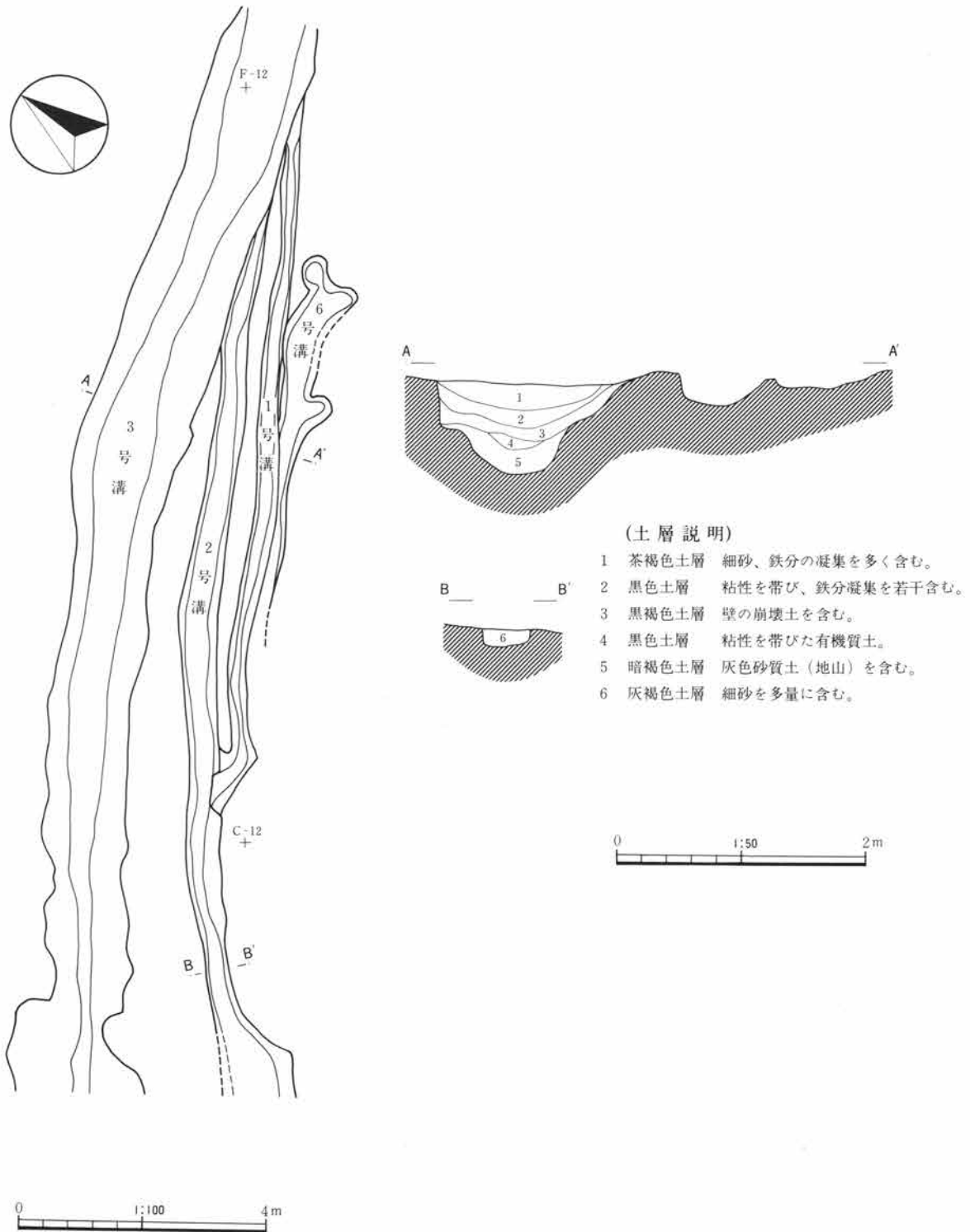
II区D-13・14、E-14・15、F-15グリッドに位置する。ほぼ南北方向でN-10°前後-Eを指して走向する。北端は早川崖、南端は攪乱墳によって切られており形状や走向は不明となっている。上端幅は1.4m前後で深さは10cm前後を測る。断面形は浅い皿状を呈する。覆土には浅間山噴出の軽石(天明三年)を含んでいる。出土遺物はない。なお30号土壇と重複しているが、新旧関係は不明であった。時期は近世以前のものと思われる。4号溝とほぼ並行に走っているが、覆土や断面形状の相違から、両者は異なる時期のものとして推定される。しかし同一地形面にほぼ同一方向で構築されている事から、機能的に両者が近似する性格をもっていた可能性も考えられる。



第343図 4号溝



第344图 9号·10号·11号·12号沟



第345図 1号・2号・3号・6号溝

6号溝 (第345図)

II区D-11、E-11グリッドで検出された。東端部はやや屈曲してE-11グリッドで終結する。南西端は1号溝に並走しながらD-11グリッドで消滅する。上端幅は30~25cm、深さ5cm程を測るが、大部分は削平されており、本来の断面形状、深さ、幅等は明らかにしえない。1号溝と一部重複するが、新旧関係は不明であった。出土遺物はなく、時期は不明である。1号溝、2号溝と近似した性格をもつかもしいない。

7号溝 (第347図)

II区G-20・21、H-21・22グリッドに位置する。北端は早川崖によって切られ、南端はG-20グリッドポイント付近で終結する。ほぼ南北方向(N-5°-E)を指して走向する。上端幅は50cm前後、深さ12.5cm前後を測る。断面形状は皿状あるいは箱状を呈している。54号住居跡、64号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。遺物はなく時期は不明である。

8号溝 (早川河川改修地域調査分)

9号溝 (第344図)

III区G-21・22、H-22、I-23、J-24グリッドで検出された。北端は10号溝に流入し、南端はF-21グリッド付近で消滅する。N-9°-Eを指して走向する。上端幅は80~55cm、深さ8cm前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。127号住居跡、7号掘立柱建築遺構と重複するが、新旧関係は不明であった。10号溝との関係は同時期における同一性格をもったものであるか、あるいは時期、性格の全く異なるものであったかは判別できなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

10号溝 (第344図)

IV区B-5・6、C-5、E-3・4、F-3、G-1・2、H-1グリッドで検出された。東端は早川河川改修地域調査区までそのまま延び、早川崖で切られる。西端はB-6グリッド付近で調査区外にはずれる。N-82°-Eを指してほぼ東西方向に走っている。上端幅は2.2~0.5m、深さ20cm前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。覆土は暗褐色土が堆積する。遺物は出土していない。重複遺構は155号住居跡、208号住居跡、200号住居跡等で、これらとの新旧関係は土層観察から住居跡より新しい可能性も考えられるが、確実な新旧関係を裏づけるような証拠は得られなかった。なお、E-2・3グリッド付近で本溝より直行して分岐する幅40cm前後の小溝が検出された。これは走向がほぼ南北方向で、規模、形状の相似から9号溝と近似する性格をもつ可能性がある。

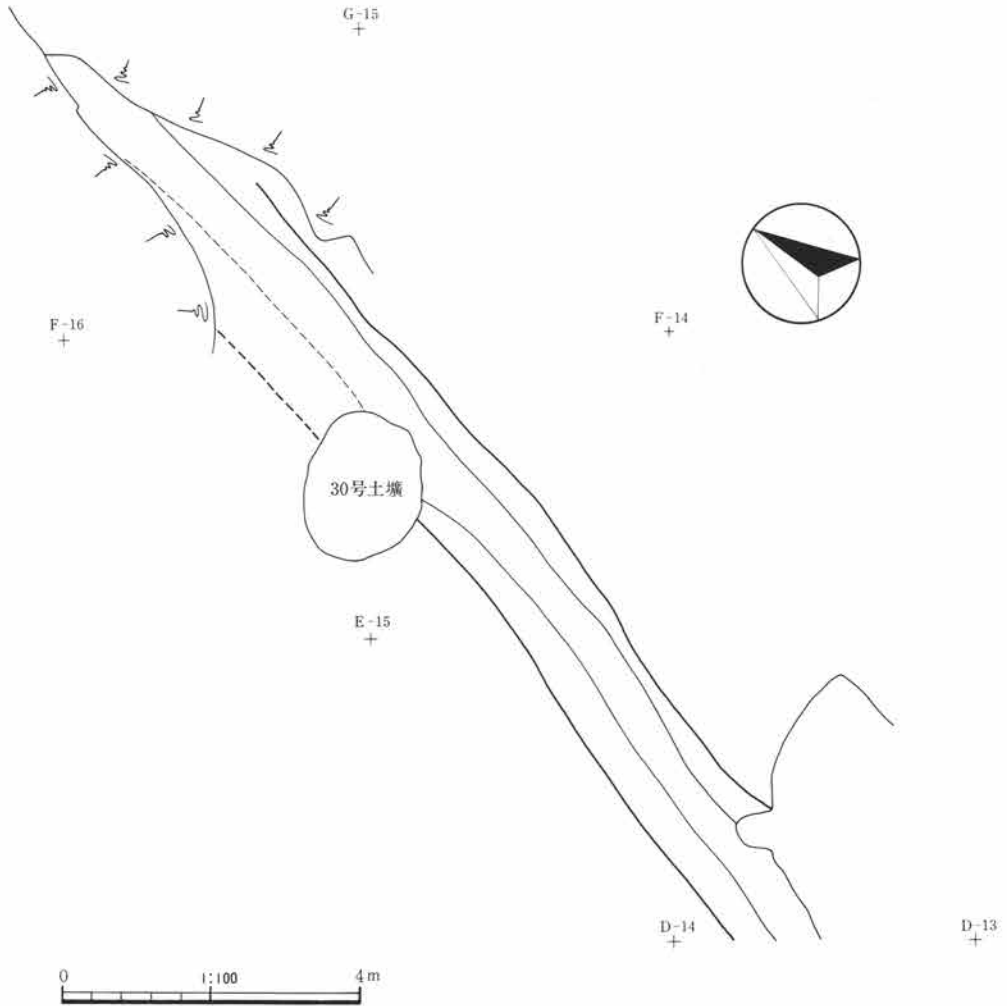
11号溝 (第344図)

IV区の10号溝の北側に接して検出された。10号溝とはほぼ並行して走る。上端幅は1.20~0.68m、深さは30cm前後を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。覆土は暗褐色土が堆積する。重複遺構は155号住居跡、156号住居跡、208号住居跡等で、新旧関係は不明であった。走向、断面形状、覆土、規模等の相似より10号溝とはほぼ同時期で同一性格の可能性が強い。出土遺物はなく、時期は不明である。

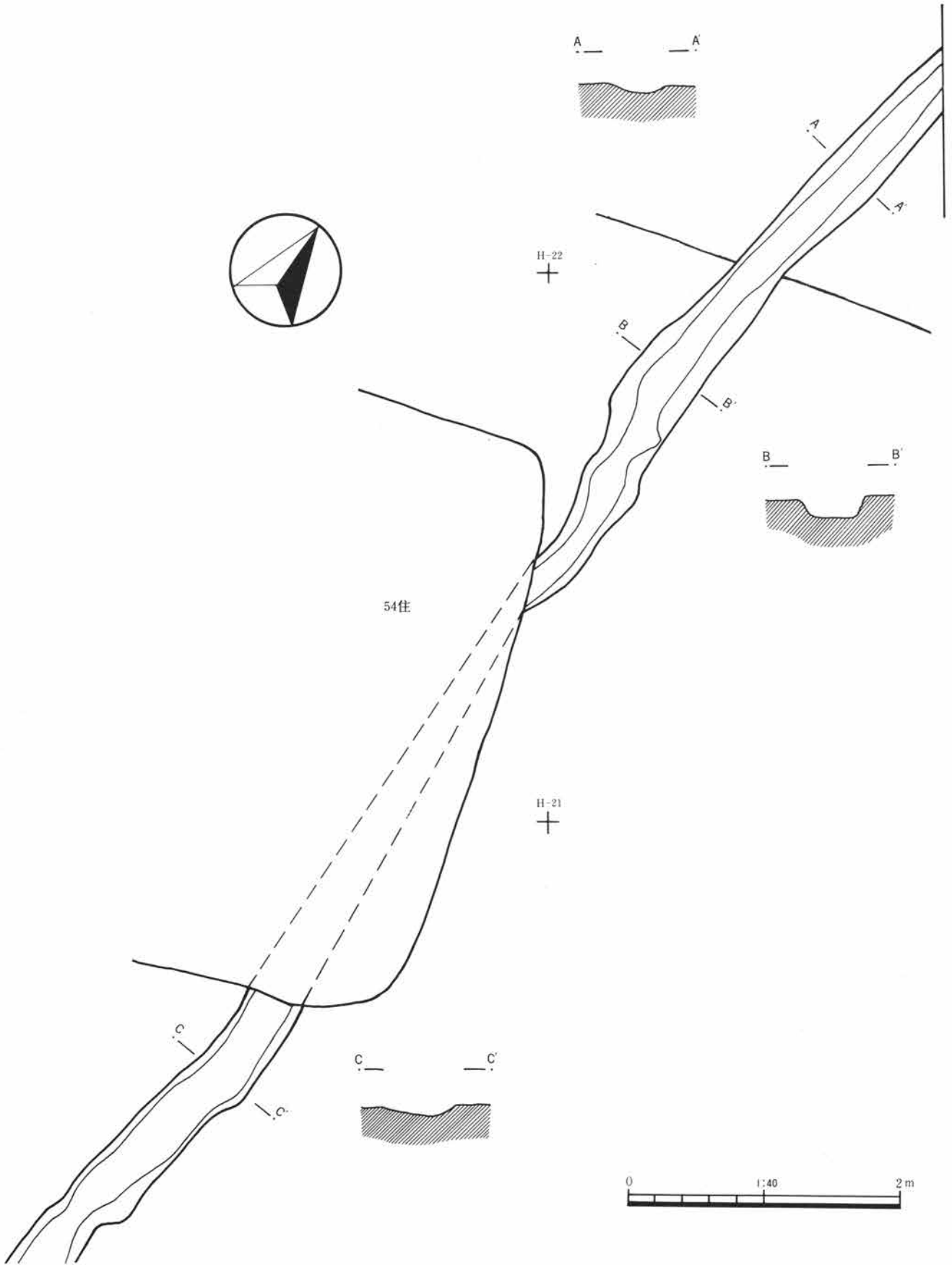
なお9~11号溝は土層と走向から近世以降の畑等に伴う区画溝の可能性が考えられるかもしれない。少なくとも水の流れた痕跡はないようである。

12号溝 (第344図)

IV区H-2・3・4・5、F-7、G-7・8、D-9・10・11・12グリッドで検出された。南東端はH-2グリッドで11号溝に合流し、D-12グリッドで終結する。H-5グリッド、E-7グリッド付近で屈曲しており、全体に蛇行して走る。上端幅は1.5~0.5m、深さ20cm前後を測る。断面形状は皿状を呈する。覆土には浅間噴出のB軽石(天仁元年と弘安4年説あり)が混入している。遺物は砥石1、紡錘車1、土錘8が出土している。他に土器片も出土したが、形態や時期は不明であった。重複遺構は158号住、159号住、209号住、210号住、211号住、212号住、213号住、216号住、223号住、232号住、74号土壙で、判明した新旧関係は158号住、223号住→12溝であった。出土遺物、覆土、重複関係より平安時代に属する可能性が考えられよう。性格については不明である。



第346図 5号溝



第347図 7号溝

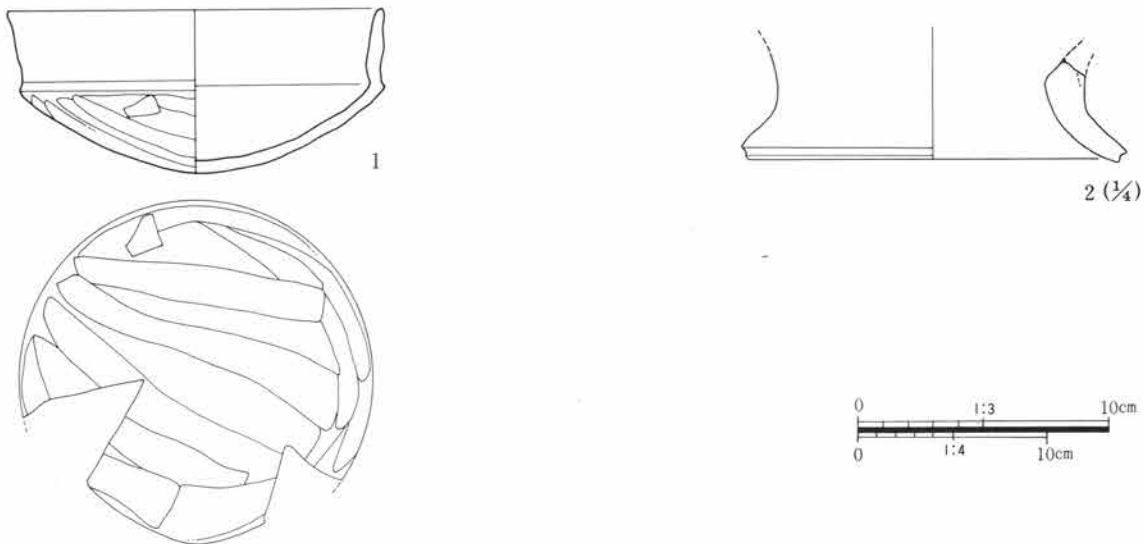
溝出土遺物（第348・349図、PL.43）

3号溝より鬼高期の杯、平安時代の甑、形象埴輪片が出土しており、前述の如く投棄された可能性がある。12号溝から出土した砥石、紡錘車、土錘は重複する住居跡からの流れ込みと考えられよう。従ってこれら出土遺物は本溝の時期を限定するものではないと考えられる。

砥石（第349図-1）は下半を欠く破片で、長さ9.12cm、幅4.26cm、厚さ2.86～0.96cmを測る。上端は面取りがなされている。石材は青灰白色を呈する目の細かい凝灰岩を用いている。使用面は表裏、両側面で、表面が最も使用されている。

紡錘車（第349図-2）は截頭円錐形を呈する半欠品である。下面直径は推定で4.5cm前後、高さは1.86cmを測る。中央孔の径は7.4mmを測る。孔内面に回転穿孔を推定させる横方向の擦痕が残る。なお上面孔口付近には放射状、側面には斜方向、下面には文字様の刻線がみられる。上下の縁辺部は使用痕と思われる磨滅が著しい。又中央孔内面には酸化鉄らしき物質の付着がみられるが、これは紡茎に鉄製品を使用したためかもしれない。石材は黒色でやや軟質の石を用いる。

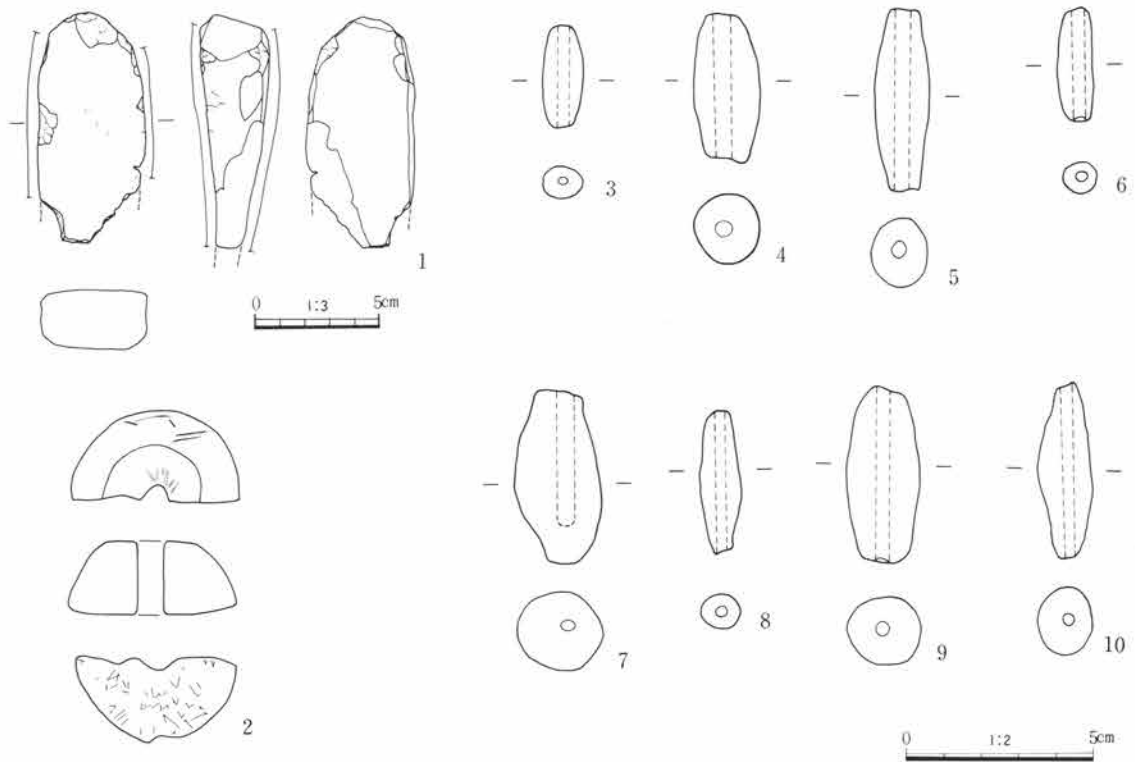
土錘は全て紡錘形を呈し、長さ5cm前後のものと3cm強のものほぼ大小2種がある。12号溝と重複する住居跡から比較的多く土錘が出土している事から、本溝出土のものはこれらの住居跡からの流れ込みの可能性が高い。



第348図 3号溝出土遺物

3号溝出土遺物観察表

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 口径・器高・底径 量 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 成形・整形の 法 特徴	備 考
第348図-1 PL.43	土師 杯	底	口(14.8) 高6.3 口縁～底部約1/4 欠	①砂粒を少量含む ② 黄褐 ③良好	口唇内側に平坦面をつくる。口縁と内 面横ナデ。底面周辺は同心円状、中央 は一方方向のヘラケズリ。	
第348図-1	土師質 甑	底	底20.2 胴部以上を欠。	①赤色酸化鉄粒、黒色 鉍物等を含む ②淡黄 褐 ③硬質、酸化焙	内外面とも横ナデ。外面一部に斜位ヘ ラナデ。	一部に赤斑がみら れ、二次的焼成を 受けた可能性有。



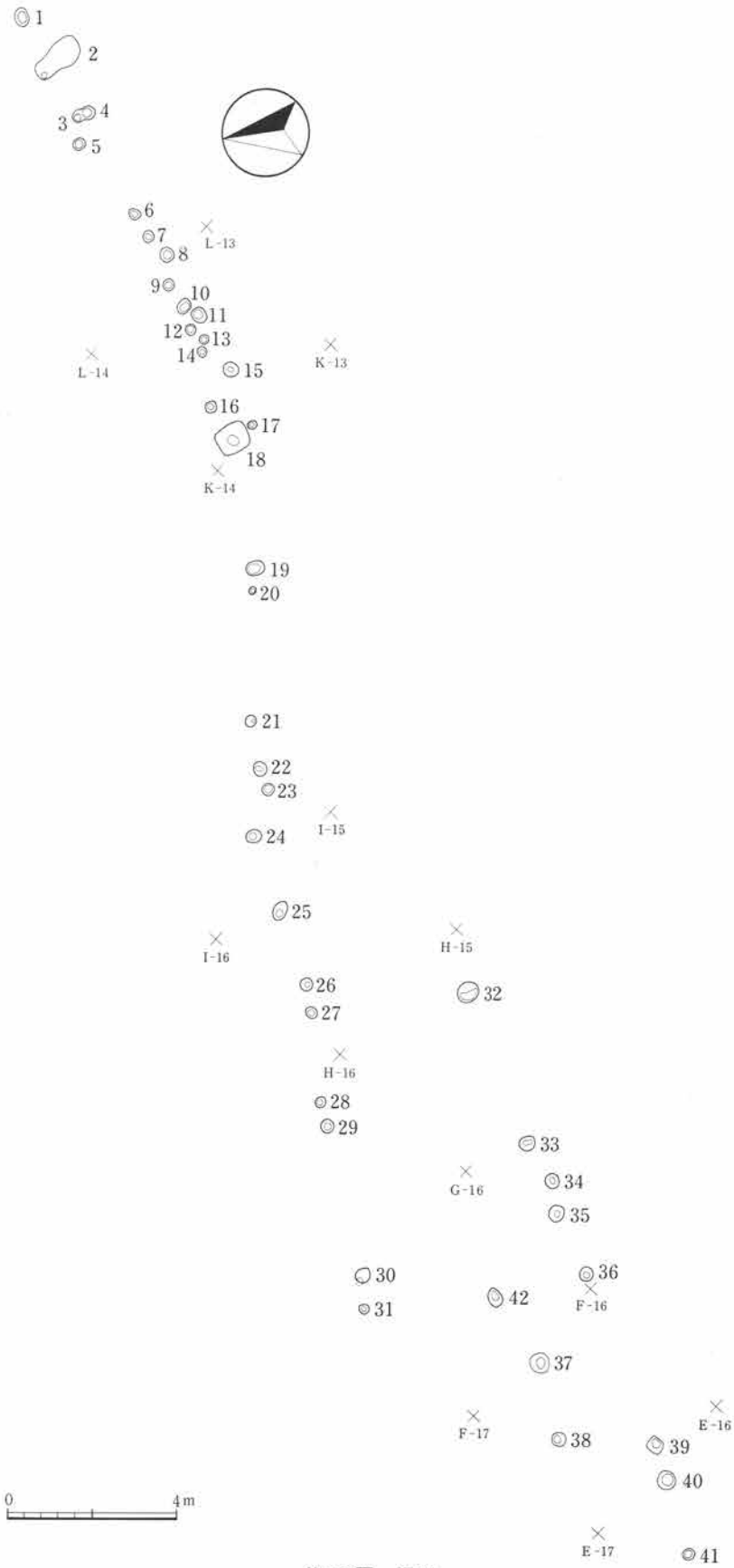
第349図 12号溝出土遺物

12号溝出土土錘一覧表

No.	出土位置	法量 (cm, g)			備考
		長さ	最大径	重量	
第349図-3	覆土	2.92	1.08	2.3	鉄分附着 中央孔貫通せず。 端部一部欠。
第349図-4	"	4.10	1.80	14.4	
第349図-5	"	5.09	1.48	9.6	
第349図-6	"	3.20	0.99	3.4	
第349図-7	"	4.86	2.42	21.5	
第349図-8	"	3.94	1.09	4.4	
第349図-9	"	5.00	2.09	19.3	
第349図-10	"	4.97	1.52	9.0	

7 柵列 (第350図、PL.13)

Ⅲ区D-15~M-13グリッドにかけて42基のピットが東北東から西南西方向に延びる。西側のF-16グリッド付近では列が乱れ、二重になる部分もみられる。ピットの規模は径50cm前後、深さ30~15cm程を測る。重複する170号住居跡との新旧関係は不明で、出土遺物もない事から時期は不明である。しかしその配列や位置より南東側の窪地と北西側の集落を画するものであった事は疑いなかろう。



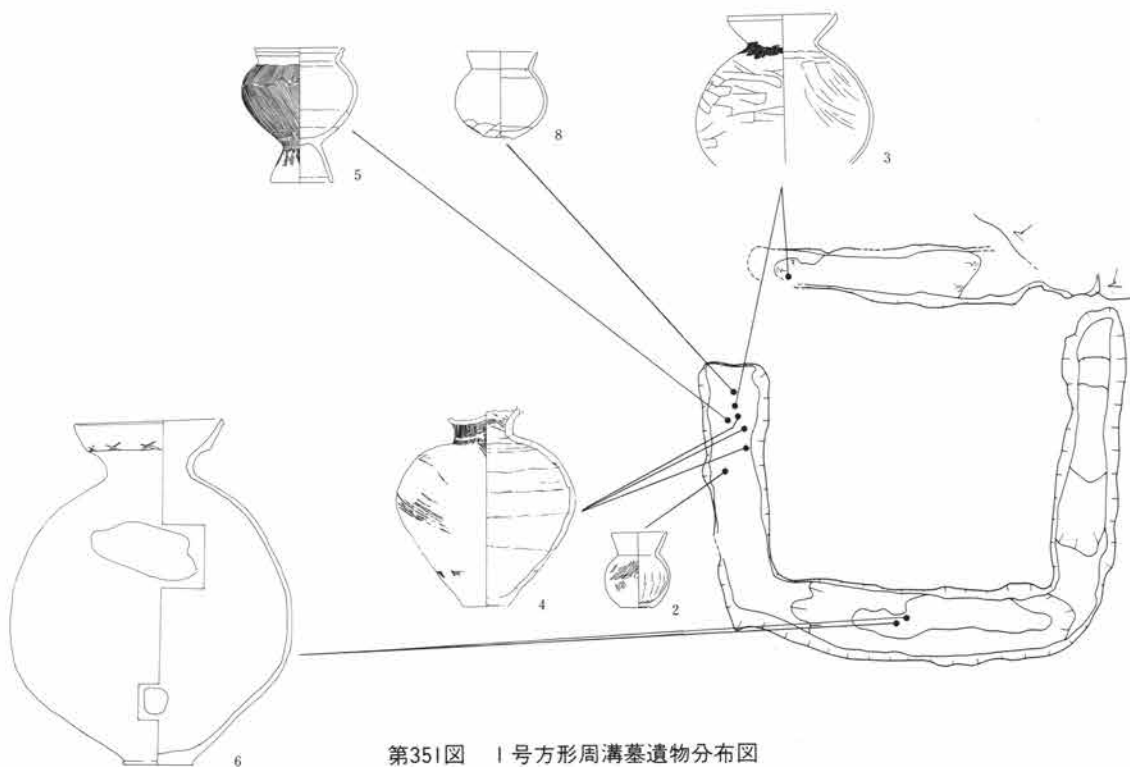
第350図 柵列

8 方形周溝墓

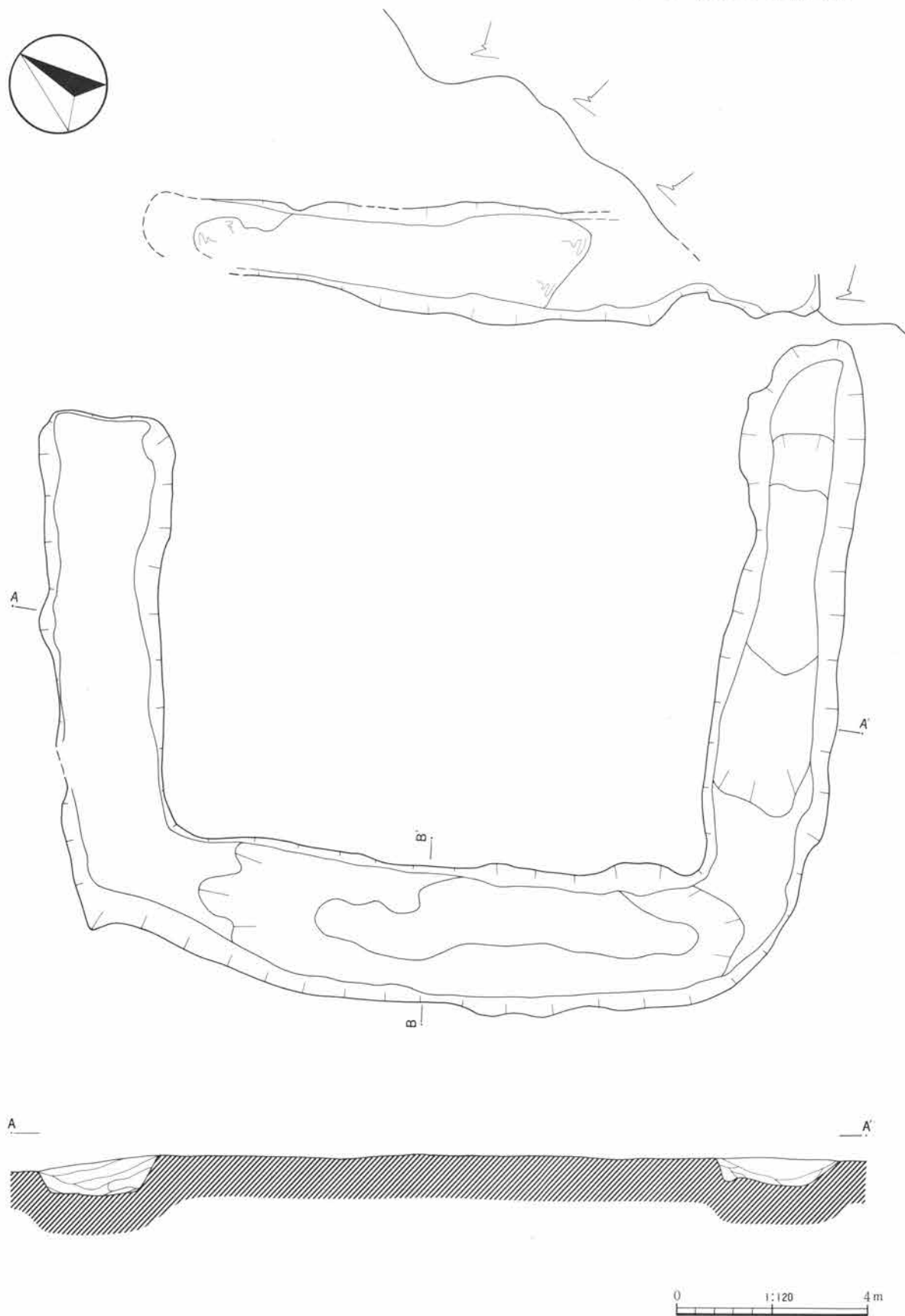
1号方形周溝墓（第351・352・353・354・355図、PL.13・42）

調査区の南東部、早川の浸食による崖際で一基が検出された。II区C-2～5、D-2～6、E-2～6、F-2～6、G-3～5グリッドに位置する。東端は崖で切られ、北端は近現代の道路により削平されている。平面は北側と東側のコーナー部にブリッジを持ち、北東溝が分離する形状を呈する。規模は、溝の外郭が16.3×16.4m、溝の内郭が12.2×11.2mを測る。主軸方向はN-58°-Eを指す。各溝の走向はほぼ直線状であるが、南東溝のみ外郭線が外側に弱い弧を描く。溝の幅は2.50m前後で、最大幅3.16m、最小幅2.14mを測る。コーナー部分はいずれも狭い。溝断面形は椀状で、両壁は急傾斜、底面は平坦な形状を呈する。覆土は下層にロームブロックを含む黒色砂質土及び黒色有機質土、中層に軽石（赤城山給源と思われるが時期は不明）を含む黒色砂質土、上層にロームブロックと浅間B軽石を含む褐色砂質土が堆積する。土層堆積状況からマウンドの存在が予想されたが、確認はできなかった。封土の流れ込みとしては溝覆土の上～中層が想定できる。なお中央部分に11基の土壙が検出されたが、これは主軸方向、形態、覆土等の検討より異時期のものと考えられ、本遺構に伴う主体部とは認められなかった。

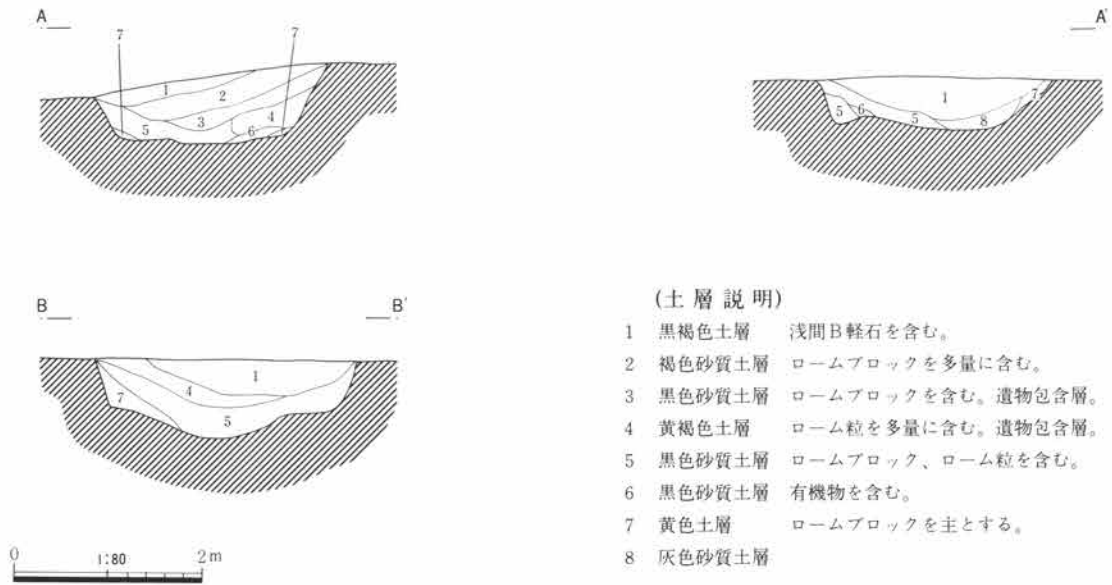
出土遺物は壺、埴、高杯、S字状口縁台付甕が出土しており、出土位置は南西溝中央部と北西溝に集中する。いずれも溝覆土中層下位から出土しており、これらの土器の埋没が溝の第1次堆積後であった事が知れる。壺は焼成後の穿孔や人為的な破碎と思われるもので、祭祀用としての性格が与えられよう。出土状態は埴が完形品で横転、壺は破損した破片が集中する状態であった。これらの土器の時期はいずれも古墳時代初頭のものであるが、形態や製作技法の特徴から所謂「石田川」期の中でも新しい段階に位置付けられる。



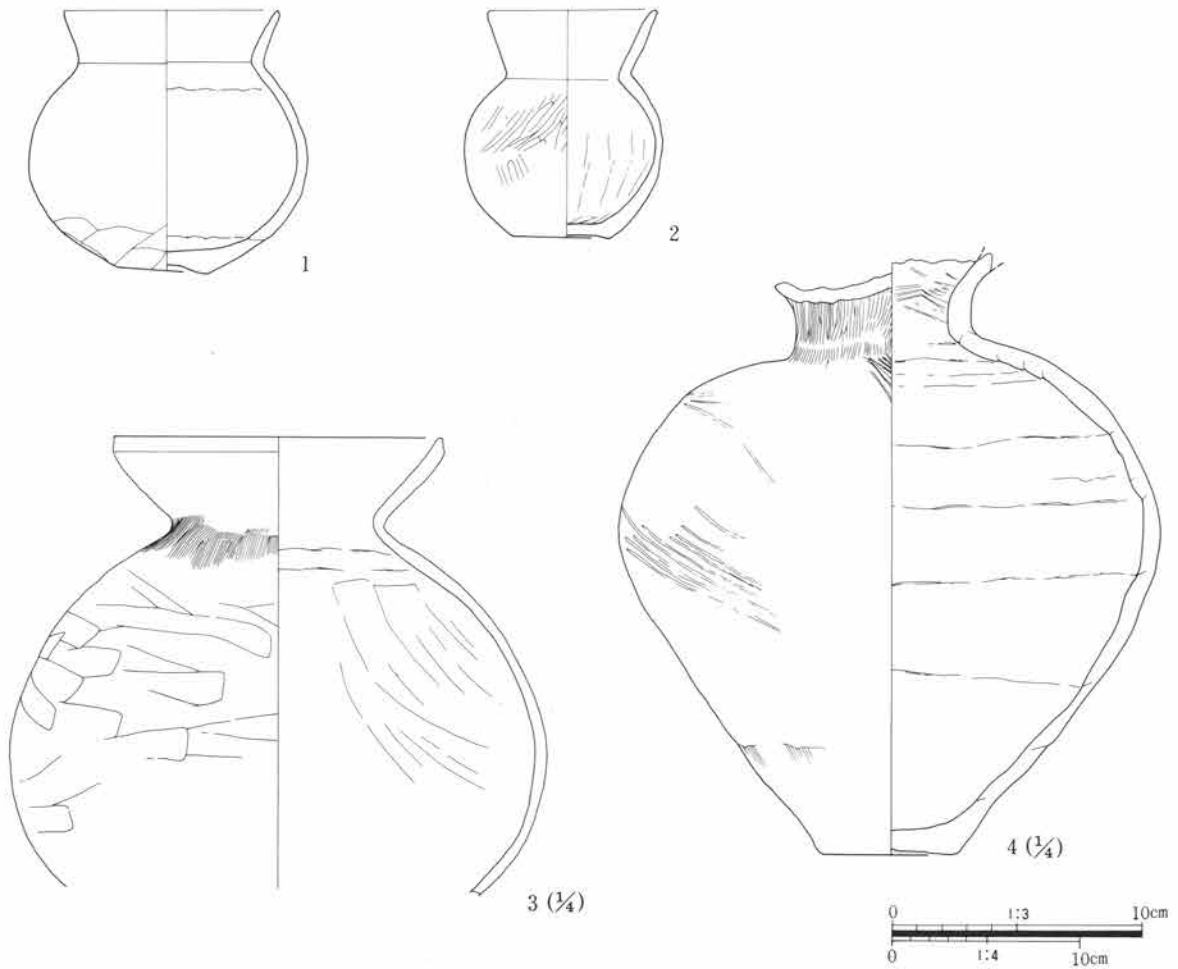
第351図 1号方形周溝墓遺物分布図



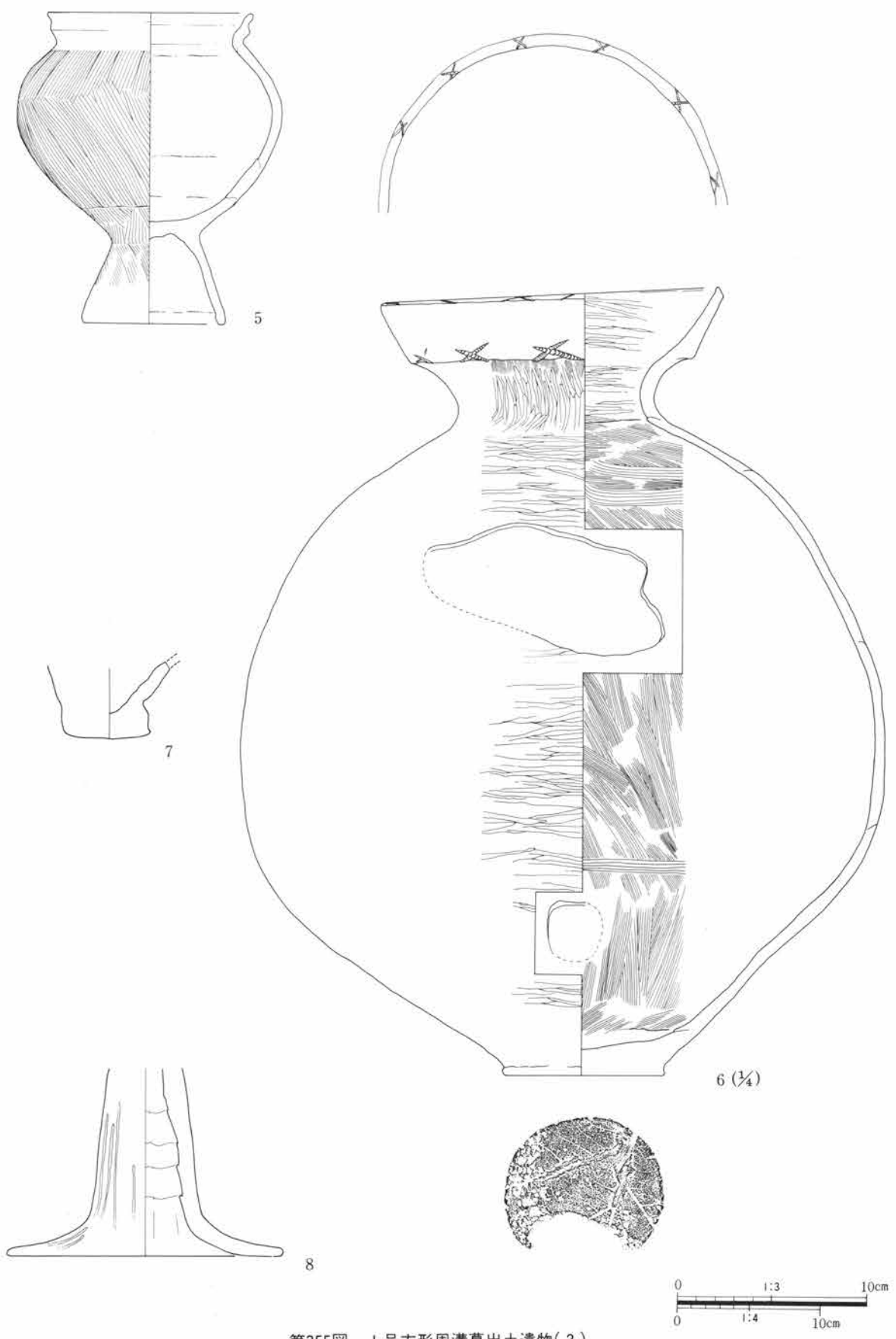
第352図 1号方形周溝墓



第353図 1号方形周溝墓断面図



第354図 1号方形周溝墓出土遺物(1)



第355図 1号方形周溝墓出土遺物(2)

1号方形周溝墓出土遺物観察表

図 No. 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第354図-1 PL.42-5	土師 埴	北西溝 第3層	口径8.7 高10.3 底4.1 口縁の一部を欠	①小砂粒(石英、長石 カクセン石等)を多く 含む ②淡灰褐～赤褐 ③良好、硬質	粘土紐積み上げ痕を残す。口縁～頸部 は横ナデ、胴部外面は縦方向の粗いヘ ラミガキ、胴部内面は篋状工具による ナデ、底部内外面はヘラケズリを施す。 底部はドーナツ状の上げ底を呈する。	底部外面のみ黒斑 が見られる。
第354図-2 PL.42-6	土師 埴	北西溝 第3層	口径6.5 高9.2 底4.0 完形	①小砂粒を含む ②黄 褐 ③良好、硬質	口縁はやや内湾し、底面はヘラケズリ で平底に成形。口縁は横ナデ、胴部内 面は横ヘラケズリ後ナデ、胴部外面は 斜及び縦方向のヘラミガキを施す。	
第354図-3 PL.42-1	土師 壺	北東溝 北西溝 第4層	口径17.3 胴下半部以下欠	①大粒砂粒を多く含む ②淡黄褐 ③普通	口唇部つまみ上げナデ、口縁～頸部内 外面はハケメ後横ナデ、胴部内面は斜 方向、胴部外面は横方向のヘラケズリ 後肩部付近を主体に粗いヘラミガキを 施す。	胴下半部の粘土紐 接合部以下が欠損 するが、焼成後底 部穿孔の可能性も ある。
第354図-4 PL.42-2	土師 壺	北西溝 第4層 底面	高(35.0)前後 底7.3 口縁部、胴部中位 の一部欠	①大粒砂粒を含む ② 黄褐～淡赤褐 ③普通	頸部の直立する有段口縁と思われる。 胴部は肩の著く張る「無花果」形を呈 する。頸部内面は横ハケメ後粗いヘラ ミガキ、頸部外面は縦ハケメ、胴部～ 底部内面は横ハケメ後ナデ、胴部外面 は条痕様の目の粗い工具による斜方向 ハケメ後斜方向ヘラミガキ、底面はヘ ラケズリを施す。	人為的な破砕の可 能性あり。
第355図-5 PL.42-4	土師 S字状 口縁甕	北西溝 底面	口径10.8 高16.3 底7.6 厚3mm 完形	①砂粒(石英、赤色酸 化鉄粒等)を含む ② 灰赤褐 ③良好	口縁部は2段階の横ナデ、胴部内面は 横ナデ後底部のみ砂粒の多い粘土の補 填ナデツケ、胴部外面は下半部を左上 →右下方向→脚部中位の3段階のハケ メ、その後頸部～上位を右上→左下へ ハケメを施す。工具の歯歯単位は9本 である。脚部内面は裾を折り返した後 ナデを施す。	胴の一部に赤色塗 彩らしき痕跡が残 るが明瞭ではない。
第355図-6 PL.42-3	土師 壺	南西溝、 第4層	口径24.2 高54.8 底11.3 胴部上位と下位の 一部欠	①小砂粒(カクセン石、 雲母等)を含む ②黄 褐 ③良好、硬質	有段口縁を呈し、口唇部つまみ上げ状 のナデ、口縁部内外面は丁寧な横ヘラ ミガキ、頸部内面は横ヘラミガキ、頸 部外面は縦ハケメ後縦ヘラミガキ、胴 部内面は目の細かい工具による縦ハケ メ後目の粗い工具による横ハケメを施 す。胴外面に丁寧な横ヘラミガキ。口 唇部に12ヶ所、口縁部下端に12ヶ所目 の粗い板目状工具の木口部分を用いて 「メ」状の押圧文を廻らす。底面には 木葉痕が残る。	肩部に横長楕円形 状、胴下半部に小 円形状の欠損部が あり、両者は相對 して位置する。人 為的な破砕も考え られよう。
第355図-7	土師 (鉢)	南西溝	底4.5 体部上半欠	①粗砂を多く含む ② 灰褐 ③普通	外面縦ヘラケズリ、内面無調整。	底面が若干丸味を 帯び、磨滅が見ら れる事から天地逆 で支脚の可能性有
第355図-8	土師 高杯	南東溝	裾部約1/5、杯部欠	①小砂を含む ②赤褐 ③やや不良	内面に積み上げ痕を残す。外面縦方向 及び裾部外面は放射状のヘラミガキ、 裾部内面横ナデを施す。	二次焼成の可能性 あり

9 遺構出土の埴輪

本遺跡出土の埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪に大別され、更に円筒埴輪は、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪に、形象埴輪は、器財埴輪、人物埴輪、動物埴輪に細別される。普通円筒埴輪は、2次調整にB種ヨコハケを(註5)使うもの(22)と、1次調整タテハケのみのものに分類され、後者が圧倒的である。この1次調整タテハケは、一般的なハケメの他にヘラ状工具によるもの(20、21)もある。

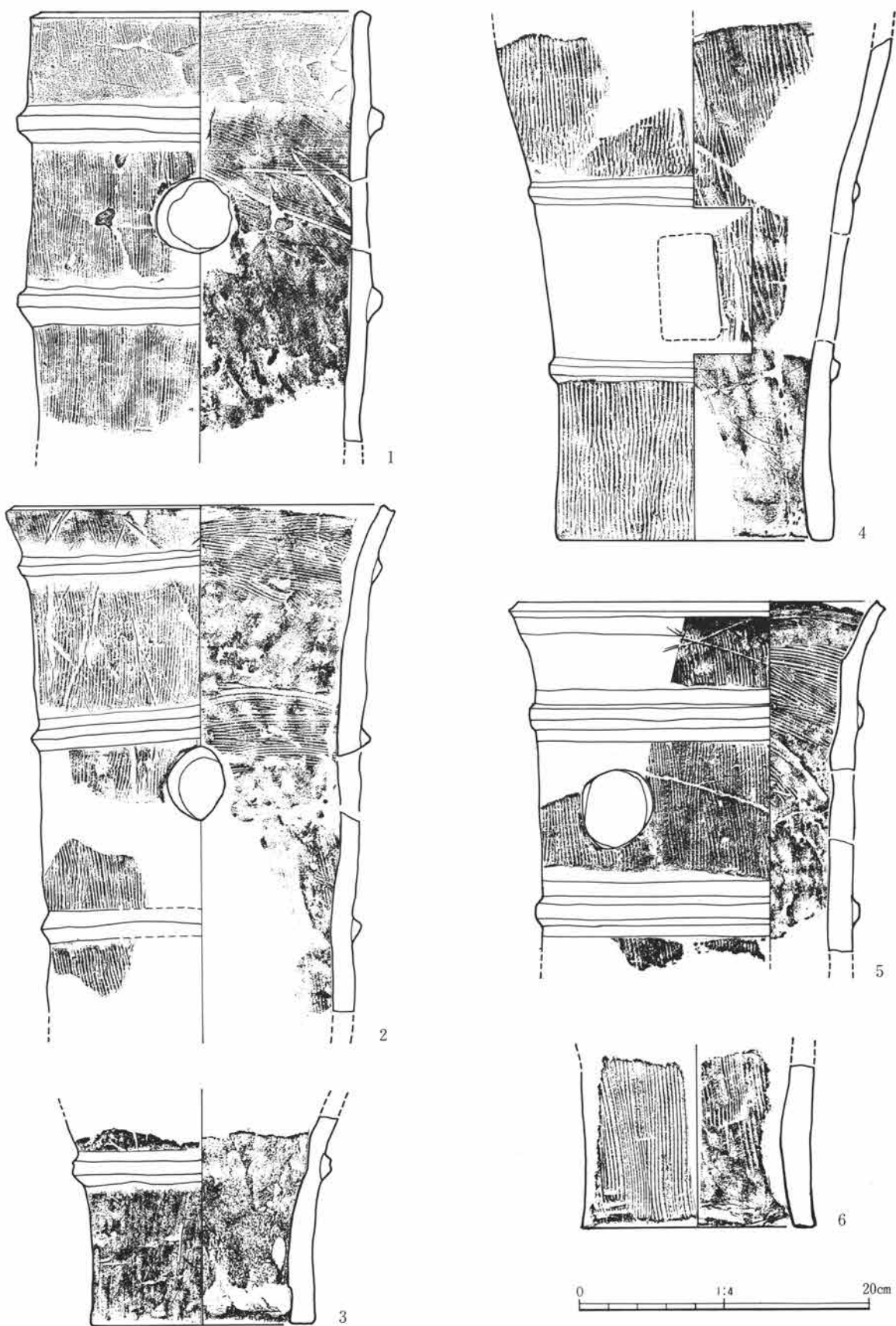
形態的には、胴径15cmで底部からタガ最下段までの高さが25cm前後と高く、細身で長身のもの(9)と、胴径20cmで底部からタガ最下段までが9cm前後と低く、更に口縁部とタガ最上段までの高さが8cmと短かいずんぐりしたもの(2、7)がある。細身で長身のものの器高は不明であるが、ずんぐりしたものは、50cmと推定される。製作技法としては、輪台状の基部の上に粘土紐を巻き上げることを一般としている。

底部調整は、形象埴輪の基台部を含めると2種類存在する。1種類は、円筒埴輪の器肉の重さと変形を調整するために、底部外面は斜ヘラケズリ、内面を横ヘラケズリするもの(13)、他の種類のものは、外観を強く意識した形象埴輪の調整技法の一種とも考えられ、基部外面を高さ10cmほどの縦ヘラケズリ、内面は横ヘラケズリして端部を尖らせ、不整形となった底面を更にヘラケズリして安定させるもの(23)である。

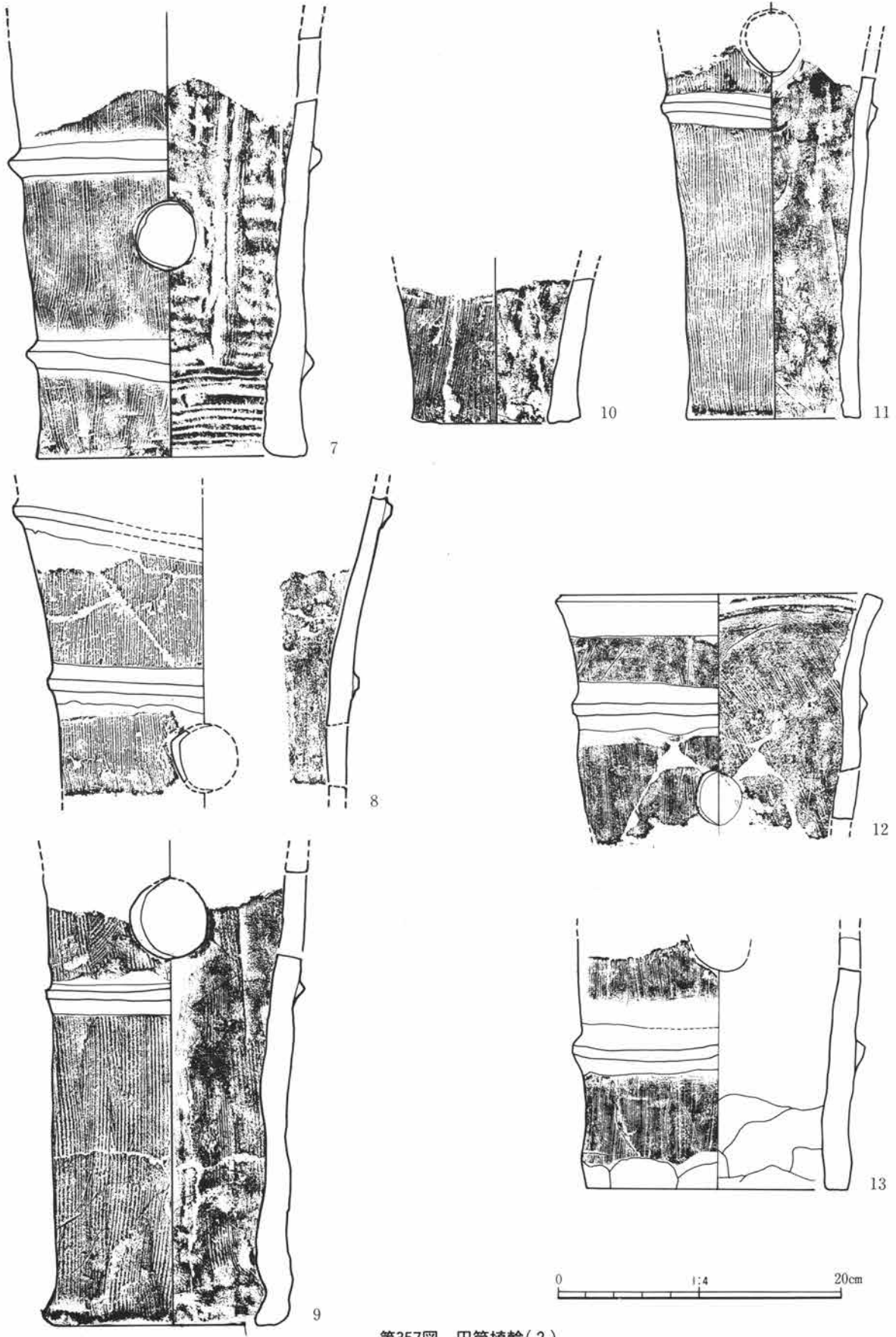
朝顔形埴輪は、花卉部と胴上部のみ(24、26)である。胴径は、18cmと小ぶりで、タガの中間に一对のスカシ穴を穿つ。胴下部は不明であるが、普通円筒で細身、長身とした一群がこれに該当するのかもしれない。胴上端部から二重にひろがる花卉部は、くびれ部に補強の突帯が廻る。製作技法上、特に注目されるのは、花卉部の一段目、単口縁状に開く口縁内側に、接着強化のために鋸歯状のヘラによる刻みが施されることである。このことは二段目の花卉積み上げとの間に、若干の乾燥時間のあることを示し、興味深い。(24、PL.49参照)

形象埴輪の基台部が2点出土している。これはスカシ穴が突帯間に位置しない一群のものを分離した。一点は底径17cm、残存高22cmで上端にスカシ穴を残すもの(30)であり、上方に向かってすぼまる。他の一点は、前述の底部調整技法を持つもの(23)で、底径13cm、残存高12cmを測り、上方に向かって開く。上端部に小さなスカシ穴を穿つ。

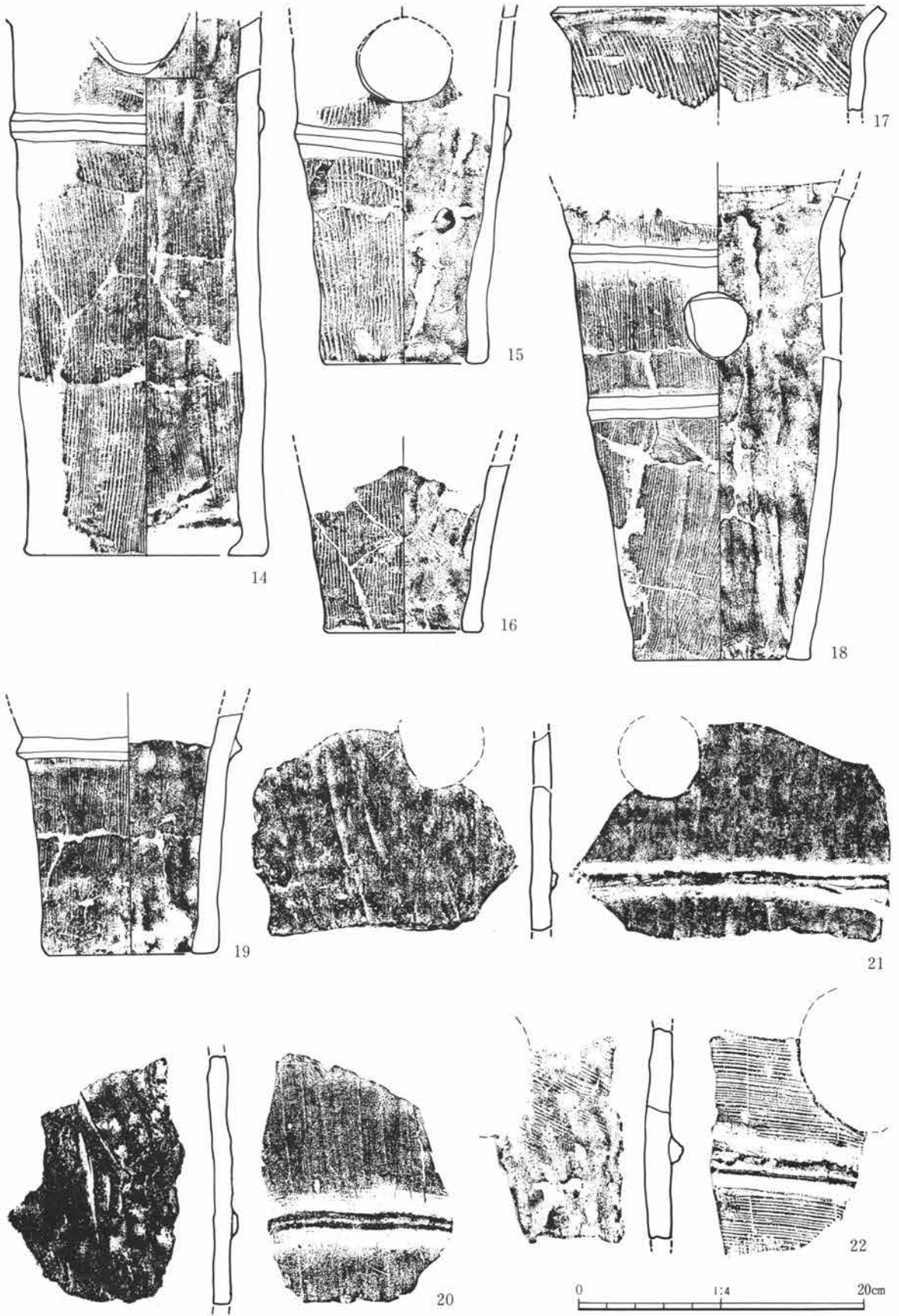
馬形埴輪は、頭部(27)、泥障(32)、脚部(33)の各部位が出土しているが製作技法、色調から同一個体ではないと考えられる。頭部は左頰の一部分で、口から目にかけて残存する。面繫は、辻金具で固定され、鏡板に連結する。引手の先端は環状にまとめる。面繫の上には部分的に赤彩が残る。泥障は粘土板をハケメのみで仕上げたもので、施文はない。脚部は、底径11cmと小ぶりで蹄の切り込みを脚後方に入れる。靱形埴輪とした一群(28、31、34)は、当地方で一般的な盾形埴輪より小形である点や、施文の違いに注目して分離した。基台部(28)は円筒でスカシ穴は背面に近接して2孔を穿つ。突帯を廻らせた上に両袖を貼りつける。袖部(34)は円筒形の矢筒から「奴風」形に張り出したものであるが下端は斜め上方に切り、上端は平らにそろろう。皮革の綴りと考えられる鋸歯状のヘラ書きが、くずれた弱い線で施されている。なお、前面に2ヶ所、背面に1ヶ所、広葉樹の葉脈が強く押されて残る。製作過程で使用されたものであろう。矢筒(31)の円筒からの袖は上下に分かれるが、そのくびれ部に皮革で背に固定する紐が表現されて、その上に赤彩が残る。人物埴輪(29)は、脚部の足結と想定した。断面は短径14cm、長径17cmの楕円形で内面の仕上げは丁寧である。以上、本遺跡出土の埴輪の時期を考えると、B種ヨコハケ技法を持つ5世紀後半から、多様な底部調整技法を持つ6世紀後半にかかるものであろう。



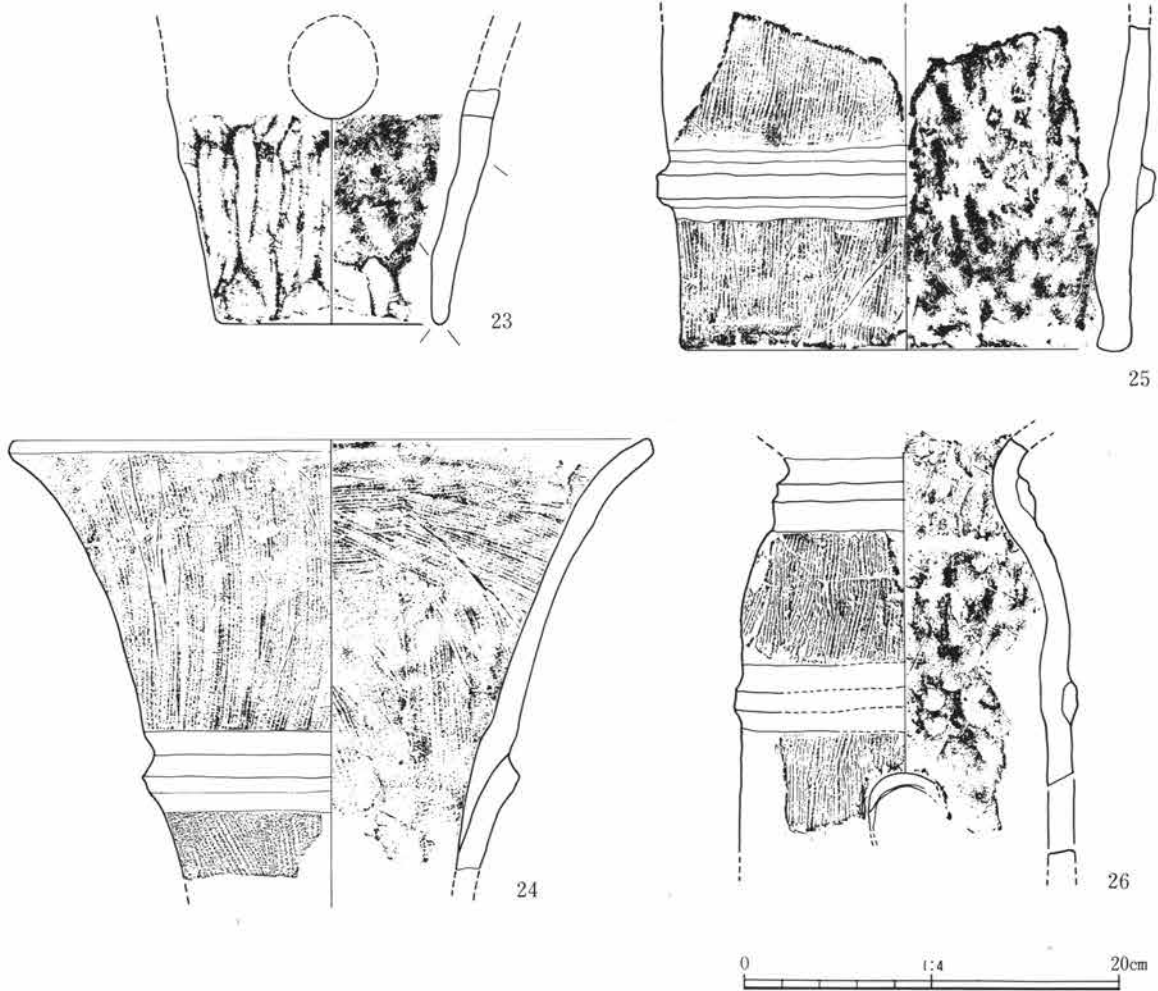
第356図 円筒埴輪(1)



第357図 円筒埴輪(2)



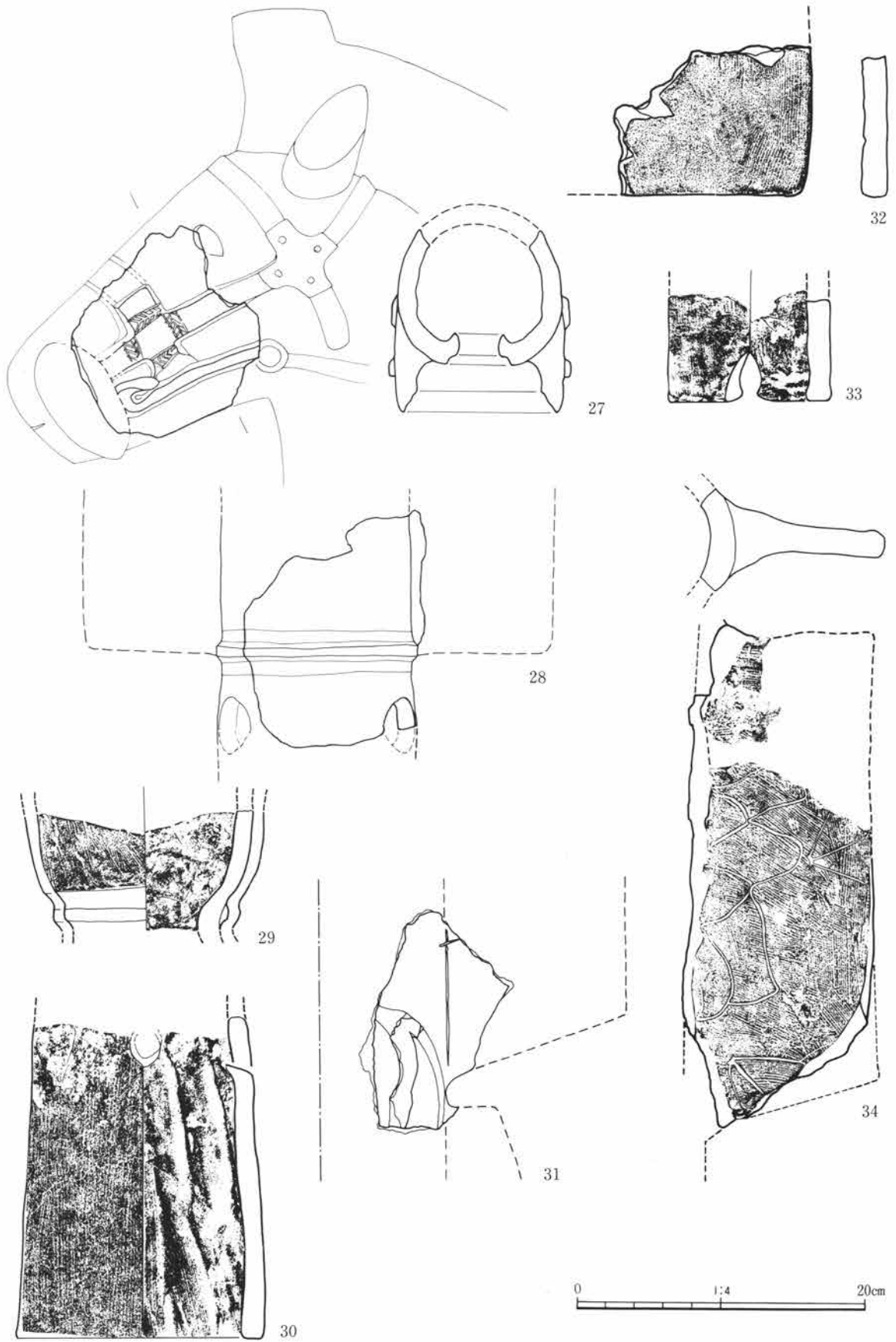
第358図 円筒埴輪(3)



第359図 円筒埴輪(4)

埴輪観察表 (写真図版における番号は挿図の番号に一致する)

図 No. 写真図版No.	出土 遺構	種類	部位	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	技 成・整形の 特徴	備考
第356図-1 PL.46	36号 住居跡	円筒	口縁部~胴部	口径22	①軽石砂粒、赤褐色粘土粒若干含む ②赤橙色 ③良好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整後突帯貼付	
第356図-2 PL.46	36号 住居跡	円筒	下半部を欠損する。	口径25	①軽石砂粒、赤褐色粘土粒若干含む ②赤褐色 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯貼付	
第356図-3 PL.46	52号 住居跡	円筒	底部部~胴部下位	底径16	①軽石砂粒若干含む ②橙 ③良好	縦ヘラナデ後突帯貼付	



第360図 形象埴輪

図 No. 写真図版No.	出土 遺構	種類	部位	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	技 成・整形の 特徴	備考
第356図-4 PL.46	36号 住居跡	円筒	基底部～胴部	底径19	①軽石砂粒、赤褐色粘土粘若干含む ②にぶい橙 ③良好	一次縦ハケメ(7本/2cm)調整後突帯貼付	長方形スカシ
第356図-5 PL.46	50号 住居跡	円筒	口縁部～胴部	口径24	①軽石砂粒、赤褐色粘土粒少量含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯貼付	口縁部外面へラ記号
第356図-6 PL.46	52号 住居跡	円筒	基底部	底径16	①角閃石砂粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(10本/2cm)調整	
第357図-7 PL.46	73号 住居跡	円筒	基底部～胴部	底径18	①軽石砂粒若干含む ②明赤褐色 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整後突帯貼付	
第357図-8 PL.46	80号 住居跡	円筒	胴部のみ	残存高12	①軽石砂粒、赤褐色粘土粒若干含む ②にぶい赤褐色 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整後突帯貼付	
第357図-9 PL.47	143号 住居跡	円筒	基底部～胴部下位	底径15	①角閃石砂粒若干含む ②明褐色 ③良好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整後突帯貼付	
第357図-10 PL.47	73号 住居跡	円筒	基底部	底径12	①赤褐色粘土粒若干含む ②にぶい黄橙 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整	
第357図-11 PL.47	73号 住居跡	円筒	基底部～胴部下位	底径11	①赤褐色粘土粒若干含む ②明赤褐色 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯貼付	
第357図-12 PL.47	143号 住居跡	円筒	口縁部～胴部上位	口径21	①赤褐色粘土粒多量に含む ②にぶい橙 ③良好	一次縦ハケメ(14本/2cm)調整後突帯貼付	
第357図-13 PL.47	143号 住居跡	円筒	基底部～胴部下位	底径18	①軽石砂粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(18本/2cm)調整後突帯貼付。底部へラケズリ調整	底部調整
第358図-14 PL.47	143号 住居跡	円筒	基底部～胴部下位	底径16	①角閃石粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整後突帯貼付	
第358図-15 PL.47	178号 住居跡	円筒	基底部～胴部下位	底径11	①赤褐色粘土粒若干含む ②にぶい黄橙 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯貼付	
第358図-16 PL.47	175号 住居跡	円筒	基底部	底径10	①赤褐色粘土粒若干含む ②明赤褐色 ③良好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整後突帯貼付	
第358図-17 PL.47	192号 住居跡	円筒	口縁部	口径(22)	①赤褐色粘土粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(7本/2cm)調整	
第358図-18 PL.48	178号 住居跡	円筒	基底部～胴部	底径12	①赤褐色粘土粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(11本/2cm)調整	
第358図-19 PL.48	178号 住居跡	円筒	基底部～胴部下位	底径11	①軽石砂粒、赤褐色粘土粒含む ②黄橙 ③良好	一次縦ハケメ(9本/2cm)調整後突帯貼付	

第V章 検出された遺構と遺物

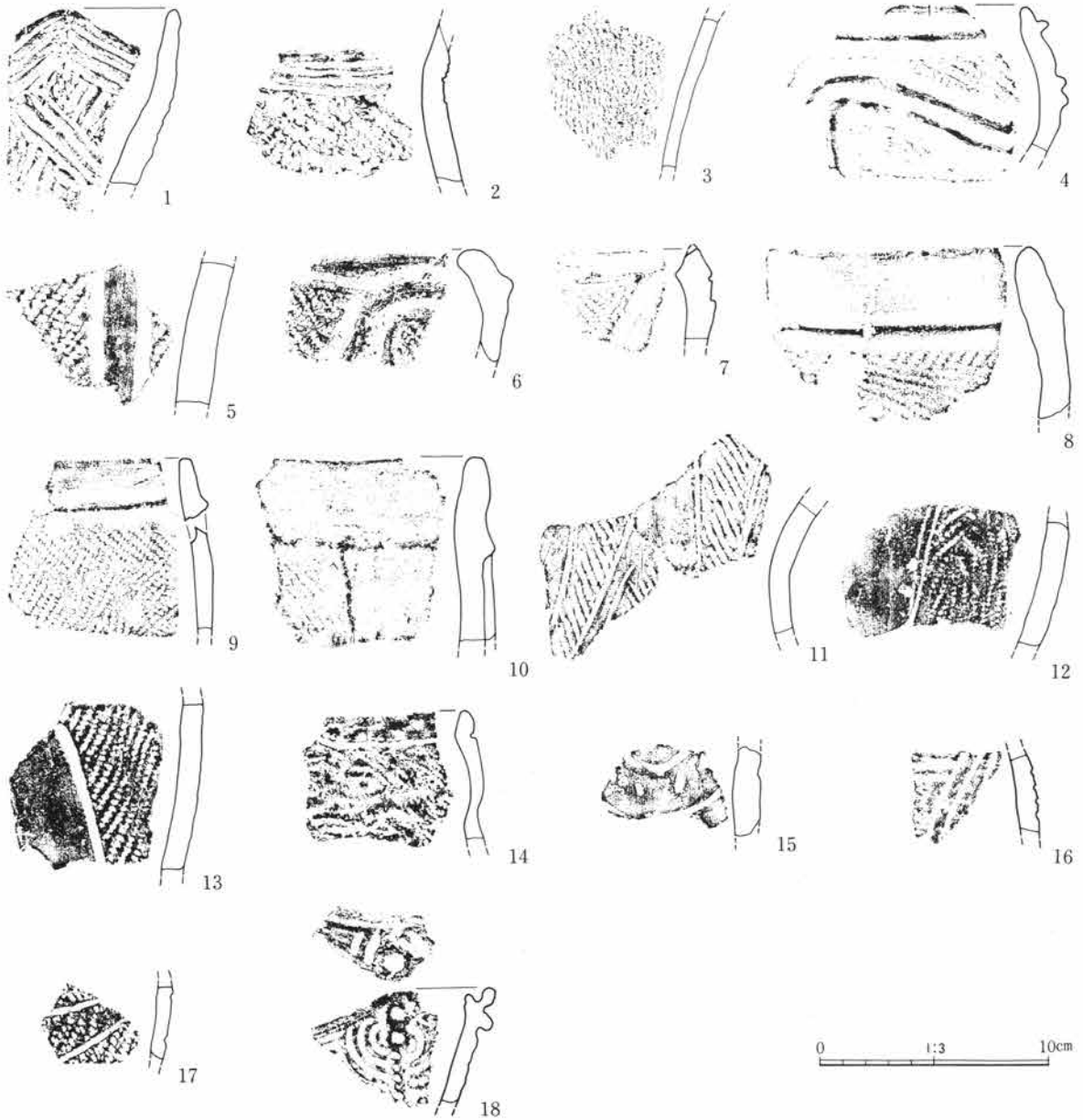
図 No. 写真図版No.	出土 遺 構	種 類	部 位	法 量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成・整形の特徴	備 考
第358図-20 PL.48	79号 住居跡	円筒	胴部	残存高17	①赤褐色粘土粒若干含む ②浅黄橙 ③良好	へら状工具による調整	
第358図-21 PL.48	7号 住居跡	円筒	胴部	残存高14	①赤褐色粘土粒若干含む ②橙 ③良好	へら状工具による調整	
第358図-22 PL.48	44号 住居跡	円筒	胴部	残存高14	①赤褐色粘土粒若干含む ②黄橙 ③良好	一次横ハケメ(9本/2cm)調整後突帯貼付	
第359図-23 PL.49	82号 土 壙	形 象	基底部	残存高12	①角閃石砂粒若干含む ②にぶい橙 ③良好	一次縦ヘラケズリ	底部調整
第359図-24 PL.48	143号 住居跡	朝 顔	口縁部～胴部上位	口径33	①角閃石砂粒若干含む ②にぶい橙 ③良好	一次縦ハケメ(10本/2cm)調整	
第359図-25 PL.48	80号 住居跡	形 象	基底部～胴部下位	底径23	①赤褐色粘土粒を多く含む ②にぶい橙 ③良好	一次縦ハケメ(10本/2cm)調整後突帯貼付	
第359図-26 PL.48	82号 土 壙	朝 顔	台部上半	残存高21	①赤褐色粘土粒若干含む ②にぶい橙 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整後突帯貼付	
第360図-27 PL.49	53号 住居跡	馬	頭部	残存長 12×12	①細砂を含む ②明橙 ③良好	筒形の頭部に引手の貼付される板を補う。外面はていねいなナデで仕上げ、内面はコヒナデが残る。	丹彩
第360図-28 PL.49	58号 住居跡	靱	筒部	残存高15	①赤褐色粘土粒若干含む ②黄褐色 ③良好	一次縦ハケメ(12本/2cm)調整後突帯貼付	
第360図-29 PL.49	80号 住居跡	人 物	足	残存高8	①赤褐色粘土粒若干含む ②明赤褐色 ③良好	一次縦ハケメ(11本/2cm)調整後突帯貼付	柄?
第360図-30	94号 住居跡	形 象	台部	底径17	①角閃石砂粒、軽石砂粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(10本/2cm)調整	
第360図-31 PL.49	3号溝	靱	筒、翼部	残存長 8×14	①角閃石砂粒多量に含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(15本/2cm)調整後粘土紐貼付	丹彩
第360図-32 PL.49	7号 住居跡	馬	泥障	残存長 10×12	①角閃石砂粒若干含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(13本/2cm)調整	
第360図-33 PL.49	90号 住居跡	馬	足	残存高8	①赤褐色粘土粒を含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(8本/2cm)調整	
第360図-34 PL.49	58号 住居跡	靱	翼部	残存高33	①赤褐色粘土粒を含む ②橙 ③良好	一次縦ハケメ(13本/2cm)調整	

10 遺構外の出土遺物

縄文土器 (第361図、PL.45)

本遺跡からは前期関山式～後期堀之内I式までの土器群、及び草創期の有舌尖頭器をはじめとする少数の石器類が出土している。分布は1号方形周溝墓の周辺部に限られており、縄文時代の土壌もこの地区に認められる。土器は総数100点前後と少ないが、なかでも加曽利E式～堀之内式土器が主体となっている。

1・2は関山式土器である。口縁部が弱く内湾する波状口縁の深鉢で、口縁部に半截竹管の凹面を3条重ねて施し、以下に同集合沈線を斜格子状に施文している。2は同一個体の胴部破片で、胴括れ部に同集合沈線を廻らして文様帯を区画している。地文はR $\begin{cases} L & R \\ L & R \end{cases}$ である。3は縄文LRが施された胴部破片で、諸磯a式土器であろう。4は加曽利E1式土器の口縁部破片である。縄文RLを地文に、2本の隆帯によるクランク文が



第361図 遺構外出土の縄文土器

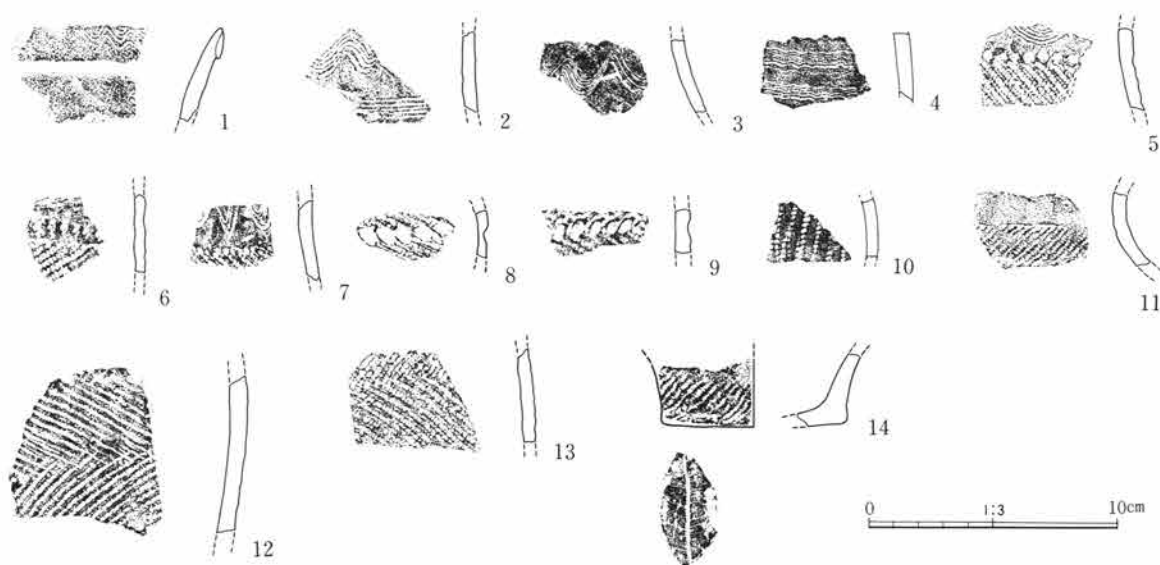
施されている。5・6は同3式土器である。5は口縁部破片で、隆帯による渦巻文の一部が認められる。6は磨消縄文帯を懸垂させた胴部破片である。地文はともに縄文RLである。7～14は同4式土器である。7・11・12・13・14は沈線で文様が施された土器で、同3式に比べてより細かい沈線が使用されている。7・13は無文帯部分がアーチ状を呈する土器であろう。11は上下からの槍先状の区画文が胴部中程で交互に入り組んだモチーフの土器である。区画内を充填する縄文は11がL、他はRLである。8・9・10は断面三角形の微隆帯で文様が構成された土器である。いずれも口唇下に幅広く無文帯がおかれ、その下を廻る微隆帯で画されている。10は微隆帯による区画懸垂文が施された土器である。縄文は8・9・10ともRLと思われる。なお9の微隆帯直下に補修孔が一ヶ所認められる。15は沈線間に列点状の刺突文が施された称名寺II式土器である。16～18は堀之内I式土器である。18は小波状を呈する口縁部破片で、波頂部に刺突を伴う円形の貼付文を施し、その両側には刻み目状の沈線を施している。波頂下には「8」の字状の貼付文とその下に刻み目を施した微隆帯を垂下させて、「8」の字文を中心に陰刻状の太い沈線で同心円状に弧線を施している。地文は16～18とも縄文LRである。なお細別時期が判明した縄文土器で、以上の型式以外のもは認められない。

弥生土器 (第362図、PL.45)

本遺跡では後期の土器破片が約20点程出土している。出土地点は調査区全域に散るが、弥生時代後期の土壌である77号土壌の周辺(IV区E-11グリッド周辺)に集中する傾向がみられる。出土したのは全て小片で全形の判明するものはない。文様は櫛描波状文と附加条第1種を原体とするものがほとんどで、栃木県を中心に分布する二軒屋式に近似するものが主体をなしている。

遺構外出土弥生土器観察表

図 No 写真図版No	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残存状態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成形・整形の特徴	備 考
第362図-1 PL.45-33	(甕)	II区 B-20	口縁部片	①長石、石英、黒色鉱物含 ②暗褐 ③普通	口縁折り返して外面に櫛描波状文を施す。頸部と内面はナデか。	樽式と思われる。器面が荒れる。



第362図 遺構外出土の弥生土器

図 No. 写真図版No.	土器種 器形	出土 位置	法 量 口径・器高・底径 残 存 状 態	①胎土 ②色調 ③焼成	技 法 成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考	
第362図-2 PL.45-34	(襷)	I 区 B-18	頸部破片		①小砂を含む ②暗褐 ~赤褐 ③やや軟質	先端に丸味をもつ施文具により櫛描波 状文と横位の直線文を施す。内面はナ デカ。	
第362図-3 PL.45-35	(襷)	IV 区 F-8	頸部破片		①長石粒を多く含む ②黒褐 ③軟質	先端に丸味をもつ6本前後の櫛歯状施 文具により波状文を施す。波長は大き く波形は比較的緩やか。	二軒屋式系か。
第362図-4 PL.45-36	(襷)	III 区 H-17	頸部破片		①長石、石英を含む ②暗黄褐 ③やや軟質	先端に丸味をもつ目の細かい櫛歯状施 文具により波長の小さな細かい波状文 を施す。内面は横へらミガキ。	
第362図-5 PL.45-37	(襷)	IV 区 E-10	頸部破片		①長石、白色鉱物、石 英を含む ②暗赤褐 ③普通	先端に丸味をもつ櫛歯状施文具により 波状文を施す。その下位に原体先端部 を押圧しながら縄文を施す。原体は軸 縄RLにLを2条付加した附加条第1 種である。	二軒屋式系。
第362図-6 PL.45-38	(襷)	IV 区 D-11	頸部破片		①小砂を含む ②灰褐 ③軟質	上位に櫛描波状文、中位に縄文原体先 端による押圧列点文、下位に縄文を施 す。原体はLR単節か附加条第1種と思 われる。	二軒屋式系。
第362図-7 PL.45-39	(襷)	IV 区 10号溝	頸部破片		①白色鉱物、黒色鉱物 石英を含む ②明橙 ③普通	上位に先端の丸い櫛歯状施文具による 波状文、下位に縄文を施す。原体は軸 縄RLにL2条を付加した附加条第1 種と思われる。内面ナデ。	二軒屋式系。
第362図-8 PL.45-40	(襷)	IV 区 H-9	口縁部片		①小砂を含む ②暗黄 褐 ③普通	軸縄RLにL2条を付加した附加条第 1種を原体として縄文を施し、中位に 原体先端部を押圧した列点文を横位に 廻らす。内面ナデ。	二軒屋式系。
第362図-9 PL.45-41	(襷)	IV 区 E-9	口縁部片		①石英、長石を多く含 む ②黒褐~黄褐 ③ やや軟質	軸縄RLとLR2種の附加条第1種を用 いて羽状縄文を施し、その中央に原体 先端部を押圧した列点文を廻らす。	二軒屋式系。
第362図-10 PL.45-42	(襷)	IV 区 H-8	胴部破片		①小砂を含む ②黒褐 ③普通	縄文のみ施す。原体はLを巻いた単縄 絡条体と思われる。	
第362図-11 PL.45-43	(襷)	III 区	頸部破片		①小砂を含む ②黒褐 ③普通	上位は無文。下位はLR単節の原体を用 いて斜縄文を施す。	
第362図-12 PL.45-44	(襷)	IV 区 E-10	胴部破片		①長石、石英等小砂を 含む ②外-黄褐 内 -黒褐 ③普通	LR、RLを軸縄とした2条付加の附加 条第1種を原体とし羽状縄文を施す。 軸縄の圧痕はわずかに認められる。	二軒屋式系か。
第362図-13 PL.45-45	(襷)	III 区 H-16	胴部破片		①長石、石英を多く含 む ②赤褐 ③普通	12と同様に反対燃の附加条第1種を用 いて羽状縄文を施す。軸縄圧痕が12よ りも明瞭に認められる。	二軒屋式系か。
第362図-14	(襷)	III 区	底 (7.4) 底部約1/4片		①小砂を含む ②暗褐 ③普通	附加条あるいは単軸絡条体を原体とし た縄文を施す。底面に木葉痕が明瞭に 残る。	

石器（第363・364図、PL.50）

本遺跡より出土した石器は総数47点で、その内訳は有舌尖頭器1・打製石斧5・剥片の周縁に粗い打調の調整加工を施す打製の石器4・磨石1・石棒片1・石核1・剥片33点である。これらの石器は有舌尖頭器を除いて、II区、1号方形周溝墓の周辺から出土した。遺構に伴って出土したものはないが、石器の分布は縄文中期（加曽利E4）の所産である土壌の分布に近接している。以下、図示し得た各々について記述する。

第363図-1 有舌尖頭器。IV区、ソフトローム層より単独で出土。先端部、および、舌部をわずかに欠損する。側縁は概ね直線的形状を呈すが、右側縁はわずかに丸味をもつ。返し部は比較的浅い。調整加工は丁寧に施されているが、一部にステップ状の剥離痕が見られる。チャート製、4.2g。

第363図-2 は撥形の打製石斧。横長の不定形剥片を素材とする。刃部は表→裏面側への調整加工により直線的形状となっている。側縁の調整加工は右側縁で裏→表面側の順に、左側縁では表面側にのみ施される。黒色頁岩製、95.0g

第363図-3・4・8 は分銅形の打製石斧。本形態の打製石斧は扁平な自然石、あるいは、板状に剥離する性質をもつものを使用している。これは機能的な制約による素材の選択であると思われる、小形のものに扁平な自然石が、大形のものに板状に剥離する石材が対応する可能性がある。3は器体下半部欠損。黒色頁岩製、98.1g。4は器体上半部欠損。凝灰岩製、73.4g。8の刃部には使用による結果と思われる大きな剥離痕が観察され、全体の形状が歪んだものとなっている。「^か抉り部」は左側縁に比して右側縁で鋭い。頁岩製、511g。

第363図-6・7・9・10の4点は、剥片の周縁に粗い調整加工を施すことにより作出された打製の石器である。6は側縁に粗い調整加工が施される。欠損品であり、全体の形状は不明である。黒色頁岩製、32.8g。10は加熱により剥離された剥片を素材としたと思われる、側縁に粗い調整加工が施される。右側縁部に「^か抉り」に類似する部分があって、打製石斧としての要素も否定できない。刃部は微細な剥離痕よりなる。器体の上端部欠損。チャート製、27.7g。7は巾広の不定形剥片を素材としたもので、側縁部に粗い調整加工が施される。刃部は剥片の縁辺をそのまま利用したものと思われる。黒色頁岩製、70.6g。9は巾広の不定形剥片を素材としたもので、周縁に粗い調整加工を施す。器体の左側縁部は剥片を折断した後に、微細な調整加工が施されている。安山岩製、47.1g。

第364図-11は黒色頁岩製の不定形石核である。正面の最も新しい剥離面は、剥離面の中央部にフィッシャーが集中し、「割れ円錐」が生成されたかのような観を呈する。「割れ円錐」のなす角度は114°を測る。他の剥離面のあり方から作出された剥離面を次々に打面とする（結果として90°に打面転移を行う）ものと思われる。裏面の自然面には打痕が見られる。黒色頁岩製、262.4g。

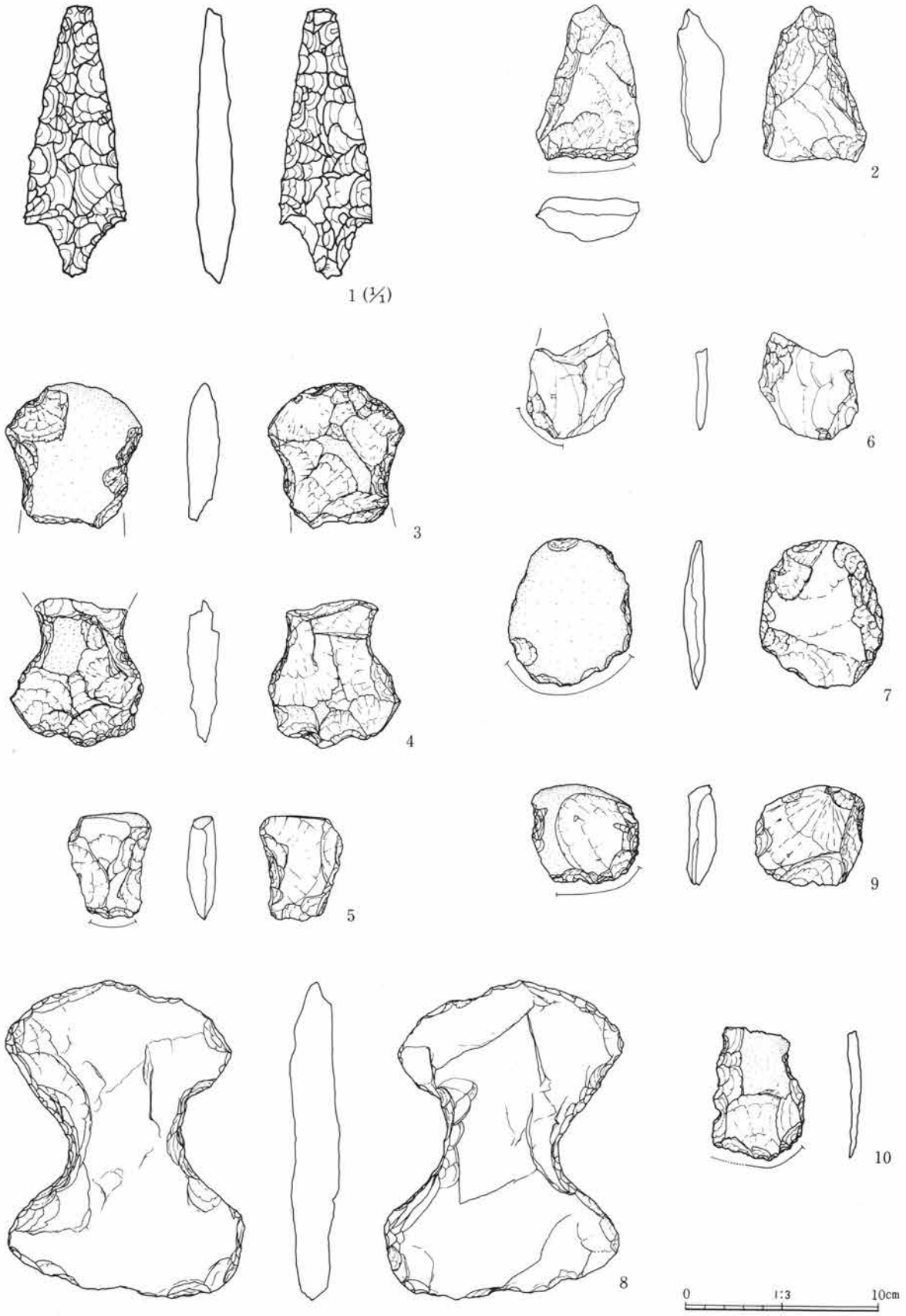
第364図-12は雲母片岩製の石棒片か。剥離面の見られる側に著しい磨滅痕があること、形状が整っていること等から判断した。63.8g。

第364図-13は扁平な安山岩製の磨石である。側縁の一部にわずかに打痕が見られる。229.6g。

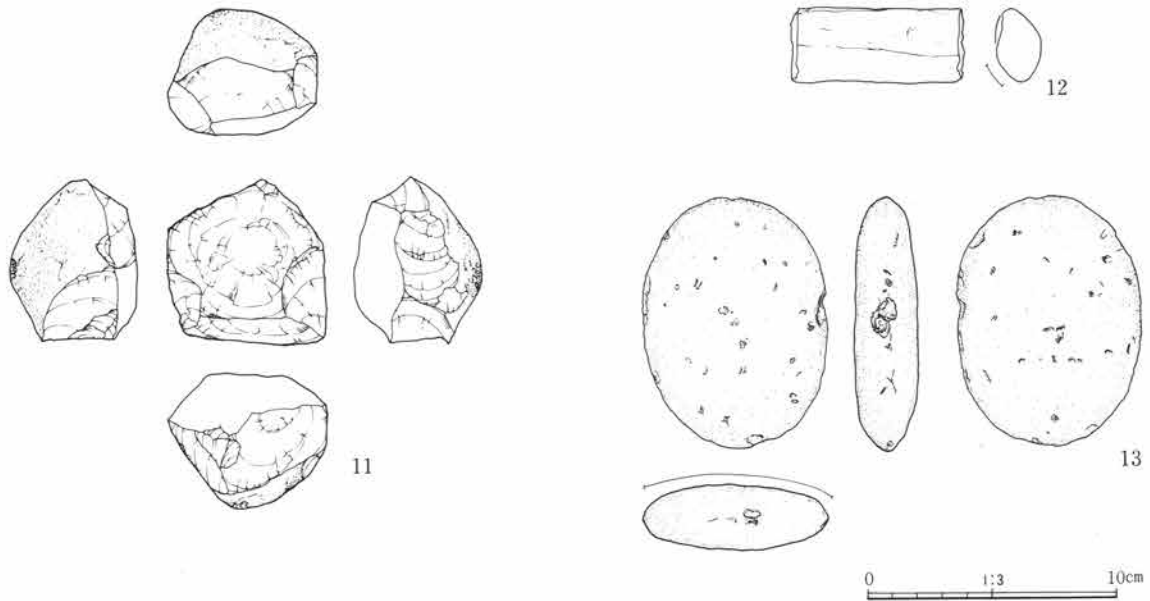
以上が出土した石器の概要である。調査は路線内という限定された範囲のうえ、台地の縁辺が河川による浸蝕を受けているといった制約があり、多くを述べることはできないが、若干をまとめてみたい。

単独で出土した有舌尖頭器から、遺跡内に生活跡の存在を求めることはできない。周辺には神谷、中江田遺跡B地点をはじめとして、先土器時代終末から縄文時代初頭にかけての遺跡が知られており、石器が単独の出土とはいえず、地域における遺跡のあり方のひとつとして理解しておきたい。^(註7)

有舌尖頭器以外はいずれも縄文時代の石器で、包含層からの出土である。ここでは、石器と剥片の関連を



第363図 遺構外出土の石器(1)



第364図 遺構外出土の石器(2)

指摘しておく。出土した石器のうち、剥片類には石器作出に伴う調整剥片の類が全く存在しないこと、剥片の周縁に調整加工を施す石器(第363図6・7・9・10)の素材となり得る原石を輪切りにしたと思われる剥片が存在することの2点を指摘できる。

前者の石器製作に伴う調整剥片の欠如は少なくとも遺跡内で石器製作が主体的に行なわれなかったことを推測させ、遺跡が縄文期に関しては恒常的居住域としてとらえにくいという遺構、遺物のあり方と関連するものと思われる。また、後者の石器、および、その素材としての剥片の存在は剥片剥離から石器製作までを一連にとらえ得る可能性を示すものと思われる。これまで縄文期の石器の多くは、いくつかの定形化した石器を除いて「剥片石器」あるいは「不定形石器」としてとらえられてきたものがほとんどであり、それらについては全く言及していない報告例も多い。ここに図示した4点の石器は旧来においては「剥片石器」・「不定形石器」としてとらえられてきたものであるが、県下の他遺跡を含めてこの種の石器、および、その素材となる剥片は伴出する例が多いこと、少なくとも前期以後の石器群に一般的な存在であること、また、機能的にはスクレイパーの範疇に属し、定形化した石匙を補完するものとしてとらえられるものと思われる。上述の理由により4点の石器は石器器種としてとらえ得る内容をもつものと思われるが、具体的な分析は名称の問題を含めて今後の課題としておきたい。

<註>

- 1 群馬県・長野県境の活火山である浅間山から噴出した軽石。噴出時期は天仁元年(1108年)説と弘安4年(1281年)説がある。
- 2 井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』8(昭和53年)で命名される。
- 3 柿沼幹夫氏「V-結語I、住居跡について」(『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書III下田・諏訪』埼玉県教育委員会昭和54年)によれば、カマド出現以降の住居跡の入口は、東側あるいは南側に限定されるものが多いとされており、その論拠にされたカマドの位置に見られる傾向が本遺跡でも同様に看取できることから、氏の見解に従い出入口の位置を東側あるいは南側と考えたい。
- 4 既刊された『群馬県史研究』8(昭和53年)所収の「群馬県下の歴史時代の土器」で「三ツ木遺跡220号住居」の遺物として扱った須恵器高台杯、杯、甕、台付甕は注記ミスより212号住居跡出土である事が判明した。ここに記してお詫びしたい。
- 5 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号 昭和53・54年
- 6 中東耕志、坂爪久純「神谷遺跡の爪形紋土器と周辺遺跡」群馬考古通信第8号 1983年
- 7 県立博物館「群馬の旧石器」『野尻湖発掘展-水河時代の狩人を求めて』1981年

第VI章 調査の成果と問題点

三ツ木遺跡は早川の右岸地域370mの区間にわたって調査した遺跡である。その遺構は調査範囲が細長いこともあって地域毎にかなりその様相を異にしていることが判明した。従って周辺の遺跡との関連性や相違を確認するためにも多面的な考察が必要となるであろう。そうした意味では、それら周辺の遺跡と比較、検討する中でなされない正確を期することができない事は間違いない。そのため本稿は本遺跡の一応のまとめとして、遺構、遺物の状況やその変遷、地形的な変化と遺跡等の対応関係などを中心に述べ、あわせて将来のまとめの方向についてふれておきたい。

1 遺構の時期的な分布と旧地形との関連

三ツ木遺跡の範囲は長さが370mにも及ぶため、遺構の分布や種類についてみると必ずしも単一でない状況を看取することができる。特に早川は最近まで暴れ川であったことを裏付けるように旧地形はかなり複雑であったと思われる。その変化は大別して三つに分けることができそうである。即ち、一つは洪積台地で、その基盤を形成する関東ローム層が堆積している部分である。その意味ではこの区域は昔から安定した地形を呈していた部分である。二つめはローム層を基盤としながらも、その上に黒色の粘質土層をのせている部分である。この区域はローム層が削られて、多少の変化をみせた区域である。三つめは白色砂質土が黒色沖積土の上ののる部分である。この下層はローム層がほとんど削られており、基盤層はシルト状の粘質土である。おそらく、当初の旧地形は水流が削った部分とみられる。

これらの変化をグリッド別に区分し、それぞれの遺構分布の状況を概括すると下表のようになるであろう。区分は調査グリッドによっており、南東の下流から北上する形でまとめている。

区分	グリッド区間	旧地形の特徴	遺構の状況等
A	I区7グリッド ～II区5グリッド	ローム層を基盤とする区域遺構は、古墳時代前期から後期、奈良、平安時代と分かれるが、中世には墓地がある他は耕地化した。	遺構の状況では、まず古墳時代前期に墓域として形成されたが主体はより北にのびていた。その後、古墳時代後期に集落として発展したが、古墳時代後半に大きな流れで北及び東を削られた。遺構がそれにより半分残ったものもある。
B	II区6グリッド ～II区15グリッド	ローム層の上層に黒色沖積土がのる区域である。特に古墳時代前期に一時的に上面が押し流されて削平されたとみられる。	ほとんど、古墳時代前期以降、南北方向に小さい湿地帯が入りこみ、遺構が形成されない。早川の蛇行が直に台地を横切る方向に流れた可能性がある。
C	II区15グリッド ～III区7グリッド	ローム層上に黒色沖積土がのる区域。ローム層上の黒色土はうすく、早川によりロームが削られたとみられる。	集落は早川の中のにびていたが地形が削られてしまったため、古墳時代の住居が一部残っているが、他は奈良～平安時代に土地が安定して集落が拡大した。
D	III区8グリッド ～III区15グリッド	灰白色砂質土堆積層のある地域。平安期によく地形が安定したものとみられる。	住居跡は平安後期に入りようやく形成されてくる部分であるからすくなくとも9世紀ごろまでは、早川の流路が一部小さい流れが入りこんでいた部分とみられる。
E	III区16グリッド ～IV区22グリッド	A区と同様、本遺跡中では最も安定したローム層を基盤とする地域である。IV区15グリッド以北は黒色沖積土地域へ。	最も早くから安定した地域で集落は最も発達した。特に奈良～平安時代にかけては集落の中心的な階層が居住した地域で掘立柱群が奈良～平安に及びその周辺に竪穴住居が並ぶ。

2 集落の変遷と時期的な特質

前項でまとめた区分に従って集落の変遷を追ってみよう。

A区—まず、方形周溝墓で台地が墓域として開発される。状況的にみてこの1基に留まるとも考えられない事から、おそらく早川方向（左岸寄り）にのびていた墓域が河流により削られたものとみられる。4世紀後半の時期に形成された墓域は現在の早川左岸域にのびている可能性がある。しかし、その規模はあまり大きくなかったとみられる。

集落が形成されるのは古墳時代後期前半（5世紀末）以降であるが、特に6世紀に急激に拡大した。その基盤は扇状地扇端部の湧水域の湿地帯が安定することによるものとみられ、この地域全般の傾向とみる事ができる。そして7世紀前半には更に発展して、調査区の中では最も濃い住居分布を示している。しかし、奈良時代以降はその中心がE区に移行していく。おそらく河流の変化に起因するものであろう。

B・C区—古墳時代末期から集落が形成されている。このことより早川が、6世紀段階において一部広瀬川（旧利根川）の水を流したのではないかと推定される。その原因となったのはやはり火山の大噴火によるものである可能性が強く、榛名山二ツ岳の噴火によるものが最も大きな原因と考えられる。それは一部、この流域に沿って榛名山給源の角閃石安山岩を利用した古墳の石室が存在することがそれを証明している。しかし、この時期にはまだ白色砂質土層の堆積部分は、河流が湿地で人が居住できる状況ではなかったものとみられる。

D区—この部分は平安時代後半の住居しか検出されない。このことからすると、この部分は早川の水が粕川広瀬川と完全に分離し、流れが安定した時期に当るものとみられる。この時期の住居ではカマドに古墳の埴輪を持ち込んでいる点が注目される。その供給源は上瀬名か小角田古墳群であろう。

E区—一律令期に入った時点の中心はE区である。III区及びIV区で集中して発見された掘立柱を中心とした集

竪穴住居の時期別数

時期	住居数	備考
古墳前期	E区 2軒	A区墓域
古墳後期	A・C・E区 47軒 ₄₉	A区中心
奈良時代	A・C・E区 56軒 ₁₀₅	E区中心
平安時代	A・C・E区 95軒 ₂₀₀	II区～IV区 中心
不明	35軒	

落構成は時期的には奈良時代後半期以降とみられるが、掘立3群の内、III区・IV区にまず掘立がつくられる。郷とすれば、「瀬名郷」の一部とみられるが、郷戸主階層の屋敷構えが掘立柱建物群になった可能性がある。その内、一列に並列する様相をみせるIV区の配置と「コ」の字形の屋敷構えに柵列が付属するものは同じ郷戸主階層における力関係にも相違があった事も推察させて興味ぶかい。特にIII区のもので、平安時代になると廂をもつものが出現すること、南側の窪地に沿って柵列をめぐらして5軒ほどを一群とした中心的なものを想定させる。

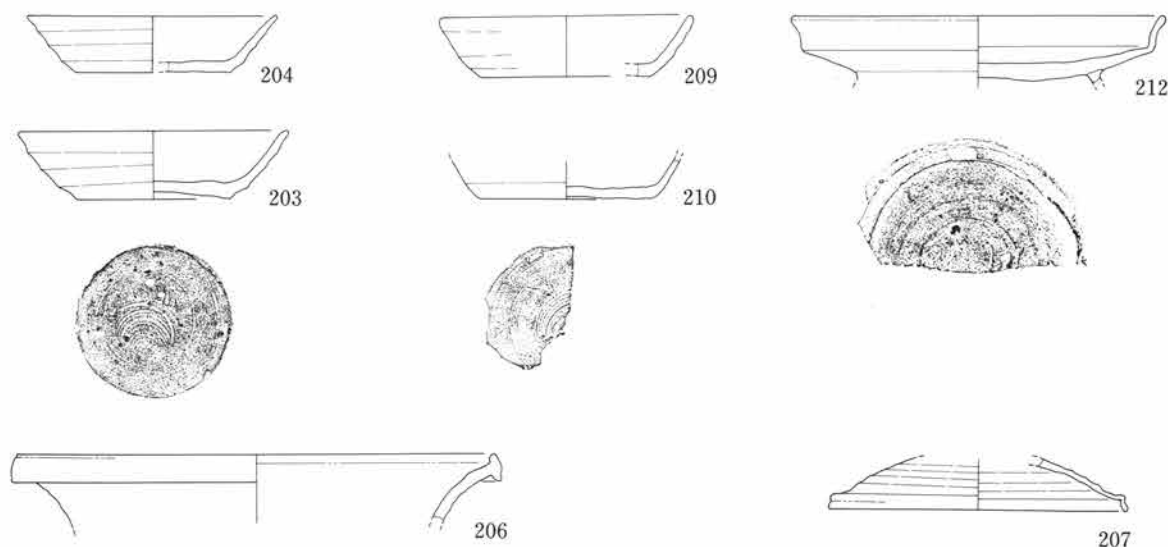
それに比べIV区のもので、当初倉庫と一般掘立柱建物が1棟ずつあり、後に東側に並列させて一直線上にのぼしていく掘立柱建物の配置は同族の郷戸主層の建物である可能性が考えられる。この傾向は周辺の小角田前・西今井遺跡でも同様二形態のものが認められるようで、今後検討を要するであろう。

24

須恵器の胎土分析について

今回の須恵器胎土分析は、三ツ木遺跡出土遺物中に、埼玉県の窯跡から搬入された可能性を持つ須恵器があり、その傾向把握に努めたものである。本遺跡210・247号住居跡からは、末野窯跡群の製品とよく似た須恵器が出土しているが、これらの須恵器は群馬県東部の諸遺跡で多量に出土している。また216号住居跡からは白色針状物質を含む土製紡錘車(PL.44)が出土した。南比企窯跡群の製品の搬入が考えられるが、荒砥上川久保遺跡^(註1)で白色針状物質を含む杯の出土例があり、末野ほど多量ではないが、群馬県東部の遺跡に流布するもの^(註2)と思われる。これら、埼玉県内の窯跡の製品と推測した須恵器に、理学的分析による検討を加えることを目的とし、下記21点の資料について、群馬県工業試験場 花岡紘一氏に胎土分析を依頼した。

No.	器形	出土遺跡	
201	高台付杯	笠懸村 山際瓦窯跡	○201・202は砂粒の混入の多い、重量感のある須恵器である。『笠懸村史』(原始古代) 1983 若月省吾 に詳しい。8世紀の製品である。
202	蓋	" "	
203	杯	吉井町 西武団地内窯跡	○203・204は吉井町教委 茂木由行氏の採集品である。灰色を呈した緻密な胎土の須恵器で、吉井窯跡群の典型とは言えない。8世紀の製品である。
204	杯	" "	
205	杯	南比企窯跡群	○205~211は、表採器である。いずれも白色針状物質をわずかに含んでいる。なお、南比企窯跡群については、埼玉県立歴史資料館の継続的な研究調査があり「埼玉県における古代窯業の発達(3)~(6)」に詳しい。8世紀代の製品である。
206	甕	" "	
207	蓋	" "	
208	甕	赤沼11支群	
209	杯	" "	○212・213は藤岡市教委 志村 哲氏の採集品である。大粒の夾雑物を含む、ボンボンした粗い胎土の須恵器で、末野窯跡群と類似している。
210	杯	" 比砂田沼窯跡群	
211	杯	" "	○214~218は三ツ木遺跡出土須恵器で、すべて本報告で取り扱ったものである。9世紀末~10世紀前半にかけての製品である。
212	蓋	藤岡市 たたら沢窯	
213	杯	" 金山瓦窯	
214	杯	三ツ木遺跡 出土遺構不明	
215	杯	" 210住-5	○219は群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥東原遺跡」(昭59)で報告した須恵器である。
216	高台付椀	" 210住-11	
217	高台付椀	" 210住-13	○220・221は同事業団「荒砥上川久保遺跡」(昭57)で報告した須恵器で、白色針状物質をわずかに含むものであり、210・211の資料と極めて似ている。8世紀中葉から後半にかけての製品である。
218	高台付椀	" 200住-1	
219	杯	荒砥東原遺跡 6住-1	
220	杯	荒砥上川久保遺跡 5区5住-1	
221	杯	" 6区1井-3	



第365図 胎土分析資料

須恵器の胎土分析（蛍光X線分析）について

群馬県工業試験場 花岡 絢一

試験方法および測定条件

分析用試料は各試料を10 μ 以下に粉碎し、5～10gを径4cmの円板に成型し、分析用試料とした。測定条件は次のとおりである。

蛍光X線分析装置：理学電気(株)KG-4型

X線管球：銀対陰極 50KV, 20mA

分光結晶：Fe, Sr, Rbには LiF ($2\alpha=4.028\text{\AA}$) Ca, K, Ti, Si, AlにはEDDT ($2\alpha=8.808\text{\AA}$)
MgにはADP ($2\alpha=10.648\text{\AA}$)

検出器：LiFを使用したときS, C。 EDDT, ADPを使用したときP, C。

時定数：1

計数法：Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbはチャートによった。Si, Al, Mgは定時計数法によった。チャートは4°/minとした。

胎土分析表

波光分析器：積分方式

測定器：FeK α , CaK α , KK α

TiK α , SiK α , AlK α

MgK α , Srk α , RbK α

の各1次線を使用。

X線照射面積：20mm ϕ

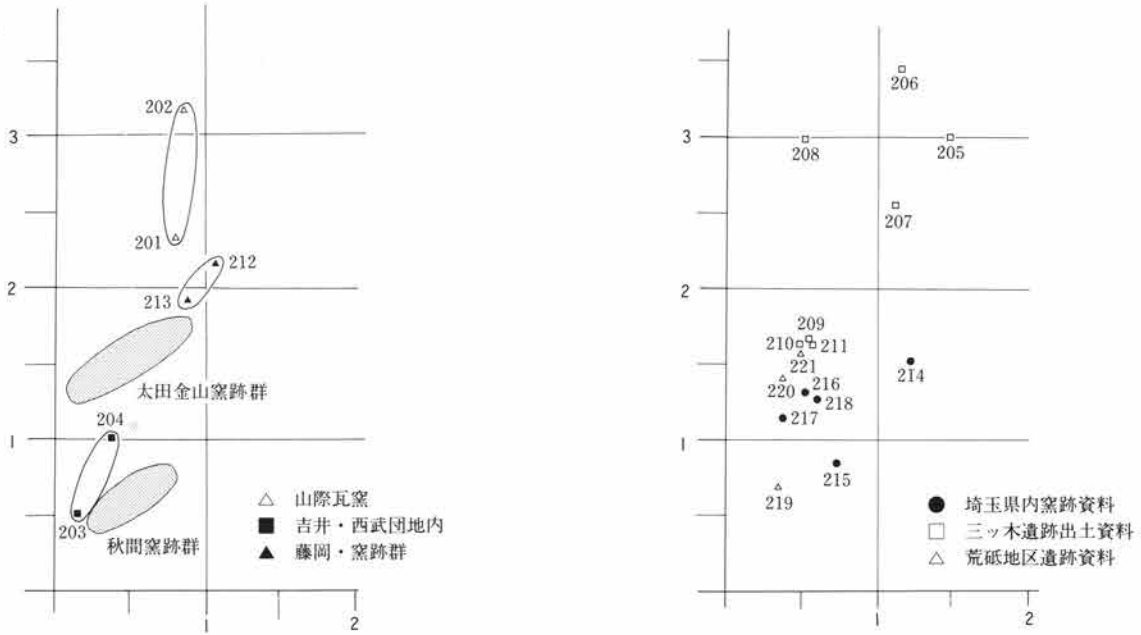
標準試料：No.203, No.205, No.210, No.215
を化学分析し、標準値とした。

成分試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K	Sr/Rb
201	64.6	22.5	7.45	0.96	1.02	1.01	1.48	0.79	2.31
202	62.7	24.4	7.73	0.93	0.97	0.62	1.34	0.83	3.17
203	75.2	16.2	2.75	0.99	0.29	1.28	2.25	0.14	0.51
204	69.6	20.6	4.26	0.96	0.52	0.77	1.64	0.36	1.00
205	69.3	20.6	5.36	1.14	0.89	0.60	0.71	1.47	3.00
206	70.6	17.8	7.06	1.08	0.82	0.61	0.82	1.16	3.45
207	72.1	19.7	4.83	1.18	0.73	0.57	0.77	1.11	2.55
208	70.3	20.9	4.14	1.15	0.38	0.54	0.82	0.52	2.95
209	71.8	16.0	5.05	0.94	0.55	0.71	1.17	0.54	1.67
210	71.8	18.5	4.65	0.96	0.51	0.90	1.20	0.50	1.64
211	68.9	22.8	4.26	1.04	0.67	0.70	1.33	0.58	1.62
212	65.7	22.7	6.85	1.28	0.87	0.68	0.94	1.07	2.15
213	64.1	18.3	11.35	1.31	0.85	0.68	1.13	0.88	1.92
214	64.0	20.8	8.76	1.25	1.08	0.92	1.04	1.21	1.52
215	59.5	22.8	9.53	1.29	0.94	0.67	1.52	0.71	0.85
216	60.3	26.2	7.52	1.14	0.77	1.06	1.75	0.51	1.30
217	62.1	24.4	7.60	1.12	0.55	0.85	1.68	0.37	1.14
218	62.1	23.2	7.82	1.12	0.81	0.89	1.59	0.59	1.26
219	60.6	25.2	9.54	1.23	0.53	0.82	1.79	0.34	0.69
220	69.2	20.1	5.32	0.92	0.45	0.70	1.34	0.38	1.40
221	70.2	19.5	5.60	1.03	0.58	0.69	1.37	0.48	1.58

以上の結果を表に示したものが第366図である。秋間と太田金山の資料は『塚廻り古墳群』より転用した。
(註3)

これより、末野製と推定した三ッ木遺跡出土須恵器は、量産され、広く分布する土器であるにもかかわらず、その分析値は群馬県内の主要な窯跡の傾向とは合致せず、末野製とする考えを一步前進させる数値を示した。今後、末野窯跡群の資料を分析し、確認作業を実施したい。

荒砥上川久保遺跡出土須恵器は、南比企窯跡群の集中分布域にドットされ、肉眼観察の類似性に裏付けがされた。しかし、このドットの位置は、太田金山窯跡群の分布範囲と重複し、胎土分析によるデータから直接産地を同定することの限界が改めて明らかになった。肉眼観察の最大の視点である白色針状物質の夾雑についても、群馬県内の窯跡についての検討がなされておらず、推測の前提さえ築かれていない段階ではあるが、今回の分析結果を、南比企窯跡群製須恵器の県内搬入を想定する資料の増加と捉えたい。



第366図 群馬県内の主要な窯跡資料

8世紀代の群馬県東部窯業地帯は、活発な瓦生産の影響もあり、須恵器生産が盛んである。このような地域への南比企からの須恵器搬入について、疑問点が多い。

しかし9世紀末から10世紀にかけて、この地域の須恵器生産は低調であり、県内の主要窯業地帯は、吉井・藤岡の群馬県西部へ移っている。末野地区の須恵器が、国を超えて群馬県東部の諸遺跡へ搬入されたとしても、秋間や吉井・藤岡の窯跡群との距離を比較すれば、不自然さは感じられない。また、同様の視点から、^{みかは} 荒砥山周辺に代表される栃木県西部の窯跡群についても、十分な注意を払う必要がある。



第367図 窯跡位置図

<註>

- 1 宇津川徹 上條朝宏「土器胎土中の動物珪酸体について」『考古学ジャーナル』181・184（1980）に詳しい。
- 2 『荒砥上川久保遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（昭和57年）
- 3 『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会（1980）

第Ⅶ章 結

三ツ木遺跡は、古墳時代から平安時代を中心とする集落が中心で、旧地形と遺構分布の関連など興味ある問題や又土器や遺構からその変遷や特質について貴重な成果を提供した。特に律令期への過渡期、律令期の集落構成、掘立柱建物の配置とその性格などについて考えさせる内容をもっている。

しかし、これらは、この遺跡単独で考察すると、誤りを犯すおそれがあるので、周辺の遺跡の内容の解明を待って結論付けたいと考え、本報文ではあえて触れなかったことを断っておきたい。

それにしても250軒にも及ぶ住居跡とその出土遺物、14棟もの掘立柱建物とその配置など、その実態をまとめてみると、今更ながらその偉容に圧倒される。内容的にみるとE区と呼称した部分の様相は北に接する西今井遺跡との関連を物語っており、むしろそれと同時に検討されるべきものと考えている。

こうした、平安時代後期の集落の様相が、かなり広範にわたってこの周辺の遺跡で調査されていることは南に接する中世荘園との関連を考える上で貴重な西今井館跡との関係も推察される。更にその後、新田荘に組み込まれる郷の中に三ツ木も含まれていることからすると、この遺跡も当然「新田荘」の一部に入ったことは明らかである。その前段階の集落構成やその文化内容の実態は注目されるべきであろう。

本報文を草するに当り、改めて本調査に便宜を図られた建設省高崎工事事務所関係者各位、群馬県河川課伊勢崎土木事務所等関係機関の各位に対し衷心より感謝申し上げ、また、直接、調査に際し協力いただいた佐波郡境町教育委員会及び作業に当たられた各位の労を多として筆をおく。

写 真 图 版



I区全景



II区全景



II区全景



III区南東半



III区西半



IV区全景



1号住



3号住



4号住



6号住



7号住



8号住



10号住



11号住



13号住



14号住



17・18号住



19号住



20号住



21号住



22号住



23号住



23号住貯藏穴



24号住



25号住



26号住



28号住



29号住



30号住



31・32A・32B・33号住



35号住



37号住



38号住



39号住



39号住貯藏穴



41号住



42A・42B号住



43号住



45号住



47号住



49号住



50号住



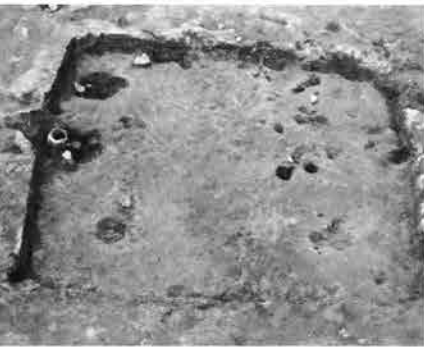
51号住



52号住



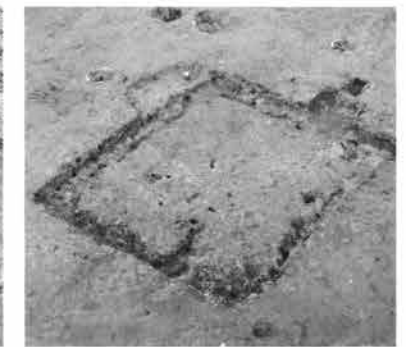
53号住



54号住



55・56・59号住



57号住



58号住



61・74号住・43号土塙



62号住



64号住(54号住)



65号住



67号住



68号住



70・71・72号住



73号住



76号住



77号住



78号住



79・80号住



81・82号住



83号住



84号住



85号住



86号住



87号住



88号住



89号住



90号住



93号住



103号住



104号住



105号住



108号住



120号住



129号住



130号住



131・132号住



140号住



141号住



142号住



143・144・146号住



149号住



150号住



151号住



152号住



153号住



154号住



155号住



156号住



158号住



159・160号住



162号住



164号住



165号住



166号住



167号住(166号住)



168号住



169号住



170号住



171号住



172号住



174号住



175号住



176・177号住



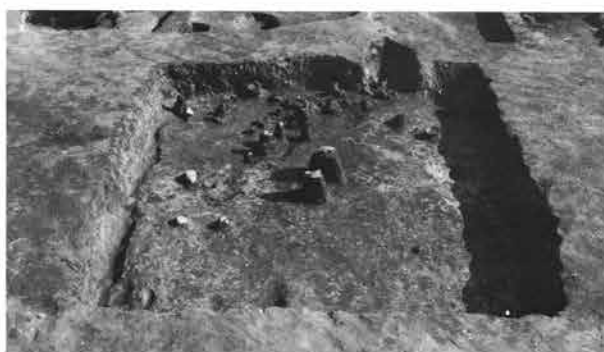
181号住



182・183号住



184号住



185号住



188号住



190号住



193A・193B号住



194号住



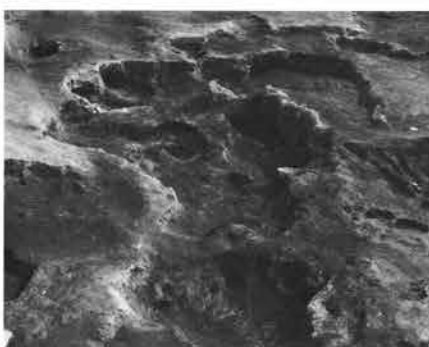
195・196・205・206号住



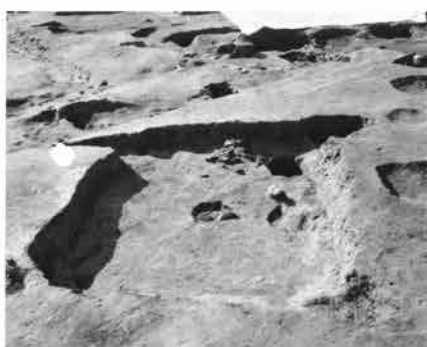
198号住



199・200号住



201号住



204号住



209号住



211号住(手前213号住)



212号住



214号住



215号住



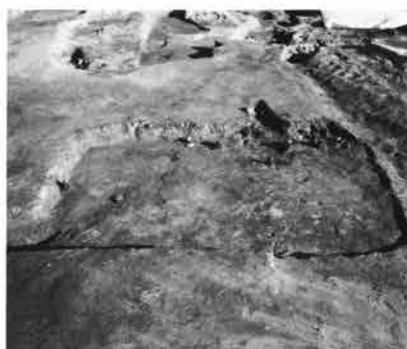
213号住(中央)



216・219号住



217号住



220号住



221号住



222号住



223号住



224号住



225号住



226号住



228・229・230・231号住



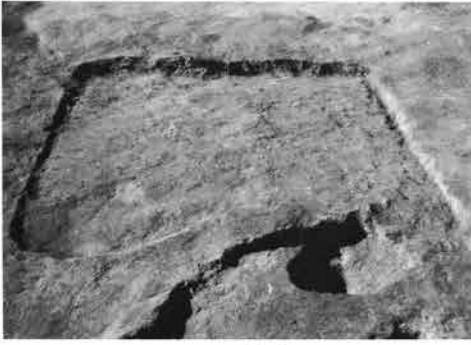
232号住



233号住



234号住



235号住



236号住



237号住



238号住



239号住



240号住



241・242号住



243号住



247号住



248号住



249号住



250・251・252号住



253号住



255号住



1・3号掘立



6号掘立



7号掘立



8号掘立



10号掘立



11A・11B号掘立



13号掘立



14号掘立



方形周溝墓全景



方形周溝墓北西溝遺物出土狀況



方形周溝墓南西溝土層断面



方形周溝墓南東溝土層断面



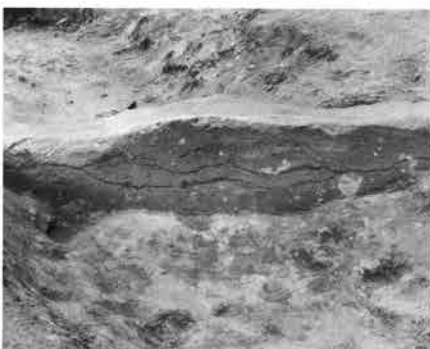
方形周溝墓北西溝土層断面



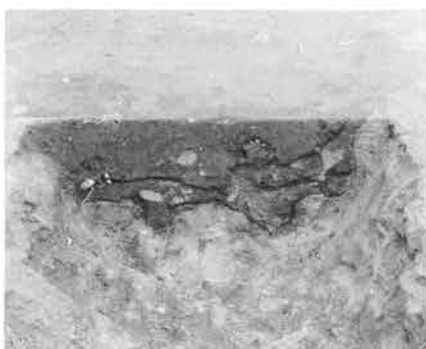
2号溝土層断面



3号溝土層断面



4号溝土層断面(B-B')



4号溝土層断面(A-A')



5号溝土層断面



5号溝土層断面



栅列



2号井戸



6号井戸



7号井戸



2号土壇



4号土壇



10号土壇



14号土壇



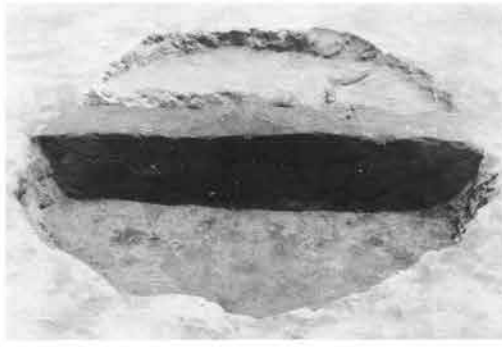
20号土壇



22号土壇



21号土壇



26号土壇



31号土壇



23・24・25号土壇



30号土壇



1号住カマド



6号住カマド



8号住カマド



8号住カマド



13号住カマド



31号住カマド



36号住カマド



38号住カマド



49号住カマド



51号住カマド



51号住カマド



55号住カマド



59号住カマド



68号住カマド



77号住カマド



79号住カマド



80号住カマド



84号住カマド



90号住カマド



104号住カマド



143号住カマド



164号住カマド



175号住カマド



185号住カマド



190号住カマド



193号住カマド



200号住カマド



220号住カマド



233号住カマド



239号住カマド



1-1



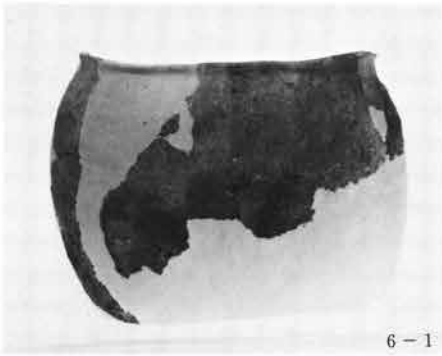
1-3



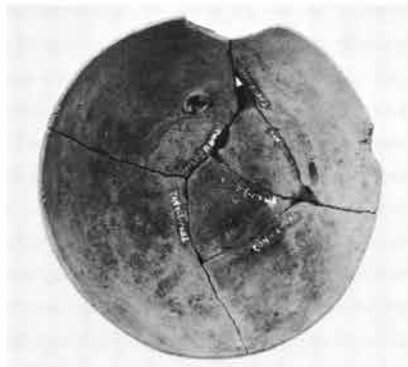
1-5



1-6



6-1



|



8-6



8-1



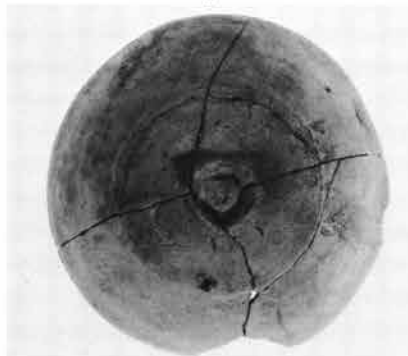
8-2



8-7



8-4



|



8-8



8-5



8-3



8-9

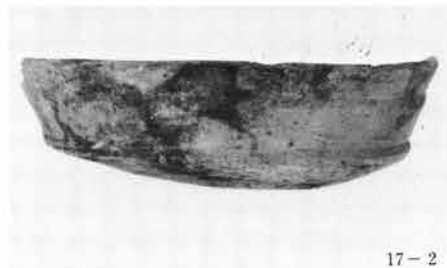
住居跡出土遺物



11-1



17-1



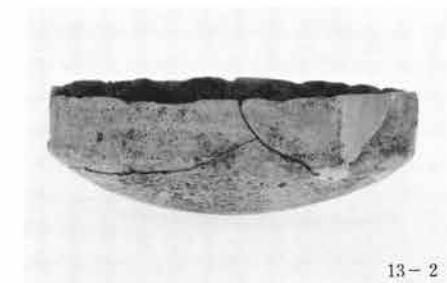
17-2



11-3



13-1



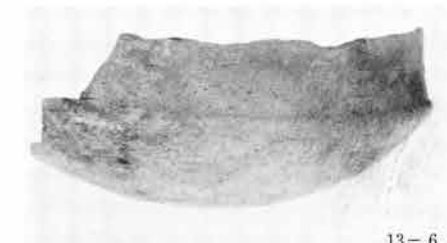
13-2



13-4



13-5



13-6



13-7



13-8



13-9



13-10



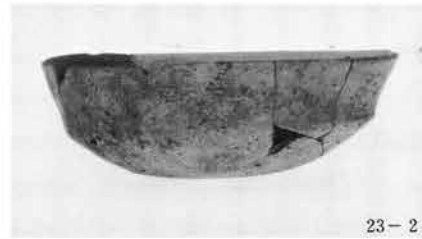
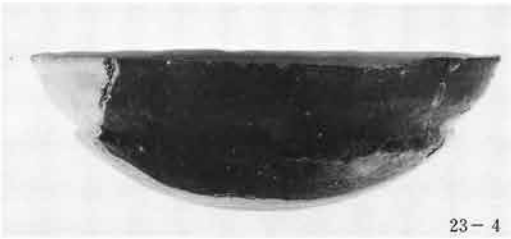
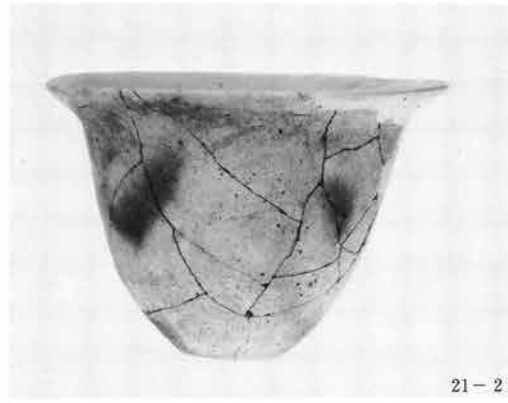
13-11



13-12



13-13



住居跡出土遺物



26-3



26-1



28-1



28-2



28-4



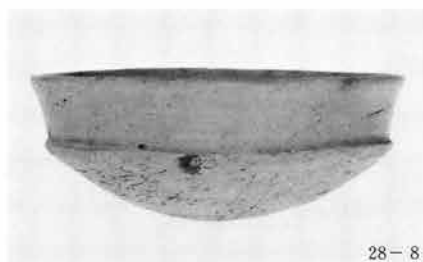
28-7



28-3



28-9



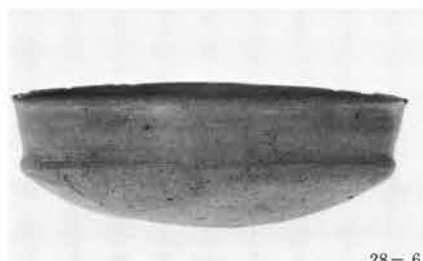
28-8



28-26



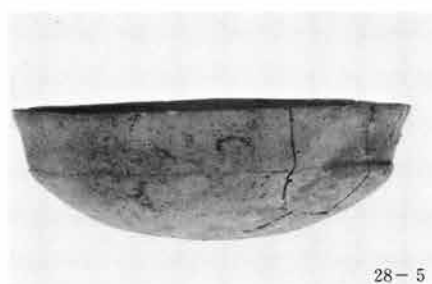
28-12



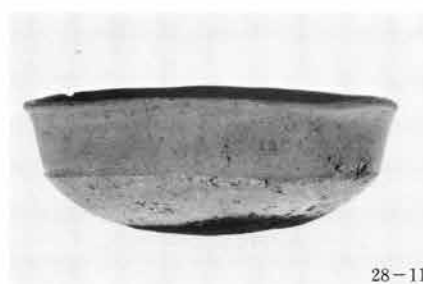
28-6



28-25



28-5



28-11



28-27



28-13



28-10



28-23



28-19



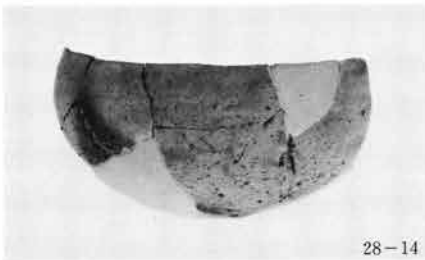
28-16



28-24



28-17



28-14



29-1



29-4



29-3



29-2



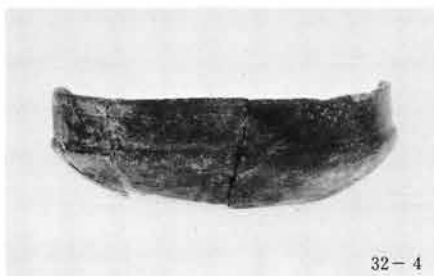
32-1



32-3



32-2



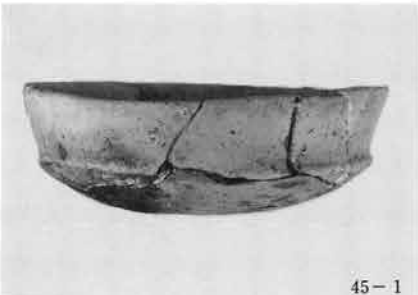
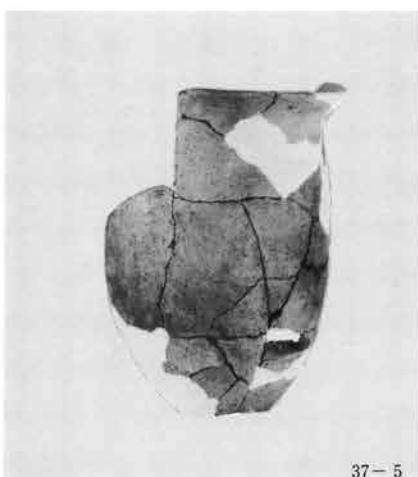
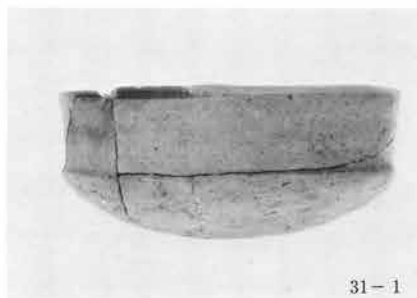
32-4



32-5



32-6





49-1



49-2



49-3



49-4



49-7



49-5



49-6



49-9



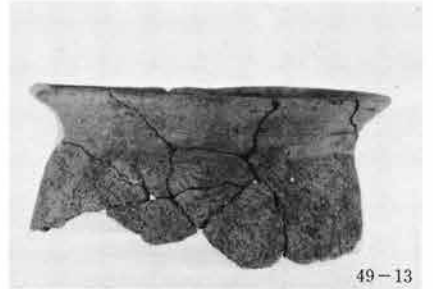
49-10



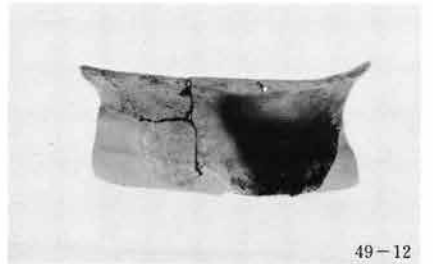
49-11



49-15



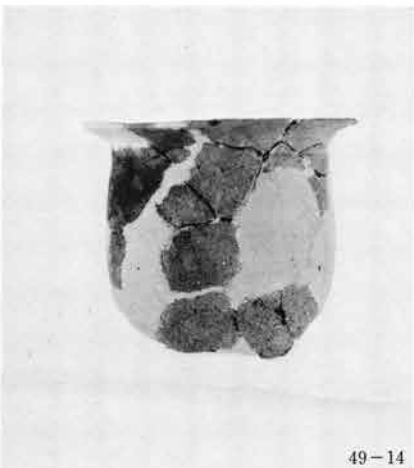
49-13



49-12



49-16



49-14



47-1

住居跡出土遺物





55-4



55-5



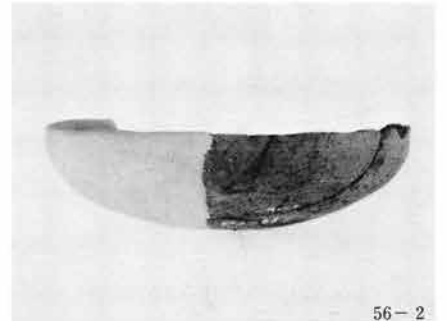
55-6



55-7



56-1



56-2



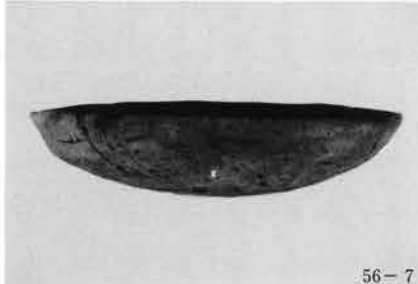
56-6



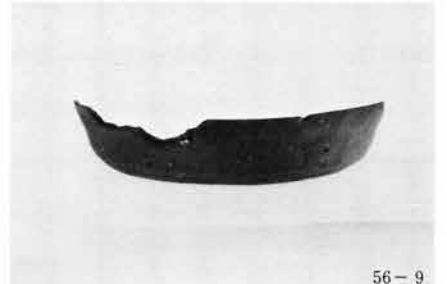
56-8



56-10



56-7



56-9



59-1

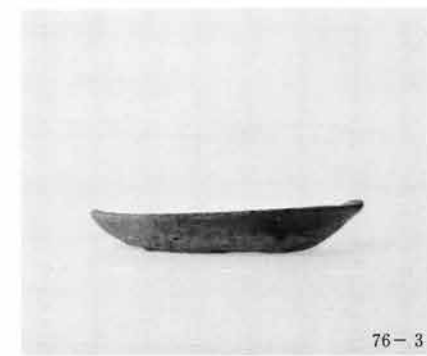
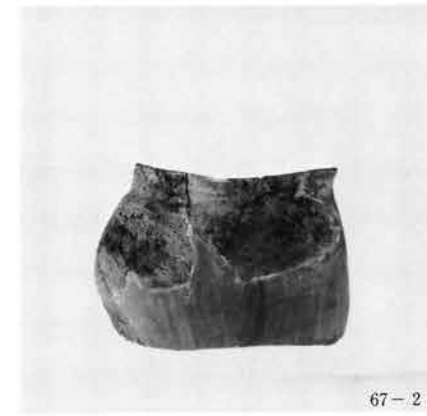
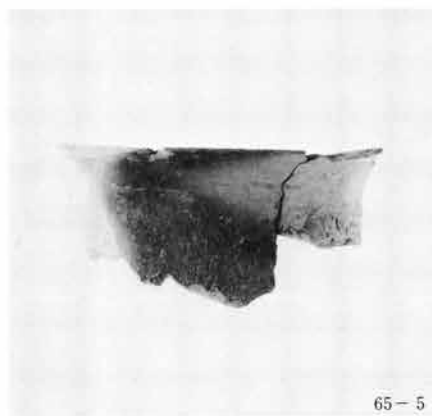


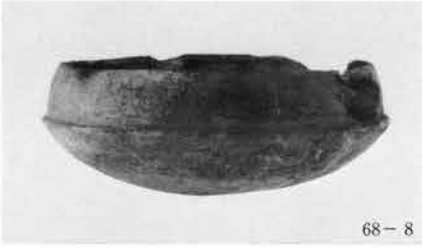
59-2



59-3

住居跡出土遺物

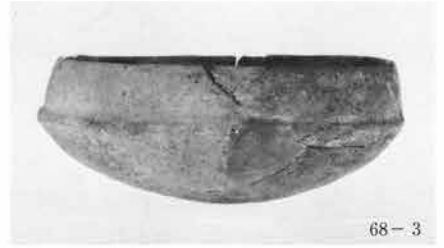




68-8



68-9



68-3



68-7



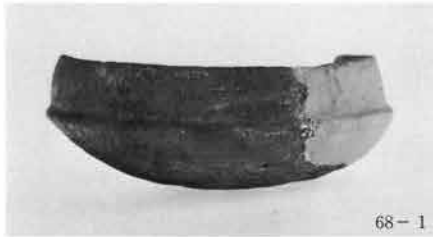
68-5



68-4



68-6



68-1



68-10



68-12



68-11



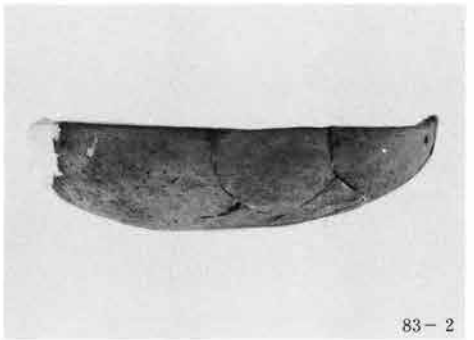
78-1



79-1



79-3



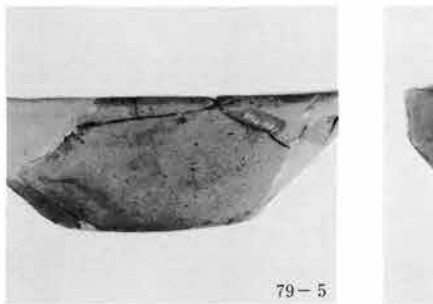
83-2



79-6



79-4

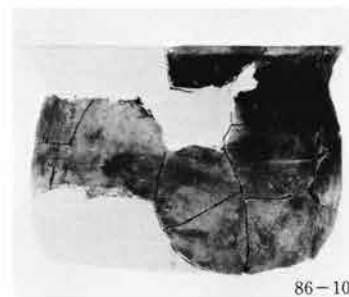
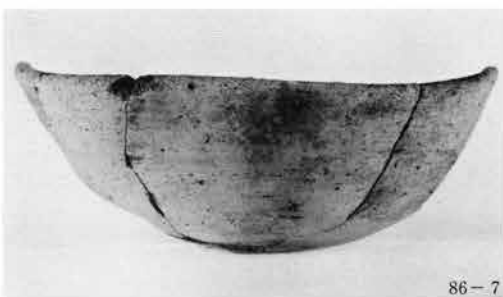
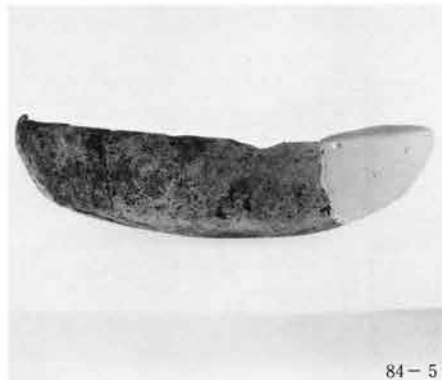
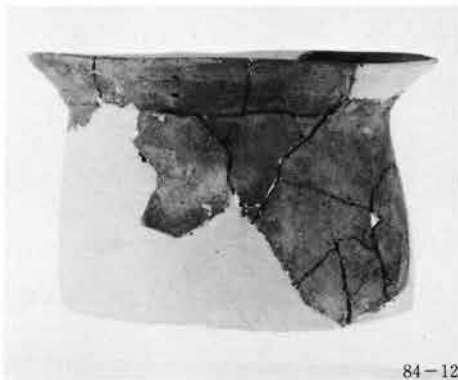
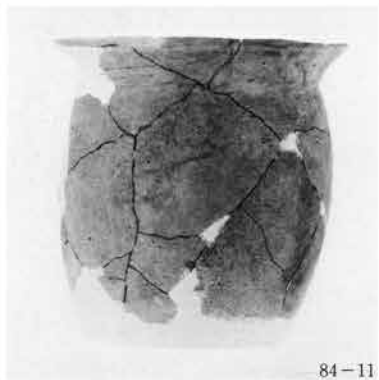
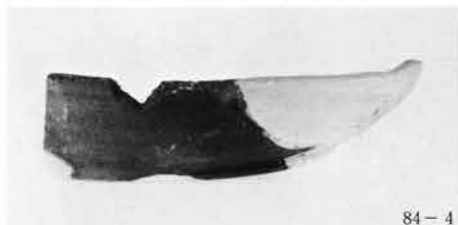


79-5



83-1

住居跡出土遺物





89-1



89-4



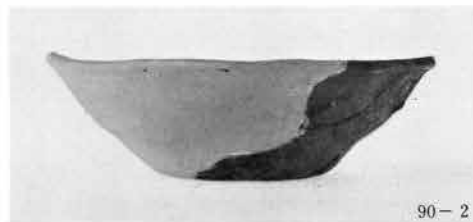
90-1



105-2



120-1



90-2



129-1



129-2



130-1



130-3



130-2



132-5



131-1



132-7



131-2



132-6



142-1



144-2



144-1



142-2



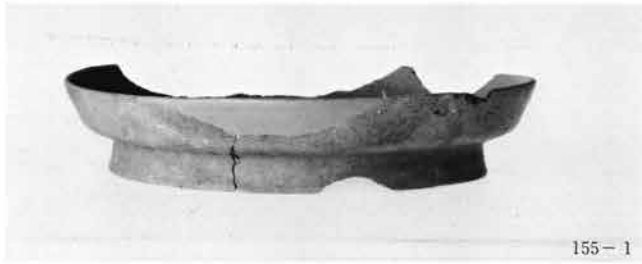
144-3



144-6



145-1



155-1



155-2



156-5



156-4



162-1



163-1



163-2



164-1



164-2



164-3



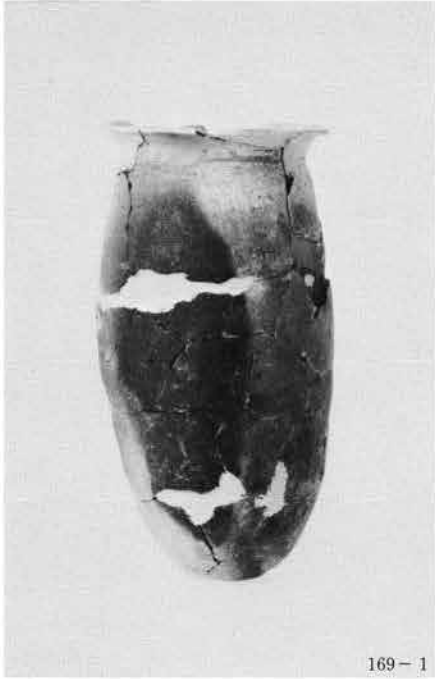
165-1



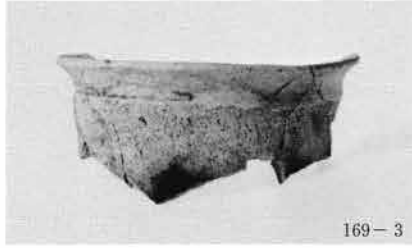
165-2



166-2



169-1



169-3



171-1



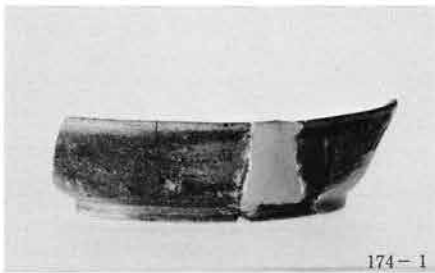
169-4



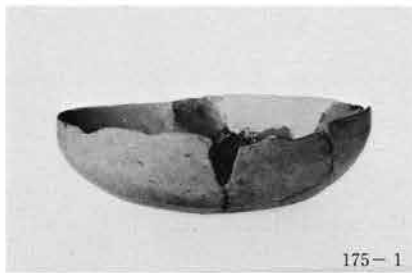
171-2



171-3



174-1



175-1



176-2



178-3



178-6



178-7



181-1



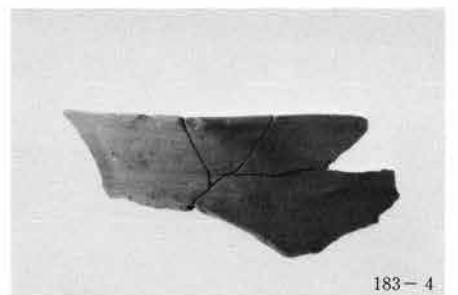
181-2



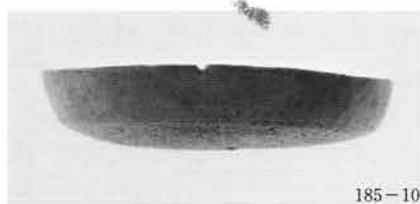
182-1



183-1



183-4





187-2



188-1



188-4



196-2



198-1



199-1



199-3



210-10



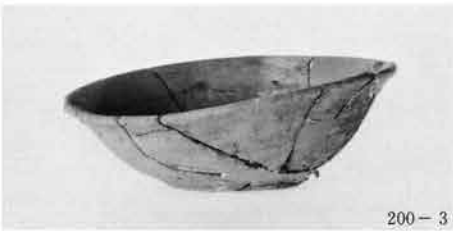
200-1



200-2



210-1



200-3



200-5



210-2



200-11



200-6



210-3



200-7



210-9



200-8



200-8



210-6

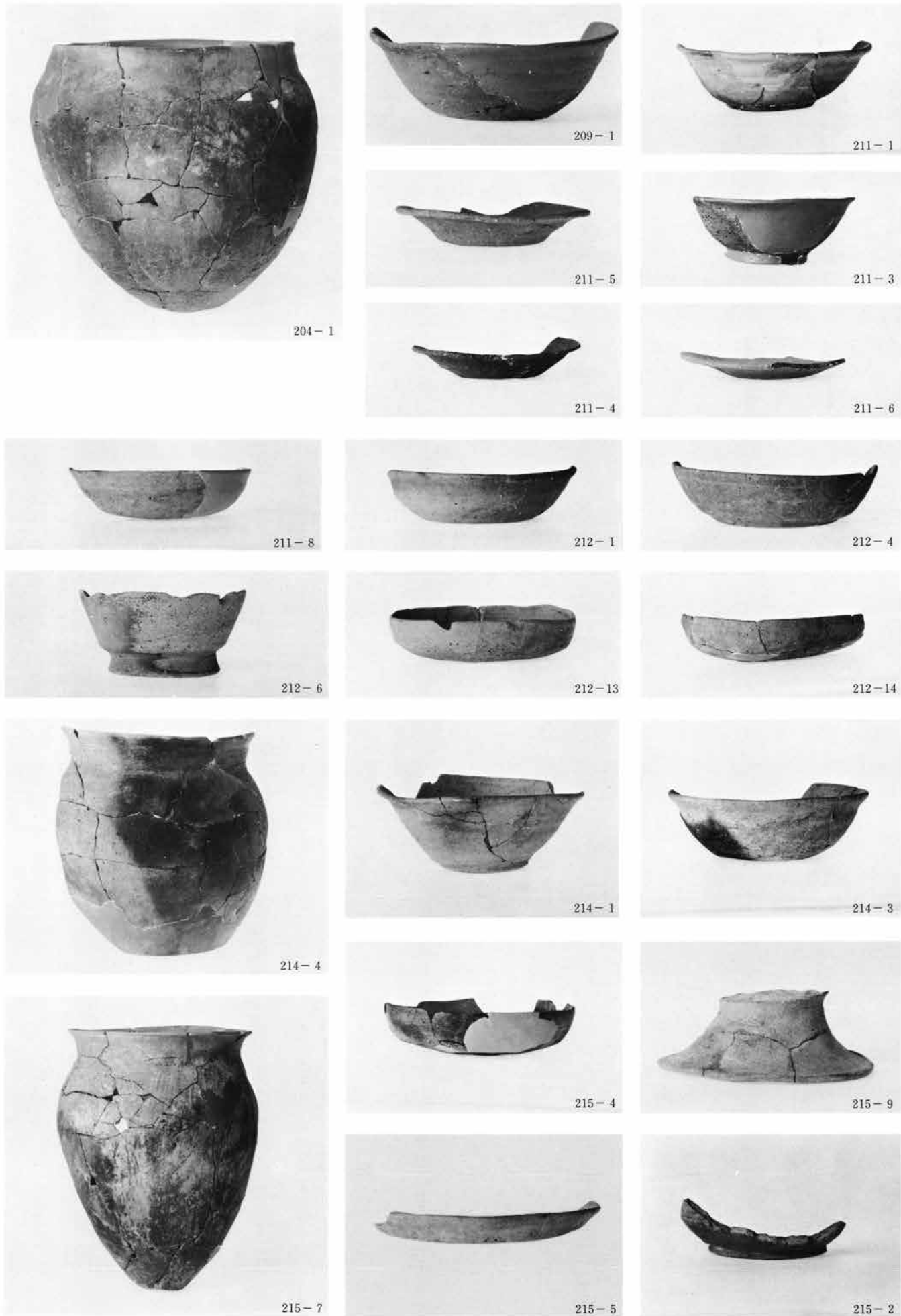


200-9



210-14

住居跡出土遺物



住居跡出土遺物



216-7



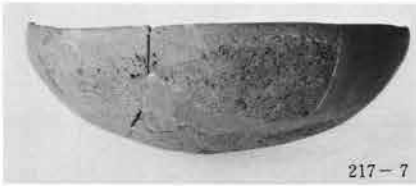
216-10



217-3



217-5



217-7



217-6



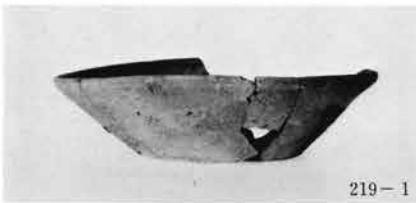
217-12



217-11



217-9



219-1



220-1



220-2



220-5



220-6



220-8



220-7



220-7



223-1



223-2



223-4



225-2



225-3



225-4



226-2



226-3



226-4



226-5



226-1



1



230-2



230-3



230-6



232-1



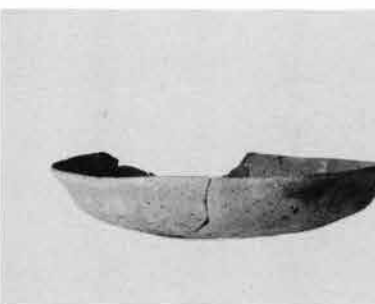
233-1



233-3



233-2



233-6



233-7



235-1



235-2



237-2



237-3



237-5



237-12



237-7



237-9



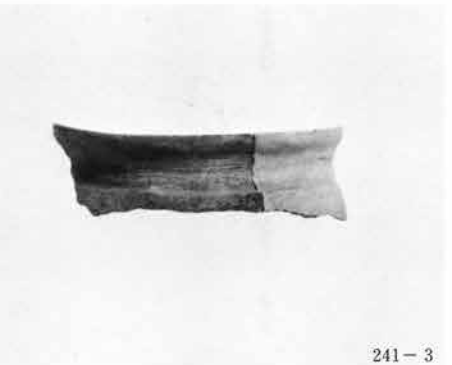
237-10



237-13



239-1



241-3



242-1



242-2



242-4



243-5



247-4



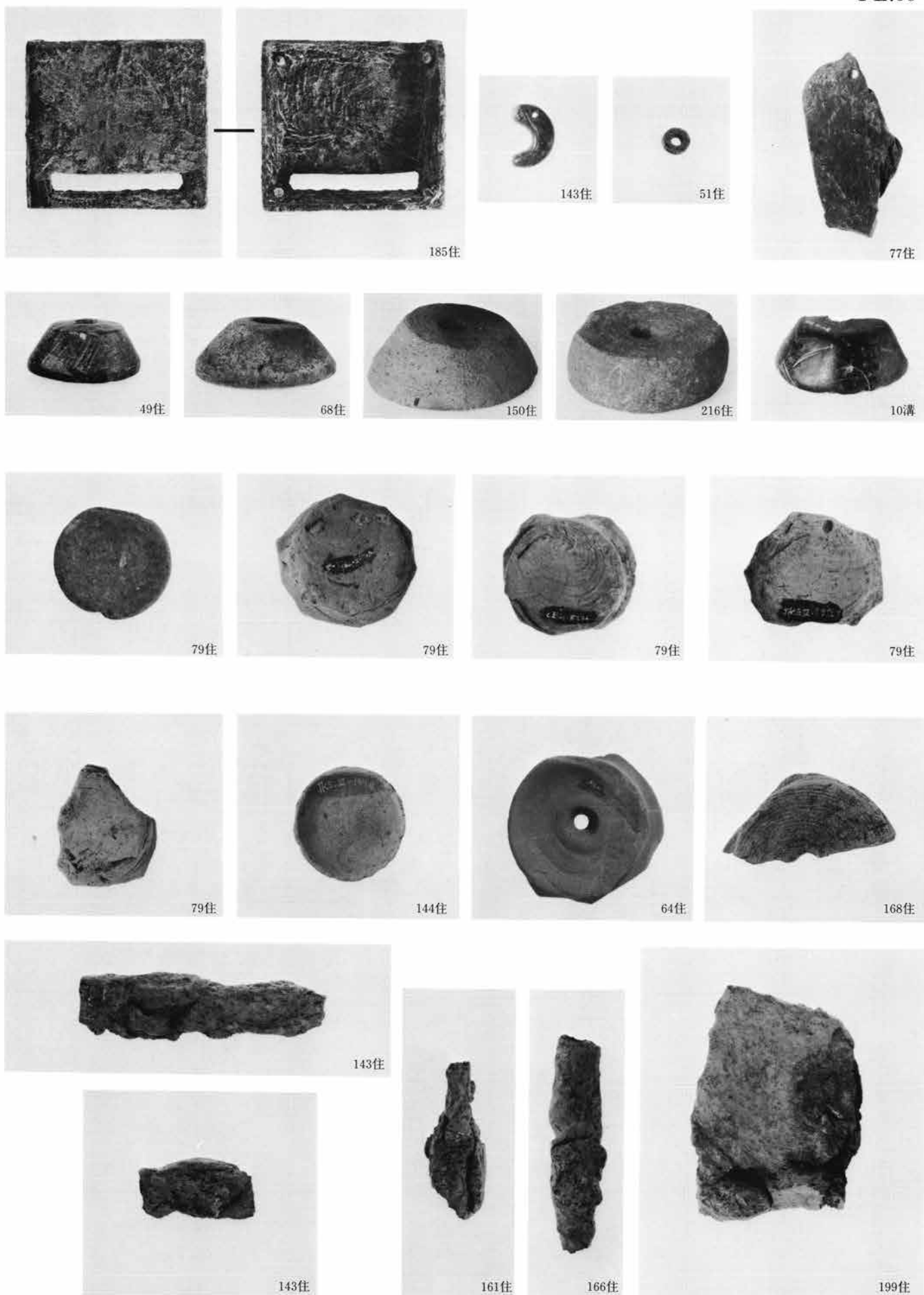
247-2



247-6



住居跡出土遺物



住居跡出土鉄帶具、石製模造品、紡錘車、土製円板、鉄製品



17・18・19住



85住



79住



131住



78住



183住



130住



164住



208住



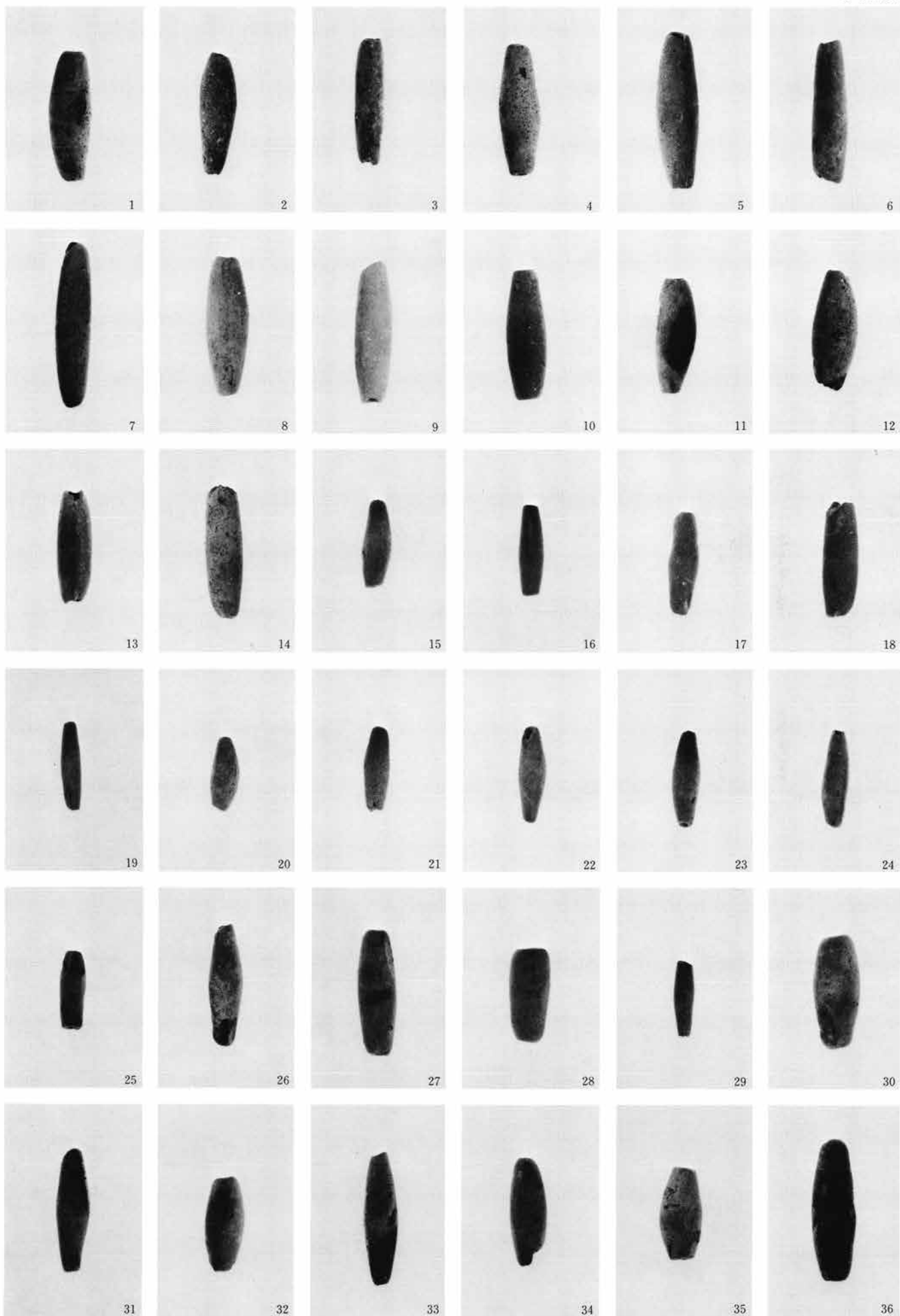
220住



220住



255住



住居跡出土土錘





4 壙



4 壙



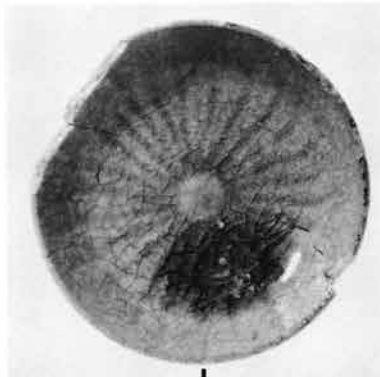
4 壙



5 壙



5 壙



10 壙



10 壙



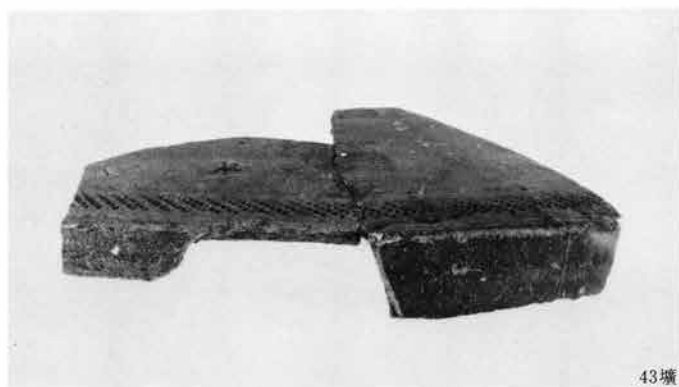
10 壙



43 壙



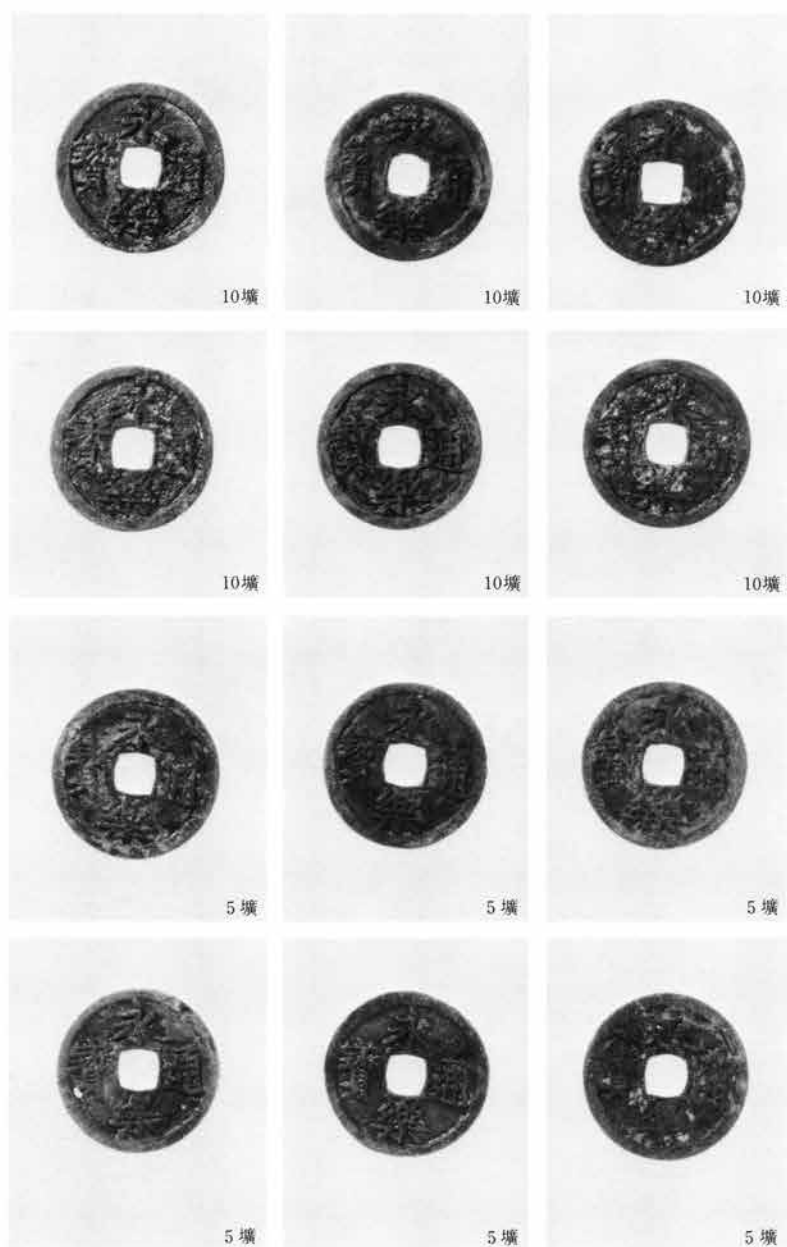
71 壙



43 壙



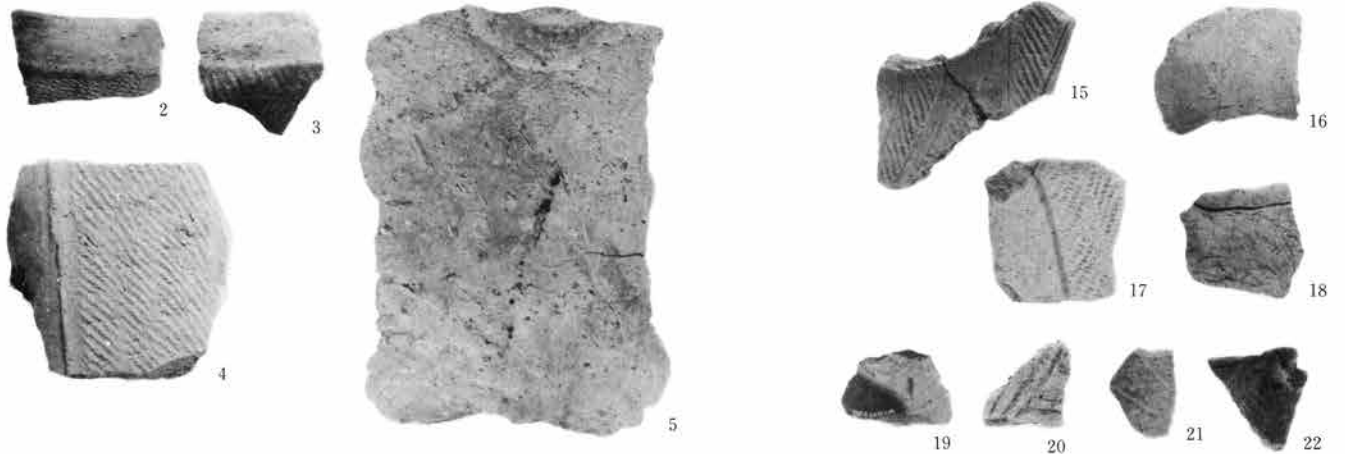
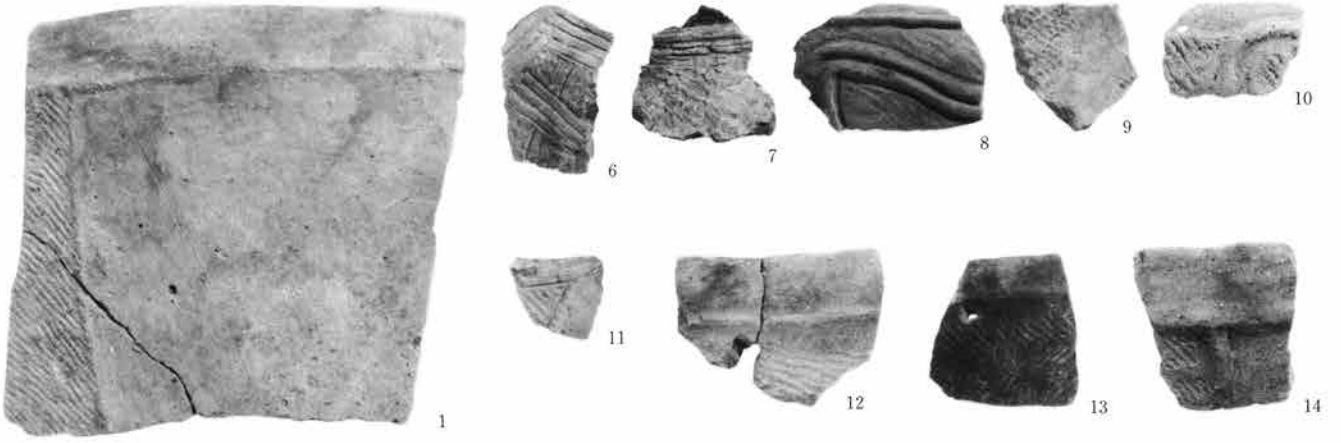
3 溝



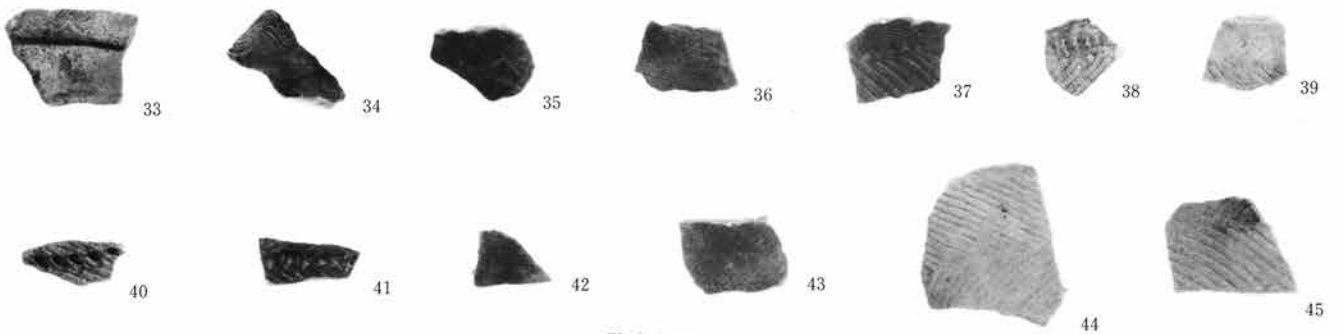
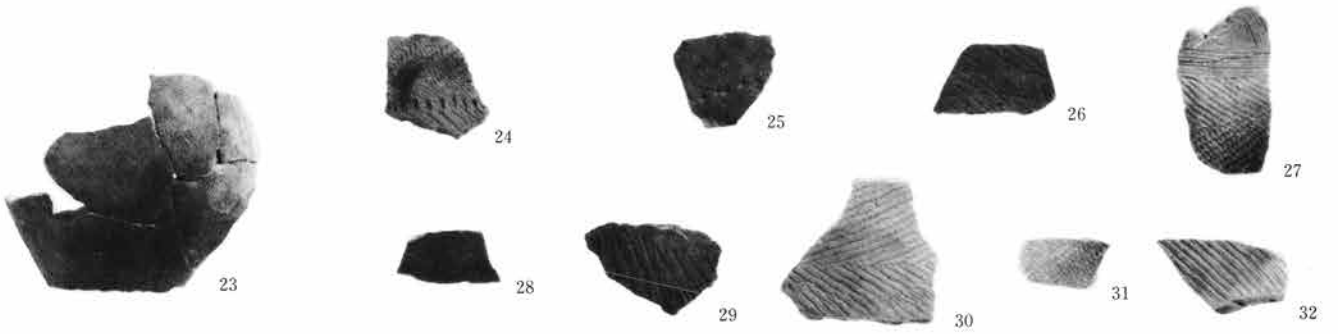
土壠出土錢貨



216号住出土紡錘車拉大写真(3.5倍)



縄文土器



弥生土器



円筒埴輪



9



10



11



12



13



14



15



16



17

円筒埴輪



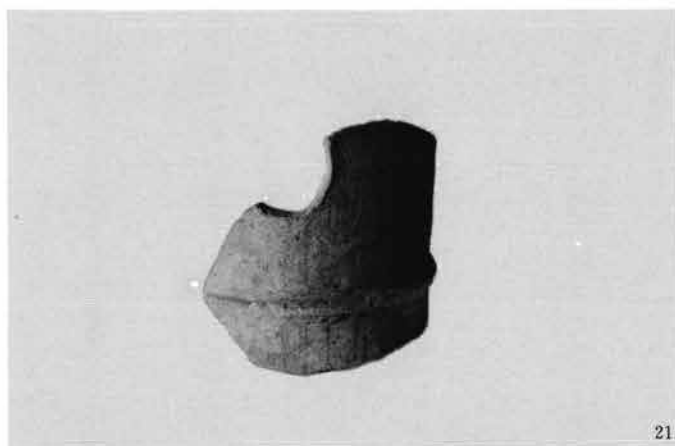
18



19



20



21



22



24



25



26

円筒埴輪



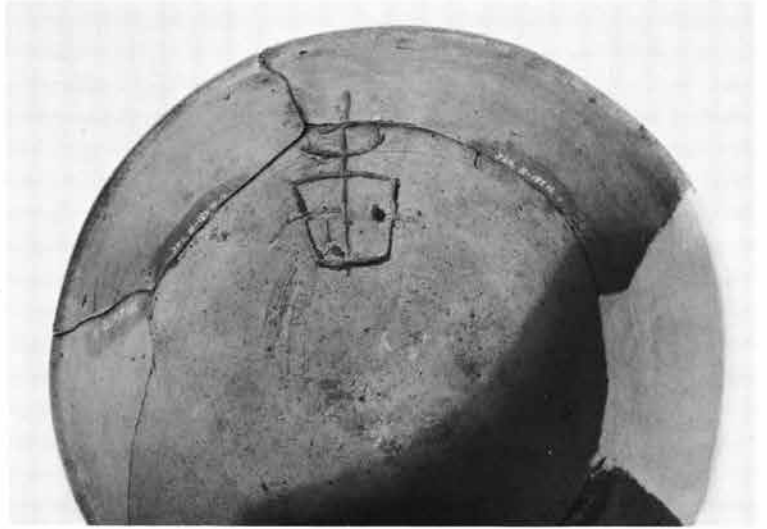
埴輪部分拡大



形象埴輪



185住-20
「中田」あるいは「田中」か



185住-22

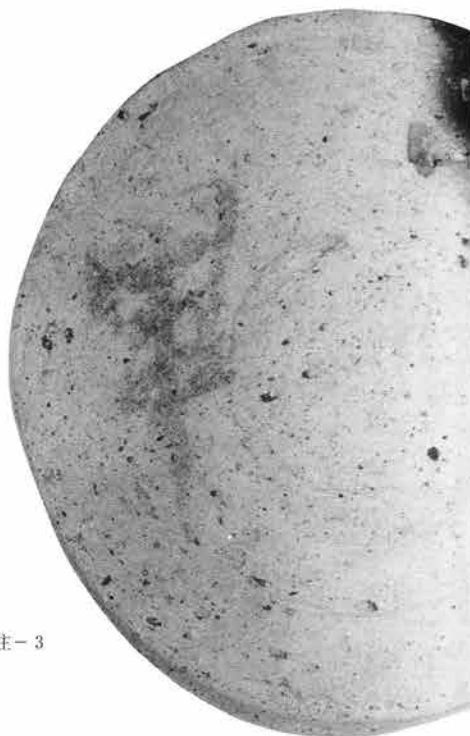
239住-1
「+」印



刻書土器



59住



132住-3



132住-4



162住-1



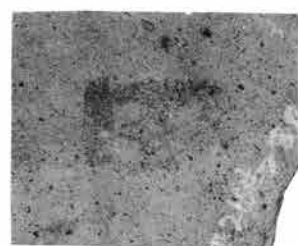
185住-2



22住-7



25住-8



26住-2



26住-3

三ツ木遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和60年3月25日 印刷

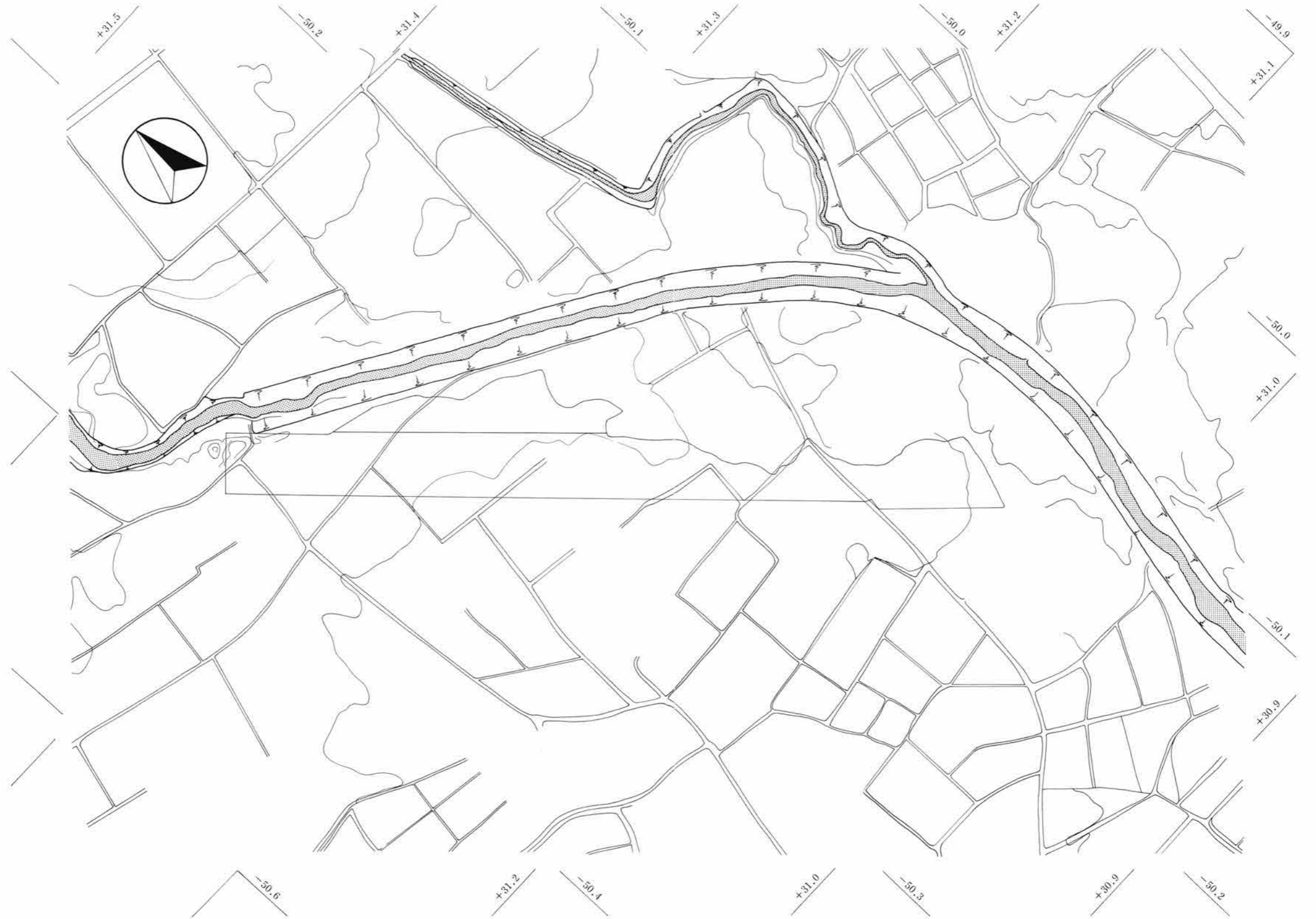
昭和60年3月30日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社



第368図 遺跡位置図



第369図 遺構配置図